

アカイト 游戏脚本

游戏平台：PS2

中文译名：红线

文本提取：熏子 (<http://kuyur.info/blog>) twitter : @kuyur Email : kuyur@kuyur.info

◇それは物語の予兆

◇黄昏の車窓から

◇夜色の人

◇はじめの一步

駅員さんに聞きたいことが 下調べもしたし大丈夫

◇誰かの写真

旅館を紹介してもらったことにした バスがなくても何とか……

◇さかきの宿

◇天ぷらぷらぷら

勇気を出して自分でフォロー 恥ずかしいので止めておく

ウヅキってどんな字？ もしかして四月生まれ？ そういえば、確か……

◇ふやふや

◇友あり遠方より電話来る

◇暗い森を抜けるとそこは

覚悟を決めた やっぱり戻してください

◇電話が来たりて笑われる

◇謎の人物の影

◇タソガレ

わたしはこくりと頷いた わたしは首を横に振る

気のせいだと思い込む 確かめてみる

◇最終バスに乗って

◇長いトンネルを抜けるとそこは

◇お化け屋敷に光る目

◇大家と店子とお稲荷様

◇タソガレ

わたしはこくりと頷いた わたしは首を横に振る

◇わたしのきずあと

◇時差ですか

大丈夫だよ 気をつけるよ

夜食は美容の敵かも お菓子も食べるよ
夜食は美容の敵かも お菓子も食べるよ 葛ちゃんと食べよう

◇饅頭怖いと王子の狐

素直に謝る とにかく驚く 負けてたまるか

◇銀しゃりしゃりしゃり

◇夢で見た景色

こわくないこわくない 怖いので帰る

◇堪忍袋再生中

帰ろうかな せっかくだからもう少し

◇槐夢・夏の終わり

◇幻視行

◇ハシラトケイ

◇縁樹の導き

「奇遇ですね？」と自分も名乗る 「大きな木ですね？」と話をかえる 「あ、いえ、別に」とその場を立ち去る

◇バス待ち最大小一時間

かけない かける

帰ろうかな せっかくだからもう少し

◇なんでこんなところに？

ボロボロだった 怖いところだった

◇雨のにおい

◇オハシラサマ

◇犬と猿

会ったことを話してみる 話すのはやめておこう

◇ネバイト

◇今日の予定は？

◇備え在れば憂いなし？

◇少年と鬼の木

◇なんでこんなところに？

◇雨のにおい

◇意外なつながり

◇月と花

会ったことを話してみる 話すのはやめておこう

◇鬼の成り立ち

◇ラクジツ

◇贄の血

触ってやろう 大人しくしていよう

血を飲んでもらう ……………

◇千客万来の夜

追いかける 追いかけない

◇そして誰もいなくなった

腹が減っては戦はできぬ 葛ちゃんを探しにいこう 大人しく待ってみようか

第四案を検討する 電話をかけることにする

そんなことはない そんな気がしなくもない

帰ろうかな せっかくだからもう少し

◇帰着・夏の終わり

◇兵法の要は兵糧にあり

地域密着の定食屋さん 全国料金一律のファーストフード コンビニで何か買って帰ろう

◇温泉でばったり

◇街角でばったり

◇車種はクロカン・名前は赤兎

◇万歳文化革命

◇待ちぼうけ

◇買い物帰りのお嬢さん

◇カレイド

何とかしたいけど 何ともならないか

◇生還おめでとう

◇生活向上計画

◇雨と共にきたる

自分が出る 葛ちゃんお願い 尾花ちゃんゴー！

◇ジョーカー

◇ナクシタヒ

◇蛇と蝶

ん～？ これは夢だし

◇シシヤ

もうやだ！ 帰る！ どういうこと？

もうやだ！ 帰る！ どういうこと？ 蛇が！ 毒が！？

お願いします 遠慮します

◇タソガレ

◇蛇と蝶と狐

ん～？ これは夢だし

◇吸血鬼

夢のことを話してみる 夢のことを話さない

帰る 反抗したいお年頃

◇無銭乗車？

◇挫北・夏の終わり

◇狭間の道行

◇隠れ鬼

◇雫

◇墜落

◇テンショウ

◇宿替え

◇いちおう鍋物？

◇食事の後は

仕方なしに我慢 行ったら行く

血を飲んでもらう ……………

◇ユメイさんはお留守番

◇烏合

帰る 帰らない

◇残夢・夏の終わり

◇赤い空白

◇ポルターガイスト

◇鬼影

帰る 納得できない

◇挫北・夏の終わり

◇長者の屋敷

◇不法侵入？

烏月が気になる 別に……

◇ご挨拶

◇もう一泊

◇元の鞆

◇保護者の目

◇甘い午後のひととき

追いかける 追いかけない

◇時間的にはもうすぐ明日

歯磨きはオッケー？ 陽子ちゃんに電話しよう
お札を貼っておかなくちゃ 歯磨きはオッケー？ 陽子ちゃんに電話しよう

◇赤い縛め

◇四枚のお札

◇叩かれた扉

開けませんよ。疑ってかかれ 烏月さん！？

開けませんよ。疑ってかかれ やっぱり開ける！

◇魂削り

サクヤさん助けて 自分の部屋までなら……

一緒のお布団で寝る 一緒のお布団で寝る 一緒のお布団で寝る

◇不死の薬

だから それでも

◇挫北・夏の終わり

◇坂の向こうに

◇白花

◇雫

◇命つなぐ手

血を飲んでもらおう 人間じゃないなんて信じない

◇体力の限界

◇リカオーン

◇わたしの今後の身の振り方

◇そこが肝ですから

本当に「だけ」なら 偏食はんたーい！

◇七星を踏む護法のもの

◇手には包丁・釜戸に炎

手伝うってば 楽しみだなー 陽子ちゃんに定時報告

◇栄華の花と悠久の月

◇観月の民

◇千年の記憶Ⅰ・竹林の長者の姫

◇千年の記憶Ⅱ・長らの集い

◇千年の記憶Ⅲ・黙示録

◇千年の記憶Ⅳ・封じの鬼の木

◇ゆめのまにま

◇丹塗矢

◇朝の仇を昼に討て

◇蛇神の影

気になる 別にそんなことは

じゃあ行こうか 別にそこまでしなくても

サクヤさんに付き合う 葛ちゃんと一緒に帰る

◇経観塚郷土資料館

◇経観塚に伝わる昔話

◇カガメ

◇良月

何を話してるんだろう？ 別に知り合いでもないし

◇いわくの鏡

◇サクヤさんの腐れ縁

◇サクヤさん料理中

◇夏夜に咲く花

保護者同伴なら 行ってきます

◇お花を摘みに参ります？

◇座礁・難破

◇コドク

ひとりで生きたいなら—— でもひとりには嫌なんでしょ？

◇やりたい放題好き放題

◇蛇の神の使い

◇言霊の継承

抵抗する 抵抗しない

◇泡沫

◇望

◇影見

◇陰陽の血

◇神隠しのこと

◇パンドラ I 〴

◇二重箱の底で

もうこだわらない 試させてもらう

◇月に叢雲

◇鏡開き

◇光は風に

◇とりこのあさ

血を飲ませる 血を飲ませない

◇カゴノナカ

サクヤを手伝う 家の掃除をする 薪の調達に行く

◇ラクヨウ

◇蔵にしまわれていたもの

◇パンドラⅠ

◇パンドラⅡ

◇パンドラⅢ

◇ゆめうつつ

◇回帰

おかしいと思った たしなめないと ケンカでもしたのかな

◇パノプテース

◇始末のこと

だからこれは仕方のないこと だけど彼女たちだって可哀相

◇蛍の多く

…………… 血を飲んでもらう

◇浄玻璃F

◇寝顔を見られて

◇指切り

◇閑暇な午後

行ってもらう 提案取り下げ

◇備えなければ憂いあり

◇シマイ

◇剣・鏡・魂

◇血海

一面の赤——赤い世界—— 世界が白く——あの花の白に——

◇修羅

◇鬼と鬼切り

ケイクんの邪魔をした 信じると約束した

◇ひとつのゆめ

◇歓迎の心は掃除から

待てっ！ しょうがないなあ……

◇赤い導き

行ってみる やめておく

隠れて見ている サクヤを呼びに行く
止めに入る 隠れて見ている サクヤを呼びに行く

◇朔の夜

◇溶ける花びら

◇陰る日向

◇封じの綻び

止めない 止める

◇鏡の鬼

鏡を探してみる 封じを強化する

◇積極攻勢

割るべきだと思う 割るのは忍びない

◇二度目の忘却

◇言霊の神

◇尻尾が弱点？

◇封じの柱の儀

◇漂白夢

意識が——もう—— 忘れたくない！

◇此岸と彼岸

◇彼岸の花をつかまえて

◇くらやみのまゆ

◇闇を越えて射す光

◇浄玻璃T

◇覚醒

ただ見ることしかできなかつた 絶対にお姉ちゃんを助ける

◇一片の残花

◇赤い絆

◇代わりの柱

◇白花の咲く頃に

◇転地療養？

◇燃える磐座

逃げる 烏月を守る

◇途切れた糸・夏の終わりまで

◇揺るがずの星

◇鬼切りと鬼

◇赤い維斗

◇爽やかな立ち風

◇大切なひと

◇封じの綻び・急転直下

止めない 止める

◇朱い鬼神

飛び出していた 見ているしかなかった

◇鬼哭変

◇散り行く花びら

いいよ…… ごめんね……

◇鬼切りの鬼

◇凍てる孤月

◇月の蝕み

月は蝕まれる運命なんだ わたしだけは見捨てない

◇月を喰らうもの

◇ついのときまで

◇道を阻むもの

各個撃破は愚の骨頂 任せて先を急ぐ

◇死闘

◇朔夜

身動きできない サクヤを突き飛ばす

◇月へ向かう蝶

◇散り行く花びら

いいよ…… ごめんね……

◇満開の花

◇凍てる孤月

木。
たくさんの木。
高く伸びる木々それぞれが、好き放題に枝を伸ばし、空のほとんどを覆い隠してしまっている。

深い——林か森か。幹の太い古木が立ち並び、たけのある草が生い茂る狭い道を、わたしは走っている。

——振り返る。

瓦の並ぶ屋根が見えた。
時代劇で見るような、立派な構えの門はないけれど、それは見事なお屋敷だった。
平屋の大きな日本家屋。
離れに見えるのは蔵かもしれない。
こういう屋敷に住んでいる人たちを、由緒正しい旧家とでも言うのだろうか。

涼しげな鈴の音に、わたしは前へと向き直る。

ぐっと誰かに手を引かれ、わたしはさらに足を速める。

道の勾配がだんだん急になる。
ああ、ここは山なんだ。
手を引かれるままに、わたしは山道を登る。

舗装されていなかったとはいえ、まだ道らしい道だった道を外れて、わたしたちは草を分けるようにして進む。

速く、早く、はやく、はやく——
わたしを引く手が強くなる。
誰かに追いかけられでもしているのか。

何をそんなに急いでいるんだろう。

足元の草を踏みしめて急ぐ。

ざっ、ざっ、ざっ、ざっ。

ざあ——

急に視界が開けた。
おそらく山の中腹あたり。
そこには見上げるほどの大きな——
数百の年月を雨風とともに過ごしたといった趣のある、大きな大きな木が根を下ろして
いた。

他の木はこの木に遠慮しているのか、あたりは少し開けている。

ざあ——
通り過ぎる風に、木に咲く花がゆらりと揺れ。
この景色には見覚えがあった。
そこがどこかは知らないけれど。
テレビか映画で見たんだろうか。
いや、違う。
そうじゃないということは、わかっていた。
これは。
この景色は。
これはわたしの——

『たいせつなひとが、いなくなってしまった』

風にもがれた花びらが、蝶のようにひらひらと舞っている。
奇妙な既視感と喪失感。
何だろう、この感覚は。
そして今まで気にしていなかったけど。

——この景色は。この世界は。

赤いインクを落とした水槽越しに見る景色のように、重くて、遠くて、揺らめいていて。

いったん気になりだすと、気になってしょうがなくなってしまう。

見るほどに、赤は濃くなり、視界を遮る。

わたしの邪魔をするように、赤は世界を遠くへ沈めていく。

それでも見ようと瞳を凝らすと——

今までにない鮮烈な赤が目の奥を焼いた。

駄目——

警告されているような気がした。

駄目——

呼ばれている。誰かに呼ばれている。

駄目——

ここにいてはいけないんだ。

向こうに行ってはいけないんだ。

するとわたしは戻るほかなく——

マナーモードに設定を変え忘れていたという焦りが、居眠りの余韻を吹き飛ばしていた。

慌てて両手を使いこめて、携帯電話を探させながら、周囲の様子をうかがって——

迷惑顔の人がいないとわかり、ほっとしたのとほぼ同時に、右手が携帯電話を探り当てた。

わたし

「はい、もしもし？」

女の子の声

『やっほー、はとちゃん』

わたし

「あ、陽子ちゃん」

顔の見えない電話越しの一声だけで、何となく人となりがわかってしまう彼女は、クラスメートの奈良陽子ちゃん。

一番違いの出席番号が縁で彼女と親しくなったわたしは、「な」の次の「は」から始まる苗字の持ち主で、フルネームは羽藤桂。

彼女のいう「はとちゃん」というのは、名前ではなく苗字の方だったりして。

陽子

『元気だった？』

桂

「何とかね。バタバタしてたのも一段落ついたし」

陽子

『そ？ なら丁度良かった。さすがはあかし、絶妙なタイミング』

それはどうかなー？ 本当に絶妙なら、寝た子を起こしたりはしないと思うけど。

桂

「あはは……」

陽子

『にしてもはとちゃん、久しぶりー』

桂

「まあねー。一週間ぶりぐらい？」

それなら久しぶりでもないはずなのに、そんな気がしないのは、学校のある日なら毎日顔を合わせているはずの相手だからだろうか――

ううん、そうじゃない。

わたしに色々なことがあったせいだ。

陽子

『でえ、はとちゃん今、暇？』

桂

「暇といえば暇……かな？」

陽子

『よーそろ。それは良かった。てっきりお邪魔だったかと』

桂

「……？」

陽子

『心のステディ陽子さんが、はとちゃんのためだけに送る愛の電波放送でもはじめようかなー、とか思って電話したんだけどねー』

桂

「うん」

陽子

『寝てたでしょ、はとちゃん』

桂

「わ、なんでわかったの？」

寝ぼけ声にはなっていないはず。

もしかしてわたし、さっき考えてたこと口に出したりしてた？

陽子

『まったく、大口ぽかーんと開けて寝てるんじゃないわよ。いい若い子が、はしたない』

桂

「ええー！？ わたし口なんて開けてた！？」

陽子

『悲しいけど、自分のことが一番見えないものなのよね。ほら、よだれの跡をふいて』

口元に手をやるわたし。

えーと、ハンカチ、ハンカチ。

陽子

『そっちじゃなくてー、逆サイド』

反対側をこする。

桂

「とれた？」

陽子

『……くくっ』

陽子ちゃんの噛み殺した笑い声。まさか。

陽子

『ぶはっはっはっ』

……騙された？

良く考えたら、仮によだれの跡があったとして（あくまで仮の話として）見えているはずがない。電話なんだから。

桂

「よ・お・こ・ちゃーん？」

陽子

『いやいや、はとちゃんってホント面白いねー。さっすがあたしのおもちゃ一号認定機』

ひどい言われようだった。

この電話、切っちゃおうか。

桂

「……それで？ 何の用？」

陽子

『そうそう。今暇だったら明日も暇でしょ？ あたしも暇だし、一緒にどっか遊びに行こーよー』

桂

「無理」

できるだけ冷たく言ってやった。

陽子

『……………』

桂

「無理です」

さらに駄目押し。他人行儀の敬語口調。

陽子

『……………』

桂

「……………」

陽子

『……………』

陽子

『うわー、いじけた？ ムカついた？』

桂

「ムカついた」

陽子

『ごめん、ごめん。明日おごるから許してちょ』
よしっ！

桂

「そこまで言うんなら、許すのにやぶさかじゃないんだけど——」

陽子

『サンキュー、はとちゃん愛してるー。フンパツしてお昼にデザートまでつけちゃうよー』

桂

「景気がいいね、陽子ちゃん」

陽子

『パパママふたり旅行中のとこ、あたしは残ってお留守番なもんで、そのぶんちょこっと臨時収入がねー』

桂

「陽子ちゃんは連れていってもらえなかったの？」

陽子

『うっ……まあ、色々あるのよ、色々』

声色からして、あまりつつかない方が良さそうな感じかも。

桂

「ふーん。それで陽子ちゃん暇なんだ」

陽子

『まーねー。じゃあ、明日の十時に——』

桂

「ごめん。やっぱり明日は無理」

陽子

『なんでよ？』

桂

「今そっちにいないから。言うなれば留守中？」

陽子

『へ？』

陽子

『……はとちゃん、今、どこいるの？』

桂

「電車の中。ごとごといってるの聞こえない？」

鉄のレールごしに枕木を蹴る振動が、心臓の音みたいにリズムを刻んでいる。

すっかり寝入ってしまったのは、このゆりかごのような心地よい揺れのせいかもしれない。

それとも、単に疲れていたんだろうか。

桂

「どうかな？ 聞こえないなら、床に携帯近づけるよ？」

陽子

『いや、いい。何となく聞こえた。でも電車の中にしちゃ、やけに静かじゃない？』

桂

「ガラガラなんだ。ボックス席占領——っていうか、いち車両独占」

腰を浮かして再確認。

やっぱり、わたしだけだった。

携帯電話をつかって、あまつさえ普通のトーンでおしゃべりしたりできるのも、この貸しきり状態あってこそ。

わたし羽藤桂は、電車内での迷惑電話に反対します——と、それはさておき。

桂

「すごいよ。隣の車両にも誰もいないみたい」

陽子

『夏休み真っ盛りのこの時間帯にその状況って、一体どういう路線なの？』

桂

「すごいローカル」

陽子

『端的な説明ありがと。少なくとも近場じゃないのね』

桂

「うん。遠い遠い。今日はもう、ずーっと電車に乗りっぱなし」

おかげでお尻、ちょっと痛いかも。

陽子

『それははとちゃんご苦労様。で、そこまでして行く目的地って？』

桂

「えーとね、経観塚ってところ。お父さんの実家があるんだって」

陽子

『——っ！？』

陽子

『はとちゃん、それってどういう事っ！？ パパさんの実家ってっ！？』

ちょっと耳がキーンとした。

父親の実家に行くぐらいで、何を上げさな——

そう思うのが普通の場合。だけど今のわたしは、あまり一般的とはいえない事情を持っていた。

うちにはずっとお父さんがいなくて、わたしは顔すら思い出せない。陽子ちゃんはそのを知っている。

わたしの家は母子家庭だった。

そして「だった」と過去形なのは、この夏に、お母さんが——
何かの事故に遭ったわけではなく、少し具合が悪そうかな、と思っていたらそれっきり。
あっさり静かに逝ってしまった。
過労のようなもの、だったらしい。

陽子

『もしかして引っ越すつもり！？ 学校なんかも変わったりするの！？』

桂

「あ、それはない。ないと思うよ。お祖父ちゃんとか親戚がいるわけじゃないから、住むのが目的で向こうに行くんじゃないし」

陽子

『はあ〜〜』

わりかし呑気なわたしの声に、陽子ちゃんが大きく息を吐いたのが聞こえた。

陽子

『……だったらなんで？』

桂

「なんかね、わたしに残された遺産だ何だを調べてたら、経観塚の家があったんだって」
そういう整理をしてくれた税理士さんが言っていた。家の鍵も受け取った。
税金関係とか色々あるから、相続するか手放すかを早めに決めなきゃいけないのだそう。

桂

「それで、とりあえず見に行こうかなって」

陽子

『大変なのねえ、はとちゃんも』

桂

「大変だよー」

陽子

『暇だし、夏だし、休みだし。言ってくれば付き合ったのに』

桂

「あ、その手があったか」

わたしはぼんと膝を打った。

桂

「知らない場所にひとりで行くのって、けっこう緊張するんだよー」

陽子

『あっはは、緊張してる人はよだれたらして眠りこけたりはしないんじゃないかなー？』

桂

「だから、よだれなんて——」

桂

「——って、あれ？ 陽子ちゃん？ 陽子ちゃーん？」

しーん。

電波が届かないところに入ったらしい。

とりあえず、かけなおしてみる。

—————
駄目だった。

桂

「ふう……」

ため息をひとつ。西日の射す窓に目を向けると、すでに景色が大きく違っていた。

太陽はとっくに傾いていて、緑とオレンジが混じった、深い色合いがひろびろと広がっている。

桂

「お父さんの田舎かぁ……」

ガラスとコンクリートとアスファルトの、硬い世界を見慣れているわたしにとって、真新しい景色が広がっていた。

まだ手にしたままの携帯電話で確認すると、最後に確認した時間からはずいぶんと経っていた。

目的地はもうすぐだろう。

ごとん、ごとん——

がたん、ごとん——

シートに深く座りなおし、揺れる電車に身を任せる。

ごとん、ごとん——

がたん、ごとん——

ゆさりと眠気をもよおす揺れに、わたしはとろんとまぶたを落とす。

ごとん、ごとん——

がたん、ごとん——

目を閉じてても、黄昏の世界は消えなくて。

いよいよ視線の高さにまで落ち込んだ夕日は、まぶたの裏に走る血の色を透かして、世界を朱に染め上げていく。

わたしは再び夢を見た。

わたしは赤い夢を見た——

アナウンスの音に起こされて電車を降りると、とっぷりと日は暮れていた。
旅行慣れしていないわたしの荷物は大きく、それを持って歩いただけで、額に汗が滲んでくる。
わたしの住んでいる町から見て、ずいぶん北にある土地だけに、少しは涼しいかも——なんて期待してたんだけど。

桂

「……暑いなあ、もう」
さほど変わりはないらしい。
さっきまで空調の効いた車内でまどろんでいたわたしには、この温度差がけっこう堪えた。
荷物の重さに負けて、ふにやりとへっぴり腰になる。
端から見たら、きっと情けない格好だと思う。
とはいえ、誰に見られているわけでもないのだから、気にしないことにして。
車内の過疎っぷりからみて、こんな所で降りるのはわたしくらいだろう。多分。

桂

「ん〜〜〜っ」

荷物をいったん地面に下ろし、とんとんとんと腰に手をやり、上半身をぐるりと回して

桂

「ん？」
わたしはそのまま、固まってしまった。
近づいてくる足音。
凜とした足音。

この駅で降りたのは、わたしだけではなかったらしい。
まだ満ち足りてない月明かりの方が、はるかに頼りになる程度の照度の乏しいホームの闇から、すうっと浮かびあがるように——

——その人は、いきなり視界に現れた。

綺麗に歩く人だった。
単に姿勢がいいとかの問題じゃなくて、まるっきり雰囲気も違って見える。
桧舞台を踏む役者のような——はっと息を吞んでしまうような、日常とは切り離された空気を付き従えている。

桂

「うわ……」
思わず見とれてしまっていた。
黒いブレザーは短い丈のスカートまで黒。そこから格好よく伸びる脚も、ストッキングに包まれていて、夜闇の色に溶け込むよう。

一見、異様な黒尽くめ。
よくよく見れば普通の制服。
テレビで見知った有名私立のものに、似てないこともないかもしれない。
だとすると、だいたい同じ年齢なわけだけど、ちょっと比べる気がしなかった。
見るからにしっかりしてそうな彼女に比べて、何だかわたしは頼りない。
これから先、しっかりしなきゃいけないのに。

桂

「はあ……」
がっくりと顔を伏せてため息。

涼やかな声

「——私に何か用事ですか？」
声まで涼やかに落ち着いている——じゃなくて。

慌てて顔を上げると、彼女は数歩手前で立ち止まっていて、こちらに視線を投げかけていた。

切れ長の黒い瞳がまっすぐで。

立ち姿の第一印象にたがわず、とても綺麗な顔をしていたのだけど、それより何より視線の強さが強烈で。

……ううっ、ものすごいプレッシャー。

ただ見る、ということがここまで対象に影響を与える行為なのだと、身をもって思い知らされる。

桂

「あ、あの、その……」
ああ、そんなに見つめられると言葉が。
とはいえ、さっきからぶしつけに見ていた挙げ句、ため息まで吐いてしまったのはわたしの方。
悪気があったわけじゃないけど、不快にさせてしまった可能性もなきにしもあらずで。

桂

「ごごごっ、ごめんなさいっ！」

制服の少女

「いえ——」

制服の少女

「それで、私に用事ですか？」

桂

「いっ、いえっ！ 何でもありません、ごめんなさいっ！ それじゃあ、夜も遅いんでっ！」

真っ白にフェードアウトしていく頭が何も考えられなくなる前にぺこぺこ頭を下げると、荷物を抱えて改札口へ走る。

桂

「失礼しました、ごきげんようっ！」

ずしっとくる荷物の重さも忘れて走る。

うわー、変な子だって思われちゃったかも。

どうしよう、どうしよう——

どうしてわたしはこうなんだろう。

……………

……まあ過ぎたことだし、旅の恥はかき捨てっていうしね？

わたしは気を取り直して、なくさないようにお財布に入れた切符を取り出した。

駅員

「おお、確かに。『到ル経観塚駅マデ』だ」

わたしの切符を受け取った駅員さんが、乗車駅と下車駅を確認しながら言った。

駅員

「こんな辺鄙なところに、若いお嬢さんひとりとは珍しい」

駅員さんがパンチ片手に切符切りに立ってるなんて、ちょっと他にはないレトロさだった。

とはいえ駅員さんだって負けず劣らずで、不思議と調和はとれていた。

優しそうなお爺ちゃん——といった感じの、お年を召した駅員さんだった。

定年とか、他のところとは違うのかも。

駅員

「お嬢さん、家出かね？」

パンパンに膨らんだかばんを見て、言った。

桂

「ちがいますっ」

駅員

「ふーむ」

まだ目が半信半疑だった。

だから、家出じゃないのにな。

駅員

「それではあれだ。こっちに親戚の家でもあるのかな？」

桂

「えーと、そんな感じですよ。お父さんの実家が、こっちにあるんで」

駅員

「なるほど。何も無いところだけど、ゆっくりしていきなさい」

初対面のわたしに対して、気安い知り合いみたいな口を利いてくれるのが新鮮だった。
少なくとも、わたしが学校に通うのに使っている駅では考えられない。

——っていうか、自動改札は口利かないし。

あまり長居するつもりはないんだけど、せっかくの好意なので「はい」と素直に返事をしようとしたところ——

涼やかな声

「お願いします」

すぐの後ろで、先ほど聞いた涼やかな声。

ぼっと耳が熱くなる。

こんなに小さい駅で、改札口はひとつしかないんだから、彼女がここへ来るのは当然なわけ。

ううっ、顔から火が出そうだよ……

わたしは邪魔にならないよう、小さくなって道を空けた。

彼女は半歩前に進み、駅員さんに切符を手渡す。

切符を受け取った駅員さんはというと——

駅員

「おやおや。こんな辺鄙なところに、若いお嬢さんひとりとは珍しい」

……………

あの一、わたしの時と台詞が同じです。

制服の少女

「そうですか？」

駅員

「もしかして、こっちに実家があるのかな？」

……もしかしてそれは決まり文句なんですか？

制服の少女

「いえ、少々用事がありまして」

駅員

「ほほう。それはそれは」

ふたりは何事かを話し始めたようだけど、さて——

わたしも人のことばかりは、気にしてられないんだっけ。

ここからお父さんの実家まで、バスに乗っても三十分ほどかかるって話なんだけど……

ちゃんと確認をとってからじゃないと、どうも不安でいけない。

勘まかせに乗ったバスで居眠りをしたあげく、目的地とはほど遠い終点で、運転手さんに起こされたという前科があるのだ。わたしには。

……いまだトラウマだったりして。

とにかく、ここは誰か詳しそうな人に確かめてから乗るのが間違いがなくていい。大した手間じゃないわけだし。

とはいえ、あたりにこれといった人影はなく。

やっぱり駅員さんが詳しいと思うんだけど、生憎とまだ話中だった。

……………

……相手が綺麗な人だと、駅員さんのお話しも弾むのかな？

おとなしく順番待ちしててもいいんだけど、好奇心につられるままに、つつーっと近づいてみることにした。

駅員

「さて——どうだったかな？」

ふーむと、駅員さんが首をひねっている。

彼女は手にしたものを見せながら、何かを訊ねているようだった。

わたしと同じで、道を訊いてるのかな？

ちょっとの背伸びで、わたしよりも高い肩越しに、彼女の手元を覗き込んでみる。

写真だった。

優しそうな顔立ちをした、同じぐらいの年頃の男の子が映っていた。

視線がこちら（つまりはカメラ）を向いてないあたり、隠し撮りだったりするのかもしれない。

駅員

「うーん、悪いけど覚えがないねえ」

制服の少女

「そうですか」

駅員

「見ての通り、見知った顔をあわせても出入りの多くない駅だから、通れば覚えているようなものなんだけれどねえ」

駅員

「まあ、交通手段は他にもバスとかあるわけだから、来ているかもしれないんだけどね」

制服の少女

「そうですか」

何だか刑事ドラマの聞き込みみたいだと思った。

……………

……うーん。

もしかして、写真の男の子を追いかけてこんなところまでやってきてたりするんだろうか。

ふたりは一体どういう関係？ 兄弟？ 恋人？ はては許婚とか？

なにとはともあれ、平々凡々と暮らしていたわたしからみるに、ロマンティックな感じがひしひし。

あ、いや。今のわたしの境遇は、平々凡々からはちょっと遠いかもだけど。

——と、わたしがあれこれ考えているうちに、すっかり話は終わったらしい。

制服の少女

「ありがとうございました」

駅員

「ああ、力になれなくてすまんね」

制服の少女

「お気になさらず。それでは」

彼女は写真をしまつて頭を下げると、きびすを返して駅から出て行く。

颯爽とした、まっすぐな後ろ姿だった。

桂

「……………」

駅員

「おや、お嬢さん。まだいたのかい？」

桂

「はいっ!？」

またも見とれてしまっていたわたしは、駅員さんの声で我に返る。

桂

「あ、はい、その、ちょっと……………」

いたら悪いか——なんて返事はしないで言葉を濁し、お父さんの実家の住所を書き留めたメモを探す。

桂

「少々お訊ねしたいことがありまして……………」

駅員

「まあ、何でも訊ねてみなさい。答えられるかどうかはともかく、せつかく他所から訪ねてきてくださったお客さんだ」

桂

「どうもありがとうございます……」

……あれ？ どこにしまったっけ？

あれあれ？

桂

「……あのっ、ちょっと待ってくださいっ！」

焦れば焦るほど、手つきが危なっかしくなっていくのがわかる。

ポケットをごそごそ。

お財布や定期入れには挟まっていなかった。

かばんを開けると、ぎゅうぎゅうに詰まっていた中身が飛び出してきて。

ぼてっと落ちた。

桂

「ううっ……」

何だか少し、泣けてきた。

駅員

「ふーむ。もしかしてお嬢さんも人探しか何かかな？」

桂

「そういった話とは縁遠いもので……」

駅員

「では何かね？」

桂

「家の方向に行くバスの乗り場を、教えてもらおうかと思って……」

駅員

「ふむふむ、それで？」

桂

「それで、住所を書いたメモを……」

桂

「探してるんですけど……」

ううっ、見つからないなあ……税理士さんに電話して、もう一回教えてもらおうかなあ……

服の上から携帯電話をまさぐる。
電話、電話……あれ？

……あ、そうか。
メモだとすぐになくしちゃいそうだから、携帯電話のアドレス帳に登録しておいたんだ
っけ。

桂
「ありました！」

駅員
「それは良かった。さて、お嬢さんはどこまで行きたいのかね？」
取り出した携帯電話の液晶画面にアドレス帳を呼び出して、駅員さんに見せる。

桂
「この住所に行きたいんですけど」

駅員
「ふーむ、なるほど」

駅員
「さすがに都会の子は、ハイカラな物をもってるんだねえ」

桂
「いや、そうじゃなくてですね……」
駅員さんのレトロっぷりは、見かけ限定じゃないらしかった。
第一、わたしの家がある町は、都会というほど都会じゃないし、携帯電話なんて今時——

桂
「……みんな持ってますよ？」

駅員
「どうもこのあたりは電波の具合が悪いらしくてね。持っていたところで使えるとは限ら
んのだよ」

桂
「はあ、なるほど——」
そういえば、アンテナはかろうじて一本。
陽子ちゃんからの電話も、途中でぷつんと切れちゃったっけ。

桂
「——でもなくて」

駅員

「ほほう？」

いけない、いけない。脱線するところだった。

桂

「この住所の近くまで行くとしたら、どのバスに乗ればいいんですか？」

駅員

「ああ、バス停なら駅の前にあるだろう？」

示す駅員さんの指先を頼りに、駅の外へと目を向ける。

駅前だけど、商店街が広がっているわけでもないのずいぶん暗い。

丸と四角を棒でつなげた、おでんみたいなシルエットを発見。あれがバス停標識らしい。

駅員

「ここらを走る路線は二本。どちらもあそこのバス停に止まる」

桂

「はい」

駅員

「それでお嬢さんの場合、隣町に向かうので途中下車だね。降り損ねると、山を越えてしまうから、気をつけなさい」

桂

「はい」

駅員

「降りるところは住所の小字と同じだから」

桂

「はい」

駅員

「——と、そんなことよりお嬢さん」

桂

「はい？」

駅員

「お嬢さん、本気でここに行くつもりなのかね？」

桂

「そうです……けど？」

駅員

「うーむ……」

桂

「？」

駅員

「……………」

桂

「何かあるんですか？」

駅員

「そのあたりだとあそこ一軒きりだから、間違いないと思うんだがね」

桂

「はあ」

……何だ、ご近所さんはいないのか。

せっかく持ってきた「十三石まんじゅう」が無駄になっちゃったかもしれない。

わたしのおやつにすればいいから、それはそれで構わないんだけど。

駅員

「そこのお屋敷には——」

桂

「え？」

駅員

「——あるんだよ」

桂

「な、何が？」

駅員

「色々な、噂がね」

桂

「……………」

駅員さん、そんなに嬉しそうに声色を変えないでください。

駅員

「確か十年ぐらい前だったか。住んでいた家族が神隠しにあって消えてしまったとか」

桂

「ひっ、引っ越ししただけなんじゃ？」

駅員

「いやいや。実は殺人事件があった——なんて噂も立ったぐらいだよ」

桂

「嘘……」

駅員

「本当さ——」

駅員

「——とはいえ、その家のお嬢さんが訪ねて来たってことは、噂は噂にすぎないってことかな」

くるくるとのひらでパンチを回しながら、相好を崩す。

桂

「……まったく、脅かさないでください」

駅員

「はっはっはっ、すまないねえ。からかい甲斐のあるお嬢さんなもんで、つつい」

桂

「もうっ……駅員さんが、お客をからかってどうするんですか」

駅員

「そうでもしないと、暇で暇で」

駅員

「ところで最近、座敷童子を見たとか、狐に化かされたとかいう人がいるらしいんだがね？」

……わたしは狸に遊ばれてるような。

桂

「その話はもういいです」

駅員

「そうかね？」

桂

「隣町行きのバスに乗ればいいんですね？」

駅員

「その通り。今日はもう無理だがね」

桂

「……は？」

駅員

「さっき、バスが出る音、聞こえなかったかな？いや、ちょっと前なんだけどねえ」
そういえば、聞こえたような気がしないでもないような。

桂

「もしかして？」

駅員

「そう。最終バスの遠ざかる音だ」

桂

「まだこんな時間なのに？」

普通にお夕飯の時間帯というか、個人商店の店じまいならともかく、最終バスには早すぎる時間だった。

駅員

「なにぶん田舎なもんでねえ」

駅員

「山向こうの町まで行くから、終点まではけっこうかかるんだよ。第一、利用者もいないし」

確かに目下の利用者はわたしだけ。

そんな状況でサービスの向上に努めたところで、赤字ばかり増えそうなのは目に見えていて、断念するのも納得なんだけれど。

……どうしよう。

駅員

「お嬢ちゃんは今、どうしようかと思っている」

桂

「思ってます」

駅員

「私に良いアイデアがあるんだがね」

桂

「良いアイデア？」

悪戯っ子のような笑顔に、わたしは半歩あとずさって身構える。

駅員

「この駅には宿直室なんて洒落たものはないし、老いたり枯れたりとはいえ、男やもめの家に引っ張り込むわけにはいかんから」

桂

「いかんから？」

駅員

「旅館を紹介してあげようじゃないか」
案外まともな提案に、わたしは肩の力を抜いた。

桂

「旅館かあ……」
でも旅館なんかだと――

駅員

「なーに。私が口を利いてあげるから、飛び込みの未成年でも大丈夫さ。宿泊費だってそれほどかからないはずだよ」
万事了解、と音が出そうなウインク。

……どうしよう。

せっかくここまで来たんだし、無理を押しても家まで行こうか。

それとも今日はおとなしく旅館に泊めてもらおうか。

うーん……

色々考えた結果、わたしは旅館を紹介してもらうことにした。

怖い噂のある人里離れた寂しいところに、ひとりで行く勇気がなかった――というわけじゃない。そういう事にしてほしい。

色々考えた末なのだ。

桂

「じゃあ、よろしくお願いします」
ぺこりと頭を下げると、駅員さんは自分の胸を叩く仕草で太鼓判を押してくれた。

駅員

「よしよし、任せたまえ。なーに、悪いようにはしないから」

駅員

「とりあえず善は急げだな。今ならまだ夕食には間に合うぞ」
大きな文字盤の時計で時間を確認すると、改札の定位置からひょいと飛び出し、わたしの荷物を軽々と持ち上げた。

桂

「わ、いいんですか？」

駅員

「何がかね？」

桂

「勝手に持ち場、離れちゃって」

駅員

「大丈夫、大丈夫。次の電車は当分後だし、少ない客の大半は定期だから素通りだし」
だから駅に人がいる必要はない。どうやらそういうことらしい。
それならいっそ無人駅にしまえばいいんだろうけど、色々事情があるのかもしれない。

駅員

「おーい、お嬢さん、どうしたのかね？」
駅の入り口から、駅員さんがわたしを呼ぶ。
考えごとをしていたせいで、おいてけぼりをくってしまった。

桂

「いえっ、何でもありませんっ」
わたしは元気に返事をして、駅員さんを追いかけた。

桂

「あ、でも、バスがなくても何とかなるんじゃないかと」

駅員

「歩くと大変だよ？ 道は悪いし、暗いし」
仮に時速三十キロ程度で走るバスだとしても、三十分ならその移動距離は約十五キロ。
たとえ道が平らで明るくても、わたしみたいなもやしっ子には、かなり辛い道程になる。
ましてや、パンパンに膨らんだかばんを持ってとなると、スタート前から白旗状態。
多少、余計にお金を払ってでも、避けて通りたい行為なわけで。

桂

「ここって、タクシーとかいないんですか？」
バスよりは割高になってしまうけど、仕方がない。寄り道なしの貸し切りで、目的地まで行ってくれるわけだし。

駅員

「いるけど、呼んで欲しいのかい？」

桂

「お願いします」

駅員

「じゃあ、電話をかけてくるから。誰も来ないと思うけど、少しの間ここを頼むよ」

駅員さんは改札の持ち場から出てきて、窓口の中に入っていった。

駅員さんの置いていったパンチを手に、ちょっぴん、ちょっぴんやりながら待つ。

……すぐに飽きた。

手持ち無沙汰になっていたところに、電話の音が漏れ聞こえてきたので、何とはなしに耳を澄ませてしまうわたし。

駅員

「今から配達する予定？ そんな、腐るようなものじゃないんだから、後でもいいだろうに。なんだったら、トランクに積んで行けばいい」

えーと……タクシー会社？

駅員

「ああ、そうそう。それじゃあ頼んだよ」

それがないと落ち着かないのか、戻ってきた駅員さんは、まずは改札パンチを手にしてから、わたしに言った。

駅員

「お嬢さん、話はずいたよ」

駅員

「——という事情なんだがね」

女将

「あらあらあら、それはそれは」

説明しているのは駅員さん。説明されているのはここ、さかき旅館の女将さん。

どうやら気安い仲らしいふたりのおしゃべりに、わたしは口を挟むことができず、ただコクコクと相槌を打つぐらいしかできなかった。

女将

「そうそう、あなた。羽藤さんでしたっけ？」

桂

「はいっ！　そうですっ！」

女将

「大変だったわねえ。ここは田舎ですものねえ。知らなかったら、バスがそんなに早く終わっちゃうなんて、思わないわよねえ」

桂

「はい」

女将

「私もここに嫁いできたときは、どうしようかと思ったのよねえ。ほら、テレビのチャンネルも少ないでしょう？」

桂

「はあ」

今のところ、テレビのチャンネルでは困っていなかったけど、住むには困るのかもしれない。

女将

「でも、もう大丈夫よ。あまり若い人向けのところじゃないけど、今日はゆっくりしてってね」

桂

「ありがとうございます」

何はともあれ助かった。

わたしはぺこっと頭を下げる。

桂

「お世話になります」

女将

「あらあら、これはご丁寧に」

そう返しながら、女将さんは宿帳をめくる。

女将

「まだ若いのにしっかりしてるのねえ。さっき来た子もそうだけど、やっぱりひとり旅をするような子は違うのねえ」

桂

「はあ……しっかりしたいんですけどね」

しっかりしてたら、こんな事態に陥ってないと思う。

女将

「それじゃあはい、ここに記帳をお願いね」

桂

「……えーと、ここですか？」

宿帳と筆ペンを受け取って、書き損じないように慎重に住所と名前を記す。

はとう、けい……っと。

ちらりと目を通した感じ、それほどお客さんは入っていないようだった。

板前

「女将さーん、用意できちゃったー」

女将

「はいはい。それじゃあお願いね」

板前

「わかりちゃったー」

奥からの声に答えると、女将さんは着物の袖をぱたぱたさせた。

女将

「ちょうど今から夕食なのよ。お部屋に荷物をおいたら、広間の方に来てね」

駅員

「それじゃあ、ご馳走になろうか」

女将

「あんまりサボっているようだと、組合に言いつけますよ」

駅員

「おっと、それは勘弁。せっかくお客さんを引っ張ってきたっていうのに厳しいなあ……」

駅員さんは参った参ったと頬をかきながら、撤退始め。

女将

「またのお越しをお待ちしております」

駅員

「はいはい。それじゃあお嬢さん。良い滞在を」

案内してもらった部屋に荷物をおいて、とんぼ返りで広間を目指す。

学校の授業でも何でも、すでに始まっているところに遅れて入るのは、ちょっとドキドキする。

わたしのような蚤の心臓の持ち主としては、そういう状況はなるべく避けて通りたい。

——と、ここだ、ここだ。

そっと様子をうかがうと、五、六人いるお客さんは、誰もお箸を手にしてなかった。いただきますには間に合ったようだ。

女将

「来た来た。羽藤さん、お膳のあるところに適当に座っちゃって」

女将さんに促されるまま、空いていた隅っこの席に向かう。
隣の席は女の人。母子家庭かつ女子校育ちのわたしとしては、何となくほっとする。
背中を覆う長髪越しにも、伸びた背筋がうかがえる、とても姿勢の良い人だった。当然、
きっちりきっちり正座。

桂

「失礼します」

一声かけて隣に座ると、つやつやと垂れる髪が揺れて、その人の向けた顔が見えた。

桂

「……あ」

制服の少女

「ああ、あなたでしたか」

涼やかな声に、心臓が大きく脈打った。

漆黒の髪に囲まれた白い顔。その白皙にくっきり輝く、ぬばたまの瞳のコントラストの
妙。

駅で出会ったあの人だった。

桂

「あ、ああ……えーと……」

制服の少女

「ご一緒するかもしれないと、うすうす感じていましたが」

桂

「え？」

それって一体——

制服の少女

「このあたりでは、ここが一番適当な宿ですから」

——運命的な再会ではなかったらしい。

桂

「そっ、そうですね」

それ以上の返事が思いつかず、落ち着かないお尻をもぞもぞ動かして、座布団をならし
ているうちに、女将さんがやってきた。

女将

「お待たせしました。それでは皆さん、たんとおあがりになってください」

食事開始の宣言に、待ちわびていたらしいサラリーマン風の男の人が、さっそくお箸に手を伸ばした。

では、わたしも両手を合わせて。

桂

「いただきます」

ご飯にお味噌汁にお酢の物。メインディッシュは山の幸の揚げたて天ぷら。

桂

「あ、美味しい」

さくっとした衣の歯ざわりと、ほくほくした南瓜の甘味がたまらない。天つゆをつけなくても十分に美味しい。

次は蓮根にしようか。アスパラガスやピーマンもいい。だけど牛蒡の旬は秋じゃなかったっけ。暦の上ではもう立秋だけど――

閑話休題。

今日は一日座りっぱなしで、お腹が空くようなことはしていないはずなのに、それでも手と口はテキパキと動く。

しばし、黙々。

ご飯茶碗が半分空くまで、わたしはひたすらにお箸を口に運んだ。

桂

「ううっ、つやつやのご飯が美味しいよう」

制服の少女

「……………」

はたと気付くと、隣の彼女がわたしを見ていた。

それほどガツガツはしていなかった。なかったはず。それでも今の言動はかなり恥ずかしいかも。年頃の女の子として。

桂

「あはは……」

さすがにちょっと気まずかった。

話し掛けてみようかな？

仲良くなったら、今のも洒落で通るかも？

同じ電車に乗り合わせて、ちょっとした手違いで同じ旅館に泊まることになった程度でも、それもやっぱり他生の縁。

さっきは向こうから話し掛けてくれたわけだし、きっと大丈夫。女は愛嬌ついでに度胸！

まずは……えーと……

桂

「……ひとり旅？」

わわっ、わたしってば初対面の人に、単語ひとつで一体何を言ってるんだかーっ！？

せめて「ひとり旅ですか？」って敬語で訊ねるとか、ちょっとは日本人らしい文節で話し掛けられなかったのかなーっ！？

さっきから全然いいとこなしだし、もしかしたらかなり変な子だって思われてるかもーっ！？

桂

「あのっ、えっとっ、そのですねっ」

焦るほどに舌は回らなくなるし、頭の中は真っ白に固まっちゃって、何だかもう大変なことに。

まったく、どんな言葉でフォローしたらいいんだか。

ほら、きっと呆れられて――

制服の少女

「そんなに畏まらずに。普通に話してくれて構いませんよ」

ひどく落ち着いた口調で諭された。

冷や水をかけられたみたいに、落ち着きついでに恐縮するわたし。

とはいえ、過剰な空回りでオーバーヒート寸前だった言語中枢も何とか復活したらしい。

桂

「でも、そちらは敬語使ってますし……」

制服の少女

「では、こちら崩させてもらおうか。幸い、年もそうは離れていないだろうし」

桂

「はあ……」

さっそく彼女の口調が変わった。

まっすぐな姿勢と同様、わたしのような躊躇がなくてうらやましい。

……にしても。

敬語のときには気付かなかったけれど。

制服の少女

「敬語の方が良かったかな？」

桂

「いえっ、そんなことはないですっ」

――じゃなくて。

落ち着けわたし。ほら、深呼吸。

桂

「……敬語じゃない方が、わたしとしては楽なんだけど」

制服の少女

「そうか。ならばこれでいいだろう」

桂

「はい……」

変わったしゃべり方をする人だった。

あまり女の子らしくないというか、何と言うか。少なくともわたしの周りには、こういうしゃべり方をする人はいなかった。

とはいえ、変わってるけど格好いい。

とっつきにくそうな印象があるんだけど、こうしてわたしの話に付き合ってくれているからには、愛想だってあるわけだし。

きっと学校なんかでは人気あるんだろうなあ。

制服の少女

「……うん？ やっぱり敬語の方がいいかな？」

桂

「いえっ、普通でいいです、普通でっ」

いや、普通とはちょっと違うんだけど——って、ループしなくていいから。

と、彼女の表情がわずかに緩んだ。

わたしはそんな彼女の顔を、ほんの少し（本当にほんの少しだけ）お母さんに似てるかもしれないな、と思った。

実はわたしのお母さんも、かなり綺麗な人だったのだ。

制服の少女

「さて。先ほどの質問に対してだけど、私はひとりだよ。他に誰かがいると思ったのかい？」

桂

「えーと、ほら、写真の？」

制服の少女

「そういえば——見られていたようだね」

制服の少女

「あれは単なる尋ね人で、私の連れというわけではないんだ」

桂

「尋ね人って、家出か何か？」

制服の少女

「そんなところにしておこうか」

制服の少女

「それで——ええと——」

桂

「あ、羽藤です。羽藤桂」
そういえば、自己紹介をしていなかった。

制服の少女

「ハトウ……」

桂

「うん、羽藤。佐藤さんの『さ』の字を、羽織袴の『は』の字に置き換えて羽藤」

桂

「ちょっと変わった苗字でしょ？」

制服の少女

「ああ、確かに」

桂

「何だったら桂でいいよ」
馴れ馴れしくそんなことを言ってしまったのは、ふとこの人に、名前でもらいたくなかったから——かもしれない。
陽子ちゃんをはじめに学校の友達は、みんなわたしを「はとちゃん」とか「羽藤さん」と呼ぶ。
なんでも、羽藤という苗字が珍しいのと、桂という名前の響きが「男の子みたいでイメージじゃない」のだそうなの。
だから普段、わたしを桂と名前で呼んでくれたのは——

制服の少女

「私はセンバウヅキという」

桂

「え？」
いつもの悪い癖がでた。
わたしは考えごとをしてたりすると、周りの様子が見えなくなって、耳も遠めになる傾向がある。
良く言えば集中力があるってことなんだけど、「注意力散漫でぼやぼやしてる」とも言われる。あるのかないのか、どっちなんだか——
と、いけない。ちゃんと話に集中しないと。

桂

「センバウヅキさん？」

センバウヅキ

「百、千、万——数量の千に、あなたと同じ羽で千羽。ありていに言えば千羽鶴の千羽だね」

桂

「ああ……」

自己紹介してくれたらしい。千の羽とは、容姿にそぐわず綺麗な苗字だ。

桂

「ウヅキはどんな字なの？」

千羽ウヅキ

「鳥の鳥に天体の月で、ウヅキと読ませる」

桂

「からす？」

千羽ウ月

「漢字の鳥から横棒が一本抜けた、牙偏のない方の鳥だよ」

そこまで聞いたら、もう十分。

皆まで説明されなくても、わかっちゃったりするんだなあ。

桂

「もしかして四月生まれ？」

実はわたしのクラスには、弥生ちゃんと皐月さんがいたりする。

さすがに師走って名前の人はいないけど。

千羽ウヅキ

「いや——『うのはなづき』の卯月ではなく、鳥の月でウヅキと読ませる」

……あれ？

桂

「からす？」

千羽ウ月

「漢字の鳥から横棒が一本抜けた、牙偏のない方の鳥だよ」

そういえば、確か……

宿帳に記帳したとき、わたしのひとつ前に書かれていたのがそんな感じだったっけ。

丁寧に書いたのに、慣れない筆ペンのおかげでへろへろになってしまったわたしの名前に比べて、その名前の端麗さと言ったら。

そう、真書きのお手本のような字で並べられていた四文字は確か——千羽鳥月。

チョウゲツと呼んで「何だかお坊さんの名前みたいだなあ」なんて漠然と想ったりした。

桂

「……あれ？ 鳥って『う』って読んだりするんだ」

鳥月

「いや、あれは鳥ではなく鳥なんだ」

桂

「からす？」

鳥月？

「漢字の鳥から横棒が一本抜けた、牙偏のない方の鳥だよ」

桂

「……ああ、烏龍茶の『うー』
言いながら、お箸で空中に書いてみる。
ちょっとお行儀、悪かったかも。」

鳥月

「そう、それだ」

千羽鳥月——少し風変わりな話し方に劣らず、不思議な感じの名前だと思った。
なるほど。鳥の濡れ羽色と、つややかな髪の毛の黒さを誉める言葉があって、彼女の髪はまさにその通り。

とはいえ、娘の名前に鳥なんて文字を入れる、親のセンスがわからない。
髪の毛の黒さを誉めるなら「みどりの黒髪」の翠さんとか、他に何かなかったんだろうか。

桂

「変わった名前だね」

鳥月

「確かに。出生届を書き損じたのだろうと、口さがない人には言われたりするね」

……あれ？

鳥月

「花鳥風月の鳥と月を気取るつもりが、一本抜けて鳥になったと」

鳥月

「……桂さん、どうかしたのかい？」

桂

「ううん、何でもない」
なぜだか一瞬、どきとした。
彼女に対しては色々どきどきすることがあったわけだけど——
多分、気のせい。
きっと、気のせい——って、あれ？

桂

「今わたしのこと『桂さん』って呼んだっ!？」

鳥月

「……確か先ほど、そう呼んでもいいと。問題があったかな？」

桂

「ううん、それは全然っ」

まったくノープロブレム。陽子ちゃんなんか、頼んだってそうは呼んでくれないし。

桂

「別に呼び捨てでもいいよ。うん。それで何の話だっけ？」

気が変わらないように、と話を進めたりなんかもする。

鳥月

「ああ、そうだった」

鳥月

「私は家の用事の関係でこちらに来たわけだけど、桂さんは一体どうして、と思ってね」

桂

「何にもなさそうなところだもんね」

鳥月

「一応この旅館にも温泉を引いてるそうだけど、それだけで客を呼べはしないだろうしね」

桂

「確かにそうだね。もっと涼しかったら、避暑に来る人もいるかもしれないけど」

桂

「わたしだって、お父さんの実家がなかったら、家でごろごろしてたかも」

鳥月

「実家があるのに旅館へ？」

桂

「実家っていっても、誰も住んでないところだから。それに終バス逃がしちゃったし」

そんなことより良いこと聞いたぞ。

ここって温泉あるんだ——

何かの縁と話し掛けて、精一杯の自己フォローを試みるのもやぶさかじゃないんだけど——

穴があったら入りたい今、かえって墓穴を掘ってしまいそうな気がした。

桂

「……お騒がせしました」

わたしはぺこりと頭を下げるに止め、目の前のお膳に集中することにした。
これ以上、傷を広げない方向に努力するのが、きっとわたしのためだろう。

まずは姿勢を正して。
お箸の正しい持ち方オッケー？
刺し箸、迷い箸、ねぶり箸はノーグッドだよ？
それでは、お行儀よくお食事再開。
……………

桂

「……もきゅもきゅ」
……………

桂

「……もきゅもきゅ」
……………

桂

「ふい～」
何となく視線が外れたのを感じて、一息つく。お味噌汁をちょっとすすって、息をつく
前フリ作りも忘れない策士なわたし。
よし、これで安心してごはんが味わえる。
ううっ、それにしても美味しいなあ。
ついつい、食が進んでおかわりまでしてしまった。

桂

「ふや～～～」

だらしのない声を吐き出しながら、わたしは畳にごろっと転がる。
肌のほてりを吸い取ってくれる、ひんやりとしたいぐさの感触が気持ちいい。

接触面が温んできたら、冷えたところを求めてごろり。

……幸せだ。

お腹いっぱい美味しいものを食べた後、心ゆくまで温泉につかって。
その温泉がまた、なかなかのお湯だったものだから、すっかり長湯してしまった。
別に骨休めに来たわけじゃないんだけど、気分はすっかり湯治にきたお客さん。
最近、陽子ちゃんから「疲れてるんじゃない？」とか言われるけど、これで少しはマシ
な顔になっただろうか。
——と、そういえば陽子ちゃん。

駅に着いてずっとバタバタしてたから、電車の中でぷつんと切れて、それっきりになっ
ていた。

わたしは旅館備え付けのちゃぶ台の上に置いていた、携帯電話に手を伸ばす。

あ……やっぱり。お風呂に行ってる間に、電話があったらしい。
着信履歴に留守電とメールが一件ずつ。

ぼちぼちと携帯を操作して、留守電を再生。

陽子

『おーい、はとちゃん。どうしたの？ せっかくながつながったのにしょうがないわねー。もしかしてそっち、かーなりの山奥？』

陽子

『とりあえずつながっても捕まらないんじゃないアレだから、メール打つから』

桂

「ううっ、長湯しててごめんねー」

……………

……留守電の録音メッセージ相手に謝ってどうしろと？

桂

「えーと、メールメール」

反射的に誰もいないことを確認したわたしは、わざとらしい独り言で、さきほどの言葉もそうなのだと自分をごまかした。

ぷち、ぷち、ぷち。

<はとちゃん生きてる？ パパさんの実家にはちゃんと着けた？>

着けてません……

<前みたいに寝過ごして、見知らぬ土地に運ばれたりはしなかった？>

<でもって超過料金が持ち合わせが足りなくて、泣きそうになったりしなかった？>

さすがにそれは、用心しました。

ってゆーか、陽子ちゃん忘れて……

<まあ無事ならいいんだけど、困ったことがあったら相談してよね>

<それじゃああたしはもう寝るわ。おやすみー>

生存報告をしようと思ったけど、時計はけっこうな時間を指している。

わたしなんかは平気で起きてる時間だけど、早寝早起きニワトリ生活がモットーの陽子ちゃんは、場合によっては床についでる頃合いだ。

……メールにしとこ。

……………

もっと速く打てるようになれば、メールって便利なんだろうけどなー。

……………

近況をふちふちと打ち込んでいると、あっという間に時間が経ってしまった。
送信……っと。

桂

「ふぁ～～～」

電車であれだけ寝ているのに、まだ足りないのかあくびが出た。

特にすることないし、もう寝ようかな。

あ、でも髪の毛ちゃんと乾かさないと。

でも眠い……

すごい寝癖がついても、朝にもう一回お風呂に入ればいいわけだし……

えーと、お布団、お布団。

いつの間にか用意されていたお布団に、電気を消して潜り込む。

遠くから虫の声が聞こえる。

桂

「おやすみなさい——」

緩やかな眠りのやみが、ゆっくりと身体の中を満たしていった。

桂

「はい、もしもし？」

陽子

『あー、はとちゃん？ あたし、あたし』

桂

「あ、陽子ちゃん」

陽子

『いやー、やーっとつながったよ』

桂

「あれ？ そんなにつながらない？」

表示を見ると、アンテナマークは一本もなかった。駅では一本立ってたんだけど、室内だからかもしれない。

とりあえず窓を全開にしてみた。

もわっと膨張した空気と一緒に、電波も入ってきたものの、アンテナ表示はついたり消えたり。頼りになるかは怪しいところだ。

……………

窓開けっ放しでのエアコンは環境の敵、電気の無駄遣い。できればカーテン・障子で断

熱、二十八度が適温目安。

わたし、羽藤桂は地球に優しい女の子を目指します。

桂

「陽子ちゃん。いつ切れるかわかんないかも」

陽子

『はいはい、はとちゃん相当な僻地にいるのねー』

わざとらしいため息混じり。

陽子

『で、どう？ ちゃんとパパさんの家につけた？』

桂

「それが全然。最終バスに乗りはぐれちゃって」

陽子

『さっすがはとちゃん。それぐらいはやらかすと思った』

桂

「信用ないなあ」

陽子

『や、実際そうなるわけだし』
……返す言葉が見つからなかった。

陽子

『で、今どうしてるの？ まだ駅のベンチとか？ 夏とはいえ、慣れない野宿はキツイよ？』

桂

「うん、旅館に泊まることにした」

陽子

『まるっきり家出少女のナリで、よく旅館なんかに泊まれたねー』

桂

「駅員さんに紹介してもらったんだ」

陽子

『あー、はとちゃんの「世話焼きしたくなるオーラ」は、あたし以外にも有効だったかー』

桂

「……なに、それ？」

陽子

『はとちゃんは、特な性格してるってこと』
遠まわしに「頼りない」って言われてるような気がした。
ううっ、しっかりしないとなぁ。

陽子

『ま、旅館なら安心ね』

桂

「うふふー。ごはんも美味しかったし、温泉も気持ち良かったよー」

陽子

『うわっ、その声、もしかして幸せ満喫リゾート気分？ 満面笑顔でお肌もツヤツヤ？』

桂

「うふふー」

陽子

『……幸せそうで、何よりで』

桂

「うん」

陽子

『で、その幸せ邪魔するようで悪いんだけど』

円いふたつのヘッドライトが夜を押しつけて、道のでこぼこを照らし出してくれている。

桂

「……真っ暗……ですね」

タクシー運転手

「明かりの全然ないところだしなぁ」
浮かぶ月はそれなりに明るかったけれど、それも森に入るまで。
気ままに伸びた枝同士が重なり合い、緑の葉のある季節だけに、見上げてもなかなか空
が見つからないほど、わさわさ頭上は覆われている。
本当に、車のヘッドライトだけが頼りの、とっぷり暗い道だった。

タクシー運転手

「でもまあ、もうすぐだよ。バスならさっきのバス停で降りて、ここの森は歩きのところ
さ」

桂

「わ、タクシーにして良かったかも」

タクシー運転手

「それを言うのは、もうちょい先かもなあ」

桂

「え？」

ドーナツを食べていて真ん中の穴に突き当たったみたいに、森が開けて月の光が降ってきた。

運転手のおじさんが車を止める。

タクシー運転手

「さ、到着だ」

自動で開いたドアから身を乗り出して、広がる景色を目に受け止める。

桂

「……ここ、なんですか？」

タクシー運転手

「この経観塚で鎮守の森のお化け屋敷って言えば、ここしかないから間違いないな」

桂

「お化け屋敷……」

鎮守の森は良しとしよう。うん。

今通ってきた真っ暗な森も、明るい昼の間に見れば、緑豊かな清々しい場所に見えるんだらう。

だけどお化け屋敷って――

――ぴったりかもしれない表現だった。

敷地を囲む鬱蒼とした森を背に、青白い月光を浴びた日本家屋の、不気味で静かな佇まい。

伸び放題の雑草とか苔の生した瓦屋根が、何か出そうな雰囲気、よりいっそうのものにしているようだった。

桂

「……………」

だけど、暗くてはっきりしないけど、この景色はもしかして……

桂

「あ……」

タクシー運転手

「さーて、お客さん。どうするんだ？」

桂

「え！？ どうするって……？」

タクシー運転手

「目的通りのここまででいいのか、他の場所までまだ乗るつもりか」

桂

「大丈夫です。ここでいいです」

覚悟を決めた。

幸いなことに、家は第一印象ほど傷んでなさそうだった。ここから見える引き戸のガラスも、割れずにちゃんと残っている。

そういう意味では、お化け屋敷扱いは不当だったかもしれない。せいぜい、昔話の迷い家だ。

ぶるぶる——気持ちが萎えるような回想やめ。

桂

「お世話になりました」

タクシー運転手

「いいってことよ。じゃあ、俺は引き上げるけど、何かの折には大伴タクシーをヨロシク」

桂

「やっぱり戻してください……駅まで」

タクシー運転手

「ははは、やっぱりなあ。そうだろうなあ」

タクシー運転手

「そりゃあ屋根とか壁はあるようだけど、長いこと放ったらかしで、埃だらけの蜘蛛の巣だらけだろ。電気もつかずに真っ暗だしな」

桂

「みたいですね」

タクシー運転手

「ま、お嬢ちゃんが泊まるようなとこじゃねえってことだ」

桂

「はい。やっぱり旅館を紹介してもらうことにします」

タクシー運転手

「ははは、それじゃあ乗った乗った」

タクシー運転手

「帰りの駄賃はサービスするぜ。どのみち俺も、戻らなきゃいけないしな」

桂

「ううっ、ありがとうおじさん……」

タクシー運転手

「そうそう、帰りがけにちょっと寄り道するけど構わねえよな？」

桂

「えっと、どこに行くんですか？」

タクシー運転手

「ちょいとお得意様に、トランクに積んだビールを、四ケースばかり届けにね」

桂

「……タクシー屋さんがビール？」

タクシー運転手

「へへ、運ちゃんは副業なんだ。ウチはジーサマの代からここに根を張る酒屋でね」

タクシー運転手

「日本酒・焼酎・ビールから、赤・白・ロゼのワインまで、メチルを除くアルコールのご用命は、『大伴酒店』をヨロシク！」

桂

「わたし、未成年なんですけど……」

桂

「それが、行ってはきたんだけどね……」

経観塚に着いてからの出来事を、かいつまんで説明した。

陽子

『あっはははは。それではとちゃん、駅員のお爺ちゃんに泣きついて、その何とか旅館に転がり込んだわけだ』

桂

「さかき旅館」

陽子

『まあ、何でもいいけどさ。なーんかその光景、はっきりと目に浮かぶようだよ』

陽子

『「……ううっ、駅員さーん、やっぱり駄目でしたー」』

陽子

『「おやおや、仕方のないお嬢さんだ。だから最初に忠告したじゃないか」』

陽子

『「ふえーん、ごめんなさーい」』

桂

「……………」

もしかして真似てるつもり？ それってわたしの真似なんだね？

終わらない陽子ちゃんのゲラゲラ笑いを、携帯の電源をオフにして止めたい気分になった。

全部、電波の不調のせいにすればいいし。

桂

「……それで、お風呂から上がってきたところなんだけどね。今」

とりあえず、話を変えることにした。わたしの精神衛生のためにも。

桂

「何と温泉なんだよ。それもけっこう本格的な露天風呂」

陽子

『へー、それは良かったじゃない』

桂

「まあね。これも日頃の心がけてやつか」

陽子

『そんなはとちゃんに、ちょっと良くないかもしれないお知らせがあります』

桂

「えっ!？」

陽子ちゃんってば、さっきから。

もしかして嫌がらせのつもりで電話してきた？明日一緒に遊びにいけないの、まだ根に持たれたりしてる？

桂

「……どうしたの？」

陽子

『あんたのママさんの知り合いって人から、あんたの居場所知らないかって電話があっさ。家にかけても誰も出ないって』

桂

「あ、うん。誰か出たら怖いよね」

陽子

『そりゃ、そうなんだけど……』

陽子

『なーんかあたし、パパさんの実家の方に行ってるって、口滑らせちゃったみたいなんだ』

桂

「うん。別にいいけど」

陽子

『よくないっ！！』

桂

「ひゃんっ」

思わず電話を取り落としそうになった。

ううっ、耳がキンキンするよ……

桂

「陽子ちゃん、急に大きな声出さないでよ～」

陽子

『まったく、はとちゃんってばお気楽呑気な小娘ねー。あんたもいい年頃なんだから、もうちょい危機感持ちなさいって』

桂

「いい年頃って、陽子ちゃんと同じだよ」

陽子

『だまらっしゃい！』

陽子

『ただでさえ微妙な環境設定でちょっといいカモ状態なんだから、余計気をつけないとあつという間に身包み剥がされて一文無しよ』

桂

「ううっ」

陽子

『そしたらはとちゃん、住むところ追われて、学校にだって通えなくなるんだからね』

桂

「以後気をつけます……」

陽子

『よろしい。甘い言葉にご用心。上手い話にゃ裏がある。人を見たらペテン師と思えーっ』

桂

「……それはさすがに疑い過ぎだと思うんだけど、気を付けついでに質問いいかな？」

陽子

『何？』

桂

「わたしのお母さんの親友って、なんて名前だった？」

陽子

『……………』

桂

「……陽子ちゃん？」

陽子

『あはは、いやー、それがねー』

桂

「それが？」

陽子

『すーっかり訊きそびれちゃって。一応、女の人だったけど』

散々わたしに言っておいて、結局のところそれですか。

桂

「もう」

陽子

『あっはは……面目ない』

桂

「でもまあ、大丈夫だよ。お父さんの生まれ故郷なんて、わたしも知らなかったぐらいだし」

陽子

『甘い。それははとちゃんがちゃんと知ろうとしなかったから。戸籍謄本とか自分で取って、見ようとしたこと一回でもある？』

桂

「ない……」

陽子

『でしょ？ ちょーっとその道かじったセミプロ雇って調べさせれば、その程度の個人情報なんかただ漏れのご時世なんだから、油断は禁物』

桂

「……陽子ちゃん、もしかしてわたしを怖がらせて遊んでるだけ？」

陽子

『そんなことないけど？』

ありそうだった。

陽子

『とにかく、さっさと用事済ませて帰ってきたら？ひとりじゃ何かあったときに困るだろうし』

桂

「そうだね。明日、家を見てから決めるよ。なんにもなかったら、することなくなっちゃうしね」

アンテナ表示は相変わらず、ついたり消えたりで頼りない。だけど調子が良かったのか、その後もずいぶん話し込んでしまった。

桂

「くしゅんっ」

しまったなあ。ちゃんと髪の毛乾かさないと、ほったらかしにしちゃったよ。

ううっ……

虫の音が聞こえる。

虫の声？

がさがさと、せいの高い草をかきわけて――

年端のゆかない小さな子供が、ゆるやかな勾配のついた道のない道を、懸命に登っていく。

あれはわたし？

わたしだろうか。

深い緑に沈んだ世界。

人里離れた静寂の森。
わたしには覚えのない風景。
だけど、不思議と懐かしい――

ああ、そうだった。
この景色をわたしは見ている。
これは夢だ。名残の夢だ。
黄昏の中をひた走る、電車に揺られて視た夢の残り火。
違っているのはわたしの視点。
その子は誰かに手を引かれている。
手を引かれているのは、わたしだったはず。
感触は、ある。
あるのに、わたしは今、まるで第三者のように、その背中を眺めている。
手を引いているのは誰だろう。
着物のような服を着ている。
小さな白い手。
大人の男の人の手ではなかった。

その人が、振り向いた。
駄目――
ああ、まただ。
またこの《意志》だ。
この先には大きな木がある。
わたしたちはそこへ向かって急いでいる。
どうしてそれを、止めるのか。
駄目――
目の前にもやがかかる。
薄絹を重ねるように、何枚も、何枚も、青白い光の幕が、この夢の世界を覆い隠してい
く。
邪魔をしないで。何が駄目なの？
駄目――
そんなことを言われても。
どうして駄目なの？

「駄目なの、桂ちゃん――」

声とともに、光がはじけた。

桂

「――えっ!？」
緑の世界がかき消えた。
つないだてのひらの感触が消えた。
わたしだけが取り残されてしまった。

きゅうっと胸が締め付けられる。
ここは一体どこだろう？
夢から覚めてしまったのだろうか。
だけど夜はまだ明けてない。
息苦しいほどの静寂の中。
くらい、よるの、やみのなか——

わたしは迷子になってしまった。
夢の途中の狭間の国で、わたしはひとりになってしまった。
自分の感情に追い立てられるように、必死にあたりを見回すわたし。
だれか、なにか、わたしのほかの——

「——桂ちゃん」

これは幻聴。単なる記憶のリフレイン。
でも、あの声がいい。
わたしの夢を途中で止めた、あの声の人に責任をとってもらおう。
たとえどんな人だとしても、あの声の人はわたしを知っている。わたしの名前を知っている。
あの声の人に会おう。あの声の人を探そう。
前も後ろも、右も左も、上と下との区別さえつかない、あやふやな世界をぐるりと見回す。

真っ暗な空に、小さな星がまたたいた。
わたしは近づく。
夏の夜のぬるい空気を搔いて、星を目指してわたしは進む。
またたく——ひらひらと——踊るように——
星ではなく、蝶だった。

月の光を集めたような、青白い蝶が舞っていた。

まるで月の精——

憑かれたように、わたしは手を伸ばす。

触れられなかった。

本物の蝶がそうするように、月光蝶はするりとかわして飛んでいく。
わたしは追いかける。
追いつけない。

だからといって、引き離されもしない。
どれぐらい進んだのか——

はばたくたびに闇に散り、溶けるように消える光が、溶けきる前に何かに当たった。

蝶はそれの周りをくるくると舞う。
青白い光に浮かび上がったのは――

悲しそうな目をした、女の人だった。

「――桂ちゃん」
あの声の人だった。
ああ、この声は、この顔は――

痛みが走った。

「駄目。考えては駄目」
知っている。誰かに似ている。
それはとても懐かしくて、毎朝毎晩見ている、鏡の中の――

桂
「あっ」
目頭を押さえてうずくまる。
どうして、こんな、わたしは、いったい。

気が遠くなるような痛みが、目から頭に抜けるように刺さった。

ずきんずきんと、断続的に――

「桂ちゃん、考えないで。お願いだから」
柔らかな手が、頭を撫でた。
幼い子供をなだめるように、よしよしと、優しくゆっくり。
少し冷たい指先が、痛みを吸い取ってくれているような気がした。

風邪をひいた幼い日の夜、苦しいところを撫でさすってくれた、お母さんの手にも似ていて。
ああ、やっぱりこの人は――

「駄目」
近づいてきた痛みの気配を、言葉ひとつで追い払う。

「ねえ、約束して」

桂

「……約束？」

「わたしの声も、姿も、あの景色も——夜の淵に沈めてしまうと。明日の朝日に溶かしてしまうと」

桂

「それって……忘れろってこと？」

「夢は、ただの夢だから」

夢——

赤い痛みも、頭を撫でる手も、この懐かしさも、すべてを——

布団から出ると忘れてしまう、ずっと今まで見てきたはずの、思い出せない何千もの夢のひとつとくくってしまえと——そう言うのか。

桂

「うん……夢……なんだよね」

「そう。これは夢」

桂

「それなら、うん……」

ただのよくある夢ならば。

どうせ忘れてしまうなら。

それなら今は、聞き分けのいい子になろう。

物心ついてから、ずっとそうしてきたように。

この人には悲しんでほしくないから。

桂

「それなら、忘れる」

わたしはこくりと頷いた。

「いい子ね」

優しい手をしたその人は、微笑んでくれた。

寂しそうに、微笑んだ。

「さようなら、桂ちゃん——」

そう言って、わたしの頭を包むように抱く。

広がる袂には、白く抜かれた蝶の柄。

ふわりと微かな花の香りにも似た――

それはすべてを蕩（とろ）かしてしまおう、甘い眠りへの誘いだった。すでに夢の中だというのに、とろとろとまぶたが重くなる。

うつらと意識を手放す私を――

鈴の音が、邪魔をした。

「――っ」

わたしを抱く腕に力がこもる。

大切に守られているような、とても安心できる、心地よい感触だったけれど。

見上げた彼女の顔には、焦りのようなやりきれない表情。

再び響く鈴の音に、歌うような声がかぶさる。

「無駄よ。もう無駄。今更隠したところで、間に合わなくてよ？」

わたしは首を横に振る。

「桂ちゃん、どうして？」

桂

「だって……」

良くわからない。

だけど、忘れたくはなかった。

たとえ目が覚めると忘れてしまおう、そんな儚い記憶だとしても。

桂

「……忘れたくないものは、忘れたくないんだもん」

自分から忘れてしまおうと約束するのは、何か大切なものを手放してしまうような気がした。

「桂ちゃん、お願いだから聞き分けて」

ぶつぶつと首を振る。

子供のように頭を撫でられているせいか、なんだかわたしは、だだっこだ。

「桂ちゃん」

桂

「嫌」

「ふふっ、うふふっ——」

笑い声。

小ばかにするような、くすくす声で笑われた。

桂

「だっ、誰!？」

鈴の音が、聞こえた。

「そんな……」

見やった彼女の顔には、やるせない表情。

鈴の音に、歌うような声がかぶさる。

「隠されっ子、みい一つけた」

桂

「——!？」

まばたきひとつの間隙をついて、ふっと世界が入れ替わる。

桂

「————」

障子越しに射し込む月明かりのせいで、部屋の闇は蒼く薄まっている。

わかっていたけれど、夢だった。

忘れてほしいと言われた夢を、しっかり記憶に残したまま、わたしは夢から覚めてしまった。

桂

「はあ……」

変な夢だった。

緑の山と、大きな木と、着物姿の女の子。

そして、鈴の——

——音!？」

目覚めたつもりで、これもまだ夢?

ううん、きっと、虫の声を聞き違えただけ。

それとも、まさか。

……怪談話じゃあるまいし。

よせばいいのに、わたしは耳を澄ましてしまう。
ばか。知らなきゃ何にも怖くないのに。

鈴の音。

部屋の外に、何かがいるような気がした。

廊下に人ぐらいいるだろう。ここは旅館だし当たり前。夜中にだってお手洗いに起きたりはする。

そんなの、よくある普通のこと。

だけど、そういった人事に無関心な気配と違い、息を潜めてこちらをうかがっているような――

わたしは別に靈感があるとか、そういう気配に敏感な方じゃないんだけど――

桂

「ううん、気のせい。気のせいだよね」

声に出して、自分に言い聞かせる。

だいたい、寝起きのわたしの感覚なんて、信用できたものじゃない。

洗顔フォームで歯を磨いたことだってあるよ、ううっ……

桂

「だから寝るよ。わたし寝るよ。ホントに寝るんだからね」

もし本当に何かがいっても、放っておいてね。お願いだから。

丸まるように横になると、頭まですっぽり布団をかぶる。

微かに聞こえていた虫の声も、これでシャットアウト。もう何も聞こえないもんね。

ちょっとばかり暑苦しいけど、そのぐらいはがまん、がまん。

羊が一匹、羊が二匹……

……………

桂

「ひいっ!？」

いいいっ、いまっ、な、何か聞こえた？

気のせい、気のせい、気のせいだってば。

……………

……えーと、何匹まで数えてたっけ？

何となく、そんな気がした。

よし、それなら確かめてみよう。

変な音やら気配やら、その何が怖いのかって、よくわからないから怖いんだ。

とりあえず、廊下に出て確かめてみよう。

何もなければ本当に気のせい。それならそれで、安心して寝直しできる。

もし、何かあったとしたら……

あったら……

……あったら、どうしよう？

怖い映画で最初に死んじゃうのって、こうして不用意に首を突っ込む人なんだよね。
……………

桂

「えーい、気合いと根性！」

陽子ちゃんみたいな掛け声をだして、わたしは布団から飛び出した。

抜き足、差し足、忍び足で近づいた入り口でスリッパをつっかけ、そーっとノブをひねる。

鍵がかかっているとわかっているドアでも、そのまま一度開けようとするのは、わたしの癖だ。

ガチャッと手応え。途中から回らなくなる。

これで鍵がかかっていることが確認できたわけだけど、この部屋はちゃんと安全だ。

これなら外に誰がいたとしても、別に気にすることないんだけど——

わたしはゆっくり鍵を外し、音を立てないように慎重を期してドアを開いた。

桂

「ほっ……」

とりあえず、ドアの前には誰もいなかった。

おかげで少し、肩の力が抜けたと思ったら。

桂

「——ひやっ!？」

足音がしたよっ、今っ!？」

でも大丈夫。絶対、人がいるはずだから。

日本の幽霊には脚がないんだから、足音がするからには幽霊じゃない。

わたしオッケー？ 納得した？

納得したところで、こわごわだけれど廊下の確認を急ぐ。

まずは右。

右には誰もいなかった。

それじゃあ左。

——いた。

廊下の奥に、誰かの後ろ姿が見えた。

障子窓のある部屋とは違い、廊下には素通しの月光が射し込んでいた。

わずかに欠けた上弦の月は皓々としており、その青白い光に照らされ——

腰よりも長く伸びた髪と、手にした長い抜き身の刃が闇に浮き上がっていた。

それは夢で見たあの景色と同様に、浮き世離れした不思議な——

——え？ 抜き身の刃？

やっぱりわたしは夢の続きを見ているのだろうか。

時代劇じゃああるまいし、一体どうしてそんな物が。

第一、刃渡り十五センチ以上の刃物は、特別な理由や許可がない限り、持ち歩いちゃいけないことになってるんだよ。日本では。

それともやっぱり時代劇とか好きな人で、あれは模造刀とかなのかしらん。

そうこうしているうちに、その後ろ姿は廊下の突き当たりを曲がり、消えてしまった。

桂

「……………」

桂

「……夢を見るなら、お布団の中じゃないとねー」

それと、寝言は寝てから言わないと。

わたしは部屋に戻って布団に潜った。

——って、烏月さんだよ、あれ。

人違いだと恥ずかしいので、もう一度目を凝らしてみる。

じいっ。

やっぱり間違いなさそうだった。

桂

「……烏月さん？」

おっかなびっくりの小声も、しんとした廊下では思ったよりも良く通った。

そんなわたしの呼びかけに、その人は音を立てずに振り向き応える。

烏月

「その声、桂さんか」

正体を確かめるように、わずかに左の目をすがめてわたしを見ている。

月の光の加減のせいかな、見開かれた右目が蒼く光っているように見えて、わたしはぎよつとしたのだけれど——

次の瞬間には光は消えていて、遠目夜目の環境だけに、瞳自体がよく見えなかった。

わたしはほっと胸を撫で下ろして、普通に話せる距離まで近寄る。

あ、足音けっこう響くかも。

桂

「烏月さん、こんな時間にどうしたの？」

お手洗いではないだろう。お手洗いに行くのに、こんな物騒な——えっと、日本刀？——を持ち歩くなんて、どう考えても変だし。

っていうか、なんでこんなものを持っているんだろう。

もしかしなくても、やっぱり夢の続きなのかな？

鳥月

「ああ、これが気になるのは当然か」

わたしの視線に気が付いたのか、(そりゃあ気付くよね。これだけまじまじと見てたら) 鳥月さんは金色の鞘に刀を収めながら、そう言った。

シャッ、なんて時代劇みたいな鋭い音は立たず、それは静かに鞘に収まる。

鳥月

「これは——維斗は、伏魔の太刀でね」

桂

「ふくま？」

鳥月

「魔を伏せる。すなわち悪鬼の類を降伏する、特別な力を持っている」

桂

「えっと、お守りみたいな？」

鳥月

「……のようなものだね」

微妙に自信はなかったけれど、どうやら大方はあっていたらしい。

確かに柄から鞘まで金色の豪華すぎるそれは、実用というよりお守りっぽい感じがする。ほら、あれだ。五月人形とかが持つてる飾り太刀。

桂

「あ、でも、なんでお守りなんか？」

鳥月

「桂さんは、レイの存在を信じる方かな？」

桂

「えっと、レイって幽霊の霊……だよな？」

手放しでは、ちょっと信じられない。

とはいえ確かに何かの気配を感じて、こうして廊下に出てきたわけで。

桂

「……少しは」

我ながらひよった返事だったけど、鳥月さんには満足いく返事だったらしい。

鳥月

「それなら話が早くて結構。信じる、信じないは好きにしてもらおうとして、私はそういった方面に足を踏み入れている人間でね」

そう言って烏月さんは、短冊状の紙の束を取り出した。
複雑な漢字っぽい文字とか模様が、墨痕（ぼっこん）鮮やかに書き付けられている。

桂

「お札？」

烏月

「魔除けの呪符だ。桂さんに差し上げよう」

桂

「え？ くれるの？」

烏月

「先ほどこのあたりに、そういった気配を感じてね。これを部屋の四隅に貼っておけば、よほどのモノ以外は入ってこない」

烏月

「私がここに来た時には、すでに退散した後だったが——」

烏月

「まあ、用心に越したことはない。持っておくといい」

桂

「あ、ありがとう」

……もしかして、あの夢の中の。

奇妙に鮮明なあの夢も、そういった普通じゃないものが見せたものなんだろうか。

烏月

「では桂さん、安らかな良い眠りを」

桂

「あ、うん、おやすみなさい」

一応、駅員さんに路程を確かめた方がいいかな、とか思ったりもしたけど、下調べもしたし大丈夫。

あんまりグズグズしてると、遅くなっちゃうしね。

桂

「よいしょっ」

重いかばんを持ち直して、わたしは駅の建物を出る。

えーと、バス停は……

供給過多の人工照明に慣れっこのわたしには、閑散とした駅前の景色はやけに暗く見えた。

ショッピングモールなんて贅沢は言わないけど、普通に商店街ぐらいあってもいいと思

う。

単に駅前になんていってだけで、町のどこかにあるとは思うけど。

……うん、あれかな？

丸と四角を棒でつなげた、おでんみたいなシルエットを発見。

家の近所では見かけないけど、マンガなんかで見たことがある、年季の入ったスタイルのバス停標識だと判断。

近づいて確認。

錆びを浮かせた鉄板に、ビニール袋で防水してある（それでも少し字が滲んでいる）時刻表が、ガムテープで張られていた。

ここであってらしい。

どれどれ？

暗いので顔を近づけて。

行き先を確認した後、表にかかかれている時刻を、上からつらつと舐めていく。

桂

「うわー」

びっくりしたっていうか、感心したっていうか。

一時間に一本、あるかないかの便。

それはいい。その程度なら予想範囲。

けどこの、今の時刻から後ろが空欄になってるのって、もしかして――

桂

「もしかして、最終バスがこの時間なのっ!？」

携帯電話を取り出して、正確な時刻を確認してみる。

最終バスの出発は、きっかり三分前だった。

……神様、あんまりです。

こうも巡り合わせが悪いと、人知を超えたところを恨みたくなる。

お正月ぐらいしか拝まない、ちっとも信心深くないわたしだけに、こんなときだけ文句をつけられた義理じゃないんだけど。

やっぱり恨むなら、このダイヤグラムを作った人を恨むのが筋かな？

でも、あの電車を降りてすぐなら、間に合ったかもしれないし……

そうなると自業自得というべきか、のろまなわたしが悪いのか。

それにしても、どうしよう――

――と、そのとき。

強い光の気配を察して、眩まないよう目を細める。

聞こえてくるのは、少しくたびれた、それでも力強いエンジン音。

暗さに慣れた目を射るライトがそれ、停留所の横にワンマンバスがとまる。

独特の音を立てて開くドア。

バス運転手

「ご乗車になりますか？」

運転席から身を乗り出して、運転手さんがそう言った。
でも、もう最終バスは出てるはずなのに……

バス運転手

「もしもし、お客さん？」

桂

「あっ、はいっ！ 乗ります、乗りますっ！」

時間にルーズな田舎のバスは、五分十分遅れる程度はザラなのだと、乗り合わせたお婆さんが教えてくれた。

桂

「次で降りまーす！」

お財布を取り出して運賃の用意をする。お札を崩さないでも、手持ちの小銭で足りそう
だ。

目的地となる停留所は、前後に何も見当たらない、人里離れた田舎道のただなかにあっ
た。

強いて何かがあるとすれば、進行方向左手側が、深い森になっているぐらい。

バス運転手

「本当にここで降りるんですか？」

すでに他のお客さんのいない気安さもあってか、わざわざ尋ねてくれる運転手さん。
わたしは携帯電話に登録した、お父さんの実家の所番地を見せる。

桂

「ここです、ここ。羽様であってますよね？」

バス運転手

「確かに羽様ですね」

桂

「それじゃあ、お世話になりました」

整理券と運賃を料金箱に入れて、降車口の手すりに片手を掛ける。かばん良し、忘れ物
なし。

段差のあるステップを、慎重に一步、二歩。

三步目が踏んだ、土の感触。

舗装されていない本当の田舎道に、わたしは降り立った。

今では誰も使っていない事を示すように、陽と雨風にさらされた標識はボロボロで、時刻表どころか停留所の名前さえ読み取れなくなっていた。

それでもここが廃止されていないのは、潰したところで道順に変化はなく、路線表を修正するのも面倒だった——なんて理由かもしれない。

やがてバスが見えなくなると、本当に明かりは月と星だけになってしまった。

さて……

ここからが本番かもしれない。

聞いた話、お父さんの実家はこの森の中にあるというのだ。

えーと、道はバス停の近くに——

——あった。

ざざざざざざっ。

ぬるい風が吹いて、静かだった森がさざめいた。

——あれ？

呼ばれているような、引き寄せられるような、そんな気がしてわたしは——

深い緑のにおいにふと、我に返る。

いつの間に陰ったのか、月の光の届かぬ闇に、わたしは立ち止まっていた。

……………

これは、怖い。

かなり、怖い。

月は、星は、どこだろう。

探して頭上を仰ぎ見る。

道なりの木々が大きく腕を広げて、アーチを作るように空をふさいでいた。

……どうりで。

税理士さんは「鎮守の森」なんて言ってたけど、そんなありがたいものじゃない気がしてきた。

もしかして、さっき神様を恨んだばち？

いいもん、負けないもん。

わたしはその場でしゃがみ込むと、携帯電話のバックライトを頼りに、かばんの中をゴソゴソ漁る。

桂

「じゃーん、こんなこともあるか」と

取り出したるは懐中電灯。それも単一電池の重さも心強い、大ぶりで明るいやつだ。

陽子ちゃんには「はとちゃん、ぼけぼけしてるから」とか言われたりするけど、これでも下準備は抜かりなくやる方なのだ。わたしは。

予習のノートとか宿題だって、こっちが見せてばかりのような気が——

——じゃなくて。

少し気が楽になったところで、わたしはずんずん進むことにした。

どのくらい歩いたのか、ちょっと距離感がつかめないけど、とにかくしばらく歩いたところで、ようやく森の終わりが見えた。

焦ってるわけじゃないのに、自然と脚は速くなる。
交互に、左右の脚を、せかせかと――

……また？

何だろう、この感覚は。

ああ、これは――

もしかすると、わたしは――

わたしが覚えてないだけで、わたしが忘れてるだけで、わたしはここを見知って――

桂

「んくっ」

寝すぎた朝の寝起きのような、鈍い痛みを微かに覚えた。

桂

「もう、何考えてるんだろ」

ぶるんぶると、頭を振る。

頭の左右で結んだ髪が、遠心力で持ち上がって、横からく一っと引っ張られるような感じ。

その感覚のせいで、微かな痛みと違和感は、どこかにまぎれて消えてしまった。

桂

「……にしても」

森を抜け、開けた空には大きな月。

桂

「はあ……」

口を吐いたのは感嘆の――ではなく。

桂

「ちょっと失敗したっぽいなあ……」

敷地を囲む鬱蒼とした森を背に、青白い月光を浴びた日本家屋の、不気味で静かな佇まいを見てのものだった。

お化け屋敷、もしくは昔話の迷い家――といった雰囲気があった。

桂

「よく考えたら、電気も止まってるんだろうし、それじゃあ夜に来てても意味ないし」
駅の近くに宿をとって、明日の昼間の明るいうちに来れば良かったのかも。浅はかだった。

桂

「でも、仕方ないしなあ……」
とにかく、朝が来るまでバスは来ないし、歩いて戻れる距離でもない。
今夜は覚悟を決めるしかなかった。
大丈夫。わたし、どこでも寝られるもん。
さっさと寝ちゃえば、お化けが出たって知らぬが仏。屋根さえあれば雨露はしのげるし、
そうと決まれば寝床を確保。
わたしはかばんをぎゅっと握って、草ぼうぼうの前庭を進んだ。

桂

「……さて」

アパートの鉄扉に慣れたわたしには、からからと軽い音を立てる引き戸が新鮮だった。

桂

「……？」
黒ずんだ木製の枠に、磨りガラスのはまった、かなり年季の入ったものだ。
それでも掃除が、手入れが行き届いていたのか、からからと軽かった。
おかしいなあ。ずっと人の手なんて入ってないはずなのに——って、待ってよ、待って。

わたしは癖でちょっと手をかけてみただけで、まだ鍵を開けてない。
……………
そっと玄関を覗き込む。

桂

「——ひあっ!？」
すくみ上がった。
思わず、開いてしまう手のひら。

握っていた懐中電灯が落ちて、あらぬところに光を投げ出す。
ドラマや映画の悲鳴なんてやっぱり嘘。十分に息を吸っていないと、大声なんてそう出ないものなのだ。
しかも体が縮こまるから、どちらかといえば吸い込む方の動きになる。

桂

「げほっ、ごほっ」
変にむせた。涙が出た。何かいるのに。こんなのじゃ困る。
逃げなきゃ、逃げなきゃ——

棒立ちになって足が回らない。
だけど足音だけはしっかり。
違う、違う、落ち着いて。これはわたしの足音じゃない。
やっぱり、つまり、何かがいるの？
足音は、もう、すぐそこに――

「尾花一、どーしたのー？」

顔を覗かせたのは、まだ子供とっていいぐらいの……たぶん、女の子。

桂

「え？」

懐中電灯の明かりを横切って、白くて長い生き物が、彼女の足元に駆け寄る。

……猫……かな？

さっき光ってた目もそれなら納得。
そうそう。お化けなんて出るわけないし。

桂

「……あれ？」

何だか急に力が抜けて、わたしはその場にへたり込んだ。

女の子

「大丈夫ですか。おねーさん？ 尾花が何かしたりしました？ 噛み付かれたりしましたか？」

桂

「あ、うん、平気平気。ちょっとびっくりしただけだから」

胸の前で両手をふりふり。愛想笑いを浮かべつつ。

桂

「へえ、その白い子は尾花ちゃんっていうんだ」
これぞまさしく、幽霊の正体見たり枯れ尾花。なんちゃって。

女の子

「……何か面白いことが？」

桂

「なになっ、何でもないよっ、別に何でも」

女の子

「そーですか」

女の子

「それですね、おねーさん」

桂

「うん？」

女の子

「おねーさんは、どなたです？」

桂

「あ、それはわたしも聞きたいかも。ここ、一応、わたしのお父さんの家らしいんだけど……」

女の子

「ちょわーっ！？ 何とっ！？」

女の子

「旅の荷物をまとめたら、すぐにも出て行きますですよ、はいっ！」

お互い自己紹介と事情説明を済ませたところ、若杉葛と名乗った女の子は、しばらく前からここに住み着いていたらしい。

葛

「住居不法侵入に関しては、この通りっ」

葛

「平謝りに謝りますんで、どーか勘弁してくださいっ！ 後生ですから、警察とか裁判所とか保健所の類には通報しないで下さーいっ！」

桂

「あ、うん。別に住んでたことはどうでもいいんだけどね。ずっと放ったらかしだったし、掃除してくれたりしたみたいだし」

葛

「わーい、助かりますー、恩に着ますー」

一応、覚悟はしてたんだけど、埃だらけのところで寝なくてすむのは、やっぱり嬉しい。

桂

「だけどね、葛ちゃんひとりでしょ？」

葛

「そんなことはないですよ？」

葛ちゃんの頭の上で、尾花ちゃんが白い尻尾をふりふり。
そうそう。この子は猫でもフェレットでもなく、狐なんだそう。
尻尾の先だけじゃなくて、頭から全部真っ白なんて、かなり珍しいんじゃないかな？
それはさておき。

桂

「……いや、そうじゃなくてね。保護者がどうのこうのって話なんだけど」
いくら夏休みだからって、葛ちゃんぐらいの年齢の子が、ひとりでいるのはちょっとおかしい。

桂

「ちゃんと家の人とかに許可もらってる？」

葛

「……………」

桂

「どうなの？」

葛

「許可とゆーか、そーゆーものは」

桂

「もうっ」
やっぱり家出、だったらしい。

桂

「葛ちゃん、まだ小さいんだし、お父さんとかお母さん、心配してるよ？」

葛

「……ないですよ」

桂

「え？」

葛

「たはは、桂おねーさんの心配こそご無用ですよ。我が家の家風は弱肉強食ですから」

桂

「ええっ!？」

葛

「それでわたしも、ひとり旅と相成りましてですね。今ではこの通り、道連れもいるわけですが」

桂

「予定はどこまで？」

葛

「未定ですねー」

桂

「予定はいつまで？」

葛

「いつまででしょうねー」

桂

「……………」

絶句。

可愛い子には旅をさせろとは言うけどね、やりすぎだと思っんですよ。わたしは。

葛

「一日二日と経つうちに、だんだん疲れてしまいまして、ついフラフラと見つけた空き家に引き込まれてしまったという次第であります」

もしかして葛ちゃん、千尋の谷に突き落とされてる？ 腕白でも逞しく育つように突き放されてる？

桂

「ぐしっ…………」

葛

「あの一、桂おねーさん？」

いけない、不覚にも涙が。

葛

「それでやっぱり、わたしは追い出されてしまうんですかね？」

桂

「ううん、夏休みの間中いてくれてもいいよ。なんなら、わたしも付き合うよ」

葛

「はい？」

桂

「学校始まるまでの辛抱だもんね。ふたりでなら、きっと強く生きていけるよ」

葛

「……たはははは。お手柔らかにお願いします、大家さん」

桂

「うん、頑張ろうね」

普段ならまだ寝るような時間じゃなかったけど、電気の通っていないこの家では、他にできることはあまりなかった。

幸い、わたしも色々なことがあって疲れていたもので、眠気はすぐにやってきた。電車の中で、あんなに寝ているというのに。

だけど、布団がちゃんと干されて使える状態になっていたのありがたい。葛ちゃんに感謝。

ああ、そういえば葛ちゃん。

わたしは一緒に部屋で構わなかったのに、他の部屋に引っ込んだじゃうんだもん。部屋が余ってるからって、別々にすることないのに……

別にわたし、いびきがうるさかったり、寝相が悪かったりはしない（と思う）んだけど……

……………

緩やかな眠りのやみが、ゆっくりと身体の中を満たしていった。

桂

「——！？」

まばたきひとつの間隙をついて、ふっと世界が入れ替わる。

桂

「————」

わかってはいたけれど、夢だった。

夢とはいえ、本当に走り回ったような疲労感はあるし、心臓はどきどきしてるし、口の中はすっかり乾いてしまっている。

……水、飲もうかな。

部屋の明かりをつけようとして、伸ばした手がすかっと空振りしたことで、ようやく住み慣れたわたしの部屋ではないことに思い至る。

ということは、お台所に行っても無駄か。

冷蔵庫の中はからっぽだろうし、水道だって止まっている。

しまった。葛ちゃんに今までどうやって生活していたか、寝る前に聞いておくべきだった。

桂

「ううっ……がまんするしかないか」

意識した途端、ものすごく喉が渴いてきた。

桂

「あ」

そういえば、電車に乗るときに買ったお茶が、半分ぐらい残っていたはず。
かばんに入れたペットボトルを探そうと、部屋の明かりをつけて——じゃなくて。
今度は空振りする前に気が付き、枕元の懐中電灯のスイッチを入れる。

桂

「……あれ？ 何だろう、これ」

懐中電灯の光に陰影がついて、柱についた傷が浮き上がって見える。

わたしの丁度胸あたり。だいたい小学校に入ったぐらいの子の背の高さまで、何センチか刻みに傷がついている。

柱の傷はおととしの——ああ、これは背比べの跡だ。

お父さんの実家なんだから、お父さんのものかもしれない。

名前、書いてないかな？

桂

「なに……これ……」

名前は——

傷と一緒に書かれていた名前は——

確かめるように、すっかり磨り減っている柱の傷を指先でなぞる。

桂

「ケイ……」

わたしの名前だった。

夢で見たあの景色は、わたしの記憶の再生なのか。

何本もの背比べの跡を残すほど、わたしはここに住んでいたのか。

違う。

それは違う。

違うはず。

お父さんが死んじゃって、お母さんとふたりっきりで暮らし始めたのは、たぶんわたしの背の高さが、いちばん後の傷の頃。

丁度、十年前のこと。

でも、お父さんが死んじゃったのは、家が火事になったからって聞いて——

お父さんのことを全然覚えてないのも、わたしが煙を吸って倒れたからって——

写真ですら顔を知らないのも、アルバムごと全部燃えちゃったからだって——

浮かんだ疑問の行き着く先は、やっぱり疑問でしかなかった。

もしわたしがここに住んでいたなら、どうしてこの家は燃えてないんだろう？

一番簡単な答えは、ここがわたしの家ではなく、ただどちよくちよく——例えば夏休み毎にだとか、訪れるような所だということ。

お父さんの実家なんだから、そうであってもおかしくはない。そしてお父さんが死んじゃったから、疎遠になったとも考えられる。

だけど、違う。

それは、何だか違うような気がする。
この疑問に答えられたはずの、お母さんももういない。
ああ、ここは、わたしは、一体——
そして震える指先が、もうひとりの傷に触れる。
本当に背比べをするように、ほとんど変わらぬ高さに、いつも。

桂

「ハク……カ……？」

夢の中と同じ痛み。

考えるなというサインを、身体が断続的に出す。

桂

「つあっ……はっ……」

駄目。

考えちゃ。

忘れてしまえと、夢の中のあの人も——

でも、だけど、ハクカって誰——

忘れることも、思い出すこともできない。

目のずっと奥がずきずきと、ずきずきと。

夢の中と同じ痛み。

夢の中と——同じ——？

わたしは気付いた。

ああ、そうか。これも夢なんだ。

だから矛盾があってもぜんぜん変じゃない。

燃えているはずの家が燃えていなくても、そういうことも普通にある。

知らない誰かの名前があっても、そういうこともあるんだろう。

難しく考えなくてもいい。

だって、これは夢なんだから。

そう、ただの夢——

桂

「うひゃああああっ!？」

夜のとばりを引き裂くような携帯電話の着信メロディーに、わたしはビクッと身をすくませる。

いったん収まった心臓のばくばくが、また再発してしまった。

こんな時間に一体誰だろう？

いや、着メロ指定してるから、もうわかってはいるんだけどね。

桂

「もしもし、陽子ちゃんっ!？」

陽子

『いやー、やーっとつながったよ』

桂

「……やっとして、遅いよ」

陽子

『あらら、はとちゃんご機嫌斜め?』

桂

「ちょっと」

陽子

『嬉しいなあ、うりゃ。そーんなにあたしの声が聞きたかったなら、はとちゃんがかけてくれれば良かったのに。この、照れ屋さんっ♪』

桂

「……じゃなくてね」

桂

「そりゃあ電源切って寝なかったわたしが悪いんだけど、こんな時間にかけてくるなんてちょっと非常識だよ、陽子ちゃん」

陽子

『あー、もしかしていつものボケ——』

桂

「わたしもちょうど起きてたっぽいってうか、寝てたとしてもあんまりいい夢見てたわ

けじゃないから、別にいいんだけどね」

陽子

『寝てた？ こんな時間に？ 夕方だって寝てたのに？』

桂

「こんな時間なんだから、当たり前だよ」

陽子

『はとちゃん、時計持ってる？』

桂

「携帯あるけど？」

陽子

『見てみそ』

桂

「……………」

なんか、普通に夜だった。

ゴールデンタイムは終わっているけど、電話を自粛するような時間帯には到っていない。

そういえば陽子ちゃん、早寝早起きニワトリ生活がモットーだから、夜中に叩き起こされる心配だけはしなくてもいいんだっけ。

陽子

『こう、電話だと、うりうりーって突っ込めないのが残念でたまらないわ』

桂

「ううっ、ごめん」

陽子

『こう、結んだ尻尾、ぐいぐい引っ張ったりして』

桂

「やめて、やめて。あれ痛いんだから。将来ハゲになったら陽子ちゃんのせいだよ」

陽子

『あっはは、そんなときは責任とっただけよー』

陽子

『……で、もしかしてかなーり疲れてる？』

桂

「疲れてる……かも。すごいところに泊まってるし」

陽子

『駅とか公園のベンチとか？ パパさんの家に辿り着く前に力尽きたとか？』

桂

「ううん、家にはちゃんと着いたんだけどね」

陽子

『ほほう？』

経観塚に着いてからの出来事を、かいつまんで説明した。

陽子

『ふーん、それはけっこう波乱万丈。それでこんな時間から寝てたりしたわけね』

桂

「うん、そうゆうこと」

陽子

『ところで、その葛って子は大丈夫そうなの？』

桂

「大丈夫って何が？」

陽子

『明日になって目が覚めたら、はとちゃんの荷物もってトンズラしてた——とか、そーゆーの』

桂

「大丈夫だよ。悪い子には見えなかったよ？」

陽子

『フッ』

桂

「……陽子ちゃん、その笑いは何？ その『あんたはやっぱり甘ちゃんね』って笑いは何かな？」

陽子

『あんたはやっぱり甘ちゃんね』

桂

「わ、陽子ちゃんってばひねりなし」

陽子

『甘いわね。若いわね。ふたつあわせてスイートベイバー？』

桂

「……そういうふうに疑ってばかりだと、自分も信じてもらえないって、お母さん言ってたよ」

陽子

『うわー、ホントに素直にお育ちなこと』

桂

「気をつけるよ。さすがにわたしも」

陽子

『……………』

桂

「どうしたの？」

陽子

『はとちゃんが、なんか普通っぽいこと言ってる』

桂

「失礼だよ、陽子ちゃん」

陽子

『だってはとちゃん、こういう時は「悪い子には見えなかったよ？」とか言わない？』

桂

「……そりゃあ葛ちゃんは悪い子には見えないけど、それでも陽子ちゃんは心配して言ってくれてるんだよね？」

桂

「だったら、それもいいんじゃないかな、って」

陽子

『はとちゃん、あんたって子は……』

桂

「あはは、でも、わたしが気をつけたところで、全然足しにならないと思うよ」

陽子

『……しまった。言われてみれば』
納得しないでほしかった。

桂

「もう……」

桂

「けどあんまり脅かさないでよね」

陽子

『いやー、夏だし季節だし？ 少しは暑気払いになった？』

桂

「ううっ、そういうのとは系統が違うよ……」

陽子

『そう？ じゃ、脅かすついでにもうひとつ』

桂

「うやっ？」

陽子

『実はこれからが本題なんだけど——』

桂

「……あれ？」

これからの本題は聞こえてこない。

桂

「どうして切れるかなあ、陽子ちゃん」

恨みがましく携帯電話のディスプレイを見る。

一本もアンテナが立ってなかった。

うわー、これじゃつながらないわけだ。

桂

「でもなあ……」

あーゆー前フリしておきながら途中で止められると、すっごく気になる。

ってゆーか、あんなに前フリ長いなら、先に本題を言ってからにしてほしかった。

ぷち、ぷち、ぷち——と。

かけなおしてみたけど、駄目だった。

うんともすんとも言ってくれない。

鳴るのはお腹の虫ばかり。

そういえば、今日は晩ごはん食べてないし。

かばんの中にはお菓子が入ってるんだけど、どうしよう。お茶は飲むつもりだったけど

……

……やっぱり、お茶だけにしよう。

そりゃあお腹は空いてるけど、今日は座りっぱなしで極めてカロリー消費量低いし、やっぱりお休み前の食事って美容に悪いっていうし……ね？

うん、食べるんなら明日の朝にしよう。

わたしはかばんからお茶のペットボトルを取り出して、一口、二口、喉を潤す。

さて、寝よう。寝ちゃえばお腹空いても関係ないし。

懐中電灯を消して……お休みなさい。

……今のは数えてる羊が鳴いたんだよ？

お菓子も食べるよ、お腹空いたし。

ごそごそと、かばんを漁ってお菓子の箱を取り出した。きちんと包装された贈答品の一品だ。

ほんとはご近所さんに配るつもりで持ってきたお菓子なんだけど、周囲数キロメートル以内には人家がなさそうだった。

わたしのご先祖様って、そうとうな偏屈者だったんだろか——と、それはさておき。

うふふっ、それなら大人しくわたしのお腹に収まってもらうよ、十三石まんじゅう。

十三石まんじゅう——それは旅のちりめん問屋のご隠居様が、十三石でお買い上げになったという伝説をもつ、わたしの住んでる地元の銘菓。

慣れない単位と十三なんて微妙にリアルそうな数字に騙されがちだけど、一石が十斗、十斗が百升、百升が千合だから、十三石は一万三千合。

何合っていうのは、普通の家でお米を炊くときに使う単位なわけで、そう考えると一万三千合はかなりすごい。

ちなみにクラスメートのお凜さんが教えてくれたところ、二八そばなら約三千二百五十杯も食べられるのだそう。

三食三度がそば尽くしでオッケーなら、三年近く外食できるという計算になる。

……絶対、誇張入ってる。

わたしは好きだから、別にいいんだけどね。

そうだ、せっかくだから葛ちゃんと食べよう。

もしかしたら葛ちゃんも、ごはん食べてないかもしれないし、何ととっても育ち盛りだし。

そうと決まれば、さっそくお菓子をもって移動。

葛ちゃんがいるのは、えーと。

無意味に広いお屋敷だから、間違えている可能性もあるけど、確かこの部屋。

さすがに寝た子を起こすつもりはないので、声を潜めてふすま越しにうかがう。

桂

「葛ちゃーん、まだ起きてるー？」

葛

「……誰ですか？」

返事はすぐ。

良かった。まだ寝てなかったみたい。

ちょっと緊張したような声音は、ひとり旅とかしてるだけあって、用心深さが身についているせいか。

桂

「わたし、わたし。桂お姉ちゃん」

葛

「桂おねーさん？」

桂

「うん。ちょっと入るよー」

桂

「ううん、こっちこそごめんね」

葛

「かっ、顔を上げてくださーい！ 桂おねーさんは悪くないです！」

葛

「追い出さないで下さっただけで寝るとき足を向けられない大家様万々歳なのに、店子の飼い狐に手をかまれるなんて貧乏くじもいいですよ」

一気呵成に言い切ると、くるりと尾花ちゃんに向き直って、握った拳を振り上げる。

葛

「このばか狐ー！ こんこんちきー！ やるなら鶴亀見習って、ちゃんと恩返ししろー！」

木魚を叩いたような、いい音がした。

葛

「恩を仇で返すなんて畜生にも劣るナントカな悪行だー！ 尾花なんて狐以下のレッサーフォックスだー！ 白いからっていい気になるなー！」

むちゃくちゃ言ってるなあ、葛ちゃん。

桂

「やめて、やめて。びっくりしただけで、そんなに痛いわけじゃないんだから」

葛

「……そーなんですか？」

桂

「うん、平気」

気になるぐらいには痛むけど、泣くほど痛い傷でもない。

にこっと笑ってみせると、葛ちゃんは腕を下ろした。

これで追いかけて終了。

桂

「ごめんね、尾花ちゃん。良く知らない人にあんなことされたら怖いよね」

葛

「……………」

わたしも知らない人に「お菓子あげるから仲良くしようね。なでなでさせてね」とか迫られたら、絶対に身の危険を感じると思う。

桂

「こっちに置いとくから、良かったら食べてね」

座っていた場所から離れたところに置きなおすと、ふさふさ尻尾で頭を撫でていた尾花ちゃんが、動きを止めてわたしを見ていた。

ふと、目があう。

葛

「おねーさん、ホントに大丈夫ですか？」

桂

「大丈夫、大丈夫。こんなの舐めたら治っちゃうよ。ね？」

同意を求めると、尾花ちゃんはとととととと、無言の小走りでわたしに向かってくる。

桂

「えっ？」

目の前まで来ても、止まらなかった。

桂

「えっ？ えっ？ ええっ!？」

止まらずに、ジャンプした。

もしかして、また何かされちゃうの？

思わず目をつぶって、両手で顔をかばった。

——ぼん。

頭をはたかれた。

はたかれたといっても、軽くてのひらに乗せる程度の力加減。挨拶代わりに陽子ちゃんがしてきたりするのと、だいたい同じ。

……なるほど。

葛ちゃんの頭の上には、こういう風にして乗ってるのか。

納得したので一安心。

安心したので目を開ける。

同時に、頭の上で回れ右された。

桂

「うひゃっ!？」

視界の端をかすめて、正面から後ろに回される白いふさふさ。

それに剥き出しの首筋を撫でられて、くすぐったさに首をすくめた。

なのに、かなり不安定な足場なのに、尾花ちゃんは平気な足取りで、頭から肩、肩から二の腕と移動して、最終的には上体をてのひらに収める。

……？

一体、何がしたいんだろう？

桂

「……あれ？ あれ？ あのー？」

先ほど噛み付いたわたしの指を、今度はぺろぺろと舐めていた。

葛

「おねーさん、気に入られたみたいですね」

桂

「この子に？」

葛

「自分から人に近づくことだって滅多にないんですよ」

桂

「へー、そうなんだ」

桂

「あはっ、ちょっとくすぐったいよ」

ぴたっと尾花ちゃんの動きが止まり、わたしの顔をじっと見上げた。

桂

「ありがとう。もう大丈夫だよ」

そう言うと、するっとわたしの手から飛び降りてさっき置いたお饅頭を食べ始めた。

桂

「わ、尾花ちゃんって賢いんだね。わたしの言葉、わかるのかな？」

葛

「そー言えばそーですね。まあその辺は、わたしに似たとゆーことで」

桂

「あはは。それ、自分で言うかなー？」

葛

「言うべきことは言いますよー。謙遜の美德が通じにくい世の中ですから」

葛

「ところでこのお饅頭、美味しいですねえ。ここのところ甘いもの不足だったんで、止めどころに困ってしまいます」

畳の上の箱を見ると、すでに半分消えていた。

桂

「わ……いつの間に……」

葛

「おねーさん、食べないんですか？ 早くしないとなくなっちゃいますよー？」

桂

「わたしまだひとつしか食べてないよー」

葛ちゃんのお父さん、お母さん。あなた方の狙い通り、葛ちゃんは遅く育っています。……ちょっと遅くなりすぎじゃないでしょうか？

桂

「ええーっ！？ もしかしてかまれたっ！？」

痛い、というより驚いた。びっくりした。

いや、驚くのとびっくりするのは同じだってば、少し落ち着け、わたしっ。

葛

「おねーさん、大丈夫ですか？」

桂

「大丈夫かなっ！？」

葛

「訊いてるのわたしですってば。見た感じ、そう深くはなさそうなんですけど？」

桂

「そそそ、そうだね」

葛

「まずは落ち着きましょーよ、おねーさん」
ため息を吐かれた。
何だか情けなくて泣きたくなった。

桂

「ううっ……」

葛

「桂おねーさん？」

桂

「あ、あ、えと、その、ケガは大したことなさそうなんだけど——」

葛

「じゃあ、大丈夫ですね」
皆まで言わせず、キッパリ。

桂

「……そ、そうなの？ なら良かった」

葛

「まあ、当分は」

桂

「……え？」

葛

「ぱくぱく、もしゃもしゃ、もぐもぐ、ごっくん」
葛ちゃんは涼しい顔でお饅頭を食べている。

桂

「当分って？ 何が当分？」

葛

「ほら、病気とかあるじゃないですか」

桂

「ええっ!？」

葛

「自覚症状でるまでに十年かかるらしいですよ。エキノコックスって」
さあっと血の気が引いていくのがわかった。

葛

「おねーさん、顔色悪いですよ？」

桂

「……大丈夫じゃないみたい」

葛

「薬飲みます？」

桂

「お薬なんて持ってるの？」

葛

「まあ、一応、用心で」

桂

「じゃあ、お願い……」

葛

「了解であります。ちょっと待ってて下さいねー」

葛

「えーと、確かこのリュックの中にですねー」

葛

「では、どうぞ」
見慣れたタブレットやカプセルではなく、紙の上に乗った粉薬だった。

桂

「あれ？ これ？」

葛

「ああ、漢方ですよ漢方。四千、いや五千年分の英知が詰まった、良薬口に苦しです」

桂

「苦いの？」

葛

「苦いというより——まあ、美味しいもんじゃないですけど、お子様じゃないんですから」

桂

「……………」

葛

「これさえ飲めば安心ですよ？」

桂

「……うん」

葛

「それじゃあ、ぐぐっといきましょう、ハイ」

受け取った薬包紙を傾けて、さらさらと一気にあおる。

桂

「——！？」

お茶で流し込もうと、ペットボトルに直接口をつけて一気に飲み。

桂

「んっ、んっ、んっ、んっ——」

ただ、慣れないことは急にはできないもので、すぐにタイミングが合わなくなって——

桂

「けほっ、けほっ、けほっ」

思いっきりむせた。もう、かなり涙目。

桂

「ううっ、しょば……まだ味、残ってるよ……」

葛

「おねーさん、大丈夫ですか？」

桂

「何とか……」

口の周りをぬぐいながら答える。

桂

「でも、これで一安心なんだよね？」

葛

「そーですね。顔色も良くなってきてますよ」

桂

「そう？」

葛

「咳き込んだせいもあるかもですけど、そんな感じしませんか？」

桂

「あ、なんかカッカッしてきたかも」

葛

「効いてるみたいですね」

桂

「だね。やれやれだよ……」

これで何とか一安心。だけど尾花ちゃんには、あまり近づかないほうがいいのかな……

自分の尻尾を枕に、部屋の隅っこで丸まっている尾花ちゃんを見る。

睨まれて後じさり。

すっかりわたしは及び腰だった。

葛

「おねーさん、そんなに怖がらなくて大丈夫ですよ」

桂

「そうなの？ でも、また噛まれたらどうしよう？今ので免疫できたりした？」

葛

「大丈夫ですよ。もともと病気もってませんし」

桂

「……え？ 今、なんて？」

葛

「持ってないです、多分。わたしも噛まれたことがありますけど、今のところ平気ですし」

桂

「……じゃあ、さっきのお薬は？」

葛

「偽薬ですけど。塩ですけど」

桂

「ふえ？ 偽？ お塩？ なんで？」

葛

「あ、もしかして血圧高かったりします？ 塩分摂ったらまずいですか？」

桂

「あ、えーと、その……」

葛

「そーそー、でしたら昆布や若布や大豆を食べるといいそーですよ。いやいや、お味噌汁って実に合理的な組み合わせなんですね。昔の人偉いです」

桂

「……そう？」

葛

「にしても劇的な変化でしたよ、桂おねーさん。鰯の頭も信心とはいえますけど、改めてプラセボ効果の有用性を実感したしだいでもあります」

桂

「えーと、それって何かの……実験？」

葛

「まー、一応」

桂

「夏休みの宿題とか？」

葛

「残念ですけど個人的趣味といえますか、単なる性格診断といえますか、おかげで桂おねーさんの人となりバッチリつかめました」

桂

「……どんな？」

葛

「単純」

わたし、こんな年下の子にまでわたしおもちゃにされてる！？
……ショックだった。

葛

「では、口直しに甘いものをどうぞ。きっといつもより甘く感じられると思いますよー」
わたしは葛ちゃんの差し出したお饅頭を受け取ると、口に含んで噛み千切る。

桂

「アイスにお醤油たらすのと一緒だね？」

葛

「そんなことするんですか？」

桂

「……しない？」

葛

「しないんじゃないでしょーか、普通」

……………

いじけたわたしは、無言のままお饅頭を食べつづけた。

桂

「葛ちゃん、お水ちょうだい。わたしのお茶、全部飲んじゃった」

葛

「いいですけど——おねーさん？」

頭の中に鳴り響く警報。

注意するんだ、わたし。

桂

「……何？」

葛

「それで八つ目ですよ？」

桂

「ううっ……」

わたしだって、食べ過ぎかなーって思わないこともないし、改めて体重計には乗りたくないけど。

桂

「いいもん、いいもん、やけ食いだもん」

……負けてたまるか。

力関係の刷り込みは最初一回が肝心だっていうし、ここは勝負のしどころだ。

桂

「尾花ちゃん、めっ」

握った拳を振り上げて威嚇（いかく）する。

どうだ。まいったか。そのふさふさ尻尾を巻いて怖がるといいんだ。

葛

「桂おねーさん」

桂

「……何かな？」

ぎぎっと首だけ回して葛ちゃんを見る。

葛

「もしかして怒ってます？」

桂

「怒ってるよ」

葛

「でもおねーさん。それ、ちっとも怖くないです」

葛ちゃんから向き直って尾花ちゃんを見る。

桂

「……………」

怖い怖くない以前に、こっちを見てなかった。

思いっきり無視？ わたし無視された？

桂

「こら——っ！！」

葛

「うわー、おねーさん今度は本気ですね」

桂

「無視しないでこっち向け——っ！！」

業を煮やしたわたしが、尻尾を引っ張ってやろうと手を伸ばすと「めんどくさいなー」とばかりに振り返って。

別に吠えられたり、毛を逆立てられたり、噛み付かれたりしたわけじゃないんだけど。

桂

「——ひゃっ！？」

ぐらぐらのお鍋に触ってしまったときみたいに、わたしは手を引っ込めていた。

桂

「……………」

一度引っ込めてしまった手のやり場に困った。

桂

「……………」

じっと手を見る。

葛

「……おねーさん、弱すぎです」

桂

「ううっ、ひどいよ……」

葛

「事実ですよ？」

落ち込むわたしなど知らん顔で、尾花ちゃんは尻尾を枕に目を閉じた。

……………

……ねえ、狐って夜行性だったよね？

桂

「こんばんは、葛ちゃん」

葛

「こんばんはです」

葛

「それでおねーさん、こんな時間に何をしにきたんですか？」

桂

「うん、わたしもこんな時間なのかなーって思ってたんだけど、まだそんな時間じゃなかったんだよね」

葛

「ああ、なるほど。おねーさんは時差ボケしてるわけですね」

桂

「え？ 時差って日本にもあったっけ？」

葛

「……ないです。北海道と九州の端っこ同士なら、経度で十五度以上違いますが、東経百三十五度線をもとにした標準時で統一されてます」

葛

「もともと、一八九五年から一九四五年にかけて、中央標準時とは別に西部標準時とかいうのがあったり、時勢によりけりなんですけどね」

桂

「へー、葛ちゃんって物知り……」

葛

「まー、このぐらいは——じゃなくて」

頭の上の尾花ちゃんを、床に下ろす葛ちゃん。
……それはこっちに置いといて？

葛

「この家には時差があるって話です。ずっと放っておかれた家ですから、時の流れが変わっちゃったんですよ」

桂

「それって、昔話に出てくる——」

葛

「——ふふ、迷い家みたいなものですよ」

ちょっと葛ちゃん、その顔怖いよ！？

葛

「住人が神隠しにあっただとか、そーゆー噂もありましてですねー。もー桂おねーさんも、ここから何もなしには出られませんよう？」

桂

「ひええええっ」

葛

「と、いうのは冗談でして。ここ電気通してないですから、慣れると生活スタイル変わるんですよ」

葛

「わたくし葛の今の生活はですね、朝日とともに起きて夜更け前には眠るといってちよーっと大げさなんですけど、昔ながらの完全自然派でして」

桂

「そうなんだ。わたしの友達も、けっこう早寝早起きだけどね」

規則正しい生活を心がけると、のべつ幕なし立て板に水でしゃべれるようになるんだろ
うか。

で、こういう人と話していると、わたしは相づちを打ってるだけでも、話はどんどん進んでいく。

葛

「まあ、桂おねーさんもそのうちそうなりますよ。日が沈んだら本も読めませんし、電池を消費する懐中電灯とかに頼るのも何ですし」

桂

「そうだね」

葛

「それで、何しにきたんですか？」

桂

「え？」

葛

「ですから、こんな時間に一体どうして」

桂

「あ、それはね。葛ちゃんお腹空いてないかなって」

最初に思い立ってからしばらく、お預けされっぱなしのわたしは、もうぺこぺこだった。

桂

「ご近所さんに配るつもりでもってきたお菓子があるから、一緒に食べよう？」

包装紙をペリペリとはがして箱を開け、先陣を切って十二個並んだお菓子の一角を崩す。

桂

「……はむっ」

ううっ、やっぱり美味しいなあ。

桂

「ぱくぱくむぐむぐ」

あっという間にひとつ食べてしまったわたしは、続き二つ目に手を伸ばす。

葛ちゃんは――

まだ食べてなかった。

桂

「ほらほら、遠慮しないでお近づきのしるしってことで」

箱に並んだ十一個のお饅頭に、じっと視線を落としている。

葛

「……………」

桂

「もしかしてお饅頭嫌い？」

葛

「嫌いではなく……」

葛

「……怖い、かもしれないです」

桂

「あはは、『お饅頭と熱いお茶が怖い』とか言っても、今日はこれ以上は出さないよ？」
……？」

あ、そうか、お茶だ。

桂

「ごめんね、葛ちゃん。飲み物ないと辛いよね。でもわたし、これしか持ってないんだけど……」

ハーフサイズのペットボトルの残りは半分ほど。しかも、直接口をつけちゃってるし。

葛

「おかまいなく。水と塩はサバイバルの基本ですから、ちゃんどと備蓄してありますです、はい」

桂

「お水でお饅頭かあ……」

葛

「いえいえ水で十分ですよ。それでは、いただくことにしますね」
さっきわたしが取りかけた、角から二つ目のお饅頭を手にして食べる。

葛

「ほほう、これはけっこういけますねー」

桂

「そりゃあ、うちの地元の銘菓ですから。名物にも美味しいものはあるんだよ——って、あれ？」

わたしも二つ目に手を伸ばすと、お饅頭がふさふさしていた。

桂

「……？」
微妙にこそばゆくて気持ちいい。

葛

「桂おねーさん、それは食べられるけど食べない方がいいですよ」

桂

「ありや？」

浪花ちゃんだった。ふんふんとお饅頭の匂いをかいでいたらしい。

桂

「食べたいのかな？」

わたしに邪魔されてへそを曲げたのか、ふさふさの感触がするっと逃げ出す。
ううっ、もっとうにやうにゃ触りたいかも。

桂

「ねえ、葛ちゃん。この子にお饅頭あげても大丈夫かな？」

葛

「だと思えますよ。何でも食べる雑食性ですし、狐に小豆とも言いますし」

桂

「猫にマタタビと同じ意味だっけ？」

葛

「はいです。お饅頭の中の餡って、小豆でできていますから」

桂

「そういえば『王子の狐』でも、狐に持ってくお見舞いは牡丹餅だったっけ」
それならと、食べかけのものを一口サイズにちぎり、目の前で動かしてみる。

桂

「ほらほら、おいで一。お饅頭だよー」

葛

「あ、でもですね——」
と話し掛けられ、尾花ちゃんから目を離れたその直後。

人差し指が、熱くなった。

桂

「え？」

手から零れるお饅頭。それが畳に落ちる前に、すたんと尾花ちゃんが後ろに跳んで、距離を大きく離して着地。

引っ込めた指先を覆う手に、じわっとした違和感を覚えて視線を落とす。

生命線のしわに溜まるみたいにして、赤い色が広がっていった。

葛

「たは一、やっぱりです。尾花ってかなり人見知りするタイプなんですよ」

葛

「すみません、桂おねーさん」
そこまで聞いて、ようやくズキズキしはじめる指。

桂
「あ、おはようございます」

女将
「おはようございます、羽藤さん。昨夜はよく眠れたかしら？」

桂
「ええ、まあ、その……」

女将
「あらあらあら。何か問題あったかしら？」
口元に手をあてて、小首をかしげるしぐさが可愛らしかったりする。

桂
「あ、その、ちょっと夢見が悪かっただけで……」

女将
「そう？ 昨日はいろいろ大変だったみたいだし、いろいろ疲れてたのね」

桂
「かもしれないです。わたし、どこでも眠れる方なんですけど、旅行の経験ほとんどないんで」

女将
「それじゃあ、大変だったわねえ。こんな不便なところに来るのは」

桂
「ええ、まあ……」

桂
「……ところで女将さん」

女将
「何かしら？」

桂
「この旅館って——」
幽霊が出たりしますか？
——なんて、訊ねていいものなんだろうか。

女将

「？」

……言えない。わたしのような不調法者を快く泊めてくださった女将さんに、そんなこと。

女将

「どうしたの？」

桂

「あはは、今日の朝ごはんは何かなーって」
——というわけで。

桂

「ううっ、やっぱり美味しいよう。日本人の朝はお米とお味噌汁だよ」
わたしは幸せを噛みしめていた。
平日の朝は時間がないとか、支度が面倒だとか、お昼近くまで寝てただとか、色々な事情があってお米を食べる機会が減っていた。
とくに焚きたての白米で朝ごはん。しかも上げ膳ともなると、ここしばらくは絶えてなかった。

アナウンサー

『——経観塚は晴れでしょう』
知った名前が聞こえてきたので、お箸を止めて目を上げる。

テレビのニュース番組だった。

アナウンサー

『今日は日中好天に恵まれます。お出かけになる方は、帽子などを準備をすると良いかもしれませぬ』
こんないち地方の天気にもコメント付きだなんて、ずいぶんとローカルな放送だ。
とりあえず、かばんの中の折り畳み傘の出番はなさそうだった。
いや、出番がないにこしたことはないんだけど。

アナウンサー

『ニュースの時間です』

アナウンサー

『昨夜未明、経観塚郷土資料館に展示されていた鏡が盗難にあいました』

アナウンサー

『この鏡は六三二年に遣唐使によって日本に持ち込まれたという古いもので、当時神職にあった中臣氏に譲渡されたものと記録されています』

へえ、泥棒か……

六三二年っていったら「ナクヨ鶯、平安京」より百五十年以上前だから相当に古い。す

ぐに思いつく範囲で絞ると、大化の改新のちょっと前か。

骨董屋さんに売りに行ったら、相当な値段がつくのかもしれない。

……もしかして、こんな時期に他所から来たわたして、かなり怪しい？

ううん、大丈夫。

こんな鈍臭そうな子が、そんな所に忍び込んで何かを盗めるだなんて、どこの誰が思うものか。

わたしだって思わない。

……それはそれで、悲しいかもしれないけど、やっぱりそれはそれだから。

わたしには関係ないよね？

そう、わたしちゃんと目的があって、この土地に来てるわけだしね。

桂

「よっし！」

今日は昨日の反省をいかして、ごはんを食べたら早めに出発することにしよう。

でも、他所から来たと言えば――

烏月

「桂さん、何か？」

桂

「ううん、何でもない」

烏月さんも、そうなんだよね。

桂

「それより烏月さんこそ難しい顔してるけど、どうかしたの？」

烏月

「いや――私の方も特には」

桂

「そう？」

ふふふ、甘いよ烏月さん。

この桂さんの観察眼は、浮かぬ顔の理由を発見してしまったのであった。

桂

「烏月さーん、もしかして納豆嫌い？」

お膳の上の納豆はいまだ手付かず。

わたしは好きだけど、嫌いな人は臭いだけで鳥肌が立つっていうほどだしね。

あと、上方の人は納豆駄目な人が多いとか。

烏月

「いや——納豆が嫌いなわけではなく」

桂

「ではなく？」

烏月

「少々、物忌みする必要があるね」

烏月

「特に昨夜のようなことがあった以上、私はこの葱を口にするわけにはいかないんだ」

桂

「？」

わたしにはさっぱりだった。

にしても「口にするわけにはいかない」とは、これまた何て大げさな。

桂

「美味しいのに……」

ご飯に納豆の美味しさを放棄するのは、日本に生まれたアドバンテージをみすみす手放しているような気がして、何となく歯がゆい。

桂

「あ、そうだ」

桂

「納豆って、葱の代わりに梅干しで食べても美味しいよ。さっぱり味で夏向きかも」

烏月

「……………」

桂

「美味しいよ？ 本当だよ？」

わたし、一体何を必死になってるんだか。

だいたい正統派の刻み葱で食べているわたしが言ったところで、説得力はどこにあるんだか。

にもかかわらず、烏月さんは(苦笑混じりにだけど)わたしの意見を取り入れてくれた。

烏月

「それほどあなたが言うのなら、ひとつ試してみようじゃないか」

とても器用に、そして優雅に箸先で梅干しを小さくちぎり、納豆小鉢に落として、混ぜる。

全然違うはずなんだけど、それはわたしにお茶を点でている仕草を連想させた。

日本中を探しても、納豆を混ぜる仕草がこれほど絵になる人は、そういないんじゃないだろうか。

鳥月

「……そうしげしげと見なくてもいいだろう」

桂

「あ、ごめんね。食べにくいよね」

三十分近く揺られたバスから降りると、すかっと抜けた青空を透過してきた陽射しが、たっぷりわたしに降り注いだ。

桂

「あつ……」

さっそく滲みはじめの額の汗をぬぐい、吸い込まれそうなほど遠い空から視線を戻す。何もなかった。

目の前にはつらつらと道が続いていて、次の停留所へと走り去っていくバスが小さく見えた。

地面は舗装されていない田舎道。ぬかるんだら歩くのも大変そうで、この暑さを差し引いても、今日は晴れて良かった。

まぶしさに慣れた目でぐるっと見回すと、右手に広がる畑とあぜ道。

後ろには前と同じく、今通ってきたでこぼこ道。

そして左手には蒼々たる深い森。

停留所から少し離れたところに切れ込みが入っていて、車がすれ違えるかどうかの幅で、ずっと奥まで続いている。

お父さんが生まれた家はその先にあるらしい。

桂

「さて、行きますか」

この暑さの中、重い荷物を持ち運んだのなら、すぐにへたり込んでしまうところだけど、荷物を旅館に置いてきている今、とても身軽だ。

軽い足取りで、森の奥へと続く道に足を踏み入れた。

桂

「落ち着けわたし、こわくないこわくない」

自分に言い聞かせるように、つぶやく。

ほら、この音、ぜんぜん小さい。

そもそも幽霊なら音も立てないだろうし、わたしより大きくて強い人なら、音だっけずっと（少なくともわたしが立てる音より）大きいはず。

ということは、つまり――

――ほら、やっぱり。

草の隙間から顔を出して、わたしの姿を覗いているのは、片手で持ち上げられるんじゃないかというぐらい小さな子狐だった。

頭の前から尾の先まで真っ白い、北極にでも住んでいそうな子だ。

それを認識した途端、両足から力が抜けた。

桂

「驚かさないでよね、もうっ」

へなへなへたり込んだわたしは、ちょっと泣きそうだった。

桂

「本当は怖かったんだからねっ」

ぶちぶちと愚痴をこぼすと、その子は後ろ足で立ち上がり、頭を上下に動かしながら、両手を胸の前で揉み合わせた。

桂

「……それ、もしかして謝ってくれてる？」

こくこく。

桂

「……わたしの言葉、わかるの？」

こくこく。

たぶん違うと思うけど、その仕草がとても可愛らしかったので、わたしの機嫌はすぐに直った。

桂

「いいよ、許してあげる」

すると白い子狐は四つんばいに戻って、ふさふさの尻尾を振ったり。

桂

「わ、もしかして本当にわたしの言葉、わかってる？」

ぶいっ。

顔をそむけたりして、今のはちょっと生意気かも――って、あれ？ 本当に？

桂

「ね――」

今度はすこし遠くの方で、さっきとよく似た音がした。

大丈夫。今のわたしは落ち着いている。

この子の家族か友達かな？
それにしてもちょっと音が大きいような？
人語を解するか追求はひとまず置いておいて、お尻をついた姿勢から、首を伸ばして様子をうかがう。

桂
「——！？」

人間の、それも小学生ぐらいの小さな子が、森の中へと入っていくのが見えた。

桂
「わ、ちょっと待って！ 危ないよ！？」
わたしが来た道とは違う、獣道すらなさそうな木と木の隙間を縫うように走る。
その背中がすっかり隠れてしまうほどのリュックサックを背負っているのに、驚くほど速い。
少なくとも、わたしより絶対に速い。

桂
「ねえ、待ってよ！ わたしは何もしないから、怖がらなくてもいいんだよ！？」

止める声に振り向きもせず、奥へ奥へと入って行く。
……すぐに見えなくなってしまった。

桂
「わたしの声って、逃げなきゃって思うほど怖く聞こえるのかな？」

愚痴とかぼやきをこぼすと、聞いてくれるはずの子狐は、すっかり姿を消していて。
……………

桂
「……わたし、化かされてる？」
そんな気分になってしまった。
ええいっ、笑ってる場合じゃないって！
……あれ？ これって、こういう場合の笑うにも適用されるのかな？
とか何とか。ばかなことを考えていたら、本当に少しだけけど心が落ち着いた。
よしっ。

今回の旅の目的、お父さんの実家はもう十分に見た。
中には入っていないけど、それで十分。こんなに古い建物なんだし、住むとしたらきつと手を入れるのだけで大変なことに。
交通の便も悪いし、別荘にだってなりそうにない。いや、別荘がもてるほど余裕のある立場じゃないんだけどね。
とにかく、今後このお屋敷をどうするかを吟味する材料は十分にそろったわけで——

桂

「逃げろ——っ！」

回れ右して緑のトンネルへと走る。

取り合えず森を抜けてバス停に出よう。

それから道なりに走れば、どっちに向かってもメリットはある。どちらかと言えば、来るバスを迎えに行く方がいいのかなっ。

停留所以外でも、手を振れば停まってくれそうな土地柄だし、途中で畑仕事に精を出している人とかを見つけたら、もう安心だ。

セーラーカラーをひるがえして、走る、走る、走る、走る。

スカートの裾もばさばさ乱して、力の限り走る、走る、全力疾走。

ううっ、ローファーもそうだけど、ミニスカートだって走るのに向いてないよう。

でもでも、一応は身軽な格好で良かった。

昨日の夜に大荷物状態のまま来ていたら、こうして走るどころじゃなかったはず。

しかも昼間じゃなかったら、大転倒の危険は倍増し以上の高確率。まさにわたし絶体絶命。

それに比べれば、この暑さの中を走るのなんてへのかっぱ。頭のお皿が乾いても、死にさえしなければ大丈夫——

桂

「あっ!？」

——でもなかった。

運動不足のこの身体では、必死になっても森の入り口までしか持たず、直射日光の下に出た途端、足がもつれて倒れこんでしまい——

見事に転げる一回転。

背中から地面に叩きつけられる。

桂

「——っ!!」

肺はぺしゃんこに潰れて、それなのに膨らませるための空気が吸えなくて。

苦しい。

苦しい。

くらくらと揺さぶられた頭が、目に映っているのが空だと認識できたところで、呼吸が再開する。

桂

「はあっ、はあっ、ぜい、ぜい、ぜい、はあっ、ぜい、はあっ」
あお向けに寝転んだまま、荒い呼吸で空気をむさぼる。

苦しい。痛い。ついでに、

桂

「……暑い……」
ばかみたいに晴れた空から落ちてくる太陽光が、何だかとても恨めしい。
ううっ、どうしてわたしがこんな目にあわなくちゃいけないんだろう。

ようやく収まってきた呼吸に、のろのろと立ち上がり、打った手足やあちこちを見る。

桂

「……………」
信じられないことに、特に大きな傷はない模様。荒いヤスリのようなアスファルトなら、見るに耐えない擦り傷をこしらえていたところだ。
それにこの上天気は気に食わないけど、おかげで地面が乾いていて、叩けば目立たなくなる程度にしか汚れなかったことも不幸中の幸いか。

桂

「……はあ」
いや、やっぱり不幸は不幸なわけだし——と、悠長にため息なんて吐いてる場合じゃなかったんだっけ、わたし。

はっしと身構えて森を見る。
目を凝らす。
人影はなし。

……………

ただただ聞こえる蝉時雨。

安心するにはしたけど、ついでにものすごく腹立たしくて、情けなくて、やるせない。

桂

「ううっ、もうやだ……」

再び取って返して、家の中まで見る気はとうに失せている。もうあれで十分だ。
ということで、わたしはこのまま帰りのバスを待つつもりなんだけど、そのバスはどれほどしたら来るのやら。
時刻表はすっかり読み取り不可。それどころか停留所の名前すら、錆に埋もれて判別不

能だった。

一見さんは、バスが停まってくれるとは思わないかもしれない。

桂

「はあ……」

もはやため息しか出なかった。

この気持ち、誰かにおすそ分けしてあげたい。

とはいえ、あたりに人はおらず。

……………

だがしかし、わたしの手には携帯電話という文明の利器が握られていたのであった。

登録済みのアドレスから選んでダイヤル。

桂

「わ……」

鎮守の森と称されているのが、わかったような気がした。

たった一步で世界が違って見えた。

頬を撫でる風が、涼気を含んで清々しい。

深呼吸しながら仰ぎ見ると、道なりに並んだせいの高い木々が伸びやかに腕を広げ、空一面に緑の木の葉を敷き詰めていた。

風にかき乱されるたびに隙間を透かした陽が降りてきて、白や黄色や薄緑の光の乱舞は万華鏡さながら、刻々と変幻自在の様子を見せる。

わたしはしばし声もなく、その映像に見入って——

——もしくは魅入られていたのか。

あまりに上ばかり見ていたので、二歩、三歩と後ろによろけて、その領地から外れてしまう。

桂

「痛っ……」

カッと照りつく太陽をまともに瞳に入れてしまい、両手で目をかばいながら顔を伏せた。

桂

「……暑いし……」

目の奥を刺した痛みが和らぐと、肌を灼く陽射しから逃げるように、わたしは再び森へ入った。

今度は立ち止まらずに前を見て進む。

緑のアーケードはずっと先まで続いていた。

あまりにも雰囲気があるので、不思議の国にでも辿り着きそうな気さえして——

そんな中を進んでいると、やがて距離感もおぼつかなくなり、道の終わりが見えたのは一体どれぐらい歩いてからだろう。

森の切れ目から、白い光が射し込んでいる。
まるでトンネルの出口のよう。
そして、境の長いトンネルを抜けると――

わたしは呆然と立ちすくんだ。

桂

「え……なに、これ……」

今度は目を痛めないよう、細くしかめていたにもかかわらず、目の奥の奥、頭の中の中に――

これは、昨日の、夢の痛みだ。
電車の中と昨日の夜。この土地に近づくようになって二度も続けて見た夢の――

綺麗さに意識を奪われて気付かなかったけれど、森の様子からして夢の景色の写しだったのだ。

桂

「はっ……」

詰まる胸から無理矢理息を吐き出し、目を固く閉じてかぶりを振る。

気のせい。

気のせい。

気のせいだ。
記憶をほじくり返そうとすると、痛みはひどくなる。
だからこうして、この既視感は気のせいだと言い聞かせれば――

――どこからか聞こえる蝉時雨。
ああ、静寂をもって良しとする鎮守の森にも、当たり前だけど生き物がいて。
何てことはない。ここも普通の森なんだと。
大きく息を吸い込んで、心を決めて目を開ける。

……………

今度は大丈夫。何も起こらなかった。

桂

「はぁ～」

安堵の息をつくと同時に、ようやく周りを見渡すだけの余裕ができた。
まず、家は平屋で相当に古い。
古い上に敷地は広く、離れには蔵のような建物さえ見える。

門や垣根はないものの、この森自体がそういった役割を果たしているのか、家の周りだけがドーナツの真ん中のように、ぽっかりと開けている。

生え放題の草花にすっかり野原となっている庭さえ大目に見れば、これはお金持ちの住むお屋敷だった。

黒瓦はすっかり苔生していて、家までが周りの自然の一部となってしまうような風格さえある。

桂

「すご……」

お父さんの家というのはお金持ちだったのか、由緒正しい旧家だったのか。とにかくこれはもう、わたしの予想を超えている。

そういえば、このあたりの大字は羽様っていったけど、これってもしかして「羽藤様」とかから来てたりする？

わたしはドキドキしながら、森の出口から玄関先まで点々と続く、飛び石伝いに家へと近づく。

ビョコビョコと石から石へ跳んでいくと、小さい頃にやった「けんけんぱ」を思い出して（ただし「ぱ」の石はない）気持ちが弾んでくる。

桂

「よっと。けーん、けーん——」

桂

「——！？」

風が草を揺らすよりも重い、踏みしだくようなそんな音に、わたしは驚いて動きを止めた。

桂

「だ、誰かいるの？」

返事の代わりに、草ずれの音。

桂

「ねえってば」

ふと、怖いことを思い出してしまった。

昨夜はあの夢を見たあとに、やっぱり人の気配を感じたわけで、わたしはさっき夢の中の風景をこの場所に《視》たわけで……

耳を澄まして気配を探る。

お化けだったら、どうしよう。

そんな不可思議なものじゃなくても、怖い人なんか住み着いていたらどうしよう。

例えばこんな所で悲鳴を上げて、誰かに届く可能性はひたすらゼロに近そう。

一生懸命逃げたとしても、短距離・長距離押しなべてクラス平均半歩届かざるわたしの足では、きっと追いつかれてしまうだろう。

そうでなくても、次のバスがくる時間にドンピシャならともかく、どこに逃げ込めばいいんだか。

桂

「……………」

どうしよう。

そういえば、この町の郷土資料館に泥棒が入ったとか——って、全然関係ないかもしれないけど、ここって身を潜めるには丁度良さそうだし。

どうしよう、どうしよう——

何だか頭の中がぐるぐる回って、何も考えられそうにない。

近づいてくる。

音はこちらに近づいてくる。

逃げようにも足から力が抜けて——いや、入りすぎているのか、ガクガクと笑ってきた。

桂

「もしもし！？ 陽子ちゃん！？」

陽子

『はい、はとちゃん。元気そうだね』

桂

「ううっ、わたしちっとも元気じゃないよっ！」

陽子

『そっかな？』

桂

「だよっ！」

陽子

『ふーん、そのわりには真っ昼間っからテンション高いじゃない。どしたの？』

桂

「それがね、もうっ、聞いてよっ」

桂

「——なわけ」

旅館には幽霊が出るし、変な夢は見るし、家は田舎のさらに僻地だし、走ったら転ぶし、暑いのにバスは来ないし。

わたしは昨夜からのことを、かいつまんで話した。

ってゆーか愚痴の大打進。

おかげでね、そりゃあ少しは落ち着いたわけだけど……
……………

……ううっ、陽子ちゃんごめん。

こんな昼の最中から、一方的な電話で愚痴を聞かせるなんて、少し冷えた頭で顧みるに、
とんでもなく迷惑なことをしたと反省。省みろわたし。

ところが陽子ちゃんときたら。

陽子

『いやー、そりゃあ大変だったわねー』
かなり楽しそうだった。

まあ「人の不幸は蜜の味」とも言ったりするし……まあ、いいけどね。

桂

「大変、今も続行中」

陽子

『なるほど、なるほど。では、はとちゃん』

桂

「何？」

陽子

『とりあえず、そっち行った目的の「パパさんの実家見る」ってのはもう満足？』

桂

「もうお腹一杯。当分見たくないよ」

陽子

『ならミッションコンプリート。さっさとこっちに帰ってきなよ』

桂

「うん、もう帰ろうかな」

陽子

『いつ？』

桂

「んー、今からならまだギリギリ間に合うかも。そっちに着くの、ほとんど夜中になっちゃうけど」

陽子

『どーせ夜も夜中も変わらないでしょ。だったらそうしなよ』

桂

「そうだね。旅館に戻ってお風呂入ったら、電車に乗ってそっちに戻るよ」

陽子

『良かった、良かった。あたし明日も暇あるし、はとちゃんだって、予定は空だし』

桂

「……はい？」

陽子

『昨日さ、「明日は遊びに行く予定ー」とかなんとか言ったけど、何かテンション上がんなくて、結局、部屋でゴロゴロしてたりするわけよ』

桂

「……………」

陽子

『というわけで、はとちゃん明日予約ね。約束通りデザート付きで昼おごるから』

桂

「……………」

陽子

『おーい、はとちゃん？』
そういえば、お腹空いたなあ……

桂

「……………」

陽子

『はとちゃん？』

桂

「ごめん、陽子ちゃん。せっかくだからもう少しこっちにいるよ」

陽子

『そう？』

桂

「うん、何となく……」

桂

「色々——思い出しそうな感じだし」
思い出そうともしなかったことを、何を今更。
思い出したところで、今が変わるわけじゃないのに。
でも、それでも——

桂

「……あ」

陽子

『どうしたの?』

陽子

『バス、来たみたいね』

桂

「うん」

桂

「お昼とデザートって、バリューセットとアップルパイとか?」

陽子

「お互いバイトもしてない学生なんだから、妥当なところでしょ?」

ここはハッキンビーフハンバーガー。

テレビのCMソング通り「わたしの町にももちろんあるし、あなたの町にもあるかもしれない♪」全国チェーンのファーストフード。

夏休み中じゃなくっても、放課後になると学生がたむろしてたりするお店。

ちなみにそろってアルバイトをしていないのは、学校が厳しかったりするからで、勤労意欲がないわけじゃない。

で、以上を踏まえれば確かに身分相応だけど、「フンパツする」とまで言った建前、わたしの希望も少しは汲んで欲しいのだ。

臨時収入もあったって言ってたし。

桂

「わたし和食派」

陽子

「そりゃ、知ってるけどね」

桂

「パンよりお米。お肉よりお魚」

陽子

「じゃあバリューやめ。バラで注文、ライスバーガーとフィッシュアンドチップス」

桂

「……………」

陽子

「ほらほら、焼きおにぎりに鱈とじゃがいもの天ぷら。ドリンクが烏龍茶だけど、期間限定シェイクは抹茶だから、かなりの高和食度って感じ？」

……別に高級懐石でもてなせとか、無理いってるわけじゃないのに。

わたしとしては回るお寿司なら上等。なんならどこぞの日替わり定食（税込み四百五十円）でも十分だって言うのに。

桂

「そんなのエセだよ、ニセモノだよ。陽子ちゃんに騙されてぬか喜びしちやったよ」

陽子

「じゃ、適当に買ってくるから席取りよろしくー。あたしはステーキバーガーセットにしよーっと」

わたしの文句なんてそ知らぬ顔。ひらひら手をふって、元気な笑顔のお姉さんが待ち受ける注文カウンターに向かっていった。

桂

「はあ……」

ひとり、店内を見回す。

ぜんぜん人がいない所に行っていたので、それほどでもないんだけど、とても混雑して見えた。

桂

「席、探さなきゃ」

桂

「ふにゃら～」

陽子

「こらー、寝るなー」

桂

「だって、旅の疲れが抜けてないんだよ？ 一泊二日の最終日に山登りまでした挙げ句、家に着いたの日付変更直前だよ？」

だからお米じゃないと力が出ないのに、と心の中で文句をぶちぶち。

ギリギリまでお布団で粘っていたので、これが朝ごはんも兼用なのだ。

陽子

「それは大した強行軍。いいわねー、若さって」

桂

「わたしの方が、誕生日先だもん」

陽子

「フッ、年上を気取るなら、たかろう精神はどこかにしまってからにすることね。お姉さま」

桂

「ううっ……」

だけど、こうやって陽子ちゃんと話していると戻ってきたんだなあって気がする。

たったの一泊二日で、その間も電話でしゃべっているにもかかわらず、何だか普通でほっとする。

陽子

「ほーらっ、冷めないうちに食べないと。こんなご飯にも八十八人の神様が宿ってるんでしょ？」

桂

「ううっ……いただきます」

両手をあわせてから、ライスバーガーの包みに手を伸ばす。

桂

「わ、ウニライスバーガー」

陽子

「そーよ、フンパツしたんだから。バラメニューだと高くつくし」

桂

「ファーストフードって、手軽で早いのは確かだけど、特定のメニュー以外はあんまり安くならないんだよね」

陽子

「そうそう」

そういいながら陽子ちゃん、ハッキンビーフ名物のステーキバーガーにかぶりつく。

分厚く切ってローストした牛肉は、歯が悪い人には不評なんだけど、陽子ちゃんは大丈夫そう。

ステーキだけにお値段もちよっと高め。

桂

「……もしかして陽子ちゃん」

陽子

「何？」

桂

「その辺の割烹屋さんで、お昼食べられるぐらいいった？」

陽子

「いったいった。うな重の上ぐらい？」

桂

「……………」

ユニバーガーは、美味しくないわけじゃないけど。

桂

「……もしかして嫌がらせ？」

陽子

「まさか。こういう雰囲気のところの方が、話が重くならなくていいかなって」

桂

「話？」

陽子

「はとちゃん、正直なところ大丈夫？」

桂

「何が？」

陽子

「生活とか、夏休み終わったらちゃんと学校来るのかとか」

桂

「わ、失礼な。今までだってちゃんと自分で起きてたよ。そりゃあ、お弁当はお母さんに作ってもらってたけど」

陽子

「そーゆー意味じゃなくってね——」

ユニライスバーガーを食べ終えて、次の包みに手を伸ばしたわたしを見て、呆れたように。

陽子

「って、その調子なら大丈夫みたいね」

……うん、陽子ちゃんが心配してくれてるのはちゃんとわかってるよ。

順当に進めば、わたしが大学を出るぐらいまで、ちゃんとやっていけるだけのお金はあ

るみたいだし、大丈夫。

桂

「ありがとうね」

陽子

「そう？」

桂

「……………」

陽子

「……………」

桂

「……で。何これ」

陽子

「スイカライスバーガー。一応、今日の当たり」

桂

「……………」

陽子

「ちなみにそれ、デザート兼用ね」

桂

「……わたし、帰ってこない方が良かったのかな」

陽子

「んなことないない。はとちゃんがいなかったら、あたしは誰に宿題見せてもらえばいいの？」

桂

「お凜さんは？」

陽子

「駄目駄目。お凜はヤワイ見かけによらず腹黒いから。借りをつくると高くつく」

桂

「そんなことないと思うけど……あ、宿題やらなきゃ」

陽子

「はとちゃんもまだ？」

桂

「うん、ぜんぜん」

この夏——

わたしは今までで一番泣いて。
とてもあわただしい旅をして。
日常に追われる生活に戻った。

——桂ちゃん——

しばらくは不思議な夢を見たりもしたけど。

夏の花が散り行くように、その夢もまた——

——そう、すべては消え行く槐安の夢——

ふと、わたしは特別な夏が終わったことに気付いた。

陽子

『ねっ、宿題終わったっ！？』

桂

「何とかねー。お凜さんにも助けてもらったし」

陽子

『よしっ！ なら明日の朝イチで、泊まり覚悟ではとちゃんち行くから！』

桂

「そんなに残ってるの？」

陽子

『大丈夫、大丈夫。始業式まであと二十四時間以上あるし、何とかなるって』

流れそうなほどの汗に気付くと、炎天下にしゃがみこんでいるのが、ばかみたいに思えてきた。

わたしは立ち上がると、お尻についた土をぱんぱんと払った。ハンカチを出して額をぬぐう。

よしっ、人生前向きが一番。

今のがお化け狐だったりしたら、もう家にいた怖いものはいなくなってしまうわけだ。
後は安心して、お父さんの家を見ることができる。

桂

「あ……」

玄関の引き戸に手をかけると、大して力を入れるまでもなく、それは軽い音を立てて開いた。

鍵が開いていたのは、前に見に来た管理の人が閉め忘れたのか、誰か——例えばさっき森に逃げていった子とか——が開けてしまったのか。

まあ、それはいい。

いいけど、頑張ってもなかなか開かない立て付けの悪さを予想してただけに、何だか拍子抜けしてしまった。

桂

「……おじゃまします」

一步、二歩、三和土に足を踏み入れる。

桂

「わ、意外と綺麗かも」

少なくともぱっと見、土足で踏み入ったような跡や、どっさり積もる埃、張り巡らされた蜘蛛の巣など、立ち入る気を削ぐ要素はなかった。

上がってすぐの部屋の畳も、すっかり古びているもののカラリと乾いているようで、足を乗せた途端に沈む——なんてことはまずなさそう。

鼻をひくつかせても不快な臭いはなかったので、上がりかまちに腰をかけて靴を脱いだ。

ぐるりと一通り見てまわる。

改めて、とても広かった。

わたしが小さい子供なら、走りだしたくなるほど広い。

鬼ごっこ。

隠れ鬼。

家の中だけで十分に遊べそう。

桂

「はあ～～～」

ため息を吐くほど広くて——懐かしい感じのする家だった。

えっ、ちょっと待ってよ。なんで懐かしいの？

やっぱりわたしはこの家に来たことがある？

それとも写真か何かで見たことがある？

いや、それはない。

ないはずだ。

写真は全部、焼けてしまった。

十年前、わたしの家は火事になって、写真も、お父さんも、わたしが覚えていた色々なことも、何もかも——

みんな焼けてなくなってしまうから。

……………

……わからない。

やってくる痛みの気配を感じて、わたしは思考にブレーキをかける。
そうだった。考えちゃ駄目だったんだ。
だけど、だけど——
駄目だよ。また頭が痛くなる。こんな所で倒れても、誰も助けてくれないんだから。
だけど、だけど、だけどわたしは——
お母さんだってもういないんだから、わたしはひとりなんだから。
だから、せめて、家族の思い出だけでも取り戻せるなら——

桂

「——えっ!？」

聞こえるはずのない音が、耳に。

大きく息を呑みながら、見回して。
何てことはない適当な広さの和室。
古びて黒ずんだ柱。
視線を上げる。
鴨居の高さには縦長の柱時計。
揺れている。
振り子が揺れている。
催眠術師がそうするように、右に左に同じ速さで。
右、左——
右、左、右、左——
右、左、右、左、右、左、右、左——
視線は吸い寄せられたまま、そらすことも瞬きすることもできずに——

何かがかみあう音がした。
何かがはまった音がした。
時計はただの時計に戻り、振り子は単なる振り子でしかなく、わたしはようやく目をし
ばたたかせる。
やっと普通に返ってくれた。
だけど違和感が少しだけ。
人の気配に振り返ると、その原因がわかった。
それはとても幸せそうな、どこにでもある団欒の風景。

そして一瞬の白昼夢。
だけどわたしを混乱させるには十分で。

ぐらり——
世界が揺らいで白くぼやける。

ぐらり——
急に足場が頼りなくなる、不安定さからくる不安感。

ぐらり——

とても立ってはいられなくなり、時計の柱に手を伸ばす。

ぐらり——

間一髪、ずるずると滑り落ちるようにしてわたしは膝をついた。

桂

「……はあ」

目を閉じて一息吐く。

もう振り子の音は聞こえない。

時刻を示す二つの針は、明け方あるいは夕方の、薄明の時間帯を指したまま止まっていた。

桂の母

「ほらほら、そんなに急がなくても」

まだ若いお母さんが笑っていた。

とても元気そうで、見ているわたしも嬉しくなり、ついつい声をかけたくなった。

そしてお母さんの手を引っ張っているのは——

小さい子

「おかあさん、遅いよ。早く早くっ」

そうだ、記憶にある最初のわたしは、あんな風に髪の毛を短くしていたんだっけ。

ああ、わたしはこの頃からお母さんっ子だったんだ。

大人の男性

「まったく、お前はいつもそれだ。そんなに急がなくても大丈夫だぞ」

あの男の人は——お父さん？

写真でも見たことがないお父さんの笑顔は、とても優しくそうだった。

そして、そして——

わたしの名前を呼んでいるのは、お父さんでもお母さんでもなく——

優しい少女

「どうしたの、桂ちゃん？」

この声を、わたしは知っている。

優しい少女

「ほら、いらっしやい」

今いる意識のわたしを見て、あの人が微笑んだ。

あ——

わたしの声は声にならない。

言いたいことがあるのに。
聞きたいことがあるのに。
もどかしさばかりが募る静止した一瞬を――

小さい子

「ねえっ、早くってば！」
小さいわたしの声が破った。
少し笑顔を困らせて、それでも楽しそうにその人は、今のわたしから小さいわたしへ顔を――

離れてしまう。

また昨夜の夢のように遠くに。

声を出せないわたしは、一生懸命に手を伸ばす。
待って。
待って、待って――
丸みを帯びた幼い手が、その人の服の裾をつかんだ。

それはとても幸せそうな、どこにでもある家族の肖像。

そして一瞬の白昼夢。
だけどわたしを混乱させるには十分で。

ぐらり――
世界が揺らいで白くぼやける。

ずきん――
そして襲ってくる、あの赤い。

ずきん――
あかい、あかい、まっかな痛み。
ぐらり――

なだれ込んでくる痛みと眩暈にとっても立ってはいられなくなり、時計の柱にすがるようにして、危険な形で倒れ込むのだけは防ごうとする。

あれ――？

こんなときにもかかわらず、指が柱の表面についた不自然な凹凸の存在を探り当てた。
まっすぐ立ったときのわたしの胸のあたりから下に向かって、彫刻刀でつけたような傷が数センチ刻みで続いている。

水平に引かれた目盛りのような傷と、指先だけの感覚では判別できないのだけれど、複数の組み合わせからなる、おそらくは文字らしい傷。

その引っかかりが気になって、わたしはいまだ座り込めないままだった。

桂

「なに……これ……」

真白にゆらぐ意識のまま、ぼんやりとした目で傷を読む。

ハクカ

ケイ

ハクカ

ケイ

ハクカ

ケイ

ハクカ

ケイ

目盛りの脇にはふたつの名前が繰り返し、どんぐりの背比べ状態で——

——喩えじゃなくて、本当に背比べの傷だ。

そしてさっきのあれが捏造ではなく、焼けてしまったはずのわたしの記憶の燃え残しならば、刻まれている片方はわたしの名前に間違いなく。

ケイ、桂、羽藤桂。

それはわかる。住んでいた家ではないにしても、ここはお父さんの実家なんだから。

でも、それなら、もう片方は？

桂

「ハク……カ……？」

つぶやいた途端の痛みに、わたしは膝を折り、畳に突っ伏した。

誰？ 誰なの？ ハクカって誰？

痛い。痛い。わたしがここ数日の夢について考えるたびに、赤い痛みが襲ってくる。

駄目。

考えちゃ。

忘れてしまえと、夢の中のあの人も——

考えなければ、痛みは嘘のように消えて——

なのに。

なのにわたしは、思い出したいと思ってしまった。

ハクカって誰だろう。

夢の中のあの人やお父さんと同じで、忘れちゃいけない人のはず。

もしかして、あの人がハクカさん？

わからない。

思い出せない。

もう一度記憶を再生することができれば、知ることができるかもしれない。

でも、こうやって思い出そうとしても——

何も思い出せない。

ただ、痛みだけが。

桂

「はあ、はあ、はあ……」

わたしは荒い息で、体内の痛みを少しでも吐き出そうとする。

駄目。そんなのじゃ間に合わない。

心臓が大きく鳴るたびに、痛みは頭にやってくる。

桂

「駄目……出ないと……」

気が付くとわたしは、ふらふらとした足取りで山道を登っていた。

しまった。家の戸締まりって、ちゃんとやってきたっけ？

考えてから、それどころじゃないと思い直す。大体、どうしてわたしは山登りなんてしているんだか。

よくある回答——これもまた夢。

最近わたしは夢を見る。それも明晰夢と言うんだっか、そういう自覚があるものを見る。

夢なら前後の脈絡なんてお構いなしで、オチは目覚めてつけばいい。

桂

「桂さん、そいつぁ牛蒡の疲れが原因だよ。昨夜天ぷら食べただろう？」

桂

「おいおい、それを言うなら五臓だろうに」

桂

「へい、お後がよろしいようで——と、それは置いといて」

……あれ？

桂

「もしかして、夢じゃない？」

今までのパターンだと、こういうときわたしは自分で思った通りにしゃべったり動いたりすることができない。

映画でも見ているように、外から見ている感じが主だった。

はて、これは現（うつつ）か新たなパターンか。

出し抜けにほっぺたを掴ってみた。

桂

「いひゃひゃひゃ……」

ということは、夢ではなさそう——

桂

「待って、待って。夢の中でも痛いことって、結構一杯あったよね？」

よってこの古典的手法では判別不能。

ううっ、このほっぺたはまったくの抓られ損か。よしよし可哀相に。

少しヒリヒリする頬をさすりながら、今更ながらに立ち止まる。

ぐるり見回した感想は、よくもまあこんな道なき道を、迷いもせず歩いてきたものだと。
もしかしたら迷っているのかもしれないけれど。

……………

……夢じゃなかったら大変だ。

とはいえ、何もしないで事態が好転するはずもなく、まったく覚えのない場所でもなかったのだから、わたしは夢の記憶を頼りに進むことにした。

夢の記憶——なんて頼りない。

ざっ、ざっ、ざっ、ざっ。

そのわりに、意外と迷わずに道を選ぶ身体。

ざっ、ざっ、ざっ、ざっ。

疲れはないのか足の運びは止まらず。

憑かれたように足の運びは速くなる。

この感覚、やっぱりいつもの夢なのか。

夢なら夢でいいとして、確かこの先には。

桂

「わ、奇遇」

ケイ

「うん？」

桂

「わたしも桂っていうんですよ。わたしの桂は桂馬の桂」

ケイ

「——！？」

あれ？ 何だか変なリアクション。

桂

「わたしが同じ名前だと、何か問題が？」

ケイ

「……ああ、いや、何でも」

何でもないと言うわりには、ずいぶんとショックを受けていたような、今は今で考えごとをしているような。

……はてな？

そりゃあね、陽子ちゃんには『かつら』だったり、子をつけて『けいこ』なら、はとちやんっぽいんだけど」とか、好き勝手言われてるけど。

(単に『ケイ』だと強そうだったり、スマートそうだったりして、わたしのイメージじゃないのだそう。失礼な)

ケイ

「……………」

桂

「あの一？」

ケイ

「なるほど、モクセイの木の桂だね」

桂

「はい？ 木星の木？」

頭の中にわか付きの惑星が浮かんだ——って、それは土星。木星が一番大きいの。でも、この場合はどっちでもいいような気がするんだけど。

桂

「……木星の木？」

ケイ

「ほら、金木犀とか銀木犀——桂っていうのは、中国では木犀の木のことなんだ」

桂

「あ、金木犀ですか」

勘違い解消。

桂

「道路沿いによく生えてる木ですよ。秋に花が咲く、ちょっと香りの強い」

ケイ

「そうそう、トイレの芳香剤でよくある」

桂

「……………」

わ、もしかしてこの人——ケイクン？ ケイさん？ ——ずっとこのオチを狙ってた！？

桂

「ううっ、ひどいです……」

ケイ

「ははは、ごめんごめん」

桂

「うちのはフローラルの香りだもん」

ケイ

「いや、フローラルは『花のような』って意味だから、一応は金木犀も」

桂

「……………」

天国のお母さん、うちのは大丈夫だよな？

桂

「ううん、別に。えっと——ケイクン？ ケイさん？」

ケイ

「別にどっちでもいいよ」

桂

「じゃあ——ケイクンで」

相手が頷いたのを確認して、わたしはその後ろにそびえる木を見上げた。

桂

「あれ……？」

ケイ

「どうかした？」

桂

「ううん、何でも」

……何だろう。今、何かを思い出しかけたような。

桂

「それよりこの木、すごく大きいですね？」

ケイ

「相当、樹齢のある木だからね」

ケイ

「槐っていう木なんだけど、『寿命を延ばす』って字を当てることもあるんだ」
延寿——

桂

「へー、それでこんなに育ったんだ」

ケイ

「延ばすのは人の寿命の方なんだけどね。花も実も葉も樹皮から根まで、無駄なく葉になる木だから」

桂

「わ、植物博士？」

ケイ

「たまたまだよ。この木には縁があつてね」

桂

「へえ、縁ですか……」

同じ「えんじゅ」を当てるなら、その字を当てた「縁樹」の方が、わたしには浮かびやすい。

桂

「なるほど、思い出の場所とか？」

ケイ

「そうだね。この木は僕の大事な人の分身みたいなものだから」

桂

「え？」

ケイ

「いや……何でもないんだ」

うーん？

と、しばらく話していたのだけれど。

体内時計が時間の経過を教えてくれた。

桂

「……………」

ケイ

「ん？ 何？」

桂

「ううっ、今のその、聞こえました？」

ケイ

「……まあ、ね」

ケイクン、あからさまには笑ってないけど、それでも堪えてらっしゃるご様子で。
ううっ、穴があったら入りたいかも……
とはいえ穴掘り道具の持ち合わせはなく、お腹の虫をなだめる術もなし。
となると、ここは撤退するのが得策だろうか。
ううん、逃げるわけじゃなくて帰るだけ。もともと山登りは予定外の行動なわけだしね。

桂

「そ、それじゃあ、わたしはこの辺で」

ケイ

「うん。気をつけて」

ケイ

「迷子にならないように送ってあげたいけど、もう少しここにいたいんだ」

桂

「ケイクンはお腹、空かないんですか？」

ケイ

「食欲は抑えられる方なんだ。修行したから」

桂

「修行……」

断食道場にでも通ったんだろうか？

ダイエットとか必要なさそうだけど「実は昔は太っていました」とか、何かの病気で絶食療法を試してみたとか。

確か消化器の不調とか、アレルギー疾患に効果があるんだよね。あとはもっとメンタルな――

――と、いけない、いけない。

こうやって別れ際の言葉に質問をしたりすると、ずるずる長話になってしまうのは、陽子ちゃんとの電話なんかで百も承知だったっけ。

とはいえ。

ケイ

「ああ、そうだ」

相手から話題を振られると、打ち切れないのもおなじみのパターン。

桂

「えっと……何ですか？」

ケイ

「最後にひとつ忠告しておくよ」

桂

「はい？」
忠告って何だろう？
わたし何かまずいことしたっけ。

ケイ
「君はもうここには近づかない方がいい」

桂
「どうして……」

ケイ
「どうしてもだよ」
理由はさっぱりだったけど、わたしのために思ってくれているのだけは伝わってきた。

それは夢の中のあの人の「駄目」と同じ響きを持っていて――

ケイ
「さあ、もう帰るんだろう？」
だからわたしはとても素直に、精一杯の速さでそこから離れた。

桂
「あ、いえ、別に、そうだ」

ぎくしゃくと携帯電話を取り出して画面を見る。
電波の状況は最悪だけど、今は用途が違うからそれは置いといて。

よしっ――

桂
「わ、大変！ もうこんな時間！ とっくにお昼過ぎちゃってるよ！」
そんなことは体内時計（腹時計ともいう）で百も承知。
支度を済ませて旅館を出てから、一時間に一本しかないバスを待って、色々あった挙げ
句に山登りまでしてるんだから、過ぎもする。
とはいえパフォーマンスも必要。わたしはそれを口実に、その場でぐるりと回れ右。

桂
「それじゃあ、そういうことなんでっ」
前に進めを始めたけれど。

ケイ
「……やれやれ、そんなに胡散臭かったかな」

……あっという間に立ち往生。

桂

「あのっ、そのっ、別に切迫した身の危険を感じて逃げようだとか、そういうわけじゃないんですけど」

すべての女は女優である——だなんて嘘。

それともこんなに大根なのは、まだまだわたしが女の子だから？

とはいえそれでもお年頃なわけで、まったく人気のない場所なんだし、昨日陽子ちゃんに危機感持てって注意されたし——

ううっ、だけど気を悪くしちゃったかな？

錆びた音が出そうなほどのぎこちなさで、肩越しに様子をうかがう。

桂

「あ……」

彼は笑っていた。

「仕方がないなあ」とか言いつつも見守ってくれるような、そんな笑顔を浮かべていた。

ケイ

「うん、君はそうした方がいいと思うよ」

ケイ

「君子危うきに近寄らずと言うには、首を突っ込みすぎているけど、そういうスタンスなら早く山を降りるべきだね」

ケイ

「そして、ここには近づかない方がいい」

桂

「どうして……」

ケイ

「どうしてもだよ」

理由はさっぱりだったけど、わたしのために思ってくれているのだけは伝わってきた。

それは夢の中のあの人の「駄目」と同じ響きを持っていて——

ケイ

「さあ、行くんだ」

だからわたしはととても素直に、精一杯の速さでそこから離れた。

ざあっ——

急に視界が開けた。

おそらく山の中腹あたり。

そこには見上げるほどの大きな——

桂

「……やっぱり」

大きな古木が小さな白い花をたくさん咲かせ、そこにそびえ立っていた。

たくさんの樹齢を重ねているだろう幹の太さは、根元に立っている人と対比すれば一目瞭然。

桂

「……あれ？」

そこでようやく先客の存在に気付いた。

わたしと同じぐらいの年恰好の男の子が、幹にてのひらを押し当てるようにして佇んでいた。

ざあっ——

風は此方から彼方に吹いていて。

わたしの声が運ばれたのか、その男の子が顔を上げた。

柔らかそうな、少し長めの髪が風になぶられて、枝を離れた花びらと一緒に流れる。

桂

「……あれ？」

わたしは再び、同じ言葉を口にするようになった。

既視感——というには大げさかもしれないけど、どこかで見たことあるような。

でもこのあたりに知り合いなんていないし、そうじゃなくても男の子の知り合いなんて

——
もしかして、テレビとか雑誌に出るような人？

少年

「もしかして道にでも迷った？」

桂

「えっ！？ わたしですかっ！？」

いつの間に近づいたのか、少し覗き込むようにして話し掛けてきた。背の高さは、普通ぐらい。

少年

「僕が話し掛ける相手、他にいるかな？」

桂

「あっ、はい、そうですね」

少年

「ははは、そんなに緊張しなくても」

桂

「でも……」

初対面だし、男の子だし。

とはいえ、顔も声も話し方も優しげで、あまり男の子と意識しなくてすみそうなタイプだ。

少年

「そうだね、こういうときは一応でも名乗っておいた方が安心できる？」

桂

「えっと、それは……」

少年

「大丈夫。『代わりに君の名前を教えてください』なんてことは言わないから」

少年

「はじめましてかな？ 僕はケイって言うんだ」

桂

「ええっ!？」

さっきからわたし、驚いてばかりだ。

それは、そんなに珍しい名前じゃないかもしれないけど。

ケイ

「……うん？ 僕の名前がどうかした？」

桂

「……やっとなつたあ」

鎮守の森を抜けてバス停に辿り着いたわたしは、すっかりくたびれ果てていた。

あの場所は山のそれなりに高いところにあったようで、気付いたら近くにいた楽な往路のツケなのか、帰りはとても大変だった。

サンダルとかパンプスよりは断然マシだけど、ローファーだって山歩きには向いてない。

桂

「ううっ、豆とか靴擦れできてるんだろなあ」

とにかく足が痛くて、痛くて。

中略なしの間延びだらけの下山の道程とか、こんな地味なリアリティが満載なあたり、夢か現か——なんて疑いはなくなったわけだけど。

もうそんなことはどうでもいいから、今は座って休ませてほしい。

どうせバスはがらがらだから、乗ったら座れるはずだけど、その肝心のバスが来るまでどれほど待てばいいのやら。

桂

「……………」

時刻表はすっかり読み取り不可。それどころか停留所の名前すら、錆に埋もれて判別不能だった。

一見さんは、バスが停まってくれるとは思わないかもしれない。

桂

「はあ……」

もはやため息しか出なかった。

駅からこっちに来るバスは、およそ一時間に一本のペースだったから、逆もだいたい同じだろう。

だとすると、わたしが森を抜ける直前にバスが通過したなら、あと一時間はこうして待っていなければならないことになる。

あと一時間……

桂

「ふや～～～」

町の中で座り込んでる子を見て「みっともないなあ」とか思ったりしたけれど、ごめんなさい。わたしも人のことは言えないです。

ベンチがあれば良かったんだけど、駅前の停留所になかったものがこんな所にあるはずもなく、わたしは直に地べたに座り込んでしまった。

本当は靴や靴下を脱いで、素足を風にさらしたいところだけれど、さすがにそこまではしたくないとはできない。

森を抜けて家まで戻れば、好きに足を伸ばせるとはいえ、いつバスが来るのかわからない以上、遠くに離れるわけにもいかないし。

それ以前に一度来た道に戻るのが、疲れきったわたしには億劫だった。

もうしばらくは歩きたくない。陽射しを嫌って、木陰まで逃げ込むのが精一杯。

膝を抱えて身体を揺らしながら待つ。

桂

「……暇だなー」

ほとんど手ぶらで来ているので、すぐに手持ち無沙汰になった。読み止しの文庫本だって、旅館の部屋のかばんの中だ。

動き回る元気があれば、一時間ぐらい平気なんだけど、その元気がないからないない尽くし。

桂

「まだ来ないのかなー」

最長が小一時間なわけで、最短なら今すぐでもいいわけなんだし、できれば今すぐ来てほしい。

こうして待ち始めてからどれぐらい経ったのか確認するため、携帯電話を出して見る。

一日千秋。気持ちに比べると、実際はほとんど経っていなかった。

桂

「……あ」

どうしてわたしはボケなんだろう。

暇潰しにはもってこいの便利アイテムを持っていたことに、今更気付くなんて。

電波はオッケー、アンテナ立ってる。

充電具合も大丈夫そう。

今までの経験からすると、陽子ちゃんに電話すれば一時間なんてあっという間だし。

……とはいえ、まだ日の高い時間帯。

陽子ちゃんも昨日「遊びに行こう」と誘ってくれてたわけだし、それを邪魔しちゃ悪い。

桂

「……少なくとも、わたしほど暇じゃないだろうしねー」

というわけで、陽子ちゃんとおしゃべりは断念。ぼーっと、バスを待つ。

桂

「ひゃ——っ！！」

心臓に悪い大きな音に、膝に埋めていた顔を持ち上げ、しばしばと目を瞬かせる。

発生源を見やると、停留所にバスが来ていた。

いけない、いけない、こんな所で。

運転手さんが気付いてくれなかったら、危うく乗り過ごすところだった。普段は素通りしてる停留所だろうし。

にしても、よく見つけてくれたなあ。向こうからは少し離れた木陰にいるのに。

バス運転手

「もしかしてご気分が悪いんですか？」

桂

「あっ、いえっ、大丈夫ですっ」

バス運転手

「そうですか。では、ご乗車になりますか？」

桂

「はいっ、乗ります、乗りますっ！」

わたしは急いで立ち上がり、スカートのお尻をぱたぱた叩きながらバスに向かう。

着くタイミングを見計らったかのように、車体のお腹のあたりにある乗車ドアが開き、ひんやりとした空気が額を撫でた。

ううっ、極楽だ……
わたしはまだ疲れ癒えぬ足でステップを踏む。
普及してきたノンステップバスと違って、けっこう段差はきついのに、苦もなく登って
いけるんだから人間の身体って現金だ。

桂
「ありがとうございます。助かりました」

バス運転手
「ははは、ひとりでも多くお客さんを乗せないことにはね」

桂
「はあ……」
ちなみにバスは貸し切り状態。わたしひとりで採算がとれるとは思わないけど。

バス運転手
「お客さんは、どちらまで？」

桂
「あ、経観塚の駅までお願いします」
どさっとシートに座り込むと、すうっと汗が引いていくのが実感できた。
ううっ、また寝ちやいそうかも……
よし、かけよう。
一応「お父さんの実家を見る」という目的も遂行したわけだし、今後の身の振り方の相談なんかもかねて陽子ちゃんに電話してみることにした。

登録済みのアドレスから選んでダイヤル。

『留守番電話サービスセンターに接続します』

桂
「あれ……？」

『——の方は、発信音の後にメッセージを録音してください。ピー』

桂
「あ、羽藤桂です。お父さんの実家を見てきました。なんかボロボロだったです。バスも一時間に一本しかなくて、今は帰りのバスを待ってます」

桂
「それで報告ついでに電話したわけなんですけど、留守みたいなんで、夜になってからもう一度電話します。それじゃあ」

よしっ、こんな感じかな。

『録音に失敗しました。メッセージをお預かりすることができません』

桂

「えっ？」

『もう一度発信音の後にメッセージを録音してください。ピー』

桂

「ええっ！？ ちょっと待って……じゃなくて、あの、羽藤桂です。お父さんの実家を見てきて、えーと、それで、えーと……」

『ボロボロだったと』

桂

「あ、はい、そうです——って、あれ？」

陽子

『ぶぷっ』

桂

「あれ？ あれれ？ 陽子ちゃん？」

陽子

『いやー、やっぱはとちゃん面白いわ』

留守番電話サービスセンターって嘘？ わたしまた騙されたんだね？

陽子

『あーっはっはっ、お腹痛ーっ』

桂

「……陽子ちゃん、笑いすぎ」

陽子

『こっちも笑いたくないんだけどね、まだ食べたばっかで、笑うと……苦しー、死ぬー』

桂

「そんなの自業自得だよ。こちらはお腹空いてるのに」

陽子

『うひゃひゃ、そーね。もう、笑うのやめる。でもその前に、けっこうどうでもいいこと
なんだけどさー』

桂

「……何？」

陽子

『なんではとちゃん、留守電相手だと敬語になってるわけ？』

桂

「……………」

本当にどうでもいいことだった。

桂

「——ってことがあったんだ」

わたしは昨夜からのことを、かいつまんで話した。

とはいえ、あの激しい痛みを連れてくる既視感についてだけは伏せておいた。

下手に心配かけたくないし、下手な心配をされても困る。あれはわたしが疲れてるから
だとか、そういう類のものとは違うのだ。たぶん。

陽子

『それは、それは。なかなか楽しそうなところで良かったじゃない』

桂

「そうかな？」

陽子

『幽霊の出る旅館に、化け狐のでる古いお屋敷。なんかいかにも「夏〜〜」って感じ？』

桂

「わたし、そういう夏は遠慮したいよ。怖いの嫌だし」

陽子

『はとちゃん、お笑い派だもんねー』

桂

「うん。わたしのいない間、日曜日の午後五時半から六時まで、4チャンネルで録画お願い」

陽子

『はいはい、了解ー』

桂

「わ、投げやり……面白いんだよ？」

陽子

『ま、はとちゃんにはね』

陽子

『で、納涼ホラーが嫌なら、ちょこっと不思議なガール・ミーツ・ボーイ路線の方はどうなの？』

桂

「へ？」

陽子

『縁の樹の下で出会う、同じ名前の少女と少年！そんなふたりに訪れる、一夏のラブロマンス！いいわね、はとちゃん。ナイス運命！』

桂

「よよっ、陽子ちゃんっ！？」

陽子

『ウチみたいな女子校じゃ出会い少ないんだから、そーゆー出会いは大切にしないと』

桂

「そんなの、別に」

確かに不思議な縁は感じたけれど、もうあそこには近づかない方がいいとか言われたし。

桂

「もう会うこともないだろうしね」

陽子

『そう？』

桂

「そうだよ。お父さんの実家はもう見たから、三十分もかけてこっちに来る予定はないし」
交通機関の待ち時間を合わせれば、もっとだ。

陽子

『じゃあ、町の中でバッタリの可能性は？』

桂

「わかんないけど、町も特に見て歩くとこなさそうだからなあ……」

陽子

『どっかに観光名所とかはないわけ？』

桂

「さあ？ 温泉につかって、のんびりするには良さそうなんだけどね。ごはん美味しいし」

陽子

『ふーん……』

陽子

『……だったらさ、はとちゃん』

桂

「うん？」

陽子

『用事全部済ませたんなら、泊まれば料金かさむわけだし、さっさとこっちに帰ってきなよ』

バス運転手

「経観塚駅前です」

桂

「ありがとうございました」

バス運転手

「またのご利用をお待ちしています」
ステップを踏んで、硬い舗装道路に降り立つ。

桂

「んっ」

ようやく駅前に戻ってきた。

冷房の効いた車内は快適だったけど、三十分もじっと座っていると今度は外に出たくなる。

小さく伸びをしてから、待ちくたびれてぺたんこになったお腹をさする。

桂

「ふう、後はどこかでごはん食べて……」

駅員

「やあ、お嬢さん」

桂

「あ、駅員さん」

比較的利用者の多い朝夕（あくまで比較的だと思う）の時間帯とは違って暇なのか、駅員さんが駅の外までやってきた。

改札口を離れているにもかかわらず、パンチ片手にチョキチョキやっている。
それにしても、なんて目ざとい。

駅員

「今日は無事に乗れたようだね」

桂

「昨夜はお世話になりました。おかげですごい所で寝ないですみました」

駅員

「なるほど、すごい場所だったようだね」

頭のとっぺんから、昨日はピカピカだった靴のつま先までを、つらつと眺めて言う。

駅員

「ふーむ、さすがは音に聞こえたお屋敷だ」

桂

「あはは……まあ、その、色々とありまして」

駅員

「まあ、大きなケガがなさそうで何よりだよ」

桂

「はい、おかげさまで」

駅員

「それで用事は済んだのかな？」

桂

「はい、一応そうなんですけど、せっかくなんでもう少しだけこっちにしようかと」

桂

「それですとね、またお世話になりたいことがあるんですけど……」

駅員

「何かね？ 何でも言ってみなさい」

桂

「その一」

桂

「このあたりでごはん食べられる場所ってありますか？ できればその一、和食で」

桂

「ふい〜、お腹いっぱい……」

紹介してもらった定食屋さんで、少し遅いお昼ごはんを食べたわたしは、旅館への帰りがてらに商店街をぶらついていた。

それほどではないけれど、閑散とした駅前よりは賑やかで、とりあえず一通りのお店はそろっていそう。

近くに何かイベントでもあるのか、提灯飾りなどが、ぽつぽつと軒先を彩っていたりもする。

とはいえ全体的に極めて地味。適度に色褪せていて、どちらかと言えば落ち着いた佇まいを見せている。

あ、だけどもあれなんか派手だし、遠目に目立って見えるし——と思えば、飾りじゃないし。

町並みにそぐわない極彩色のそれは、移動する物体だった。

進行方向がこちらのようで、しだいに輪郭が良く見て取れるようになる。

車だった。

それも良く見る乗用車より大ぶりで車高の高い、クロスカントリー4WD——つまりは道が悪くてもへっちゃらな四輪駆動の車だ。

ちなみに車の見分けがほとんどできないわたしが、こんな言葉（略してクロカン）を知っているのは、とある人に教えてもらったから。

……にしても。

鳥居も真っ青の大型クロカンには覚えがあるんだけど、似たような車を選ぶ人は色彩センスまで似ているものなのか。

大きくなってくる朱色をぼーっと眺めながら、昨夜陽子ちゃんが話していたことを思い出す。

陽子

『あんたのママさんの知り合いって人から、あんたの居場所知らないかって電話があっさ。家にかけても誰も出ないって』

桂

「あ、うん。誰か出たら怖いよね」

陽子

『そりゃ、そうなんだけど……』

陽子

『なーんかあたし、パパさんの実家の方に行ってるって、口滑らせちゃったみたいなんだ』

桂

「うん。別にいいけど」

……ということは、もしかして？

——

「やーっとつかまえられたわ」

車上の女性

「久しぶり、桂」

桂

「……やっぱり」

その知り合い、本人だった。

車上の女性

「うん？ 何がやっぱりなんだい？」

桂

「サクヤさん、昨日、陽子ちゃんの家で電話かけたでしょ？」

サクヤ

「かけた、かけたさ、かけまくったさ。あんたの友達でフルネーム知ってるのって、奈良陽子しかいなかったしねえ」

サクヤ

「それでボックスから拝借した電話帳に乗ってる奈良って苗字、上から順に総当たりしたわけさ」

桂

「かけまくるって言うほど、なかったと思う」

サクヤ

「そうさ、実際のところは一発だったっけ」

桂

「はあ……」

とまあ彼女、浅間サクヤさんはこういう人。

本人が陽子ちゃんに語った通り、お母さんの古くからの友人で、どれぐらい古いかと言うと、少なくともわたしが中学校に上がるずっと前から。

それでだいたい年数回、場合によっては中一年空いたりもしたけど、そんな感じでわたしの家に遊びに来ていた。

サクヤ

「というわけで——」

わたしの生返事が聞こえにくかったのか、それまで低くうなっていたエンジンが止まった。

サクヤ

「桂、しばらくぶりだねえ」

桂

「いつもよりは空いてないよ。お母さんのお葬式にも来てもらったし」

サクヤ

「それはそれだろ」

こうして間近に並んで立つと、サクヤさんの顎がわたしの目線の高さ。サンダルのかかと分を差し引いても、女性にしては長身の方。

ノーメイクでもちゃんと美人な、はっきりした目鼻立ちも含めて、ちょっと日本人離れした雰囲気がある。

サクヤ

「あんたは元気だったかい？」

桂

「うん」

頷くと、わたしの背中に両手が回され、ぐいっと腕の中に引き寄せられる。

ぎゅうっ。

と、こういうことをしてくるあたりも、日本人離れした印象に拍車をかけているのかもしれない。

ううっ、相変わらずスタイルいいなあ……

サクヤ

「少し痩せたかい？」

桂

「残念ながら、身長体重ともに横這いでして」

サクヤ

「ならいいじゃないか。健康あつての人生だよ」

桂

「うん、そうだよね」

サクヤ

「……過労に風邪が祟ってだもんねえ」

桂

「うん、健康第一だね」
無意識なのか、しんみりとした口調で言いながらも、片手でわたしの頭をぐりぐりしてくる。

桂

「いたっ、ちょっと痛いって」
わたしは身をよじって、サクヤさんの腕の中から脱出した。

桂

「ううっ、サクヤさんひどい……」

サクヤ

「仕方ないさ、ひどいだろうさ。あいつの年も考えないで、あたしがあんな服を送っちゃったから、風邪なんてひいちゃったんだろうしねえ」

桂

「あんな服ってもしかして、すごくスリットの深いチャイナドレス？」

サクヤ

「前の撮影でチベット行って来たんだよ。その帰りに寄り道したついででねえ」

ニヤリと笑った。

ふざけてるんだかそうじゃないんだか、ちょっと線引きしにくかったりする。
こんな人だから、かなり年上のはずなのに友達感覚で話したりできるんだけど。

……………

……待て、わたし。

お母さんの昔っからの友達で、わたしがランドセル背負ってたころから、年恰好の変わってないサクヤさんって……

桂

「ああ〜〜〜っ」

サクヤ

「ちょっと桂、どうしたんだい？」

桂

「別に。あまり考えちゃいけない世の中の不条理について、ちょっと」
とりあえず、本題と関係のない話は横に置いておこう。世の中にはすごい若作りの人とか、色々な人がいるわけだし。

お母さんだって、実際の年齢に比べればかなり若く見えたよ。チャイナドレスも似合ってたし。

桂

「……それでサクヤさん、わたしに用事？」

サクヤ

「うん？」

桂

「わざわざ陽子ちゃんに行き先聞いて、こんな所まで来るってことは、もしかしてすごく重要？」

サクヤ

「そうだねえ。そうでもあるけど、そうでもない——ってあたりかねえ」

サクヤ

「少なくとも、あたしにとっちゃ一大事なのさ。あんたの身の振り方を訊いとくのはね」

桂

「はあ……」

お母さんの親友として、その一人娘の行く末を心配してくれてるんだと思う。

サクヤ

「で、あんた羽様の屋敷には行ったのかい？」

桂

「うん、一応」

サクヤ

「……………」

桂

「え？ なに？ なに？ どうしたの？」

サクヤ

「……で、どうだったんだい？」

桂

「どうだったって、何が？」

サクヤ

「だから、羽様の屋敷に行ってみて、さ」

桂

「ボロボロだった」

サクヤ

「……それだけかい？」

桂

「えーと、庭なんかすごく草ぼうぼうだった」

サクヤ

「……………」

桂

「あそこに住むとしたら、大変だよな」

サクヤ

「たぶんそうだろうね」

サクヤ

「はあ……」

桂

「サクヤさん、どうしたの？」

サクヤ

「いや、別に。ならいいんだ」
……質問の意図が、よく飲み込めなかった。

桂

「怖いところだった」

サクヤ

「は？ 怖いだって？」

桂

「さすがお化け屋敷って噂が立つだけはあるよね」

サクヤ

「……………」

桂

「どうしたの？」

サクヤ

「いや、そうかい。怖かったかい」
一体、何を訊きたかったのやら。

桂

「……………」

サクヤ

「どうしたんだい？」

桂

「不思議な光景が見えたんだ。わたしがまだ、小さかったころの」

サクヤ

「火事の煙に隠されちゃった記憶がかい？」

わたしは首を横に振る。

桂

「わからない……」

そうかもしれないし、違うかもしれない。

まとわりついた長い髪が、記憶を縛る糸に思えて少し乱暴な手つきで払う。

桂

「わからないけど、そこにはわたしだけじゃなくて、笑ってるお母さんがいて、忘れてしまったはずのお父さんも笑っていて、そしてあの人も——」

サクヤ

「あの人って、誰だい？」

サクヤさんの訊ねに、わたしはもう一度首を。

桂

「ゆうべの夢に出てきた人。とても悲しい目をしていて、わたしに全部忘れろって……」

あの人が誰なのか、知りたいのはわたしの方だ。忘れろと言われても、忘れられるはずがない。

桂

「蝶の形に白く抜いた、青い着物を着てた。それから少し伸びたおかつぱ頭にも、やっぱり蝶の髪飾りをしてて」

ああ、そういえば——

今更になって気付いたわたしは、携帯電話をサクヤさんに見せる。

見せたいのは本体ではなく、そこに下がったストラップ。携帯電話を持つ前は、キーホルダーとして昔から使ってきたもの。

桂

「丁度こんな感じだった」

飾り紐を通した十五ミリほどの青い珠に、白い蝶が浅く彫り込まれている。

桂

「これ、お守りみたいなものだから大事にきなさいってお母さんが」

それには本当にお守りのような力があるのか、花を探して舞い飛ぶ蝶のように、なくしてもすぐに返ってきた。

だから半ば鍵っ子だったわたしにとって、お財布よりも大切なものを守ってもらうために、キーホルダーにしていたというわけ。

サクヤ

「なるほど……」

珠に落としたサクヤさんの瞳はやけに真剣で、ためつすがめつ。

サクヤ

「……やっぱり薄くなってるか」

桂

「え？ 何が薄いの？」

サクヤ

「ああ、色だよ色。青金石にしちゃあ金の粒が見えないし、藍より空色に近いだろう？」

桂

「はあ」

サクヤさんの興味は白い蝶の模様じゃなくて、石そのものに向いていたらしい。それをごまかすような、少し慌てた口調だった。

桂

「あれ？ ラピスラズリって瑠璃じゃないの？」

サクヤ

「青金石とも言うんだよ。詳しくは少し違うんだけどね」

桂

「へー」

サクヤ

「まあ、あれじゃないのかい。桂は昔っからお守りとしてこの石を持ってるわけで、当然ながらに愛着もあるんだろう？」

桂

「うん」

サクヤ

「だからあたかも昔馴染みのような顔して、夢にまで出てもおかしくはないんじゃないか

って——あたしはそう解釈するんだけどねえ」

桂

「んー」

そう言われればそんな気がしてこないこともないけど、だけどやっぱり引っ掛かりがある。

何だろう。引っ掛かっているのは。

何だろう。このお守りが、あの人そのものとは違うと感じている理由は。

桂

「……ねえ、サクヤさんこそ知らない？ サクヤさんは十年前の火事より前から、わたしの家のこと知ってるんだよね？」

サクヤ

「まあね」

桂

「お母さんとお父さんとわたし。そのわたしたちの他に——」

サクヤ

「知らないね。あと知ってるのは笑子さんぐらいだよ。彼女は火事よりずいぶん前に、逝っちゃってるしさ」

笑子さんというのは、わたしのお婆ちゃん。

わたしはお婆ちゃんのこと、全然覚えていないんだけど……

サクヤ

「桂。あんた、あたしが嘘を吐いてるとでも？」

桂

「……ううん」

強い瞳に気圧されて、わたしが先に目をそらした。

桂

「だけど、わたし、やっぱりあの人を知ってるような気がする。とても懐かしくて、忘れちゃいけない大切な人だったんだと思う」

サクヤ

「……そうかい」

桂

「うん。だから、まだしばらくこっちにいる」

サクヤ

「ああ、そーかい」

サクヤさんは肩をすくめて、大きな息を吐き出した。

サクヤ

「まあとにかく、こんな所で立ち話っていうのもなんだから、河岸を変えようか」

桂

「そうだね」

サクヤ

「とりあえず車に乗った——」

そう言いながらドアに手をかけたサクヤさんが、動きを止めた。

サクヤ

「——と、そういえば桂。あんた、ゆうべはどこに泊まったんだい？」

桂

「あ、さかき旅館ってところなんだけど」

サクヤ

「ああ、あそこかい。なら道もわかるからナビはしなくていいよ」

桂

「サクヤさん、知ってるの？」

サクヤ

「夜通し走って着いたあと、一風呂浴びさせてもらったんだよ。泊まり客以外も集めないことには、やっていけないのかねえ」

サクヤ

「ほれ、乗った乗った」

桂

「はい」

急かされたわたしは、慌てて反対側にある助手席のドアに向かった。

サクヤ

「そういや、さっきのお守りだけだね」

桂

「うん」

サクヤ

「あたしも前に見たことあるわ。笑子さんが持ってたんだっ」

桂

「……お祖母ちゃんの？」

サクヤ

「形見だろうねえ。そりゃあ、お守りにもなるさ」

桂

「……………」

サクヤ

「さて、到着したよ」

桂

「お疲れ様です」

サクヤ

「疲れるもんかい、このぐらいで」
歩いていける距離なだけに、車だとあつという間だった。

シートベルトを外して降りる。

サクヤ

「あー、いやな天気だねえ。こりゃあ近いうちに一雨くるよ」

桂

「見てないのにわかるの？」

サクヤ

「わかるさ。空気のおいとかでねえ」

サクヤさんは自分の荷物を取り出すために、後部座席に頭を突っ込んでいたところだった。

わたしは助手席側の閉めたドアを開けようとして鍵の確認。よし、大丈夫。

桂

「そういうのって、職業柄？」

サクヤ

「いや、天気予報が得意なのは生まれつきさね。あたしの家系は鼻が利くんだよ」
むう。やっぱり鼻が高い方が、においを嗅ぐにも有利だったりするんだろうか。

桂

「あ、荷物持とうか？」

サクヤ

「遠慮しとくよ。大事な商売道具だからねえ。非力な桂に落とされでもしたら大変だし」

桂

「わたしそこまで——」

桂

「あ、本当。お天気崩れそう」

気が付くと、さっきまで明るかった空が薄暗い。

ぼつり——

目の前の地面に、小さなしみが一点。

ぼつり、ぼつり——

あちらこちらに、点、点、点。

桂

「ひゃっ」

わたしの頭のつむじに、ぼつり。

頭に手をやる暇もなく、すぐに音同士重なりあって、ついには隙間がわからなくなる。

ざあっ——

ひとつひとつの雫が大きい。それが十分な勢いを得て、地面を、屋根を、わたしを叩く。

雨粒が砕ける、和音、和音、不協和音。

波の音にも似ていると思う。

桂

「すごい土砂降り……」

サクヤ

「かーっ！ これじゃあっと言う間にずぶ濡れだよ、まったく！」

雨雲の底が抜けたかのように落ちてくる雨粒の中を、荷物を抱えたサクヤさんが走っていく。

立ち止まってこっちを見た。

サクヤ

「って、あんたは何を立ち止まってるのさっ！ 急いだ急いだ。グズグズするんじゃないよっ！」

雷を落とされた。

駐車場から玄関までの短い距離で、すっかりぬれぬれずみになってしまった。

女将

「お帰りなさい羽藤さん。大変だったでしょう」

桂

「あ、女将さん。すごい雨ですね」

女将

「でも、すぐに通り過ぎるわ、きっと。その前に、羽藤さんは着替えないといけませんけど」

墨をつけすぎた筆みたいに、二つに結わえた髪の手先から水滴が落ちている。ぼたぼたぼたと玄関先から、わたしの歩いてきた跡が続いていた。

結わえた根元を軽く握って、毛先のほうまで手を滑らすと、三和土に小さな水溜まりができた。

桂

「ううっ、どうりで頭が重いわけだ……」

せっかくのパフスリーブも、肌にべったり張り付いて台無しになってしまっている。軽くつまんではがしても、手を離すと元通りぺちやり。

桂

「はあ……」

サクヤ

「降り始めてからしばらく、ぼけらっと悠長に構えてるからだよ。まったく」

女将

「あら、そちらの方は？」

桂

「あ、この人はわたしの知り合いで——」

にっこりと上品に微笑み、どこからともなく取り出した名刺を差し出すサクヤさん。

サクヤ

「浅間サクヤと申します」

女将

「あらあら……ルポライターでフォトグラファーなんですね」

サクヤ

「はい。文筆では主に政経面について。写真は山や野生動物など、自然を主に扱っております」

改まった口調からは、普段の伝法さ加減は微塵もうかがえない。さすがだなあ、社会人。

サクヤ

「こちらの羽藤さんの家とは、祖母の代から知り合いなんですけど、先ほど町で偶然に」

女将

「あらあら、それで」

サクヤ

「はい。駆け込みで申し訳ありませんけど、こちらに部屋は空いていないでしょうか？」

女将

「大丈夫ですよ。余裕もありますし、お客さまは大歓迎です」

サクヤ

「では、ご厄介にならせていただきます」

女将

「いえいえ、こちらこそ」

女将

「良かったわねえ、羽藤さん。頼りがいのありそうなお姉さんがご一緒に」

桂

「はあ……お姉さんですか……」

いや、若く見えるし、実際の年齢は知らないんだけど……

女将

「やっぱり浅間さんは、こちらへ取材にいらしたのかしら？」

サクヤ

「いえ、そういうわけでは。ですが『やっぱり』と言うからには、何かあるんですよね？」

女将

「あら、ご存知ありませんでしたか。明々後日にお祭りがあるんですよ。それも今年は特別で」

桂

「特別なんですか？」

女将

「お祭りを取り仕切っていたお家があったんだけど、ずいぶんと前にその人たちがいなくなってしまったのね」

女将

「それで、ここのところ形ばかりのお祭りが続いていたの」

女将

「迷信だと思うんだけど、それからすっかりここも寂れてしまって……」

桂

「はあ、ちゃんとしたお祭りができなかったせいですか？」

女将

「迷信よ迷信。でも商売していると験はかついでおきたいものでしょ？」

話しながらも手は動かしていた女将さんが、パラパラめくっていた宿帳を見て、少しため息。

女将

「浅間さんは、こちらにご記入お願いします」

そのまま開いた宿帳を、筆ペンと一緒にサクヤさんに手渡す。

桂

「じゃあ、今年の特別っていうのは？」

女将

「なんとそのお家と縁続きだっていう、お祭りに詳しい人が来てくださったのよ。まだお若いのにしっかりなさった方で」

サクヤ

「……げっ」

サクヤさんが潰れた蛙のような声を漏らした。

女将

「あら、どうかなさいました？」

サクヤ

「いいえ別に。これでよろしいですか？」

女将

「えーと……はいはい、大丈夫です。では浅間さんの部屋のほうは——」

筆ペンを強く握りすぎて、宿帳に墨汁を垂らしちゃったとか——なんて予想は杞憂の模様。

にしてもサクヤさん、凄い顔してたんですけど、本当に何もなかったと思っていいんでしょうか。

……………

とりあえず、気付かなかったフリをすることにした。

桂

「それで、お祭りってどんなお祭りなんですか？」

女将

「それなんだけどね、オハシラサマっていう神様を祭ってること以外、詳しいことはよくわかってないのよ」

桂

「オハシラサマ？」

女将

「大黒柱の柱かしら？」

よくわかっていないと言うだけあって、女将さんは自信なさげだった。

女将

「諏訪大社の御柱祭は、テレビでニュースになったりするけど、そういうお祭りなら、来年からはお客さんも来てくれるかしら？」

桂

「はあ……」

明々後日に控えた現状で、町の空気はのんびりだから、その御柱祭やねぶた祭りみたいな盛り上がりは無理だと思う。

女将

「そうそう、オハシラサマと言えね。羽様の方にある山の中に、ご神木があるらしいのよ」

桂

「え？」

女将

「よく街路樹にもなってる槐って、木なんだけど、ご神木だけあって並外れて大きいんですって。何でも樹齢千二百年以上とか」

女将

「滅多に人が近づかない場所に生えてるのが良かったのかしら。そこに行くだけでも一苦労——」

桂

「羽様の——」

お父さんの実家があるのは羽様という土地。

桂

「山の中の——」

わたしは気が付くと山を登っていて。

桂

「ご神木——」

白い花を咲かせた大きな樹が。

桂

「——」

ぐるぐると記憶が廻る。

わたしの夢のあの景色が存在して、それがここで祭られている神様のご神木で、そこにはわたしと同じ名前の男の子がいて——

桂

「——くしゅんっ」

くしゃみひとつで頭の中が真っ白になる。

与えられた言葉を触媒に、頭の中で固まろうとしていた何かは、ほんのささいな衝撃でバラバラになって消えてしまった。

もう今の何かは取り戻せない。

忘れた夢を思いだそうとするのと一緒に、漠然とした印象しか浮かんでこない。

桂

「ああ……」

がっくりとうなだれる。

女将

「あら、ごめんなさい。早く着替えなきゃいけないのに長話しちゃって」

桂

「あ、いいんです、いいんです」

サクヤ

「桂……」

桂

「だから、平気。大丈夫だって」

笑顔と力こぶを作ってみせる。いや、力こぶはぜんぜん頼りなさそうだけど。

桂

「ってゆーか、早く着替えないと大丈夫じゃなくなっちゃうかも」

サクヤ

「ああ……」

桂

「それじゃあ女将さん、今日も美味しい晩ごはんを期待してますね」
やってくるのが出し抜けなら、去ってゆくのも唐突なのが夏の日暮れの通り雨。
屋根を叩く雨音は、やがてまばらな拍子に変わり、そう間をおかずに消えていった。

サクヤ

「いえ、そういうわけでは。ですが『やっぱり』と言うからには、何かあるんですよね？」

女将

「あら、ご存知ありませんでしたか。明々後日にお祭りがあるんですよ。それも今年は特別で」

桂

「特別なんですか？」

女将

「お祭りを取り仕切っていたお家があったんだけど、ずいぶんと前にその人たちがいなくなってしまったのね」

女将

「それで、こここのところ形ばかりのお祭りが続いていたの」

女将

「迷信だと思うんだけど、それからすっかりここも寂れてしまっ……」

桂

「はあ、ちゃんとしたお祭りができなかつたせいですか？」

女将

「迷信よ迷信。でも商売していると験はかついでおきたいものでしょ？」

話しながらも手は動かしていた女将さんが、パラパラめくっていた宿帳を見て、少しため息。

女将

「浅間さんは、こちらにご記入お願いします」
そのまま開いた宿帳を、筆ペンと一緒にサクヤさんに手渡す。

桂

「じゃあ、今年の特別っていうのは？」

女将

「なんとそのお家と縁続きだっという、お祭りに詳しい人が来てくださったのよ。まだお若いのにしっかりなさった方で」

サクヤ

「……げっ」

サクヤさんが潰れた蛙のような声を漏らした。

女将

「あら、どうかなさいました？」

サクヤ

「いいえ別に。これでよろしいですか？」

女将

「えーと……はいはい、大丈夫です。では浅間さんの部屋のほうは——」

筆ペンを強く握りすぎて、宿帳に墨汁を垂らしちゃったとか——なんて予想は杞憂の模様。

にしてもサクヤさん、凄い顔してたんですけど、本当に何もなかったと思っていいんでしょうか。

……………

とりあえず、気付かなかったフリをすることにした。

桂

「それで、お祭りってどんなお祭りなんですか？」

女将

「それなんだけどね、オハシラサマっていう神様を祭ってること以外、詳しいことはよくわかってないのよ」

桂

「オハシラサマ？」

女将

「大黒柱の柱かしら？」

よくわかっていないと言うだけあって、女将さんは自信なさげだった。

女将

「諏訪大社の御柱祭は、テレビでニュースになったりするけど、そういうお祭りなら、来年からはお客さんも来てくれるかしら？」

桂

「はあ……」

明々後日に控えた現状で、町の空気はのんびりだから、その御柱祭やねぶた祭りみたいな盛り上がりは無理だと思う。

女将

「そうそう、オハシラサマと言えね。羽様の方にある山の中に、ご神木があるらしいのよ」

桂

「へー」

女将

「よく街路樹にもなってる槐って、木なんだけど、ご神木だけあって並外れて大きいんですって。何でも樹齢千二百年以上とか」

桂

「へ——」

桂

「——くしゅんっ」

枕のへの字が呼び水になったのか、ずいぶんと古典的なくしゃみが飛び出してきた。

女将

「あら、ごめんなさい。早く着替えなきゃいけないのに長話しちゃって」

桂

「あ、いいんです、いいんです」

きっと今頃、陽子ちゃんが噂してるに違いない。もう少しこっちにいるって言っちゃったしなあ。

でもこの旅館のご飯、美味しいし……

女将

「……羽藤さん？」

桂

「それじゃあ女将さん、今日も美味しい晩ごはんを期待してますね」

やってくるのが出し抜けなら、去ってゆくのも唐突なのが夏の日暮れの通り雨。

屋根を叩く雨音は、やがてまばらな拍子に変わり、そう間をおかずに消えていった。

満月まであと数日——

昼に溜まった澱んだ熱や、空に漂う微細なちりを雨がまとめて流してしまったのか、月は涼しげに明るかった。

月明かりを薄めてしまう人工の照明は最小限に留められていて、それは冴えた輪郭を保ったまま、この地上にまで降りてきている。

サクヤ

「んー、いい湯だねえ」

桂

「ほんと、ほんと」

サクヤ

「美味しいもの食って、いい具合の湯で手足を伸ばしながら月見だなんて、贅沢の極みだねえ」

桂

「ほんと、ほんと」

サクヤ

「これでこいつがいなければ、あたし的には幸せ絶頂だったんだけどねえ」

いくら泊まり客の少ない旅館とはいえ、他の人と入浴時間がかぶるのはよくあること。入浴向きの時間帯だったり、長湯の嗜好があったりしたら、遭遇率は格段に跳ね上がるわけで、貸し切りになんてそうそうならない。

食事の後、温泉に浸かりにきたわたしたちは、昨夜ホームで出会った彼女と鉢合わせていた。

そういえば、同じ旅館だったんだっけ。

サクヤ

「まったく、こんな所まで何しに来たんだい？」

昨夜の少女

「それはこちらの言い分です。また私の邪魔をしに現れたんですか？」

サクヤ

「はっ、誰がわざわざ」

サクヤ

「そんなことが目的なら、夜通し車飛ばしてまで、こんなところには来やしないよ」

サクヤ

「それとも何だい？ またあたしが邪魔したくなるようなことを、やらかすつもりなのかい？」

このふたり、前からの知り合いみたいなんだけど……もしかしなくても相当仲悪い？

食事のときにお互い無視を決め込んでいたのは、周りの迷惑を考えてのことだとしたら

桂

「あはは……」

少しはわたしのことも慮ってほしいのです。

ううっ、心身ともにリラックスできるはずの温泉で、どうしてこうも萎縮しなきゃいけないんだろう……

桂

「はあ～～～」

サクヤ

「どうしたんだい、桂？」

昨夜の少女

「ケイ？」

桂

「あ、わたしです」

サクヤさんにまともな紹介を望むのは無理そうなので、自分で名乗ることにした。

桂

「羽藤桂です。よろしくお願いします」

サクヤ

「こんな奴とよろしくするんじゃないよ——ってゆーか名乗るな」

心底、嫌そうな顔してるし。

昨夜の少女

「羽藤と言うと、羽様に屋敷のある？」

桂

「あ、それ、多分お父さんの実家です」

昨夜の少女

「……………」

桂

「あの一、どうかしましたか？」

彼女は眉根をきゅっと寄せて、水面に映った湯気にけぶる月に視線を落とす。

その月が、ぐらっと歪んで形を崩した。

サクヤ

「おら烏月。カタギに迷惑かけるのやめて、さっさとあがってどっかに消えちまいな」
手振りで「あっちいけ」と追い立てにかかると、ぱしゃぱしゃと指先からお湯が飛んだ。
……人がせっかく取り成そうとしてるのに、わざわざ波風立てないでほしいんですけど。

桂

「サクヤさんはちょっと黙って」

サクヤ

「はいはい」

桂

「えーと、烏月さん？ で、いいんですか？」

サクヤ

「そんな奴に敬語使う必要ないよ」

桂

「でも——って、だから黙っててってば！」

それに使う必要ないとか言われても、つられて敬語を使いたくなくなってしまう立ち居振る舞いというか、雰囲気があるというか。

第一、いきなり馴れ馴れしくするのも社会の通念としては、ちょっと。

烏月

「構いませんよ。年も近いでしょうし、そう畏まらずに話しやすい言葉でどうぞ」

桂

「……そうなの？」

烏月

「はい」

桂

「あ、だったら烏月さんも楽に崩してよ」

烏月

「……そうか。ならばそうさせてもらおう」

桂

「そうして、そうして」

——って、あれ？

敬語のときには気付かなかったけど、ずいぶん変わった感じのしゃべり方だった。

単純に男性的というのとも違う。よくわからないけど、最近の男の子はこんな話し方はしないと思う。

鳥月

「千羽鳥月。はじめまして——ではないね」

桂

「昨日駅で会ってるし、食事も隣の席だったよね」

鳥月

「ああ」

サクヤ

「……桂、やっぱり敬語におし。そんな奴と必要以上に仲良くするんじゃないよ」

桂

「サクヤさん、大人気ないよ？」

サクヤ

「つーん」

桂

「ごめんね、鳥月さん」

鳥月

「あなたが気にすることではないだろうに」

桂

「はあ、鳥月さんは大人だなあ……」

それに比べてサクヤさんは。わたしのお母さんの友達なんだから、もっと——

——いや、十分に大人の魅力はあるんだけどね？それも今が絶頂期っていうか。

桂

「いいなあ、大人……」

そしてついつい、鳥月さんを見てしまうわたし。

なまじ同じ年代なだけに、比較しちゃいけないとわかっているけども。

鳥月

「桂さん、私がどうかしたかい？」

桂

「ううん、別に」

世の中、いろいろ不平等だと思う。

いや、わたしだって並程度にはあると思うけど、鳥月さんはずいぶんと。

鳥月

「……桂さん？」

桂

「あっ、だから別に、何でもないよっ」

桂

「……………」

サクヤ

「桂、のぼせたんなら無理はしない方がいいよ？」

桂

「ううんっ、まだまだ平気だよっ」

とかんなどか言って長湯をしたら、鼻血が出るぐらいのぼせてしまった。
ううっ……わたし、何やってるんだろ……
ぶるぶる首を振って、余計な考えを散らす——と、そういえば。

鳥月さんを見てようやくわかった。

そうか、あのとき感じた既視感はこれか。

前日に写真を見ているんだから、あのケイクんの顔に見覚えがあるのも当然だった。
ううっ、わたしってものすごく記憶力ない？ もしかして、昔のことを覚えてないのっ
て、火事で煙を吸ったのは関係なし？
まあ、それはそれとして。

桂

「そうそう、鳥月さんの写真の人」

デリケートな問題だと困るので、サクヤさんには聞こえないよう、小声でささやく。
恋人を追いかけて——みたいなシチュエーションだったりすると、鬼の首でも取ったみたい
に大笑いした上で、ちくちく突っついてきそうだし。

鳥月

「私の写真？」

桂

「ほら、昨日駅員さんに見せてたやつ」

鳥月

「そういえば、あの場にはあなたもいたね」

桂

「勝手に覗いちゃっただけなんだけど……鳥月さん、その人を探してるんだよね？」

鳥月

「ああ」

桂

「わたし今日、その人と会ったよ」

鳥月

「……桂さん、それは本当かい？」

桂

「うん、少し話もしたし」

わたしと同じ呼び名の男の子。

自己紹介をする前に、サクヤさんがわたしを呼んだとき、名前に反応したのはきっと——

鳥月

「一体どこで？」

桂

「オハシラサマ——でいいのかな？」

桂

「お父さんの実家の近くの山の中に、すごく大きい木があってね、今日はそこにも行ったんだけど、そのときに——って、どうかした？」

彼女はとても厳しい視線を、揺れる水面に落としていた。

わたし、何かまずいこと言ったっけ？

桂

「鳥月さん？」

鳥月

「……いや、気にするほどのことじゃない。それより、教えてくれてありがとう」

ざざっと音を立てて、鳥月さんが立ち上がった。

やっぱり、不愉快にさせてしまったんだろうか。

鳥月

「先に失礼させてもらうよ」

桂

「えっ？ もう？」

烏月

「ああ、少々のぼせたようなんでね」

サクヤ

「ありがたや、ありがたや。これでやっつくつろげるよ」

桂

「サクヤさんっ」

サクヤ

「おー、怖っ」

烏月

「では」

サクヤ

「……で、何を話して追っ払ったんだい？ 後学のためにも、教えて欲しいところんだけど」

桂

「内緒」

サクヤ

「そんなつれないこと言わないでさあ」

桂

「内緒だもん。烏月さんと仲良くなったら、教えてあげてもいいけど」

サクヤ

「ああ、そりゃあ一生無理だわ」

桂

「……………」

——やっぱり話すのはやめておこう。

わたしが写真を見たのって、興味本位の覗き見の上なわけで、それって誉められた行為じゃないし。

サクヤ

「で、桂はともかく、あんたはそろそろ上がるころなんじゃないかい？」

烏月

「どうして私が」

サクヤ

「鳥の行水って言葉があるだろう？ 慣れない長湯は身体に障るよ」

鳥月

「何を言うかと思えば、馬鹿馬鹿しい。重ねた齢にふさわしい——」

……おかしいなあ。どうしてこんなに冷えるんだろう。夏だし、温泉に浸かっているのに。
寒いなあ、このままだと、風邪ひいちゃうかもしれないなあ。

桂

「……わたし、先にあがるね？」

サクヤ

「桂？」

鳥月

「桂さん？」

桂

「あはは、実はやっぱりのぼせてたかも」

ほんとは反対なんだけどね。

桂

「そ、それじゃあごゆっくりー」

鳥月

「そうだ桂さん。糸引き納豆を最初に作って食べたのは、源義家だそうだね」
ごはんを食べ終わって部屋に戻る道すがら、鳥月さんがそんなことを言ってきた。

桂

「えっと……」

それって、どこの誰だっけ？

桂

「鎌倉幕府を開いた頼朝とか、牛若丸の義経とかと同じ、源氏の人だよな？」

鳥月

「そう、彼ら兄弟の曾祖父にあたる」

鳥月

「その義家は、坂上田村麻呂や藤原秀郷と並んで、武人の誉れとされる人物でね。『八幡太郎は恐ろしや』と今様に唄われているほどなんだ」

桂

「へー」

確か坂上田村麻呂が蝦夷の討伐に行った最初の征夷大將軍で、藤原秀郷は……
……………

並ぶと言われても、その並んだ人を知らなかったわけだから、回答率五割で可にしておこう。

だいたい藤原姓の人ってたくさんいすぎて、誰が誰だかごっちゃになるしね。

ということで「どうして義家なのに八幡太郎なの？」なんて質問して話の腰を折るようなことをせず、無難に先を促すことにした。

桂

「うん、それで？」

烏月

「やはり義家も鬼切りの武人として、朝廷にまつろわぬ民の住まう奥羽の土地を平らげに、軍を率いて討って出た」

烏月

「そのとき、兵糧の——といっても、軍馬の飼料だったそうなんだが——煮豆を藁に包んで携帯していたところをだね」

桂

「あ、そうか。納豆って藁に包んであるよね」

わたしが普段食べるのは、白いスチロール製容器に入った安いやつだけど、それはさておき。

なんでも藁についた納豆菌がどうだとかで、煮豆は納豆に変身するらしいのだ。

烏月

「遠征中は兵糧を確保するのが困難だけに、飢えに瀕した義家は、納豆を食べることになったわけだ」

烏月

「戦地だった金沢には『納豆発祥の地』という碑があるそうだよ」

桂

「なるほど、なるほど……」

ぴんとひらめいた。

桂

「相手方だけじゃなく、ひもじさとも戦わなきゃいけないからねえ。まめまめしいだけじゃ駄目だよ。粘り強くいかないと」

桂

「へえ、それでねばねば糸引いてるわけですかい。そいつあ納豆食ってもんですねえ」

鳥月

「……………」

桂

「……あはは……外しちゃった？」

陽子ちゃんには「おやじギャグ？」とか言われそうだけど、わたしの中では微妙に違う。

鳥月

「桂さん、今の小噺は？」

桂

「実はこういうのが好きでしてー。うちの学校に落研があったら、わたし入ってたかも」

鳥月

「なるほど。即席にしては良くできている」

桂

「えへへ、それはどうも」

鳥月

「とはいえ、同様に義経や加藤清正、伊達正宗、はては聖徳太子が——と諸説あるから、糧食由来という話は眉唾程度に思っておくべきだがね」

桂

「へー」

と、いくら納豆話でも、後に引くのはこれぐらいがよろしいようで。

桂

「ところで鳥月さん、今日はどうするの？」

鳥月

「どうする——とは？」

桂

「良かったら、一緒に町を見て回ろうかなって」

せっかく仲良くなったんだから、そういうのもいいんじゃないかと。

鳥月

「ああ、誘ってくれたところを悪いんだか、私は用事があってこの土地に来ているんだ」

桂

「そ、そうなんだ」

早くも玉砕だった。

烏月

「すまないね。また夕食時にでも会おう」

桂

「うん……じゃあ、また」

わたしは自分の部屋へと戻っていく、烏月さんの背中を見送った。

ううっ、ちょっとショック。

女将

「あらあら、そんなに肩を落とさなくても」

桂

「うひゃあっ!？」

思わぬところから声をかけられて、わたしは思わず飛び上がっていた。

女将

「あらあら」

桂

「びっくりさせないでくださいよ、女将さん……」

女将

「ごめんなさいねえ、羽藤さん」

女将

「でも、誘いを断られたことは、それほど気にしない方がいいんじゃないかしら」

桂

「別に、気にしてなんか……」

女将

「千羽さんはお家のご用で来ているそうだから、色々忙しいのかもしれないもの」

桂

「え？ 家のお仕事？」

女将

「明々後日にお祭りがあるのよ。そういう意味ではいい時期に来たわね」

桂

「はあ、お祭りですか……」

それと鳥月さんに何の関係が？

女将

「少し前まで、そのお祭りを取り仕切っていたお家があったのね。でも、急にその人たちがいなくなってしまったそうで——」

ここ何年もの間、古い作法に乗っ取ったお祭りができなかったとのこと。

今年はその家と縁があるという人が協力を申し出てくれたので、例年よりは多少盛大になるそうなのだ。

桂

「それが鳥月さん？」

女将

「たぶんそうよ。千羽さんっていつも、金欄っていうのかしら、織の袋を持っているでしょう？」

桂

「はい。駅で最初に会ったときは、手荷物あれだけだったんで、てっきり地元の人かとも」

女将

「千羽さん、他の荷物は宅配便だったから」

桂

「わ、そんな手が」
わたしも帰りは真似しよう。

女将

「それで、お宿入りのときに何が入ってるのかを訊いたらね、見せてくれたのよ」

女将

「なんと、鞘から柄までお仏壇みたいに金色の刀だったのよ。なんでも、平安時代に作られたありがたい御神刀なんですって」

桂

「確かにそれは神社とかの関係者っぽいですね」

女将

「千羽さん、雰囲気あるものね」

……………

……鳥月さん、巫女さんだったりするのかな。

長くて綺麗な黒髪だけに、そういう格好似合うんだろなあ。

立ち居振る舞いも綺麗だから、巫女舞いとか踊ったらすごいんだろなあ。

いいなあ、見たいなあ。すごく見たいなあ。

女将

「——それで羽藤さん聞ってる？」

桂

「あ、はいっ！ 聞いてます、聞いてますっ！」
いけない、いけない、またやっちゃった。

桂

「あはは、それで何でしたっけ？」

女将

「そうそう。お祭りなんだけど、オハシラサマっていう神様を祭ってるんだけどね」

桂

「オハシラサマ？」

女将

「どんな神様かはよくわからないんだけど、大きいご神木が祭られているそうよ」

桂

「はあ、ご神木……」

女将

「それがまた山の中にあってね、そこに行くだけで一苦労なんだそうよ」

桂

「山の中ですか……」

女将

「だからお参りに行く人なんて滅多にいないし、そのせいで内容が知られてないのかもねえ」

桂

「山の中の……ご神木……」

——とくん。

心臓の、音が聞こえた。

とくんとくんと断続的に、心臓が頭の中にあのイメージを送り出していく。

緑の山——

大きな木――

わたしは誰かに手を引かれて――

わたしの名前を知っているあの人に、そんな夢は忘れてしまえと言われて――

そこに行けば、何かがわかるかもしれない。

そこに行けば、何か思い出すかもしれない。
そこに行けば。

ぐちゃぐちゃの頭の中がまとまるより前に、わたしは女将さんに聞いていた。

桂

「そのご神木って、どこにあるんですかっ!？」

今日の晩ごはんのとき、烏月さんと話す話題になるかも――なんて考えたりも、少しした。

三十分近く揺られたバスから降りると、すかっと抜けた青空を透過してきた陽射しが、たっぷりわたしに降り注いだ。

桂

「あつ……」

さっそく滲みはじめの額の汗をぬぐい、吸い込まれそうなほど遠い空から視線を戻す。
何もないところだった。

目の前にはつらつらと道が続いていて、次の停留所へと走り去っていくバスが小さく見えた。

地面は舗装されていない田舎道。ぬかるんだら歩くのも大変そうで、この暑さを差し引いても、今日は晴れて良かった。

まぶしさに慣れた目でぐるっと見回すと、右手に広がる畑とあぜ道。

後ろには前と同じく、今通ってきたでこぼこ道。

そして左手には蒼々たる深い森。

森は奥へ向かうほどに傾斜していき、どこからが森でどこからが山になるのかの判別はできそうになかった。

桂

「さすが、女将さんが『行くだけで一苦労』って言うだけはあるよね……」

ハイキングコースがせいぜいの軽装備で立ち向かうには、ちょっぴり難敵かもしれなかった。

とはいえ、オハシラサマのご神木を間近で見るにはあの山に登らなくてはいけないわけ

で。

桂

「あはは、さすがに遭難したりは……しないよね」

途中のお店で買い求めたブロック状の栄養調整食品とチョコレートは、決して遭難に備えてではなかった。

なかった……けど。

ううん、大丈夫。きっと大丈夫。

夢に出てきたあの場所なのだとしたら、子供の足でも行けないことはないわけで、いくら何でもそれぐらいの体力はある。

それに何もせずに帰りのバスを待つというのもばからしい。一時間に一本ペースなんだから、当分待たないといけないはず。

わたしはもう一度天を仰ぎ見ると、抜けに抜けた青空に向かって気合いを入れる。

桂

「よーし、山登りふぁいとおー！」

……最初の敵は森だった。

桂

「ふい～、休憩終わり。多分あとちょっと」

お茶のミニボトルのキャップを閉めて、リュックにしまって背負いなおす。

ちゃぽんと水の音がした。

今、わたしが立っている所には、道らしい道は見当たらない。

登り始めてしばらくの間は普通に道があったんだけど、それも次第に獣道のように細くなって、いつの間にか消えてしまっていたのだ。

それでも、わたしは迷わずに進んでいた。

遭難の不安もすっかり忘れて進んでいた。

真綿のように頼りない手触りだった既視感が、しだいに紡がれて形になっていくような

それはきっと、思い出せない記憶を引き上げる糸口になってくれるという強い予感が

これは面白い小説を読んでいるときの、寝食を忘れる高揚感と没入感に近いかもしれない。

物語の続き求めてページをめくる手と一緒に、わたしの脚は前へ前へ。

鍛えていない脚なので、休みをこまめに挟みはするけど、気持ちだけは先へ先へ。

夢で見た景色と実際の風景とを照らし合わせながら、わたしは先へと進んでいく。

糸をどんどん手繰っていけば、やがて端に行き着くわけだけど――

出店の紐くじのようにはずれがあったりもするのか、途中で切れてしまっていたりもするのか。

当たり前ならいいと思う。

きっと当たるだろう。

だって、もうすぐなんだから。

いつの間にか、あれほどうるさかった蝉の声が消えていた。
足元の草を踏みしめる足音が速くなる。
ざっ、ざっ、ざっ、ざっ。

見たことのある人だった。
でもこのあたりに知り合いなんていないし、そうじゃなくても男の子の知り合いなんて

——ああ、烏月さんの尋ね人の。

写真の少年

「僕の顔がどうかしたのかい？」

桂

「——！？」

わたしの心臓が大きく跳ねた。
知らない人にジロジロ見られてたら落ち着かないだろうし、文句のひとつも言いたくなるかもしれないし、だとしたら自業自得なんだけど。

桂

「あ、えっと、その……」

写真の少年

「人のことは言えないんだけど、こんな所に人が来るなんて珍しいからね」
声の調子が穏やかで優しかったので、わたしは落ち着きを取り戻すことができた。男の子にしては、ちょっとキーが高めで甘い声かな。

話のしやすい位置まで近づいてきた彼の背は、声や顔立ちに比べると十分に男の子らしくて、だいたい平均ぐらいはありそう。

けど手足の長い細身の体型のせいかな、目の前を塞ぐような怖さは感じなかった。
つまりといえば、あまり緊張しないで話せそうな人だということ。

写真の少年

「もしかして、道にでも迷った？」

桂

「いえ、そういうわけじゃ——」

頼みは夢の記憶という危なっかしさはともかく、ちゃんと目的地に着いてるし。

桂

「えっと、地元の方ですか？」

写真の少年

「そう——いや、昔はこっちに住んでいたんだけど、今は違うよ。そういうことを訊く君

は？」

桂

「わたしも他所から」

写真の少年

「なるほど。それじゃあ知ってるかな？ もうすぐこの土地のお祭りがあるんだけど」

桂

「あ、はい、泊まってる旅館の女将さんに」

写真の少年

「僕はその関係で、ちょっとね」

お祭りの関係ってことは——やっぱり鳥月さんとは知り合いなんだろうか？

桂

「あの一、つかぬことをお尋ねしますが、千羽鳥月さんをご存知ですか？」

写真の少年

「千羽……」

とても微妙な反応だった。

もしかして、鳥月さんの名前を出したのは失敗だった？ わたしってば、ものすごくかつなことをした？

刑事が犯人を追っている場合、追っていること自体を気取られない方が、当然有利。

旅情派刑事のドラマだと、逃亡生活に疲れた犯人が、故郷のお祭りを懐かしんで帰郷する、なんて展開はありふれているわけだし。

いや、だから鳥月さんはお祭り関係の人だって。学生なんだし刑事じゃないんだって。

ああ、だけど——

鳥月さんの名前を出していいかだけでも、訊いておけば良かった……かも。

後悔先に立たず。わたしは役立たず。お手伝いするつもりで足を引っ張ってどうするの、ばか。

桂

「ううっ……」

写真の少年

「……どうしたんだい？」

桂

「今の質問、忘れてもらえませんか」

写真の少年

「そう言われて忘れるのは難しいかな。今ので余計に印象深くなったし」

桂

「ですよね……」

写真の少年

「フリでいいならできるけど？」

桂

「ううっ、やっぱりいいです……」

写真の少年

「いいんだ？」

桂

「はい……」

暫しの沈黙。

白い花びらを揺らして、気持ちのいい風が通り抜けた。

それでも立ち直れないわたしに気を使ったのか、彼の方から声をかけてきてくれた。

写真の少年

「ところで、さっきの質問なんだけどね」

桂

「あ、はい」

写真の少年

「君の方こそ、その千羽鳥月さんとはどういった関係なのか、良ければ教えてくれるかな？」

桂

「わたし……ですか？」

写真の少年

「名前を出してくるぐらいだから、まったく無関係ってことはないよね」

桂

「その、関係っていっても、泊まった旅館がたまたま一緒だったってだけですから……」

写真の少年

「たまたま？」

桂

「ほら、ここってあんまり泊まれるところがないみたいじゃないですか。それに、わたしたちぐらいの年頃の人にもいませんし……」

写真の少年

「それじゃあ、君は千羽党の人間じゃあないわけだ」

千羽はいいとして、党って何だろう。時代劇に出てくる盗賊団とかじゃあるまいし——と、わたしは顔に出やすい方なんだろう。

写真の少年

「ああ、千羽は地名でもあってね。何しろ土地に住んでいる人のほとんどが、千羽の姓を名乗っているぐらいだし」

桂

「へー」

写真の少年

「かく言う僕も親戚つながりでね。一口で言えるほどには近くないんだけど、彼女とは遠縁にあたるんだ」

桂

「えっと……つまりは、あなたも千羽さん？」

写真の少年

「ははは、僕はケイだよ」

桂

「あれ？」

ケイ

「うん？ そんなに変な名前かな？」

桂

「いえ、わたしも桂なんです」

ケイ

「……それはまた」

桂

「奇遇ですねー、羽藤桂です」

あははと笑ってお辞儀をする。

ケイ

「ハトウ——ケイ——！？」

桂

「あ、はい。全国的に山田さんを圧倒して多数を占める、佐藤さんの『さ』の字を千羽さんの『ば』の字とおそろいにして羽藤です」

ケイ

「——」

桂

「桂は将棋の桂馬の桂——って、あれ？　どうかしました？」

ケイ

「いや、別に……」

と言いつつも、何でもなくはなさそうな様子。

おそろいなんて発言に、ひかれてしまったのかもしれない。

ふたりの間に漂う妙な空気を、灰かに甘い香りを含んだ風がさらっていった。

その風に散らされたのか、ご神木の白い花びらが舞い飛んでくる。

桂

「わ、紋白蝶みたい……」

ケイ

「エンジュの花びらは、よく蝶の形に例えられるね」

桂

「……エンジュ？」

ケイ

「鬼の木と書いて槐。この木の名前だよ」

桂

「鬼の……こんなに綺麗な木なのに？」

ケイ

「こんな木だからだろうね」

はらはらと——花びらの蝶が舞っている。

ケイ

「揚羽蝶——今でいう華やかな紋の蝶だけでなく、羽を立てる蝶をみんなそう呼んでいたらしいけど、揚羽蝶には『鬼車』という別名があってね」

ケイ

「それらが魂の乗り物と言われているからなんだろうね。中国では鬼という字は『キ』と読んで、死者の魂のことを指しているんだ」

鬼の木。

死者の魂の木。

桂

「魂を運ぶ、蝶の形をした白い花……」

ひらひらと——花びらの蝶が舞っていた。

国語の時間に習った荘子だったっけ。胡蝶之夢という、あまりに有名な言葉を思い出した。

蝶になった夢をみた。

私は私であること忘れて飛んだ。

しかし目覚めれば私は私だった。

私が蝶になった夢を見たのか。

蝶が夢見て私になったのか——

それは誰にもわからないことだけど、なぜ蝶の夢なのかはわかったような気がする。

それはきっと、蝶が——

ケイ

「北の地に住む人達にもね、死んだら蝶になるという伝説がある。彼らは槐を魔除けの木としていて、死者を弔う墓標としても使っていたんだよ」

桂

「魂が迷わずに……蝶に変われるように？」

ケイ

「それはどうかな。だけどこのご神木は、君の言う通りの意図をもって植えられたものだよ」

ケイ

「還ろうとしないある魂を、蝶の形に変えて散らそうとしているんだ」

桂

「あ……」

わたしの中で、何かと何かがかみ合った。

桂

「そうか、あの夢……」

ケイ

「夢？」

月の光のように青白く輝く蝶。

かすかに香る槐の花の甘い香り。

あの人が現れたのは、あの夢の後。

誰かに手をひかれた小さいわたしが、この場所へとやってくる、赤い夢を見たその後。

桂

「わたし夢を見たんです。そうか、そうだ、彼女がオハシラサマなんだ……」

ハシラさま。

羽白さま。

白い羽の——

——花びらの蝶が舞っていた。

ケイ

「見たのか……」

何かを諦めたような声で、彼が言った。

ケイ

「夢を……君は見たんだね？」

桂

「小さいわたしがここに来た夢を『忘れろ』って」

ケイ

「……………」

桂

「わたしはその頃のことを覚えていないんです。だから、あの夢の記憶だけがわたしの昔の記憶なのに、それを忘れろって……」

ここで、何かがあったのか。

わたしが忘れてしまっている何か。

何か——

頭の中を内側から叩かれる。

形に成ろうとしていた映像を、ぐちゃぐちゃに掻き回してしまう嵐、竜巻、渦、眩暈。

ぐらり——

視界にまで及んでくる頭の中の歪みに、わたしは身体の平衡を失ってよろける。

ケイ

「おっと」

力強い手が伸びて、倒れる前に支えてくれた。

ケイ

「大丈夫かな？」

桂

「あ……ありがとうございます。大丈夫です」

ケイ

「長話が過ぎたのかもね。日射病かもしれないよ」

桂

「そんなことは……」

ケイ

「それなら——あまり思いつめない方がいい」

桂

「えっ!？」

ケイ

「彼女が忘れろと言ったのなら、それは思い出さなくてもいいことなんだ」
わたしを襲った眩暈の正体を、知っているかのような口調で言う。

ケイ

「忘却は人に与えられた恩寵のひとつだよ。君はそれを受け入れた方が幸せになれる。今更、藪をつついて蛇を出すことはないんだ」
顔立ちは全然似ていないんだけど、こういう物言いやまなざしの強さは、やっぱり烏月さんと似ているかもしれない。

ケイ

「とにかく、忘れていることを無理に思い出そうとするのはよした方がいいね。何が出てくるのかわかったものじゃない。それこそ——」
飲み込んだはずの言葉が、どうしてかはっきりと聞こえた。

ケイ

「鬼が出るか蛇が出るか、果ては両方か」

桂

「——え？」

ケイ

「さあ、こんな話はこれぐらいにしておこうか」

まるで拍手のように——これでお開きだと、両手を一度打ち鳴らして笑った。

ケイ

「本当に長話をしてしまったね。君はそろそろ山を降りた方がいいよ」

桂

「今から何かあるんですか？」

ケイ

「山の天気は変わりやすいからね。特に最近の夕立は、ご神木を押し流してしまおうってぐらいの勢いがあるから」

桂

「はあ、それはすごいですね」

ケイ

「道もあんなで危ないし、慣れていない人は余裕を見て行動した方がいいんじゃないかな」

確かに、折り畳み傘は旅館の大きなかばんの中だから、降られると困る。

いや、持っていたとしてもこの山道で傘を差すなんて無謀もいいところ。降られると困るという結論は同じなんだけれど。

桂

「でもそれは余裕を見すぎじゃないですか？ 夕方までは時間があるし」

ケイ

「いやね、ここは一応、神域だから」

桂

「あ……」

そういえば彼——ケイさんだとわたしとかぶるからケイくん？ ——は、お祭りの準備か何かで来てるわけで、対するわたしは一般人。

桂

「あっ、はいっ、邪魔してすみませんっ」

ケイ

「邪魔だなんて思っただけじゃないんだけどね」

桂

「いえ、もう帰ります」

ケイくんだって、雨が降る前に用事をすませて帰りたいと思っているはず。

桂

「それじゃあケイくん、お邪魔しました。それとお祭りの準備、頑張ってくださいね」

わたしはぺこりとお辞儀をして、オハシラサマの神域から退出した。

バス運転手

「経観塚駅前です」

桂

「ありがとうございました」

バス運転手

「またのご利用をお待ちしています」

ステップを踏んで、硬い舗装道路に降り立つ。

桂

「んっ」

ようやく駅前に戻ってきた。

冷房の効いた車内は快適だったけど、三十分もじっと座っていると今度は外に出たくなる。

小さく伸びをして、外の気温に身体を慣れさせながら、わたしは商店街に向かって歩きだした。

それほどではないけれど、閑散とした駅前よりは賑やかで、とりあえず一通りのお店はそろってそう。

近くにお祭りを控えているので、提灯飾りなどが、ぼつぼつと軒先を彩っていたりもする。

とはいえ全体的に極めて地味。適度に色褪せていて、どちらかと言えば落ち着いた佇まいを見せている。

あ、だけどあれなんか派手だし、遠目に目立って見えるし——と思えば、飾りじゃないし。

町並みにそぐわない極彩色のそれは、移動する物体だった。

進行方向がこちらのようで、しだいに輪郭が良く見て取れるようになる。

車だった。

それも良く見る乗用車より大ぶりで車高の高い、クロスカントリー4WD——つまりは道が悪くてもへっちゃらな四輪駆動の車だ。

ちなみに車の見分けがほとんどできないわたしが、こんな言葉（略してクロカン）を知っているのは、とある人に教えてもらったから。

……にしても。

鳥居も真っ青の大型クロカンには覚えがあるんだけど、似たような車を選ぶ人は色彩センスまで似ているものなのか。

大きくなってくる朱色のそれは、見れば見るほど知り合いのものにそっくりで——

車上の女性

「桂」

桂

「はれ？」

その知り合い本人の車なんだから、そっくりなのも当然至極なんだけど——

車上の女性

「桂、こんなところで何やってんだい？」

桂

「……そういうサクヤさんこそ、なんでこんな所にいるの？」

見知った顔の知人が、見覚えのある車に乗って、見慣れない町の中にいた。

唐突に遊びに来たりする人なので、わたしの住んでる町でなら、ぼったり会ってもおかしくないんだけど。

サクヤ

「仕事だよ仕事。『日本に残された野生』とかいうテーマで、狸やら狐やら狼なんかの野生動物を撮ってきてくれたとさ」

桂

「サクヤさん、日本に狼は……」

サクヤ

「撮れたら学会報告モノだって？ まあ、運がよければ最後の一匹が見つかるかもしれないじゃないか」

桂

「代わりに幻のツチノコとかが見つかったりして」

サクヤ

「よしとくれ。蛇の化け物だなんて縁起じゃない」

桂

「あはは、サクヤさんにも怖いものってあるんだ」

サクヤ

「人生長いと色々あるんだよ——と」

伸ばした指がキーをひねると、低いうなりを上げていたエンジンが止まった。

サクヤ

「桂、しばらくぶりだねえ」

桂

「うん、お母さんのお葬式ぶり。あのときはお世話になりました」

ぺこりと頭を下げる。

頼れる縁者のいないわたしに代わって、お葬式の手はずを整えてくれたのが彼女。

お母さんの古くからの友人で、ルポライター兼フォトグラファーの浅間サクヤさんだった。

職業柄なのかいろいろなツテを持っている人で、相続周りのことをしてくれている税理士さんも、サクヤさんの紹介だ。

サクヤ

「いいんだよ。それでこっちにいるのは羽様の屋敷——笑子さんの屋敷の関係かい？」

桂

「うん」

笑子さんというのは、お父さんのお母さん。つまりはわたしのお祖母ちゃん。

例によってわたしは顔も覚えていないんだけど、サクヤさんはお祖母ちゃんとも面識があるとのこと。

サクヤ

「で、あんた羽様の屋敷には行ったのかい？」

桂

「……あ」

サクヤ

「間抜けな声だして、一体何だい？」

桂

「すっかり忘れてた」

サクヤ

「……何だって？」

桂

「お父さんの実家を見に行くの、すっかり忘れてた」

サクヤ

「……あんた、何やってんだい」

桂

「ううっ、ごめんなさい……」

なんでサクヤさんに謝らなくちゃいけないのかわからないけど。

サクヤ

「だけどその格好、山の方に行って来たんだろ？」

桂

「わかるんだ？」

サクヤ

「まったく、そんなぴらぴらした格好で山の中に入るんじゃないよ。ほら、頭の上にも——」
手を伸ばしたところで動きが止まった。

桂

「サクヤさん？ どうしたの？」
体をずらして見上げると、指には白い槐の花びら。

桂

「あ、それ、オハシラサマの」

サクヤ

「……桂」

桂

「な、なに！？」
低い声で呼ばれて驚く。

サクヤ

「あんた、あんなところまで行ったのかい？」

桂

「あんなところって、オハシラサマのご神木？」
その呼び方はどうかと思うけど、人も通わぬ山の中という地理的条件を考えると、それも仕方ないかもしれない。

サクヤ

「ああ、あそこに行って来たんだね？」

桂

「うん。お祭りがあるって聞いたんで、ちょっと見に行こうかなって……」
少なくとも、ちょっとで見に行く手近なところじゃないのは確かだけれど。

桂

「あはは……」

サクヤ

「……………」

桂

「まずかったかな。神社のああいうところって禁足地だっけ？ 立ち入り禁止になってたりするけど……」

サクヤさんは、言い訳するわたしの頭のでっぺんから爪先の端まで、じろじろ一通り眺めてからようやく口を開いた。

サクヤ

「……妙なことはなかったかい!？」

桂

「妙なことって？」

サクヤ

「そりゃあ……」

言葉に詰まって、視線をあさってに向けたり。

サクヤ

「……んんんっ」

咳払いなんかもしたりして。

そんな反応されるようなことは、何もなかったと思う。

桂

「変な夢なら見たけど、それ以外にはないかなあ」

サクヤ

「夢ねえ……」

桂

「あの山って、何か妙なことがあるの？」

サクヤ

「あー、その、なんだい」

あからさまに隠し事をされているような気がするけど。

サクヤ

「それは先日、郷土資料館から鏡が盗まれたことについてですか？」

女将

「あら、そういえばそんなことも。嫌ねえ、こんな田舎にまで泥棒だなんて」

女将さんもすっかり忘れてたみたいだけど、そんな事件も朝のニュースでやってたっけ。

女将

「羽藤さんには言っているんですけど、こちらではもうすぐお祭りがあるんですよ」

女将

「それで、てっきりそちらの取材で来られたのかと」

サクヤ

「はい、それは存じております。ですが、ここ十年ほどですっかり廃れてしまったと聞き及んでいるんですが……」

桂

「あ、でも今年は鳥月さんが来たから、少し賑やかになるんだって」

サクヤ

「鳥月って……もしかして千羽鳥月かい？」

桂

「あれ？ サクヤさん知り合い？」

サクヤ

「……まあ、あの家とも古い付き合いがあるっていうか、色々と因縁がねえ……」

わたしのお祖母ちゃんとも付き合いがあったということは、サクヤさんは昔から経観塚に出入りしてるということ。

鳥月さんの千羽の家も、お祭りを取り仕切っていた家と縁があるということだから、やっぱり昔からの行き来があるのだろう。

桂

「なるほど」

サクヤさんの様子からして、あまり友好的な関係とは思えないけど、知り合いということとは納得だった。

桂

「鳥月さんもここに泊まってるんだよ」

サクヤ

「げっ……」

とても嫌そうな声だった。

あんな勢いでは、たっぷりと蓄えた雨水もすぐに使い切ってしまうのだろう。

夕べに立つ雨と書くだけあって、晩のお膳が並ぶ頃には、屋根を叩く雨音は止んでいた。

緞帳のような雲がさあっと退くと、空は舞台装置をすっかり変えて観客を待ち構えている。

真っ暗な夜空に浮かぶ月――

その輝きがあまりに強いせいか、星は月の近くを避けた遠くで控えめにまたたいている。数日後に盛りを控えた上り調子の月は、そんな星など知らぬ顔。夕立に熱や埃を洗われて、実に涼しげに輝いている。

さて、それを見上げるわたしたち観客はといえば――

サクヤ

「烏月、なんであんたがここにいるんだい」

烏月

「私も宿泊客ですのぞ」

サクヤ

「あたしだってそうなんだよ。不快になるから、その面見せるのやめてほしいね」

烏月

「その言葉、そっくりそのままお返しします」

烏月

「だいたい、こちらの逗留先に乗り込んできたのはあなたの方でしょう。私が文句を言われる筋合いはありません」

あまり風流な状況にあるとはいえなかった。

美味しいもの食べたあとに温泉で月見だなんて、考えてみればものすごく贅沢してるんだけど。

桂

「はあ……お母さんと来たかったなあ……」

過労で倒れるぐらいなら、ちょっと生活切り詰めてでも、骨休めに来れば良かったのに。

ううん、いっそのことこっちで暮らせば好きなときに温泉に入れるんだし、持ち家だからアパートの家賃分は浮いたはずなんだけど。

そりゃあね、何も無いところだしわたしも住むなら向こうの方がいいけど、お母さんは……

……いやいや、お母さんもこっちだとお仕事が大変なのか。

在宅仕事の翻訳業は、ファックスとかメールなんかがあるから大丈夫だとしても、通訳業の方は交通の便の悪さとか問題があったのかも。

桂

「はあ～～～」

長々としたため息が、湯煙の中に響いた。

桂

「……あれ？」

何だか、静かになっていた。

桂

「どうしたの？ 烏月さんはともかく、サクヤさんまで黙っちゃって」

サクヤ

「桂、あんたそりゃあどーゆー意味だい？」

烏月

「言葉の通りでしょうね」

サクヤ

「あんたは……」

桂

「あはは……ふたりとも仲良くしようよ」

サクヤ

「それは無理ってもんさね」

烏月

「私は構いませんよ。サクヤさんが私の邪魔をしなければ」

桂

「サクヤさん、そんなことしてるの？」

サクヤ

「さてねえ。あたしはあたしの人道に基づいて行動してるだけなんだけど」

人の道に基づくのは大いに結構ですけどね、サクヤさん。

人道や正義なんていうものは、生まれや教育や宗教観で違ってくるわけで、それをグローバルに押し通そうとすると齟齬が生じるものなのです。

ストップ、独善。

サクヤ

「なんだい桂。その非難がましい目は？」

桂

「……鯨のお肉、美味しいのに……油から髭まで、ちゃんと無駄なく使ってたのに……ひどい」

サクヤ

「……はあ？」

烏月

「確かに意味不明ですけど……」

烏月

「サクヤさん、普段の行いが問題になっているんでしょうね」

サクヤ

「あんたらみたいな、時代錯誤を押し通すような連中には言われたくないよ」

烏月

「人のことを言いますか、あなたが」

桂

「そうだよ。大事な伝統を伝えているんだから、少しぐらい仕方ないよ。わたしのクラスにもお琴の名取りの人がいるんだけどね」

そのお凜さんも「そうですわ」とか、言葉遣いがちょっと変わってるし。

サクヤ

「あーあー、なんだい、なんだい。あんたぐらいの年頃だと、親をないがしろにして友人とつるみたがるもんだけど——」

サクヤ

「——母親べったりだった桂まで、その親友で付き合いの長いあたしより、ぽっと出の小娘の肩を持つんだねえ」

年甲斐もなくサクヤさんがいじけた。

正確にはいじけたフリを始めた。

こういう性格、お母さんとノリが合うはずだけど……

サクヤ

「伝統を大事にしたいんなら、もう少し年寄りをいたわるべきじゃないのかい」

桂

「年寄りって、誰が？」

欧米の人がやるように、親指を立てて自分の胸のあたりを指し示した。

桂

「……………」

烏月

「……………」

ああ、二の句が継げなくなるとはこういうことか——

そこは衰える気配など微塵もなく、ずるいぐらいに充実していた。

同性のわたしから見ても惚れ惚れするぐらいだから、世間半数の感想など推して知るべし。

大人の余裕が大爆発だった。

桂

「……いいもん。わたしたち小娘はまだ発展途上だもんね」

ざぱっと口が隠れるまでお湯に浸かり込む。

揺れる水面の上を滑らせて、同年代である鳥月さんに視線を移したわけだけ——
鳥月さんも、ずるかった。

桂

「……………」

ウエストなんかはわたしと変わらないのに、どうしてこうも違うのか。

待って、待って。身長との割合で考えればそれなりにいい勝負っていうか——ああ、それじゃあウエストがっ。

鳥月

「……桂さん、どうかしたのかい？」

桂

「ううん、別に」

鳥月

「それならいいんだ。私たちの大人気なさが、このいさかいには無関係の、桂さんまで不快にさせてしまったのかと思ってね」

桂

「ううん、鳥月さんは大人だよ」

鳥月

「うん？ そうかい？」

見上げた月は皓々と——

花鳥風月、雪月花。

風雅を表すこの言葉の両方に入っているのは、花と月。

花札の一杯役じゃないけど、日本人は月と花をよく愛でる。

さすがに桜は季節じゃないけど、この月夜にはあの槐の花吹雪も似合うかもしれない。

——と、槐という名前を教えてもらったあの人と言えは。

桂

「ふう……」

サクヤ

「なんだい、桂。もうのぼせたのかい？」

桂

「ううん、そんなことはないけど……」

わたしと同じ名前の彼に会ったことを、鳥月さんに教えておいた方がいいだろうか。

——いいだろうね、やっぱり。

携帯電話とか便利なものがあるんだから、もう連絡は取り合ってるのかもしれないけれど、一応確認もかねて。

桂

「そうだ鳥月さん。わたしケイクんに会ったよ」

サクヤ

「は？ 桂が桂に会ったって？ 何をとんちんかんなことを言ってるんだい、あんたは」

桂

「サクヤさんは黙ってて」

サクヤ

「へいへい。それで？」

桂

「ほら、鳥月さんの尋ね人の」

サクヤ

「へー、あんたが男をね」

桂

「もうっ、サクヤさんは黙っててって言ってるでしょ！」

桂

「鳥月さん、ちょっとあっちに行こう」

鳥月

「あ、ああ……」

桂

「サクヤさんは来ないでよね。小娘同士の内緒話なんだから」

サクヤ

「あんた、小娘ってねえ……」

桂

「ほらっ、鳥月さん行こう」

鳥月さんの手を引いて、温泉の端の方へざぶざぶと場所を移す。

桂

「それでね、烏月さん」

烏月

「ああ……桂さん、あなたは奴に会ったのかい？」

烏月さんは切れ長の目を細め、少し難しい顔をしてわたしに訊ね返してきた。

……もしかして照れてる？

桂

「でも、奴なんてそんな言い方……」

烏月

「呼び方を区別しないと、さきほどのサクヤさんではないが問題が生じるだろう？」

桂

「まあ、それは……そうだけど」

確かに本人同士なら、小さい子みたいに名前を一人称にしていなくても混乱することはないけど、第三者と話すとなると大変だ。

かと言って、ケイクンのことを「千羽くん」と苗字で呼ぶのも、烏月さん相手だと何だか変なわけで……

結局、烏月さんが「奴」と呼んで、わたしが「ケイクン」と呼ぶことに落ち着くんだけど……

何だかちょっと不満。

桂

「せめて彼とかにしなない？」

烏月

「いいんだよ、奴で十分だ」

烏月

「それで桂さん、どこで奴と会った？ 話はしたかい？ おかしなことはされなかったかい？」

桂

「ちょっ、烏月さん落ち着いてっ。とりあえず順番に話すからそんないっぺんにはっ」

陽子ちゃんのおかげで問い詰められるのは慣れてるけど、まさか沈着な烏月さんにまで……

桂

「えとね、会ったのはオハシラサマのご神木の前だよ。大きな槐の木の」

烏月

「……あそこは……神域のはずだ」

桂

「うん。やんわりと追い出されちゃった」

烏月

「……………」

烏月さんの顔がさらに難しくなる。

桂

「ううっ、やっぱり近くまでいっちゃったのはまずかったかな」

烏月

「……………」

桂

「あはは、それでね、ケイくんにはオハシラサマのご神木になってる、槐の木について色々教えてもらったんだ」

桂

「綺麗な木なのに、なんで鬼なんてついてるのかなって聞いたら、鬼っていうのは死んだ人の魂のことなんだって」

烏月

「説明はそれだけだったかい？」

桂

「あと、蝶は魂を運ぶ乗り物だとか、魂そのものの形だとか……………」

烏月

「……………」

桂

「他にもあるの？ わたしとしては、ちょっと認識大逆転って感じの豆知識だったんだけど」

烏月

「いやね。槐に付随しての鬼の知識なら、中国における『キ』の説明だけでも十分なんだが、鬼の説明としては不十分……………」

烏月

「……奴があなたには説明しにくいだろうことは、結局ぼかして話しているんだな、とね」

桂

「え？」

烏月

『キ』という外来の文字に結びついた、日本の『おに』については説明がないだろう」

桂

「でも、さすがにそれぐらい知ってるよ。わたしだって日本人歴長いもん」

桂

「あれだよな？ 桃太郎とか一寸法師に出てくる、虎の毛皮のパンツはいてる」

頭の中に流れていたのは、桃太郎じゃなくてフニクリ・フニクラの有名な替え歌だったけど。

烏月

「世間一般に普及しているイメージではそうだね。では、その鬼の中に『キ』と結びつく要因はあるかな」

桂

「えっ!？」

揚羽蝶と虎皮パンツの共通点——

桂

「黄色と黒？」

道路工事じゃあるまいし。

烏月

「桂さん、隠れるという漢字は『イン』という読みの他にも『オン』と読んだりするだろう」

桂

「あ、うん、えーと、公儀隠密……とか？」

烏月

「そう。今あなたが言った隠密——忍は、鬼と近いところにいる存在だ」

桂

「え？ 忍者が鬼？」

どう話か飛んだのかがわからなかった。

だいたい忍者の定番は黒装束。黄色と黒みたいに派手な色の組み合わせは——ああ、虎の毛皮も竹林とかでは迷彩になるんだっけ？

うーんと首を傾げるわたしに、烏月さんは「まあ最後まで聞きたまえ」と話を続けた。

烏月

『おに』はその『オン』という言葉からの転訛という説が推されていてね」

鳥月

「物に隠れて頭わるることを欲せざる故に、俗に呼びて隠と云ふなり——」

鳥月

「——と、本邦初の漢和辞典『和名抄』にもそう記されているんだよ」
えっと……

桂

「鬼から隠れるんじゃなくて、鬼が隠れるの？」
ひとつ解けたと思ったら、またすぐ次がやってくる。まったく、世の中は謎だらけだ。

鳥月

「逆だよ桂さん。順番が逆なんだ。あるものを鬼と認識し、鬼と名付け、鬼という鋳型に押し込むのは人間だ。人間が鬼をつくるんだ」

鳥月

「だから鬼が隠れるのではなく、隠れたもの、隠されたもの、隠れざるをえなかったものが鬼になる。それが原点の『おに』だ」

桂

「原点？」

サクヤ

「そう、原点——って、あんたら何を色気のない話をしてるんだい」

桂

「あーっ！？ サクヤさんはこっちに来ないでって言ったよね！？」

サクヤ

「まあねえ。とはいえジャーナリズムに関わるものとしては、耳をいつでもそばだてておく必要があるのさ」

桂

「……鳥月さん、無視しよう」

サクヤ

「あんたはそんなに冷たい子だったのかい？」

桂

「自業自得だよ」

鳥月

「まあ、長湯が過ぎるのも身体に障るだろうから、取り急ぎ話をまとめてあがりましょう」

鳥月

『キ』と『おに』とが結びついた要因だけどね、『おに』は『おに』とされた時から、人の世を外れて死者の列に連なることになるんだ」

鳥月

「死者が生前と変わらぬ姿で、現世に留まっているとすれば、それは——」

桂

「幽霊ってこと？」

鳥月

「そう。『おに』となることは『キ』になるということでもあるわけだ」

サクヤ

「今だって死亡届が受理されちまえば、そいつは死人の仲間入りだよ。単なる行方不明でも、七年続けば晴れて死亡認定さ」

桂

「なるほど……」

そういえば忍者やスパイは、捕まっても身元がばれないように、戸籍なんかは消しちゃってるんだっけか。

鳥月

「それとは逆からのつながりだけど、貴人が亡くなった場合には『お隠れになった』という言葉を使ったりするだろう」

桂

「あ、隠れる……」

鳥月

「いくら成り立ちを知ったところで、鬼は人に仇なす人ならぬものの総称として使われることになるんだけどね——」

鳥月さんが、湯煙の中に立ち上がった。

鳥月

「——奴のように」

ここは一体どこだろう。

しみが広がっている。

しみが広がっていく。

赤く歪んだ世界の中で、雫の滴る音に誘われ、しみがどンドン広がっていく。

両の頬を伝った雫が、顎で交わり滴り落ちた。
なぜかわたしは泣いていた。
ゆがむゆがむ、せかいがゆがむ。
泣いているから歪むのか。
このたくさんの、しみはわたしの――

どうしてこんなに泣いているんだろう。

しみが広がる。
だけどだけど、涙だけで、こんなにしみは広がるだろうか。
まるで水溜まりのように、夜空に浮かぶ月を映して――

水よりも重い音。
月は歪んでいる。
それは視界を阻む涙のせいでもあって。
とめどなく落ちる雫のせいでもあって。
ひとときたりとも円い姿を映さずに、ゆらと揺れてはいくつにもわかれ、歪んだ月の偽
者が熱の失せた光を投げる。
わからない。
今、空に浮かんでいる月は、本当に円いのだろうか。
わたしは顔を上げようとする。

ぱたっ――雫が頬を叩く。

ぱたっ――雫が額を叩く。
これは違う。涙じゃない。
考えるまでもないことだ。降ってくる以上雨に決まっている。
耳をたたく雨垂れの音。
そういえば夕方にも雨が降っていた。
あれ――？
雨は上がってわたしは月を――

そうそう、雨が降っているんだっけ。
月が出ているのに雨が降っているなんて不思議だ。出ているのが太陽なら狐の嫁入りだ
けど、月の場合は何て言うんだろう。

ぱたっ――飛沫がわたしにかかる。
雨だろうか。
雨だろう。
そういえば今は夏だった。
だからこんなに雨粒が温かいのか。
熱いぐらいの雨の雫が、ぱたぱたと。

つうっと滑った頬の雫が、唇の端から滲むように、じんわり口内に広がった。
ほんの少し、しょっぱい味で。
ほんの少し、甘い芳香を含んでいて。
ほんの少し、たった一滴だったにもかかわらず。
それが雨でも涙でもなく、もっととろりと濃いものであることがわかってしまった。
かあっと身体が熱くなり、そのくせ芯はぞっと冷たく、そのむせかえるにおいにくらりと――

ゆがむゆがむ、せかいがゆがむ。
赤く歪んだ世界の中で。
この赤は、この雫の赤は。
唇をぬぐおうとした手が――。
指の短い、頼りないほど小さい、あの夢で《視》た子供のころのわたしの手が――
その両のてのひらがべったりと――

――赤く赤く、濡れ輝いていた。

桂

「あ……」
細く幼くおびえにかすれた、まるで他人のような悲鳴。
わたしのものとは思えない悲鳴。

桂

「やだ……」
血まみれの手を否定したくて目をつぶる。
助けて、お母さん――
いつもいつも、わたしを守ってくれたお母さん。
だけどお母さんはもういなくて。
助けて――
あの人の顔が、ふっと浮かんだ。

てのひらが、わたしの両肩を包んだ。
その両手は大きくて、骨ばっていて、あの人の手ではなかったけれど、何だかとても安心できて。

誰だろうと目を開けるわたしの前に、ぽっかりと開いた穴があった。

そこから流れ落ちた血が、地面に大きな血だまりを作っている。

なおも吹き出る血の飛沫が、ぱたっとわたしの顔にかかった。

桂

「いや……なんで……」
わたしはむずがるように身体をゆすって、両肩にかかる手を振り落とす。

ずるりと、力をなくした手が落ちた。

ずるりと、命をなくした身体がかしいで。

「桂……」

最後に、わたしの名前を呼んで倒れた。

わたしの手から滴った血が、血溜まりに落ちて雨垂れの音をつくった。
わたしの身体は痛くはない。

痛くないのは、これがわたしの血ではないから。

桂

「いやあああああああ——っ！！」

精一杯に口を開いて、わたしとわたしは悲鳴をあげた。

鈴の音とともに幕が下りる。

目の前にある赤い景色を、わたしは闇の帳の中に隠そうとする。

桂

「——っ！！」

がばっと布団を跳ね上げて、わたしは目覚めた。

昨日よりも月は明るく。

布団に落ちるわたしの影も濃い。

桂

「はっ、はっ、はっ、はっ——」

息が荒い。べっとりとした寝汗をぬぐうのも忘れて、わたしは荒い息を吐く。

この息苦しさ、わたしは本当に悲鳴をあげていたのか。

だとしたら、なんて迷惑な。

桂

「は……」

桂

「はははは……」

やがて呼吸は乾いた笑いとなった。虚ろで、少しかすれていて、耳障りな嫌な笑いだ。

桂

「あははははははっ」

それはヒステリックに吊り上がっていく。

自分の中の嫌な何かを吐き出すという点では、悲鳴とたいして変わりなかった。

ひとしきり笑いつづけて、ようやくわたしはまともに戻った。
白い両のてのひらで、顔をぬぐうように覆ってうつむく。

桂

「夢——だよ、やっぱり」
大きく嘆息。
わかっているけど怖かった。
何だろう、この夢は。
昨日の夢で見たものは、本当にある森で、家で、大きな樹で——
だとすると、だとすると。

今日見た不吉な赤い夢は——

——

「残念、起きてしまったわ」

桂

「誰っ!？」

怯えるわたしをからかうような、あどけなさを残した声に、恐る恐る顔を上げる。

——

「うふふっ、楽しんでもらえたかしら？」

顔を覆った指の隙間から、声の主を覗き見る。
細い陶器のような素足が、蒼い闇のなかで月光を弾いて、ほの白く浮かび上がっている。
赤い鼻緒のぞうり履き。
右の足首には金色の鈴。
その足が一步前に踏み出されると——

そうか、この音はあの子が近づく音なのか。
わたしの視線はのろのろと、転んだことのないような綺麗すぎる膝から、柔らかな丸みを帯びた、細くしなやかな太股へと上がっていく。
それが見て取れるほど、着物の裾が短い。
女の子の脚だ——と、思った。
それを裏付けするように、膝にも届く袂の長さに気付く。
右は鳩羽鼠に花の染め抜き、左は薄紅。青と白とのあの人とは対照的な、非対称の振り袖だった。
それにしても、この着物は——

桂

「……んっ」
思い出すなど、赤い痛み。
わたしははまだ夢に囚われているのだろうか。

いや、これは夢じゃない。
わかっている。
わたしは指に力を入れて、顔に食い込む爪の感触に、赤い痛みを紛らわせる。

薄紅の花が揺れる。足音の代わりに鈴が鳴る。

桂

「……あなたは……夢の中の……」
あの人の邪魔をする、歌うような調子の声の。

——

「ふふふふ——」
金縛りに遇ったように、わたしの身体は固まっている。
口を、指先を、視線を——身体の端々をわずかに動かせる程度にとどめられ、布団の上から立ち上がることもできない。

わたしよりも背の低いその子が、わたしの傍らにまで近づいて。

身体をかがめて、わたしの顔を覗き込んだ。
目の端に差された紅。

その紅より赤い、血溜まりのような大きな瞳の表面に、怯えたわたしの顔が映っている。

その目が満足げに細められる。

小さな唇の両端が軽く持ち上がる。
どこか含みのある、獲物を捕らえた猫のような微笑。

——

「ふふふふふふつ」

クスクスという笑い声が耳たぶをくすぐった。
小悪魔めいた、からかうような笑い声だった。

桂

「あなたは——誰？」
部屋には鍵がかかっている。
なのにこの子は部屋の中において。

桂

「あなたは——何者？」
普通の子ではないと思う。第一、今時こんな着物を着てる子なんて。

桂

「あなたは——」

——

「ノゾミ」

鈴にも負けない、澄んだ高い声で言う。

ノゾミ

「私はあなたを迎えにきたのよ」

桂

「わたしを……迎えに……？」

ノゾミ

「そう。あなたは、あの女の——贄の血を引く家の子だから」

ノゾミ

「そうでしょう、ミカゲ？」

——

「はい……姉さま」

鈴が鳴った。

彼女は少しも動いていないのに鈴の音がした。

彼女の背後から、すうっと影がすべり出て並んだ。

赤と黒との二色の振り袖。

左足首には金の鈴。

赤い瞳と、色素の薄い、毛先が少し外向きにはねたようなかぶろ髪——

並んだふたりは鏡写しのようにそっくりで。

ただ表情だけが似ておらず、驕慢な彼女に対し気弱に眉を下げていて。

……双子？

そんな何の変哲もない言葉が、わたしの心臓を驚かせた。

桂

「はっ……」

なんで、どうして、そんな言葉で。

この痛みは、一体何なんだ。

迎えに来ただとか、あの女だとか、贄の血だとか、もっと他に重要そうな言葉が出ているというのに、どうしてわたしはこうズレてるんだろう。

ノゾミ

「さあ、私たちと行きましょう」

桂

「……待ってよ、わたし全然わからないよ。あなたたちは誰？ 贅の血って何？ 行くって一体どこに？」

すっかり混乱してしまったわたしが訊ねると、最初の彼女は傲然と顎をあげ、冷たい目でわたしを見下した。

ノゾミ

「私はノゾミよ。さっきも言わなかったかしら」

——

「私はミカゲ——」

ノゾミ

「私の妹。お父様に捨てられちゃった、可哀相な私の妹」

ミカゲちゃんの後ろに回ったノゾミちゃんが、ミカゲちゃんを押しつぶすように抱きつきながら、言葉を継いでそう言った。

ノゾミ

「私は妹がいるだなんて知らなかったのだけど、可哀相だから助けてあげたの。そうよね？」

ミカゲ

「はい……姉さま」

ノゾミ

「それにしても」

滑るような動きでミカゲちゃんから身体を離れたノゾミちゃんは、今度はわたしのおとがいに指をかけて、強引に視線を吸いつけてくる。

ノゾミ

「あなた、本当に忘れてしまったのね？」

ミカゲ

「ほんの少しも覚えてないの？」

ノゾミ

「せっかく思い出させてあげようとしたのに」

ミカゲ

「あなたは途中で目覚めてしまった」

……え？

あの夢はこの子たちが？

だとすると、このふたりは、わたしの知らないわたしのことを知っている。

桂

「ね、ねえっ。だったら知ってるかな？ ちょうちょの柄の青い着物を着た——」

ノゾミ・ミカゲ

「あははははははっ」

私の質問を、ふたりは笑い声でさえぎった。

何となく悪意を感じる、嫌な笑い声だった。

ノゾミ

「まったく、苦勞をかけてくれるじゃないの」

ノゾミ

「どうやったのかは知らないけど、つい最近まで綺麗に血のにおいを隠していたし」

ノゾミ

「都合よくこちらに来たと思ったら、邪魔者まで一緒だし。あなたの言う、蝶の着物のあの女と」

ミカゲ

「当代の鬼切り役」

ノゾミ

「本当にあなた、苦勞をかけてくれるのね」

ずっと細まった目のなかで、血を張った水鏡のような瞳が揺れて、妖しげな光がゆらりと。

ノゾミ

「だから——」

長い髪を払うようにしておとがいから滑る指がくっと曲がり、力が込められた。

ノゾミ

「こんな所ではしたないけど、少しだけもらってしまおうかしら」

喉の柔らかい部分に、ノゾミちゃんの爪が食い込んだ。

刃物を突きつけられたように、身体が縮こまって、つばを飲み込むことさえも、恐る恐るのものになる。

桂

「も……もらうって、何を……？」

ノゾミ

「あなたの、血」

ミカゲ

「特別な血」

後ろからの声とともに髪の毛をかきあげられ、一瞬、首筋があらわになった。
ぞくり——と、背筋に寒気が。

桂

「か、勘違いしてないかな？ わたしの血って、普通だよ？」

ノゾミ

「そうかしら？」

桂

「そうだよ」

ノゾミ

「ふふっ、知らないのね」

ミカゲ

「本当に何にも知らないのね」

ノゾミ

「羽藤だったかしら？ あなたの血筋は特別なよ。まぎれもなく特別な血を伝えているの」

ミカゲ

「それが贅の血」

桂

「贅の血……」

ノゾミ

「あらゆる呪術で使われているように、血そのものに特別な力があるのは知っていて？」

ミカゲ

「力の『ち』であり命の『ち』——」

ノゾミ

「形ある肉の一部でありながら、形のない魂の一部でもあるの」

ミカゲ

「すなわち両義を生む太極」

ノゾミ

「万物の根源」

ミカゲ

「トコタチ、サツチ、カグツチ、オロチ——チは神霊そのものを表す言霊」

ノゾミ

「だから人は血を捧げるのよ」

ミカゲ

「贅の血を」

桂

「贅の血……」

ノゾミ

「血には貴賤があるのよ。あなたの血はね、とても純粋で尊い」

ミカゲ

「やしおりの酒が、主さまの遠祖を酔い潰してしまったように」

ノゾミ

「とても濃くて強いよ」

ミカゲ

「八十、八百、八千の人の血を、飲み干してもなお吊り合わないほど」

ノゾミ

「神でも鬼でも、何でもいいわ。あらゆる人でないモノは、あなたの血を飲むことで、より大きな存在になることができるの」

桂

「より大きな……？」

ノゾミ

「そう。強い《力》を手に入れられるの」

ミカゲ

「だからとても特別なの」

ノゾミ

「だからみんなが欲しがるのよ」

ミカゲ

「そして奪い合いになる」

ノゾミ

「この土地には強い封印があるから、ここにいる限り、外のあやかしに嗅ぎつけられることはないけれど」

ミカゲ

「だから、血が絶えず今まで残っているけれど」

ノゾミ

「今も昔も贄の血の持ち主は珍しいのよ。誰もがあなたのように、血の匂いを隠せるわけではないから」

桂

「もし、隠せなかったら……」

ノゾミ

「ふふっ、わかるでしょう？」

ノゾミ

「隠れないと」

ミカゲ

「逃げないと」

ノゾミ

「鬼に捕まったら、食べられてしまうのよ？」

ノゾミ・ミカゲ

「うふふふふふふ——」

可愛らしい唇の端が、酷薄そうに吊り上がる。

赤く揺れる瞳が近づいてくる。

ノゾミ

「だからその貴重な血の持ち主は、大事に大事に育てられて、崇めるモノに喜んでもらうために」

ミカゲ

「畏れるモノの機嫌をうかがうために」

ノゾミ

「生け贄として捧げられてきたのよ。ずっと神代の昔から」

……知らなかった。

わたしが、わたしのお父さんやお祖母ちゃんが、そんな血を身体に流していたなんて。

ああ、あの夢——

あの人——お父さんは、お化けのせいで——

桂

「——！？」

違う、違う、違う、違う！

うちにお父さんがいないのは、火事のせいだってお母さんがっ！

桂

「はあ——はあ——はあ——はあ——」

ノゾミ

「……ふふっ、強情なのね」

桂

「ごっ、強情なんかじゃっ」

ノゾミ

「いいわよ別に。弱い子よりはそのぐらいの方が好きだもの」

桂

「……………」

ノゾミ

「ますますあなたが欲しくなってしまったわ」

ふいっと首筋に食い込んでいた手が引かれ、わずかに気が緩んだのも束の間——

まだ下半身を覆ったままの掛け布団越しに、わたしの脚にまたがるように、ノゾミちゃんは膝をついた。

今度はわたしが見下ろす形になったんだけど、別に立場が変わったわけじゃない。

上目遣いにわたしを見つめる赤い瞳は、獲物を前にした小型の肉食獣のよう。

珊瑚色の舌を唇に伸ばして——舌舐めずり。

わたしは追い詰められていた。

桂

「あ、あなたも……血を吸う、お化けなの？」

ノゾミ

「あら——」

彼女の目が意外そうに円く開かれ、すぐに潰れて細くなる。楽しげに、嬉しげに。

ノゾミ

「うふふっ、私が人間だとでも思っていたの？」

ふっと視線がぶれ、迫っていたノゾミちゃんの顔の代わりに、木目の渦巻く敷目板が。

背後から、左右の頬から顎にかけてまわされたミカゲちゃんの両手が、わたしの首をそらす形で上を向かせていた。

にじり寄ってくるノゾミちゃんの気配。
首筋に息がかかる。
体温を感じさせない、冷たい吐息。
ぶつぶつと肌があわ立った。

桂

「はっ……やっ、やめ……」
鼻にかかる声。滲んだ涙で天井がぼやけた。
がっちり押さえられているわけじゃないのに、顔にかかった指先から力が吸い取られてもしているのか——

身動きできないわたしの両肩に、ノゾミちゃんの手が乗せられた。

ノゾミ

「だから、少しもらうわよ。大丈夫。痛くはしないから……ね？」

首筋に冷たくて柔らかい唇が触れ、次の瞬間、その真ん中に当たる硬い感触。

桂

「やっ……やだっ、いやだよっ……」
唇がゆっくりと形を変える。当てられた上下の歯が、地ならしするように肌に食い込みながら、距離を開けていく。

桂

「——」
首の皮を間に挟んで、開いていた歯が閉じられた。かまれた——といってもごく軽く、別に痛くはなかったけれど。
ただ、そのショックで表面張力いっぱい溜まっていた涙が零れてしまった。
上を向かされているにもかかわらず、ぽろぽろと涙が零れ落ちる。

ノゾミ

「あら……痛くしないって言ったのに、こんなに怯えて可哀相」
いったん首から口を離れたノゾミちゃんは、からかうような猫撫で声でいいながら、わたしの目元に指先を伸ばした。

桂

「——ひあっ」
目をつぶって、ぎゅっと身体を縮めるわたし。
ついつと涙がぬぐわれた。
……え？

それを舐め取ったのか、少し湿ったような音。

ノゾミ

「んっ……やっぱり血じゃないと駄目ね」

ミカゲ

「姉さま、おいしい？」

ノゾミ

「しょっぱいわ」

本当に、わたしはおもちゃにされていた。

どうしてこんなことになってしまったんだろう。

昨日あの人に言われたように、すべてを忘れてしまえば良かったのか——

と、そのとき。

……よし、決めた。

運動神経や、それを補う根性に自信のないわたしは、普段なら大人しく泣き寝入りしていたはず。

たとえ彼女たちが見た目通りの、わたしより十五センチも背が低い、普通の女の子だったとしても。

でも、今ならば。

今のわたしは、かなり頭にきてるのだ。

そして、触るだけなら、わたしにだってできると思うのだ。

決めた、決めた。やってやろうじゃないか。

すうっと大きく息を吸って——

ううん、やめておこう。

そんなことをしても脚を引っ張るのが関の山というか、何となく結果が見えた。

向こうも帰るって言ってるんだし、ここは大人しくしているのが吉だろう。

鈴の音が、わたしの意識を引き戻した。

見るとノゾミちゃんとミカゲちゃんは、背中を向けて暗がりへと消えていくところだった。

ノゾミ

「今は大人しく退くけれど——でも」

ミカゲ

「次にあなたが邪魔をするようなら」

ノゾミ

「でもまあ、絶対に邪魔するでしょうね。だって、それがあなたの存在理由」

ミカゲ

「《力》の本質」

ノゾミ

「だから、またすぐにぶつかるでしょうけど、そのときは本気で相手になってあげてよ？」

ノゾミ

「本当はここで始末をつけたいぐらい」

ミカゲ

「存在を消滅させたいほど」

ノゾミ

「あなたのことを憎んでいるんだもの——でも」

ミカゲ

「まだ《力》が足りない。機が熟していない」

ノゾミ

「だから、今日のところは退いてあげるの」

ミカゲ

「ごきげんよう——」

そしてふたり同時に、鏡写しの動作で肩越しにこちらを振り返って。

ノゾミ・ミカゲ

「——主さまによろしく」

闇に溶け込むように、忽然とその姿を消してしまった。

桂

「ふう……」

夢見も悪ければ、起き抜けなんかはもう最悪。

実際はそれほど長くなかったんだろうけど、ようやく胸を撫でおろせそうだった。

桂

「やっと帰ってくれたよ……」

ユメイ

「……………」

桂

「ユメイさん？」

ユメイ

「……ええ、何とかあったわね」

なのに、彼女の表情はいまひとつ。
周りを群れ飛ぶ月光の青白さを映してのこととは思うけど、とても血色がいいとは言えない顔色をしていた。

桂
「ユメイさん……大丈夫？」

ユメイ
「ええ、大丈夫よ」
そう言って腕を振ると、光はゆるりと拡散して部屋は自然な暗さを取り戻した。
顔色はやっぱり普通……かな？

ユメイ
「それより桂ちゃんこそ、目が真っ赤よ？」

桂
「え……？」

ユメイ
「ごめんなさい。わたしがもう少し早く、形に成れば良かったんだけど——」
すっかり乱れてしまったわたしの髪を、手櫛で梳いて整えながらユメイさんが言う。

桂
「あ……」
そういえば、お母さんにもよく梳いてもらってたっけ。
安心できる優しい手の感覚に緊張がすっかりとけると、堪えていたぶんがぼろぼろと。

桂
「うくっ……」
お母さんのことがあってからこしばらく、涙腺のしまりが悪くて困る。

桂
「うー、ハンカチどこだー」

普段はちゃんと持ってるんだけど、生憎と今は寝起きの浴衣。
自分の荷物から探し出すより、ユメイさんが部屋備え付けのボックスティッシュを見つける方が早かった。

ユメイ
「はい、桂ちゃん」

桂
「あ、ありがとうございますー」

用意してもらったティッシュにすっかり涙を吸わせた後で、もう一枚。

桂

「ぶび〜〜〜っ」

鼻をかんだらすっきりした——と。

ユメイ

「……………」

静かな瞳がじっと見ていた。

桂

「あの……………」

ユメイ

「なあに？」

桂

「あのですね、鼻をかんでるのを見られるのって、何だかすごく恥ずかしいんですけど……………」

目の次はとばかりに、顔全体を赤くしたわたしが訴えると。

ユメイ

「ふふ——」

するとユメイさんは、昨日今日で初めて見せる、ごくごく自然な普通の笑顔を浮かべた。

あ——

ユメイ

「ごめんなさい。桂ちゃんも、もう子供じゃないのよね」

桂

「——」

ユメイ

「…………桂ちゃん、どうしたの？」

一瞬、何かを思い出しかけて、呆けてしまったわたしに訊ねる。

桂

「ううん、何でもない」

桂

「それよりユメイさんこそ、本当に大丈夫？」

ユメイ

「心配してくれるのね。大丈夫よ」

そう言った瞬間、透明な微笑が本当に透けて見えて。

——って、何!?

桂

「今、なんかゆらって揺れて消えちゃいそうだったよ!? 全然大丈夫じゃなさそうだよ!？」

ユメイ

「大丈夫なのよ、桂ちゃん」

ユメイ

「こうして成した形を保つのに必要な《力》が、足りなくなってきただけだから」

桂

「それって、ちっとも大丈夫じゃ——」

特別な力を使わなくても、この形を保つだけでも消耗して、結局は消えてしまうというのか。

……そんなのって。

ユメイ

「桂ちゃん、そんな顔しないで」

桂

「でもっ」

ユメイ

「この形はかりそめだから。保てなくなっても、わたしが無くなってしまうわけじゃないのよ」

ユメイ

「ぜんまいに溜められた力を使い切ってしまった時計は、ねじが巻かれるまで時を刻むことを止めてしまうでしょう？」

ユメイ

「でもそれは、壊れてしまったわけじゃない。そういうことなの」

穏やかな顔が、それが本当だと教えてくれている。でも——

桂

「でもっ、それならユメイさん、そんなにのんびり構えてないで、早く楽な形に戻ってよっ」

焦れて焦れて。

桂

「そうして笑って立ってるのだって、実はすごく大変なんだよね？ 《力》の無駄遣いしてるんだよね？ 勿体ないことしてるんだよね？」

問い詰めるように早口になるわたし。

そんなわたしとは対照的に。

ユメイ

「それは違うわ、桂ちゃん」

ユメイ

「別に勿体なくも、無駄でもないのよ。少し大変なのは本当だけど、わたしが好きでやってることだから」

彼女は鷹揚に首を振った。

ユメイ

「形があるから——」

ユメイ

「こうして桂ちゃんに触れることもできる」

伸ばされたユメイさんの手が、頬をかすめるようにして髪に梳き入れられた。

桂

「あ……」

ユメイ

「ね？」

桂

「うん……」

ユメイ

「こんなに伸ばすの、大変だったでしょう」

桂

「お母さんが、伸ばせ伸ばせって」

ユメイ

「そう。良く似合っているわ」

桂

「あはは、だといいけど」

ユメイ

「でもこれだけ長いと、この櫛では少し足りないかしらね」
いつの間にかどこからともなく取り出していた梳き櫛を、残念そうにじっと見つめて、ふうっと息を吹きかける。

その息に触れる端から櫛は光の粒と換わって、さらさらと形を崩していった。

ユメイ

「桂ちゃん、あなたのを貸してくれる？」

桂

「あ、うん、ちょっと待ってね」

ブラシは頻繁に使うものだから、荷物の中でも出し入れしやすいところに入れてある。

それにしても——

ユメイさん、櫛は出してもブラシは不可とはこれいかに？ やっぱり和服を着るぐらいだから、和風のものしか出せないとか？

ユメイ

「立ったままではやりづらいから、見つかったらこっちに座ってね」

桂

「はい」

ああ、わたしは大ばかだ。考えるまでもないことなのに。

かりそめにでも人の形を創れるんだから、櫛一枚なんてお茶の子さいさい。ブラシだって五十歩百歩。

だけどその形を維持するには《力》が必要で、一瞬とはいえ存在があやふやになるほど、ユメイさんの《力》は残り少なくなってきている。

それこそ、ブラシー一本ぶんの無駄を惜しむほどに。

どうしてそこまでして一緒にいてくれるのか、わからないけれど。

どうしてそこまでして助けてくれるのか、わからないけれど。

そんな彼女に報いるには、わたしは一体どうすればいいんだろう。

ただの人間でしかないわたしが、人間じゃないユメイさんに、何をしてあげられるというのか。

人間じゃない——ああ、そうだった。

全然怖くないから忘れていたけど、ユメイさんもノゾミちゃんやミカゲちゃんと同じような存在なんだよね。

……………

……だとすると。

桂

「ね、ねえ、ユメイさん」

ユメイ

「どうしたの？」

桂

「わたしの血……飲む？」

ユメイ

「桂ちゃん？」

桂

「わたしの血を飲めば、ユメイさんも元気になるんだよね？」

わたしの中に流れている血は、人間以外のモノに強い《力》を与えるという、あまり普通じゃないものらしい。

わたしのために使った力を、わたしの血で補うのは、とても道理にかなっている。

桂

「だからユメイさん——」

ユメイ

「いいのよ桂ちゃん、気にしないで」

首をゆっくり振る仕草で、わたしの言葉を押し留める。

桂

「でも……」

ユメイ

「桂ちゃん。大きな矛盾があればあるほど、それを突き通すには相応の代償が必要になるのよ」

道理を引っ込めるためには、無理を通す必要がある。

ユメイ

「この形はまやかしのようなものだから。今のわたしは明確な形を持たない、想いだけの存在のようなものだから」

ないはずのものがあることにするには、どれだけの力が必要になるんだろう。

形なきものを、世界に影響を及ぼす確かな存在とするには、どれだけの法則に逆らい、そして打ち破る必要があるんだろう。

それはきっと、気が遠くなるほどの——

桂

「……………」

ユメイ

「夜の暗さは、矛盾や不確かさを包み隠してくれるわ。だからわたしの《力》でも、こうして形を成すことができた」

闇の中では確かなものさえ不確かになるから、結果として両者の位置は近づくことになる。

ユメイ

「だけど——」

その認識こそが錯覚。

ユメイ

「明日の朝日が昇ったらわたしは消えてしまう。たとえ桂ちゃんの血を飲んだとしても」
結局そういうことなのだ。

違いは白日の下にさらされて、まざまざと思い知らされるだけ。

ユメイ

「だから、そんなことのために桂ちゃんが身体を傷つけることなんてないのよ」

でも——

でも、だからといって——

ユメイ

「桂ちゃん？」

桂

「うん……」

ああ、駄目だ。

どうしてかわたしは、ユメイさんの言葉に強く逆らうことができない。諭されてしまう。

だからこういう風に言われると、強く勧めることができなくなってしまふ。

でも——

それじゃやっぱり、わたしの気がすまない。

桂

「……よし」

ブラシ以外に洗顔フォームや爪切りなど。身支度に必要なアメニティグッズをまとめたポーチから、ソーイングセットを取り出した。

基本色を押さえた糸のほか、はさみや予備のボタンやホック、安全ピンなどが入っている。

もちろん、針も。

わたしは銀色に光をはねる針をつまみあげて、細くとがったその先端を、左手の人差し指に近づける。

桂

「……ごくっ」

背中とお尻に逆撫でされたようなむずがゆさを感じて、何だか落ち着かない。

針で刺すぐらい大したことない——って頭ではわかっているけど、やっぱりちょっと怖い。

ううっ、お裁縫をしているときには何度も指に刺しているのに。
玉葱をみじんにしようとして、包丁でざっくりやったときなんかは、比較にならないほど痛かったはずなのに。
それでもいざ自分で刺そうと思ったら、これがけっこう恐かったりする。
誰だ。「切腹できないお侍さんは弱虫」だなんて言ったのは。

ユメイ
「桂ちゃん、見つからないの？」

桂
「あああ、あったよ、今見つかったところ！」

ユメイ
「……そう？」
ああ、もう時間がないっ。
硬く目をつぶって、深呼吸を一回。
ええい、女は度胸！

桂
「いっ！」
……………
……ちょっと気合い、入れすぎたかな。
涙が滲むぐらい痛かった。
潜り込んだ冷たい針の感触と、じんじんと熱が集まっていく指先の温度差が、何だか変。
針を抜くと、赤い雫が山になってふるふる震えた。
よし。気を使わせちゃ駄目なんだから、笑顔、笑顔——と。

桂
「あはは、ユメイさーん」
こぼさないよう傷口を上に向けたまま、とっくに見つけていたブラシを右手に、ユメイさんに顔を向ける。

桂
「ちょっとソーイングセットが、荷物の中でばらばらになってて、それで針がね——」
少し不自然なポーズの原因、左手の人差し指を見咎（みとが）めたユメイさんが、眉をひそめた。

ユメイ
「桂ちゃん」

桂
「はい……」
このぐらい覚悟の上で自分で決めてやったのに、途端に恐縮してしまうから、わたしはとことんこの人に弱いらしい。

ユメイ

「桂ちゃん、何てことするの」

桂

「ううっ……」

もちろん、わたしだってこんな嘘が通じるなんて思ってなかったけど。

桂

「でも、もうやっちゃったことだし……」

ユメイ

「仕方のない子」

ため息交じりの言葉には、それでも微かな笑みも混じっていて。

ユメイ

「ほら、こっちにいらっしやい」

桂

「うん」

ほっと肩の力を抜いて立ち上がると、その勢いでぷっくりふくらんだ血がはじけて広がった。

桂

「ああっ……」

慌ててブラシを放り出した右手で、零れ落ちる雫を受け止める。

やっぱり深く刺しすぎの模様。刺し傷にしては勢い強いし、これはなかなか止まらないかも。

ぽたぽた落ちる滴りを右手で受けながら、急いでユメイさんのところに向かう。勿体ない。

ユメイ

「桂ちゃん、見せて」

桂

「うん」

差し出したわたしの左手を、真っ白な肌に色がつくのも構わず、両手で優しく包み込む。

握った手と手のわずかな隙間を、流れ込んだ血が埋めていった。

ユメイ

「……………」

桂

「……………」

真っ赤に濡れた人差し指を、顔の間近までひきつけて見つめるユメイさん。
その顔をじっと見ているわたし。
彼女の瞳が動いて、わたしの視線を真っ直ぐにとらえた。

ユメイ

「……いいの？」

桂

「うん。じゃないとわたしの痛い損」

ユメイ

「そう、わかったわ」

顔をうつむかせて指先に唇に近づける。
赤い花の蜜に惹かれているかのように、髪留めの青い蝶がゆっくりと降りていく。

さらりと癖のない黒髪が零れ、垂れた前髪の間隙から、わずかに伏せた目が垣間見える。
わ、まつげなんかすごく長いし。
月光の欠片を従える、幻想的な姿は言うまでもなく、そういった雰囲気差し引いても、
掛け値なしに綺麗な人だった。

桂

「……ごくっ」

何だか緊張してきた。
心臓が高鳴ると、そのときどきにあわせて指先のずきずきが強くなる。

ユメイ

「は——」

神経過敏になりつつある指先が、しっとりと水気を含んだ吐息を察知した。
そろりと伸ばされた舌が、指先に触れた。

ユメイ

「んっ」

小鳥が餌をついばむように、舌の先端だけで控えめに拾い上げる。
傷口の熱と舌の熱とが一瞬だけ溶けあって、次の瞬間に割って入る空間が熱を奪って
いく。
何とも言えない変な感覚が幾度か繰り返された後、ユメイさんは舐め取るような動きで
舌を引っ込めた。

ごくっ——

小さく喉が上下に動き、続いて少し長いため息。

ユメイ
「ふう……」

桂
「……ねえ、ユメイさん」

わたしの問いに顔を上げた彼女の頬には、わずかに赤みが差していた。

桂
「すごく今更なんだけど、わたしの血って、本当にその、特別なの？」

ユメイ
「ええ、桂ちゃんの血は特別よ」

桂
「元気出そう？」

ユメイ
「ええ——」

熱い吐息まじりの返事をする、さっきよりも深くうつむき、さっきよりも長く舌を伸ばした。

ユメイ
「は……んっ」
指の根元あたりから指先へむかって、べっとりと赤い表面をぬぐうように舌を這わせる。

桂
「ひゃうっ」
少しざらざらした舌の表面が、ずぞっと血をさらっていく感覚が背筋にきた。
お団子のタレとかシュークリームのクリームなんかはよく指にくっつくけど、そういうのを自分で舐めても何ともないのに。

そして指先がすっかり綺麗になると、口を離してわたしに訊ねた。

ユメイ
「んっ……くすぐったかった？」

桂
「だだっ、大丈夫！」

ユメイ
「わたしならもういいのよ？」

桂

「ううん、せっかくだから、どぼどぼ一っとなんじやってよ。ほら、まだ止まってないし」
もうぷっくりとした珠にはならず、じわっと指紋にそって滲むように。
……どぼどぼ一っというのは無理だ。

ユメイ

「でも、それで桂ちゃんが弱ってしまったら、元も子もないわ」

桂

「大丈夫、大丈夫。ほら、献血だと二百ミリとか採るわけだし、そうそう、トマトジュース一缶分ぐらいなら全然平気？」
いや、だから無理なんだってば、わたし。

ユメイ

「……ありがとう、桂ちゃん」

桂

「あはは、この傷だとさすがにそんなには出ないと思うけどね」

ユメイ

「十分よ」

そう言ったユメイさんは、ふふっとほころばせた唇をわたしの指に押し当てて、そのまま指先を口の中に含んだ。

ユメイ

「はふ……んっ」

ぐっと引っ張られるような感覚に少し戸惑う。

なるほど、血を吸われてるって感じがする。

……だとすると？

だとすると、どうしろと？

血を飲んでもらえばいい？

それは——どうだろう。

ユメイさんは、ノゾミちゃんに血を吸われそうになったわたしを助けにきてくれたわけで、そのユメイさんに血を飲ませるのは——どうだろう。

ユメイ

「……桂ちゃん？」

桂

「はい！？」

ユメイ

「桂ちゃん、見つからないの？」

桂

「あああ、あったよ、今見つかったところ！」

わたしはアメニティグッズをまとめた旅行用のポーチのからブラシを取り出して、ユメイさんのところに向かう。

余計なことは考えるんじゃない、わたし。

桂

「はい、ユメイさん」

ユメイ

「これ？ いいブラシをつかっているのね」

桂

「誕生日にお母さんが買ってくれたの」

ユメイ

「そう」

桂

「ZASAと極秘裏に共同開発した新素材製で、髪を傷める静電気が百パーセントカットなんだって。あとマイナスイオン効果とか色々」

ユメイ

「……？ よくわからないけどすごいね」

桂

「うん」

わたしがちょこんと膝をそろえて座ると、ユメイさんは美容師さんがそうするように、わたしの後ろに回り込んだ。

桂

「お願いします」

ユメイ

「ええ、任せてちょうだい」

手櫛で髪のはつれを直しながら数房によりわけ、そのうち一房を手にとった。

毛先に入れたブラシは特に引っかかることもなく、櫛通りよく外にでる。

ユメイ

「桂ちゃんの髪、柔らかくて綺麗ね」

桂

「うん。なんていってもZASAだもん。すごいよね」

ユメイ

「このブラシのおかげなの？」

桂

「たぶん」

ユメイさんはゆっくりと丹念に、髪を傷めないよう少しずつブラシをかけてくれる。
その気持ち良さに、ついついわたしは――

ユメイ

「はい、おしまい」

ぼんと頭を叩かれて、わたしは捕まえかけていた睡魔の尻尾を握り損ねる。

桂

「あ……」

ユメイ

「それじゃあ、桂ちゃんはまだ寝なさい」

桂

「でも……」

ユメイ

「あなたは昼の世界に生きているんだから。そのことを忘れては駄目」

桂

「うん……」

ユメイ

「ほら、お布団に入って目を閉じて」

桂

「うん……」

まぶたの上に、心地よい重みのある白いてのひらが乗せられ、障子越しのわずかな月明かりさえさえぎられる。

ふわりと鼻腔をくすぐる花の香り。

その香りに誘われたのか、睡魔はすぐにやってきた。

ユメイ

「おやすみなさい桂ちゃん。もう悪い夢は見ないから――安心して眠りなさい」

柔らかな声を聞きながら、わたしの意識は深い眠りの淵へと落ちていった。
唇がゆっくりと形を変える。当てられた上下の歯が、地ならしするように肌に食い込みながら、距離を開けていく。

桂

「————」

首の皮を間に挟んで、開いていた歯が閉じられた。かまれた——といってもごく軽く、別に痛くはなかったけれど。

ただ、そのショックで表面張力いっぱい溜まっていた涙が零れてしまった。
上を向かされているにもかかわらず、ぽろぽろと涙が零れ落ちる。

ノゾミ

「あら……痛くしないって言ったのに、こんなに怯えて可哀相」

いったん首から口を離したノゾミちゃんは、からかうような猫撫で声でいいながら、わたしの肩越しに指示を出した。

ノゾミ

「ミカゲ」

言葉と同時にミカゲちゃんが手を離し、支えを失ったわたしの首はかくんと落ち込んだ。
天井から一転——

細すぎるぐらい細い首。滑らかな頬のラインが繋がる顎。白さばかりが目につく視界の中、上の方でほころびる唇の色が異彩だった。

それは緩慢な動きでもって、わたしの視線を惹きつける。

ノゾミ

「……ほら、私の目を見なさい」

紡いだ言葉の糸を使って、わたしの視線を引きあげる。

赤々と——

明々と——

自転車の反射板のような輝きが、眼底に焼きつく。

血色に濡れた視線が、真正面からわたしの両目を貫いていた。

強いハレーションにくらくらす世界の中心で、にんまりと微笑む。

ノゾミ

「ふふっ、これで大丈夫」

そして含みのある笑顔のまま、やにわにてのひらを振り上げた。

くっと視界が傾いた。

桂

「……え？」

ノゾミ

「どう？ 痛くないでしょ？」

そう言われて初めて、わたしは頬を叩かれたことに気が付いた。

桂

「あれ？ なんで？ 触っただけじゃ……？」

ノゾミ

「ふふっ、これでもう怖くないでしょ？」

ミカゲ

「姉さまが暗示をかけたの」

暗示？ 催眠術？

待ってよ、待って。いくらわたしが単純でも、こんなに簡単にかかるわけが。

それに最初に「痛くなくなるよ」とか言われてそう思い込むから、催眠術は効くわけで

桂

「え？」

肩を押されて、わたしの身体はあっさりと倒れこみ――

左の手首をノゾミちゃんに、右の手首をミカゲちゃんに押さえ込まれる。

ノゾミ

「もういいわよね？」

ノゾミ

「いただきますしょう」

ミカゲ

「そうしまししょう」

桂

「やっ！ だからやだってばっ！」

布団や浴衣が乱れるのも構わず、わたしは必死にじたばたと暴れる。

ミカゲ

「まだ覚悟ができないの？」

ノゾミ

「人がせつかく痛みを消してあげたのに」

ミカゲ

「なのにまだ拒むの？」

ノゾミ

「あんまり聞き分けがないようだ、今度は痛みを倍にしてあげてもいいのよ」

ミカゲ

「大人しくしていたほうが」

ノゾミ

「あなたのためにもなってよ。ね？」

手首を握るつめたい手に力がこもった。

少しも痛くはなかったけど、体温と一緒に気力まで奪われていってしまう気がした。

ノゾミ

「ふふっ、心臓がどきどきいってるわよ？」

近づいてくる。

ノゾミ

「この肌の下で、血が駆け巡っているのがわかるわよ？」

ふたりの口が、その血を求めて近づいてくる。ひんやりとした呼吸が少し速くなっている。

桂

「あ……」

首の左右をくすぐる息に、わたしはきゅっと身体を縮こまらせ、そしてふたりは——
はだけた襟から覗く肩甲骨の上。

肩と首とを繋いでいる骨のない噛みやすそうなところに——

ノゾミ

「うふふふふふっ」

——歯を突きたてた。

桂

「あ……」

ぼんやりと形なく広がっていた月の光が、部屋のそこかしこに生じた点を核にして、周りの光を吸い取り、その密度を増していく。

溜まりっぱなしの涙のせいで、そう見えるのかと思ったけれど——どうやら違うらしい。

すうっと暗さを増した部屋と、その中に浮かぶいくつもの小さな白い月光の欠片。

欠片は一定の光度に達すると、一点での静止から運動へとその在り方を切り替える。

それはまるで、盛りを迎えた花びらが、風にはらはら舞い散るような――

一斉に羽化した蝶が、ひらひらと群れ飛ぶような――

こんなときにもかかわらず、わたしはその光景を綺麗だなと思った。

桂

「ああ――」

真夏だというのに、しんと降る雪を見上げた冬の夜を思い起こさせる光景だった。

やがてそのひとひらが、わたしの肩に伸ばしたノゾミちゃんの、袂から覗く白い腕の上に落ちた。

肌に触れた雪が溶けてしまうように、欠片は砕けて消えてしまう。

だけど、現象はそれだけにとどまらず。

ノゾミ

「――！？」

ノゾミちゃんも、熱いものに触れてしまったかのように、ばね仕掛けの勢いで手を引っ込めた。

ミカゲちゃんも月光の欠片が触れたのか、わたしの顔から手が離れる。

自由を取り戻したわたしは、ずっと上を向かされていて、息苦しさを感じていた首を正面に戻す。

するとそこには――

光の蝶の群舞の中に、夢の中のあの人が。

夢のひと

「桂ちゃんから離れなさい」

瑠璃の泉のように深く凧いだ双眸（そうぼう）で、ひととこちらを見据えて一言。

対しノゾミちゃんとミカゲちゃんは、わたしたちの間にふたり並んで立ちほだかる。

ノゾミ

「あら、獲物を横取りするつもりなの？」

ミカゲ

「また私たちの邪魔をするの？」

夢のひと

「するわ。わたしは桂ちゃんを守るために、こうして形に成ったのだから」

ノゾミ

「……ふうん、やる気なのね？」

ミカゲ

「姉さま。これの力を弱めれば、あの封印も」
清らかなあおみを帯びた光の群舞とは対照的な、くれないの瞳を見合わせて、

ノゾミ

「そうね、それではどうしましょうか」

ミカゲ

「はい、姉さま。どうしましょう」

ふたりは頷きあった。

その答えに、彼女はまつげをわずかに伏せた。

夢のひと

「……そう」

羽を広げるように、すっと真横に腕を伸ばす。
薙ぐように腕を振ると、ひるがえる袖に染め抜かれた白い蝶が、はたはたと舞った。

それを追いかけるように月光蝶が群れをなし、わたしの元へと飛んでくる。

ひらひらと——ひらひらと——

散らす光の鱗粉で軌跡を描きながら。

わたしが花でもあるかのように、一斉に群がってくる。

ミカゲ

「姉さま、それに触れては——」

ノゾミ

「うるさいっ、言われなくてもそのぐらいっ」

ふたりが蝶を嫌ってわたしの傍から離れた。

青白い光の乱舞が視界を覆う。
ぶつかるほどの間近になって、ふとあることにわたしは気付いた。
この光の蝶は、この花びらは、あの山の木に満開のそれと良く——

先ほどのノゾミちゃんの反応を思い出して、触れる寸前、思わず目をつぶってしまった。

まぶたの向こうで、月光がはじけた。

痛くもなければ熱くもなく、もちろん冷たくもなかった。

そよ風が産毛をなぶる程度の、どこかくすぐったいようなわずかな触感。

桂

「あ……」

目を開けると、ほのかな燐光がわたしの身体を縁取っていて、薄ぼんやりと浮かび上がって見える。

桂

「……これは？」

夢のひと

「心配しないで。大丈夫でしょう？」

夢のひと

「その光が消えるまで、あの子たちが桂ちゃんに触れられなくなるおまじないだから」

桂

「……触れられなく？」

夢のひと

「ええ」

ノゾミ

「この……よくも……」

はっと様子をうかがうと、可愛い顔を恐ろしくゆがめたノゾミちゃんが、わたしを睨んでいる。

ノゾミちゃんは片一方の手を押さえていて、その手の下は、淡く後ろが透けていた。あれは先ほど、月光の欠片が落ちたところだ。

桂

「……えっ！？　なんで！？」

夢のひと

「あの子やわたしは現身を持たない、幻のようなものだから」

そう言って、悲しい目をする。

夢のひと

「より強い光の前では、幻灯の描く絵は儂く消えてしまうだけだから」

昨日の夢で「忘れろ」と言ったときのように、また——わたしの息が詰まるような瞳を。

桂

「……………」

夢のひと

「ほら、桂ちゃん。こっちへいらっしやい」

桂

「……う、うん」

布団に入りっぱなしの両足を抜いて立ち上がり、ノゾミちゃんとミカゲちゃんの間を割って、彼女の所へ向かう。

彼女の言う通り、ふたりはわたしに触れないのだろう。憎々しげな目を向けながらも、おとなしく身を引いて、道を空けてくれた。

夢のひと

「急いで。あまり長くはもたないから」

言われるがままに足を速めたわたしは、その焦りで浴衣の裾に脚を取られ、前に身体を泳がせる。

桂

「あっ」

夢のひと

「大丈夫」

ふわりと抱きとめられると、夢と同じ微かに甘い香りがした。

その香りは、あの山の大樹に咲いた白い花のものだった。

ああ——

頭の中でバラバラのまま投げ出されていたピースが、本来あるべき位置にはまっていくことで、描かれていた絵がわかってくる。

あれだけ大きなお屋敷に住んでいた、そしてあのあたりにある唯一の家だけに、羽藤の家がオハシラサマを祭っていた家なんだろう。

正しいお祭りが失われてしまったのは、お父さんが死んでしまった十年前か、それよりもっと前なのかはわからないけれど。

特別な血を——お化けに狙われる血を持っている羽藤の家系がわたしの代まで続いているのは、きっと、誰かが守っていてくれたから。

それはきっと。

そしてきっと。

わたしを守ってくれているこの人が。

ご神木と同じ香りの、蝶と白花を付き従えるこの人が。

桂

「……あなたが、オハシラサマ？」

彼女は否定も肯定もせずに、ふわっと笑う。

夢のひと

「わたしはユメイ」

曖昧で仄かな笑みを浮かべた唇を動かして、綺麗な響きの言葉を紡いだ。

桂

「ユメイ……」

わたしの欠けたところに染み込んでくるような、そんな余韻のある名前。

桂

「ユメイさん……？」

ユメイ

「そうよ、桂ちゃん」

そして優しい顔を厳しくして、ノゾミちゃんたちに言い放つ。

ユメイ

「消えなさい。本当に消えたくないのなら」

言葉に合わせて周囲の光がうねる様は、威嚇（いかく）しているようだった。

ノゾミ

「……………」

ミカゲ

「姉さま、今一度は退くべきかと」

ノゾミ

「……退いてどうするのよ？」

ミカゲ

「《力》を蓄えましょう。私たちも弱ってるから」

ノゾミ

「……そうね……別に特別じゃなくても、それなりには精がつくものね」

ミカゲ

「はい、姉さま」

ノゾミ

「ならそうしましょう。手を出したのは余計な色気にすぎないもの」

ノゾミ

「本当はどうでも良かったんだし」

悪戯っぽく細めた瞳でこちらを見やるその様子に、カチンときた。どうでも良かったなんて、ばかにしてる。

こっちは本当に怖かったっていうのに。

ノゾミ

「やられっぱなしで帰るのはしゃくだけれど、こんな遊びで手傷を負うのも、よくよくばかっているものね」

ううっ、やられっぱなしなのはわたしだよ。

特別な血を持っているとか言っても、食物連鎖で言えば食べられる方で、一矢報いるとかそういうことはできそうにないけれど——

——いや、まてまて。

はたと視線を落とせば、わたしの手はまだ燐光に包まれている。

.....

この手で彼女たちに触れたらどうなるだろう？

最初に降ったひとひらの光は、ノゾミちゃんにけっこうな痛手を与えていたようだけど

.....

桂

「えいっ」

わたしは両手を前に伸ばして、ノゾミちゃんのいる方へ突撃した。いわゆる大相撲の突き出し。

ここはひとつ張り手で攻撃できればいいんだけど、さすがにわたしはそこまでは。

ユメイ

「桂ちゃん、あぶない——」

桂

「えっ！」

裾の長い浴衣のせいで、脚を上げられなかったのが悪かったのか——

——相撲はすり足が基本らしいから、上げない方が良いのかもしれないけれど。

反射的に目をつぶってしまったのが悪かったのか——

——結局、度胸がないのにこんな選択をしたわたしが悪いんだろうけど。

わたしは敷き布団の段差に脚をとられて、見事に転んでしまったのだ。

幸い、転んだ先が布団の上なので、勢いの割には痛くなかったんだけど。

ノゾミ

「あはははははっ」

ううっ、思いっきりばかにされている。こんなはずじゃなかったのに。

ミカゲ

「姉さま、見てください」

ノゾミ

「あら……」

ミカゲ

「どうなさいます？」

ノゾミ

「やっぱり贅の血は惜しいわね」

桂

「えっ！？ えっ！？ ええっ！？」

わたしは布団に埋めていた顔をがばっと上げて、慌てて両手を確認する。

生命線がよく見えない——じゃなくて。

自ら燐光を発していた先ほどまでは、てのひらのしわから指紋まで見えていたというのに。

気付けば、ユメイさんに形を与えられた光も、その輪郭を朧（おぼろ）なものと変え、部屋はもとの蒼い闇で満ちた空間に戻ろうとしていた。

桂

「時間切れ……」

ノゾミ

「あはははははっ、この間抜けた子のお守りをするのは、大変なんじゃないかしら？」

ノゾミちゃんが、高笑いしながら言う。

ノゾミ

「どうせこの子を守っても、あなたはもうすぐお役後免になってしまうのだし」

ミカゲ

「私たちに譲りませんか」

ノゾミ

「八つ裂きにしても飽き足りないほど憎いあなただけど、それなら見逃してあげてもよくなってよ」

ユメイ
「……………」

ユメイさんは口をつぐんだまま手を伸ばし、部屋の空気に溶けかけていた光を呼び集める。

差し伸べたてのひらに戯れるそれらが、最初の強さを取り戻す。

代わりに彼女の姿が一瞬、ふっと揺らいで透けてさえ——

桂
「——えっ？」

目をしばたたかせる。何も変わってない。今のは見間違いだったのか。

——と、戦闘準備をされたにもかかわらず、ノゾミちゃんが微笑んだ。

ノゾミ
「そう、それが答えなの？」

ミカゲ
「あくまで見捨てるつもりはないと？」

ユメイ
「もう一度言うわ。消えなさい」

ノゾミ
「あなたたちって、そろいもそろって強情なのね。ふふっ、消えるのは一体どちらかしらね？」
消えるのは——

桂
「ユメイさん！？」

やっぱり見間違いじゃなかったんだ。あの力を使いすぎると、ユメイさんはきっと——

ユメイ
「大丈夫よ、桂ちゃん。そんな顔しないで」

桂
「でもっ」

ユメイ

「わたしは消えても、無くなるわけじゃないのよ」

ノゾミ

「うふふっ、それは私たちだって同じ」

ミカゲ

「消せたとしても、その力では一時しのぎ」

ノゾミ

「私たちを本当に消すなんて、あなたでは無理でしょうね。あなたは——」

ミカゲ

「すべての力を使い切るわけにはいかないから」

ノゾミ

「あなたが弱れば——ね？」

ユメイさんは表情を硬くして、きゅっと唇をかんだ。

それはつまり、ノゾミちゃんたちの言う通りということなんだろう。

ミカゲ

「でも姉さま」

ノゾミ

「そうね——今日のところは退いてあげる」

くすくす笑いを漏らしながら、ノゾミちゃんは回れ右。

ミカゲ

「ごきげんよう——」

左回りで背中を向けるミカゲちゃん。

そしてふたり同時に、鏡写しの動作で肩越しにこちらを振り返って。

ノゾミ・ミカゲ

「——主さまによろしく」

ユメイ

「桂ちゃんが危なくなったら、わたしはいつでも形を成せる。その《力》をもらったから——」

ずっとこうしていると、トータルで二百ミリも無理じゃないかもしれない。

ところで、この状況に慣れてくると、こんどは微妙に手持ち無沙汰になる。

ユメイ

「んっ……んっ……」

じっとユメイさんの顔を見ていて思う。

……美味しいんだろうか。

試しに、所在なげに固まっていた右のてのひらで受け止めた、生乾き状態の血を舐めてみる。

桂

「……………」

うわー。

微妙にしょっぱくて金気臭かった。

口の中につばがいっぱい出てくるけど、別に美味しいとは思わないし、食欲をそそられたとかでもないし。

そりゃあね、今まで何度も自分の血ぐらい舐めたことあるから、変な期待はしてなかったけど。

ユメイ

「はっ……桂ちゃん？」

桂

「あ、いや、何でもないよ」

ユメイ

「そう。それより、わざわざありがとう」

桂

「あれ？ もういいの？」

返事の代わりににっこり微笑んだユメイさんは、わたしの指先に手をかざした。

桂

「————」

わたしの指先を覆い隠す白く柔らかい光。

気化する水が熱を奪っていくように、光が消えていくのと一緒に、指先の熱が退いていく。

桂

「あ……傷が……」

光の中から現れた指には、針の刺さったあとも、軽くついてきたユメイさんの歯型も見受けられなかった。

ユメイ

「桂ちゃんの血のおかげで、使えるようになった《力》よ」

桂

「そ、そんなの使っちゃって平気なの？」

慌ててユメイさんの姿を凝視する。

じい——っ。

さっきのように揺らぐ気配はないし、表情も穏やかで、無理をしているようには思えない。

桂

「……本当に大丈夫なんだよね？」

ユメイ

「ええ、あれぐらいなら」

さっき放りだしたブラシを拾い上げたユメイさんが、わたしの後ろに回り込む。

ユメイ

「ほら、髪を梳くから座って」

桂

「うん……」

ユメイさんは手櫛で髪のはつれを直しながら数房によりわけ、そのうち一房を手にとった。

毛先に入れたブラシは特に引っかかることもなく、櫛通りよく外にでる。

ユメイ

「桂ちゃんの髪、柔らかくて綺麗ね」

桂

「うん。けっこう自慢なんだ」

烏月さんの髪を見てから、喪失気味だった自信がちょっと回復。

ユメイさんはゆっくりと丹念に、髪を傷めないよう少しずつブラシをかけてくれる。

その気持ち良さに、ついついわたしは——

桂

「ふあ……」

ユメイ

「桂ちゃん、眠いの？」

桂

「あ、別にそんなことは……」

ごによごによと、口ごもる。

だって夜中だし、山登りなんかして疲れてるし。

ユメイ

「ふふっ、いいのよ寝ちやっても」

桂

「ううん、大丈夫。それよりユメイさん？」

ユメイ

「なあに？」

桂

「その形でいるのって……今も大変？」

ユメイ

「大変ではないけど、少しずつ《力》が減っているのは、何となくわかるわ」

桂

「……じゃあ、やっぱり駄目なんだ」

ユメイ

「そうね。さすがに昼の光にはね」

桂

「そっか……」

ユメイ

「少しなら耐えられそうだけど、それで《力》を使い切ってしまうのも、勿体ないでしょう？」

桂

「うん……」

言葉が詰まると、するすると滑る柔らかいブラシの音が大きく聞こえた。

どこか単調なその音に、わたしの頭はぼうっと白く霞んでくる。

……………

痛くはなかった。

痛みを感じないようにされていた。

だけど——

温度の違う異物が、肌を裂いて身体の中に入ってくる感覚はちゃんとあって。

心臓が動くたび傷から吹き出す、血の温かさはちゃんと感じる事ができて。

その血をむさぼる唇と舌の動きを感じとるだけの感覚も残っていた。

ただ、痛くないだけ。

桂

「あ……」

貧血にも似た眩暈の気配。

烏月

「魔除けの呪符だ。桂さんに差し上げよう」

わたしは火事場のばか力で、枕の下に右手を伸ばし、滑り込ませた。
昨夜の夢は嫌なものじゃなかったし、半信半疑だったので、言われた通り部屋の四隅に張りつけたりはしなかったけれど——

そこには昨夜、烏月さんにもらった——

桂

「だから嫌なんだってばっ！！」

わたしは手探りでそれを引き抜き、横殴りの平手でノゾミちゃんに叩きつけた。

目を灼く閃光。

放電のようなギザギザの光がわたしに絡みつき、わたしは驚いて身体をすくませる。

桂

「——」

待てども衝撃はこない。痛くもない。
ただ、てのひらは灰のような細かい塵となって崩れるお札を感じ取っている。
何だか知らないけど、このお札はちゃんにご利益のある本物なんだ。烏月さんってすごい——

——と、火花が散った後のような、金気の臭いを鼻がとらえて、わたしは取り留めない思考を引き上げる。

こんな状況なんだから、いつもみたいにぼーっとしてたら駄目だ。

顔に触れていたミカゲちゃんの指の感触がない。

手に、足に、力が入る。

逃げられる。

わたしは自由を取り戻していることに気付いて、ぱっと四方を見回した。

ノゾミちゃんが、ミカゲちゃんが、数歩分離れたところにまで移っていた。

ノゾミ

「まさか、そんなものを隠し持っていたなんて、思いもしなかったわ……」

ミカゲ

「どうやらあなたを侮りすぎた」

平静を装った声には、抑えられない怒り。

抑えようともしていない、怖いまなざしでわたしを睨みつけながら、白かったてのひらを広げてわたしに突きつけた。

そのてのひらは――

桂

「あ……そんな……っ」

わたしには無害だったあの光。

それが彼女たちには猛威を振るったのか、てのひらは焼け焦げており、それは正視できないほどむごたらしくて――

桂

「ごっ、ごっ、ごっ、ごめっ……」

怖くて、震えて、涙が零れて。

ぎゅっと握り締めている掛け布団を、頭の上まで引き上げて、隠れてしまいたくなった。

そんなことをするつもりはなかったのに。

わたしはただ振り払いたかっただけで、傷つけるつもりなんてなかったのに。

ノゾミ

「何を怯えているの？ これはあなたが付けた傷ではなくて？」

ミカゲ

「あなたがやったことなのよ」

ノゾミ

「その目を曇らす涙をふいて、ちゃんとお覧なさいな」

桂

「わっ、わたしっ……そのっ……ごめんなさ……」

ノゾミ

「うふふっ、謝ってすむようなことかしら？」

ミカゲ

「私たちの現身を傷つけた報い」

ノゾミ

「あなたの贅の血で贖ってもらうけれど、これはずいぶんと――」

血の色を揺らめかせる赤い瞳が、熾火(おきび)のような熱をはらんで闇の中に輝いた。

ノゾミ

「——高くつくわよ？」

ノゾミちゃんとミカゲちゃんが、一歩わたしに近づいた。

桂

「ひいっ!？」

わたしは罪悪感もそっちのけで、ただ恐怖にかられて逃げ出そうとした。

桂

「なっ、なんで——」

だけど、逃げ出せなかった。

足が、手が、びくりとも動かない。

さっきのように触れられたりしていないのに、わたしは金縛りにあっている。

これはたぶん——赤く光る目を見たせいだ。

わたしのような普通の人間には、あれに抗う術はないんだ。

また一歩、近づいてきた。

ノゾミ

「最後の一滴まで私たちのものにすれば、少しは腹も癒えるかしらね」

ミカゲ

「はい。最後の一滴まで飲み干せば——」

駄目だ、もう手の届くところにいる。

逃げないと、身体の中の血をすっかり取られてしまうというのに。

なのに、なのに、わたしは固まってしまって、自分では視線をそらせない。

ノゾミ

「うふふっ、ずいぶんとお預けされたけど」

ミカゲ

「それももうおしまい」

月の光が遮られて、暗い影がわたしを覆う。

ノゾミちゃんの瞳があかあかと——

結局、わたしはここで死んでしまうのか。

——

「そんなことはさせないわ」

この部屋にいた誰とも違う声が静かに響き、視界の外から割り込んできた蒼い輝きが、赤光をかき消してわたしが蝕まれるのを阻んだ。

桂

「——！？」

ノゾミ

「誰なの！？」

その声の持ち主を探してノゾミちゃんの視線は飛び、わたしは金縛りから解放された。

——

「わたしはユメイ」

その名前が触媒となったのか、部屋中に広がる月光を溶かし込んだ蒼い闇が分離を始める。

部屋のそこかしこに生じた点を核にして、周りの光を吸い取り、その密度を増していく。

すうっと暗さを増していく部屋と、そこに浮かぶ無数の小さな白い月光の欠片。

欠片は一定の光度に達すると、一点での静止から運動へとその在り方を切り替える。

それはまるで、盛りを迎えた花びらが、風にはらはら舞い散るような——

一斉に羽化した蝶が、ひらひらと群れ飛ぶような——

そして、群舞する光の蝶の中に佇む人影は——

ユメイ

「——桂ちゃんを守るために形に成った、あなたたちとは対立するもの」

ああ、あの人が来てくれた。

月光蝶を付き従えて、夢の中のあの人が。

鈴の音を響かせて立ち上がったノゾミちゃんとミカゲちゃんが、一步前に進み出る。

わたしと夢の中のあの人——ユメイさんの間に立ちはだかるように。

ミカゲ

「あなたは確か、十年前の」

ノゾミ

「それでのこのこ現れたのね？」

ミカゲ

「また私たちの邪魔をするの？」

ユメイ

「するわ。桂ちゃんから離れなさい」

ノゾミ

「嫌だと言ったらどうするつもり？ 私——」

意地悪をする子供のように、ノゾミちゃんの目が剣呑に細まって。

ノゾミ

「——桂のこと、気に入ってしまったんだけど」

わざわざわたしを振り返って、含みのある笑顔を向けながら言う。

自信があるのか挑発なのか、ミカゲちゃんがいる安心からかは知らないけれど、この状況で相手に背中を向けるだなんて、ずいぶんな余裕だ。

ノゾミ

「ふふっ、とても美味しい血だったわ。温かくて甘くて——」

ユメイ

「桂ちゃんを傷つけたのね」

声をさえぎるように腕を振るい、着物の袖をはためかせた。

それは突撃を命じてひるがえる軍配。

青白い光の軌跡を描きながら、月光蝶の群れがノゾミちゃんに殺到する。

それをちらりと横目で見ても、ノゾミちゃんの余裕は崩れない。

ノゾミ

「——とても濃くて」

口元には微笑。

ミカゲ

「私たちの《力》も増した」

ふたりの身体から、ゆらりと赤い霧のような光が立ち昇った。

霧は近づいてきた蝶を包み、飲み込み、貪る。

ユメイ

「——！？」

蝶を消し去る刹那、霧があかあかと光を強める様は、まるで血飛沫が散ったかのよう。

一頭一頭と消え行くたびに、ユメイさんの形が幻のようにゆらぎ、それでわたしは理解する。

あの蝶はユメイさんの身体——その形を成す、《力》そのものなのだと。

——そこには、誰もいなかった。

桂

「あれ……？」

部屋の中からユメイさんの姿も、気配も消えていた。

果たして自ら消えたのか、それとも《力》を使い切って――

桂

「あっ……」

身体がぶるっと震えた。

ノゾミちゃんたちに攻撃されたとき、ユメイさんの身体は透けて、消えそうなほど揺らめいていた。

それを見ていたというのに、そんなことにも気付かないで、わたしは傷を治してもらって――

桂

「わたしはばかだ……」

自分のばかさ加減に嫌気がさした。

桂

「……でも、ユメイさんだってばかだよ」

まだお礼もちゃんと言ってないのに。

わたしになら、わたしにだけできるお礼があるというのに。

桂

「わたしの血、飲んでくれても良かったのに」

がっくりと肩を落としてため息を吐く。

すると目に飛び込んでくる、血の付いた布団。

そういえば、浴衣の襟元とかも――

桂

「……どうしよう」

一難去ってまた一難。

命に関わるような大事じゃないけれど、わたしにとっては大問題だった。

桂

「どうしよう、どうしよう――」

だけどころな現実問題に直面したおかげで、混乱しきった頭にリセットがかかったというのは、不幸中の幸いというか何と云うか――

――あんなことの直後に、こんなことを心配できるだなんて、わたしって随分と図太いんじゃない。

再発見だった。

桂

「は～～、とりあえずお風呂いこう」

ノゾミ

「——自分よりも弱いモノに、命令されるのは嫌いだもの」

ゆらり——

ふたりの身体から、赤く透ける霧のような光が立ち昇った。

それは邪魔者に対する怒りの現れであり、瞳に宿った禍々しい赤光が、少女の形には上手く収まりきれずにはみ出てしまったようでもあり——

その生き物のように蠢く赤い霧を従えて、ふたりはさらに、ユメイさんに近づいた。

ノゾミ

「あなたが出てきたところで、一体何ができるというの？」

ミカゲ

「主さまを抑えるので手一杯のあなたに何が？」

ノゾミ

「そうやって、人の形の現身をつくるのが精一杯なんじゃないかしら？」

ミカゲ

「勝てる見込みはないのになぜ？」

ユメイさんは表情を厳しくして、鈴の音とともに近づいてくる双子の姉妹に対峙する。

ユメイ

「勝ち目がないのはわかっているわ」

ふたりに向かって手を差し出すと、その指先に止まっていた蝶がふわり飛んだ。

蝶は光の鱗粉で青白い軌跡を描きながら、ノゾミちゃんに向かって飛んでいく。

そして——霧が動いた。

それはあでやかな赤で獲物を誘う食虫植物が、捕食する瞬間にも似ていた。

蠢く霧に捕らえられた蝶は、触れる端から消化されて、ただの闇へと還ってしまう。

よく見れば蝶だけが消えてしまうわけではなく、赤と青——光は光でも正反対の性質をもっているのか、相殺するように霧も消えているのだけれど。

それでも絶対量に差があるせいか、ただ蝶だけが消えてしまったように見えてならなかった。

ノゾミ

「それで、どうするつもりなのかしら？」

ミカゲ

「あなたひとりでどうにかなるの？」

ノゾミ

「無理でしょうね」

ミカゲ

「きっと無理」

ノゾミ

「だって、そんなことをしたら、あなたが消えてしまうもの。ねえ？」

ミカゲ

「先ほどの蝶のように」

ノゾミ

「ふふふふふふ——」

蝶の羽を遊びでもぎ取る、子供の笑顔を浮かべたまま、ふたりはユメイさんに近づいた。

桂

「——」

わたしは精一杯の勇気を振り絞って訴える。

助けてほしい——

助けてほしいけれど——

このままではユメイさんも危険だから、逃げて——と。

でも、どうしても声が出なかった。

そしてユメイさんは一歩前に踏み出す。

舞うように、音もなく、ただ表情を厳しくして。

ユメイ

「たとえ無理だとしても、わたしの存在を賭けて、桂ちゃんだけは助けるつもりよ」

ノゾミ

「うふふっ、こんなことで存在を賭けるつもりなの？」

ミカゲ

「あなたが消えれば主さまの——」

ノゾミ

「それでもいいの？ 本当にいいの？」

さらに一歩。

ユメイ

「それでもわたしはかまわない」

そしてさらにもう一歩。

お互いに距離を縮め合う。

そして――

青白い蝶と、赤い霧がぶつかった。

蝶が消えた。先ほどと同じように消えた。

ただし、蝶の周りの霧も穴があいたように消えていた。

ノゾミ

「ふうん、本気――なのね？」

ユメイ

「冗談で済ませたいなら、桂ちゃんから離れて」

また一歩、ユメイさんはふたりに、そしてその後ろでへたり込んでいるわたしに近づく。

青と赤の光がぶつかり、断末魔の閃光を發したあと、部屋は元より少しだけ暗くなる。

光は青も赤もぶつかった分だけ消えている。それは真っ向からの《力》の削りあいだった。

もはやユメイさんは身体の後ろが透けて見えて、いかにも消えかけているといった体。

比べてノゾミちゃんとミカゲちゃんのふたりは、余裕そうに見えるけれど。

ミカゲ

「――姉さま、退きましよう」

ユメイさんの覚悟に氣後れしたのか、大人しそうなミカゲちゃんが、ノゾミちゃんの袖を引いた。

ミカゲ

「所詮は余祿」

ノゾミ

「そうね。捨て身でこられるとさすがに面倒ね。ミカゲと違って、私はまだ吸い足りないのだけれど――」

とんっ、と畳を蹴って左右に跳んだ。

鈴の音が、左右同時に聞こえた。

ノゾミ

「この場は退いてあげましょうか。でも、次にあなたが私たちの邪魔をするようなら」

ミカゲ

「私たちが存在をかけて、あなたを消し去る番」

ノゾミ

「もっとも私たちの目的と、あなたの存在意義は相容れないものだから」

ミカゲ

「じきにぶつかるでしょうけど」

ノゾミ

「せいぜいそれまで楽しみなさいな」

ミカゲ

「束の間の巡り会いを」

ノゾミ

「それでは、ごきげんよう——」

鈴の音だけを残して消える気配。

気配が消えてから少し、残響さえも消え去るころに、冷や汗と緊張が溶け出した。

桂

「はあ～～～」

ぺったりと突つ伏すわたしに向かって、衣擦れの音もなくユメイさんがやってくる。

ユメイ

「桂ちゃん」

ふわりと抱きとめられると、夢と同じ微かに甘い香りがした。

その香りは、あの山の大樹に咲いた白い花のものだった。

ああ——

——頭の中でバラバラのまま投げ出されていたピースが、本来あるべき位置にはまっていくことで、描かれていた絵がわかってくる。

どうしてユメイさんがわたしを守ってくれたのが、何となく理解できたような気がする。

あれだけ大きなお屋敷に住んでいた、そしてあのあたりにある唯一の家だけに、羽藤の家がオハシラサマを祭っていた家なんだろう。

正しいお祭りが失われてしまったのは、お父さんが死んでしまった十年前か、それよりもっと前なのかはわからないけれど。

特別な血を——お化けに狙われる血を持っている羽藤の家系がわたしの代まで続いているのは、きっと、誰かが守っていてくれたから。

それがこのユメイさん——ご神木と同じ香りの、蝶と白花を付き従えるこの人なんだと。

ユメイ

「桂ちゃん、大丈夫だった？」

桂

「だいじょ——痛っ……」

実はといえば、緊張が解けたのと同時に傷が痛み始めていた。

血が出る程に嘔み付かれたんだから、痛くないはずがない。

傷を押さえた手に感じる、ぬめる血とうじゃじゃけたような触感にぞっとする。

ユメイ

「桂ちゃん、見せて」

わたしはいいやと首を振る。多分この傷は、空気に触れただけで痛むのだ。

ユメイさんはむきになって強要したりはせずに、そっとわたしの頭を撫でながら、小さい子にするみたいに優しくわたしを諭した。

ユメイ

「見せてくれないと、治すこともできないのよ。それじゃあ桂ちゃんも困るでしょう？」

わたしはきゅっと目をつぶって、首に当てていた手をそっと外す。

桂

「……………」

ユメイ

「……これなら今のわたしでも大丈夫。傷も残さず綺麗に消せるわ」

桂

「本当？」

ユメイ

「ええ、任せて」

そう頷いて手を差し伸べると、蝶のうちの一頭が、そのてのひらに舞い降りた。

蝶はくたっとひしゃげると、柔らかな光とともに一對の花びらに姿を変える。

それはあの大樹に咲く白い花のひとひらだった。

ユメイ

「少しだけ我慢してね」

花びらに劣らず白い指先で摘み上げて、絆創膏のように傷の上に貼りつける。

じんじんと熱をもった傷口に、ふわりと優しい淡雪のような冷たさ。

淡雪はあっという間に溶けてしまうのだけれど、この花びらは熱のすべてを吸い取って
から、微塵の光となって消えた。

桂

「あ……」

じんじんが消えた。

思わず指先を這わせてみても、傷の引っ掛かりは感じられなかった。

もちろん、指が触れたことによる痛みも。

桂

「すごい……治ってる」

さすがに血のぬるぬるはそのままだけれど、言われた通りに傷は綺麗に塞がっていた。

ユメイ

「はい、次はこっち」

淡く微笑んで、反対を向くようにわたしに言う。

わたしは取り留めもなく、お母さんに耳掃除をしてもらったことを思い出していた。

桂

「うん」

反対の首を向けて、うっとり目を閉じる。

伸びてくる、ひやひやとした気配。

たちどころに退いていく、痛みと熱さ。

そして目を開けると。

ノゾミ

「ずいぶんとお粗末だったけれど、今のを開戦の矢合わせと思っていいのかしら？」

ユメイ

「ええ——構わないわ」

ユメイ

「わたしの存在を賭けてでも、桂ちゃんだけは助けるつもりだから」

ノゾミ

「うふふっ、ずいふんとばかなのね。どう考えてもそれは無理」

ミカゲ

「先に消えるのはあなた——」

ノゾミ

「でしょう？ あなたが消えてしまったら、誰がその子を守るといの？」

ユメイさんはその問いには答えず、今度はすべての蝶を一気に放った。

どこにそんなにいたというのか、視界を奪う花嵐のように乱舞する蝶の群れ。

部屋中が月光色に満たされて、自分の手さえも青白く霞んで見える。

一面が青白く染まるなか、ノゾミちゃんとミカゲちゃんの周りだけが、異彩すぎる赤光でえぐり抜かれていた。

その境界線上——

青と赤の光がぶつかり合い、断末魔の閃光を発して消滅する。

光が失せて残った闇が、その濃度を上げるやいなや、それを払うように押し寄せる赤と青の光。

そして再びせめぎあい——

青白い光の核である蝶が、一頭一頭と消え行くたびに、ユメイさんの形が幻のようにゆらいだ。

それでわたしは理解する。

あの蝶はユメイさんの身体——その形を成す、《力》そのものなのだと。

ノゾミ

「あははははっ、本当に捨て身なのね」

ミカゲ

「ですが姉さま、これではさすがに……」

ノゾミ

「いいじゃないの、やらせてあげましょう。ここで自滅してもらえるなら、それはそれで」

ミカゲ

「けれど姉さま、私たちも……」

ノゾミ

「かまいはしないわ。減ったぶんは贅の血が癒してくれるんだもの——」

ノゾミ

「——ねえ？」

月光の空間を隔ててなお、ノゾミちゃんの瞳が放つ赤い光は、わたしを硬直させるには十分だった。

そしてわたしは思い知る。

そうだ、そうだ、そうなんだ。狙われているのはわたしなんだ——と。

どうしてその身を削ってまで、守ってくれているのかはわからないけれど、このままだとユメイさんが消えてしまう。

桂

「もういいよ！ 十分だよっ！」

ユメイ

「桂ちゃん、そんなこと言わないで」

桂

「でも……」

ユメイさんが先に消えるというのなら、その後にはわたしはわたしの身を守れるだろうか？

それは無理。きっと無理だ。

なら、それならいっそ。

身体を壊してまでわたしを育ててくれたお母さんには申し訳ないけど、わたしのことは諦めて。

桂

「ユメイさんだけでも——」

ユメイ

「桂ちゃん」

桂

「いいの！ わたしだって嫌だけど、だけど結局わたしも駄目なら！」

ノゾミ

「駄目なら、その女だけでも助けてほしいの？」

ミカゲ

「見逃してほしいの？」

ノゾミ

「あなたのその、贅の血の流れる身体と引き換えに？」

わたしは頷いた。

ノゾミ

「あら、どうしましょう」

桂

「お願いだから！」

ノゾミ

「でもね、あなたのことだけじゃなくて、個人的な恨みもあるのよ。八つ裂きにしても飽き足りないぐらいの。だから——」

ノゾミ

「だからやっぱり、許してあげない」
残酷な笑顔で宣言する。

ノゾミ

「うふふっ、あなたのようなばかを指して言うのかしらね。飛んで火に入る夏の虫って——」

赤光は地獄の炎のように渦巻くと、舌を伸ばして月光蝶を絡め取った。

ユメイ

「——っ」

ユメイさんは自分の落とした薄すぎる影に手をついて、漏れる悲鳴を嘔み殺した。

部屋に満ちていた青白い光はとうに衰え、彼女の姿は今にも消えそうなほど儂げで。

ノゾミ

「さあ、そろそろ終わりにしましょうか」
場にそぐわない優しい声でささやくと、ノゾミちゃんは右手を前に突き出した。

奔放に、無秩序に、ただ彼女の姿を取り巻くようにという法則にだけ従っていた光が、その手に向かって移動していく。

ノゾミ

「私にだって慈悲はあるのよ？」

うっとりとした細めた目で、光を集めた手を見つめて言う。

ノゾミ

「そうね、これぐらいなら楽に逝けるかしら？」
まぶしすぎて、反対側が透けて見えないほどに凝縮された、赤い光の塊。
今のユメイさんなら、影も残さず消し去ってしまえるだろう禍々しくも強い光。

鈴の音も軽やかに——ノゾミちゃんがユメイさんの傍らに向かう。

桂

「逃げてっ！」

ユメイ

「……………」

応えはない。もはやそれだけの余力もないのか。

桂

「早くっ！ 早く逃げてえーっ！」

逃げるところかふたりの距離は、すでに手を伸ばせば触れられるほど。

ノゾミ

「ふふふっ」

唇から笑みをこぼしながら、輝く右手を高々と振り上げたそのとき。

扉が叩かれた。

「桂さん、今の悲鳴は何事だ？ 中に何かがいるのか？」

ああ、この声は、この口調は――

都合のいい幻聴でなければ間違いなく。

ドアのノブが鳴る。

烏月

「……鍵か。どうする？ 壊して踏み入るか？」

普通ならありえない強行策をつぶやく声に、ノゾミちゃんの視線がドアの方を向いた。

――チャンスだ。

向こうがわたしに触れられるのなら、こっちからも触れるのが筋。背はわたしの方が高いんだし、体重だって――

それにあの赤い霧だって、生身のわたしにはほとんど効果がないものらしいし――

だから大丈夫。そんなに無謀ってわけじゃない。

わたしは精一杯の根性を振り絞って、体当たりでノゾミちゃんに突貫する。

桂

「えーいっ！」

助走距離はごくわずか。だけど直前でスピードを緩めるなんて真似もしなかった。

その結果が、身構えていたわたしでさえ反作用で倒れるほどの威力。

わたしは即座に立ち上がり、入り口に向かいながら横目であたりの様子をうかがう。

――よしっ！

よもやの伏兵だったのか、ノゾミちゃんは受け身も取れずに転がっている。

桂

「鳥月さん、今開けるから！」

ノゾミ

「このっ……ミカゲ、止めるのよ！」

ノゾミちゃんの声の直後に鈴の音。音はわたしに向かって近づいてくる。

急げ、急げ、急げ——振り返らずにドアに取り付く。

鳥月

「桂さん、鍵を開けたら横に退くんだ」

桂

「うっ、うん」

鍵が外れた。

わたしは言われた通り、身体をひっくり返してドア前のスペースを空ける。

視界が反転するのと同時に開き始めるドア。

暗さを増した部屋の中、瞳の赤の尾を引かせて、ミカゲちゃんがそこまで来ていた。滑るように踏み込んでくる影。

わたしの横をかすめた影は、手にしていたものを振り下ろし、ミカゲちゃんとはとっさに後ろに飛び退いた。

銀光一閃。

ミカゲちゃんの身体を通り抜けて、畳に触れる寸前で静止したそれは、研ぎ澄まされた鋼の刃。

大きくなびいた黒髪が背中に落ちる前に、鳥月さんは姿勢を戻し、蒼い右目を見開いた。

鳥月

「現身を崩して逃れたか」

鈴の音よりも早いか遅いか、飛び退いたミカゲちゃんに向かって鳥月さんが迫る。

鳥月

「だが、この太刀を舐めてもらっては困る——」

鳥月

「この維斗は百邪を除き凶気を祓う霊刀。たとえ霊体であっても、ただで済むとは思わないことだ」

横一文字に切られた傷口が、ぼろぼろと崩れて空気に溶けていく。

ミカゲ

「それは鬼切部の——」

烏月

「私の名は千羽烏月。維斗の太刀を担う千羽党の鬼切り役」

ノゾミ

「ふうん、あなたが——」

鈴の音も軽やかに跳び、ミカゲちゃんに並んだノゾミちゃんが、瞳の赤を瞬かせながら訊く。

ノゾミ

「前からそれほど経っていないのに、もう代替わりしているのね？」

烏月

「人の寿命はそう長くない。それほどがどれほどかは知らないが、百年生きる人間は稀だと憶えておくがいい」

ノゾミ

「知っているわ。人間の脆さなんて嫌になるほど。病にはかかるし、すぐに死んでしまうし」

烏月

「そう思って人を侮るのなら——」

烏月

「つまらない小細工はよしてもらおう。言っておくが、私はその程度の邪視なら無効化できる」

ノゾミ

「あら、それは残念」
邪視——邪な視線。

そうだった。ノゾミちゃんと視線を合わせると、身体が動かなくなってしまうんだ。

ノゾミ

「だけど侮ってなんかなくてよ。その太刀の持ち主には、ずいぶんお世話になったもの」

ミカゲ

「前任のお役目から受けた借りまで、あなたに返してあげたいほどに」

ノゾミ・ミカゲ

「それで——」

ミカゲ

「あなたも私たちを封じにきたの？」

ノゾミ

「だとしたら、今回はやけに対応が早いのね」

ぴたりと静止していた剣先が動いた。

鳥月

「……対応と言うからには、すでに何かをやらかした後ということか」

ノゾミ

「あら、失言だったかしら」

鳥月

「私がこの地に来たのは別件を追っていることだね。とは言え——」

鳥月

「人に仇なす怪異を討つのが、我ら鬼切部の使命。千羽党当代の鬼切り役としての勤め、果たさせてもらおうか」

とんっ——

一歩踏み出す鳥月さんと同時に。

ノゾミちゃんとミカゲちゃんも後ろへ跳んだ。切っ先が数センチもない目前を走り抜ける。

ノゾミ

「うふふっ、こわいこわい」

ミカゲ

「姉さま、そろそろ潮時でしょう」

ノゾミ

「そうね。所詮は遊びで来ただけだし、何だか興奮めしてしまったもの」
月に雲がかかったのか、やにわに部屋の中が暗くなる。

ノゾミ

「贅の血をあきらめるのは残念だけれど、大事をとって退きましょう」
部屋の暗さに溶け込むように、ふたりの姿も影に隠れていく。

ノゾミ・ミカゲ

「では、ごきげんよう——」

鈴の音だけを残して姿を消した。
やがて残響も完全に失せて——
それでも、何も起こらなかった。
部屋の中にはただ静寂。
ふたりの少女の形をした怪異は、本当に去っていったらしい。
緊張のあまり呼吸すら忘れていたわたしは、胸いっぱい二酸化炭素を吐き出した。

桂

「はあ～～～」

身体を支えていた緊張感まで一緒に出て行ってしまったので、その場にくてっとへたり込んだ。

桂

「あはは、すごい、まだ生きてる。やったよー、助かったよー」

烏月

「いや、まだだ」

桂

「えっ？」

慌てて部屋を見回した。
脱力しまくりの今のわたしって、ものすごく無防備で危険な状態なんじゃあ？

そして、まだだと言った烏月さんは——

蒼々と底光りする怖い目で、ユメイさんの方をねめつけていた。

烏月

「彼女も——人間ではないのだろう？」

桂

「えっ！？ えええっ！？」

へたり込んだ状態を忘れて進もうとして、身体は前につんのめるだけ。
両手の助けを借りたよつんばい走法を駆使して、ようやく前へと進んでくれる。

桂

「ちょっと待ってよ！！ ユメイさんはわたしを助けてくれたんだよ！？」

何とかふたりに割って入って、根性を入れた膝で踏ん張る。

そして、膝立ちした目の前には――

桂

「ひゃっ」

目の前にはギラリと光る本物の白刃。

時代劇で将軍様やお侍さんが持っている、つるつる光る銀色の刀とはずいぶんと違っていた。

木目のように波打つ模様が不思議な、どっしりとした黒味を帯びた鉄の板。

ゆるい弧を描くその縁には、魂さえ映しそうなほど研ぎ澄まされた刃が光っている。

桂

「……………」

烏月

「あなたの信頼を得るための偽りではないという保証は？」

桂

「そんなこと……………」

烏月

「ないと断定できるほど、あなたは彼女のことを知っているのかい？」

桂

「ううっ…………それは……………」

知らないけど、知っていたかも知れないのに。

何もかもを忘れていた自分が恨めしい。

烏月

「桂さん、そこを退くんだ」

桂

「嫌！」

烏月

「どうしても？」

桂

「どうしても！」

烏月

「そうか、ならば仕方がない」

烏月

「私は鬼を切るもの——その邪魔をするならば、人として許すつもりはない」

脅しなのか本気なのか、無造作に刃を近づけてきた。

切っ先が産毛に触れた。

ふっと気持ちが身体を離れて、取り留めのない考えで直面した危機をごまかそうとした。

駄目だ、駄目だ、しっかりしないと。

ああ、でも——

何でかな。今日はこんなことばかりだ。わたし悪いことしたかなあ——

いきなり目の前が真っ白に——

立ちくらみにしては急だなあ。今度こそ本当に限界なのかなあ——

と思ったら。

すでに横になっているので、倒れる心配だけはしなくていいんだけど。

頭の中に霞がかかって、ものを考えるのが億劫になってくるのはいただけない。早くも血が足りなくなったってわけじゃないだろうに。

けどその影響か、単にあきらめが入っているのか、はては痛みがないせいで他人事に思えているのか——

とにかく、わたしは現状に馴染みかけていた。

ノゾミ

「んんっ……」

やがて満足できたのか、ノゾミちゃんはわたしから唇を離し、喉を鳴らして口の中の残りを飲み下した。

ノゾミ

「あなたの血、やっぱり本物よ」

口の端から零れた雫を、指の先でぬぐいながら言う。

ノゾミ

「あなたのこと、手放すのが惜しくなっちゃった。ねえ、ミカゲ？」

ミカゲ

「んっ……んくっ……」

ノゾミ

「ふふっ、よっぽど飢えていたのね。この子もあなたを離したくないって」

満足そうに細めた瞳の赤は、指先の赤より深く透明で、彼女の言う《力》に満ちているように思えた。

それはわたしに暗示をかけた赤。

鏡のように光る赤。

ノゾミ

「あなた、名前は？」

桂

「……………」

ノゾミ

「聞こえなかったの？ わたしはあなたに名前を訊いているの」

視線に《力》が込められる。

桂

「……桂。羽藤桂」

逆らえずに動く唇と舌。

桂

「佐藤さんの『さ』の字を、羽織袴の『は』の字に——」

ノゾミ

「いい名前ね。気に入ったわ」

わたしの返事をさえぎって言うと、嬉しそうに微笑んで指についた血を舐め取る。

ノゾミ

「ミカゲ、そのぐらいにしておきなさい」

聞こえているのかいないのか——

ミカゲ

「んふっ……はっ……」

ミカゲちゃんはとろんと放心したような瞳で、血の湧く歯形に口づけていた。

ノゾミちゃんは気にする様子もなく、同じ調子で言葉を続ける。

ノゾミ

「わたしもね、この血の味がとても気に入ったの。だから、主さまにあげるのは止めにするわ」

ぴくりと反応があって、ミカゲちゃんの口がわたしの身体から離れた。

いまだ焦点の定まりきらぬ目をノゾミちゃんに向けて、小さくつぶやく。

ミカゲ

「……姉さま？」

ノゾミ

「こんなに汚してしまって、はしたない子ね」

ミカゲ

「姉さま、ごめんなさい……」

ノゾミ

「ふふっ、別にあやまらなくても——」

ノゾミちゃんは指を伸ばし、血に染まったミカゲちゃんの唇を清めるように撫でまわしてから、

ノゾミ

「——夢中になるのもわかるもの」

微笑を含んだ自分の唇に、その指を押し当てて言う。

ノゾミ

「だから桂は私たちでもらうの。だからそんなに焦らなくてもいいのよ」

ミカゲ

「姉さま……」

ノゾミ

「逃がしたりはしないもの。ここで獣のように食う必要はないのよ」

ミカゲ

「でも姉さま、贅の血は……」

ノゾミ

「いいの、決めたの、構いやしないわ。もともと桂はいらない子。まさかのときの念入れにすぎなかったんだもの」

ミカゲ

「うまく隠れていましたから」

ノゾミ

「でしょう？ こうして姿を現したのはたまたま。この贅の血は余禄のようなもの。それなら——」

ずっと蚊帳の外にしていたわたしを、視線ひとつで引き入れる。

ノゾミ

「私たちがもらってしまっても、いいんじゃないかしら？」

わたしの意志に関係なく、わたしの未来が決められようとしている。

収まりかけていた心臓の鼓動が、再び上り調子にペースを速めてくる。

この状況は危ない。危なすぎる——と。

首の付け根のふたつの噛み傷が、じんじんと熱を持ってくるのは、かけられた暗示が解けてきたからなのか。

消されていた痛覚が甦るのと同時に、ようやくわたしの危機感が、多少なりとも復活してくれたわけだけど。

ノゾミ

「そうでしょう、桂。違って？」

赤い瞳がわたしの瞳を覗き込む。

赤い赤い、熟れに熟れた鬼灯のように赤い瞳。

いけない——これは獲物を呪縛する蛇の瞳。

いけない——これは心を惑わせる妖幻の瞳。

わたしの血を飲んで本当に《力》を得るのだとしたら、今度こそ捕まってはいけない。

なのに、なのに、わたしは固まってしまって、自分では視線をそらせない。

だれか、だれか、だれか助けて。

ノゾミ

「あなたは、私たちのものになるのよ」

わたしは、彼女たちのものになるのか。

ノゾミちゃんの目が光ったら、わたしはきっと彼女たちのものに——

——

「大見出しは『ナントカに刃物！ 某有名私立に通うUSさん真夜中の凶行！』って感じかねえ」

桂

「……………」

——

「おーい、桂ってば生きてるかい？」

桂

「……サクヤさん？」

サクヤ

「そうともさ。おかげさまでいい絵が撮れたよ」

大きなレンズの付いた愛用のカメラを振る。
そうか。さっきのまぶしい真っ白は、カメラのストロボだったのか。
あまりにも大変なことが続いていたので、サクヤさんもこの旅館に泊まっていることを、すっかり忘れていた。

サクヤ
「それであんたら、なに騒いでるんだい？」

桂
「それがね、サクヤさん。烏月さんがユメイさんを切るって言って——」

サクヤ
「あん？ ユメイだって？」

桂
「あ、ユメイさんってこっちの——人間じゃないんだけど、悪い人じゃないんだよ」

サクヤ
「……………」

サクヤさんは難しい顔をして、ユメイさんをジロジロと観察している。

ううっ、確かに「人間じゃない」とか急に言われても困るだろうし、それで見た相手が実際に半分透けてたりしたら混乱するだろうけど。

サクヤ
「……………」

桂
「……………」

サクヤ
「……いいけどさ」
わ、何だか知らないけど、さすがだよ。

サクヤ
「それで烏月よ」

烏月
「何ですか？」

サクヤ
「あんた、まーたそんなヒカリモノ振り回して、よくもまあ捕まらないもんだねえ」

烏月

「登録証なら持っています」

サクヤ

「持ち歩きにはそれで足りるだろうけど、抜き身で振り回すってのにはどうなのさ？」

サクヤ

「傷害、殺人未遂の決定的瞬間の映像もあることだし」

烏月

「今の写真を公表すると？」

サクヤ

「さーて、どうしようかねえ」

烏月

「恐喝ですか。別に構いませんけど」

サクヤ

「へー？」

烏月

「ナイフや包丁ほど日常的で現実味のあるものならともかく、ものが時代物の太刀ですから。普通の人には芝居の稽古か何かと判断するでしょうね」

烏月さんは女優裸足の美人だし、ユメイさんが映ってたら後ろの景色が透けてるわけで……

どう見てもフィクションだってば。特殊視覚効果満載だってば。

烏月

「仮に問題になったとしても、私はまだ実名や顔は伏せられる年齢ですしね」

サクヤ

「どうとでもなるっかい。最近は圧力でペしゃんこになるような所を通さなくても、画像や記事はバラまけるんだよ？」

烏月

「ますます恐喝じみてきましたね。匿名によるデジタル情報の公表などで、私を追い込むだけの信憑性が得られるとお思いですか」

サクヤ

「ちっ」

烏月

「もちろん、どのような状況においても、それなりの対策が取られることになると思いますがね。若杉を通して」

サクヤ

「かーっ、これだから権力もった親方に尻尾振ってる犬ッコロは」

烏月

「犬はあなたのことでしょうか。己を揶揄して楽しいですか」

サクヤ

「はっ、忘れてもらっちゃ困るねえ。誰かさんらのおかげで、あたしは正真正銘の一匹狼だよ」

ほんと、仲悪いなあ……

わたしはこっそりため息を吐いて、言い合うふたりから視線をそらした。

にしても一匹狼って、権力に媚びないフリーのルポライターってことを指して言ってるのかな？

サクヤさんがしがないフリーで、しかも写真家としての方が売れてるのって、色々あってスポイルされちゃったせいだとか？

そういえばさっき言ってた若杉って、若杉銀行とか若杉商事とか若杉生命とかの、戦後の財閥解体のところで教科書にも載ってるあの若杉？

……………

烏月さんに逆らったわたしも、社会的に抹殺されて、鬼とか言われちゃったりするんだろうか。

涼しげな金属音につられて顔を上げると、烏月さんが鞘に刀を収めたところだった。

桂

「烏月さん……」

目が合うと、自嘲めいた笑みを浮かべて、ドアの方へと歩きだした。

烏月

「先ほどの連中に少しだけ共感したよ。厄介者に乱入されて、後はどうでも良くなったりね」

桂

「えっ……じゃあ、ユメイさんは……」

烏月

「好きにするといい」

部屋の出入り口に陣取っているサクヤさんに、ぶつかる手前で足を止め。

鳥月

「仮に私が切る気になっても、黙って見ている彼女じゃないだろうしね」

サクヤ

「はいはい、お帰りはこちらだよ」

鳥月さんは道を開けたサクヤさんを横目で一瞥して、部屋から出て行った。

桂

「鳥月さんちょっと待って！ 悪いけどサクヤさん、ここお願い！」

サクヤ

「ちょっと、桂！？」

桂

「ユメイさんのことよろしくね！」

サクヤ

「よろしくって、あんた……」

わたしは力の入らない足に気合いを注入して、現時点での最高速度で部屋を飛び出した。
そりゃあユメイさんのことも気になるけど、同じように助けに来てくれた鳥月さんを、
追い払ったみたいな形で送り出したことが気になるし。

桂

「鳥月さんっ、待って！」

鳥月

「今はまだ夜中だよ。大声を出しては他の泊まり客の迷惑になる」
廊下の曲がり角を曲がったあたりで、ようやく鳥月さんを捕まえることができた。
鳥月さんの静かな口調でこれだけ響くんだから、わたしのばか声はいかばかりか。

桂

「〜〜っ！？」
何となくあたりをはばかりながら、抜き足差し足で鳥月さんの隣に近寄る。

あ、あんまり足音立たないと思ったら、スリッパ履いてなかったし。

鳥月

「……どうやら起きてくる人はいないようだね」

桂

「ううっ、ごめんなさい……」

鳥月

「私に謝られても困るんだけどね」

桂

「でも、それとは別に謝らないといけないし……」

鳥月

「別に？」

桂

「助けてもらったのにあんなことになっちゃったから……お礼もまだ言ってなかったし……」

鳥月

「そんなことで、わざわざ追ってきたのかい」

桂

「そんなことって、大事なことだよ？ お母さんだってそう言ってたし」

鳥月

「ああ、そうだね。感謝の念をもって生きるというのは大変な美德だ」

鳥月

「だけどね」

手にした刀を持ち上げて、わたしの言葉を遮った。

鳥月

「せっかく拾った命を賭けるぐらいだ。ユメイさんだったか——蝶の着物のあの女性は、あなたにとって大切な存在なんだろう？」

鳥月

「その彼女をこの太刀で切ろうとした。半分は脅しだったとはいえ、この刃をあなたに向けた」

そんな私に礼など言うべきなのかと——そう、鳥月さんは言った。まるで鳥月さんが、わたしの仇であるみたいに。

桂

「えっと、よくわからないんだけど……」

桂

「それはそれ、これはこれ——っていうんじゃ駄目かな、やっぱり」

烏月

「……………」

信じられないといったまなざしで、わたしの顔をまじまじと見る。

桂

「せっかく仲良くなれたのに、あんな形でケンカ別れだなんて嫌だよ。ユメイさんをあきらめろって言われても困るけど……………」

烏月

「それがあなたの考え方か」

桂

「うん、一応……………」

烏月

「ならば警告しておこうか。二兎追うもの——とまでは言わないけれど、それではあなたが傷付くだけだ」

桂

「えっ!？」

烏月

「鬼に関わるのなら私には近づかない方がいい。私も関係者からは距離を置くようにしている」

桂

「…………やっぱり謝っても駄目？」

烏月

「謝るも何も、鬼というものはね」

桂

「鬼というものは？」

烏月

「生まれついで鬼よりも、人の成れの果てとしての鬼の方が、はるかに多いものなんだ」

桂

「人の…………人が…………？」

烏月

「そう、人が鬼に成るんだ」

烏月

「敵陣に入った将棋の駒が、裏返って別の働きをする駒に成るように、業の深くに踏み込んだ人が裏返ると——」

桂

「人とは違う、鬼に成る？」

烏月

「私が切ってきたのも、大半がそうした鬼だった」

そう言って唇だけで笑った。

烏月

「もう幾度となく繰り返した。鬼と成った人の家族や知人に憎まれるのは——慣れているよ」

烏月さんは笑った。

とても悲しい笑い方だった。

烏月

「あなたとてわたしが彼女を切っていたら、こうしてここには来なかっただろう？」

烏月

「私と親しくなるほど、私があなたの近くで鬼を切ったときに辛い思いをすることになる。関係者に見知った顔が混じることは珍しくないからね」

桂

「でも……」

烏月

「そしてあなたと鬼が親しいほど、あなたの命は危なくなる。私は役目のためならば、人すら手に掛ける鬼切りなんだ」

桂

「でもっ！！」

理では止められそうにない烏月さんの言葉を、わたしは感情だけで遮った。

桂

「でもユメイさんのこと見逃してくれたよね！？好きにしていって言ってくれたよね！？ それなら——」

烏月

「私は本当に切るんだ。すでに切ったこともある」

桂

「……鬼を？」

烏月

「人を」

　　すがるようなわたしの想いは、ぞっとするほど硬い瞳に跳ね返された。

烏月

「もし彼女が人に害を為す悪鬼と成るなら、私は何があろうと必ず切る。あのときの言葉に偽りはない」

烏月

「加えて、もしあなたの家族や友人が鬼と成ったなら、私はそれを絶対に切り伏せる。いかい、絶対にだ」

烏月

「あなたは優しい人だから、感情をぶつける相手を見つけられずに、辛い思いを抱えることになる」

桂

「でも——」

桂

「でも、それって『もしも』の話でしょ!？」

烏月

「可能性はあるんだ。誰もがその魂に鬼を宿しているのだから。そしてことが起こってしまえば、いくら悔いても遅すぎる」

桂

「そんな——だから烏月さんは——」

　　これは訊いてもいいことなのか、わからないけれど。

桂

「烏月さんは誰とも関わる気はないんだ？」

烏月

「私は私である前に、千羽党の鬼切り役」

　　——言い切った。

　　最初に烏月さんを見たときに、日常とは切り離された空気を付き従えている人という印象を抱いて、それを綺麗だと思ったのだけれど。

　　その綺麗さが、今は悲しかった。

桂

「それなら烏月さん。どうして私と話してくれたりしたの？」

烏月

「そうしないのは不自然だから。あなたとは今日明日きりの関係だと思っていたから。私の役目とは無縁の存在だと思っていたから——」

烏月

「だけどそれは誤りだと、すぐに気が付いたよ。気が付いていてここまで関わってしまった私も、相当に愚かなんだけれどね」

烏月

「桂さん、あなたはサクヤさんの知人であり、ユメイさんのような存在が依って立つ存在であり、あなた自身が鬼に縁あるさだめの持ち主だ」

烏月

「今ここで別れた後も、いつの日にか運命が重なることがあるだろう。そしてそのときはきっと、私たちは対峙していることだろう」

烏月

「だからここで、私たちの縁の糸を断ち切ろう」

刃先が首の皮一枚すんでのところを通り抜け、遅れて届いた剣風がわたしの身体を凍らせる。

たった一本だけ刃に触れてしまった、乱れて浮いていた髪の毛が、ゆっくりと廊下に落ちた。

刀を鞘に戻した烏月さんは、振り返りもせず廊下の向こうに消えていく。

そしてわたしは、ひとりその場に取り残された。

桂

「あ……」

追いかけても、足腰が立たなかった。

桂

「ううっ、行っちゃった……」

サクヤ

「いいよ、いいよ。あんな奴は放っておきな」

桂

「あんな奴って、それはひどいよ。烏月さんはわたしを助けてくれたんだよ？」

サクヤ

「そうなのかい？ あたしが見たのは、その正反対のところだけだしねえ」

桂

「ううっ……」

サクヤ

「それにあたし、あいつのこと嫌いだし」

ユメイ

「そっちが本音なんですね、サクヤさん」

サクヤ

「おや……」

桂

「ユメイさん、大丈夫なの！？」

ユメイ

「大丈夫よ、桂ちゃん。烏月さん——だったかしら。彼女のおかげで、こうして形を保ってられるわ」

白くたおやかな手が伸びてきて、わたしの髪をゆっくりと撫でた。
ちゃんと優しい感触があった。

ユメイ

「桂ちゃん、守ってあげられなくてごめんなさい」

その痕跡ともいえる、ぐしゃぐしゃになってしまった髪を、手櫛で整えてくれながら謝る。

桂

「ううん、そんなことはないよ。ユメイさんがいなかったら駄目だった」

サクヤ

「にしても、幽霊ってのは本当にいるもんなんだねえ」

手持ち無沙汰だったのか、せっかく綺麗にしてもらった髪を、勝手に三つ編みにして遊んでいた。

わ、そんなに細かくきつくしたら、髪に編み癖ついちゃうって。

桂

「サクヤさん！」

ユメイ

「いいのよ、桂ちゃん。確かにわたしは幽霊みたいなものなんだから」

梳かききった頭を、ぼんと叩いて微笑む。

桂

「でもね、ユメイさん……」

ユメイ

「いいの。サクヤさん、桂ちゃんのことをお願いしますね」

サクヤ

「ああ、今度こそ任されたよ」

髪を編むのに集中しているのか、顔も上げずに生返事をする。

……ん？

何だか納得いかない対応だけれど、ユメイさんはそれで満足だったのか、姿勢を正して頭を下げた。

そしてその姿はそのまま薄らいでいく。そういえば今の言葉は、遺言みたいに聞こえないこともないわけで――

桂

「ユメイさん！？ ユメイさん本当は大丈夫じゃないんじゃ！？」

ユメイ

「いいえ、自分で形を解いているだけだから」

ゆっくり首を振ると、透き通った黒髪がさらさらと揺れて光った。

ユメイ

「かりそめの形を保つするには、たくさんの《力》が必要になるの。だけど、今のわたしにはそこまでの余裕はないから」

サクヤ

「つまり使わない電気はこまめに消して、省エネを心がけましょう――と、できた、できた」

細かく編んだ髪のを、電灯の紐みたいにつまんで引っ張りながら。

サクヤ

「幽霊は消える～、消えるは電気～♪」

――しかもなんか歌ってるし。

桂

「サクヤさん！」

サクヤ

「なに怒ってるんだい。別に今生の別れってわけでもないんだからさ」

桂

「だとしても不謹慎だよ。使わない電気扱いなんてユメイさんに失礼だよ」

ユメイ

「いいのよ桂ちゃん、その通りなもの。今の今まで留まったのは、単なるわたしのわがままなもの」

ユメイ

「本当ならすぐにでも形を解いて、《力》を蓄えるべきなんだから」

桂

「でも……ユメイさん!？」

触れようとして伸ばした手が、すかっと素通しに伸びた。

ユメイ

「わたしの助けが必要になったときに、再び形を成せるように——」

そして勢いあまったわたしは、そのまま前のめりに倒れこんだ。

桂

「きゅう……」

サクヤ

「おやおや、あんたも電池切れかい？」

桂

「んんっ……」

まぶたごしの陽射しの刺激に目を開けると、見慣れない天井が頭上に広がっていた。
お母さんとずっと住んでいたアパートの天井と、よその天井と見誤るなんてありえない。
だいたい、うちよりずっと天井高いし、広いし。

……………

……いやいや、ここもわたしの家なんだっけ？

桂

「ふぁ～～～」

わたしはのそりと布団から這い出して、障子窓を全開にする。

夏真っ盛りの陽射しの強さと、それを浴びてすすくと育った草花でいっぱいの庭が、
瞳の中に飛び込んでくる。

こうして明るい所で見ると、いやはや何とも自然を感じさせてくれる佇まい。

そうだ、そうだ、そうだった。

だんだん頭がはっきりしてきた。

ここは経観塚にあるお父さんの実家で、べらぼうに広い庭に蔵まで建っている、威風堂々としたお屋敷だった。

とはいえ十年來の放置の影響は、庭の荒れ模様からもうかがえる通り。もちろん、電気・ガス・水道の三大ライフラインも断たれっばなし。

家の方針でひとり（と一匹）旅中の葛ちゃんが、不法侵入及び滞在してくれていたおかげで、そこそこの環境整備がされていたのはまさに僥倖。

埃の積もったじめじめの畳に、かび臭いお布団を敷いて寝ずにすんだだけでも、運がいいと思って間違いないだろう。

ってゆーか、そんな場所に泊まりにくるあたり、先見の明のなさが浮き彫りになったと言うか。

……さて。

この家の店子にしてわたしの恩人たる葛ちゃんと、その相棒の白い子狐・尾花ちゃんは、もう起きているだろうか。

桂

「葛ちゃん、尾花ちゃん、おは——」

——がらん。

部屋の中には誰もいなかった。

お布団もきちんとたたまれて、押し入れの中にしまっていた。

そして葛ちゃんの荷物も見当たらない。

桂

「あれ——？」

桂

「葛ちゃーん？ 尾花ちゃーん？」

声を出しながら屋敷の中を歩きまわる。

昨夜は懐中電灯と月明かりだけが頼りだったので、最低限のチェックしかなかったんだけど、こうして歩くと本当に広い。

桂

「あ」

びたっと足が止まった。

この先はまだ清掃の手が伸びていない模様。

とはいえ積もった埃に足跡はなし。つまりは前人未到の領域だから、葛ちゃんたちもこの先にはいないということに。

桂

「おかしいなあ。どこにいったのかなあ——」

と、思い出すのが良くある話。

曰く、狐は人を化かすもの。

招かれたお屋敷が馬小屋というのはともかく、ご馳走と思って口にされたものが馬の糞と

いうのは、かなり洒落にならないんじゃないかと。

……………

……だ、大丈夫だよな？

少なくともお屋敷は昨夜のままだし、何かを勧められて口にした覚えもないし。

……………

……腹が減っては戦はできぬ。獅子身中の何とかとも言うし、まずはこいつを抑えないことには。

ウェットティッシュで顔をふいて、ささっと髪を梳かして簡単に身支度を整える。

今日もいい天気だ。昼を回ったら途端に暑くなりそうな、抜けるような青空が広がっている。

本当に広がった。きっと目の端にかかるような、高い建物が近場にはないからだ。

やがて周囲を見渡すのにも飽きたころになって、夏空に黒煙を混ぜ込みながらバスが来た。

桂

「……………」

何事もなかったかのように通り過ぎていった。

わたし、無視された！？

道の際に立つバス停留所の標識によりそっていたわたしは、慌てて道の真ん中まで移動して、両手を大きく振り回す。

桂

「乗客いますよー！？ わたし乗客ですよー！？」

あまりスピードを出していなかったのが幸いしたのか、数十メートルほど離れたところでバスは停車した。

小走りで停まったバスのお腹に向かい、機械の吐き出す整理券を受け取りながら、段差のきついステップを上って行く。

バス運転手

「すみません、この停留所でお客さんを乗せるなんて初めての事だったんで。私の運転歴の中では、降りるお客さんもいませんでしたし」

まだ若そうな運転手さんが、バックミラー越しに頭を下げた。

バス運転手

「何だか狐にでも化かされてる気分ですよ」

桂

「……わたしもです」

わたしよりも気の短い、お腹の虫の抗議の声は、大きなエンジンの音が遮ってくれた。

とりあえず葛ちゃんを探してみよう。

食べるなら一緒の方が美味しいだろうし、探しがてらに身体を動かせば、一石二鳥で美味しさ二倍になってくれるはず。

何といっても空腹は最高のスパイスだしね。

……ごめんなさい。本当はもう十分です、スパイスは。調味料のかけすぎって、美味しさにも身体にも良くないだろうし。

桂

「葛ちゃーん、ごはん、ごはん、ごーはーん」

ばかみたい連呼しながら、もう一度念のためにと屋内を一巡りしてみる。

しばし待てども返事はなし。山に向かって叫んでみれば、木霊ぐらいは返ってくるかもしれないけど、それってまったく無意味だし。

……さて。

中にいない以上は外を探すしかないわけだけど、一概に外と言ってもあまりに範囲が広すぎて、探す側としては困ってしまうわけで。

居間に置かれたちゃぶ台に、ひとりで着席、ひとりで会議。議題は先ほどの仮定について。

まず、出て行っちゃったということについては、即時に否決。

可能性うんぬんの問題じゃなくて、わたしの希望としてとりあえず。

いきなり出て行かれるほど嫌われたとか、あまり朝から考えたいことじゃないしね。

葛ちゃんにわたしが化かされたっていうのも、同様の理由で除外。

食料調達だとしたら、下手に追いかけるとすれ違いになる可能性が。

何しろ町へ行く唯一の交通手段であるバスは、一時間に一本あるかないかだし……

だとすると、葛ちゃんの帰りを待つのが吉かな？

でも往復一時間で、帰りの乗り継ぎが悪かったりするとさらに一時間待ちで……

桂

「はあ～、それを待つのはどうかな」

すでにぺったんこのお腹を撫でさすりながら、立ち上がって居間を離れる。

では最後に、お散歩に行っている可能性。

それは十分にありそうな気がした。

なぜなら一歩外に出てみると、わたしがお散歩したくなってきたから。

真っ青に高い空——

昼を回ったら途端に暑くなるんだろうけど、まだ大丈夫。それなりに過ごしやすい気温。

森から吹いてくる風の清涼さに誘われるように、わたしはぶらぶらと歩いていく。

桂

「……あ」

おっと、そうだ。そうだった。

取って返して部屋まで駆け戻り、荷物を広げて探し物をする。

こんなこともあろうかと。

備えあれば憂いなし。

山の近くと聞いていたから、ちゃんと持ってきている虫除けスプレートのフタを外し、構える。

桂

「しゅっ、しゅっ、しゅっ、と出発準備完了」

そうそう、それから戸締まり、戸締まり。

……あ、でも入れ違いになると困るから、鍵を掛けたらまずいのかな？

結局、お財布なんかの貴重品にだけ注意すれば、特に心配いらないだろうと判断した。

桂

「いってきまーす」

ひとりで町に出てしまおうとか、探しに行こうとか考えたけど——

まてまて、もう少し待ってみた方が。

お散歩だったら三十分、長くても一時間しないで帰ってくるだろうから、下手に動いて行き違いになったりすると面倒だし。

一番の目的を現在進行形で果たしている以上、後はのんびり優雅に過ごすのも一興。あくせくとした観光目的の旅じゃないんだし。

とはいえ、この空腹からは気を紛らわせないと、のんびりするような気分になれない。そこでいくつか、解決方法を考えてみることにする。

解決案その一、二度寝を満喫する。

そんな贅沢は休みならではだけど、あいにくと睡眠時間は十分だった。

目覚まし時計の助けもなしに、普段なら余裕をもって登校できる時間に起きてしまったのだから、むしろ寝る方が難しいかもしれない。

では解決案その二、読書。

かばんの中には読み止しの文庫本がある。もう五分の四ほど読んでしまったので、もうしばらくは温存しておきたいところだけど……

ああ、町にも本屋さんはあるだろうから、そこで別の本を買えばいいのかな？

うーん、読むべきか、読まざるべきか。

一応保留ということで第三案。陽子ちゃんに電話してみる。

休みの日のこの時間帯はまだ寝ている人も多いだろうけど、陽子ちゃんは早寝早起き。ラジオ体操に参加する子供に交じっても、皆勤賞はほぼ確実。それぐらいの早起きさん。つい夜更かしてしまいう修学旅行なんかでも、ひとりさっさと寝て翌朝の目覚まし役になったそうだから、すでにきつと起きています。

ご両親は旅行中らしいから、迷惑にはならないよね。いたとしても携帯電話だし……でも、もし寝てるところを電話に起こされて、それが暇つぶしの電話だったりしたら、けっこう腹が立つわけで……

……かけるにしても、もう少し後かな？

と、そこで第四案の登場ですよ。

いや、今までの三つの案はこの第四案にいたる前フリというか、引き伸ばし工作というか、なんでこんなに躊躇しているかというところ。

先ほど発見してしまったこの領域に手をつけるなんてことは、できればしないですませたかった気がしないこともないわけで。

かといって、見てみぬふりというのも心苦しく、もっと優先度の高い暇つぶしが見つけられれば良かったんだけど。

ああ、とりあえず掃除用具を探さなきゃ。

居間なんかは綺麗になってるから、どこかに置いてあるはずなんだけど。

それに昨夜、本題前にふつんと切れてしまったのも気になる場所だった。

……そういえば、切れたんだっけ。

根元的な問題を忘れていた。電波の状況によっては、かけようにもかけられないんだっけ。

携帯の電源を入れて見てみる。

大丈夫、今はアンテナ立っている。

ぷち、ぷち、ぷち——と。

登録済みのアドレスから選んでダイヤル。

陽子

『はいはい、もしもし、どーしたの？ 何でもいいから話してごらんなさい？』

桂

「いくら番号通知と着メロ指定で相手が変わるとはいえ、開口一番にそれはないと思うんだ」

陽子

『いいじゃない、あたしとはとちゃんの仲なんだしさー』

桂

「親しき仲にも、だよ。陽子ちゃん」

陽子

『おはようございます。奈良陽子です。清々しい朝がやってまいりましたが、羽藤さんは遠い空の下いかがお過ごしでしょうか？』

桂

「……やりすぎ」

陽子

『もう、はとちゃんは難しいなあ。きっといいお姑さんになれるよ』

桂

「お嫁さんじゃなくて？」

陽子

『嫁にはやらんっ！！』

桂

「うわー、お嫁さん飛ばしてお姑さんになるのは、ちょっと厳しいなあ」

陽子

『大丈夫、大丈夫。養子縁組みなり何なり、打つ手はあるし。例えば、パパさんちに居着いてた家なき子——何だっけ。うずらじゃなくて』

桂

「葛ちゃん？」

陽子

『そうそう葛。その子、はとちゃんが言うには良い子らしいけど、娘にできるぐらい仲良くやってる？』

桂

「うーん……」

陽子

『なんだなんだ、その反応は。さっそくケンカでもやらかしたか、んー？』

桂

「いや、ケンカしたわけじゃないんだけどね」

陽子

『じゃないけど？』

桂

「起きたら葛ちゃんも尾花ちゃんもいなくて」

陽子

『はやくも三行半で実家に帰られた？』

桂

「……それをするの、娘じゃなくてお嫁さんなんじゃ？」

陽子

『……………』

桂

「……………」

陽子

『なるほど、請け負ったわ。その消えた少女と狐の謎を解明して欲しくて、この安楽椅子探偵Yに連絡を入れたというわけね』

桂

「わ、前提すらちゃんと推理できてないよ？ しかもわたしの疑問は無視？」

陽子

『ズバリそれはミステリーね！ ついでに夏だし田舎だし、因習因縁入り乱れの猟奇サスペンスをひとまたぎした、超常オカルト事件くさいわ！』

桂

「何だか話に脈絡ないよ？ それにわたしの話は聞く気なし？ もしかしてわざと聞き流してる？」

陽子

『ふっふっふっ、はとちゃんならとっくに考えたことだろうけど、お屋敷！ 狐！ 一夜の宿を求めた旅人！』

桂

「ぎくくっ!？」

陽子

『さーて、この三題噺の定番は？』

白い歯をきっちりと並べた、チェシャ猫のような笑顔が電話の向こうに一瞬見えた。

桂

「……………」

陽子

『今の状況って、かなーりそれっぽくない？』

桂

「ないない。狐や狸が人を化かすだなんて、実際にはそんなこと——」

陽子

『ありえないって？ この世には不思議なこともたまーにあったりするかもよん？』

桂

「ありえません。そんなのはフィクションの中だけで十分です。きっとふたりで散歩に行
ってて、もうすぐひよこっと帰ってくるよ」

陽子

『散歩ねえ……』

桂

「そうそう。こっちは空気も綺麗だし、散歩するなら涼しい朝のうちに限るし」

陽子

『あ、そう。それじゃあはとちゃん何の用？』

桂

「単に葛ちゃんが帰ってくるまで暇だったからで、特に用事はないんだけど」

陽子

『よよよっ、あたしは正妻が戻ってくるまでの繋ぎなのね。いわゆるところの二号さんなのね』

桂

「あのね……」

どっとため息。

陽子ちゃんのテンションには、たまに参る。

こんなときは話題を変えるのが一番なんだけど、ご多分に漏れず話を聞いてくれなかつたりするしなあ……

と、そこで件の用事を思い出す。

桂

「そうそう、陽子ちゃん。昨日の夜に電話くれたとき、切れる前に何か言いかけてなかった？」

陽子

『ああ——』

冗談より優先順位の高い話題だったみたいで、しばし言葉がぴたっと止まる。

陽子

『ええと、昨日電話するちょっと前にね、ママさんの知り合いって人から、ほとちゃんの居場所知らないかって電話があったのよ』

警戒してます、といった感じでいっぱいの子音だった。

桂

「……誰だろう。お母さんの知り合いってけっこういるから」

陽子

『そうねー、仕事関係とかはほとちゃんも把握してるわけじゃないでしょ？』

陽子

『だとしたら、適当な氏名身分をでっちあげても、ほとちゃんにはわからないわけね……』
さっきの余韻を引きずっているのか、捕物帖の下手人探し風説明口調の陽子ちゃん。

桂

「それで、その人なんて名前だった？」

陽子

『へ？』

桂

「だから、電話してきたの。わたしの良く知ってる人かもしれないし」

陽子

『……あはは、それがねー』

桂

「それが？」

陽子

『何かこう、名前訊きそびれちゃってさー』

桂

「確かにね。その可能性は考えたんだけどね」
常識的に考えたら、狐に化かされるなんてことはありえないんだけど。

人里離れた森の奥。

藁葺き屋根みたいなあからさまに古い民家じゃないけれど、それでも時代掛かった立派なお屋敷。

電化製品など文明の恩恵は一切なし。

……これだけのロケーションがずらり並ぶと、ありえないとはわかっていても。

陽子

『ぶっちゃけはとちゃん、化かされたんじゃ?』

桂

「あはは……はあ……」

何だかそんな気になってきたりもするのです。

桂

「尾花ちゃんって、狐は狐でも白狐だし……」

陽子

『ビャッコってしろきつね?』

桂

「うん。頭のとっぺんから尻尾の先まで、本当に真っ白だった」

陽子

『うわー、そりゃまたかなりのストライクゾーン。白い狐のお面って、そーゆーマンガとか映画の定番アイテムじゃない?』

狐面といえばここ近年、大晦日の夜に狐面をかぶって行進する、一見和製ハロウインのようなイベントが王子稲荷で定着しているそう。

そういえば、人を化かそうとした母狐が逆に一杯食わされて「人間怖い」と子狐に語るの『王子の狐』だったっけ。

桂

「……わ、本当にストライクゾーンだ」

ど真ん中だった。

もしかして、せっかく人里離れて平和に暮らしていたのをわたしが邪魔しちゃったとか?

陽子

『やーい、はとちゃん、えんがちょ』

桂

「……何?」

陽子

『だってほら、さっきのいわゆる定番どこだと、肥溜めのお風呂とか、馬の糞の饅頭だとか』

……………

でも、塩を舐めさせられて水を飲んだだけだし、あのぐらいはご馳走になった内には入

らないし。

よし、なかったことに。

桂

「生憎、そういったサービスは受けておりませんので」

陽子

『あらら、本当に素泊まりだったんだ』

桂

「朝ごはんもまだだよー」

ああ、せっかく忘れてたのに。

桂

「ううっ、お腹空いた……」

陽子

『そんな情けない声出すぐらいなら、さっさと何か食べればいいのに』

桂

「ううっ、葛ちゃんたちが帰ってくるのを待ってるんだけどね、一応」

陽子

『フッ、化かされた説が正しければ、はとちゃんそのまま飢え死によ？』

桂

「さすがにその前に、何か食べようとすると思うけど……ってゆーか、二食も抜けない」

陽子

『じゃあ、昨日の約束通りごはんおごるからさ、帰っておいでよー』

桂

「え？」

陽子

『だってほら、もうそっちいった用って済んでるわけでしょ？』

桂

「まあ……」

陽子

『パパとママは旅行中で一、お凜は国外逃亡中。なのにはとちゃんまでいきなりお里帰りだなんて、ひとりお留守番のあたしは寂しいにゃー』

桂

「……………」

えーと、お塩は舐めさせられたけど、それ自体すでに化かされたようなものだし。

そういえば昨日のお昼以来、わたしが口にしたので……

……ううっ、お腹空いたなあ。でもこの辺って、町まで出ないとお店ないんだよなあ。
葛ちゃんたちは今までどうしてたんだろう？

桂

「おーい、どこいっちゃったのー？ 朝ごはん食べようよー」

取って返して玄関へ。

あるのは揃って並ぶわたしの靴ばかり。

本当にどこにいっちゃったんだろう。

食料調達？ それともお散歩？ もしかして出て行っちゃったとか？

桂

「そうなんだよね……」

わたしの用事は昨夜でおしまい。

まだ小学生ぐらいの葛ちゃんひとりというのが放っておけなくて、ここに寝泊まりしようと思ったわけだけど、それは単なるおせっかい。

桂

「……帰ろうかな」

もう、ここにいる意味はあまりない。

憶えがないのは事故のせいでも、その後に一度も訪れていないんだから、それも仕方のないことだけ——

陽子

『ほんと？ 帰ってくる？ 明日遊べる？』

桂

「今出れば夜のうちにそっちにつくよ」

陽子

『じゃあそれ決定。変更は不許可。そんでもって、はとちゃんの明日は予約ね。約束通りデザート付きで昼おごるからさー』

桂

「……我慢して」

陽子

『わーん、はとちゃんの薄情者ー』

桂

「だけど葛ちゃんを放って帰るのは、もっと人としてどうかと思うよ。まだ小さいんだし」

陽子

『ううっ、はとちゃんも若い子の方がいいのね』

桂

「あのねー、陽子ちゃん」

陽子

『おーけ、おーけ。せっかく長い時間と旅費かけてそっち行ったんだもんね』

桂

「陽子ちゃん……」

陽子

『それに狐に化かされるだなんて、滅多にない体験だし』

桂

「あはは、まだ化かされたって決まったわけじゃないんだけど……」

桂

「……ところで、お凜さんの国外逃亡って何？」

陽子

『スイスだったかスウェーデンだったかスコットランドだったか、とにかく『ス』のつく涼しそうなところにバカンスだって』

桂

「わ、お金持ちだね」

陽子

『ホントいいご身分で。とりあえずお土産に期待しときますか』

桂

「ますかー」

陽子

『はとちゃんのにも期待！』

桂

「んー、りょーかい。一応なんか探してみるけど、観光地じゃないからなあ……」

すっかり耳に馴染んだ蝉の声と、風が木の葉を揺らすさざめき以外の音を拾い上げて、ぼーっとしていたわたしの意識が覚醒する。

葛ちゃん、やっと帰ってきたか。

立ち上がろうとして、くらりと眩暈。

汗をかくだけでカロリーを消費しているわけだから、夏こそちゃんと食べなきゃいけないのに、わたしは朝ごはんも食べていない。

桂

「葛ちゃーん、帰ってきたのー？」

葛

「はい、帰りましたですー」

玄関まで見に行くのを諦めてその場で発した問いに、応えが返ってきた。

葛

「尾花はちゃんと脚ふいてからじゃないと駄目。雑巾持ってくるまでそこで待機ね」

やがてお相撲さんのような足音を立てながら、葛ちゃん――

――というより、足の生えた荷物といった感じの物体が姿を現した。

桂

「おかえり。すごい荷物だね」

葛

「桂おねーさんに少しでも快適な生活をしていただこうと思立ちまして、町まで買い出しに行っていたのですよ」

四十五度ほど縦軸回転すると、荷物の影から葛ちゃんの顔がのぞいた。

どすっ――

小柄な姿格好にはそぐわない、重たい足音を立てて歩く。

桂

「……今更だけど、ちょっと持とうか？」

葛

「いえいえ、それには及びません。おねーさんは大家さんらしくどっしり構えて、そこでのんびりしていて下さい」

桂

「そう？ だけどそんなにたくさん、よく運んでくれたね」

葛

「昔から、背負いきれないほど重いものを押し付けられてきましたからね。それに比べれば」

桂

「へー。大変なんだね」

葛

「大変ですよ。あの家での生活に比べたら、ここの暮らしがどんなに天国めいていることか」

桂

「そうなの？　すごい家なんだね……」

葛

「そうですねー。あまり一般的とは言いがたい家ですから……」

小さい我が子にひとり旅を強制するような家風が一般的だと、わたしのような柔弱な人間には生きていけない。

葛

「ところで、桂おねーさんはお昼寝でしたか？」

桂

「ううん、ちょっとぼーとしちゃって」

いよいよお腹が空きすぎて、いつのまにか省エネモードに切り替わっていた。

葛ちゃんの帰還で状態復帰したわけだけど、何を差し置いてもエネルギーを補給をしなくては。

桂

「ねえ、葛ちゃん。葛ちゃんが買ってきた中に、何か食べられるものってある？」

葛

「もちろんですよ。今夜はちょっとご馳走ですよ」

桂

「今夜？　ちょっと質問してもいい？」

葛

「はい。一応、物については色々知っているという自覚がないこともないわけですけど、わたしに答えられる範囲でならご随意にどうぞー」

桂

「葛ちゃん、朝ごはんとかお昼ごはんは？」

葛

「兼用ですけど、食べてきましたよー」

桂

「——！？」

がっくりと畳に手をつくわたし。

葛

「……もしもし、桂おねーさん？」

返事はお腹がしてくれた。

葛

「もしかしておねーさん、お昼ごはん食べてませんか？」

桂

「朝もまだ……」

葛

「……もしかして、噂に聞こえるダイエットとやらを実行してたりするですか？」

桂

「してないよ……ごはんは一緒に食べようと思って、葛ちゃんを待ってたただけだよ……」

葛

「……………」

沈黙、一瞬。

葛

「そそそ、それは大変失礼しましたっ！！」

音を立てて両のてのひらを畳に打ち付けると、額が擦り切れんばかりの勢いで平身低頭。

葛

「よもやわたしのように厚かましく上がりこんだ歓迎されざるはずの居候にそこまで気を使って頂いているとは露知らず身勝手な振る舞いをば——」

いわゆる土下座の格好のまま、一息に詫言をまくし立てる。

葛

「そうだおねーさん食料あります！ 有名どころの栄養調整食品に缶詰各種、それから乾パンには金平糖もジャムも付いてますよ！？」

ばね仕掛けのおもちゃのように顔を上げると、抱えてきた大荷物から口上通りの品を取り出し、わたしの前にずらっと並べる。

桂

「……ご馳走？」

かなり微妙なところだった。

そりゃあ、ちゃんとお腹は膨れるし、栄養だって摂れるんだろうけど……

葛

「あの一、何か至らぬ点がございましたでしょうか——って、水を出すのを忘れてました一つ」

表彰状のように、二リットルサイズのペットボトルが差し出された。

桂

「……あはは、ありがとう」

受け取ったそれは、ずっしり重かった。

桂

「ふう、落ち着いた一。ご馳走さま一」

葛

「お粗末様でございます」

空箱やアルミ包装を別々の袋に片付けながら、つい一食あたりの単価をはじいてしまうぐらい、貧乏性が習性になっているわたし。

しかも割高だと思ってしまうあたり、なかなかの重症で、ついでに言わせてもらえば葛ちゃんはお買い物下手。

値札シールはほとんどが標準小売価格のまま、値引きはほとんどされていない。

桂

「う～」

葛

「おねーさん、どうかしましたか？」

桂

「あ……えっと、そうそう、葛ちゃん。こんなにたくさん買ったんだから、お金もけっこうかかったんじゃない？」

葛

「んん一、それほどでもないですよ？」

桂

「そうなの？ わたしも出せるだけは出すよ？」

葛

「いえいえ、かかったぶんは宿泊費ということで。なんでしたらそっちも払いますよ？」

桂

「いいよ、いいよ。こんな場所に泊めて、お金をとるなんてできないよ」

葛

「でもお金だけは持ってるんですよ。総額は多分、桂おねーさんがびっくりするぐらい」

桂

「じゃあ、今日の買い物のぶんだけね」

さすがに葛ちゃんのご両親も、着の身着のまま放り出すような鬼じゃないってわけだ

——
って、そんなの当たり前だよ、わたし。

桂

「だけど葛ちゃん。お金に余裕があるんなら、どうしてわざわざこんな所に？」

葛

「見ての通りのお子様で、しかも動物連れですから」

桂

「……そういえば尾花ちゃんは？」

葛

「たはは……すっかり忘れてました」

全速力で居間を出ていく葛ちゃん。

入りがけの言いつけをちゃんと守って、大人しく玄関で待機しているらしい。

……………

うーん、尾花ちゃんってば偉いなあ。

陽子

「はい」

メインにあたるバーガー類を片付けて、あとはフィッシュアンドチップスなんかをつまみながらのだべりタイムに突入してから。

桂

「何？」

陽子

「だーかーらー、はいってば」

陽子ちゃんがてのひらを突きつけてきた。

えーと、ユニライスバーガーが三百六十円で、フィッシュアンドチップス二百四十円。それと、レギュラーサイズの烏龍茶が——
トレイの上にあったものの総額をざっと弾いて、お財布からお札を引っ張りだす。

桂

「……はい」

陽子ちゃんのでのひらの上で、昔の偉い人の顔がくしゃっと歪んだ。

陽子

「なめんなコラァーッ！」

桂

「ひゃっ!？」

握り潰されたお札が、ぺしっと叩き返される。

桂

「ううっ、陽子ちゃんってばひどい……」

陽子

「ひどいのははとちゃんの方。あたしはぜんぜんひどくない。うわーん、はとちゃんの不義理者ー」

桂

「え!？ なになに、どうしたの!？」

陽子

「あんな紙っぺらよこすなんて、信じらんない! あたしのおごりってそんなに信用ゼロ!？」

桂

「そういうわけじゃないけどね……」

くしゃくしゃになったお札は、てのひらアイロンをかけてもあまり綺麗にはならなかった。

ところで、てのひらを上にして差し出す仕草に、よこせ以外の意味ってあったっけ？
訊いてみようか、本人に。

桂

「えっと、じゃあ、さっきの手は？」

陽子

「あたしはこーしてはとちゃんへの愛を示してるってゆーのに、はとちゃんはあたしに渡す愛を忘れてきちゃったのっ!？」

桂

「……愛？」

陽子

「お土産」

駅に売店でもあれば良かったんだけどねー。

この夏——

わたしは今までで一番泣いて。
とてもあわただしい旅をして。
日常に追われる生活に戻った。

夏もうすぐ終わりになるけど、今頃葛ちゃんは自分の家に帰って、きたる新学期への備えをしていたりするんだろうか。

それとも本当にあの土地に住む狐で、わたしを化かしていたんだろうか。

税理士さんをお願いして、夏が終わるまでの間経観塚のお屋敷の処分を待ってもらったけど——

もしそうだとすると、あの土地家屋を処分するという決定は、ちょっと申し訳なかったかもしれない。

陽子

「で、とりあえず明日から新学期なんだけど」

桂

「うん。陽子ちゃんが全部宿題終わらせたってだけでも、早めにこっちに帰ってきたかいがあったよ」

陽子

「はいはい。その節は大変お世話になったわけだけど、はとちゃんさりげなく自分のこと棚に上げてない？」

桂

「わたしがそれまで手をつけてなかったのは、全部家の都合だもん。先生だって、情状酌量の余地ありで大目に見てくれるもん」

陽子

「そーねー。にしても、はとちゃんのパパさんの存在は大きいわー」

陽子

「まったく、なんではとちゃんは英語ペラペラのスラスラじゃないわけよ？ むしろあたしより成績悪かった？」

桂

「うるさいな一。古文はわたしの方が上だもん。第一、親の技術が引き継げるなら、世の中の二世さんたちは苦勞してないよ」

陽子

「はいはい——」

桂

「ありがとうございました」

バス運転手

「またのご利用をお待ちしています」

桂

「んっ」

駅前はとても寂しいところだったので、そのふたつほど手前の停留所、そのものずばりの『経観塚銀座通り前』でバスを降りた。

桂

「さて……」

待ち時間に片道約三十分の上乗せのおかげで、そろそろ軒並み店の開く時間になっているわけだけど、一体どこで食べようか。

待ってよ待って、もうちょっと。慌てる何とかはもらいが少ないんだから。

ぺったんこになったお腹をさすって宥めつつ、商店街の案内板のようなものに目を通す。

うーん。どうしようかな。

和食派のわたしとしては、やっぱり白いご飯がいい。とりあえずお米とお味噌汁があれば、細かいことには文句は言うまい。

そこで候補として上がってくるのが、町の定食屋さんなわけなんだけど……

すすけた暖簾を頂いた、開け放しになっている引き戸の入り口。奥の方は薄暗い。

ファーストフードやコンビニなどの近代的なつくりのお店は、通りに面している方はガラスを大きくして明るく開放的になるよう努めている。

ところがこの定食屋さん、そういった営業努力を放棄しているというか、常連客相手だから一見さんお断りの雰囲気は漂っているというか……

仕事帰りのおじさんたちが、晩ごはんついでに晩酌をたしなんだりしているような、そんな風情が乙女には二の足を踏ませてくれるのだ。

ううっ、どうしようかな。やっぱり他のお店にしようかな。ラーメン屋さんなんかならお味噌汁は無理でもお米は食べられるし……

それからしばらく、お店の前でぐるぐるうろうろしてたんだけど、中から漂ってきたお

魚の焼ける香りが、わたしに踏ん切りをつけさせた。

桂

「白いお米に焼き魚……下ろし大根にお醤油と、すだちかかぼすを搾って……」

結局、わたしは店の中に入った。

こもった熱をかき回す、左右に首を振る扇風機。クーラーらしきものが見当たらないのに、わたしはちょっとだけ後悔を覚えた。

そりゃあね、冷房中なら入り口は閉めきってただろうし、そうしたらわたしはきっと入ってこれなかったんだらうけどね。

つけっぱなしのテレビの中では、わたしと同じ年頃の男の子たちが、白いボールを打ったり投げたり追ったりしていた。

うちの学校には女の子しかいないから、あまり実感湧かないけれど、これも夏の風物詩。

さすがにあそこに比べれば、ここだって日陰で扇風機回ってて涼しいんだらうけどね。

それに昨日だって扇風機すらないところで一泊したわけだし、冷房なくても我慢できるもん。

気を取り直してメニューを検分。

とりあえず当面の生活に困るほど逼迫（ひっぱく）してはいないし、旅先で食事をケチるのはなんだか空しいので、食べたいものを頼んでやろう。

お品書きをつらっと眺めると、わたしの読み通り、冷や奴やきんぴら、焼きいかにレバーなど、お酒のおつまみ向きのおかずが充実していた。

本命の焼き魚定食に、白菜ときゅうりのお漬け物で野菜分を補充するとして、ちょっとリッチに出汁巻き卵を追加するのも悪くない。

……あ、本格温泉たまごも発見。

ゆで卵じゃなくて、温泉たまご。

本格と銘打っている以上、温泉たまご機なんかじゃなくて、しっかり地球の熱エネルギーを蓄えさせた真の温泉たまごなんだろう。

そういえば案内板にも、温泉の文字があったような気がしないこともない。

温泉かあ……

桂

「……………」

わたしは二の腕を鼻に近づけて、くんくんと嗅いでみた。

……微妙、かな。

わかるほど臭うわけじゃないけど、自分の体臭には気付きにくいっていうしね。

桂

「すいませーん、焼き魚定食と——」

注文ついでに訊いてみたところ温泉旅館が一軒あって、昼の間は泊まり客以外にも温泉施設を使わせてくれるとのこと——

FF店員

「いらっしゃいませー。ご注文はお決まりでしょうか？」

見ての通り、ここは普通によくあるファーストフードのお店。ハッキンビーフハンバーガー。

「わたしの町にももちろんあるし、あなたの町にもあるかもしれない♪」というテレビのCMソング通り、経観塚にまで進出していた。

メニューの種類や値段については言わずもがな。内装やディスプレイにしても、近所にある支店と大きく違うところは見当たらない。

アウェイの中のホームグラウンドといった感じで安心できる反面、旅の風情はだいなしだったりして。

とはいえ、わたしの身体が欲しているのは、お腹の足しにならない情緒ではなく、もっと即物的なものなのだから問題なし。

FF店員

「一緒にフィッシュアンドチップスもいかがですかー？」

桂

「あ、お願いします」

FF店員

「それでしたら、こちらのセットでご注文いただきますと、大変お得になっているんですが、いかがでしょうか？」

桂

「じゃ、じゃあそれで……」

いつもにこにこ無料のスマイル。だがしかし、その笑顔は抱き合わせ商法で元を取っていたのであった——とか何とか。

和食派のわたしとしては、やっぱり白いご飯がいい。とりあえずお米とお味噌汁があれば、細かいことには文句は言うまい。

とはいえ、町の定食屋さんは……

……女の子がひとりで入るには、なかなか勇気が必要そうな店構えをしていた。

桂

「ううっ、でもお米が……あつあつのご飯にこう、お醤油をたらした……」

……………

……こんな道の往来で、わたしは何をやっているんだか。暑さで頭がどうにかしてしまったんだろうか。

コンビニ店員

「いらっしゃいませー」

結局わたしはかなりの譲歩を示して、コンビニのおにぎりでも手を打つことにした。

ちゃんと戸締まりしなかったお屋敷（忘れたんじゃないかと、葛ちゃんを締め出すといけないし）が気になるので、早く帰るべきだし。

そりゃあ、お財布なんかの貴重品は持ってきたから、残っているのはわたしの荷物ぐらいで、盗むものなんて何もないかもしれないけれど。

あ、でも、葛ちゃんがわたしのこと探してたら悪いしね。

とりあえずふたりと一匹分。お昼ごはんの分まで見越して、多めに購入することにする。

そういえば葛ちゃん、好き嫌いあるのかな？

とりあえずおにぎりの具はあるだけ制覇——と、キンキンに冷えた店内を物色する。

梅干し、昆布、おかか、鮭——ここでいったんギブアップ。これ以上は持つのが辛い。

入り口脇に重ねてある買い物かごを装備して、おにぎりのコーナーに戻る。

鱈子、いくら、ツナマヨネーズ——おっと、尾花ちゃんはお稲荷さんなら食べるかな？

食べ物のほか、飲み物や割り箸、紙コップやお皿、お得サイズのウェットティッシュなどの生活用品を放り込むと、かごは手応えずっしりと。

桂

「ううっ、重いかも……」

わたしの感覚からするとコンビニで生活用品を買うのは負けなんだけど、今回はアウェイだからそれもやむなし。

お茶やお水のペットボトルも、スーパーや薬局を探した方が安いはずだけど、空きっ腹を抱えたまま異郷をうろうろするのは切なすぎる。

……旅館とかに泊まらなかっただけで、ずいぶん節約してるはずだし、これぐらいは大目に見ることにしよう。

コンビニ店員

「ありがとうございましたー」

夏の京都は暑いというけど、一応高緯度のはずのここも、山に囲まれた地形なだけに暑かった。お店に入る前より気温は確実に上がっている。

……天国と地獄とは、まさに。

肌寒いまでに効いていた冷房が恨めしくなってくる。電気は大切にしないとイケないのに。

桂

「暑い……重い……お腹空いた……」

バス停へと戻る道の途中で、さっそくわたしはくじけそうになった。

桂

「ううっ、タクシー捕まえちゃおうかな……」

泣き言を吐きながら、顔を上げると——

憎々しいまでに空は青くて、そこに輝く太陽がまぶしくて、蝉の声がうるさかった。

結局、バス停にまでの間にタクシーが通りかからなかったせいもあって、無駄遣いはしなかった。良いんだか悪いんだか。

——というわけで、食後は一路温泉へ。

失礼ながら、場所柄あまり繁盛しているとは思えない旅館なんだけど、温泉はとても立派な露天の岩風呂なのだそう。

竹のすのこの香りも爽やかな脱衣所にいる間から、すっかりわたしはうきうきさん。服を脱ぐ手も自然と速まる。

確かに女将さんが自慢するのも頷けるような、行き届いた温泉だった。

広さはそれなり。垣や庭石の配置もはまっている。

冬には雪の降る土地なので、露天というだけでもきっと高得点。今の季節でも夜になれば、月や星の輝きで風情のある景観になるんだろう。

——さて。

その景観の恩恵に与れない夏の昼間にも、アドバンテージがないわけじゃなかったりする。

夏休み中とはいえ平日の昼間だけあって、たぶんほとんど貸しきり状態。他には湯煙に霞む人影がただひとつのみ。

ただ温泉に浸るといふ本来の用途に対しては、泉質と並んでそちらが重要かもしれない。

桂

「ん～～～、広々～～～」

ちなみに、わたしのような飛び込みの利用者もけっこういるのか、必要なものは一通りロビーでそろえることができた。

昼間のこの時間にいるってことは、あの人もなのかな？

桂

「こんにちは、お邪魔します」

先客

「おやおや。こんな真っ昼間から温泉なんて、いいご身分だねえ」

桂

「お互い様です。わたしは暇な学生ですから——」

——と、どこかで聞いたような声だった。

桂

「……？」

とりあえず隅っこの洗い場に行って、身体を洗うことにする。

タオルに石鹼を泡立てて、まず左の首から。

桂

「ごしごしごし……」

首の次は腕一。

先客

「前に見た時からあんまり育ってないんだねえ。それで成長期は終わりなのかい？」

桂

「はれ？」

胸から背中へ移った手を止めてみると、浴槽の奥の方にいたはずの先客さんが、洗い場の近くにまで来て、ニヤニヤとわたしを見ていた。

先客

「……久しぶりだねえ、桂」

桂

「そういうサクヤさんこそ……温泉旅行？」

サクヤ

「……………」

桂

「……あれ？ 違った？」

サクヤ

「いや、ああ、そんな感じさ。一応仕事も込みなんだけど、切羽詰まっちゃいないしねえ」

桂

「仕事ってどっち？ 記事の方？ 写真の方？」

サクヤ

「写真の方さ」

両手で作った四角いフレームの中に、わたしの姿を捕らえて、ウインク。

サクヤ

「んー、いいねえ、いいねえ。その泡からのぞく柔肌のチラリズムがたまらないよ」

桂

「……………」

サクヤ

「んじゃあ、次はもうちょい大胆なポーズで一枚撮ろうか」

桂

「……そんな仕事もやってるの？」

サクヤ

「いや、残念ながら」

マイナス温度のじと目も効果なし。

彼女、浅間サクヤさんはお母さんの古くからの友人で、ルポライター兼フォトグラファー。

日本人離れしたプロポーションと、くっきりとした顔立ちは、時折撮る側ではなく撮られる側に間違われるぐらい。

とはいえ腕前だって大したもの。今ではフォトグラファー兼、と順番をひっくり返した方が通りがいいらしい。もっばら稼ぎは写真がメイン。

サクヤ

「今度のは『日本に残された野生』とかいうテーマで、被写体は狐狸の類に猪鹿蝶とか」

桂

「ちょうちょもの？」

サクヤ

「一応ね。奴らは見場がいいからさ」

元を正せば記事に添える写真のためにカメラを覚えたそうなんだけど、趣味で撮った写真が評価されて今に到るのだそう。

踏み入るのも困難な探検家の領分の秘境の風景だとか、滅多にお目にかかれない野生動物の生態とか、撮るのはもっばらアウトドア。

桂

「でも、なんでここなの？ 動物が出るって有名な場所が、もっと他にもありそうなのに」

サクヤ

「有名所は観光地化してたりするからだよ。餌付けされた連中なら、あたしじゃなくても誰でも撮れるよ」

桂

「あ、そうか」

サクヤ

「それに、この辺なら多少の土地感あるしねえ」

桂

「そうなの？」

サクヤ

「あんたは覚えちゃいないだろうけど、あんたも昔はこっちに住んでたんだよ。笑子さんが生きてたころはね」

笑子さんというのは、わたしのお父さんのお母さん。つまりはわたしのお祖母ちゃんのこと。

つまり羽藤家とサクヤさんの付き合いは、それぐらい遡れるほどに古いということになる。

お父さんが死んだ事故の後、語学に堪能だったお母さんに、翻訳や通訳の仕事をツテで斡旋してくれたのもサクヤさんだったりして。

つい最近まで母子ふたり、困ることなく暮らしてこれたのは、この人の存在が大きかったりする。

サクヤ

「それであんた、今は羽様の屋敷に住み着いてるわけかい？」

桂

「昨日からだし、住み着いてるっていうわけじゃ……あまり長居したくなる環境でもないし」

サクヤ

「とはいえ、少なくとも今はあそこを根城にしてるんだらう？」

桂

「うん」

サクヤ

「なら、あたしもしばらく厄介にならせてもらおうか」

サクヤ

「この旅館と山とを往復するのは面倒だし、かといって山の中でのテント暮らしも、もうしばらくは遠慮したいしねえ」

桂

「それは別に構わないけど……」

今までだって年に数回、ふらっと遊びに来ては数日泊まっていくことが慣例で、ほとんど身内のような人だし。

桂

「でも、わたしの他にも住人がいるかもだし」

サクヤ

「かもってなんだい、かもって」

桂

「だって、昨日はいたけど今朝はいなかったんだもん」

サクヤ

「なんだい、そりゃ」

桂

「もしかしたら、化かされてたのかも」

何だか言っているうちに、そんな気がしてこないわけでもない。

桂

「女の子の他に、子狐が一匹いたし」

落語なんかだと、小さい狐はまだ化けるのが下手で、人に化けても尻尾を出したままだったりするから、用心して化けずにいたのかも。

サクヤ

「……桂」

桂

「何？」

サクヤ

「あんたこのご時世に、本気でそんなこと思ってるのかい？」

予定をオーバーした注文の品を片付けるのに、すっかり手間取ってしまった。

桂

「ふい～～～」

食べ過ぎでむかむかの胸を撫でながら、わたしは商店街をうろうろする。

このまま揺れるバスに乗ったら大変なことになるかもだし、余剰カロリーの行方も気になるし、それから買い出しもしなくちゃいけない。

三度三度の食事毎に、片道三十分オーバーの移動をするのはばかげている。電池も予備を買っておかないと困る。

それで腹ごなしの散歩もかねて、商店街を歩いていたわけだけれど。

背後で鳴ったクラクションに、あたふたと道の端に飛び退いた。

追い討ちをかけられた。

ううっ、怒られるような道の歩き方はしてないはずなんだけど……

恐る恐る、振り向き見やれば。

車上の女性

「桂、こんなところで何やってんだい？」

桂

「……そういうサクヤさんこそ、なんでこんな所にいるの？」

見知った顔の知人が、見覚えのある車に乗って、見慣れない町の中にいた。
唐突に遊びに来たりする人なので、わたしの住んでる町でなら、ぼったり会ってもおかしくないんだけど。

サクヤ

「仕事だよ仕事。『日本に残された野生』とかいうテーマで、狸やら狐やら狼なんかの野生動物を撮ってきてくれたとき」

桂

「サクヤさん、日本に狼は……」

サクヤ

「撮れたら学会報告モノだって？ まあ、運がよければ最後の一匹が見つかるかもしれないじゃないか」

桂

「代わりに幻のツチノコとかが見つかったりして」

サクヤ

「よしとくれ。蛇の化け物だなんて縁起じゃない」

桂

「あはは、サクヤさんにも怖いものってあるんだ」

サクヤ

「人生長いと色々あるんだよ——と」

伸ばした指がキーをひねると、低いうなりを上げていたエンジンが止まった。

サクヤ

「桂、しばらくぶりだねえ」

桂

「うん、お母さんのお葬式ぶり。あのときはお世話になりました」

ぺこりと頭を下げる。

頼れる縁者のいないわたしに代わって、お葬式の手はずを整えてくれたのが彼女。

お母さんの古くからの友人で、ルポライター兼フォトグラファーの浅間サクヤさんだった。

職業柄なのかいろいろなツテを持っている人で、相続周りのことをしてくれている税理士さんも、サクヤさんの紹介だ。

サクヤ

「いいんだよ。それでこっちにいるのは羽様の屋敷——笑子さんの屋敷の関係かい？」

笑子さんというのは、お父さんのお母さん。つまりはわたしのお祖母ちゃん。

例によってわたしは顔も覚えていないんだけど、サクヤさんはお祖母ちゃんとも面識があるとのこと。

桂

「うん。昨日こっちについて一泊した」

サクヤ

「……あんたみたいな都会のお嬢がよくもまあ。ここ十年来、風も通してなかったんだ。畳なんかドロドロに腐ってたんじゃないのかい？」

桂

「あ、それが意外と大丈夫で。それに玄関から居間周りにかけてはお掃除してあったし」

サクヤ

「掃除って誰が？」

桂

「あ、わたしの前に先客がひとりと一匹ほど……」

サクヤ

「不法侵入者？」

桂

「そういうことになるのかな」

サクヤ

「で、あんたはそいつらと一晩一緒だったと？」

桂

「うん」

サクヤ

「……………」

桂

「……………」

サクヤさんの顔が、だんだん陰しくなっていた。

サクヤ

「……桂」

桂

「……えーと？」

サクヤ

「あんたね、若い娘がそんなに無用心なことでどうするんだい。特にあんたは、置かれてる状況が状況なんだよ」

桂

「でも……」

サクヤ

「でもないよっ！！」

大声に立ち止まった通行中の人たちを、眼力ひとつで散らしたサクヤさんは――

ふっと目をつぶってひと思案。

サクヤ

「あたしもそっちに泊まるとしよう。仕事しに山に入るのも、羽様の屋敷からならすぐだしね」

桂

「そりゃあサクヤさんも一緒なら、何かと心強いけど……」
そこで、はたと気付いた。

桂

「あ、でもその子たちもういないかも」

サクヤ

「そうなのかい？」

桂

「うん。朝起きたらいなかったし。でもサクヤさん、良かったら一緒にこっちに泊まってもらえないかな？」

サクヤ

「いいけど、なんで？」

桂

「その、ひとりで泊まるのはちょっと怖いし……」

撮影で東へ、取材で西へ。日本列島を横断縦断しまくりのサクヤさんの大事な足が、この痛いぐらい目にまぶしい朱色の車。

クロスカントリー4WDという種類で、略すとクロカン。車体からはみだすほどの大きなタイヤが特徴的な、走破性自慢の大型車だった。

昔乗せてもらった時に「一日千里を走り、山河を越えること平地のごとし」という馬に

ちなんだ名前があることを教えてもらった。

兎……こんなに大きくてごついのに兎……

ちなみにサクヤさんの行き先には、宿泊施設がない場合が多いので、テントや携帯コンロなどの生活用品が完備されていたりする。

桂

「……ところでサクヤさん」

サクヤ

「なんだい？」

桂

「この車のクロカンって、クロカンブッシュみたいで美味しそうな名前だよ」

サクヤ

「そんなもんかねえ。あたしは鯖缶やら桃缶やらの缶詰類を思い出すよ。見ての通り、鉄の容器に違いないわけだし——」

ごんごんと天井を小突いて。

サクヤ

「——って、缶詰よりは棺桶かい？」

桂

「わ、縁起でもない」

サクヤ

「安心おし。そこらのヤワな車に当たり負けるようなタマじゃなからね。ベルトさえしっかり締めとけば、けっこう生き残れるもんさ」

桂

「そもそもぶつかっちゃ駄目なんだってばっ」

サクヤ

「はいはい。そんな必死な顔しなさんなって。ぶつかろうにも、こんな所でぶつかるもんかい」

桂

「確かにね」

見渡す山の端以外には、ずっと平坦な地面が続いていて大層見通しがいい。

しかも田んぼを突っ切るように伸びる道には、他の車は見当たらない。そもそも一時間に一本のバスの他、走る車に出会ったことがない。

桂

「衝突よりは脱輪が怖いかな」

サクヤ

「それこそ杞憂もいいところだよ。田んぼの中ぐらい、何も気にせず走れるから」

桂

「……走れても走っちゃ駄目だよ」

サクヤ

「んー、一応努力はしてみるけどさ。これから少しばかり視界が利かなくなるからねえ」
——ぱたっ。
フロントガラスに透明な点。

桂

「あれ？」

隣でカチッと音がして、目の前をワイパーが横切った。
ぱたっ、ぱたっ、ぱたっ、と、点、点、点。
往復するワイパーが、次から次へと生まれる点を黙々とぬぐい取る。
頭上では、硬いものに砕ける水の音。ほんの少し金属的な残響がかすかに耳に。

桂

「雨だ……」

サクヤ

「夕立だねえ。そう長くはないだろうけど、その分きっと雨脚は強いよ」

桂

「そうなの？」

サクヤ

「こんな道じゃあ、田んぼの中と大差ないぐらいにぬかるむだろうね。こいつは全然問題ないけど、軽ならはまって立ち往生だよ」

軽自動車のことだろうけど、わたしのことを言われたような気になった。

点、点、点——雨、雨、雨——

雨はあんまり好きじゃない。

お母さんが死んじゃったのも、雨が降っていて空の暗い日だった。

ぱたたたたっ——

空の震える音が聞こえた。
鋼板を叩く大粒の雫。
天地を繋ぐ糸のような雨。
フロントガラスに広がる水の膜。

透き通ったオレンジに染められていた田園風景は、洗い流され消えてしまった。
ヘッドライトの放つビームも、数メートルを進んだところですっかり叩き落とされてしまう。

黙々と雨粒をぬぐおうとするワイパーも、多勢に無勢で用を為さない。

四方に満ちた、水、水、水——

——それは見慣れぬ別の世界のよう。

町の中にはたくさんの建物がある。軒を連ねて生活圏を確保している。

だからよっぽどの雨——嵐や台風でも遭わない限り、人の世界が脅かされることはない。

だけど、今の、この状況は。

わたしはぎゅっと両肩を抱いた。

サクヤ

「桂、どうしたんだい？ 寒いのかい？」

桂

「ううん、別に……」

サクヤ

「もうすぐ着くから安心おし」

サクヤ

「——って、あんな何年も放ったらかしの家じゃあ、着いても安心できないかもねえ」

桂

「雨漏り……してないといいなあ……」

サクヤ

「まあ、そのときはこの中で寝ればいいさ」

桂

「うん……」

今はこの車だけが、わたしを覆う屋根だった。

この窓ガラスを隔てた向こうは、もう海とは地続きならぬ水続きに繋がっている。

竜宮城に向かう途中、浦島太郎はこんな不安感に襲われたりはしなかったのだろうか。

迷い家のように——そんな第一印象を抱いたお屋敷に向かっているわたしは、竜宮城も迷い家もそう変わらないものだということに気が付いた。

ざざざざざ——

その瞬間から、屋根を叩く音が途切れて、雨音自体が遠ざかる。

ぼっ、ぼつつ、ぼたっ、ぼたっ。

絶え間ない雨粒に代わって、それを固めた水のかたまりが、間を置きながら降ってくる。

ワイパーがぬぐった窓に映ったのは、後ろへ後ろへと流れていく緑色だった。

サクヤ

「もうすぐ着くよ」

お屋敷の手前の、森のトンネルに入ったんだ。

そういえば、トンネルも違う世界を繋げる道具だったっけ。

水、トンネル、闇、意識の断絶、視界を覆う一面の——

違う世界に行くには、一瞬でも今までの世界を隠して、見えなくしてしまう必要があるらしい。

違う世界とは続いていない世界のことなのだ。

天候のせいかな、すっかり暗いトンネルの向こうに、ぼつりと明かりが浮かんで来た。

サクヤ

「おや？」

サクヤさんが、何かに化かされたような声を上げた。それはわたしも同感だった。

桂

「灯かりが……」

お屋敷に灯かりが点っている。

起きた時には、葛ちゃんと尾花ちゃんはいなくなっていて、それでも「まさか」と思ったわけだけど——

葛

「桂おねーさん、お帰りなさいませ」

引き戸を開けると、三つ指突いてお出迎えされた。

桂

「あ……ただいま」

葛

「おねーさん、どうしました？」

桂

「あ、うん、その……あはは、何でもない」

家に帰ったときに「お帰りなさい」なんて挨拶をされるのは、ここしばらくは絶えてなかったことだけに、かなりきた。

つんとする鼻をすすって、

桂

「それにしても葛ちゃん、なかなか堂に入った挨拶だね」

葛

「窮屈すぎて背が伸びないほど、厳しい家なものなので。いいもの食べてはいたんですけどねー」

桂

「あはは、でも成長期はこれからだろうし」

葛

「肯定であります！ これからの巻き返しに期待していただきます。わたしも尾花も、あちらの方ぐらい大きくなるですよー」

視線はわたしの肩越しに、後ろに立つ人物へ。

サクヤ

「和む挨拶はいいけどさ、できれば奥まで行ってからにしてほしいんだけどねえ。じゃないと荷物も濡れるから」

桂

「わ、ごめんなさいっ！」

葛

「これはとんだ粗相をっ！」

サクヤ

「で、桂。こっちのが言ってた奴かい？」

葛

「ははっ、若杉葛と尾花にございますっ」

サクヤ

「……若杉……葛だっ？」

葛

「左様にございます。一風変わった名前ではありますが、何かお気に召さないことでも？」

サクヤ

「いや、大したことじゃないよ。聞き覚えのある名前だなんて思っただけさ」

葛

「そーですか。葛はともかく、若杉なんてありふれた名前ですから、おそらく気のせい、気のせいでしょう」

桂

「そうだね。若杉銀行とか若杉商事とか若杉生命とか、よく聞く名前だしね」

サクヤ

「……そりゃあ同一企業グループだし、旧財閥系の最大手だから、名前ぐらいいは良く聞くだろうさ」

桂

「……あ」

確か先月あたりに会長さんが亡くなったと、テレビのニュースでやっていた。

サクヤ

「まあ、そんなことはどうでもいいんだけどね」

葛

「そーですね。わたしにも関係ない話ですし」

サクヤ

「そうかい。あたしは浅間サクヤ。桂の親戚代わりみたいなものだよ」

葛

「浅間——」

サクヤ

「なんだい。あたしの名前がどうかしたのかい」

葛

「——いえいえ、何でもありません。承知しました、浅間サクヤさんですね」

姿勢を正して再び深々。

葛

「大家のおねーさんの親戚筋とあっては、大家も同然、親も同然。子は親に孝養を尽くすのが正道ゆえ、何かとこき使ってやってくださいませっ」

平伏する葛ちゃんと、その隣でお尻だけ上げて、ぺったり胸と顎を床にくっつけている尾花ちゃん。

サクヤ

「ほほう、言ったね？」

道を開けたわたしの隣に、ずずいっと踏み込んできたサクヤさんが、ニヤリと口元を歪めていう。

桂

「だだだ、駄目駄目、駄目だよ葛ちゃん。サクヤさんは本気で人使い荒い人なんだから」

葛

「そーなんですか？」

こくりと肯定。話を変えてうやむやにしよう。

桂

「ところで葛ちゃん。ここって、電気は来てないんじゃないっけ？」

葛

「そーですけど、おねーさんがお出かけの間に、ちょちょいと手を入れまして」

葛

「配管通ってなかったんでガスは諦めましたけど、電気と水道はこの通り、何とか復旧いたしました」

葛

「ふふふ、正式な権利者という素晴らしい矢面ができたことですし、暗い省エネ生活とはおさらばです」

桂

「え？」

葛

「たはは、まあ腕白かつ逞しく生きる手段のひとつということで」

桂

「ええ？」

サクヤ

「それじゃあ、いつまでも立ち話していうのもなんだしね。上がるよ」

桂

「えええ？」

うやむやにできたというか、されたというか。

何だかよくわからないけど、深く考えない方が良さそうだった。

あ、蛍光灯の空き箱発見。葛ちゃんも、町までお買い物に出てたんだ。

頭上を覆う緑の枝が落とす影と、風通しのよさのおかげで、バス停以降の道程は、覚悟していたほど辛くはなかった。

伸びた袋のビニールが食い込む手が痛いけど、それもあと少しの我慢だし。

桂

「よっ」

鎮守の森の出口を抜けて、飛び石を渡って、玄関前に辿り着く。

桂

「葛ちゃん、いるー？ いるならちょっと開けてくれないかなー？」

……………

……静まり返る。返事なし。

仕方がないので荷物を下に置いて——いやいや、ここは引き戸だった。

鍵がかかっているならともかく、ただ開けるだけならドアノブをひねる必要がないだけ

に、少し身体を引っ掛ければ、いけるかもしれない。

桂

「だ一れも見てませんよね……」

その場で後ろを向いて、お尻を格子部分に引っ掛けると、くいと振って横に滑らせる。

ちょっとはしたない行為だけれど、暑さは人をだらしなくするのはです。責めるのならあの太陽を。

桂

「はう～～～、疲れた～～～」

脱ぎっぱなしの靴を揃えるのも後回しにして、居間に入るやいなや、手にした荷物を畳に投げ出す。

桂

「重かった～～～、もう持つの嫌～～～」

おにぎりはともかく、二リットルのペットボトルを一本、二本、三本……
総重量を認識するとがっくりきそうなので、うやむやのまま計算を終了。
荷物に続いて身体も投げ出す。

ぺったりと横になって、しばし畳のひんやりとした表面に、ほてった肌の熱を吸い込ませる。

開け放した縁側から、森の匂いを含んだ風が、弱設定の扇風機程度の強さで、たまにそよそよ吹き込んできていた。

桂

「ふや～～～」

ごろりと身体を転がして、温くなってしまった畳を放棄。新天地を求めて移動する。

桂

「ひや～～～」

しばしそのまま、体感的に五分ぐらい経過。
よしっ、ちょっとだけ元気が出てきた。

それから、こっちはそろそろ限界かも。

桂

「葛ちゃん、尾花ちゃん、ごはんにするから出ておいでー」

がばっと立ち上がり、部屋、台所、部屋と見て回って、収穫のないまま玄関に到る。

脱ぎっぱなしだった自分の靴をそろえつつ、下駄箱の中を覗いてみるものの、わたしのもの以外に靴はなし。

これで決定。葛ちゃんたちは中にいないらしい。

桂

「もうっ、先に食べちゃうよっ。せっかく一緒に食べようと思って買ったのにつ」

むくれつつ居間に戻った。

すっかり汗をかいていたペットボトルのせいで、畳に大きなしみが広がっていた。

すっかり耳に馴染んだ蟬の声と、風が木の葉を揺らすさざめき以外の音を拾い上げて、まどろみの中から意識が浮上する。

何か夢を見ていたような気がするけど、真昼の夢は記憶に残らない。

さて、何の音を聞いたんだっけ。

そうそう、玄関の引き戸が開く音だ。

ようやく葛ちゃんが帰ってきたのかなと、わたしは耳をそばだてる。

近づいてくる足音。

板張りの廊下が軋む音はやや重たげで、どすっ、どすっどと乱暴だ。

桂

「——！？」

心臓がきゅっと縮んで、わたしの意識は一気に覚めた。

小さくて軽い葛ちゃんならもっと——だけど、この足音は。

寝汗を吸った服がくっついて、背筋がうぞぞと冷たくなる。

悲鳴を噛み殺したわたしは、音を立てないように横たえていた身を起こす。

どうしよう——

どうしよう、どうしよう——

頭の中がぐるぐると回りだす。

押し入れの中に隠れようか？

それは駄目だ。退路が断たれる。鼠小僧の次郎吉さんも袋の鼠は洒落にならないって。

だったら縁側から庭に出る？

でもこんなに草ぼうぼうの所を、音を立てないで歩くななんてわたしには無理だ。それに靴だって玄関に——

桂

「〜〜っ！？」

飛び出そうになった大声を、両手で塞いで押し止める。

そうだ、靴、靴。靴だ、靴。

わたしの靴は玄関に出しっぱなしになっている。きっと入ってきた誰かにも見られてい

る。こんなことなら下駄箱の中に片付けて置けば良かった。

どうしよう、どうしよう——

背中をどっと冷や汗が。

さっきまでの暑さが嘘のよう。

手足はカチコチに凍りついていて、動かしたら音を立てて折れてしまいそうなほどで。

どすっ——

来た！？ もうこっちに来た！？

どすっ——

産毛を逆立て、少しでも多くの情報を取り込もうとする肌は、近づく気配を感じとっている。

どすっ——

駄目だ、もう駄目。もう隠れる時間も逃げる時間もない。お母さん助けて——

何にもならないとわかっているのに、ぎゅっと目をつぶり、タオルケット代わりに荷物の中から出していた、バスタオルを頭から被る。

どすっ——

件の足音は、もうすぐそこに。

そしてわたしに掛けられる声。

葛

「桂おねーさん、このばか暑いのに何やってるですか？」

……葛ちゃんの声？

バスタオルを頭から落として、そっと顔を覗かせると、大荷物を抱えた葛ちゃんがいた。

葛

「桂おねーさん？」

一歩こちらへ踏み出すと、床が大きくたわんで軋んだ。原因は葛ちゃん自前の体重プラス、持っている大荷物の総重量。

……そういえば、わたしが荷物を持って帰ってきたときも、それなりの音がしていたような。

桂

「ふえ～～～」

凍りついていた身体が、骨まで一緒に解凍されて、わたしはくてっと突っ伏した。

葛

「おねーさん、どうかしました？」

びくびくしたり、へなへなになったりのわたしに比べて、マイペースすぎる葛ちゃんの態度。

悪気があるわけじゃないってわかっているのに、それでも何だかカチンときた。

反射的に立ち上がって、見下ろしながらぐっと睨むと、鼻の向こうがつんとした。

葛

「……おねーさん？」

目の奥から湧いて盛り上がる熱いもので、景色が歪んで見えるけど、それをぬぐって両の眼と震える唇に力を入れる。

桂

「葛ちゃん、なにやってるの!？」

葛

「はい!？ 何ってその、ちょっと町までお買い物にですね……」

そんなのは見ればわかる。

桂

「どうして出て行くときに『いってきます』って一言いってくれなかったの!？」

葛

「それはその、桂おねーさんが気持ち良さそうに眠っていたものですから、起こすのも忍びないかと……」

尾花ちゃんと顔を見合わせて「困ったねえ」と小首を傾ける。

桂

「じゃあ、なんで帰って来たときに『ただいま』って言ってくれなかったの!？」

八つ当たりだってわかってるけど、朝はちょっと心配したし、さっきはすごく怖かったんだ。

桂

「こんどからはちゃんと、帰ってきたら『ただいま』って言ってよ! じゃないとここに居させてあげないんだから! 大家命令なんだから!」

ああ、わたしのばかっ。

うつむいて、ぎゅっと目をつぶる。

もっと普通にお願ひすればいいのに、よりもよって大家命令だなんて……

絶対に葛ちゃんだって呆れ果てて「出て行く」とか言い出すに決まってる。ほら……

葛

「『ただいま』——ですか」

……あれ？

葛ちゃんは「それは思いつきもしなかった」とでも言いたげな思案顔をした後に、屈託のない笑顔を浮かべて、一步こちらに詰め寄ってきた。

葛

「そーでしたよね、ひとつ屋根の下に暮らすもの同士の挨拶ですよ『いってきます』と『ただいま』は。了解しました、肝に銘じましたっ」

桂

「え、あ、うん……」

葛

「それじゃあただいまです、桂おねーさん。わたくし葛とその相棒の尾花は、生活物資の調達任務を終え、無事に帰投しましたです！」

家の周りはぐるっと森に囲まれていて、無理矢理になら別だけど、普通に通れそうな道は公道に繋がるあの道一本しかなかった。

その道の三分の二ほどの地点に、あまり目立たない風情で脇道への入り口が存在した。

せい高く育った草に埋もれるように、膝丈ぐらいの石碑が建っている。

しゃがんで、草をかきわけて見ても、表面は磨耗していて読めない。

とはいえ、わざわざ石碑があるということは、この先に続いているのもちゃんとした道。

最悪途中で途切れていても、昔の道の痕跡ぐらいは見つけられるはず。

対して表の道まで出てしまうと、あとはのんびり続く田舎道と、見渡す限りの田んぼばかり。

……さて。

わたしの目の前はふたつの道があるわけだけど、どちらに進むことにしようか。

何とはなしに頭上を見ると、降りそそぐ光は緑に柔らかかった。それもこれも、厚く重なり茂る葉っぱにかばわれているお陰。

つまり森から出てしまえば、自己主張の激しい真夏の太陽とご対面ということになる。

……………

……葛ちゃんと尾花ちゃんは、脇道の方を選んでもうような気がするんだ。田んぼに行っても何も無いわけだし。

ということで、葛ちゃんを探しているわたしも、脇道の方を進むことにした。

桂

「ううっ、もう帰ろうかな……」

山歩きが楽しいのも、体力が切れるまでのこと。

だんだん気温は上がってくるし、葛ちゃんたちは見つからないしで、愚痴のひとつも湧いてくる。

桂

「だいたいごはん食べていないんだから、山歩きなんかしてられないよね。もう帰ろう」
わたしはぐるりと回れ右して、今来た道を逆に辿り始める。

来るときは一本道で、迷いようがないと思っていたのに、どうして。

桂

「ここ、どこだろう？」
何だか見覚えのない場所に出ってしまった。
次いで出たのは泣き言ではなく、ちょっとした文句と安堵の言葉。

桂

「……にしても危ないなあ。わたしも危なかったなあ」

草ぼうぼうなのは相も変わらずなんだけど、ほんの少し開けた感じの場所に、ぽっかりと穴が開いていた。

穴を囲むように大きめの石がゴロゴロしていて、蹴つまずいて転んだり、たたらを踏んだりしたらもう大変。

しかも草ぼうぼうが曲者で、がっくりうなだれていなかったら見落としていたかもしれない。まったく怪我の功名とはよく言ったもの。

わたしは一步後ろに下がって、及び腰で様子をうかがう。

桂

「井戸……かな？」
昔は回りに転がる石が積まれていて、ちゃんと筒状に出っ張っていたんだろう。
穴の壁面はなるほど、夏の定番・お菊さんが出てくる井戸のような石組み造りで、昔は立派な井戸だったのではと思わせてくれる。
とはいえ、今となっては朽ちた枯れ井戸。

底が見えない程深いわけではない。覗き込んだ限りでは、わたしの通う学校の三階へ登る途中の踊り場から下を見た感じの高さに近い。

底が見えていても、十分に高かった。

桂

「わ、危なかった……」
冷静に考えると、ものすごい命拾いをしたことになる。
当然ケガもするだろうけど、こんな四、五メートルはありそうな縦穴を自力で登るのは無理。

取っ掛かりがあるから、フリークライムとかをやってる人なら楽勝かもしれないけど、わたしには絶対に無理だ。

そうすると、誰かに助けをもらう以外には脱出できないわけなんだけど、こんな場所に都合よく誰かが来てくれることなんて。

携帯電話を取り出して、電源を入れてみる。
警察にも消防署にも連絡がつかず、天気予報も聞けないような有り様だった。

桂

「わ……」

改めて、ぞっとした。

落ちたが最期、飢え死にコースまっしぐら。飢死は辛いっていうし、そういえばお腹空いたし、ものすごく危ないところだった。

何日か連絡がつかなかったら、陽子ちゃんが警察に通報とかしてくれるかもしれないけど、それで何とかなるものなのか。

そうすると、頼みの綱は葛ちゃん。

でも、警察とか裁判所とか保健所の類には通報しないでって言ってたし……

とにかく、こんな危険な穴を危険な状態のまま放置しているのは、いくら人の来ないところとはいえどうだろう？

マンホールみたいにフタをするだけで、落ちる心配はなくなるのに。

もし事故があったりしたら、この穴の持ち主は管理責任を問われたりするんじゃないだろうか。こんなになるまで放ったらかしにして。

……………

……放ったらかし？

そこで嫌な予感がひしひし。

お屋敷の近くにあるってことは、わたしの家が管理してた井戸って可能性も……

いや、全然近くないはずだけど、それでも一番近くにあるのはあのお屋敷なんだし……

わたしはきょろきょろあたりを見回し、フタになりそうな板が落ちてないか探してみた。そんなものが、都合よくあるわけなかった。

桂

「ん～～～」

何とかしたいけど、どうにかならないものか。

うろうろ探し回ってみたけれど、普通に生えてる木ばかりで、斧やのこぎりなんかの工具がないと、どうにも使えそうにない。

落ちてる枯れ枝やら、素手のわたしで折り取れそうな枝じゃ、人の重さには耐えられないだろうし。

頭の中でシミュレート。

井戸の上に枯れ枝を敷き詰めてみる。

……………

……これって落とし穴だし。

桂

「はあ、危険なものは隠しちゃ駄目だよ。ちゃんとわかるようにしとかないと」

そこでひらめく賢いわたし。

穴に落ちないように、がっちりセーブするのは無理でも、落ちない手助け程度なら……うんうん、それならいけそうだ。

とりあえず長さ一メートル以上、できればわたしの身長ぐらいという基準をもうけて、手ごろな棒というか、ぶっちゃけ枝を探してみた。

桂

「……まあ、こんなもんかな？」

立てるとわたしの肩あたりで、最低基準は余裕でクリア。強度もそこそこありそうな枝を発見。

ぶすっ、ぐりぐり。

わたしはそれを穴の近くに垂直に立てた。

立てた棒から十歩ほど離れて振り返る。

桂

「ん〜、微妙かな……」

何もないよりマシだけど、少々地味が目立たなかった。

そこでもう一工夫、旗のように布をつけてひらひらさせることを考えてみる。

手持ちで提供できそうなのは、リボンにハンカチ——あとは靴下程度までなら、何とか。

とりあえず一番目立ちそうなピンクのリボンを髪から解いて、棒の先端に結わえつけてみる。

桂

「うん、今度はなかなか」

もっと派手な、ピンクピンクしたピンクだったら文句なしなんだけど、それはわたしの趣味的にありえない。

現状ではこれがベターと判断したところで、気持ちを次に切り替える。

実はさっき棒を探したときに、丈夫そうな太い蔦葛にもチェックを入れていたのだ。

植物のつるを侮るなかれ。四国にはまだ現役の葛製吊り橋があるわけだし、人ひとりぶんぐらいの体重なら支えてくれるものなのだ。

桂

「よっ……んっ……よいしょっ……」

立ち木に硬く絡みつ়蔦葛を、頑張りに頑張って解きにかかる。

収穫目標は五メートルプラス、近くの木から井戸までの長さ。

……ちょっと大変そうだった。

桂

「よしよし完成。これで落ちても大丈夫かな？」

近くの木に結んだ天然ロープのもう片端が、枯れ井戸の底近くまで垂れ下がっている。

一応、わたしの精一杯の力で綱引きしても大丈夫だったから、実用には耐えてくれそう。

さすがに一回底まで降りて、登れるかどうかを試してみる度胸はないんだけど。

わたしの体力的な問題で出られずに、ここで最期を迎えたりなんかしたら、それこそお

母さんに顔向けできない。

とりあえず、自分の仕事の成果に満足。

満足したところで、お腹は労働の代価をよこせと主張してくる。

働かざるもの食うべからずなら、働いたぶんだけ食べ物をよこせと、今回の要求はいつにもまして厳しい。

このしつこさは、今まで要求を突っぱねてきた反動かもしれない。もしかして、何か食べさせるまで居座ることに決めたとか？

とはいえ、ポケットの中には飴玉ひとつ入っていないわけで、よこせよこせとお腹の虫を鳴らされても困る。

とにかくお屋敷に帰ればご近所さんに配る用で持ってきたお饅頭があったはず。正式なごはんはともかく、それを食べてピンチを凌ごう――

と、お屋敷へ向かおうとしたところで、肝心要の一大事に思い至る。

別のことに頭を使っていたお陰で、すっぼり綺麗に抜け出てくれていたけれど。

桂

「……ここ、どこだったっけ？」

わたしは迷子になっていた。

とりあえず、今は何ともなりそうになかった。

わたしの家のものなら、埋めちゃったりした方が安全確実だし、そうじゃなかったら勝手にいじるのは良くないかもしれないし。

このことは後で税理士さんに相談してみることにして、だいたい今はそれどころじゃないし。

自分の置かれた状況を、よく見てみる。

桂

「……ここ、どこだろう？」

わたしは迷子になっていた。

いやいや、山だけに遭難と言った方が正解ですね。へー、そうなんですか。

クールダウン、クールダウン。駄洒落が考えられるうちは、まだまだ人間余裕があるって。

冷静になって思い出してみよう。引き返そうと思いつ前には、こんな所は通らなかった。

つまり、ここに来る途中で道を間違えたわけで。

……………

そういえば、三叉路のような地形に心当たりがなくもなく、ここに来る途中で通ったような。

ここで立ち止まっても仕方がないし、今来た道を引き返すことにした。

桂

「あ……」

見覚えのあるまともな道に行き当たったとき、年甲斐もなく泣きだしそうになってしまった。

桂

「ううっ、ようやく帰れるよー。畳の上で足を伸ばせるよー」

迷いに迷って、慣れない山道を歩き詰めたせいで、すっかり足は棒のよう。

いっそ棒なら痛くないのに、この調子では絶対に靴擦れとかできてるだろうし。

あそこのカーブを抜ければ碑のあるあの場所で、お屋敷まではあともう少し。

桂

「やっと出れたー」

――

「それはおめでとうございまーす」

半分は泣き言、もう半分は気合いを入れる掛け声でできている独り言に、合いの手が入った。

桂

「……あれ？」

目の前のあるのは大荷物。

桂

「穴に落ちずにすんだのに、不思議の国のわたし状態？」

大荷物？

「うわー、なんか話に脈絡ないですよ？」

荷物が九十度回転すると、荷物の後ろに隠れていた葛ちゃんの顔があらわれた。

桂

「あ、葛ちゃんだ」

葛

「見てのとおりですよ、桂おねーさん。大丈夫ですか？ 意識の混濁はありませんか？」

桂

「あはは、平気、大丈夫だよー。尾花ちゃんならいざ知らず、荷物がしゃべったり歩いたりするわけがないよねー」

葛

「うわー、語尾がへろへろです。おねーさんそうとう疲れてますね？」

桂

「あはは、安心したら途端に疲れと……」

葛

「疲れと何です？ お腹押さえて痛いんですか？」

桂

「痛くはないんだけど、ちょっと——」

お腹は口よりも物を言う。

葛ちゃんの抱える荷物が、ぐらりとバランスを崩して倒れそうになった。

葛

「おとっと……」

見事なボディバランスで、荷物の揺れを収める。

持ってる荷物の量からしても、見かけによらず力持ちっぽいし、運動全般得意そうかも。

葛

「なるほど、相当切羽詰まったご様子で」

桂

「何だか目も回ってきたかも……」

葛

「おねーさん、お昼ごはんは？」

ふるふると首を振る。

葛

「では、朝ごはんは？」

ふるふる再び。

葛

「じゃあ何ですか？ 桂おねーさんは食事も摂らずに、そんな脇道に入って探検ごっこをしてたんですか？」

桂

「……………」

葛

「聞こえませんか。言いにくいことですか？ もしかしてダイエットしてたりします？」

桂

「お腹がすいて声は出ないのっ！ ごはんがまだで何か悪いかーっ！」
ううっ、大声を出したら眩暈が……

よろけるわたしに、タックル気味に肩を押し付け貸し出してくれる葛ちゃん。

葛

「ははあ、確かに要ダイエットって重さじゃないですね。まだ」

桂

「まだ……」

葛

「ふにゃふにゃ柔らかくて代謝率悪そうですから、ふとした油断が命取りになるですよ？」

桂

「ううっ……」

葛

「とりあえず捕まったままで構いませんから、家に着くまで持ちこたえてくださいね？」

葛ちゃんのこの頼もしさは、弱肉強食の家風が育んだものなのか。
こんな年下の子に頼るわたしって。

桂

「ううっ、いつもすまないねえ……」

葛

「昨日会ったばかりですよ？」

ネタが通じなかったのか、けっこうドライな性格なのか、その両方だったりするのか。
とはいえこちらの余裕もそろそろ限界。歩きながらなのでなおさらに。
とりあえず、話を脱線させない方針で行くことに決めてみた。

桂

「朝起きたらいなかったからね、散歩に行ったのかなって、葛ちゃんたちを探してたんだけどね」

葛

「わたしを探してたんですか？」

桂

「一緒にごはん食べようと思って……」

葛

「……………」

沈黙、一瞬。

葛

「そそそ、それは大変失礼しましたっ！！」
立ち止まって硬直、ビシッと直立不動。
きっちり腰を折って、深々と頭を下げる。

……あ、荷物。

葛

「よもやわたしのように厚かましく上がりこんだ歓迎されざるはずの居候にそこまで気を使って頂いているとは露知らず身勝手な振る舞いをば——」

葛

「見ての通り人里に下って、水や食料、その他の物資を調達してまいりましたので、早く帰ってごはんに致しましょう——って、荷物がーっ！？」
大慌てで散らばった荷物を集める姿からは、先ほどのドライさ頼もしさが嘘のように消えていて。
わたしも隣にしゃがみこんで、荷物を拾い集めるのを手伝う。

葛

「わー、せっかくのご好意を踏みにじったわたしには、そのようなことをして頂く資格なんてっ」

桂

「葛ちゃん、それは言わない約束だよ」

葛

「そんな約束してないですよ」

桂

「そうだね。でも、ごはんのことだって、わたしが勝手に待ってただけで、別に一緒に食べようって約束したわけじゃないよね」

桂

「誰かと過ごすルールって、過ごした時間が積み重なってできるものだから、最初はすれ違いがあるのも仕方ないよ」

葛

「……明文化されたルールがあれば別ですけど」

桂

「でも、それにも時間が必要だよ。相手のことを知らないと、納得できるルールなんて作れないでしょ？」

葛

「……………」

桂

「じゃあ、ひとつだけ明文化しようか。今度からできる限りごはんは一緒に食べることにしよう？」

葛

「いいんですか？」

桂

「何が悪いの？」

大家といえば親も同然、店子といえば子も同然。

さすがに親というには頼りないし、お姉さん役としても不安があるだろうけど……

桂

「葛ちゃん、わたしのこと大家さんって言ったよね。だったら家族も同然じゃない」

桂

「だからごはん、一緒に食べよう？」

居間でくつろぎはじめてからしばらく。

縁側で空模様を眺めていた葛ちゃんが、うんと伸びをしながら立ち上がった。

葛

「さて、日が暮れる前にもう一仕事しておきますかー」

丸くなっていた尾花ちゃんも、四つ脚をぴんと突っ張り、無声のあくびを吐き散らす。

わたしもちょっとだけ居住まいを正して訊ねる。

桂

「何かすることあるの？」

葛

「この家の居住性を劇的に引き上げるでしょう小悪魔のようなプロジェクトが、目下資材搬入まで進行しているわけなのですよ」

桂

「……小悪魔のような？」

葛

「悪魔というほど大それたことはしませんので」

そう言って笑う葛ちゃんは、確かに小悪魔って感じだけど。

葛

「それではおねーさん。快適な生活をお送りするために、少々作業に従事してまいります」

桂

「手伝おうか？」

葛

「そのままのんびりお休みください。専門知識が必要ですので、おねーさんは猫の手ですし」

桂

「ううっ、つまりは役立たずと……」

葛

「そんなことはないですよ？ 忙しいときにはお借りしますよ？ それじゃあ尾花、向こう行こう」

今日買ってきた物なのか、もともとあった物なのか、ビニールハウスのような形の工具箱を持って出ていった。

……何をするつもりだろう。

まあいいや。葛ちゃんが働くと言っているのに、わたしだけごろごろしているというのも、お尻がこそばゆくていけない。

とりあえず——ぐると居間を見渡してみる。

葛ちゃんが入手してきた大量物資のほとんどが、運び入れられた状態のまま片隅に転がされていた。

桂

「……ふむ？」

夜になったら、懐中電灯一本きりという乏しい照明事情の中での活動を余儀なくされるのだ。

この状態のまま放っておいたら、必要なものを探すのにも難儀すること間違いなし。

桂

「よしっ」

備えあれば憂いなし。明るいうちに分類整理しておくとしたらどうか。

まずは、食べ物と飲み物はこっち。

わ、食べ物は調理不要の保存が利くようなものばかり。こんな所で生活していたら、自然にそうなっちゃうのかもしれないけど……

あ、ろうそくとライター発見。確かに懐中電灯みたいには明るくないけど、経済効果を考えればろうそくの方がお得なのかな——って、あれ？

何でこんなものが。

お徳用花火セット。

……………

まあ夏だし、コンビニなんかでも売ってたりするし、葛ちゃんもこういうのが好きなさ
かりだろうし、わたしも嫌いじゃないんだけど……

でも、ろうそくの使い道って、こっちなの？

そういえば、昨日の夜はろうそくなんて灯してなかったな——って、あれ？ あれれ？
何でこんなものが、再び。

電気屋さんの紙袋に入っている、ピザの宅配用ボックスにも似た平べったい箱は一体。

容積のわりには軽い箱を手にしたまま天井を仰ぐと、かさの部分に埃を積もらせた、か
なり古い形式の蛍光灯がぶら下がっていた。

磨りガラスを格子状の木枠で囲んだレトロなデザイン。木材部分の黒ずみ具合からして、
レトロさを狙ったのではなく、実際に古いんだろう。

だとしたら、はまっているのはとっくに切れているだろうから、換える必要があるのは
確かなんだけど。

視線を手元に戻して、まじと箱を見る。

電気が通っていないところで、換えの蛍光灯を買ってくることに意味ってあるんだらう
か。

しっかりしているように見えても、やっぱりまだまだ子供なんだなあ——
と、思っていたら。

——っ！？

ななな、何！？ 何の音！？

音の発信源は台所。

行って覗いて見てみると、蛇口から赤茶けた水が滝のようにほとぼしり落ち、アルミの
流しを叩いていた。聞こえているのはその音だった。

葛

「うわー、これはしばらく出しばなしにしておかないと駄目ですねえ」

桂

「ひあ——っ！？」

人里離れた古いお屋敷では、昼間であれども突発事項は心臓にくる。

桂

「つ、葛ちゃん……？」

胸に手をあてて動悸を静めながら振り返ると、いつの間にかやってきていた葛ちゃんが。

流しまで行って、少しだけ蛇口を閉める。

葛

「水道が復帰しましたー。これで川へ洗濯に出かける必要もなくなりましたよー」

桂

「わ、もしかして葛ちゃんが言ってたプロジェクトってこれ？」

葛

「ふふふっ、まだまだ終わりじゃないですけどね」

いつの間にか蝉時雨が止んでいた。

山の天気は変わりやすいと言うけど、蝉時雨はすぐに止んだり始まったりする。

ところが、今回は止まったきり、なかなか再開し始めない。

やや不自然に長い静寂——

山のほうから響いた大音声が、その静寂を飲み込んだ。低く唸るような空気の震えが、わたしのお腹をゆさぶった。

縁側の方に目を向けて空模様を確認する。

あんなに澄み渡っていたはずの空なのに、いつの間にかどんよりと薄曇りになっている。

葛

「これはきますね」

桂

「降るかな？」

葛

「降りますよ」

視界を横切る小さな影。

見えにくい小さな何かが、空から庭に落ちてきた。

ぽつり——

水の雫の碎ける音。

それは先ほど使えるようになった水道の閉め忘れではなく——

屏風絵のような山の姿に、一本、また一本と雨粒の軌跡が描き足されていく。

屋根瓦を叩く雨音は、手数まかせにその間隔を詰めていって、やがて途切れのない音のうねりになる。

ざあっ——

打たれた草葉がうつむくぐらいの、粒の大きさと勢いがあった。

葛

「さてと……暗くなってきましたね」

膝立ちに腰を上げた葛ちゃんが、垂れ下がっていた紐を引っ張ると、居間は蛍光灯の白い光に包まれた。

葛

「電気はこの通りつきましたけど、エアコンとかはないですから、この雨で過ごしやすい温度まで下がってくれるといいんですけどねー」

桂

「そうなってくれると雨様々なんだけど、雨漏りとかは大丈夫かな？」

葛

「んー、どーでしょう。とりあえず今使ってる部屋は大丈夫のはずですけど」

桂

「じゃあ、一安心だね」

ちなみに三大ライフラインのうち、ガスだけはボンベで配給されるタイプだったので、使用できる見通しが立っていなかった。

桂

「にしても葛ちゃんってすごい。よくこんなことできるよね」

葛

「まあ、天才ですからこれぐらいは」

むしろ逞しく育ってるといった感じだけど、すごいことには変わらない。少なくともわたしには真似できない。

桂

「だけど電気つくようになって良かったよ。暗い部屋で、しかも雨なんて降ってたら、何だか落ち込むし——」

一瞬、空が真っ白に輝いて——

次の瞬間、部屋の明かりと一緒に消えた。

桂

「——なにになに！？ 一体どうしたの！？」

葛

「単なる停電ですってば。電線が切れたりしてない限り、しばらくしたら復旧しますよ」

桂

「ううっ……雷落ちたの、かなり近いところじゃなかった？」

葛

「そうですねー」

玄関の方で戸の鳴る音が聞こえた。

ちゃぶ台の下で丸くなっていた尾花ちゃんが、出てきてぴんと耳を尖らせた。

葛

「あれ？ お客さんのようですね」

桂

「か、風とか雨で戸が鳴っただけじゃ？」

葛

「だけど尾花、普段はそーゆー自然現象じゃ反応しないんですよねー。桂おねーさんが来たときなんかは、真っ先にすっとなで行了きましたけど」

桂

「つまり、尾花ちゃんが興味を示したということは……」

桂

「……お客さんかな？」

葛

「のようですねー」

桂

「それじゃあ、ちょっと出てくるね」

葛

「ですけどおねーさん。こんな所に来る人なんて、きっとマトモじゃない人ですよ？」

桂

「わたしは？」

わたしも、こんな所に来た人だった。

桂

「……わたしは？」

葛

「桂おねーさんは家主ですから」
それはノーカウントと、腕を振って言う。

葛

「さて、とりあえずどーしましょーか？ 居留守を使ってやり過ごすって手もあるんですけど……」

桂

「うーん、何にしてもとりあえず出てくるよ。こんな雨の中を待たせるのも悪いし」

葛ちゃんの言っている、まともな人じゃない可能性だってあるからちょっと怖いけど、それならなおさらわたしが対応しなくっちゃ。

家主だし、年長者だし。

桂

「よしっ」

と、自分に気合いと根性を入れて立ち上がる。

すると荷物をごそごそやっていた葛ちゃんが、何か棒のようなものを押し頂きながらやってきた。

葛

「……ではおねーさん、これを」

手に押し付けられた棒のようなそれは、ずっしり重くて、その重さが片側に寄っていて、そのくせバランスは悪くない。

顔に寄せて見てみると、一家に一本ぐらいの普及率を誇る、とてもありふれたものだった。

桂

「……とんかち？」

葛

「女子供の力でも、思いっきりやれば一発です」

すごく物騒だった。

葛

「幸い広さは十分ですから、的が細くなる縦振りよりも、横から振るのをお勧めします。技術が追いつくなら側頭部狙いで」

ものすごく物騒だった。

もしかしてもしかすると、昨夜もこれを後ろ手に隠し持っていたりしたんだろうか。

思わず一歩、後退りするわたし。

桂

「その一、できればもっと痛くなさそうな方がいいんだけど……とりもち爆弾とか？」

葛

「そんなの駄目です、桂おねーさんっ！！」

葛

「そんな甘っちょろいこと言ってたら今の世の中生き残れませんよ？ 何かあってからじ

ゃ遅すぎるんです。取り返しはつかないんですから」

桂

「それにはわたしも同意するよ……」

葛ちゃんのお父さん、お母さん。取り返しのつかない事故が起こる前に、教育方針を改めた方がいいと思うんです。

弱肉強食って考え方、わたしには向かないなあ……わたし弱いし。

桂

「はい、返すね」

葛

「桂おねーさん？」

桂

「何かあったら大きい悲鳴あげるから、そのときになったら持ってきてよ——」

桂

「と、いけない、いけない、急がなきゃ」

とんかちを葛ちゃんに押し付け返して、小走りで玄関に向かった。

「もしもーし？ 留守ですかー？」

女の人の声だったので、わたしは少しだけほっとする。

磨りガラスに映るシルエットはかなりの長身で、並んで立つと、たぶんわたしの目線は顎よりも下。顔を見るには少し見上げる必要がある。

ただ、見事にくびれたウエストもかなり高い位置にあるので、靴のかかと分を差し引いた実際の身長は、そこまで高くはないと思う。

肩幅だって、女の人にはしてはしっかりしているけど、そんなの帕特を入れればどうにでもなる。

大丈夫、大丈夫。

魚がない釣り場には、釣り人だって立ち寄らない。葛ちゃんが心配しているようなことには、きっとならない。

桂

「はい、今出まーす」

そう言ったところで、タイミングよく電気がついた。送電が復旧したらしい。

わたしは靴脱ぎに並べてあったローファーを爪先に引っ掛け、引き戸のところまでちょこちょこ向かう。

うちのアパートならちょっと身を乗り出すだけで済むことなので、必要以上に広い家に住むのも、それはそれで不便があるんじゃないかと思う。

ずぶ濡れの女性

「いやー、ホントに参ったよ。そろそろ山から降りようかってときになって、いきなり雨に祟られてねえ」

桂

「それは災難でしたね——ってあれ？」

ひっきりなしに雫を垂らす前髪をかきあげながら、ニッと白い歯を剥いて笑うこの人のことを、わたしは良く知っていた。

ずぶ濡れの女性

「どうしたんだい、桂。そんな狐につままれたような顔してさ」

桂

「いや、狐はもう十分なんだけどね」

ずぶ濡れの女性

「は？ あんた、相変わらず突拍子もないこと口走るんだねえ」

向こうもこっちを知っていたし、微妙に時代がかった(それこそ時代劇に出てきそうな)話し口調といい、間違いない。

彼女はお母さんの昔からの友達で、憶えている限り、わたしにとって一番古い知り合いでもある、浅間サクヤさんその人だった。

桂

「だけど、なんでサクヤさんがこんな所に？」

サクヤ

「こんな所とはお言葉だねえ。ここは笑子さんの家だろう？」

笑子さんというのは、わたしのお父さんのお母さん。つまりわたしのお祖母ちゃんのこと。

お父さんの実家ということは、お祖母ちゃんの家ってことにもなる。

桂

「サクヤさんって、お祖母ちゃんとも知り合いなんだっけ？」

サクヤ

「そーさ。しかも笑子さんとの付き合いの方が、長いといえば長いよ」

サクヤ

「まあ、言ってみれば、あたしのお陰であんたが生まれてきたようなもんさ」

桂

「……月下氷人？」

サクヤ

「そんなところさね」

サクヤ

「それで、笑子さんの家があったのを思い出して、軒下でも借りて雨宿ろうかと来てみたら、なんと明かりがついてるじゃないかい」

サクヤ

「近づいたら、消えたんだけどさ」

桂

「たぶん停電。わざとじゃないよ」

サクヤ

「ならいいけど、ずっと居留守を通されるんじゃないかって心配したよ。あと三十秒遅かったら、戸を蹴破ってでも勝手に入ってたね」

桂

「わ、サクヤさん横暴。軒を借りに来たんじゃないの？」

サクヤ

「そうだけど、笑子さんの縁で生きてるのは——そう、桂だけだからね。今となっちゃ」

サクヤ

「あんたは居留守なんて使わないだろうし、あんたじゃなかったら叩き出しても問題のない、不法侵入者ってわけだ。違うかい？」

桂

「……あはは、わたしが出て良かったよ」

いやいや、危ないところだった。

とんかち片手の葛ちゃんに出てもらったりしてたら……サクヤさん、容赦ない人だし。

桂

「でも、わたしたちだって驚いたし、こんな所に来るなんて普通じゃない人だろうから、居留守を使う可能性もあったんだよ？」

サクヤ

「——って桂。あんた今『わたしたち』って言わなかったかい？」

桂

「あ、うん。サクヤさんに言わせれば、不法侵入者ってことになるんだけど、今はわたしが許可してるんだから、ケンカしないで仲良くしてよ？」

サクヤ

「……男かい？ 女かい？」

桂

「女の子と狐が一匹」

サクヤ

「なるほど。それが最初の『狐はもう十分』につながるわけだね」

桂

「うん。ところで、なんでサクヤさんこそこんな所にいるの？」

サクヤ

「仕事だよ、仕事。これこれ」

そう言ってサクヤさんがわたしの前で振ったのが、大きなレンズの付いた愛用のカメラ。

サクヤさんの仕事はルポライター兼フォトグラファーで、今の仕草から察するに、今回は写真の仕事で来ているらしい。

サクヤ

「今度のは『日本に残された野生』とかいうテーマで、被写体は狐狸の類に猪鹿蝶とか」

桂

「ちょうちょもなの？」

サクヤ

「一応ね。奴らは見場がいいからさ」

元を正せば記事に添える写真のためにカメラを覚えたそうなんだけど、趣味で撮った写真が評価されて今に到るのだそう。

踏み入るのも困難な探検家の領分の秘境の風景だとか、滅多にお目にかかれない野生動物の生態とか、撮るのはもっぱらアウトドア。

桂

「でも、なんでここなの？ 動物が出るって有名な場所が、もっと他にもありそうなのに」

サクヤ

「有名所は観光地化してたりするからだよ。餌付けされた連中なら、あたしじゃなくても誰でも撮れるよ」

桂

「あ、そうか」

サクヤ

「それに、この辺なら多少の土地感あるしねえ」

桂

「なるほ——」

何だか鼻がむずむずして。

桂

「——くしゅんっ」

手で覆う間もなく、むずむずが破裂した。

桂

「ううっ、風邪ひくといけないから、立ち話はやめにして、中に入ってちゃんと頭とかふこう」

サクヤ

「じゃあ、ありがたくお邪魔するけどさ」

桂

「ん……んん？」

鼻をずずっとすすりあげながら、サクヤさんの疑問を促す。

サクヤ

「……なんで濡れてないあんたがくしゃみをするんだい？」

桂

「葛ちゃん、ちょっと見てきてくれる？」

葛

「かまいませんけど、おねーさんは？」

桂

「それがね……あはは、さっきの停電との相乗効果で、ちょっと足腰に力が……」

葛

「入らなくなったと？」

こくりと頷きうなだれたまま、情けなさの余りなかなか顔が上げられない。
そんなわたしの両肩に、葛ちゃんの小さな手が乗せられた。

葛

「気にしないでください、桂おねーさん。一宿どころじゃない恩に報いる機会でしたら、大事細事も仔細も問わず、いつでも歓迎してますから」

そのけなげさと微笑みの無垢さは、まるで羽のない天使のよう。

そんな葛ちゃんに、怖くて危険かもしれないと感じていることを任せようとしている、

わたしの駄目っぷりときたらどうだ。

桂

「あ……あの、やっぱりね、葛ちゃん……」

葛

「なんでしょー？」

なけなしの勇気を振り絞ったわたしに、懐中電灯でも探していたのか、荷物のあたりで
ごそごそしていた葛ちゃんが振り返った。

桂

「やっぱりね、わたしね……って、葛ちゃん」

葛

「はい」

桂

「その手に持ってるのって……」

葛

「金槌ですけど、それが何か？」

桂

「……………」

葛

「それじゃあおねーさん、ちょっと玄関を確かめてきますね」

とんかちを後ろ手に隠しながら、葛ちゃんは居間から出て行った。基本的に「ふたりは
一緒」の尾花ちゃんも後に続く。

桂

「……大丈夫かな？」

お母さん。これは最初に勇気を出せなかった、わたしが悪いんでしょうか？

見守ってくれているなら、お願いですから何事もないように計らってください。

葛

「とわ——」

——

「甘いね！」

葛

「このっ」

停電は本当に一時的なものだったらしく、待っている間に部屋は明るさを取り戻していた。

それはきっと良い兆しだろうと思ったところで、葛ちゃんの声が部屋に届いた。

葛

「おねーさん、お客様ですよー」

廊下の床板を軋ませながら居間に来たのは、葛ちゃん尾花ちゃんともうひとり。

ぱっと見、年の頃なら二十台半ばぐらいの女性で、百七十の大台に余裕で乗っている長身の持ち主。

手足の長い日本人離れしたスタイルの上、目鼻立ちのはっきりした美人さんなので、国籍不明な感じも少し漂っていたりする。

しかもその人は――

――

「駄目じゃないか、桂。こんな物騒なのに客の対応させちゃ」

――知り合いだった。

浅間サクヤという名の彼女は、古くからのお母さんの友達で、わたしにとっても旧知の人物。

頼りにしてもいい人で、唐突な来訪の裏にはお母さんのお導きがあったように思えてならない。

桂

「はう～～～」

安心のあまり、脱力してぺたんと座り込む。

サクヤ

「……桂？」

桂

「あ、大丈夫、大丈夫。だけどサクヤさん、なんでこんな所に？」

サクヤ

「仕事だよ、仕事。これこれ」

そう言ってサクヤさんがわたしの前で振ったのが、大きなレンズの付いた愛用のカメラ。

サクヤさんの仕事はルポライター兼フォトグラファーで、今の仕草から察するに、今回は写真の仕事で来ているらしい。

サクヤ

「今度のは『日本に残された野生』とかいうテーマで、被写体は狐狸の類に猪鹿蝶とか」

桂

「ちょうちょもの？」

サクヤ

「一応ね。奴らは見場がいいからさ」

元を正せば記事に添える写真のためにカメラを覚えたそうなんだけど、趣味で撮った写真が評価されて今に到るのだそう。

踏み入るのも困難な探検家の領分の秘境の風景だとか、滅多にお目にかかれない野生動物の生態とか、撮るのはもっぱらアウトドア。

桂

「でも、なんでここなの？ 動物が出るって有名な場所が、もっと他にもありそうなのに」

サクヤ

「有名所は観光地化してたりするからだよ。餌付けされた連中なら、あたしじゃなくても誰でも撮れるよ」

桂

「あ、そうか」

サクヤ

「それに、この辺なら多少の土地感あるしねえ」

桂

「そうなの？」

サクヤ

「あんたは覚えちゃいないだろうけど、あんたも昔はこっちに住んでたんだよ。笑子さんが生きてたころはね」

笑子さんというのは、わたしのお父さんのお母さん。つまりはわたしのお祖母ちゃんのこと。

つまり羽藤家とサクヤさんの付き合いは、それぐらい遡れるほどに古いということになる。

桂

「だからこのお屋敷のことも知ってるんだ」

サクヤ

「そうそう。山の中で撮ってたら、急に降られてねえ。それで軒を借りようと思って来たんだけど、もうすっかり濡れ鼠だよ」

とか言いながら、首を振って水気を払う仕草は、鼠よりは犬っぽい——じゃなくて。

桂

「サクヤさん、そーゆー風に飛ばさないで！」

サクヤ

「嫌がられるとしたくなるのが人情ってもんだよ。なんなら。このまま抱きついてやるのもいいねえ」

桂

「わ、やめてやめて！ そうだタオル！」

桂

「よしっ、尾花ちゃんゴー！」

玄関の方を指し示すわたしを見た尾花ちゃんが、首をかしげて葛ちゃんの方を見た。

葛

「尾花、行ってきて」

葛ちゃんが指示を出すと、足音も立てずに廊下に出て行った。
……わたしの言うことを聞いてくれるつもりはないらしい。

桂

「ううっ……」

葛

「やれやれですねー」
伸ばしたままのやるせない手を、葛ちゃんが下ろしてくれた。

桂

「ありがとう、葛ちゃん」

葛

「いえいえ、どーいたしまして。ところで、なんで尾花に行かせるんです？」

桂

「ふふふっ、わたしが来たときみたいに驚かせてやるのだー」

この土砂降りの雨に追い立てられて、偶然ここに立ち寄ったのなら、まるでホラー映画の冒頭のように、演出効果も倍増だろう。

葛

「やれやれ、桂おねーさんって、意外と子供っぽいんですね」

桂

「ううっ……でもね……」

葛

「おねーさんは戸を開けましたけど、それってご自宅ですからですし、今夜は鍵もかかっていますし」

桂

「あ……」

葛

「尾花はかなり賢いですけど、それでもやっぱり狐ですから、あの手じゃ無理だと思うんですよ」

桂

「だよねえ……」

葛

「わたし、ちょっと行ってきますね」

桂

「あ、待って、わたしも行くよ」

ずぶ濡れの女性

「——というわけで、厄介になるよ」

やって来たのは浅間サクヤさん。

お母さんとは古くからの友達で、つまりはわたしとも旧知の仲。

桂

「だけどサクヤさん、なんでこんな所に？」

サクヤ

「仕事だよ、仕事。これこれ」

そう言ってサクヤさんがわたしの前で振ったのが、大きなレンズの付いた愛用のカメラ。

サクヤさんは主に自然や動物を撮ることで身を養っているフォトグラファーで、その関係の仕事でこちらに来ていたらしい。

ルポライターと兼業していて、むしろそっちが本職だとサクヤさんは言うけど、評価も稼ぎも写真の仕事が上なのだと、お母さんは言っていた。

桂

「お仕事も大変だね……」

サクヤ

「なんの、前に東南アジアの密林であったスクールは、そりゃもうひどいもんだったよ」

桂

「カメラって濡れても大丈夫なの？」

サクヤ

「一応、耐久性も考えて選んじゃいるけどね。まあ、濡らさないに越したことはないし、そこまで頑張らなきゃいけないこともないしね」

サクヤ

「ところで桂、タオルとかってあるかい？」

桂

「あ、そうだった。サクヤさんが着替えられそうな服って、何かなかったかなあ」

葛ちゃんは論外として、わたしの服もぜんぜんサイズが合いそうになかったの、家捜しを敢行した。

サクヤ

「なかなかこれは、落ち着くねえ」

桂

「そうだね」

その結果、入手できたのがこの浴衣。

浴衣といっても縁日に着ていくようなかつちりしたものではなく、寝巻き代わりに丁度良さげな、薄手の単（ひとえ）のものだった。

さらっと乾いていて、虫食いなども見当たらない、保存状態の良いものだったので――

桂

「それにこれなら、着付けとかできなくてもひとりで着れるしね」

――ついでにわたしも着替えていたりして。

朽ちていなかったお屋敷、腐れていなかった畳、カビていなかったお布団に引き続きなので、最近、奇跡の大安売りに当たっているような気がする。

桂

「これって誰の浴衣だろう。お祖母ちゃんかな、それともお母さんのかな」

くんくんと袖の匂いを嗅ぐと、仄かに甘い花の香りまでして、何だか嬉しくなってくる。

桂

「あはは、旅館に泊まってるみたいだね」

葛

「ここ、おねーさんの家ですよ？」

桂

「わたしずっと手狭なアパート暮らしだから。こんな広いところに泊まったのって、中学校の修学旅行以来だよ」

サクヤ

「今のとこのはまだだったっけ？」

桂

「うん、まだ」

浴衣姿で畳に落ち着くわたしとサクヤさん。

桂

「ところで、葛ちゃんはそのままでいいの？」

葛

「たはは。丁度いいサイズがあれば、お借りしたかもしれませんけど」

桂

「うーん、わたしと同じのだと無理か……」

基本的に一枚布なので、少々なら調整しなくても大丈夫なんだけど、あまりに大きすぎたりすると、歩くだけでも大変だったりして。

桂

「葛ちゃんサイズの、ないのかな？」

サクヤ

「それなら、桂とはく——しょい！　こんちくしょー」

すごく大きなくしゃみをして、わざとらしく鼻をすすり上げるサクヤさん。

桂

「……大丈夫？」

サクヤ

「大丈夫、大丈夫、何でもないよ」

桂

「それならいいけど、サクヤさん。今のくしゃみで気になることがあったんだけど——」

サクヤ

「な、なんだい？」

桂

「今のくしゃみすごく変——っていうか、どこかのおじさんみたい」

サクヤ

「オヤジ臭くて悪かったね。だけど落語や時代劇ばかり見てるあんたに言われたくないよ」

桂

「わ、ひどい。すごい偏見。全国の時代劇ファンと落語ファンに謝るべきだよ、わたしを含む」

サクヤ

「はいはい、それは失礼しました」
すごくなおざりな謝罪だった。

サクヤ

「それより、あんたが子供の頃使ってたのがあるかもしれないって言いたかったんだよ」

桂

「じゃあ、もう少し探せば見つかるかな？」

葛

「いえいえ、それには及びません。わたしはこれで十分ですので」

桂

「……そうなの？」
何だか葛ちゃんだけ仲間外れみたいで、少し気が引ける。

葛

「着物はともかく、実家ではこういう服はあまり着られないので、着るなら今のうちですし」

桂

「うーん、ならいいけど……」
と、びしょ濡れだったサクヤさんの格好が落ち着いたところで。

桂

「葛ちゃん、こっちが浅間サクヤさん。わたしのお母さんの友達で、あやしい人じゃないから安心してね」

両者の直接の知り合いであり、ついでにこのお屋敷の一応の家主であるわたしが間に立つのが筋だろうと、まずはサクヤさんを紹介した。

サクヤ

「……葛？」

葛

「浅間——」

桂

「……あれ？ もしかして、ふたりとも知り合いだったりしたとか？」

サクヤ

「いや、大したことじゃないさ。あたしが昔、世話になったところにも、そういう名前の跡取りがいたような気がしてねえ」

葛

「そうそう、こっちはアレですよ。浅間と言えば忠臣蔵」

桂

「忠臣蔵は浅野だよ」

葛

「たはは、それもそうでしたー」
しーん。

何だか微妙な感じの静けさ。

サクヤさんと葛ちゃんの関係についてとか、いろいろつつこみたいことはあるんだけど、今は触れない方がいいのかも。

だけど、このやるせない空気で一体何を話せばいいんだか。

サクヤ

「さて、そんなことよりもだ」

さすがにここは年の功というか、単に神経が太いのか、口火を切ったのはサクヤさんだった。

サクヤ

「ふたりとも、今日の夕食はどうするつもりなんだい？」

桂

「晩ごはん？」

サクヤ

「町まで食べに行くにしても、あたしの車は離れたところに置いてあるから、雨が止まないことにはそこまでが面倒だしねえ」

桂

「あ、食べ物なら一応……」

葛

「はいはい、一杯あるですよー」

葛

「栄養調整食品ですから、バランスだけは完璧です。たくさんあるんで、お好きなだけどうぞー」

サクヤ

「……………」

桂

「甘いものならお饅頭があるよ。わたしの地元のあれ、辛党のサクヤさんも好きだったよね？」

サクヤ

「は……………」

桂

「…………サクヤさん？」

葛

「…………サクヤさん？」

サクヤ

「ははっ…………はははっ…………あんたら、発展途上の若い身を、こんな食事で養ってこうって？」

サクヤ

「もうちょっとマシなものをお食べっ！！」

ジャンクフード世代の若者が、ふたりそろって怒られた。

結局、今晚のところはありもので我慢してもらうことになったんだけど。

ささやかな夕食が終わってからしばらく、いつの間にか雨垂れの音は消え、庭からは虫の声。

うちの近所でもたまには聞こえてきたりもするけど、さすがにあたり一面が棲息地帯になっているこのお屋敷とは比ぶべくもない。

サクヤ

「暇だねえ…………」

葛

「ですねー」

畳にぼけーっと寝そべりながら、ふたりはやる気の抜けた声を出した。尾花ちゃんも、

ちゃぶ台の下で丸くなっている。

葛ちゃんが大の字になっているのはいいとして——半ズボンだし子供だし。

横向きに寝ているサクヤさんが、枕代わりに立てた腕はともかく、片足の膝を立てているのはいかななものかと。

桂

「浴衣でそんな格好しちゃ駄目だよ」

サクヤ

「この方が風通しが良くて涼しいんだよ。別にいいじゃないか、いるのは女ばかりなんだし」

葛

「尾花は男の子ですよ？」

サクヤ

「……危ない、危ない。危うくお嫁に行けなくなるどころだったよ」

本気じゃないだろうけど、サクヤさんは身体を起こして、軽く襟や裾を正した。

サクヤ

「それにしても暇だねえ。暇だといいでにだらしなくなっていけないよ」

こきこきと首を回しながら窓辺に歩み寄る。

サクヤ

「雨も上がったことだし、あたしの車で町の方にでも繰り出すかい？」

桂

「遊べるようなところ、ありそう？」

サクヤ

「人が集まりゃ、どこかに盛り場ができるもんさ」

桂

「盛り場って……」

サクヤさんが、くいっとお猪口を口に運ぶ仕草をしてみせる。

葛

「わたしはパスです。お子様ですので」

桂

「わたしもだよ……ってゆーか、サクヤさん車」

サクヤ

「あちゃー」

車で行ったら飲めないし、飲みに行くには徒歩かバスかタクシーで、多分それは却下。

桂

「買ってきてこっちで飲んだら？」

サクヤ

「まー、それもそうなんだけど、ひとりで飲んでもつまらないじゃないか」

桂

「そんなものなの？」

サクヤ

「そんなものだよ」

桂

「んー、わかった。みんな暇なんだね？」

サクヤ

「だよ」

葛

「ですねー」

躊躇なく暇と応じたふたりに背を向け、わたしはわたしの荷物を漁った。

桂

「それでは、こんなものはいかがでしょうか」

取り出したるは、てのひらサイズのプラスチックの箱。

箱を開けると、角の丸いつるつるとしたカードが五十四枚。

葛

「トランプですか？」

桂

「なのですよ」

サクヤ

「いいけど、あたしは花札とかの方が燃えるんだけどねえ」

葛

「わたしはあんまり、ゲームの種類とか知らないです」

桂

「ババ抜きぐらいはわかるよね？」

葛

「やったことないですけど、それぐらいなら何とかなるかと……」

サクヤ

「葛、あんたが知ってるのって？」

葛

「実際に経験あるのは、ブラックジャックとバカラとポーカーぐらいしかないですよ」

桂

「……バカラって？」

葛

「ルール自体はブラックジャックと大差ないものなんですけど、大きな違いというか特徴は、それで勝敗を競うゲームじゃないってことです」

桂

「えーと？」

葛

「そのルールで勝敗を競うプレイヤーとバンカーのどちらが勝つか、または引き分けかを当てるだけの単純なゲームなんです。三択問題です」

桂

「それって……面白いの？」

サクヤ

「丁半打つのだって、サイコロ振るのは壺持ってる奴だけだろ？」

桂

「そんなこと言われても、そっちの面白さだってよくわからないよ」

サクヤ

「じゃあ、競馬だ。あれだって馬券買って野次飛ばす以外には、見てる以外にすることないし」

桂

「え？ 馬とか騎手の人を応援しに行ってる人もけっこういるんじゃないの？」

サクヤ

「……………」

桂

「……………」

葛

「まあまあ、おふたりとも。ここは性格で分かれるところですから、それ以上続けたところで話は平行線ですよ」

葛

「サクヤさんみたいに勝利すること、あるいは勝者の特権に対しての執着があるなら、バカラも丁半打つのも十分に楽しめます」

サクヤ

「あんたね……自分のことを棚に上げて、あたしだけをがめつい無法者みたいに言うんじゃないよ」

葛

「わたしはやったことあるというだけで、好きとも何とも言ってませんから」

サクヤ

「意外だねえ、あんたは嫌いなのかい？」

葛

「好きじゃないですよ。そーゆー勝負事って、人やら欲のからむ争いですからね」

桂

「だけど、ただのゲームでしょ？」

葛

「かかる人にかかったら、何でもゲームになるんです。古代ローマの見世物しかりですよ」

桂

「葛ちゃん、ちょっと大げさ……」

葛

「そーですね。なんでもひとくりにできるほど単純じゃないんですよ。今のは少し大人気なさすぎでした」

桂

「大人気って、まだ子供だし……」

葛

「いいでしょう。それならゲームを始めましょうか」

葛

「やるからには一片の容赦もなく、死体に鞭打つ勢いで敗者弱者を追い詰め貪り喰らって勝ちますけどね。そーゆー家風で育っているのよ」

一瞬、葛ちゃんの目が剣呑な光を帯びたように見えたのは気のせいなのかと思ったけれど、サクヤさんにもそう見えていたらしい。

サクヤ

「能書きはともかく、血は争えないみたいだねえ？随分とまたやる気じゃないのさ」
むしろサクヤさんがやる気になっていた。

サクヤ

「けどねえ、十年生きたかどうかの小娘に勝負の何がわかるって言うんだい？」

葛

「刹那の刻で悟る者もいれば、八百無量をかけて真理から遠ざかる負け犬もいますからね。生まれついで星の差って大きいですよ？」

サクヤ

「それよりツキが大きいよ。必要なのは運の満ち欠けを見る目じゃないのかい？」

葛

「才能ないのは辛いですね。自分の力で光れないんじゃ、運まかせでもしよーがないですね」

次々と嘯みつくサクヤさんに、さらりと応じる葛ちゃん。

葛

「運にも見える天地の利って、結局のところ事前の情報収集と調整作業に負うところが大きいじゃないですか」

肩をすくめて、年端に似つかぬ笑いを漏らす。

葛

「季節外れの台風待ちじゃあ、いくら待っても神風なんて吹かないですよ？」

呆れたような、哀れむような、視線。

サクヤさんの堪忍袋の緒に切れ目を入れるには、十分すぎるほどだった。

サクヤ

「ふふふっ、面白いねえ、面白い。一大事ってのは時も場所も選ぶ間もなく嵐のように訪れるって、とある連中に思い知らされたんだけどね……」

口元は一応、笑みの形を保っていたけれど、端の吊り上がり方が不自然だった。

浴衣の裾をからげたサクヤさんは、畳を踏み抜くんじゃないかと心配になる勢いで立て

膝をつき、ずずいっと葛ちゃんに詰め寄った。

サクヤ

「……この場で証明してもらおうか。問答無用に仕掛けられての、小細工する間のない勝負で」

葛

「ですから、運より実力だって言ってるじゃないですか。天の利・地の利が五分なら、勝負を分けるのは人しか残ってないんですよ？」

仁侠映画の姐さんも真っ青なサクヤさんを相手に、しっかり向こうを張っている葛ちゃんも大したもの。

葛

「覚悟済みならいいですよ。こっちも心を痛めずに、身包みはいでさしあげられます」

サクヤ

「はっ、お子様むいても楽しかないけど、まだまだ青いってことを思い出させてあげるよ」

葛

「残念ながら、蒙古斑は三年ほど前に消えました」

一触即発の空気に圧されて後退りしていたわたしに、二人が同時に顔を向けた。

サクヤ

「桂、さっさと配りな」

葛

「おねーさん、お願いします」

桂

「え？ え？ えーと……配るのはいいんだけど、何枚ずつ配れば良いのやら……」

サクヤ

「そうだね。まだ何で勝負するかを決めてなかったね」

葛

「そちらが選んで構いませんよ。こちらの言い分に後から難癖つけられたくないんで」

サクヤ

「誰が難癖つけるかい。千年ぶんのハンデだよ、それぐらいはそっちでお決め」

葛

「では……おねーさん、決めてもらえます？」

桂

「それじゃあ」

サクヤ・葛

「それじゃあ？」

桂

「……ババ抜きで」

三人ババ抜きはちょっと空しかったので、いろいろなゲームを試しているうちに、すっかり遅くなってしまった。

ちなみに葛ちゃんとサクヤさんの成績は五分ほど。

ひとり負け状態のわたしとしては、何も賭けたりしてなくて本当に良かった。

ちなみに賭博行為は違法ですので、念のため。

桂

「だけどさー」

サクヤ

「なんだい？」

桂

「お母さんとサクヤさんって、どういうわけで知り合ったの？」

場の真ん中で山にしたトランプを交ぜていた手が、呼吸と一緒にはたと止まった。

サクヤ

「……なんだい、藪から棒に」

桂

「えーとね。わたしの友達って学校の友達ばかりなんだ。でも、そうじゃない葛ちゃんとは、変わった出会い方をしてるわけでしょ？」

葛

「たはは、面目ないです」

桂

「だからお母さんとサクヤさんの間にも、そういうドラマがあったのかなって」

サクヤ

「それはあんたが学生だからで、社会に出れば学校以外での出会いに変わるもんだろう？」

桂

「でもそれは基本的に同じじゃないのかな。枠組みが、学校から職場に変わるってだけで」

サクヤ

「……そうだねえ、ドラマと言えばドラマだよ。お互い第一印象はアレだったし、仲良くなれそうになかったしねえ」

吐き出す息とともに止まっていた手が動き出す。

桂

「ケンカしたの？」

サクヤ

「まあ、切ったり張ったり殺しあったり、とか」

桂

「そう、殺しあった……」

桂

「……………」

桂

「……は？ 冗談だよな？」

大人っぽい微笑で答えをはぐらかして、サクヤさんはトランプをまとめてひとかさねにした。

とんとん一辺を打って均して、てのひらに収まる直方体に揃える。

サクヤ

「あたしはルポライターやってるだろ。昔、とある事件の調査をやったのさ」

桂

「事件って、どんな？」

サクヤ

「今は昔——って言っても六十年ほど前だから、まだ最近の話だねえ」

桂

「……六十年って最近なの？」

そりゃあね、最近では白寿を迎える人もぼちぼちいるみたいだし、地球誕生から約四十六億年とかスケールの大きい話からすると最近だろうけど。

サクヤ

「Y県にあるMという人里離れた村に住んでた連中が、ある時を境に姿を消しちまったって事件があるんだよ」

わたしの質問を軽く無視して、やや声のトーンを落として話を続けた。

サクヤ

「人だけが忽然と消えるいわゆる神隠しだったら、日本版のマリー・セレスト事件ってところでオカルト方面じゃ話題になりそうなんだけどね——」

オカルト。

つまりは怖い話。

夏の夜話にふさわしい題材ではある。

けど——と逆説で切っておきながら、サクヤさんの声はいよいよ低く、そのオカルトを語るのにふさわしい口調になっていた。

いつの間にか虫の声が消えていて、トランプを繰る手も止まっていて、空気はしんと静まり返っていて。

桂

「……………」

つばを飲み込んだ音がやけに大きく聞こえた。わたしは怖い話は苦手だったりする。

葛

「……………」

ちらりと横目で見てみると、葛ちゃんも顔を強張らせていた。これはちょっと意外かも。

サクヤ

「その近隣に住んでいた村の人が、用事を思い出して行ってみたところ、村は煤と灰ばかりの焼け野原になっていたんだそうな」

サクヤ

「村人はひとりを残して皆殺しになったとか」

皆殺し——って、あれ？

桂

「ちょっと待って！ サクヤさんストップ！」

サクヤ

「ん？ なんだい、怖くなったのかい？」

桂

「あのね、確か六十年前ってことは…………」

ちょっと自信がなくて目を泳がせると、偶然にも葛ちゃんと目が合った。

桂

「……………だいたい終戦の頃だよな？」

葛

「『ほど』なんて大雑把な言い方なんで実際のところわかりませんが、六十年ぴったりで計算するなら戦時中ですね。終戦は一九四五年ですから」

桂

「一九四五年……あ、『イクヨもゴう議のポツダム宣言』だったっけ」
それにしても、葛ちゃんみたいな小さい子に確認をとってるわたしって一体。

サクヤ

「そう。あれは日本がかなり追い詰められてたころの話だ——って、桂、どうしたんだい？」

桂

「ううん、何でもない」

きっと葛ちゃんが年不相応にすごいだけ。
できる子は塾なんかでどんどん上の学年の勉強するらしいし、アメリカとかならスキップで大学に行っちゃうような子なのかも。うん。

桂

「それでサクヤさん。戦争してたころなら、空襲とかで焼け野原っていうのは、普通にありえる話なんじゃないの？」

サクヤ

「そうだね。生きた人間のしでかすことは、オカルトなんかよりも性質が悪いんだよ。ありえないなんて笑い飛ばすこともできないしね」

葛

「ええ、そうですね……」

いつもの澁刺とした葛ちゃんとは別人のようなつぶやきに、わたしは視線をそちらに向けた。

葛

『古事記』によれば伊邪那美命が『一日に千頭絞りに殺さむ』と呪いの言葉を吐いたのが、この国で人が死ぬようになった始まりですけど——
今、どんな顔をしているのかは、うつむいてしまっているのでわからない。

葛

「——千人以上の人間を、ボタンひとつで殺したりしますから、黄泉の神様よりも性悪です」

そういった葛ちゃんは、寒くもないのにぶるっと震えて、うつむいたまま尾花ちゃんを抱きしめた。

桂

「葛ちゃん……」

葛

「たはは、さすがに千人以上なんてのは稀ですし、百人単位もそうないですね」

葛

「そこまで大規模だと個人の都合じゃなさそうですけど、仕事だとしたら相当なストレスですよ。想像したら胃が痛くなってしまいましたよ」

サクヤ

「——あんたは、だろうね」

桂

「だろうねって……当たり前だよ、普通だよ。わたしだってそんなお仕事は嫌だもん」
百人も千人も殺してしまうようなお仕事なんて、ミサイルのボタンを押す係だとか、普通には就けそうにないものだろうけど。

桂

「それでサクヤさん。今までのお話のどこが、お母さんと関係あるの？」

サクヤ

「あるよ。あたしと真弓の出会いの話だろ？」

サクヤ

「真弓はその事件の関係者なんだよ。正確に言うなら、関係者の血縁だ」

人が消えた事件。

村が燃えた事件。

お母さんはその事件の関係者の血縁で。

そういえば、さっきのサクヤさんの話では——

サクヤ

「あんたの父方の血縁——笑子さんの話は、真弓やあたしがしてるけど、母方の血縁について、何か聞いていることはあるかい？」

桂

「勘当されたようなものだって……帰省できる田舎がなくてごめんなさいって……」

でもそれは、お父さんと駆け落ちしたようなものだから。

ただ、それだけのことだったはず。

サクヤ

「とにかくそういう理由なんだよ。いやー、あの頃はまだ駆け出しでね。何よりもがむしゃらだったから、相当ムチャもやったねえ……」

桂

「わ、それじゃあケンカになったりするかも」

なるほど、納得。

サクヤさんは今でもこんなだし、対するお母さんは笑顔でノーと言える人だったから、取材拒否と決めたら、断固応じなかつただろうし。

でも——

今の話で腑に落ちない点があった。

桂

「そもそも、なんでそんな事件を取材してたの？」

戦争や空襲に関する取材なら、何もそのY県M村にこだわる必要はなかつたのに。

サクヤ

「それがだね、奇妙なことに事件があったと思われる日には、B-29——戦略爆撃機は飛んでいなかったらしいんだよ。その代わりに——」

桂

「代わりに？」

サクヤ

「刀を持った鎧武者を見たって証言を、その近くに住んでた住人から複数とれてねえ」

桂

「……………」

葛

「……………」

桂

「……刀？ 鎧？ 戦時中に？ それってやっぱり、オカルト方面のお話なんじゃ」

鎧武者の亡霊だったら、平家の落ち武者あたりが定番。『耳無し芳一の話』に出てくるのも、確かそうだったはず。

サクヤ

「まあ、オカルトの範疇だろうねえ。だからこそ、まともな証拠を握ろうって必死だったんだよ」

桂

「駆け出したと仕事選べないもんね……」

とりあえず同情。

でも、そういう縁があつてサクヤさんがここにいてくれるんだから、わたしは笑顔を隠せない。

桂

「大変だったんだね。ご苦労さま」

サクヤ

「こっちは殺されかけたっていうのに、そんな呑気な顔して加害者の娘がそんなこと言うかい」

桂

「えへへー、肩でもお揉みしましょうか」

サクヤ

「いいよ、いいよ。死んでないんだし。それより今日のところはそろそろお開きにしようか」

葛

「そーですね。わたし、いつもならとっくに寝てる時間ですよー」

ふわあーと大きなあくびを噛み殺して、葛ちゃんが目をこすった。

そういえばそうだった。葛ちゃんの身につける生活習慣は、電気のつかない昨日までの早寝早起き生活なんだっけ。

それに中学校に上がる前は、わたしも日付が変わる前にお布団に入っていたわけで、葛ちゃんに夜更かしはちょっと辛かったかもしれない。

桂

「ごめんね、葛ちゃん」

葛

「いえー、いいですよ別にー」

桂

「お布団、わたしが敷いてあげようか？」

葛

「大丈夫ですー。では、失礼しますよー」

むんずと尾花ちゃんの尻尾をつかみ、ずるずる引きずりながら居間から出て行った。

サクヤ

「……尾花も災難だねえ」

桂

「でも、小さい子がぬいぐるみ持ち歩いてるみたいで可愛いかも」

三人ババ抜きはちょっと空しかったので、いろいろなゲームを試しているうちに、すっかり遅くなってしまった。

昨日までかなり早寝をしていた葛ちゃんに合わせて、ほどよいところで切り上げることにした。

ちなみに葛ちゃんとサクヤさんの成績は五分ほど。

ひとり負け状態のわたしとしては、何も賭けたりしてなくて本当に良かった。
ちなみに賭博行為は違法ですので、念のため。

「うっ……」

泣き声が聞こえてくる。

「うあっ……うっ……あうっ……ひっく……」

小さな子供のすすり泣く声。
葛ちゃん——ではない。
葛ちゃんよりも小さい誰かの泣き声。
誰が泣いているんだろう。
何がそんなに悲しいんだろう。
わたしにはわからない。
ただ、その子が悲しくて泣いていることだけはわかる。わたしにはわかってしまう。
ぴんと張った糸でつながっているように、心のささめきが伝わってきていた。

その震えに共鳴したわたしの心が、硬質で透明な音を立て砕けていく。
悲しみはまるで海のように——

荒れに荒れた激しい波に囚われて沈んでいくと、やがて波も届かない静けさの中に放り
込まれる。

沈むにつれ、静かに、静かに、静かに——
嵐は遥か遠くの海面に——
海中はあくまで静かで——
だけど、その静寂は決して安らぎなどではなく
深くなるにつれ、水は重みを増していく。
深くなるほどに、水は冷たさを増していく。
その重さと冷たさで、わたしは小さな氷のかけらにされてしまいそうになる。
ああ、この悲しみは——
大切な人がいなくなってしまった悲しみだ。

それを手繰っていくように、ただたゆたっていたわたしの意識が浮かび上がっていく。
すべてのものが形をなさない、漠然とした、曖昧模糊な混沌の狭間から、わたしの意識
が浮かび上がっていく。

ゆっくり薄目を開けるように、景色がだんだんはっきりしてくる。

見えてくるのは羽様の屋敷のとある部屋。

小さい子

「うっ……ううっ……」

泣いているのは——わたしだろうか。

黒い服を着た、六、七歳の子が泣いていた。
たいせつな誰かを亡くして泣いていた。
壁を覆う白黒縞の鯨幕。
これはお葬式の風景だった。

「——の子だろ、泣くんじゃないよ」
その子の頭のはるか上で、硬くつぐまれていた唇が開いた。

喪服の女性

「ほら、あっちを見てみなよ。あんたの大好きな——だって、泣くのを我慢してるんだよ」

小さい子

「ふぁっ……でも……でも桂は泣いてるよう……」

喪服の女性

「……………」
泣き止まない子供に、大きなため息。
小さい子からすれば、見上げなければ顔がわからないほどの長身を折って言う。

喪服の女性

「人様よりは十年ほど早かったみたいだけど、それでも笑子さんは安らかに息を引き取ったんだ」
笑子さん、というからには間違いない。
これはわたしのお祖母ちゃんのお葬式。
事故で忘れてしまったはずの、わたしが小さな子供の頃の——

喪服の女性

「いいかい。人はね、百年生きるか生きないかのうちに、誰もが死んでしまうものなんだよ。もちろん、あんたもね」

小さい子

「……死んじゃうの？」

喪服の女性

「死ぬね。間違いなく」

小さい子

「やだよ……そんなのいやだよ……」

喪服の女性

「だろうねえ。大昔から人は長生きしたがるものだよ。そりゃあ大変けっこうなことさ」

喪服の女性

「でもあんた、笑子さんが死んでしまって悲しいだろう？ 置いてけぼりをくったみたいで悲しいだろう？」

小さい子

「うっうっ……おばあちゃん……」

喪服の女性

「だから、長生きすればいいってもんでもないんだよ。ひとりだけ死ねない奴は、最後にはひとりぼっちになっちまうんだから」

小さい子

「うん……でも……でも……」

喪服の女性

「そうだね。ひとり先に死んじゃうのも、やっぱり寂しいもんだね」

喪服の女性

「だからね、人として自然に生まれて、人として自然に死ぬのは、それなりに幸せなことなんじゃないかって——あたしは思うんだよ」

小さい子

「おばあちゃんは、幸せなの？」

喪服の女性

「さて……本人にはわからないことだしねえ。でもまあ、悪い死に方じゃないと思うよ」

喪服の女性

「子供に先立たれる不幸もあったけど、看取る子供も孫もいる。それで眠るように逝けたんだ」

涙をこらえたような声でその人は語り、わたしの肩に手を置いた。

サクヤ

「まだ心残りはあるだろうけど、それでも——」

サクヤさんは、漏れる嗚咽に言葉を詰まらせて。

サクヤ

「笑子さんは——」

サクヤ

「真弓は——」

……あれ？

お祖母ちゃんのお葬式だったのに、なんで——
これは今年の夏の初めの風景。
きっと一生忘れない、お母さんのお葬式の風景。
このときもサクヤさんが来てくれて、わたしを励ましてくれたんだ。

……あれ？
ふたたび違和感。
何が違って、違和感を覚えたのか。
違う。
何も変わっていないから、違和感を覚えたのだ。

十年と少しの歳月はわたしをこんなに変えてしまったのに……

サクヤさんは少しも変わっていなかった。
まさか——

まさか、まさか、まさか、これは——

目から頭にかけて、長い針が刺さったみたいに、ひどく痛んだ。
闇。
わたしの周りには、ただ軟泥のような闇。
網膜に映り、脳にまで達するような存在は、何ひとつとしてここにはない。
反射する光も、振動する空気も、あの赤い痛みもない、何もない閉じた世界。
暗いたゆたいの中に、わたしの意識は引き戻されていた。
わたしは夢の中にいた。
そう、ここは夢の中だった。
明晰夢——だっただろうか。
夢だとわかって見る夢のことを、そういう風に言うらしい。
今のわたしの状態が、まさに明晰夢を見ている状態なのだろう。

では、さきほどまでのあの風景は？
夢。
そう、あれも夢だ。
夢だと気付かず見つづける夢だ。
夢だから、忘れたはずの出来事をも見ることができたのだろう。

忘れるということは、記憶そのものが頭の中からなくなってしまうのではなく、頭の中
から探し出せない状態のことを指すのだそう。

失われたのは記憶ではなく、記憶を呼び戻す手段なのだ。

思い出せるもの、意識することができるもの、それらはすべて分類整理された上で保管
された記憶（すなわち情報）であり——

その逆は、整理されずに（もしくは整理したものが散らかされて）保管された情報であ
る。

では、その整理されていない情報はどこにしまわれているのか？

それは意識という光の届かない闇の中に。
無意識という、廣大深淵なる混沌の中に。
夢の話にもどろう。
夢は無意識への門だという一説がある。
夢のほとんどに脈絡がないのは、混沌から採取した素材をでたらめに継ぎ接ぎしたにすぎないものだからだ。
とはいえ、まとまったひとかたまりを引き当てることもあるだろう。

そういうときに見る夢のひとつのかたちが、さきほどわたしが見たような——
いや、あの夢がわたしの記憶の再生なのかどうかは怪しい。
小さなわたしの目を通した迫体験ではなく、俯瞰の視点による客観だった以上、少なくとも編集されている。

捏造された記憶なのかもしれない。
無意識という混沌の海から引き上げた情報には、びっしり張り付くフジツボのような、金属を蝕む錆のような、混ざり物が付き物なのだから。

だからサクヤさんだけが今の姿のまま——
その矛盾が、わたしに夢だと気付かせたのかもしれないけれど。
もしかしたら、忘れてしまったはずの過去を、今までもこうして夢見てきたのかもしれない。
ただ、目覚めたときに憶えていないだけで——
夢とはそういうものだから。
そのほとんどが朝の光に溶けてしまう、淡雪のように儂いものだから。
だけど、この夢はきっと憶えているはず。
意識して見る夢——明晰夢とはそういうものなのだから。

桂

「ふう……」
ため息をひとつ吐いて、気持ちを切り替えることにした。
明晰夢にはもうひとつ特徴があって、訓練次第では完璧に夢をコントロールできるのだ
そんな。
夢の中では何だってできる。
物理法則だって無視できるんだから、それはもう、神様になったようなものだろう。
空を飛んだり、食べたいものを食べただけ食べたり、好きな人に会ったり——
せっかくだから。
そう思って、何をしようか具体的に考え始めたそのときに。

鈴の音が聞こえた。
わたしが「ここに欲しい」と思った音ではないので、おそらく外の世界で鳴った音だろ
う。
寝ている間にも耳や鼻などの感覚器はちゃんと働いていて、それが夢にも影響するとい
う。
大蛇に絞め殺されそうになった夢を見て、もはやこれまでという時に目が覚めると、シ

一ツが絡んでいたとか何とか。

鈴が鳴る。

どうにもそれが気になって、わたしの意識が引き寄せられていく。

明晰夢なんて珍しいものを見てるのに、このままでは目が覚めてしまう。

夢は思い通りになるのに、目覚めのタイミングはコントロールできないなんて、あんまりだ。

……ああ、目が覚めてしまった。勿体ない。

「うふふ——」

「くすくすくす——」

ぬるい空気をさざめかせる、あどけない笑い声。

誰だろう？ 葛ちゃんじゃないし、サクヤさんであるはずがないし。

そういえば部屋には鈴なんて置いていない。風鈴などの聞き間違えそうな音を出すものすらない。

と、いうことは——

がばっと布団を跳ね上げて、身体を起こして周囲を見回す。

泥棒？ 幽霊？ とにかく、鈴を持った知らない女の子がふたり——

桂

「いや——っ!!」

わたしは肺の中身をひっくり返しながらか、飛び上がってその反対の壁に張り付いた。

女の子なんていなかった。

その代わり、どこから入ってきたのか、部屋の中にいたのは——

それは大きな蛇だった。

青白い月光の溶けた、薄暗い部屋の中においてなお、目が覚めるほどに赤い——

血の色よりも鮮やかで、火の色よりは暗く重い、そんな色の鱗に鎧われた蛇がいた。

蛇はわたしの体温が残るお布団の上を占領して——飛び退かなかったら、咬み付かれていたかもしれない——まぶたのない瞳をわたしに向けた。

いやいや、きっと寝ぼけてるんだ。

風が草葉を揺らすさざめきが、人のざわめきに聞こえるなんてよくあること。

それに比べれば、明晰夢を見るチャンスの方が、この先ないかもしれないわけで。

結論は、こんな機会を逃がしてなるものか。

頭からお布団をかぶって目を閉じる。

一度は目覚めて途切れた夢でも、二度寝で続きをみられることがある。
昔から寝つきはいい方だし大丈夫。今すぐ寝ればきっと——

——
『駄目よ桂ちゃん——眠っては駄目——』

——あれ？

夢の中に戻ろうとした矢先に、夢の中のあの人の声がわたしに届いた。
頭の中に直接響いてくるような、近くて遠いところからの声。
果たして今のわたしは、眠って夢見るわたしなのか、眠ろうとしているわたしなのか。
そんな危機感のないわたしを追い立てるように、言の葉が緊張感を帯びて震えた。

夢のひと

『桂ちゃん、早く起きて逃げて——』

桂

「えっ!？」

ビクッと身体を跳ね起こしていた。
一体何から逃げろというのだろう——と、寝ぼけ眼をこすった向こうには。

それは大きな蛇だった。

青白い月光の溶けた、薄暗い部屋の中にいてなお、目が覚めるほどに赤い——
血の色よりも鮮やかで、火の色よりは暗く重い、そんな色の鱗に鎧われた蛇がいた。

蛇は表情のない不気味な目で、じっとこちらの様子をうかがっていた。

背中の産毛がぞぞっと逆立つ。

桂

「やだ——なんでこんなっ!？」

お布団を跳ね除けて、部屋から飛び出し逃げようとする。

乱れる浴衣の裾に気を使う余裕などなく、部屋の外へと向かおうとする。

桂

「つあっ!」

剥き出しのふくらはぎを何かがかすめた。
風を送った炭火のように、熱を孕（はら）んで暗がりに輝く瞳。

赤々と——

明々と――

もう先ほどのような悲鳴は出ない。

蛇に睨まれた蛙は、恐怖のあまりに動けなくなると言うけれど、今のわたしはまさに、その蛙のような状態だった。

解剖を待つ蛙のように、身体を壁に貼り付けている。

その視線だけでこちらは怯えきっているというのに、空気を裂く鋭い威嚇（いかく）音を発しながら、もたげた鎌首を揺らしている。

どうしよう、どうしよう――

どうにかしようと思っても、身体はわずかにしか動いてくれない。

今のわたしにできるのは、こうやって益体もない思考をぐるぐるぐるぐる回すぐらい。

そのぐるぐるの渦の真ん中に、ぼっかりと浮かびあがったのは。

これが夢なら良かったのに――

ああ、本当に益体もない。

起きたら部屋に蛇がいるだなんて、話の運びに無理がある。それこそまるで夢のよう。

だけど夢ならもう覚めてもいいはず。

これが明晰夢だというのなら、そもそも赤い蛇なんて出るはずがない。

だからこれは夢ではないのかも。

切れ込みのような口から伸びた、二股にわかれた舌がチロチロと蠢いた。

いかにもずりとかいう音がしそうな動きで、おもむろに距離を詰めてくる。

赤い蛇が近づいてくる。

蛇の存在そのものが影響しているのか、部屋の空気が赤錆の色に染まってきたように見える。

赤い蛇が近づいてくる。

赤錆びた空気は異臭を帯びていた。鼻を突く爬虫類の生臭さと、それに混じる金気臭さ。気持ちが悪い。

桂

「かはっ……げほっ、げほげほっ」

鼻腔に押し入ってくる臭いを追い出そうとして、咽せた。涙が滲んだ。

綺麗な空気がほしくてほしくて、溺れた人のように顎を上げる。

赤くぼやけた視界の片隅を、青みを帯びた清浄な光がちらと横切った。
重さ知らずにひらひらと舞い飛ぶさまは、人魂のようにも見えないのだけれど。
そうじゃなくて、こんな光をどこかで確か……

……ああ、そうだ、そうだ。そうだった。
やっぱりこれは夢かもしれない。
だってこの光は、昨夜の夢のあの人が――

夢のひと
『桂ちゃん』

わたしの名前をなぜか知っているあの人の声が、頭の中で再生される。

夢のひと
「桂ちゃん」

その声は、すぐ隣からもして。

高く澄んだ音が空気を震わせ、月の光が部屋を満たした。

青白い光は赤い空気とぶつかり砕けて、諸共に夜の闇に溶けていく。
異臭が消え去り、途端に呼吸が楽になる。

夢のひと
「桂ちゃん、もう大丈夫よ」

甘い花の香りがふわりと届き――
薄く燐光を纏わせた手が触れると、ぎちぎちに身体を縛っていた不可視の結び目がするりとほどけた。
ようやく動くようになった首を回して、隣を見ればそこには。

無数の蝶を従えたあの人が、優しげな面差しを厳しく引き締めて、赤い蛇を見据えていた。

夢のひと
「大丈夫。きっとあなたを――」

彼女は静かに言葉を止めて、青みを帯びた静かな瞳を、廊下の方へと滑らせた。

廊下の床板が踏み鳴らされる音が、耳に届いたかと思うやいなや、最大音量に達した。

どうやら助けというものは、得てしてまとめて来るものらしい。

「桂!! どうしたんだい!? さっきの悲鳴は何事だい!？」

敷居から飛び出すのではないかという勢いで障子戸が開かれる。
柱にぶつかった反動で戻ってくるそれを、両腕で払い除けるようにして入ってきたのは。

桂

「サクヤさんっ!!」

サクヤ

「無事かい、桂!? 一体何が——」
視線がわたしの隣に向かって流れた。

そこには半歩前に踏み出して、わたしを蛇から庇う位置に立った、青い着物のあの人がいる。

サクヤ

「桂……そいつは……」

桂

「あ、サクヤさん、この人は違うの! この人はわたしの——」
わたしの一体、何だろう。
悲しげな目をしていて、優しい声でわたしの名前を呼んで、何だかとても懐かしさを感じる人だけれど。
守護霊のような存在なのだろうか?

桂

「とにかく! この人はわたしを助けてくれたの! わたしが襲われたのはあっち!」

サクヤ

「そんなことはわかってるよ!!」
正三角形を形作る、サクヤさんが立つ廊下側と、わたしたちのいる壁際と、もう一点の頂点。

わたしが指差したのは、そのもう一点を陣取っている蛇だった。

サクヤ

「……ちっ、嫌いな奴を思い出しちゃったよ」

赤い蛇を中心に、円弧の軌跡を描くようにして、わたしたちの所まで近づいてくるサクヤさん。

サクヤ

「なあ、あれは『違う』んだろう?」

桂

「え？ あれって？」

サクヤ

「あんたにはお聞きじゃないよ。なあ——」

夢のひと

「この蛇は違います」

一瞬、サクヤさんが呼び方を迷っている間に、察した彼女がそう答えた。

サクヤ

「奴はちゃんと封じられているのかい？」

夢のひと

「あの子に憑いた分霊を別にすれば」

サクヤ

「真弓が逝っちゃったから、桂をどうするかで頭が一杯だったんだけど、そっちも近いうちに手立てを考えないといけないねえ」

夢のひと

「あの子もこの地に来ています」

サクヤ

「そりゃあ——おっと、今はこのモドキを何とかする方が先だったね」

夢のひと

「サクヤさん。これはまやかしの産物ですから、わたしが」

サクヤ

「《力》は大丈夫なのかい？ あんたの《力》が尽きたら終わりだ」

夢のひと

「この程度ならとくに影響は」

サクヤ

「なら任せるよ。桂、こっちに来な」

置いてけぼりの会話をされていたわたしは、突然ぐいっと引っ張られて、大きくよろけて。

桂

「え？」

抱きとめられた。

桂

「あ……」

サクヤ

「よしよし、怖い思いをさせたね」

桂

「ん……」

大きな胸に埋まった顔を、こくりと頷かせる。

確かに怖かったけど、こうしていると安心できる。

サクヤ

「でも、もう大丈夫だ。見てみな」

抱擁をとかれて向かされた先では、蝶の群れにまわりつかれた蛇が、身もだえしていた。

蝶がはばたくたびに月光が粉となって散り、それが降りかかるたびに蛇は苦しげに胴をくねらせる。

青白い光と赤い空気がぶつかって消えたように、蝶と蛇も正反対の何かでできているのだろうか。

もちろん蛇もやられっぱなしというわけではなく、長い尾を鞭のようにしならせ、振るい、叩かれた蝶は灰と崩れてしまう。

とはいえ、それも多勢に無勢のよう。

桂

「……そういえばサクヤさん」

サクヤ

「なんだい？」

桂

「サクヤさんはあの人とは知り合いなの？」

先ほどの会話は、どう解釈しても初対面同士といった感じではなかった。

一瞬、困ったように視線を泳がせた。

その先には、静かな瞳でぶつかりあいの様子をうかがう彼女の姿があった。

腕を振るうたび、その振り袖に抜かれた蝶が命を得て飛び出しているかのように、一頭、二頭とその数を増やしていく。

サクヤ

「……あいつはね、この家と関わり深い、神様みたいな存在なんだよ」

桂

「それって守護霊みたいな感じ？」

サクヤ

「個人に憑いてるわけじゃなくて、土地に依ってるわけだけだね」

桂

「それじゃあ、あの人はわたしのご先祖様？」

サクヤ

「身内には違いないけど、あいつはあんたの先祖じゃないよ」

桂

「身内だけど、先祖じゃない……？」

そういえば——

わたしのことは「桂ちゃん」と呼ぶのに、サクヤさんのことは「サクヤさん」だ。

わたしよりは年上で、サクヤさんよりは年下なんじゃないだろうか。

そういえば——

昨日の夜、わたしは何を見たんだっけ？

柱の傷。

背比べの後。

並んだふたつの名前。

ケイト——

——ああ、頭が痛くなる。

サクヤ

「桂？ 桂！？」

桂

「大丈夫……平気……」

サクヤ

「そうか、それなら——」

サクヤさんの目がきつく細まり、言葉を止めて身構えた。周囲に満ちた雰囲気、わたしに静かであることを要求する。

サクヤ

「……………」

鼻をひくつかせながら、ゆっくりと首をめぐらせていた動きが止まった。

サクヤ

「気をつけな！ 奴らに来るよ！」

飛び掛かってきた蛇が、横をすり抜けていく。

今がチャンスだ——

ふくらはぎがじんと熱かったけど、気付かないフリをして、そのまま進もうとする。

持ち上げた足が何かに払われた——というより叩かれた。それぐらいの力だった。

何とか踏ん張ろうとしたけれど、そのために出そうとした足に浴衣の裾がからみついた。

桂

「うぐっ！」

顔を打ち付けるのだけは避けられたけど、一瞬息が詰まった。

そのままぐったりと突っ伏したくなかったけど、畳を叩く勢いで上体を持ち上げる。

急げ急げ、急いで立たないと。

膝を立てようとして、裾を踏んづけて、もう一度転びそうになって、両手をついた。

ああっ、もうっ、浴衣なんて着るんじゃないなかつた！

とはいえ、今は愚痴を吐いている場合じゃない。早くしないとあの蛇が——

——立ち上がったのは一足遅かった。

目の前すぐに、もたげた赤い大蛇の鎌首があった。

背中を見せる度胸がなくて、それでも少しでも距離をとろうとして、わたしは蛇の様子をうかがいながら後退った。

桂

「——ひっ」

壁に背中をどやしつけられ、しゃっくりみたいな悲鳴を上げた。

わたしは追い詰められてしまった。

追い詰められたわたしを捕らえる、まばたきしない一対の瞳。

冷たい鈴の音が響いた。

——

「ふふふふふっ」

——

「くすくすくす——」

少女たちの笑い声が響いた。

それは高く澄んだ可愛らしい声だったけれど、今この場で聞く限りでは、薄気味悪いだけだった。

身内だというあの人も、動きを止めてあたりの気配をうかがっている。

赤い蛇の姿は——すでに消えていた。

その蛇がいた向こう。部屋の隅の暗がりに向けて、サクヤさんが言い放つ。

サクヤ

「そこにいるんだろう？ 覗き見なんて趣味の悪いことしてないで、堂々と姿をお見せよ」

——

「そうね——」

それはあまりにも忽然と。

目まぐるしく切り替わる影絵の唐突さで、少女がふたりあらわれた。

暗闇の中から踏み出してきた、赤い鼻緒に飾られた草履履きの素足が四本。

うち二本の足首に巻かれた金の鈴が、爪先が畳に降り立つたびに鳴り響く。

着物の裾はごく短く、肉付きの薄い脚のほとんどが、惜しげもなく剥き出しになっている。

にもかかわらず、肌は一度も陽光を吸ったことがないかの如く、白く、柔らかで、滑らかで、不相応なほどなまめかしかった。

全体的に色素が薄いのか、髪も光を透かすような色合いで、瞳は血の色に濡れていた。

短い裾に反して袖は長い。左右で二色に染め分けられた色合いは赤と黒。

どことなく、夢の中のあの人とは対照的な女の子たちだった。

そして並んで立つふたりは、真ん中を挟んでの線対称——

ひとは可愛らしくも驕慢。

ひとは自信なさげに従順。

表情や態度は違っていても、それを表現する身体の方は、服装まで含めて鏡写しのそっくりさんだった。

……双子？

そんな何の変哲もない言葉が、わたしの心臓を驚かせた。

——

「ごきげんよう。皆さま十年ぶりかしら」

——

「姉さま、皆ではありません。浅間の長の孫娘とは——」

双子の姉

「そうね、どれぐらいぶりになるかしら？」

サクヤ

「はっ……」

サクヤ

「……そんな大昔のことは忘れたよ」

双子の姉

「そうだったわね、あの時あなたは幼かったもの」

尖らせたサクヤさんの視線を、姉らしき彼女は猫じみた笑顔で受け流す。

双子の姉

「そういえば、あの時ミカゲはまだだったわね」

双子の妹

「はい、姉さま」

双子の姉

「それなら初顔合わせになるのかしら。ご挨拶しておきなさいな」

双子の妹

「お初にお目にかかります。私はミカゲ。ノゾミ姉さまの妹です」

ノゾミ

「よろしくしてあげてちょうだい。同じ不出来な子ですもの。仲良くなれるんじゃないかしら？」

サクヤ

「ちっ……」

ノゾミ

「でも、本当にまた会えて嬉しいわ」

サクヤ

「こっちは嬉しくも何ともないよ。あんたらは、この世から消え失せたものとばかり思ってたんだ。それを今更のこのこと……っ！」

ノゾミ

「あら？ あなたが今更だなんて言うの？」

ミカゲ

「間に合わなかったあなたが言うの？」

ノゾミ

「今だって遅かったものね。この——」

ミカゲ

「代わりのハシラが来なければ、間に合ったのかは怪しいところ」

桂

「ハシラ……？」

ノゾミ

「そう、あなたは知らないの。あなたの家が祭っている、ハシラが一体何なのか」

桂

「十年よりも前のことを、何も憶えていないから……何も思い出せないから……」

桂

「わたし、本当にあなたたちとも会ったことがあるの!？」

ノゾミ

「ふふっ、そんなに不安がらなくても、思い出させてあげるから大丈夫」

ミカゲ

「隠されたモノを洗いざらい」

ノゾミ

「すっかり暴いてあげるから」

サクヤ

「させないよっ！」

サクヤさんが一歩前に進みでて、肩の後ろにわたしを隠す。

ノゾミ

「あははははははっ、山育ちの観月の民は、何年生きたところで無粋者のままなのねえ」

ミカゲ

「その頑なさ、あなたたちの女神の影響？」

ノゾミ

「いいかしら。あなたにではなくその子に言っているのよ？」

サクヤ

「うるさいね。桂に手出しはさせないし、あたしのことはどうでもいいんだよ」

サクヤ

「それよりも、なんであんたらがここにいるんだい？　なんで存在してるんだい？　あんたらは鬼として切られたはずだよ」

サクヤ

「あんたらを切ったのは、役目を返していたとはいえ、『当代最強の鬼切り』と身びいきの強い渡辺党すら認めていたほどの——」

ノゾミ

「あら、そうなの？　それなら鬼切り役の質も随分と落ちたものね」

サクヤ

「——っ!!」

ギッと軋むような音は、固く結んだサクヤさんの口の奥から漏れていた。

ミカゲ

「ですけど姉さま」

ノゾミ

「ええ、そうね」

ノゾミ

「彼女が手強かったのは認めるわ。結局私たちは切られてしまったわけだし、そのせいで長い眠りが必要だったんですもの」

ミカゲ

「形に成れる《力》を取り戻すのに十年」

ノゾミ

「せっかく一部なりとも主さまを解放してさしあげたのに、まだお誉めの言葉もいただいでいないのよ。その主さまも——」

ミカゲ

「今は呼びかけに応えてくださらない」

サクヤ

「だったらあんたらも、そのまま寝とけば良かったんだよ。五十六億七千万年ほど後なら、鬼でも蛇でも何でも来やがれって感じだしねえ」

ノゾミ

「ふふっ、下手な冗談」

ノゾミ

「私、そんなに寝汚い方ではなくってよ。それにじっとしているのには、もう飽きたもの」

ミカゲ

「だから姉さまと私は——」

ノゾミ

「主さまを助け出すことに決めたの」

サクヤさんからわたしに向けられた瞳が、熾火（おきび）のように怪しく光った。

ノゾミ

「そのために、その子の血をもらいに来たんだもの。ハシラと同じ血の流れを汲む——」

ミカゲ

「羽藤の末の贅の血を」

サクヤ・夢のひと

「させないよ！」

サクヤさんと夢の——ええと、オハシラサマが、声を揃えて身構えた。

ノゾミ

「あらあら、こわい」

ミカゲ

「本当に」

ノゾミ

「そんなに睨まないでくださらない？ 目覚めたばかりの私たちは、まだまだ《力》が欠けているんですもの」

ミカゲ

「ですから姉さま。今一度は退きましょう」

ノゾミ

「そうしましょうか。あの子がもらえればいいのだけれど——」

もの欲しそうな目でわたしを見たのに反応して、ふたりの背中がぴくりと動いた。

ノゾミ

「あはははははっ、鬼が怖くて行かれない」

どちらが鬼なんだろう。そりゃあ、オハシラサマは人間じゃなくて神様だって話なんだけど。

ノゾミ

「あはははははは——」

ミカゲ

「ふふふふふふ——」

ふたりは笑い声を上げながら、ふわりと後ろに飛び退った。
暗がりの中に溶け込むように、ふっと姿が見えなくなった。

ただ影の中から、鈴の音だけが聞こえた。

桂

「……………」

オハシラサマ

「……消えましたか」

サクヤ

「そうだね、もう何も臭わないよ」

オハシラサマの声に、サクヤさんが同意する。

部屋の中に張り詰めていた冷気が、真夏の温度に溶けていく。

わたしを両足で立たせていた、身体の芯もふにやりと溶けた。

桂

「……ううっ」

ぺたりと座り込んで情けない声をあげる。

何だかよくわからないことだらけだった。

お母さんが死んじゃって、ごはんも喉を通らないほど落ち込んで、ようやく最近立ち直
つてきて、お父さんの実家を見に来てみたら、これだ——

桂

「わたしもうやだ！ もう帰る！」

帰りたい。

帰れるものなら帰りたいかった。

お母さんが「お帰りなさい」って笑ってくれるあの頃に帰りたいかった。

鎮守の森のお屋敷とか、蝶を引き連れた神様とか、双子のお化けとか、夢みたいなこと
ばかりで——

桂

「本当に夢なら良かったのに」

目が覚めると、わたしは家のお布団の中から、見慣れた天井を見上げていて、お味噌汁
の香りが漂ってきて、そこには——

桂

「全部……この夏にあったこと全部、ただの夢なら良かったのに……」

サクヤ

「そうだね、全部が夢なら真弓もね……」

サクヤ

「だけどそれは起こったことだよ。起こったことを起こらなかったことにするのは大変だ」

オハシラサマ

「そう——時間を巻き戻すことはできない」

オハシラサマ

「でもね、桂ちゃん。今夜のことだけは、夢にしてしまうことができるわ」

オハシラサマ

「あなたは何も失っていないし、何も得ていない。あってもなくても、あなたの日常には影響しない。それならば、夢にしてしまっても——」

サクヤ

「そうさ。一眠りして目覚めたら、今のが夢か現かわからなくなるだろうさ」

サクヤ

「疑ったところで、あたしがしらばっくれたらハイお終い。今夜のことはただの夢」

この話もここで打ち切りだと言わんばかりに、手を打ち鳴らして一本締め。

サクヤ

「明日の朝には駅まで送っていくよ」

オハシラサマの白い手が、わたしに向かって伸びてきた。

オハシラサマ

「だから桂ちゃん。今日はもうお休みなさい」

意識が真っ白に染まっていく——

桂

「今のは一体どういうことなの！？ あの子たちは何者なの！？ オハシラサマって！？ それにわたしの家が何だとか——」

あまりに色々あったので、詰め込みすぎた風船みたいに、わたしの気持ちはパチンと弾けた。

桂

「サクヤさんは邪魔してくれたけど、昔のことは思い出せるなら思い出したいんだから、責任とってサクヤさんが教えてくれるわけっ!？」

サクヤ

「それは、教えられることなら……」

桂

「へー、教えられないこともあるんだ？ サクヤさんってわたしの知らないことも、色々たくさん知ってるみたいなのに」

桂

「あの子たちのお姉さんの方とは知り合いだったみたいだし、このオハシラサマとも仲がいいみたいだし」

オハシラサマ

「桂ちゃん……」

桂

「だいたい、オハシラサマはなんでわたしの名前を知ってるの？ やっぱり神様だから？ それとも身内みたいなものってことは——」

桂

「——たっ」

オハシラサマ

「桂ちゃん？」

サクヤ

「桂っ!？」

桂

「大丈夫。もう慣れたもん。こっちに来てから、昔のことを思い出そうとすると、すごく頭が痛くなるんだよ」

サクヤさんはオハシラサマのことを、人に憑いている幽霊じゃなくて、土地に依っている神様のような存在だと言った。

桂

「……もしかしてこの頭痛って、オハシラサマがそういう風にしてるの？」

神様ならばそれぐらい——いや。

もしかすると、わたしは火事で記憶をなくしたのではなく、それすらもオハシラサマが——

オハシラサマ

「違うわ、桂ちゃん。わたしじゃないわ」

桂

「じゃあ、誰が!？」

オハシラサマはゆっくりと首を振った。

……………

……誰でもない？

桂

「でもっ、それならなんで!？」

サクヤ

「桂!」

サクヤさんに肩をつかまれて、わたしは言葉を飲み込んだ。

サクヤ

「思い出そうとすると痛むんだろう。それはすっかり思い出したら、もう痛まなくなるものなのかい」

桂

「……えっ？」

サクヤ

「仮にその痛みがずっと続くとしたら、あんたはそれに耐えられるのかい」
そんな自信、あるはずがない。

サクヤ

「事故から目覚めたその後にもね、頭が痛いって言うては泣いてばかりいたものさ」

桂

「わたしが？」

サクヤ

「あんたが」

サクヤ

「桂、あんた自身がそうしたんだよ。思い出そうとすると痛むんだから、思い出そうとしなければいいってね」

サクヤ

「少なくともこの十年程は、それで上手くやってきたんだ」

桂

「だけどわたしがこっちに來ちゃったから……」

お屋敷だけならいざ知らず、柱の傷のような思い出のよすがに触れてしまったら――

桂

「……そういうことなんだ」

サクヤ

「とりあえず今日は休むことだね。今のあんたはいっぱいいっぱいだ」
挙げ句の果てに、赤い蛇になんて襲われるし。しかもめちゃくちゃ大きかったし。

安全になってすっかり緊張が解けた途端、ふくらはぎがズキズキしてきた。
痛いというより熱いというか、それでいて心臓がどきどき脈打つたびに、やっぱり何だか痛いかも。

桂

「あああ、あのね、わたしってばね」

サクヤ

「どうしたんだい、桂」

桂

「最初に逃げようとして、あの蛇にぶつかれてね——」
正座の崩れたような女の子座りから腰を浮かせて、膝の角度浅めの体育座りに姿勢をかえる。

危険が去るまでは無視——と自分に言い聞かせていた成果があったのか、一度たりとも視線を向けなかった、自分の足を覗き込む。

桂

「……うわっ」

ちょっとした模様のようにも見えないけど、浴衣の裾には、ぽつぽつ赤い斑点が散っていた。

さあっと血の気が引く気配がして、ただでさえ暗い部屋の様子が、もう一段階暗くなる。

日本によくいる蛇っていえば、青大将と——ううん、全然青くなんてなかったから青大将じゃないだろうし、だったらマムシ？

蛇の種類なんて見てわかるほど詳しくないけど、そういえば赤マムシとか良く聞くし、マムシの色は赤いのかも。

桂

「っていうか、マムシって毒があるんじゃないかってけ——！？」

サクヤ

「……毒？」

ふらっと後ろに倒れそうになり、両手を突いて身体を支えた。
サクヤさんとオハシラサマが、しゃがんでわたしの脚を見る。

オハシラサマ

「桂ちゃん、咬まれていたのね」

サクヤ

「どれ」

サクヤさんの手が伸びてきて、浴衣の裾を膝上までまくり上げて脇にどけた。

かなり無遠慮に、がばっと。

反射的に太股の半ばあたりを両手で押さえ、座り方を元に戻して脚を引っ込めようとする。

桂

「わ、ちょっと、サクヤさん」

サクヤ

「じたばたするんじゃないよ。いいからお見せ」

ぐいっと足首を引っ張られて観念する。

桂

「ううっ、確かサクヤさんって、蛇とかにもくわしかったよね？」

サクヤ

「こんなご時世でも、山歩きしてたら蛇にぐらいぶつかるもんだしねえ」

桂

「あんなに大きい蛇だから、やっぱり毒も強いんだよね。わたしこのまま死んじゃうのかな？」

オハシラサマ

「……………」

サクヤ

「なあ……手当てした方がいいと思うかい？」

オハシラサマ

「そうですね……ですが……おいた方が……」

サクヤさんがオハシラサマに相談していた。

そんな、手当てしない方がいいかもしれないかと思うってことは、やっぱり手遅れってことなのかもしれないけど……

サクヤ

「じゃあ、桂。気休めかもしれないけど、あたしが吸い出してあげるよ」

桂

「え？ 吸い出すって？」

サクヤ

「知らないのかい？ 傷口に直接口をつけて、毒を血と一緒に吸い出すんだよ」

タコみたいに尖らせた唇を指差して、ちゅっと投げキッス。

こっちは生きるか死ぬかの瀬戸際なのに、すっかりサクヤさんはいつものサクヤさんだった。

桂

「……それは知ってるけど、ほら、足だし」

サクヤ

「咬まれる場所なんて大概そんなところだよ。うかつに手を出す奴もいるから、そっちも多いんだけどねえ」

桂

「そうだよ。蛇は地面をによろによろ這ってるわけだから、咬まれるとしたら足だよね……」

サクヤ

「そういうことさ。ほらほら遠慮しなさんな。あたしと桂の仲じゃないか」

サクヤ

「ここらで一回経験しとけば、何かに役立つかもしれないよ？」

桂

「ううっ、蛇に咬まれた誰かを助けるなんて状況には、そうそうめぐり合わないと思う……」

サクヤ

「ちなみに虫歯があるなら、機会があってもするんじゃないよ。そこから毒が回るからね」

ニッと虫歯とは縁遠そうな歯を見せた。

別に楽しくて笑ってるわけじゃないと思う。

たぶん。

ううっ、どうしよう、どうしよう——

どうしようっていても、どうしようもないわけで、背に腹はかえられないわけで。

桂

「お願いします……」

サクヤ

「ああ、あたしに任せときな」

サクヤさんがひざまずいて、わたしの足に顔を寄せた。

傷よりも上、太股を両手で握るようにして、血を絞りだす。

サクヤ

「んっ……」

桂

「うひゃっ」

唇が肌に触れると、何とも言えないむず痒さが、お尻の方からもぞもぞ這い上がってきた。

自分でも指先をケガしたときなんかは、ちゅうちゅう吸ったりするけれど——

あれだ。自分でくすぐっても平気なのに、人にされるとくすぐったくて仕方がないといったあの感覚によく似ている。

桂

「あのっ、サクヤさん？」

サクヤ

「ぶはっ——なんだい、桂？」

桂

「そのね、もう少し強く吸ってこないかな？」

サクヤ

「強くすると痕がつくよ？」

桂

「でも、もう咬まれた痕があるわけでしょ？ それに靴下で隠れると思うし」

ふくらはぎまで隠れるような、丈の長いスカートは持ってきていないけど、靴下はだいたいハイソックスだし。

桂

「あと、そっとやられるとくすぐったいし、それなら、ちょっと痛いぐらいの方が……」

サクヤ

「そうだねえ……」

無意識なのか、ふにふにと太股の肉をもんだりしながら、サクヤさんはしばし沈黙。

そしておもむろに顔を引いたかと思えば、

桂

「——たっ!？」

何が起こったのかと思った。

傷のあるふくらはぎに、じんじんとした痺れるような痛みがあった。

サクヤ

「んー、こんなもんかねえ」

上に乗っていた平手を手首の返しで動かして、ふくらはぎをぴたぴた叩きながら言う。

サクヤ

「知り合いの小児科医が言ってたっけねえ。こうやって先に叩いとけば、感覚が麻痺して注射なんかでも泣かれなくてさ」

確かに、あまり叩かれている感じがしない。

サクヤ

「もっともそいつは、強く叩き過ぎて注射の前に泣かれちゃうんだけどさ」

桂

「あはは、それって意味ないよ」

サクヤ

「まあねえ、そうだねえ……」

サクヤさんは頭を下げ、再び傷口に吸い付いてきた。

桂

「あ……あんまりくすぐったくないかも」

サクヤ

「んんっ……だろ？」

サクヤ

「まあ、こんなもんかね」

桂

「もう大丈夫？ お医者さんに見てもらわなくても大丈夫かな？」

サクヤ

「大丈夫、大丈夫。あれは本物じゃないからね。根性があれば毒なんて効かないさ」

桂

「……え？」

サクヤ

「病は気からっていうだろ。これも受け売りだけどね、らしい治療のフリだけしとけば、

原因不明の腹痛は治っちまうもんなんだってさ」

……あれ？

そういえばサクヤさん、吸った毒を吐き出してなかったかも。

サクヤ

「真っ青になって『毒が一』とか言うからさ。あんた思い込み激しい方だから、とりあえず安心させようと思ってねえ」

桂

「ううっ……」

そりゃあ口で説明されても「はい、そうですか」とはいかなかったかもしれないけど、かなり気恥ずかしかったりしたのに……

サクヤ

「悪い、悪い。すまなかったねえ」

桂

「知らないっ！」

サクヤ

「ははっ……でもまあ、この借りは後で返せると思うよ」

オハシラサマ

「桂ちゃん、サクヤさんはあなたのことを思ってくれているわ」

そっと肩に触れたオハシラサマの手の優しさが、かんしゃく虫を宥めてくれた。

オハシラサマ

「困ったことをすることがあっても、それはあなたが可愛くてしかたがないから」

桂

「嬉しいような、悲しいような……」

陽子ちゃんにも良くからかわれるし、お母さんだってそうだったけど。

納得しつつもどんよりうなだれるわたしから、サクヤさんへと向き直って言う。

やっぱりサクヤさん、楽しんでいるようにしか見えないし。

ちらりとオハシラサマの方に目を向ける。

オハシラサマは困った人を見るような目で、サクヤさんの方を見ていた。

桂

「……遠慮します」

サクヤ

「おやおや、毒が回ってもいいのかい？」

桂

「サクヤさんがニヤニヤしてるから、わたしまでピンチって感じがなくなっちゃったよ」

桂

「それに、オハシラサマ落ち着いてるし……」

わざわざ助けに来てくれたぐらいだし、本当に危ないんだったら、積極的に勧めてくれたりすると思う。

サクヤ

「あらら、駄目じゃないか。もう少しこっちに合わせてくれないと」

オハシラサマ

「ごめんなさい」

……神様、謝っちゃうんですか？

そんなふたりのやり取りに引きずられたのか、わたしまで素のまま問い掛けていた。

桂

「ねえ、オハシラサマ。してもらわなくても大丈夫だよね？」

オハシラサマ

「そうね——」

オハシラサマは、わたしの口調の砕けっぷりも全然気にしてないらしい。

ちょっと見られないほど綺麗な人だけど、少し小首を傾けて考え込む仕草は、近所に普通にいるお姉さんといった感だった。

オハシラサマ

「そうしていた方が、あとあと助かることがあるかもしれないけど」

特に問題ないらしい。

桂

「その……毒は？」

オハシラサマ

「あの赤い蛇は、あの子たちの《力》によって創られたまやかしのようなものだから。毒をもっていたとしても消えているはずよ」

桂

「ほっ……それじゃあ一安心」

オハシラサマ

「だけど手当ては必要ね。傷は実際につけられたものだから」

桂

「あ、そうだった」

痺れや悪寒といった毒っぽい感じはないけれど、やっぱり痛いというか熱いというか、やっぱり痛いというか、我慢できないほどじゃないけど。

手のつかい棒に預けていた上半身を乗り出して、剥き出しになった足を見してみる。

桂

「うわ……」

太い注射針を打った後のような刺し傷が二つ、四センチほどの間隔を開けて並んでいた。あまり深くはないらしく、お台所で包丁片手に指をずっぱりやった時のほうが、出血だってひどかったはず。

だいたい『蛇含草』にも出てくるように、蛇は獲物を丸呑みにするものだから、噛み千切られるような深手の心配はしなくてもいい。

とにかく、毒の心配をしなくてもいいのなら、普通に絆創膏を貼っておけば大丈夫だと思う。

桂

「えーと、絆創膏、絆創膏……」

救急セットを取り出そうと腰を浮かせたわたしの肩を、オハシラサマがそっと押さえた。どうしたんだろうと、問いかけの気持ちを含めた視線で見つめる。

オハシラサマ

「……これなら今のわたしでも大丈夫。傷も残さず綺麗に消せるわ」

桂

「本当？」

オハシラサマ

「ええ、任せて」

そう頷いて手を差し伸べると、蝶のうちの一頭が、そのてのひらに舞い降りた。

蝶はくたっとひしゃげると、柔らかな光とともに一對の花びらに姿を変える。

オハシラサマ

「少しだけ我慢してね」

花びらに劣らず白い指先で摘み上げて、牙の痕の上に重ねる。

じんじんと熱をもった傷口に、ふわりと優しい淡雪のような冷たさ。

淡雪はあっという間に溶けてしまうのだけれど、この花びらは熱のすべてを吸い取ってから、微塵の光となって消えた。

桂

「あ……」

同じことを繰り返すと、蛇に噛まれたということを示す証拠は、血の痕を除きすっかりなくなっていた。

桂

「すごい……本当に神様なんだ……」

オハシラサマ

「神様ではないのよ。この《力》もご神木が本来持っているものを借りただけだから」
オハシラサマは寂しそうに、わたしに向かって微笑んだ。

オハシラサマ

「それではサクヤさん。桂ちゃんのこと、よろしくお願いします」

サクヤ

「いや、こっちこそ助かったよ。あいつらの言う通り、また間に合わないところだった」

サクヤ

「真弓が逝ってしまった以上、こういうことになるかもしれないって、予測できたはずなのにねえ」

自嘲のこもったサクヤさんの言葉に、オハシラサマはゆっくりと首を振った。

オハシラサマ

「今のわたしでは、一緒にいてあげることもできませんから」

桂

「オハシラサマ……行っちゃうの？」

オハシラサマ

「人の形を保つのは大変なの。わたしもあの子たちと同じで、現の身体を持たない存在だから」

その言葉を裏付けるように、放つ燐光が部屋中に広がり、その容積が増したぶんだけ、身体の密度が薄まっていく。

オハシラサマ

「桂ちゃん。ほんの少しだけれど、大きくなったあなたと話せて良かったわ」

最後に透明な笑顔を残して、オハシラサマは世界に溶けて消えてしまった。
大海に垂らした一滴の血を探し出す術は、わたしの中には存在しない。

桂

「……行っちゃった」

サクヤ
「そうだね」

桂
「そういえば、サクヤさん」

サクヤ
「なんだい？」

桂
「サクヤさんは、悲鳴が聞こえたから助けにきてくれたんだよね？」

サクヤ
「まあね。あいつと違って普通の五感に頼ってるわけだから、桂が大声出してくれて助かったよ」

桂
「ううん、助かったのはわたしだけ——」
まだちゃんとお礼を言ってなかったと思い出し、崩していた足を戻して頭を下げる。

桂
「ありがとうございます。おかげで助かりました」

サクヤ
「よしなよ、そんな他人行儀な」

桂
「じゃあ……ありがとう」

お母さんにしていたように、普通に笑ってそう言うと、くしゃっと頭を撫でられた。

サクヤ
「いや、どういたしまして」

桂
「だけどその……そんなに大きい声だった？」

サクヤ
「一番鳥が鳴いたぐらいかね」

桂
「葛ちゃん、起こしちゃったかな？」

そっと覗くと、ぐーぐー寝ていた。

桂

「わー、葛ちゃんってば大物だ……」

いやいや、きっと寝ぼけてるんだ。

風が草葉を揺らすさざめきが、人のざわめきに聞こえるなんてよくあること。

よし、寝よう。夢の中ならいくら寝ぼけてても大丈夫だし。

だけどわたしが動き出す前に、赤い蛇が飛び掛かってきた。

桂

「いやーっ!!」

夢のひと

「もう大丈夫よ。わたしだけでは頼りないかもしれないけれど——」

これも彼女がしたことなのか、誰も手をかけていないにもかかわらず、自動ドアでもない障子戸が開いた。

誰もいないわけではなく、低い位置まで視線を落とせば、そこにいるのは尾花ちゃん。

四本の足と尻尾をぴんと伸ばして、真っ白い毛を逆立たせながら、燃える瞳を蛇に向けている。

桂

「尾花ちゃん、危ないよ！」

夢のひと

「大丈夫。桂ちゃん、心配いらないわ」

そんなことを言われても、赤い蛇は成人男性の腕ほども太さがあり、長さもそれに見合った大蛇。

対する尾花ちゃんは、葛ちゃんが肩や頭に寄せられるほどの小さな子狐。

もう少し大きさが近かったなら、ハブと闘うマングースのような活躍を期待できなくもないんだけど、この差の開きではどうにもならなさそう。

桂

「尾花ちゃん、逃げて、逃げて。どうしてもっていうんなら助けを——って、葛ちゃんに危ないことはさせられないし、そうだとサクヤさんなら！」

サクヤさんは国内だけじゃなくて、外国のジャングルなんかにも写真を撮りに行っている。

日本にはいないような大蛇や毒蛇にも会ったことがあるだろうし、対処の仕方も知っているかもしれないし。

普段は人間の言葉がわかるんじゃないかと思えるぐらい賢い反応をする尾花ちゃんなん

だけど、今は身構えたまま部屋に留まっている。

尾花ちゃんが押さえているのは、わたしたちの位置関係的に、ちょうど正三角形をつくる一点。赤い蛇から見れば、わたしや彼女と同じ距離。

悔り難しと見たのか、組し易しと見たのか。

赤い蛇はぐるりと体を巡らせて、尾花ちゃんと睨み合った。

先に動いたのは、赤い蛇だった。

もたげた鎌首を少し後ろに引いたかと思うと、鞭のような鋭さで、先端にある牙を尾花ちゃんに叩き込もうとする。

蛇の頭が畳にぶつかる。

尾花ちゃんの姿はそこにはない。

頭上から音が聞こえたかと思えば、消えたかに見えた尾花ちゃんが蛇を上から押さえ込み、その頭に噛みついていた。

天井がぎしぎしと軋んでいた。

葛ちゃんの頭に登る身軽さに感心したところ、狐は箆笥の上に飛び乗れるほど跳躍力がある動物なのだと教えてもらったけど——

だけど、そんなものじゃなかった。

天井が軋んでいるのは、きっと尾花ちゃんが蹴ったから。

痛みを感じた蛇が、こしゃくな獲物をどうにかしようと、体をよじらせる前に跳んで姿を消す。

今度こそと目を凝らす。

それでも視界を横切ったのは白い線のようなもの。

蛇の頭が叩かれた反動に大きく傾いた。

今度は尾花ちゃんは長居せずに、またふいっとどこかに跳んだ。

部屋の天井や壁を使って、縦横無尽に飛び回り、着実に一撃一撃を積み重ねていく。

桂

「うわぁ……」

下手に動くとわたしが尾花ちゃんにぶつかってしまうかもしれなかった。

今までで一番痛そうな音を最後に、尾花ちゃんは最初の立ち位置に戻った。

尾花ちゃんの素早さに、反撃の暇もなく一方的に攻められていた赤い蛇は、ピントの合っていない写真のようにぼやけて見えて。

桂

「え？　なんで？」

そのままぼやけ具合が大きくなっていったかと思えば、赤い霧となって、空気に溶け込み消えてしまった。

夢のひと

「実際には在り得ざる、実体を持たないまやかしだからよ」

桂

「まやかし……？」

夢のひと

「そう。わたしと同じ、この世の理から外れた存在だから」

言葉を紡ぐ口が閉ざされると同時に、先ほどの赤い蛇と同じく、その人の身体もぼやけた。

桂

「あ……」

そしてわたしが言葉を発するまもなく、消えてしまった。

桂

「……幽霊？」

腰が抜けて、すとその場にしゃがみ込んだ。

安全になってすっかり緊張が解けた途端、咬まれたところがズキズキしてきた。

痛いというより熱いというか、それでいて心臓がどきどき脈打つたびに、やっぱり何だか痛いかも。

その傷口に覆い被さる、浴衣の袖がぐいと引かれた。

見ると、尾花ちゃんがくわえていた。

桂

「あ……」

桂

「尾花ちゃんありがとう。おかげで命拾いしたよ。後でいっぱいお饅頭あげるね」

痛いのを我慢して、笑顔を作って撫でてあげようと手を持ち上げると、開いた袖の中の方にするりと潜り込んできた。

桂

「えっ！？ ちょっと、尾花ちゃん！？」

ふわふわの暖かい毛が肌に触れる感触が、痛みを忘れるほどくすぐったかった。
身体を縮めて、身もだえしたくなるこそばゆさに耐えていると、意外な感触が不意打ちで襲ってきた。

桂

「うひゃっ!？」

浴衣の袖をまくと、赤い蛇に噛まれた傷を、ぺろぺろと舐めてくれている。

桂

「手当てまでしてくれるの？」

親が子供の毛繕いをするような丹念さで、傷口の周りを丹念に舐めまわす。周りに滲んでいた血は、すでに綺麗に舐め取られていた。

こうやって尾花ちゃんに舐められるのは、昨日に続いて二度目なんだけど――

指と違って上膊部は、あまり日常的に触れたり触れられたりする場所じゃないので、何だかこう、ぞくぞくとして落ち着かない。

桂

「あのね、尾花ちゃん、もう大丈夫だと思うから」

左右に動いていた尻尾が止まって、尾花ちゃんがわたしを見上げた。

舐め取る舌の動きが止まると、新しい血が滲んでくるけど、それも珠になるほどではなく、そう間を置かず止まりそうな感じ。

不思議なことに、二つの牙の痕は注射を刺した程度のものでしかなく、痛みもほとんど無くなっていた。

桂

「おかしいなあ、もっと深かったような気がするんだけど……」

ホース程度の太さしかない、普通の蛇ならこの程度ですむとして、日本では動物園ぐらいでしか見かけられないほどの大蛇だったのに。

わたしを見上げる、尾花ちゃんと目が合った。

桂

「尾花ちゃんが治してくれたの？」

白狐はお稲荷様のお使いと言われたりもする。

さっきの動きも只者（只狐？）じゃなかったし、もし神様のお使いなのだしたら、傷ぐらい治すのは朝飯前なのかもしれない。

桂

「ねえ、尾花ちゃん？」

ケンともコンとも鳴いたりはずせず、興味をなくしたかのように、そっぽをむかれた。

桂

「ねえ、尾花ちゃんってば——って、あれ？」
ぺったりお尻の触れた畳が、どすどすどすと振動している。

桂

「……はてな？」

首を傾げる間もなく、床板の踏み鳴らされる音が聞こえたかと思うと、だんつと踏み留まる音がして、開いた障子戸の敷居向こうに誰かの影。

サクヤ

「桂!! どうしたんだい!? さっきの悲鳴は何事だい!？」

桂

「あ、うん、大丈夫、大丈夫」

サクヤ

「……何があったんだい!？」

桂

「そうそう! 目が覚めたら大きい蛇がいてね、悲鳴を上げたら女の人が出てきて、そうしたら尾花ちゃんが来て、蛇をやっつけてくれたのっ!」

サクヤ

「……………」

サクヤさんの顔から真剣な硬さが抜けて、残ったのはわたしをばかにするような呆れ顔。

サクヤ

「はっ……なんだい、寝ぼけてただけかい」
ぼりぼりと頭をかきながら、今来た道を引き返そうと回れ右する。
そりゃあわたしの説明って、荒唐無稽な状況の羅列みたいなものだけど、それにしても「寝ぼけてただけかい」の一言で済まずだなんて。
……カチンときた。

桂

「大変だったんだよっ!？」

サクヤ

「あー、はいはい。あんまり大声だすんじゃないよ。近所迷惑だからね」

桂

「近所なんてないもんっ!!」

サクヤ

「はいはい、そーだね、その通りだね。それだけ状況認識力が働いているなら十分さ。それで、あんたを襲ったっていう蛇は？」

桂

「へ？」

サクヤ

「蛇は？」

桂

「……その、消えちゃったけど……」

サクヤ

「へー、初めて聞いたね。蛇っていうのは消えるものなのかい？」

桂

「ううっ……」

実際に見ているのはわたしと尾花ちゃんだけで、しかも尾花ちゃんには証言能力がないわけで。

信じてほしい、としか言いようがない。

サクヤ

「大方、夢でも見ていたんだろ。ひと眠りして夜が明けたら、忘れているかもしれないよ」

桂

「でも……」

サクヤ

「とりあえず、何をするにも話すにも明日だよ明日。そんじゃ、まあ、おやすみ」

サクヤさんは、あくび交じりにそーいい残して、自分の部屋に帰っていった。

桂

「やっぱり普通は信じてもらえないよねえ、尾花ちゃん……」

撫でようと思って伸ばした手が、空振りした。

桂

「あれ？ 尾花ちゃーん？」

サクヤさんと話している間に、尾花ちゃんは出て行ってしまったようだ。

障子戸の開いた廊下側から、月光の射し込む部屋の中にはわたしひとり。

何事もなかったかのように静まりかえる部屋の中には、わたしひとりしかいなかった。

桂

「……寝よう」

障子戸を閉めて、お布団の上に横たわる。

泥のようなまどろみは、さっき起こったことを反芻（はんすう）する前に訪れた。どこを庇おうとしたのか、とにかく前に伸ばした腕に痛みが走る。

前腕の肘近くから、腕よりも太い生き物がぶら下がっている。

桂

「あっ……あああっ……」

咬まれた。咬みつかれた。

一応は身体が反応した狙い通りということなんだろうけど、咬みつかれたくなんてなかった。

桂

「やだやだやだやだっ！ 離れてよーっ！」

腕をぶんぶん振り回す。振り回しやすいように立ち上がる。立ち上がっても蛇の尻尾はまだ床についている。わたしの背丈よりも長い蛇だった。

桂

「もうっ、嫌だっばっ！」

落語の『蛇含草』にも出てくるように、蛇は獲物を丸含みにするものだから、顎の力はそれほど発達していないのかもしれない。

わたしが自力で振り切ったのか、意外な抵抗に蛇が面倒くさがって諦めたのかは知らないけれど、とにかく口を開いてくれた。

ぼてっと落ちた蛇が体勢を整える前に、慌てて逃げようとする。

桂

「あっ、いけな——」

当たり前だけど、わたしはだいぶん混乱していて、もしかしたら目を瞑っていたのかもしれない。

間違った方向に向かってしまったと気付いたときには、すでに目の前に壁。わたしは追い詰められてしまった。

桂

「——ひっ」

壁に背中をどやしつけられ、しゃっくりみたいな悲鳴を上げた。
わたしは追い詰められてしまった。

追い詰められたわたしを捕らえる、まばたきしない一對の瞳。

不思議な夢を見た。
今朝もまた夢を憶えている。

サクヤ

「どうしたんだい。恋する乙女じゃあるまいし、朝っぱらからぼーっとして」

桂

「え？」

サクヤ

「寝不足かい？」

桂

「あ、うん、そんな感じかな。ちょっと変な夢見ちゃったし」

サクヤ

「夢ねえ……」

夢なんて破綻したばか話か、退屈な粗筋のただ流しばかり。

ましてや人の夢の話ともなると、内容か語り口のどちらかが突出していなければ、聞いていて面白くないのが普通。

サクヤさんは興味なさそうに鮭の切り身にお醤油をたらすと、お箸でほぐしてご飯に乗せた。

桂

「あ、サクヤさんお醤油かけすぎ」

サクヤ

「いいだろ。あたしは塩気の利いてるのが好きなんだよ。鮭ならガチガチの塩漬が一番だね」

桂

「えー、あのお茶漬けにでもしないと辛いやつ？そんなんじゃ血圧上がるよ。長生きできないよ」

サクヤ

「残念ながら、憎まれっ子何とやら、さ。少なくとも、あんたよりは長生きするだろうよ」

そう言って口に運ぶお箸に乗ったご飯の量は、わたしの一口の倍ほどもある健啖ぶり。

よく食べ、よく笑い、しっかり身体も動かしたりしているサクヤさんは、確かにわたしよりも長生きしそうな感じだった。

でも、それを言うならお母さんだって……

桂

「……………」

サクヤ

「……ほら、人のこと見てないで、あんたもさっさとお食べ。せっかくなんだから冷めないうちに」

桂

「うん、そうだね」

わたしは止まっていたお箸を動かす。

桂

「はむっ……」

相変わらず、白いご飯が美味しかった。かみしめるたびに、絶妙な甘さが滲み出てくる。

その甘さと鮭の塩味とのハーモニーが堪らないわけで、お腹さえ許せば何膳だって食べられそうだった。

サクヤ

「女将さん、ご飯おかわりできますか？」

本当に何膳でも食べそうな人が、隣に座っていた。

女将

「はいはい、どうぞ。あら、おかずの方もいかがですか？」

サクヤ

「勧めて下さるのでしたら遠慮なく。ですけど、いいんですか？」

女将

「どうぞ、どうぞ。朝食はとられないという方がいらっしゃったので、少し余らせているんですよ」

桂

「そういえば、烏月さんがまだ来てないね」

女将

「あら、千羽さんとはお知り合いでした？」

桂

「えっと、はい、一応、わたしじゃなくてサクヤさんが……」

女将

「あら、それじゃあ浅間さんは、千羽さんを取材なさったことが？」

サクヤ

「いえ、そういった仕事とは別件で」

女将

「そうですね。千羽さんもまだお若いのに家業をお継ぎになっていて、今日も朝早くからお仕事だなんて立派なものですから、つい……」

サクヤ

「あいつの仕事のどこが立派なんだか」

女将

「……はい？」

ぼそりと吐き捨てられたサクヤさんの悪口を聞き逃したのか、女将さんが訊ね返した。

桂

「あはは、何でもないんです。烏月さん、お仕事なんですか」

人のいい女将さんに愛想笑いをする一方で、隣に座っているサクヤさんを、肘で突っつきながらたしなめる。

桂

「もうっ、いくら仲が悪いからって、そんなこと言っちゃ駄目だよ」

サクヤ

「へいへい」

桂

「うわー、すごい生返事……」

サクヤ

「まあなんだい。お陰で余計にありつけるおまんまの分程度なら、存在価値を認めてやるのもやぶさかじゃないんだけどねえ」

桂

「あのねー」

ふたりの間に一体どんな因縁があるのか、「何でこんなに仲が悪いのかなー」と思っているときだった。

アナウンサー

『次のニュースです。本日未明、経観塚村で男性の変死体が発見されました』

桂

「えっ!？」

爽やかな朝食時には似つかわしくない、陰惨な事件を読み上げるニュースの声の中から知った地名を拾い上げ、わたしたちはテレビに注目した。

アナウンサー

『発見された男性は、地元の中学校で歴史を教えている男性教諭・鹿之川智林さん三十歳』

アナウンサー

『鹿之川さんは先日より帰宅しておらず、家族の方は安否を気遣っていたところ、思いがけない訃報となった様子です』

アナウンサー

『体内に血液が残されていなかったことから、死因は出血死とみられています』

アナウンサー

『なお遺体が発見された現場付近に血痕がなかったことから、鹿之川さんが殺害されたのは別の場所とみられており——』

女将

「こんな田舎まで、最近は何事なのねえ」

桂

「そうですね。昨日は泥棒なんてありましたし」

女将

「泥棒ぐらいなら良かったんだけど、嫌ねえ。血が一滴も残ってないなんて、吸血鬼に襲われたみたいで怖いわねえ」

桂

「えっ、吸血鬼!？」

女将

「夏だし、つついそうといった方面を想像してしまうわね。でも吸血鬼っていうのは、あまり日本の怪談らしくなかったかしら……」

吸血鬼——血を吸う鬼——

桂

「も……もらうって、何を……？」

ノゾミ

「あなたの、血」

ミカゲ

「特別な血」

女将

「……羽藤さん？」

サクヤ

「桂？ ちょっとあんた、どうしたんだい？」

桂

「え……？」

サクヤ

「あんた、顔色悪いよ？」

桂

「あ……その……」

サクヤさんに肩を揺さぶられ、記憶の海の冷たい領域に沈み込んでいた意識が戻ってくる。

その隣では、話題を振った女将さんが着物の裾を握り締めていた。

女将

「ごめんなさいね。こんな朝から余計なことばかり言って、気分を悪くさせてしまったかしら」

桂

「いえ、別にそんなこと……」

サクヤ

「そうですよ。この子、朝にはあまり強い方じゃないだけで。それより女将さん、私のおかわりの方をお願いできますか」

女将

「あ、はい、そうでした。すぐにお持ちしますね」

女将

「羽藤さん、変な話をしてしまって、本当にごめんなさいね」

桂

「いえ……」

女将さんが離れるのを見届けてから、サクヤさんはわたしに小声で耳打ちした。

サクヤ

「それで桂、一体どうしたんだい？」

桂

「どうしたって、何が？」

サクヤ

「あんたニュース自体じゃ平気そうだったのに、吸血鬼なんてレトロな言葉を聞いた途端に、気分が悪くなったみたいじゃないか」

桂

「昨日の夜にね、変な夢を見て目が覚めたら、わたしの部屋に吸血鬼が出たの」

サクヤ

「……吸血鬼？」

桂

「あ……吸血鬼っていう言い方は良くないかも」

サクヤ

「どうしてだい？」

桂

「わたしたちだって、それほど一般的じゃないけど血を飲んだりするわけでしょ？ スッポンだとかフランス料理の……」

桂

「食べたことないけど、何かあったよね？」

サクヤ

「血の滴る鳩のローストとか、血と赤ワインのソースとかかい？ ああ、取材で大陸に行ったとき、蛇の生き血を絞るショーとかもやってたねえ」

桂

「でしょ？ だから血を飲むからって、別に怖いお化けとは限らないわけで……」

人ではない存在が効率よく《力》を得る方法が、血を飲む事だというただそれだけの話。だから人ではない存在という括りだけで、吸血鬼なんて十把一絡げな呼び方はしたくない。

そんなことをしたら、あの人までおどろおどろしい存在になってしまうから。

サクヤ

「それで？」

桂

「ノゾミちゃんとミカゲちゃんっていうんだけど、着物を着た双子の女の子のお化けがね、わたしの血が欲しいって夜中に来たの」

桂

「わたしの家——羽藤の家系に流れているのは、贄の血っていう特別な血なんだって」

サクヤ

「……それで？」

桂

「襲われて、もう駄目だっていうときに、ユメイさんが助けてくれたの」

サクヤ

「……ユメイだって？ そう名乗ったのかい？」

桂

「うん。いい匂いがして、優しい目と手と声をしていて、わたしのことを『桂ちゃん』って呼んでくれる、ちょっとだけお母さんみたいな人」

サクヤ

「……………」

桂

「……サクヤさん？」

サクヤ

「ああ、別に何でもないよ」

何でもないというわりには、その表情はすごく硬い。

桂

「ユメイさんのことについて、何か知ってるの？」

お母さんよりもお祖母ちゃんとの付き合いが先だというサクヤさんだけに、記憶のないわたしなんかよりは、よっぽど家のことを知っていそう。

桂

「知ってたら教えて。ユメイさんって、わたしの何なの？ どうしてあんなに一生懸命、わたしの事を守ってくれるの？」

サクヤ

「羽藤の家の守り神だからだろうね。そいつは昨日の女将の話にも出てた、オハシラサマだよ」

桂

「……それだけ？」

サクヤ

「それだけさ」

その話はここで打ち切りだとばかりに、サクヤさんは大仰に頭を振った。

サクヤ

「それより桂。あんた、羽様の屋敷は昨日のうちに見たって言ったね」

桂

「うん」

サクヤ

「じゃあ、もうこんな田舎にいる用事はないだろう。用が済んだんなら、さっさと帰りな」

桂

「えっと……帰れ？」

サクヤ

「さっきのニュースで言ってた通り、物騒な事件があって、まだその犯人は見つかっちゃいない」

桂

「だから、それはノゾミちゃんたちが——」

サクヤ

「相手がそういった類ならなおさらに」

サクヤ

「あんたが狙われているんだろう？ そのくせ身を守る術を持っていないんだろう？ それなら逃げるのは当然じゃないか」

桂

「それは……でも……」

サクヤ

「いいかい、こっちに來た途端に狙われるようになったんなら、向こうに戻れば狙われなくなる。そいつらが追ってこない限りね」

サクヤ

「足手纏いのあんたがこっちにすることで、オハシラサマにも余計な苦勞がかかるんだ。あんたは帰るべきなんだよ。違うかい？」

桂

「確かにわたしは役立たずだけど……」

桂

「だけど、わたしにだってできることがあるよ。わたしにしかできないことがあるよ？」

サクヤ

「……何をするつもりだい？」

桂

「ユメイさんに、血をあげるの」

桂

「わたし自身は弱いけど、わたしが血をあげれば、ユメイさんの《力》は強くなるから」

サクヤ

「あんたが命をすり減らして役に立ったところで、誰かが喜ぶだなんて思ってるのかい？」

サクヤ

「あんたを可愛がっていた笑子さんは？ あんたを女手ひとつで育てた真弓は？ そして——」

サクヤ

「あんたが血をやろうとしてる、当の本人は？」

最初に会ったときにすべてを忘れろと言った、ユメイさんの瞳と声が脳裏をよぎった。けど、でも……

桂

「お祖母ちゃんのことは、わたしぜんぜん覚えてないんだけどね」

桂

「お母さんだったら、できることがあるのに逃げるような子にはなって欲しくないって思ってるよ。だから死んじゃっても、きっと許してくれるよ」

桂

「それにユメイさんは……」

ユメイさんの望みは、わたしが他の土地でのうのうと生きて、歳を重ねて朽ちていくことだったのかもしれない。

でもね、ユメイさん。

桂

「ユメイさんの方こそ、《力》を削ってわたしのこと助けようとしてるんだよ？ そんな一方的に助けられてわたしが喜ぶと思う？」

サクヤ

「桂……」

桂

「わたし、自分が間違ってるって思わないから退かないよ？ 頑固だよ？ こういうところ、お母さん譲りだよ？」

わたしとサクヤさんは、そのまましばらく視線をぶつけ合った。

真剣なサクヤさんの目は怖い。

ただどこで目をそらしたら負けだと思った。この先にあるだろう怖いことには耐えられないと思った。

だからわたしは目をそらさずに、震えそうになる唇の両端にぐっと力をいれて、サクヤさんが諦めるまで待った。

サクヤ

「……ふんっ、どうなっても知らないよ！」

サクヤさんは、お膳の残りをガツガツと平らげると、足音も荒く広間から出て行った。

女将

「羽藤さん、浅間さんは？」

桂

「あ、もうご馳走様って……」

女将

「あら、困ったわねえ……」

女将さんはサクヤさんに頼まれていたお代わりを持ってきていた。

女将

「羽藤さん、お召し上がりになります？」

桂

「……いえ」

さすがに朝からはそんなに食べられないです。

戻り掛けにサクヤさんの部屋を訪ねてみたけど、すでに出かけた後だった。

本気で別行動をとるつもりだということは、駐車場の車がなくなっていることから、十二分にうかがえた。

……望むところだ。わたしはわたしでやってやろうじゃないか。

とはいえ、何をすればいいんだろう？

昨夜のようにユメイさんが来てくれるのを待つのであれば、昼間は何もすることがない。

ユメイさんのように現の体を持たない存在は、昼の間に出てくることは相当な《力》を消耗すると言っていた。

ノゾミちゃんとミカゲちゃんもきっとそうだから、昼の間ならわたしは安全。動くなら昼の内なんだけれど……

……色々と考えた結果、わたしはオハシラサマのご神木まで行ってみる気になった。

すでに一度行ってるわけだから、わたしの足で行けないはずがないし、そこでならユメイさんとも連絡がつくかもしれないし。

わたしは必要になりそうなものを小型のリュックに詰め込むと、それを背負って駅前のバス停へ向かった。

そうそう、途中でコンビニに寄って、非常食とか飲み物の確保をしていかないと。

桂

「ううん、何でもない」

いくらサクヤさんとはいえ、こんなことは信じてもらえないと思う。

サクヤさんのように写真を撮る人は、フィルムに捉えられない存在は（心霊写真とかあるにはあるけど）基本的に信じないんじゃないだろうか。

そしてわたしはあの人を——ユメイさんの存在を誰にも否定して欲しくはなかった。

わたしの髪を梳いてくれた、あの優しい手と声の持ち主を、わたしの夢が生んだ空想の人物だとは思いたくなかった。

桂

「本当に、何でもないよ」

だからわたしは、いつものわたしを取り繕って笑った。

サクヤ

「そうかい？」

桂

「うん、大丈夫。ごはんだってちゃんと食べられるよ」

サクヤ

「そうかい。ならいいか」

桂

「うん」

サクヤ

「……………」

桂

「……………」

サクヤ

「……そうそう、ふと思いついたんだけどね。吸血鬼ってヤツは、たいがい黒尽くめで大蒜嫌いだったりするだろう？」

桂

「まあ、映画なんかだとそうだよな」

サクヤ

「実は烏月の奴も、大蒜とか葱とか蕈を食わないんだよな」

桂

「……は？」

サクヤ

「この事件にはあいつも深く関わってるに違いないんだから、下手に近づくんじゃないよ。あいつは人の生き血を啜る鬼だからねえ」

桂

「はいはい、烏月さんのことはいいから」

桂

「うん、ちょっと昨日の夜にね……」

あの体験は、夢か現か。

あれが夢ではないのなら、ニュースの内容についても半ば予告されていたこと。

ミカゲ

「《力》を蓄えましょう。私たちも弱ってるから」

ノゾミ

「……そうね……別に特別じゃなくても、それなりには精がつくものね」

ニュースにとりあげられた被害者は、彼女たちに全身の血を吸い尽くされてしまったんだろうか。

夢だということにしてしまえば、むしろ簡単。

単なる偶然の一致か、テレパシーみたいなもので察知した実際に起こっている事件を、夢の形で認識したとか——

同じオカルトまがいの現象でも、まだこういう解釈の方が、吸血鬼に襲われたところを人ではない存在に助けられたというよりは納得できそう。

だけど、わたしは、昨夜のことを。

普通の人なら、十人のうち十人ともが、単なる夢だと決め付けてしまいそうな、常識からは逸脱した出来事なんだけれど。

サクヤ

「昨日の夜に何かあったのかい？」

桂

「ううん、何でもない」

いくらサクヤさんとはいえ、こんなことは信じてもらえないと思う。

サクヤさんのように写真を撮る人は、フィルムに捉えられない存在は（心霊写真とかあるにはあるけど）基本的に信じないんじゃないだろうか。

そしてわたしはあの人を——ユメイさんの存在を誰にも否定して欲しくはなかった。

わたしのことを護ってくれた、あの優しい手と声の持ち主を、わたしの夢が生んだ空想の人物だとは思いたくなかった。

桂

「本当に、何でもないよ」

だからわたしは、いつものわたしを取り繕って笑った。

サクヤ

「そうかい？」

桂

「うん、大丈夫。ごはんだってちゃんと食べられるよ」

サクヤ

「そうかい。ならいいか」

桂

「うん」

サクヤ

「……………」

桂

「……………」

サクヤ

「……そうそう、ふと思いついたんだけどね。吸血鬼ってヤツは、たいがい黒尽くめで大蒜嫌いだったりするだろう？」

桂

「まあ、映画なんかだとそうだよな」

サクヤ

「実は烏月の奴も、大蒜とか葱とか蕈を食わないんだよな」

桂

「……は？」

サクヤ

「この事件にはあいつも深く関わってるに違いないんだから、下手に近づくんじゃないよ。あいつは人の生き血を啜る鬼だからねえ」

桂

「はいはい、烏月さんのことはいいから」

サクヤ

「……で、なんで桂まで乗ってるんだい？」

ついでの仕事で山の写真を撮りに行くというサクヤさんの車に同乗して、わたしは羽様のお屋敷に向かっていた。

桂

「もうちょっと家の中とかよく見ておこうかなって。今日は使い捨てのカメラも買ったし」

サクヤ

「そうかい。じゃあ、車は屋敷の方に止めるから、あんたはあたしが帰るまでは、大人しく屋敷の中にでもいるんだよ」

桂

「バスとか使って勝手に帰るときは、ちゃんと携帯で連絡——って、あれ？ サクヤさんわたしの番号知らないんだっけ？」

サクヤ

「知ってたらあんな回りくどい手を使ったりはしなかったよ」

桂

「そうだね。普通は電話帳で陽子ちゃんの家電話番号探してかけたりしないよね」

サクヤ

「だけど自宅に電話あるんだから、携帯の番号を知ってるのは友達ぐらいじゃないのかい？」

桂

「そうだけど、最近お世話になってる税理士さんとかは知ってたのに。ほら、サクヤさんが紹介してくれた人」

サクヤ

「あ……」

桂

「意外と抜けてるんだ」

サクヤ

「うるさいね。とりあえず、あんたの番号入れといて」
ダッシュボードから取り出した携帯を、わたしに向かってぽいと投げた。
……ところで。
わたしもあの家で大人しくしてるつもりなんて、ぜんぜんなかったりする。
わたしの今日の目的は、オハシラサマのご神木に行くことだった。

サクヤ

「……で、なんで桂まで乗ってるんだい？」

桂

「まだ見てないもん、お父さんの実家」
写真を撮りに山へ行くというサクヤさんの車に同乗して、わたしは羽様のお屋敷に向かっていた。

サクヤ

「……だったね。ご神木まで行っておきながら、あんたは何をやってるんだか」

桂

「だって……でも、行っておきながらって？」

サクヤ

「あんたの頭には羽様って地名は入っていないのかい？ あの山の入り口になってる鎮守の森の奥に、羽様の屋敷があるんだよ」

桂

「……はい？」

サクヤ

「山に登る前にでも後にでも、少し歩くだけで立ち寄れたはずなのにねえ」

桂

「あはは……まあ、その、色々とありまして」

だって昨日の朝は、鳥月さんと共通の話題が出来ると思って、浮かれて出発したんだもん。

鳥月さんのこと嫌ってるみたいだから、口に出しては言えないけど。

サクヤ

「そうかい。じゃあ、車は屋敷の方に止めるから、あんたはあたしが帰るまでは、大人しく屋敷の中にでもいるんだよ」

……とか何とか言われたけれど。

わたしもあの家で大人しくしてるつもりなんて、ぜんぜんなかったりする。

わたしの今日の目的は、オハシラサマのご神木に行くことだった。

陽子

「……で、役立たずのはとちゃんは追い返されてしまいましたとさ」

桂

「ううっ、わたし役立たずだよ……」

陽子

「まあ、はとちゃんいても賑やかしの驚き役が増えるだけだしねえ」

陽子

「エンターテインメントだったら、何も知らない視聴者視点の素人が欠かせないところだけど、実際の真剣勝負の場では、邪魔でウザイだけだし」

桂

「ウザイはひどいよ……」

落ち込んだ友達相手に、ここまで言いたい放題言ってくれるだなんて、さすが陽子ちゃん。

桂

「……ねえ、陽子ちゃん？」

陽子

「ふむぐん？」

口に入り切っていない、かぶりついたバーガーのバンズを指で押し込めながら、返事をする。

桂

「陽子ちゃんなら、どうしてた？」

陽子

「んぐっ……あたし？」

桂

「うん。陽子ちゃんぐらいバイタリティあったら、わたしもどうにかできたのかなーって」

陽子

「そんなの無理、無理。あたしがお化け相手に唱えられるのって、この程度のものよ？」

桂

「この程度って、どの程度？」

陽子

「ラーメンソーメンミソラーメン、焼きソバの皿はナンマイダー」

怪しげな身振りをあわせて、ものすごくいいかげんな経文らしきものを口ずさむ陽子ちゃん。

もしここが中華料理屋さんだったなら、最後にお箸でどんぶりの縁を叩いていただろう。きっと。

桂

「わ、すごくご利益なさそう」

陽子

「そーゆーこと。所詮我々のような庶民は、人間相手に人生を闘っていくしかないってこと。お化けの相手まではやってられませんって」

桂

「じゃあ、お化けの相手は誰がするの？」

陽子

「そりゃあ、誰かでしょ？」

桂

「誰かって？」

陽子

「誰か。少なくともあたしじゃないわね」

桂

「わ、いいかげんだ……」

陽子

「そう考えといた方が、こーゆー時に切り替えが楽よ？」

桂

「ううっ……でもわたしの場合、何だか家の関係もあったみたいだし、一概に他人事じゃなかったみたいなんだよね……」

陽子

「あーっ、だーっ、もうっ！ そんなうじうじうじうじうじとっ！」

陽子

「そーゆー時はヤケ食いが一番の特効薬よん。ほらほら、食べた食べたー」

桂

「ううっ……」

わたしは勧められるがままに、二百四十円で山盛り入っている、コストパフォーマンスなら一番のフィッシュアンドチップスを頬張った。

桂

「ううっ……油っばいし、もそもそしてるよ……経観塚のごはんは美味しかったなあ……」

陽子

「はとちゃんねー。いくらなんでもファーストフードと温泉旅館の食事を比べるのって、鼠と猫をケンカさせようってなもんよ」

桂

「ううっ、窮鼠猫を噛んだりはしない？」

陽子

「ちょとかじった程度じゃ、決定打には成り得ないわね。せいぜいデザートの種類がちよっとだけ充実してるとか、その程度じゃない？」

桂

「そっかあ……」

陽子

「ほらほら、せっかくおごってあげてるんだから、文句を言う前に食べた、食べた」

桂

「ううっ、わたし食べるよー、思いっきり食べるよー」

陽子

「そうそう。人間ちゃんと食べてちゃんと眠れるうちは、何があっても生きていけるってもんよ。はとちゃん、ふあいとー！」

桂

「お〜〜〜」

陽子

「そーゆー時はヤケ食いが一番の特効薬よん。ほらほら、食べた食べたー」

桂

「わたしレバーは苦手」

陽子

「コラ」

陽子

「ほらほら、せっかくおごってあげてるんだから、文句を言う前に食べた、食べた」

桂

「ううっ、わたし食べるよー、思いっきり食べるよー」

陽子

「そうそう。人間ちゃんと食べてちゃんと眠れるうちは、何があっても生きていけるって
もんよ。はとちゃん、ふあいとー！」

桂

「お〜〜〜」

しばらくして、元の生活に慣れたころに、サクヤさんから電話があった。

サクヤ

『あ、桂？ 無事に生きてるかい？ そっちで変なのに襲われたりはしてないかい？』

桂

「大丈夫だけど……わたし、襲われるの？」

サクヤ

『いや、今大丈夫なら当分は大丈夫だろうさ』

サクヤ

『ところで、こっちの一件はすっかり片付いたよ』

桂

「本当！？ じゃあ、わたしがそっちに行っても大丈夫！？」

サクヤ

『オハシラサマには会えないだろうけどね』

桂

「え！？ 会えないってどうして!？」

サクヤ

『《力》を蓄えるために寝てるからさ。元々、あんたがこっちに来るまでだって、ずっとそうして寝てたんだよ。つまりすべてが元の鞘』

桂

「そっか……」

サクヤ

『近いうちに顔を出すよ——って、痛っ』

桂

「サクヤさん、ケガしてるの？ 大丈夫？」

サクヤ

『ああ、平気、平気。全然大したことないよ。腕の一本程度なら、ひと月もしないうちに生えてくるさ』

桂

「……生えないよ、普通」

桂

「それにしてもサクヤさん。わたしのこと追い出しておいて、自分は危ないことしてんだ。そんなのってあり？」

サクヤ

『あたしは大人であんたは子供。世の中ってそんなもんだろ？』

サクヤ

『それに仕方ないだろ。あんたは大恩ある笑子さんの孫なんだし、真弓にもあんたの事は頼まれてるし、ユメイだって……』

陽子ちゃんのいう通り、わたしがわたしの生活を続けているうちに「誰か」が問題を解決してくれた。

花びらが舞う。

夏の花が散っていく——

——こうして、わたしの夏は終わった。

頭上を厚く覆う葉っぱのお陰で、陽射しは帽子がいらないほどに和らげられている。透き通る緑のフィルターを通した光は爽やかで、木々の香りを含んだ空気は自然ならで

はの清々しさに満ちていた。

とはいえ、爽やかだからといって暑くないわけではなく、むしろ昨日の雨のせいも蒸し暑い。

日が高くなるにつれて気温はぐんぐん上昇し、地面から立ち昇る蒸気のせいで、目の前がゆらいで見えるのではないかというほど。

桂

「ふう……」

暑いと体力の消耗も早くなるので、用意周到といった類の言葉を座右の銘とするわたしとしては、ペース配分もぬかりなくしておきたいところ。

そろそろ小休止する頃合いだと立ち止まり、背負っていたリュックを下ろし、その中から取り出したハンドタオルで汗をぬぐう。

そうそう、脱水症状には要注意だから、休憩ごとの水分補給も忘れずに。電解質も一緒に補給するとさらにグッド。

とりあえずミネラルウォーターのボトルを開けて喉を潤す。ただし飲み過ぎるとすぐに疲れてしまうので、飲み足りないあたりで我慢、我慢。

そのかわりにローカロリーで栄養豊富な「塩こんぶ飴」を口に放り込む。これでナトリウムとカリウムの電解質の補給もばっちり。

ほんのりしょっぱい飴を舐めながら、ハンドタオルとハンカチを交換。

濡らしたハンカチを軽く絞り、額や頬や首筋にぴたぴたとあてて、ささやかな涼をとる。

桂

「あ……風……」

木の葉が一斉にさやさやと音を立て、その音量が増したぶんだけ暑苦しい蝉の声が遠のいた。

ハンカチお絞りでふいた肌に風があたると、そこだけひやっとするのが気持ちいい。

桂

「うーん、何だか微妙な贅沢感」

目を閉じてこもった湿気を飛ばしてくれる風を肌を感じていると、ふと奇妙な違和感を覚えた。

……何だろう？

その違和感の正体は、しばらくして葉風がぴたりと凧いだ後に明らかになった。

桂

「蝉が……」

鳴いていなかった。

いくら深い山の中でも、日中途絶えることなく蝉の声が続くということは、いくらなんでもありえない。間が空くのもいたって普通のこと。

だけど、この間は異常だと思った。

オハシラサマのご神木がある、あの開けた場所でも蝉の声は聞こえなかったけれど、あの心落ち着く静けさとはずいぶんと違う。

まるで山中の生き物が耳をそばだてて、震えることすら忌むように、恐ろしいものから隠れているような静止だった。

もちろん、わたしを怖がったことじゃないだろう。

あまりにも静かなので、脈打つ自分の心臓の音が、やけに大きく思えてきた。

桂

「すう……はあ……すう……はあ……」

大きすぎる呼吸音を抑えようとすると、途端に息苦しさに襲われる。

とても嫌な感じだった。

全身の肌を何となく押してくるような圧迫感が不気味だった。

わたしは可能な限り音を立てないようにして、休憩のために広げていた荷物を片付け、すぐにでも逃げ出せる準備を整える。

こうして息を潜めてから、心臓は何回ほど鳴っただろう。時間ばかりが過ぎていって、一向に埒が明かない。

そこでわたしはひとつの決断をした。

こんな所に留まるよりは、ご神木まで行ってしまった方が安全だと。

ユメイさんと会うことができれば、きっとわたしは大丈夫。彼女の使いの蝶のような花の咲く、あのご神木まで辿り着けば――

そんな考えをしっかりと自分に言い聞かせてから、抜き足差し足で移動を始めることにした。

……何だ、別に何ともないじゃないか。

そう思ったのは、歩き始めてしばらく経ってからのことだった。

それは何となく覚えの強い場所まで辿り着いた、安心感によるものかもしれない。

桂

「ふへえ〜〜」

思いっきり気が抜けた。

その場で座り込みそうになるのを堪えて、お尻をついても大丈夫そうな乾いた場所を、あたりに探す。

それにしても――

周囲に気を配りながら慎重に静かに歩くという行為は、気力と体力を卸し金にかけてすり減らすような、ひたすらに燃費の悪い歩き方だった。

一度座り込んだら、しばらくは立ちたくないと思うぐらいの消耗っぷりだった。

さて、乾いた場所を見つけたのはいいんだけど、座ってしまうべきか、我慢するべきか。

う〜ん……

……………

もう少し我慢することにしよう。

もう少し我慢して登れば、オハシラサマのご神木が聳え立つ、あの開けた場所に辿り着

くはず。

そうしたらご神木の根元に座り込み、疲れた足を投げ出してたつぷりと休もう。

荷物の小型軽量化の都合上、ブロック状の栄養調整食品なのは悲しいけど、お昼ごはんにしよう。

朝ごはんの鮭などすっかりこなれてしまったお腹をさすりながら、わたしは足を先に進める。

靴底が草を踏みしめ、がさがさと音を立てるのももう気にしない。

ただ転んだり捻ったりしないよう、そういった面にだけ注意しながら、汗をふきふき道のない斜面を登る。

もう少し。

もう少しで視界が開ける。

木々の切れ間が見えるのと同時に、ふいに風が鋭く鳴った。

吹き抜ける風の音ではなく、何かが風を切り裂く音だった。

ざんっ、と強く地面を蹴立てる音が続き、わたしはわたし以外の生き物がこの山にいることを、しばらくぶりに思い出した。

思い出すのと同時に認識する。

ぎょっと棒立ちになって周りを見渡すと、強い光に瞳を射貫かれた。

露に濡れた草木による自然な光の反射とは違う、もっと硬くて強い、太陽をそのまま跳ね返したような輝きだった。

真っ白にくらんで閉ざされる視界。

生存本能の賜物か、少しでも多くの情報を得ようと敏感さを増した耳が、人の声を拾い上げた。

少年の声

「くっ、あんな場所で打ってくるなんて……」

少女の声

「深山幽谷は想定済み。むしろそうした地での役目の多い代々の伝承者が、編み上げ、磨き、伝えてきた技だ」

——えっ！？

なるほど、これならうるさい蝉も黙らせられるだろう、緊張感をはらんだ男女一組ふたりの声。

そのどちらにも、聞き覚えがあった。

少女の声

「私とて、本家の血だけで役目に就いたのではない！」

裂帛の気合いに続き、風を薙ぐ音が響く。

何が起きているのだろう。

まぶたを閉じたまま、しばたかせるように目頭に力を入れて、失った視界を早急に取り戻そうとする。

声の方向で、大まかな位置はつかめている。

目を開きそちらの方を見やると、まだ薄ぼんやりとした視界の中に黒い影と白い影を捉えることができた。

ケイ

「さすが明良さんの妹だね」

烏月

「その口でその名を呼ぶな」

凛と張った声を残して、しなやかに黒い女性の影——烏月さんが動いた。

寝かせた太刀を横に構え、低く低く疾駆する制服姿は地を這う影のよう。

そんな姿勢では引きずってしまうのではないかというほど長い黒髪の先端は、身体を追って宙を泳ぎ、地に塗れて汚れる気配はない。

たんっ——

右足が強く地面を踏みつけるのと同時に、丈のある邪魔な草をものともせず、手にした太刀が逆袈裟掛かった角度で横に薙がれる。

その切っ先の先にいる白い影は、昨日この山で会った人。彼女が探していた写真の人。

ケイクン、危な——

あまりに突発的な出来事なので、注意を促す声を出す暇もない。

後ろに跳ぶケイクン。受け止める武器を持たないケイクンは下がるしかない。

刃は紙一重の差で太股の前を走り抜ける。

烏月さんは草を刈るだけに終わった刃を止めずに振り切ると、踏み込んだ足を軸に、その勢いのままに身体をぐるりと回転させる。

烏月

「せいっ！」

左足が跳ね上がりブーツのかかとかケイクンの右の脇腹を襲った。気合いからしてこっちが本命なのかも。

ケイ

「この程度っ！」

ケイくんはそれ以上は下がらずに、むしろ前に踏み込みながら右の肘を落とす。
それは防御のためではなくカウンターを狙った一撃。
ふいに蹴り足の膝が曲げられて、軌道を変えたかかとは宙を薙ぐに止まり、その足首を狙って落とされた肘も空を切る。

瑛

右肘を下げる動きに連動して、ケイくんの左半身が前に出る。そのまま突き進む。肩を鳥月さんにぶつけに行く。

その体当たりで鳥月さんがよろけたなら、腰溜め位置についた右の拳がそこを衝くのだろう。

一回転を終えたものの、まだ蹴り足を地に着けていない鳥月さんの姿勢は不安定。

駄目だ、ぶつかる――

わたしがそう思ったときには既に、鳥月さんは太刀を縦に構えて盾としていた。剣先近くの峰に片手を添えた、垂直過重に強い二点支持。

ケイ

「くっ」

鋭利な刃や尖った先は、通り道に置いておくだけで牽制力を発揮する。

ケイくんは全身のバネを使って急制動。そのまま後ろに飛び退き間合いを離す。

おそらくは牽制なのだろう。ケイくんの身体があった格闘の間合いを銀光が走り抜けた。

桂

「ふう～～～」

一瞬の攻防が終わり、睨み合いになったところで、わたしは大きく安堵の吐息。

うん、これはきっと映画の撮影か何かだろう。

鳥月さんは美人さんだし、ケイくんだって好感を持ちやすそうな容姿をしている。

芸能界の人なら、一応は報道側のサクヤさんと知り合いだったり、また邪魔をしに来たのかとか煙たがったりするのにも納得がいく。

昨日ケイくんがオハシラサマのご神木の所にいたのも、ロケ地の下見に違いない。

だいたい事前に打ち合わせをして、少しは練習しなければ、あんなに綺麗な殺陣にはならない。時代劇で鍛えたわたしの目は確か――かも。

とにかく、大声を上げたり飛び出したりして、撮影を台無しにしなくて良かった。

鳥月

「体術も少しは通じるかと思ったんだが、考えが甘かったようだ」

ケイ

「そうだね。それほど身体に恵まれていないんだから、太刀を使えるときに威力のない足を使うなんて相手を舐めすぎだよ。だから隙ができる」

ケイ

「もっとも、僕を切るつもりがなくなったのなら、ありがたいんだけど……」

鳥月

「そのようなことは断じてない」

ケイ

「……だろうね。君は僕を許さないだろう。僕が僕を許せないように」

鳥月

「私の個人的な感情はどうでもいい。私がお前を切るのは、与えられた役目故のこと」

ケイ

「わかったよ。それならせめて明日の夜——いや。明後日の朝まで待ってくれないか？」

ケイ

「そのときにまだ生きていたなら、大人しくこの首を差し出すよ。その維斗の太刀で刎ねればいい」

鳥月

「……何を企んでいる？」

ケイ

「何も……」

ケイ

「ただ、僕は目的を果たすまでは死ねない。だから今はまだ、大人しく切られもしない」

鳥月

「お前の目的とは何だ？」

ケイ

「大切な人を解き放つこと」

ケイ

「ただそのためだけに、明良さんを僕の運命に巻き込み、鬼に憑かれた度し難い命をつなぎとめてきたんだ」

鬼……？

別にそんなに驚かなくても、チャンバラシーンのある映画なんだから、鬼ぐらい出て当

然——

——ううん、ごまかさないでちゃんと考えるんだ。これは映画の撮影なんかじゃない。撮影だとしたら機材は？ 他のスタッフは？

それに、ユメイさんの他に、鬼切り役とかいう邪魔者がいるってミカゲちゃんが言っていた。

鬼と鬼切り役。

ケイさんと鳥月さん。

……なんだ、ぴったり当てはまるじゃないか。

だけど、だけど、オハシラサマのご神木のすぐ近くにまで、どうして鬼が来ているんだろう。

鳥月

「桂さんっ!？」

桂

「えっ!？」

鳥月さんの放った鋭い声に我に返ると、こちらにケイくんが向かってくるところだった。

どうしてこっちに!？

決まってる。

ケイくんが鬼なら決まってる。

ノゾミ

「隠れないと」

ミカゲ

「逃げないと」

ノゾミ

「鬼に捕まったら、食べられてしまうのよ？」

ノゾミ・ミカゲ

「うふふふふふふ——」

そうだ、そうだ、隠れないと、逃げないと。

ケイ

「くそ、何だってこんな所に桂が——」

回れ右では追いつかれる。だからわたしは横に逃げる。剥き出しの肌をいじめる茂みの

中に飛び込んで逃げる。普通の人なら躊躇するはず。

ケイ

「——駄目だ、そっちは！」
すぐ後ろから聞こえるケイクンの声。

こんなところにまで追ってきた。
やっぱりケイクンは鬼なんだ。

ケイ

「桂！ 待つんだ！ そっちは危ない！」

桂

「危ないのはどっちだ、ばか——っ！」
追いかけてさえこなければ、わたしだって逃げないのに。
丈の高い草の縁が、太股を引っかいて傷だらけにしてくれた。
枝に引っ掛かった髪の毛が、ぶちんとちぎれて泣けてきた。
涙で前が見えなくなるけど、その前から枝に刺さるのが怖くて、だいたいのところ閉じ
っぱなしだったので今更だ。
足が踏んづける地面の感覚だけを頼りに走る。
よく転ばないものだと、ほんの一部だけ残っている冷静なわたしが感心する。

ケイ

「桂！ 止まれ！ 止まるんだ！」

桂

「——えっ！？」

わたしを捕まえようと伸ばしたケイクンの手が、わたしの頭の上を空振りする。
身長差もあったけど、お互い男子と女子の平均ぐらい。こんなに差が出るはずがない。
そんなことより、空振りしたのはケイクンの手だけじゃなくて。
わたしの足が踏んづけるはずの、地面がそっくり消えていて。

視界はいつの間にか開けていて、青空が大きく広がっている。
わたしに触れる葉や枝はなく、足元には地面すらなく、わたしに触れているのは空気
けだった。

桂

「ええっ！？」
お尻から背中にかけて、何とも言い難い感覚が襲ってくるのと同時に、世界が縦に流れ
出す。

ケイ

「桂——っ！」

聞こえる声は、ずいぶんと上の方から。
流れた世界がどンドン縦に伸びていく。
強い風がわたしの髪やスカートをばさばさと痛いぐらいにはためかせる。
今は風速何メートル？
違う。空気は止まっている。
動いているのはわたしの方だ。
わたしはものすごい勢いで移動している。
わたしはものすごい勢いで落下している。
落ちている。
落ちる速さに感覚がついていけない。

音をたててぶつかってくる透明な障害物にはじかれて、わたしの意識はだいぶん上の方に
に取り残されたままだった。

なのに下へ下へと引っ張っていく怖いものが、わたしの心臓をぎゅっと握って放さず、
心と身体をふたつに引き千切ろうとしている。

あ——もう限界だ——

そう思った途端、テレビの電源を落とすのと同じぐらいの容易さで、その瞬間は訪れた。

最期に、悲しそうな声を聞いたような気がした。

高い所から下を見た時の、お尻から背中にかけてのキヤキヤとしたあの感覚が、何倍にも
もなあってわたしの中を這いずり回る。

あ……落ちてるんだ……

落ちているという実感がわいて初めて、わたしが走って逃げた先が、先の続かぬ崖だっ
たという認識に到った。

追いかけていたということもあるけれど、自分の不注意が原因で落ちているのだと
思うと、怖さよりも情けなさがこみ上げてくる。

多分、これは助からない。

せっかくユメイさんが助けてくれた命なのに、わたし自身の至らなさが、これ以上はな
いという無駄な終わらせ方を選んでしまった。

こんなことになるぐらいなら、昨夜の内にわたしの血を、すっかりあげておけば良かつ
た。

桂

「ごめんね、ユメイさん……」

本当かどうかは知らないけれど、飛び降り自殺をする人は、落ちている途中で気を失う
ので、痛みは感じないのだと聞いた。

なのにちっとも気絶する気配がないのは、わたしからわたしへの罰なのだろうか。

それならばと、わたしは最期の景色をきちんと見届けようとした。

その気概に動体視力が追いつかず、世界は縦方向の流線に埋め尽くされていた。

すべてのものが歪んでいた。

いや——

ひらひらと、ひらひらと——

まるで最初の夜の夢のように。暗闇に取り残されたわたしを導く月光蝶のように。

歪んだ世界のただなかに、綺麗な形を保ったものが、ひとひら、ひらひら、舞っていた。

桂

「ちょうちょ……？」

蝶ではなく花びらだった。

オハシラサマのご神木が咲かせる、満開の花のうちのひとひら。

近くまで辿り着いていたはずなので、風の具合によってはひとひらぐらい、ここまで運ばれてきたりもするのだろう。

桂

「ユメイさん……」

せめてものよすがにと、強い力の前に動かすのもやっとの腕を伸ばした。

桂

「わたしが死んで幽霊になったら、一緒にいられるのかな……」

指先が花びらに触れたそのとき。

やっど——やっどつながった——

ユメイさんの意識が流れ込んでくるのと同時に、群れ飛ぶ蝶と舞い散る槐の花びらが、一瞬にしてわたしの頭を真っ白にした。

桂ちゃん——まだ諦めないで——

甘い香りがわたしを包み、ほんの少しの浮遊感。全身を打ち付ける透明な力が弱くなる。

桂

「あれ……どうして……？」

わたしはいまだ落ち続けている。それは身体が感じているけど、先ほどよりは怖いと思わない。

たとえ幻聴であったにしても、ユメイさんの声を聞いたせいだろうか。

いつの間にかつぶっていた目を開くと——

桂

「ふえ……？」

——どちらが現で、どちらが夢かを知る方法などあるのだろうか？

ユメイ

「桂ちゃん、諦めないで。わたしが何とか……何とかしてみせるから」
昼の光がふりそそぐ中、わたしはユメイさんに抱きしめられていた。
落下速度が緩んでいた。

ユメイさんの表情には余裕がない。
青白い光として放たれる《力》が、次々と透明な力に引き千切られて、上へと流れ溶けていく。

桂

「……ユメイさん！？　こんなことしたらユメイさんが……！？」

ユメイ

「大丈夫。大丈夫だから桂ちゃん——」
わたしはさらに引き寄せられ、白い香りが頭の中を満たしてゆく。

ユメイ

「死なないで」

大きなトンカチで叩かれた衝撃で、全身がバラバラに砕けたような気がした。

二度——

三度——

四度——

幾度となく叩きつけられるわたしの身体。
回を重ねる毎にどんどん弱くなっていくけれど、そんなのは気休め。一度目だけで十分
すぎておつりが出るほど。
不思議と痛みを感じないのは、ユメイさんがそうしてくれたからなのか、すでに痛みを
感じられないほどに壊れてしまったからなのか。
どちらにしても、痛いのは嫌だから助かるけど。
力なく横たわっていたわたしの中を、一瞬だけ電流が流れて、身体がビクッと大きく跳
ねた。

桂

「かはっ!!」

ぺしゃんこに押し潰された身体の中身が、出口を求めて喉から口へと殺到した。
その勢いのままに吐き出せるものを吐き出すと、気持ちの悪くなる生臭い鉄の匂いが、
あたり一面に充満した。

桂

「ひゅー」

笛を間違えて吸ったときのような音が出て、わたしの中に空気が入ってくる。わたしは
まだ呼吸している。まだ生きている。

ユメイ

「ちゃん……桂ちゃん……」

途切れ途切れに聞こえてくるユメイさんの声に、わたしはまぶたを震わせながら開く。

目に飛び込んだのは一面の赤。

うつぶせの状態からの視界に入るのは地面ばかりで、地面には真っ赤な血溜まりができていて、血溜まりは太陽を映してキラキラと輝いていた。

映りこむ陽射しは目を焼くほど強いのに、わたしの身体は寒さに凍えた。

ユメイ

「桂ちゃん頑張って。すぐに治してあげるから、生きようって強く思って」

桂

「……ユメイさんこそ……無理しないで……」

冷めていく身体の中で、握られた手だけが温かい。

そんな風に握られている感覚はあるのに、霞んだ目に映るのはハレーションを起こすほどの赤。

ユメイさんの姿は瞳を凝らしても見えない。

桂

「ユメイさん……もう形が……」

ユメイ

「わたしは大丈夫よ。でも桂ちゃんはちっとも大丈夫じゃない」

桂

「でも……」

流れ込んでくる《力》は、途切れ途切れで弱々しくて、夏の終わりの蛍のように、今にも消えてしまいそうな儚さだった。

駄目だ。このままじゃあ共倒れだ。

桂

「ああ、そうだ……」

天啓のようにひらめいた。

桂

「ユメイさん……いいこと、考えたよ」

ユメイ

「……桂ちゃん？」

桂

「ふたりとも、助かる、すごいアイデア……」

運が良ければ、ちゃんとふたりとも助かるかもしれない、そんなアイデア。

桂

「わたしの血って、特別……なんだよね？」

人ではないものに《力》を与える特別な血。

その特別な血が、ここにはこんなに浴びるほど。

桂

「……ねえ、ユメイさん……飲んで？」

ユメイ

「桂ちゃん……」

桂

「身体から出ちゃったら、やっぱり駄目？」

ユメイ

「……ぴちゃ」

子猫がミルクを舐めるみたいな、水っぽい音。

ユメイ

「んっ……ぴちゃ……ぴちゃ……」

喉にからむ血を飲み下すうめきを折りませながら、ユメイさんは《力》を補充する。

桂

「あ……」

わたしの血を飲み始めてから間もなく、ユメイさんの姿が再び見えるようになった。

ユメイ

「んっ……んんっ……」

わたしのために一生懸命になってくれている綺麗な横顔を眺めていると、何となく幸せな気持ちになって頬が緩む。

わたしの視線が気になったのか、ふとユメイさんと目が合った。

ユメイ

「……桂ちゃん、どうしたの？」

桂

「んー、何でもない……」

ユメイ

「もう少しだけ我慢してね。これだけの《力》があれば、きっと何とかできるから」

桂

「ん……大丈夫だよね……」

これでユメイさんは大丈夫。

だけどわたしは、重くなってきたまぶたをこれ以上ささえられそうにない。

三途の川でも蝶の舞い飛ぶお花畑でもなく、目に映ったのは天井だった。

瞳のピントが調節されると、濃く浮いた木目の年季の入り具合が見て取れた。

ここ数日お世話になっている旅館のものでも、十年慣れ親しんだアパートのものでもなく、かといって病院のものでもなさそうだった。

死んだわけではないようだけど、ここは一体どこなんだろう？

身体にかかった肌触りのいい布の感触からして、お布団に入って寝ていたことは間違いない。

にしても、わたしはいつ寝たんだっけ？

状況を把握しようと、記憶の糸を巻き戻す。

オハシラサマのご神木まで行こうとして、烏月さんとケイくんに出て、崖から落っこちて、そこにユメイさんが――

――そうだ、ユメイさんは！？

お布団から跳ね起きようとしたけれど、身体に力が入らなかった。

桂

「ひゅ……」

名前を呼ぼうとした口から漏れたのは、息とも声ともつかない音だけ。

そして、呼びかけに応じたのは。

「あ、おねーさん、気が付きました？」

わたしの知らない誰かの声だった。

少なくともユメイさんではありえない、おそらくはわたしよりも年下だろう女の子の声。声の幼さにノゾミちゃんとミカゲちゃん存在を思い出してぎよっとするけれど、身体は自由はきかないまま。

わたしは逃げ出すこともできず、心の片隅に焦燥感を育てつつ、声の主の正体がわかるのを待つ。

畳の軋む音がして、お布団の隣に控えていた声の主が、身を乗り出し覗き込んできた。

わたしよりも随分と――干支で半回り分ほどは年下のように見える女の子は、ノゾミちゃんたちと違って今時の普通の洋服を着ている。

そして女の子の他にもう一匹。白い小さな子狐が、黒目勝ちの瞳でわたしを見つめてい

た。

桂

「あ……」

声を出そうとすると、かすれた息が喉から漏れた。

女の子

「いえいえ、しゃべるには及びません。無理に声を出そうとしなくてもけっこうですよ」

女の子

「言いたいことや聞きたいことが、たくさんあるとお察ししますが、そこはわたしの出る幕ではありませんので、今しばらくのご辛抱を」

早口かつ明瞭に言い切る女の子の隣で、白い子狐がこくこくと頷いていた。

この白い子は、どこかで――

――間違いない。この仕草には憶えがある。

昨日、わたしがオハシラサマのご神木に行ったのは偶然で、本当の目的はお父さんの実家である羽様のお屋敷を見ることだった。

そのお屋敷の前の庭で、わたしはこの子に会っている。

するとここはお屋敷の中だろうか。

桂

「ううっ……」

女の子

「あ、おねーさん水欲しいですか？」

桂

「……ん」

女の子

「では、ちょっと待っててくださいね。今、皆様をお連れしますので」

誰を連れてくるのか聞く間もなく、女の子は部屋から出て行ってしまった。

天井を見ながら考える。

そういえば、どうしてわたしはお屋敷を見に来ていたのに、中の様子を知らないんだろう。

――それは逃げ出してしまったから。

どうしてわたしは逃げ出したの？

――それはわたしが――

ユメイ

「駄目よ、桂ちゃん。思い出そうとしては」
ユメイさんの声が、わたしの思考を遮った。

桂
「あ……ユメイ……さん……」

サクヤ
「桂！ あんた、ちゃんと目を覚ましたんだね！」

桂
「……サクヤさん……？」

サクヤ
「あたしはちょうど屋敷にいたんだけど、そうしたらユメイの奴が、血塗れのおんたを担ぎ込んできてさ……」
言葉を詰まらせ、口を押さえるサクヤさん。

桂
「ごめ……心配かけちゃ……」

サクヤ
「ホントだよ、このばか娘！ 四十九日もまだなのに、あんたがそんな危なっかしいんじゃない、真弓もゆっくり寝れないだろうが！」

桂
「あはは……ごめんなさい」

サクヤ
「ごめんじゃないだろ。あんた、そんな風に綺麗に治ってるから危機感わかないだろうけどねえ」

サクヤさんは、ペしゃんこに潰れたモノを取り出してわたしに見せた。金属質の表面に、茶色く乾いた泥のような汚れが付着している。

サクヤ
「これが何だかわかるかい？」

桂
「わたしの……携帯……？」
思わず疑問系になってしまうほど、携帯電話の標準形から大きく歪んで外れてしまっていた。

サクヤ
「ひどいだろう？ 滅茶苦茶だろう？ 硬い携帯がこうなんだから、やわいあんたがどう

なっていたのか、考えるだけでぞっとするだろう？」

わたしの中で、何かがぷつりと切れた気がした。

桂

「あ……」

それは糸電話の糸だったのかもしれないし、目の中の配水管だったのかもしれない。目からぼろぼろと涙が零れた。

桂

「や……やだ、何か止まら……」

サクヤ

「ちょっと、桂！？ もしかしてあたしが脅かし過ぎたのかい！？」

桂

「ちが……陽子ちゃんに電話できないって思ったら急にね……」

サクヤ

「あ～、そんなことで泣くんじゃないよ。電話したいんならあたしの貸してやるからさ」

桂

「う、うん、そうなんだけど、何かね……」

ユメイ

「いいのよ、桂ちゃん。そういうときもあるわ」

自分でもどうして止まらないのかわからない涙をこぼしつづけるわたしを、ユメイさんがきゅっと抱きしめてくれた。

不安定に乱れた心が、柔らかな温かさに押さえ込まれて大人しくなっていく。

桂

「あ……」

零れた涙が着物の藤色に染みて、そこだけに濃い色を広げているのを見て、とあることにはたと気付いた。

桂

「ユメイさん、当たり前だけど……身体がある。ちゃんと柔らかくてあったかい……」

より強い光の前では、幻灯の描く絵は儚く消えてしまうと、そう言っていたのに。

桂

「まだ昼なのに、その格好……」

ユメイ

「ええ。桂ちゃんからもらった《力》のお陰よ」

身体を離してもらって眺めても、ユメイさんの様子は変わらず、お日様の光をその身に浴びて、黒々とした影を畳に落としていた。

他の光から自身の形を守る燐光を纏いもせずに、自然にその場に身を置いているその姿は、昼の世界の住人と何ひとつとして変わりなかった。

葛

「はい、桂おねーさん。お水です」

桂

「あっ、えーと、どうも……」

葛

「わたくし若杉葛と申します。こっちの白いのが相棒の尾花です」

名前を呼ぼうとして引っ掛かったのを、すぐに悟って自己紹介してくるあたり、なかなか聡く、しかも口達者な子だった。

葛

「わけあって、しばらく前からこの家に逗留させていただいている不法入居者でございます。てっきり空き家だと思っていたところを——」

サクヤ

「桂は疲れてるんだ。それぐらいにしときなよ」

葛

「了解しました、サクヤさん」

相棒の尾花ちゃんが沈黙を守っているぶんだけ、本当に葛ちゃんは口達者な子だった。

サクヤ

「油はあたしが絞ったから、もういいだろ？」

桂

「うん、別に構わないよ。わたしも忘れてたような所だし、かえって掃除とかしてもらっちゃったみたいだし……」

少なくともこの部屋の空気やお布団はかび臭くなくて、それなりに清潔そうだった。

桂

「……いきなり迷惑かけちゃったみたいだけど、よろしくね」

葛

「桂おねーさん、ありがとうございます！」

葛ちゃんと尾花ちゃん、揃ってぺこり。

葛

「まだあとしばらくご厄介になりますけど、御用とあらば掃除洗濯布団の上げ下げ、何なり構わずお申し付けてください！」

桂

「あはは……お手柔らかにお願いします」

サクヤ

「それ、あんたのセリフじゃないだろうに」

サクヤ

「それより桂。あんたの今の状況は、ユメイから聞いたよ」

桂

「うん」

サクヤ

「とりあえず、ノゾミとミカゲがまた襲ってきたりしたら、他の客の迷惑になるね」

桂

「うん」

サクヤ

「今のあんたを運び込んだら、人のいい女将さんは卒倒しちまうだろうし、ユメイだってこっちの屋敷の方が、馴染みがあって動きやすいだろう？」

ユメイ

「そうですね。旅館に宿泊するとなると、お金も相応にかかりますし」

桂

「わ……」

ユメイ

「どうしたの、桂ちゃん」

桂

「ユメイさんって、オハシラサマなのにすごく庶民っぽい……」

ユメイ

「ふふっ、そうね——」

ユメイさんはどこか寂しげな笑顔を浮かべて、少し思案を巡らせてから言葉を続けた。

ユメイ

「水が器に従うように、人の生き方もモノの在り方も、形に縛られやすいものなのよ」

ユメイ

「こうして人の形に成った以上、わたしも人の理に縛られたりするの」

桂

「じゃあ、いつもみたいに消えたりは？」

ユメイ

「これだけ安定しているなら、出たり消えたりよりは、このまま維持した方が負担は少ないの」

桂

「あ……それじゃあ、そのままの格好で一緒にいてくれるの？」

ユメイ

「ええ、そうね。しばらくはこのままよ」

桂

「わ、すごい、すごい」

サクヤ

「……桂、何だらしのない顔してるんだい」

桂

「え？ だらしないって……」

葛

「桂おねーさん、顔にしまりがありませんよ？」

ユメイ

「うふふっ、でも桂ちゃんにはそういう顔の方が似合うわ」

桂

「……………」

ユメイさんにまで笑われて、たぶんわたしは赤くなっているかもしれない。

サクヤ

「まあ、そーゆーことだから。あんたとあたしの部屋と荷物を引き払ってくるよ」

サクヤ

「じゃあユメイ。頼むまでもないだろうけど、あたしがいない間のこと——」

ユメイ

「はい。任せておいて下さい」

サクヤさんはユメイさんの応えに頷き返すと、取り出した車のキーを指に引っ掛けて回しながら、部屋から出ていった。

葛

「あー、さてさて。わたしも暗くなる前にひと仕事済ませるですよ」

桂

「……仕事って、何かあるの？」

葛

「急に賑やかになりましたから、少しばかり生活環境の改善をしようかと。幸い、サクヤさんの車に工具や資材がありましたので」

桂

「何をするの？」

葛

「それは開けてのお楽しみです。上手くいかなったらぬか喜びになってしまいますから」

葛

「それじゃあ尾花、行こう」

葛ちゃんと尾花ちゃんも部屋の外へ。

部屋に残っているのは、わたしとユメイさんのふたりだけ。

……………

桂

「えっと……」

ユメイ

「それじゃあ、桂ちゃん。もう少し眠ってちょうだい」

桂

「……え？」

これから何を話そうかと、話題を探していたわたしは、いきなりの打ち切り宣言に、考えを止められてしまった。

ユメイ

「ほら、そんな顔しないで」

ショックが顔に出ていたのか、ユメイさんは微苦笑しながらわたしの頭を撫でてくれた。

ユメイ

「今の桂ちゃんに必要なのは、たっぷりとした休息よ。身体についた傷はすっかり治してしまっただから、あとは休んで癒すしかないの」

桂

「うん……」

ユメイ

「大丈夫。桂ちゃんが寝ている間に、いなくなったりはしないから」
にっこりと微笑みながら、真っ白い手を伸ばしてくる。

ユメイ

「なんなら、ずっと手を握っている？」
わたしは恥ずかしくなって、お布団の中に顔を沈めながらも。

桂

「……うん」
しっかりその手を握っていた。

ユメイ

「おやすみなさい、桂ちゃん」

桂

「おやすみなさい、ゆめいおねえちゃん——」
怖い夢は見なかった。
温かくて懐かしい、幸せな夢を見ていたような気がする。

ユメイ

「おはよう——ではないわね。こういうときは、何て言うのかしら」
握ったままの手とは反対の手で、わたしの額にかかる髪の毛を払いながら、身を乗り出して覗き込んでくる。

ユメイ

「顔色も少し良くなっているわね」

桂

「少し？ だいぶん良くなってるんじゃないかな。もう普通に動けそうだよ」
お腹と背中に力を入れて、横たわった身体を起こしにかかるのと、手を引いて助けてくれた。

ユメイ

「でも、まだ無理をしては駄目よ」

桂

「ぜんぜん無理はしてないよ。これ以上はごはん食べないと治らないんじゃないかな」

ユメイ

「そうね。何か食べるものがないか、サクヤさんに訊いてみるわ」

桂

「サクヤさん、もう戻ってきてるんだ？」

ユメイ

「ええ、あれから随分経っているもの。もう外も真っ暗でしょう？」

桂

「わ、本当」

部屋の中は不自由なく明るかったけど、障子戸の向こうは真っ暗だった。

ユメイ

「それじゃあ、ちょっと待っていてね」

そういつて立ち上がろうとしたユメイさんが、動きを止めて眉根をひそめた。

桂

「あの……ユメイさん？」

何か気に障ることをしてしまったんだろうか。

だけど心当たりが見つからなくて、恐る恐る声をかける。

嫌われたらどうしよう。

見放されたらどうしよう。

そんなことを考えて不安になるわたしは、何だかお母さんと一緒のときよりも、気持ちが幼いような感じだ。

知らずに力が入ってしまった手が、同じぐらいの力で握り返され、ユメイさんの唇がゆるりとほころんだ。

ユメイ

「何でもないのよ。少し足が痺れただけだから」

桂

「足が？ もしかしてわたしが寝てる間、ずっと座ってて……」

桂

「……あ」

眠っている間中ずっと、手を握って離さなかったわたしが何を言ってるんだか。

桂

「ごっ、ごめんなさい！」

わたしは慌てて手を離して、ユメイさんの身柄を解放する。

ユメイ

「いいのよ、別に。だけどこんな感覚があったなんて、すっかり忘れていたわ」

少し困ったように微笑んでから、何事もなかったかのように立ち上がり、部屋から出て行った。

あれ……？

ところで、さっきは何となく流してしまったけれど。

天井を見上げると、蛍光灯がついていた。

桂

「……これか、違和感の原因は」

女の子

「何が違和感なんですか？」

桂

「あ、えーと……」

何だったっけ。確かつ――

葛

「葛です、葛。蛇やお化けの入っていない、お宝ぎっしりの小さく軽い葛とお憶えください」

桂

「植物の葛？」

葛

「です。葛湯葛餅葛桜の葛の字ですね。それで桂おねーさん。何かおかしいところありますか？」

桂

「あ、ここって電気使えるんだっけ？」

葛

「そこを少々細工しまして。水も出るようになりましたから、生活がぐっと楽になりましたよ」

桂

「そうだね、水と電気があれば普通に生活できるよね」

サクヤ

「それはずいぶんと見通しの甘い考えだねえ」

ユメイさんと一緒に入ってきたサクヤさんは、水を張ったお鍋と携帯コンロを持っていた。

ちなみにユメイさんは、人数分の食器とレトルト食品を持っている。

サクヤ

「とりあえず三大ライフラインの内、料金未納で止められる順番を考えてごらんよ」

桂

「電気、ガス、水……そっか、ガスが抜けてるんだ」

ちなみにこの順番は、少なくともわたしの家では光熱費の高い順番だったりするので、世の中ってよくできている。

葛

「そうなんですよ。ガスも調べてみたんですけど、ボンベで配給されるタイプだったんで、いじったところでない袖は振れないんですよー」

桂

「あはは……」

桂

「でも、電気よりガスの方が重要なの？」

サクヤ

「人間は火を手にする事で文明を手に入れたんだよ。今じゃ電気が何にだって化けるけど、それだって充実した電化製品あつてのときさ」

サクヤさんは障子戸の外の縁側に携帯コンロを置くと、つまみを捻って火をつけた。

サクヤ

「さて、住がそれなりに片付いたところで、食としようか。桂も食欲があるみたいで何よりだよ」

ユメイ

「はい、桂ちゃん。好きなを選んでいいそうよ」

ユメイさんがレトルト食品のパックを、わたしの前に並べはじめた。

基本的に煮沸三分とか七分とかで食べられるようなものばかりで、現在コンロの上には水を張ったお鍋がかけられている。

桂

「これ、全部買ってきたの？」

サクヤ

「あたしの車の常備品さ。そうそう、あんたは身体が弱ってるんだから、賞味期限が切れてないかちゃんと確かめるんだよ」

桂

「はい……あ、お赤飯とか炊き込みご飯以外に、白いご飯もちゃんとあるんだね」

サクヤ

「カレーを赤飯にかけるのアレだしねえ。まあ、それもそれほど不味くはないんだけどさ」

桂

「あ、ハンバーグとかも美味しそう」

ユメイ

「そうね、お肉を摂ったほうがいいかも。それとほうれん草なんかはないかしら？」

サクヤ

「ほうれん草入りのグリーンカレーならあるよ」

ユメイ

「じゃあ桂ちゃんはそれにしましょう」

桂

「うーん、ハンバーグカレーとかは普通にあるけど……」

葛

「あの一、カップめんとかないですか？」

サクヤ

「いくらまともな調理はできない状況だからって、病み上がりにインスタントを勧めるかい」

葛

「それは残念。いまだカップめんってヤツを食べたことないんですよねー」

サクヤ

「はいはい。恵まれた家庭でお育ちで。あたしは草木の根っこも食べたことあるよ」

葛

「それならわたしもあるですよ。根菜類は栄養価豊富ですからねー」

ごはんのメニューを選んでいるうちに、お鍋がぐらぐら煮え立った。

桂

「食べた、食べたー。お腹いっぱい……」

葛

「温かいごはんは久しぶりですー。幸せですー」

桂

「わ!？」

サクヤ

「んー、なかなかいい感じの絵面で撮れたねえ。題するなら『食い倒れ姉妹』ってあたりかい？」

桂

「やめて、やめて。こんなだらしのない格好撮らないでー」

サクヤ

「そのだらしのないのが桂だって、ちゃんと受け入れてあげたらどうだい。カメラが写すのは、ありのままの事実だけなんだよ」

桂

「ううっ……」

言われなくてもわかってらい。

桂

「……サクヤさんって、自然とか野生動物撮る人じゃなかったの？」

サクヤ

「仕事は仕事。プライベートで何撮ったっていいじゃないか」

桂

「それはそうなんだけど、撮られる方にだってプライバシーとか肖像権とかがあってね」

葛

「そーゆーことですので、人様の目に触れるところに掲載する場合は、キチンと修正入れてくださいね」

サクヤ

「別に変な所に送ったりはしないから安心おし。それに桂の偏見通り、野生動物だって一応は一緒に写ってるよ」

桂

「尾花ちゃんは野生動物じゃないと思う。だって、自分でごはん獲ってないもん」

桂

「そういえば、尾花ちゃんもちゃんと食べた？」

部屋の隅で丸くなっていた尾花ちゃんは、ぞんざいに尻尾を一振りすると、つまらなさそうに目を閉じた。

葛

「おねーさん、尻尾引っ張ったら起きますよ？」

桂

「いいよ、いいよ。そんなことしないであげて。お腹いっぱいのおきって眠くなるし、起こしたら可哀相だよ」

サクヤ

「そうそう。丁度いいから、そのまま寝かせておきなよ」

葛

「何がちょうどいいんです？」

サクヤ

「今から町に出て一風呂浴びてこようかと思ってね。尾花は一緒に入れないだろ？」

葛

「まあ、男の子ですから」

サクヤ

「狐だからだよ」

桂

「あはは、普通はそうだよね」

猿や熊の出入りするような、野趣が売りの温泉なら話は別なんだろうけど。

サクヤ

「それより葛。あんた、しばらく風呂に入っていないだろ？」

その言葉に、二の腕を顔の前に持って行って、小鼻を動かす葛ちゃん。

桂

「……もしかして、本当に入っていないの？」

葛

「あちらの川で行水などは、ちゃんとしてたりするんですけど……臭います？」

桂

「行水？ それって辛くない？」

葛

「夏の間はまあなんとか、それはそれで気持ち良かったりはするんですけど……」

葛

「たはは、やっぱりお風呂がいいですねー」

サクヤ

「じゃあ、決まりだね。準備おし」

桂

「そういえばわたし浴衣だ。サクヤさんの車で行くなら、このままでも大丈夫かな？」

ドア・トゥ・ドアなら問題なさそうなんだけど、やっぱり少々はしたないかも。ぶっちゃけ言えば寝巻きで歩くようなものだし。

桂

「うーん、やっぱり着替える。ちょっと待ってて」

サクヤ

「別に着替える必要はないよ」

桂

「そうかな？ おかしくないかな？」

サクヤ

「おかしくないさ。布団の中に戻るのに、他のどんな格好が似合うっていうんだい？」

桂

「え？」

サクヤ

「あんたは留守番だよ。内風呂ならともかく、外に病み上がりを連れだすわけがないじゃないか」

桂

「えー」

サクヤ

「ユメイがお守りにつくから、食べられるだけ食べたら寝て、少しでも体力つけときな。この先、何があるかわからないんだからね」

葛

「何だかよくわかりませんが、お風呂って意外に体力使いますからねー」

ユメイ

「桂ちゃん、今日は我慢して」

桂

「むー」

不承不承、頷いた。

お風呂には入りたいけど、あまり心配かけるのも悪いし。

サクヤ

「よしよし、いい子だね」

桂

「う～、ひどい。髪の毛ぐしゃぐしゃ」

頭を撫でられることについての是非はともかく、サクヤさんはちょっと乱暴すぎる。

もっとこう、ユメイさんみたいに優しくしてくれれば――

ちらりと、ふたりを見比べてみる。

桂

「それを望むのはちょっと無理かも……」

サクヤ

「うん？ 何が無理なんだい？ 希望があるなら、土産ぐらいは買ってきてあげるよ」

桂

「お土産？」

サクヤ

「桃缶とか、アイスクリームとか」

葛

「いいですねー、アイスクリーム。夏ですし、暑いですし、お風呂上りに食べたらさぞ美味しいんでしょーねー」

サクヤ

「だろうねえ。とはいえ、夏の風呂上りと言えば、定番は別じゃないかい？ 冷えたのをこう一気にキュッと」

葛

「喉越し滑らかフルーツ牛乳でしょーか」

サクヤ

「いや、喉に爽快、スッキリ刺激の」

葛

「ビールは駄目です、残念ながら」

葛

「わたしが車の免許持ちなら、いくらでも飲ませて差し上げられるんですけど、飲んだら乗るな、乗るなら飲むなの箴言によってですね——」

葛

「って、桂おねーさんどうしました？」

桂

「……………」

サクヤ

「桂？」

桂

「……ふたりともさりげなく自慢してる？ お風呂入りに行けること自慢してる？」

葛

「そそっ、そんなことはないですよっ？」

サクヤ

「そうそう、桂の気のせいだろうね。それじゃあ葛、さっさと行くよ！」

葛

「合点ですよ、サクヤさん！」

桂

「やだなあ、ふたりとも。そんなに慌てなくても、お風呂は逃げたりしないよ？」

サクヤ

「いやいや少しは慌てないとね。のんびりしてると湯が冷めちゃうんだ」

葛

「そーゆーことです、桂おねーさん。それじゃあ行ってきます！」

桂

「……もうっ。ごはん食べた後片付けもしないで行っちゃったよ」

ユメイ

「元気があっていいじゃないの」

桂

「葛ちゃんはね。でも、サクヤさんはもっと歳相応に落ち着いてもいいと思う」

ユメイ

「そんなことになったら大変よ」

桂

「大変って……」

そりゃあ落ち着いたサクヤさんなんて想像つかないけど、大変は言い過ぎなんじゃ？

ユメイ

「桂ちゃん、どうしたの？」

桂

「ううん、何でもない」

ユメイ

「そう」

ユメイさんは立ち上がると、食器をひとつにまとめはじめた。

桂

「あ、わたしも手伝うよ」

ユメイ

「手伝ってもらうほどの量じゃないから」

ユメイ

「それより桂ちゃんは寝ていて。サクヤさんだってそう言っていたでしょう」

やんわりとお布団に追い立てられる。

桂

「ううっ、牛になる……」

ユメイ

「それで眠ってくれるなら、桂ちゃんが牛になってもかまわないわ」

桂

「でもね、本当にわたし、もう大丈夫なんだよ？寒気だとか立ちくらみとか、身体に力が入らないなんてこともぜんぜんないし……」

ユメイ

「用心はしておくに越したことはないわ」

桂

「だけど寝付けそうにないよ。お布団の中で横になってるだけでも、何だか暑苦しいし、身体べたべたしてる気がするし……」

ユメイ

「そう。ちょっとだけ待っていて」

桂

「え？」

ユメイさんはわたしの返事を待たずに、部屋から出て行った。

眠れないとは思うけど、身体から力を抜いて目を閉じる。

水の流れる音が聞こえる。

食器を洗っているのかと思ったけど、どうやらそうではないらしい。

そう間を置かずに水音が止まると、次いで板張りの床を踏む音がしてユメイさんが戻ってきた。

ユメイ

「……桂ちゃん、もう寝てしまった？」

桂

「ううん、やっぱり駄目っぽい」

ひそめた声の呼びかけに、薄目を開けて応えを返す。

ユメイ

「それじゃあ桂ちゃん、ちょっとだけ起きてくれるかしら？」

桂

「うん」

寝ろと言われてたり、起きろと言われてたり。相手がサクヤさんだったら、文句のひとつふたつはこぼしているところだ。

伏せるわたしの隣に座ったユメイさんの脇には、水を張った洗面器とタオル。

暑いから、濡れタオルを乗せたほうが眠りやすいのかもしれないけれど。

桂

「わたし、別に熱はないよ？」

ユメイ

「そうね。だけど身体をふいて気持ち良くなれば、眠気も訪れるかもしれないわ」

水にくぐらせたタオルが絞られる、水の音が涼しげだった。

ユメイ

「それに汗もかいたでしょう？ 桂ちゃん、お風呂に行きたがっていたから、せめてこれぐらいはしてあげようと思って」

ユメイ

「……ほら、手を出して」

きちんとたたみなおしたタオルを片手に、もう片方の手でわたしの腕を取る。

桂

「ん……」

手の甲に乗せられた濡れタオルの冷たさに、肩を縮こまらせ、小さく身じろぎする。

ユメイ

「冷たかった？」

桂

「大丈夫。ひやひやしてて気持ちいい」

ユメイ

「そう」

返事と同時に、手の甲から前腕へと滑るタオル。

ユメイさん手が浴衣の広い袖から中へ滑り込み、タオルは前腕から二の腕へと、ゆっくり優しく移動していく。

こうして何かと世話を焼いてもらえるのは嬉しいんだけど、くすぐったくて恥ずかしくもある。

桂

「ユメイさん。もう身体も不自由なく動くんだから、それぐらいは自分でできるよ？」

ユメイ

「そう？ 手や顔はいいけど、背中なんかは大変でしょう？」

桂

「それはまあ、たぶん……」

ユメイ

「それじゃあ、こっちに背中を向けてくれる？」

膝とお尻をもぞもぞ動かし、身体の向きを調節する。

桂

「これでいい？」

ユメイ

「ええ。それじゃあ髪を寄せてくれるかしら」

下ろすと背中一面を覆ってしまう髪をまとめて、脇から前へ垂らして背中にかからないようにする。

ユメイ

「後で髪もちゃんと梳きましようか」

耳元での言葉の余韻が消える前に、微かに甘い香り——あのご神木の花の香りが、ふわりと覆い被さってきた。

わたしの体を懐に抱くように伸びてきた腕が、慣れた手つきで浴衣の帯を解いていく。

桂

「わっ、ユメイさんちょっと!？」

ユメイ

「何？」

桂

「浴衣、その、はだけないと……駄目……？」

ユメイ

「隙間から手を入れても、ちゃんとふけはしないでしょう？」

桂

「はい……」

線

広がりきった襟が肩に引っ掛からなくなり、衣擦れの音を残して浴衣が身体から落ちていく。

反射的に両手で肩を抱き、肩越しにユメイさんの様子をうかがった。

ユメイ

「……どうしたの？」

桂

「えっと、その、何となく……恥ずかしくて」

ユメイ

「そう」

にっこり微笑みそれだけ言うと、ユメイさんは身体をかがめてタオルを水に浸しなおした。

ううっ、心臓がドキドキしてる……

肩を抱く手にぎゅっと力を入れて、緊張に震える身体を押さえつけながら、タオルから搾り出される水の音がやむのを待つ。

この順番待ち感覚が、お医者さんが注射の準備をしているときみたいで、そわそわして落ち着かない。

水の音がやんだ。

ユメイ

「桂ちゃん、そんなに緊張しないで。疲れてしまうでしょう？」

桂

「それはそうなんだけど……」

ユメイ

「すぐに慣れるわ」

タオルがぴたりと当てられる。

桂

「んっ……」

ユメイ

「これぐらいでいいかしら？」

痛くないぐらいの加減のよい圧力で、するすると背中を滑るタオル。

汗や埃などの、皮膚の表面に張り付いた汚れがふき取られると、ふっと身体が軽くなり、呼吸が楽になったような気がした。

ユメイ

「どう、桂ちゃん？」

桂

「うん、気持ちいい」

タオルの通った後に残った水気が、夏の大きに溶け込んでいく涼気が心地良かった。

うっとり目を閉じて、力の抜けた身体をユメイさんに委ねる。

ユメイ

「少し腕を上げて、脇を空けてくれる？」

桂

「あ、ん……うひゃっ」

タオルを持った手が、お腹の脇から肋骨の上を通して上ってくる。

ユメイ

「ちょっとくすぐったかった？」

桂

「うん……今のはちょっと。もう少し力を入れてくれた方が、くすぐったくはないかも」

ユメイ

「じゃあ、これぐらいなら大丈夫？」

桂

「うん、それぐらいなら……」

ユメイさんの両手に力がこもり、タオル越しの手と、身体が泳がないようにと肩を支える反対側の手にサンドイッチにされる。

今までよりもずっと強い、皮膚にめり込むぐらいの力を感じて、ユメイさんが確かな肉の身体を持っていることを改めて実感する。

桂

「あ……だけどユメイさん」

ためらいがちのわたしの言葉に、身体をぬぐう動きが止まった。

桂

「ユメイさんこそ大丈夫なの？」

ユメイ

「何が？」

桂

「ずっとそのままだけど、辛かったり苦しかったりしない？」

ユメイさんが現身のままでいるということは、それだけ《力》を使っているということだ。

それはユメイさんにとって――

ユメイ

「心配してくれてありがとう。まだ大丈夫よ」

桂

「……まだ？」

ユメイ

「そんな顔しないで。いつそうなるのか、わたしにもわからないだけで、別に我慢しているとかではないのよ」

ユメイ

「ただね、ずっとこのまま、なんて言えないから」

桂

「うん……それはわかる……」

ずっと一緒にいるものとばかり思っていたお母さんは、わたしを残して逝ってしまった。

桂

「……ねえ、ユメイさん」

ユメイ

「なあに？」

桂

「ユメイさんは、無理しないでよ？ 苦しかったら苦しいって、辛かったら辛いってちゃんと行ってよ？」

桂

「わたし鈍いから、言われないとわからないから。言われないと何もしてあげられないから……」

桂

「お母さんが過労で倒れちゃうぐらい疲れていたことに気付いてあげられなかった、ぜんぜん駄目な子だから……」

うなだれるわたしの頭に、ユメイさんの白い手が乗った。

お母さんがよくしてくれたみたいに、ぼんぼんと柔らかくわたしの頭を叩く。

ユメイ

「ありがとう。桂ちゃんはいいい子ね。その気持ちだけで十分よ」

桂

「……違うよ、わたしいい子じゃないよ。わたしはわがままな子だよ」

桂

「わたしはわたしのために言ってるんだもん。後になって自分を責めるのが嫌だから……」

桂

「大切な人が、いなくなってしまうのが嫌だから」

ユメイさんがある日突然消えてしまったら、わたしは――

わたしはそんなの嫌だった。

桂

「ねえ、わたしの血を飲んで」

桂

「ユメイさんが消えてしまわないように、わたしの血を飲んで」

ユメイ

「桂ちゃん。そんなに心配しなくても——」

桂

「朝のニュースで言ってたんだ。体中の血がなくなっている遺体が発見されたって」

桂

「証拠はなくて勘なんだけど、それって昨夜のあの子たちが犯人だと思うんだ」
きっと「大丈夫」って言おうとしたんだろうユメイさんをさえぎって訴える。

ユメイ

「……そう。お亡くなりになった人が」

桂

「あの子たちは本当に鬼なんだ。そしてわたしは、その鬼に目をつけられているんだよね」

ユメイ

「そうね。あの子たちの目的は他にあるのだけれど、桂ちゃんのことを諦めたとは思えないわ」

桂

「うん——」

桂

「だからユメイさんには、今の内にわたしの血を飲んで《力》を蓄えておいてほしいの」

ユメイ

「わたしはすでに、真昼の光の中に立てるほどの《力》をもらったわ。こうして桂ちゃんと触れ合えるほどの《力》をもらっているわ」

桂

「だけど、そんなのすぐに足りなくなるよ」

ユメイ

「そんなことは……」

桂

「あると思う。その身体を維持するのも《力》が必要なんだよね？ 血を飲まないで、減る一方なんだよね？」

ユメイ

「オハシラサマのご神木が《力》を集めてくれているから、減る一方というわけではないのよ」

桂

「だけどユメイさんって無茶する人だよ？ 昼間なのに、わたしを助けるために出てきちゃうような人だよ？」

桂

「だからユメイさんには、無茶しても大丈夫なように備えてもらうの。《力》をいっぱい使っても、《力》がなくならないように」

桂

「わたしの前から、姿を消してしまわないように」
口をつぐむと、部屋はしんと静まった。

止まっていたユメイさんの手が、わたしの背中にそっと触れた。

その手は心臓の上に触れていた。

わたしの心臓はどきどきどきどき動いている。

わたしの身体の中には、まだこんなにたくさんの血が流れている。

桂

「……ユメイさんが吸ってくれないとね、この身体の中の血が、全部なくなっちゃうかもしれないんだよ？」

桂

「あのふたりは、本当に死んじゃうまで血を吸うような子だから。そういう子たちが《力》を蓄えて来るかもしれないんだよ？」

心臓のどきどきが速くなる。

強くなる。

桂

「わたし、吸われるんならユメイさんがいい」
もう限界かもしれない。

ユメイ

「……わかったわ」

どきどきの限界はもっと上だった。

うなじにユメイさんの吐息がかかる。
暖かい、生きている身体だからこそその湿った吐息が、首筋をくすぐった。

ユメイ
「桂ちゃん、いいのね？」

桂
「うん……」

柔らかい唇と正反対の、硬い歯がわたしの身体に触れた。
さわさわと背中 of 産毛が立ち上がっていく。

桂
「うっ……」
歯が食い込んでいく。

桂
「んんっ」

肌を破った。

ユメイ
「桂ちゃん——」

桂
「だ、大丈夫。ほんとに大丈夫だから」

甘い花の香りを溶かした吐息。それがわたしの感覚を麻痺させているのか、不思議と痛みを感じなかった。
じわりと、わたしの身体から熱い血が染み出していくのが感覚でわかる。

桂
「……………」

ユメイ
「……心配しなくても大丈夫よ。桂ちゃんにたくさんの血をもらってできた身体だもの。
そう簡単に消えたりはしないわ」

桂
「うん……」

ユメイ
「それに、心配なのはわたしの方よ。桂ちゃんはあるにたくさんの血を失っているのよ」

途中で意識が途絶えてしまったので、実際にはどれぐらいの出血だったのかはわからないけれど、一面の血溜まりだけは憶えている。

桂

「うん……」

ユメイ

「だから桂ちゃんにはしっかり休んで欲しいのよ。せめて今日一日、明日の朝日が昇るまで」

桂

「昇ったら……どうにかなるの？」

ユメイ

「病院に行けるようになるでしょう。輸血してもらえれば、最悪の状況だけは避けられると思うの」

桂

「あ……」

なるほど、とわたしは手を打った。

傷はユメイさんが治してくれたから、今のわたしが倒れるとしたら、血液不足によるものだろう。

桂

「だけどさ、ユメイさん」

ユメイ

「何？」

桂

「輸血とかしてもらったら、贅の血って薄くなったりするのかな？」

ユメイ

「……さあ……どうかしらね」

桂

「あと、献血したことあるんだけど……」

ユメイさんに身体をふいてもらった後、わたしは大人しくお布団に潜り込んだ。

桂

「やだやだやだ！ お風呂入らないと気持ち悪くて寝れないもん！ わたしも一緒に行くもん！」

ユメイ

「桂ちゃん……」

葛

「おねーさん、大人気ないですよ？」

桂

「だって、だって、山登りしたりしてるんだよ？汗だってかいたし、崖から落っこちたりもしたんだよ？ それならお風呂入りたいじゃない？」

ユメイ

「ふう……」

わたしの必死の主張が通じて、最初に折れてくれたのはユメイさんだった。

ユメイ

「……サクヤさん、桂ちゃんのことお願いできますか？」

サクヤ

「ユメイは桂に甘いよねえ……」

ユメイ

「そうかもしれませんね。ですから厳しくするのはお任せします。桂ちゃんに嫌われるのは嫌ですから」

サクヤ

「あたしだって好き好んで嫌われたくはないよ」

大仰に肩をすくめて、ため息を吐くサクヤさん。

わたしはちょっと厳しくされただけで、その人を嫌ってしまうような、どうしようもない子だと思われているのだろうか。

……そりゃあ、ちょっとはわがまま言ったりするけれど。

サクヤ

「仕方がないねえ、準備おし」

桂

「——え？ 何？」

サクヤ

「連れて行ってあげるから、準備をしろって言ってるんだよ」

桂

「いいの？ 本当？ 連れて行ってくれるの？」

サクヤ

「その代わりに、のぼせて倒れたりなんかしたら承知しないよ」

桂

「承知しないって、どうするの？」

サクヤ

「ふふふっ……」

サクヤ

「服なんて着せないで、そのままここまで担ぎ込むからね。たとえ警察に追いかけても」

桂

「わ、何て恐ろしい……」

旅の恥は掻き捨てとはいえ、それはかなり嫌すぎだった。

ユメイ

「……んっ」

歯型についた傷を、ユメイさんの舌がなぞっていく。赤ちゃんがお乳をねだるみたいに、傷口を吸う。

ユメイ

「桂ちゃん、痛くない？」

桂

「平気。それより、ちゃんと出てる？」

桂

「出てなかったら……その、もっと吸ったり噛んだりしてくれても……」

ユメイ

「これ以上は駄目よ」

ユメイ

「桂ちゃんはかなり出血をしているんだから、これ以上は駄目」

ユメイ

「わたしは傷を治すことはできるけれど、それ以上のことは出来ないんだから、身体を傷つけるのは良くないわ」

桂

「でも」

ユメイ

「大丈夫。もう十分よ」
わたしのことを、やんわりと止める。

ユメイ

「たとえ今晚あのふたりが襲ってきても、わたしは消えずに桂ちゃんを守れるから」

桂

「うん……」

ユメイ

「それに桂ちゃんだって、ご馳走をいっぺんに並べられても困ってしまうでしょう？」

桂

「うん……」

ユメイ

「だから、ね」

桂

「うん……」

ユメイさんの唇が、もういちど傷口に触れる。今度は吸わずに、何かを吹き込んでくる。

熱いお湯に浸かったときのような、じんと痺れる感じがして、ほわほわと温かくなってくる。

眠気を催す浮遊感。

さざめく波の音が遠のいて、世界が静かになっていくような――

月を溶かした風の海を、たゆたう感じに誘われて、わたしはさらに深い場所へと沈んでいった。

わたしたちを乗せたサクヤさんの車が向かった先は、昨日まで泊まっていたさかき旅館。

サクヤ

「にしても、泊まり客以外に湯を使わせてるのが、昼の間だけだってことをすっかり忘れてたよ」

桂

「どうでしょうか。他に銭湯とかってあったっけ？」

女将

「あら？ 浅間さんに羽藤さん。忘れ物でもなさいましたか？」

桂

「あー、それがですね……」

そんな会話があったのが、ほんの少し前のこと。

桂

「女将さんがいい人で助かったよねー」

葛

「そーですね。わたしまで入れてもらっちゃいました」

旅館を引き払おうと決まったのは、チェックアウトの時間をだいぶ回ってからのことだったので、サクヤさんは今日泊まる分まで支払っていた。

それで女将さんが言うには「代金を払っている以上、宿泊客と同様の権利が与えられてしかるべき」とのこと。

ちなみに葛ちゃんは、わたしたちが部屋を使わない分のおつりという扱いなのだそう。

葛

「おねーさんたちは、昨日もこちらに？」

桂

「うん。わたしとサクヤさんと、あと烏月さんが一緒だった」

葛

「……えっと……どちら様で？」

桂

「千羽烏月さんって言って、すごい美人さんで、サクヤさんとは仲が悪い人」

葛

「千羽……」

そして鬼切り役なんていう、実際に鬼に襲われたわたしが言うのもなんだけど、にわかには信じられない使命を背負った人。

サクヤ

「そういえばさっき聞いたんだけど、烏月の奴、まだ戻ってきてないんだってね」

桂

「そうなの？」

サクヤ

「夕食には来なかったってさ」

桂

「……………」

今頃、まだケイクんと戦ったりしてるんだらうか。
鳥月さんもすごい動きをしていたけれど、ケイクんもすごかった。

桂

「……心配だなあ」

見上げた月は昨日よりも大きくて、ほとんど満月に近かった。

扉が叩かれたのは、間もなく日付が明日に変わろうという、夜の最中の事だった。

鳥月

「夜分失礼します。羽藤桂さんと、浅間サクヤさんはこちらにいらっしゃいますか」
扉を叩いたのは千羽鳥月さん。
黄金作りの太刀を携え、自らを鬼と認めた少年と戦っていた、夜色の髪 of 少女だった。

サクヤ

「……桂はあんたと鬼の戦いに巻き込まれて、崖から落ちたって話じゃないか」
対座する相手を睨み据えながら、押し殺した怖い声でサクヤさんが言った。
それを受ける鳥月さんも、一見静かに落ち着いているように見えるのに、周りの空気は
肌に痛いほどぴりぴりしている。

桂

「その、直接巻き込まれたってわけじゃ……」
立ちこめる一触即発の気配に、わたしはおずおずとしか口を挟めない。

サクヤ

「はん、鼻息の荒さの割には、ずいぶんとだらしないんだねえ、今の千羽の鬼切り役は」

サクヤ

「先代の實力はよく知らないんだけど、先々代の足元にも、到底及んでないんじゃないかい」

どうして知っているのか、サクヤさんは鳥月さんの事情についてくわしい模様。
仲の悪いふたりだけれど、どうやら根になっているのはこの辺らしい。
そういえばサクヤさん、いくらうちとは古い付き合いだからって、オハシラサマである
ユメイさんとも昔からの知り合いみたいだし——

鳥月

「そのことに関しては、返す言葉もありません」
毅然とした鳥月さんの言葉に、わたしははっと我に返る。

鳥月

「すまない桂さん。早々に奴を始末できていたならば、あのような事態は起こりえなかつ

た。ひとえに私の能力不足が招いた事態だ」

桂

「いいんだよ、ユメイさんのおかげで、わたしはこの通りぴんぴんしてるしね」

烏月

「……………」

烏月さんは複雑そうな顔をして、わたしとユメイさんのふたりを比べ見た。

鬼——人ではない存在を退治する役目に就いている彼女にとっては、ユメイさんでさえ、ノゾミちゃんたちと同列の存在なのかもしれない。

思い返してみれば、ケイクンだって別に怖い感じじゃなかったはず。わたしが勝手に怖がっていただけ。

桂

「……ねえ、烏月さん」

桂

「ケイクンってどんな鬼なの？ どうしてケイクンは退治されなきゃいけないの？」

烏月

「どうしても何も、奴はすでに何人もの人間を殺し、その血肉を喰らっている文字通りの鬼だからだよ。だから鬼切り役である私に命が下った」

桂

「そんな風には——」

烏月

「見えないかい？」

烏月

「しかし桂さん、考えてごらん。昔話に語られる典型的な鬼婆とて、表向きは旅人に宿を勧める善良な老婆に見えるものだろう？」

烏月

「それに——奴が鬼である他にも、私には奴を切らねばならない理由がある」

烏月

「奴の存在そのものが、我ら千羽党にとっては他の鬼切部に顔向けできないほどの恥だからね」

桂

「あの、それは明良さんという方と——」

不快の念を露わにした、厳しい瞳にぶつかって、わたしは謝りながら目をそらした。

桂

「ごめんなさい」

烏月

「いや——そのことに関しては、そちらの方にも色々と言いたいことがあるんだがね」

桂

「サクヤさんに？」

サクヤ

「はん、その件に関してはお互い平行線ってことで話がついてるだろう？」

サクヤ

「それにこの子の前で、そんな関係ない話を持ち出すんじゃないよ、まったく……」

烏月

「そう、でしたね」

サクヤ

「で、あの子——ああ、その鬼とやらは一体どうしたんだい？」

烏月

「逃げられました。さすがにこう暗くては人の身には分が悪い」

烏月

「それで、むやみに追いまわすよりは、桂さんを張っていた方が良いのではないかと思いましてね」

桂

「それはわたしが贅の血の持ち主だから？ 人以外の……鬼がわたしを狙ってくるから？」

烏月

「あなたは、どこまで知って——」

烏月さんはサクヤさんとユメイさん方を横目で見、言葉を飲み込み頷いた。

サクヤ

「なるほどねえ。あの子が出てくるとしたら、桂を狙ってのことだとヤマを張ったわけだ」

烏月

「そういうことです」

サクヤ

「……なあ、烏月。色々あるだろう因縁は水に流して、この土地の問題はあたしとユメイに任せてくれないかい？」

烏月

「それは、あの鬼のことも含めてですか？」

サクヤ

「あの子のことも諸々込みでだよ」

烏月

「では、交渉するまでもありません」

烏月

「あなたさえいなければ、こんな面倒な事態におちいらなかつたらうというのに、何を今更」

サクヤ

「それを言うなら、あたしだってあんたら鬼切部が余計なことをしなきゃ——」

サクヤ

「——って、あんたみたいな小娘に言うことじゃなかったね。悪い、大人気なかったよ」

烏月

「いえ……」

サクヤ

「……………」

いつぷつりと切れてもおかしくない程張り詰めていた空気が、妙な沈黙によってうやむやのまま間延びした。

桂

「えっと……」

桂

「だけど、ケイクんは何をしようとしているの？」

そう、確か——

桂

「——明後日の朝まで待ってくれないか？ って言ってたはずだけど。明日の夜には何があるの？」

烏月

「今夜の月は小望月。明日の夜には月が満ちきる」

桂

「月が……？」

烏月

「満月が人ではないモノにどんな影響を与えるか、桂さんだって聞いたことがあるだろう？」

桂

「……その、狼男……とか？」

サクヤ

「そーだよ、それぞれ」

的外れなことは言っていないつもりだけど、サクヤさんは苦笑いを浮かべてパタパタ手を振り、語り手の座を烏月さんに譲った。

烏月

「満月の夜は、ある種の鬼にとって最も《力》が強くなる時期なんだよ。そしてある種の儀式を取り行うのに、最も適した時期でもあるんだ」

桂

「……儀式？」

烏月

「儀式という呼び方をすると少々大仰に聞こえてしまうかもしれないけれど、例えば、盆踊りは夏の満月の晩に行われるものなんだよ」

桂

「はあ、盆踊り……」

話の流れ上、おどろおどろしいものを想像してただけに、拍子抜けしてしまった。

まんまるお月様の下で輪になって踊るだなんて、「證城寺の狸囃子」じゃないけれど、どことなくのんびりとした風情がある。

桂

「盆踊りかぁ……」

烏月

「そう。その名の通り、お盆に踊るから盆踊りというわけだけど——桂さん、お盆については？」

桂

「えっと、確かお盆始めにご先祖様の霊をお迎えしてから——」

桂

「——えっ！？ 霊をお迎えっ！？」

驚き顔のわたしに向かって、烏月さんがゆっくりと頷いた。

烏月

「正確には盂蘭盆と言ってね。これは習合した仏事に由来する名前で、日本には古来から魂祭りという風習があったんだ」

烏月

「要するに満月の夜は、月の光がそうさせるのか、果ては引力がそうするのか、何かを呼び寄せやすくなるんだよ。魂にしろ、鬼にしろ」

桂

「鬼を……呼び寄せる？」

烏月

「奴はあの槐が封印している鬼を目覚めさせ、解放しようとしている」

桂

「それはケイクンとは別の鬼？」

サクヤ

「別の鬼だよ。そうだろう、オハシラサマ」

ユメイ

「それは緩やかな死を迎えるために、槐に抱かれ眠らされている鬼。強大な《力》を持っていたが故に、滅しきれずに封じるしかなかった鬼」

桂

「そんなに強い……鬼」

烏月

「単に鬼というよりは、その霊格からして鬼神と言うべきだろうね。或いは悪しき神、まつろわぬ神と——」

烏月

「この経観塚の言い伝えでは、単に主と呼ばれているようだがね」

桂

「……あっ！？」

ノゾミ・ミカゲ

「——主さまによろしく」

桂

「そういえば、ノゾミちゃんとミカゲちゃんが」

烏月

「それは桂さんの部屋に現れたという、双子の鬼のことだね？」

桂

「うん」

烏月

「……それは、厄介だな」

桂

「え？」

烏月

「私たち鬼切部は、人に仇なす人ではないモノを総称して鬼と呼んでいるのだけれど——」

烏月

「鬼にも色々あって、大きく分けるなら現身を持つものと持たないものに二分されるんだ」

烏月

「現身を持つ鬼なら、首を落とせば大概是片がつく。だが現身を持たない鬼は、切ったからといって必ずしも滅びるとは限らない」

烏月

「十年前にこの地で二匹の鬼が切られている。その鬼は互いを鏡に映したように、そっくりの姿をしていたそうだよ」

桂

「それがノゾミちゃんとミカゲちゃん……？」

烏月

「だろうね」

烏月

「私が切って十年封じることができるのなら、当面はそれで間に合わせてもいいだろう」

烏月

「だが、先ほどサクヤさんに言われた通り、わたしは鬼切りとしてはまだ未熟」

烏月

「仮に切ったように見えても、その直後には再び形を成しているかもしれない。滅びたフリなどをされたりすると、厄介極まりない相手になる」

烏月

「とにかくまずい。三匹の鬼が一柱の神を復活させる贄としてあなたの血を狙っているこの状態は、非常に良くない」

烏月

「桂さん、悪いことは言わない。今すぐ——は無理にしても、日が昇ったら電車に乗って、あなたはあなたの世界に帰るべきだ」

桂

「……帰れば安全なの？」

烏月

「少なくとも、目の前にある脅威を遠ざけることはできる」

烏月

「双子は何かしらの呪物に依る存在だろうから、依代から離れるほどに《力》を弱めるはずだ」

サクヤ

「神様クラスの《力》でもないかぎり、霊体だけじゃ、長くこの世に留まれないものなんだよ」

サクヤ

「人間だって死んで身体がなくなると、魂も別の場所に逝くだろう？ 残るには人に依るか、物に依るか、土地に依るか——」

サクヤ

「土地に依り憑くのがその代表、夏の心霊番組なんかでおなじみの地縛霊さ」

桂

「浮遊霊は？」

サクヤ

「あれはそう危なくないって言われてるだろう？ 放っておいてもそのうち消えちまうからね」

烏月

「とにかく、距離を置くことが双子の鬼への対処につながるはずだよ。桂さんへの干渉が始まったのも、あなたがこの地へ近づいてからのはずだ」

鳥月

「それでもう一匹の鬼。自らの足であなたを追うことができる、現身をもつあの鬼は、私が必ずこの地で止める」

鳥月

「千鬼を切った維斗に誓って、私が必ずこの地で仕留める」

音もなく抜き放たれた鋼鉄の刃が、窓から射す月光を反射して、部屋に薄くわだかまっていた闇を両断した。

自分の覚悟を示したその刃の光でもって、鳥月さんはわたしにも決断を迫ってくる。

鳥月

「だから桂さん、あなたは昼の世界に帰るんだ」

これは最終勧告だ。

わたしは今、昼の世界に戻れるぎりぎりの所にいる。あと一步踏み込んだら、夜の世界に生きるしかなくなってしまうのだろう。

オハシラサマのユメイさん。

鬼を切る役目に就いている鳥月さん。

何だかよくわからないけど、人並みはずれたバイタリティの持ち主で、事情通のサクヤさん。

そんな人たちの中に混じって、鬼の住む世界で生きることができるのだろうか？

……………

桂

「……結局、わたしってお荷物なんだよね」

お荷物ならお荷物らしく、指定された場所で大人しくしていることが、みんなにとって一番のことなんだと思う。

桂

「わかった。わたし帰るね。帰ることにする」

鳥月

「そうしてくれるとありがたい。鬼は弱い部分を突いてくるものだからね」

桂

「あはは、はっきりお荷物って言われちゃった」

鳥月

「それだけならともかく、桂さんは特別なんだ。もしあなたが鬼に捕らわれでもしたなら——」

冗談など欠片も混じっていない本気の瞳で、わたしを見据えて言う。

烏月

「鬼が《力》を得る前に、あなたごと切らねばならなかつたらろう」

サクヤ

「烏月っ！」

烏月

「そうしたら私は、このふたりまでを相手取ることになつたらろう。私にとって最悪の事態が避けられるだけでも幸いだよ」

音も無く抜き身の刃が鞘に収められる。

背中をつつと冷や汗が滑った。

桂

「あはは……そうだね」

とにかく、わたしの決断で最悪だけは回避できたというわけだ。

桂

「だけど烏月さん。向こうに戻っても鬼がいたりするんじゃないかな？」

烏月

「そうだね、鬼はどこにでもいる。人が生きる場所には必ずいるとっていい。だからこそ正史以前から鬼切り役が存在しつづけている」

桂

「じゃ、じゃあ、帰っても……」

ユメイ

「大丈夫よ、桂ちゃん。桂ちゃんは今までに鬼を見たことがある？」

桂

「ううん……向こうではない。ないはず」

ユメイ

「そうよ。これをちゃんと持っていれば——」

ユメイさんがわたしの手を取り、何かを手渡してくれた。

飾り紐を通した十五ミリほどの青い珠に、白い蝶が浅く掘り込まれているそれは。

桂

「あ……壊れた携帯に付けっぱなしだった……」

ユメイ

「駄目よ、桂ちゃん。お守りなんだから、ちゃんと持っていないと」

ユメイ

「それを身に付けていれば、血が特別だっていうことを隠せるし、ごく弱い存在なら近寄ってこなくなるわ」

サクヤ

「ああ、ちゃんと濃くなってるね。これだけ濃ければ当分は大丈夫だろうね」

わたしの肩越しに、後ろから覗き込んだサクヤさんに向き直る。

桂

「そういえばサクヤさん、前にもこのストラップを見て『薄い』とか言ってたよね？ あのときは色がどうのこうのって……」

色は以前と変わりなく、いつも通りに見えるんだけど。

サクヤ

「ああ、珠にこめられている《力》のことだよ。薄くなってたから、放っておいたら向こうで鬼に襲われてたかもしれないよ」

桂

「わ……」

サクヤ

「いっぺんこっちに帰ってきて、こういうことになったのも何かの縁かもしれないねえ」

桂

「でも、この土地を離れると——」

わたしはユメイさんを見た。

ユメイ

「ええ、今はこうして形を成しているけれど、わたしもオハシラサマに依っている存在だから」

桂

「だったらわたし、帰りたくない」

ここで離れ離れになってしまったら、もう二度と会えないような気がしたから。

安定しているという今の形をなくしてしまったら、もう二度と形を成してくれないような気がしたから。

桂

「大切な人と会えなくなるのはもう嫌だから、ユメイさんと一緒にいられなくなるなら、

わたし帰りたくない」

ユメイ

「桂ちゃん……」

桂

「わたしがいちや駄目？ 足手纏いのわたしがここにいると迷惑？」

ユメイ

「そんなことはないけれど……」

サクヤ

「出来れば帰って欲しいってところだろう？」

ユメイ

「……………」

サクヤ

「桂、真弓のことがあったばかりだし、あんたが過敏になってるのはわかるよ」

サクヤ

「だけど、あんたがユメイのこと知ったのは昨日今日の話だろう。どうして自分の命を賭けてまで、一緒にいたいと思うんだい？」

桂

「なんでって、一緒にいたいからだよ。何だかよくわからないけど、すごく優しくて懐かしいんだもん」

桂

「お母さんみたいだけどお母さんじゃなくて、ユメイさんと一緒にいると、幸せな気持ちになってくるんだもん」

桂

「それに、そんなこと言うならユメイさんだってそうだよ。ユメイさんは自分が消えちゃうかもしれないのに、わたしのこと助けてくれたよ」

サクヤ

「そりゃあユメイにしてみれば、あんたは大事な昔から知ってる桂ちゃんだからね」

桂

「え？」

昔から——知ってる？

サクヤ

「赤ん坊のあんたは、そりゃあよく泣く子だったから、困った顔して笑子さんや真弓に助けを求めていたものさ」

サクヤ

「ちょっと育ったあんたは、かなりのお転婆だったから、追いまわすのに四苦八苦してたものさ」

サクヤ

「ユメイにとって、あんたは娘みたいなもので、妹みたいなもので、直接の親子でも姉妹でもないけれど、とにかく家族同然の身内なんだよ」

ユメイ

「サクヤさん」

サクヤ

「あんたのぼやぼやした何となくと違って、ユメイが命がけであんたを守ろうとするのには、ちゃんとした理由があるんだ」

ユメイ

「サクヤさん！」

サクヤ

「……あ」

桂

「ずるい。そんなの、ずるいよ……」

桂

「ユメイさんがわたしのこと知ってるのって、わたしの記憶がなくなった、わたしも知らない火事よりも前のことばかり！」

桂

「それならいいよ、わかったよ！ わたしも思い出せばいいんだよね!？」

桂

「ユメイさんが家族同然の人だって思い出せば、命かけても納得してくれるんだよね!？」

桂

「わたし、思い出してくる!!」

全員

「——桂!？」

陽子

「……で、役立たずのはとちゃんは追い返されてしまいましたとき」

桂

「わたしだって、ユメイさんに血をあげたりすれば、少しは役に立つんだよ」

陽子

「ま、微妙な立場よねー。戦場のど真ん中に燃料の詰まったドラム缶が置いてあったら、真っ先に爆発しそうな感じだし」

桂

「ううっ、そんなことないよ」

陽子

「もう少し安全？ 単一乾電池ぐらい？」

桂

「そんなに太くないよー」

陽子

「ドラム缶で文句つけなかった御仁が、何をいまさら」

落ち込んだ友達相手に、ここまで言いたい放題言ってくれるだなんて、さすが陽子ちゃん。

桂

「……ねえ、陽子ちゃん？」

陽子

「ふむぐん？」

口に入り切っていない、かぶりついたバーガーのバンズを指で押し込めながら、返事をする。

桂

「陽子ちゃんなら、どうしてた？」

陽子

「んぐっ……あたし？」

桂

「うん。陽子ちゃんぐらいバイタリティあったら、わたしもどうにかできたのかなーって」

陽子

「そんなの無理、無理。あたしがお化け相手に唱えられるのって、この程度のものよ？」

桂

「この程度って、どの程度？」

陽子

「ラーメンソーメンミソラーメン、焼きソバの皿はナンマイダー」

怪しげな身振りをあわせて、ものすごくいいかげんな経文らしきものを口ずさむ陽子ちゃん。

もしここが中華料理屋さんだったなら、最後にお箸でどんぶりの縁を叩いていただろう。きっと。

桂

「わ、すごくご利益なさそう」

陽子

「そーゆーこと。所詮我々のような庶民は、人間相手に人生を闘っていくしかないってこと。お化けの相手まではやってもらえませんって」

陽子

「はとちゃんと同じで、さっさと逃げ帰ってきたでしょーね」

陽子

「ま、帰る前にユメイさんだっけ？ その味方の方の神様にたらふく燃料入れてきたかもしれないけどねー」

桂

「ああーっ、そうだった！」

陽子

「コラ」

ぺしっと平手でおでこを叩かれる。

陽子

「あんたね、信じられないけど崖から落ちて血の海作った人間が、それ以上出血大サービスかましてどーすんのって」

桂

「ううっ……」

陽子

「とりあえず肉を食え、肉を。そうそう、貧血にぴったりのレバーバーガーなら追加オーダー受け付けるけど？」

桂

「ううっ、せめてスピナッチアイスで」

陽子

「キモいし高いから却下」

桂

「えー、レバーバーガーの方がげんなりだよ。陽子ちゃんのけちんぼー」

陽子

「いーから。とりあえず食べた食べたー」

桂

「ううっ、わたし食べるよー、思いっきり食べるよー」

陽子

「そうそう。人間ちゃんと食べてちゃんと眠れるうちは、何があっても生きていけるってもんよ。はとちゃん、ふあいとー！」

桂

「お〜〜」

わたしは昼の世界に戻ってきた。

居間を飛び出したわたしは、お屋敷の中のとある場所へと向かっていた。

昨日の昼間に初めてお屋敷を訪れたときに見た、古びて黒ずんだ柱のある部屋へ向かっていた。

その柱には、縦長の柱時計が掛かっている。

とても懐かしい感じがする、今ではあまり見ないような古時計。

寄りかかるように柱に手を押し当てると、指先が傷に触れて——しまった。

まだこの傷を見ちゃ駄目だ。まだこの傷のことを考えちゃ駄目だ。まだこの——

わたしのどこかで警鐘が鳴る。それなのに視線は柱を下っていき、頭は傷の情報を大急ぎで取り揃える。

わたしの胸よりも低い高さには、ケイト——なんだったっけ、もうひとつ名前を刻みつけた、ふたりの背比べの痕が残っていたはず。

そうだ。ハクカだ。ハクカ。ハクカだった。

どんな字を書くんだろう？

ハクと読む漢字はあまり思いつかない。

やっぱりストレートに白だろうか？

それならカは？ 花？ 香？ 佳？

白い花、白い香り、白くて形のよい——

なんだ、どの字を当ててもイメージは——

白を蹂躪する痛い程の赤。

——ああ、やっぱり来た。

目の奥から頭に突き抜けるような、赤い痛みがやってきた。

——待ってよ、待って。これじゃ順番が違う。

昨日はこの部屋でこの痛みに襲われるより前に、ユメイさんのいる昔の風景を《視》ている。

だからこの部屋に来れば、何かを思い出せると踏んだのに。

わたしを貫くこの痛み到我慢できるうちに、思い出さないと。昨日の続きを《視》ないと。

何だったっけ。昨日はどうしてたんだっけ。

そうだ、時計だ。止まっているはずの時計の音が聞こえれば、多分成功。

違う——これは心臓の音。

違う——これも心臓の音。

違う——

違う——

違う——

桂

「ちが——っ!!」

ユメイ

「桂ちゃん、しっかり!」

白い花の香りが、血の海のようなひたすらの赤に沈み込んだ意識を浮かび上がらせた。

桂

「あ……ああ……」

赤の洪水に溺れかけていたわたしは、白を染め抜く赤に負けない、強い白にしがみつくと。本当に溺れていたみたいに、わたしの息は荒く乱れて、胸が詰まって苦しくて。

ユメイ

「桂ちゃん、もう大丈夫よ。大丈夫だから。わたしはちゃんとここにいるから」

桂

「うん……」

手触りの良い着物の感触と、着物越しの柔らかく温かい感触に、ぼろぼろと涙が零れた。

ユメイ

「桂ちゃん、何が違ったの？」

桂

「思い出したいことが、思い出せなくて……思い出そうとすると、痛い赤いのばかりで……」

わたしはしゃくり上げながら、ユメイさんの胸に顔を埋めた。

桂

「昨日はお父さんと、お母さんと、小さいわたしと、ユメイさんが一緒にいる風景が浮かんできたのに……」

桂

「ねえ、ユメイさんは……ハクカなの？ わたしと背比べをしたハクカなの？」

ユメイ

「……いいえ、わたしは違うわ」

そうだ。あの一緒にいる風景では、わたしは小さいわたしだったのに、ユメイさんは今のまま。

桂

「じゃあ——」

桂

「——ああっ」

赤い痛みにすぐむ身体。瞬間、ユメイさんにすがりつく腕の力が何倍にもなる。

桂

「やだよお……わたし思い出せないよお……」

ユメイ

「桂ちゃん、無理に思い出そうとしないで」

まだずきずきと痛む頭を撫でてくれる、ユメイさんの優しい手。

その白い手の感触を確かに知っているはずなのに、どうしても思い出せないのが悲しくて、悔しくて、情けなくて——

桂

「でも、思い出せないと……わたし、思い出さないといっしょに、いら……いちゃだめだって……うっく……」

サクヤ
「……桂」

桂
「うっ……ううっ……」

サクヤ
「桂、もうおよし。もう思い出そうとなんてするんじゃないよ。今のあんたはすごく不安定だ」

桂
「……でも……わたっ、わたし……やだ……」

サクヤ
「わかるよ。あんたはまだその歳だし、母親べったりだったんだし」

サクヤ
「いい年した大人だって、身内を亡くしてひとりになるのは堪えるもんだからねえ……」

桂
「ううっ……」

サクヤ
「真弓が逝っちゃった後も、見た感じはいつものあんたみたいだったから、血の件さえ何とかすれば大丈夫って思ってたんだけどさ——」

サクヤ
「あんた、見かけ以上に頑固者だから、葬式の後には我慢してたんだろう？ 友達なんかには心配かけないように、ずっと我慢してたんだろう？」

桂
「……うっ……うん……」

サクヤ
「あんたみたいなのは根性締めてる間は強いけど、緩むともうどうしようも無くなるからね」

サクヤ
「はあ……まったく、呆れるほど長生きしてるっていうのに、察してやれなくて悪かったよ」

サクヤさんはその長い腕で、背中の方からユメイさんごとわたしを抱き占めた。ボリュームのある胸がわたしの肩に乗せられて、つむじのあたりから声がする。

サクヤ

「……聞いての通りだよ、烏月。桂を帰すわけにはいかなかった」

烏月

「そのようですね」

サクヤ

「贅の血が連中に渡ることまで心配しなきゃいけないあんたには悪いと思うけどさ、今の状態のまま帰しても、かえって危険な感じなんでね」

烏月

「では……当面は呪符で結界を張り、屋敷内の安全を確保することにしましょう」

烏月

「現身をもつ鬼の物理的な侵入は防げませんが、あの双子のような霊的存在ならば、よほどの鬼でない限り防げるはずですよ」

サクヤ

「ここが安全になる対策なら、遠慮なく何でもできる限りのことをやっておくれよ」

サクヤ

「桂だって、いつまでも夏休みってわけにはいかないんだけどね——」

サクヤ

「——まあ、あとしばらくは仕方がないさ」
わたしはここに残れることになった。
いや、わたしはここにしかいられなくなったのかもしれない。
ユメイさんのいる、この経観塚にしか。

——鈴の音がして、がたがたと窓が鳴った。

——鈴の音がして、みしみしと梁が軋んだ。

——鈴の音がして、扉が叩かれた。

窓の外で火花が散ったような光が一瞬。

桂

「ひっ——」

ユメイ

「大丈夫よ、桂ちゃん。心配しないで」
思わず飛び起きそうになるわたしの身体が、優しく抑えられた。

ユメイ

「鳥月さんの貼ったお札が効いているから、あの子たちは脅かすぐらいのことしか出来な
いわ」

何があっても窓を開けてはいけないと、鳥月さんに注意されていた。

ユメイ

「わたしたちの方から出て行きさえしなければ、何も心配しなくていいのよ」

桂

「うん……」

とはいえ、台風の直撃にさらされているような家鳴りは、わたしを不安にさせるには十分で。

ユメイ

「眠れない？」

こくり。

ユメイ

「そうね……それならわたしと一緒に寝る？」

桂

「え？」

ユメイ

「ふふふ、もうそんな子供じゃないかしら」

桂

「お布団、そんなに大きくないし……」

ユメイ

「そうね、桂ちゃんもずいぶんと——わたしとあまり変わらないほど大きくなったものね」

桂

「うん……でも……」

ユメイ

「なあに？」

桂

「手だけ……握ってもいい？」

ユメイ

「ええ、それで桂ちゃんが怖くなくなるのなら」
お布団の中から伸ばした手を、きゅっと握ってくれるユメイさん。

ユメイ
「それじゃあ桂ちゃん、おやすみなさい」

桂
「うん——」
とくんと高鳴る心臓が、嵐の音をかき消してくれた。

桂
「はあ～～～」

サクヤ
「朝っぱらから何事だい。恋文突っ返された乙女みたいに、この世のおしまいだって絶望的な顔して不景気なため息なんか吐いちゃってまァ」

桂
「……ううっ、そんなにひどい顔してないよ」

サクヤ
「鏡でもないと本人には見えないからねえ。まあ、あんなことがあったんだから、ちょっとは寝不足だろうけどさ」

桂
「サクヤさんはいいね。悩みとかストレスなんかとは無縁そう」

サクヤ
「なるほど、若き乙女の悩みなわけかい。人生の大先輩たるサクヤお姉さんに相談してみなよ」

桂
「お姉さんなら大がつくほど先輩じゃないだろうし、大先輩ならお姉さんじゃなくて——」

サクヤ
「なくて？」

どーんと空気が重くなった。
どうせなら重くじゃなくて、涼しくなってくれた方がいいんだけど……

桂
「あ、その、えーとね。サクヤさんもお母さんの友達なんだから、そろそろお姉さんって年齢じゃないんじゃないかなーって……」

サクヤ

「あたしがいくつかも知らないくせに、憶測だけで人の世代を決めつけるんじゃないよ」

サクヤ

「小学生のお嬢さんから悠悠自適の隠居爺さんまで、あたしの付き合いは幅がある方なんだけど。なんなら画像添付のメール、見てみるかい？」

桂

「ううっ……」

なるほど、同級生とその上下一学年に偏っているわたしと違って、交友範囲が広いわけだ。

付き合いのある友達の年齢で、本人の年齢を測るわけにはいかないというのは認めよう。でも。

桂

「じゃあ、サクヤさんっていくつ？」

サクヤ

「さて、いくつだったかねえ……」

サクヤさんはすっとぼけつつ鮭の切り身にお醤油をたらすと、お箸でほぐしてご飯に乗せた。

桂

「あ、サクヤさんお醤油かけすぎ」

サクヤ

「いいだろ。あたしは塩気の利いてるのが好きなんだよ。鮭ならガチガチの塩漬が一番だね」

桂

「えー、あのお茶漬けにでもしないと辛いやつ？そんなんじゃ血圧上がるよ。長生きできないよ」

サクヤ

「残念ながら、憎まれっ子何とやら、さ。少なくとも、あんたよりは長生きするだろうよ」

そう言って口に運ぶお箸に乗ったご飯の量は、わたしの一口の倍ほどもある健啖ぶり。

よく食べ、よく笑い、しっかり身体も動かしたりしているサクヤさんは、確かにわたしよりも長生きしそうな感じだった。

でも、それを言うならお母さんだって……

桂

「……………」

サクヤ

「……まったく、さっきからどうしたんだい。低血压ってわけでもないんだろ？」

桂

「あ、今のはちょっと別。サクヤさんの食べっぷり見てたら、お母さんのこと思い出しちゃって」

サクヤ

「ああ、真弓の奴はよく食ったねえ……」

サクヤ

「で、それじゃあその前は一体なんだい？」

桂

「烏月さんが来てないなあ……って」

お膳が並ぶ広間を見渡してみても、目立って姿勢のいい人影は見当たらない。

桂

「……昨夜、あんな別れ方しちゃったから」

サクヤ

「気にすることはないよ。あんなヒカリモノ振り回すような危ない連中に関わると、決まって面倒なことになるしねえ」

あまりに常識外の出来事だったので、わたしの頭の中にある一連の記憶は、昨夜の夢を記したものなのでは――

そう疑う気持ちが消せなくて、烏月さんが昨日の朝のように一緒にごはんを食べてくれるんじゃないかって期待していたんだけど。

それをサクヤさんが口にしてくる以上、わたしひとりの頭の中に収まる夢ではなかったらしい。

あるいは、今も夢のさなかということか。

サクヤ

「大方あの後だって、『この昂ぶった血をどうしてくれよう』とか何とか、外をうろうろしてたんだろしさ」

桂

「あのね、サクヤさん。烏月さんはそんな辻斬りみたいなこと――」

アナウンサー

『次のニュースです。本日未明、経観塚村で男性の変死体が発見されました』

桂

「えっ!？」

爽やかな朝食時には似つかわしくない、陰惨な事件を読み上げるニュースの声の中から知った地名を拾い上げ、わたしたちはテレビに注目した。

アナウンサー

『発見された男性は、地元の中学校で歴史を教えている男性教諭・鹿之川智林さん三十歳』

アナウンサー

『鹿之川さんは先日より帰宅しておらず、家族の方は安否を気遣っていたところ、思いがけない訃報となった様子です』

サクヤ

「あーあ、ついにやっちゃまったねえ」

桂

「だから、烏月さんがしたわけじゃ……」

アナウンサー

『体内に血液が残されていなかったことから、死因は出血死とみられています』

アナウンサー

『なお遺体が発見された現場付近に血痕がなかったことから、鹿之川さんが殺害されたのは別の場所とみられており——』

女将

「こんな田舎まで、最近は何事なのねえ」

空のおひつを手にも、私たちの傍を通りかかった女将さんが、他のお客さんと話しているのが聞こえてきた。

血が一滴も残ってないなんて、まるで吸血鬼の仕業みたいだと——

桂

「ほら、やっぱり烏月さんじゃないよ。吸血鬼ってノゾミちゃんとミカゲちゃんのことだよ。だってあの子たち、わたしの血を——」

サクヤ

「桂の血がどうしたって？ それにユメイじゃなくてノゾミにミカゲだって？」

わたしの言葉を遮って、低く厳しい声と視線で昨夜のことを訊いてくる。

サクヤ

「あたしは途中参加だったからね。ユメイと烏月が来るまでの間に、あんたに何があって、あんたは何を知ったんだい？」

桂

「うん……」

わたしはお箸をお膳に置いて、とつとつと話し始めた。

小さなわたしの小さな手が、思い出せない誰かの血に染まる、赤い痛みをともなう夢を見たこと。

そんな悪夢を見せたのは、目覚めた後に現れたノゾミちゃんとミカゲちゃんらしいということ。

彼女たちが言うには、血には《力》が宿っていて、わたしの血はその中でも特別だということ。

そしてわたしは襲われて、ユメイさんに助けってもらって、でもユメイさんも危なくなっ
て、いよいよというときに烏月さんが現れたこと。

サクヤ

「まさか、烏月はともかくあいつが……」

桂

「あいつって、ノゾミちゃんたちのこと？ サクヤさん知ってるの？」

サクヤ

「あ……ああ、まあね。そのノゾミとミカゲって奴らは、退治されてるはずなんだけど……」

桂

「そうなの？」

そういえば、烏月さんに向かってそんな感じのことを言っていたかもしれない。

サクヤ

「……桂、あんたもう帰りな」

桂

「はい？」

サクヤさんの言葉はいきなりだった。

桂

「えっと……帰れ？」

サクヤ

「さっきのニュースで言ってた通り、物騒な事件があって、まだその犯人は見つかっちゃいない」

桂

「だから、それはノゾミちゃんたちが——」

サクヤ

「相手がそういった類ならなおさらに」

サクヤ

「あんたが狙われているんだろう？ そのくせ身を守る術を持っていないんだろう？ それなら逃げるのは当然じゃないか」

桂

「それは……でも……」

サクヤ

「いいかい、こっちに来た途端に狙われるようになったんなら、向こうに戻れば狙われなくなる。そいつらが追ってこない限りね」

サクヤ

「ユメイひとりじゃ、あんたを庇うのはキツイみたいだし、今度は烏月が来てくれるとは限らない。あんたは帰るべきなんだよ。違うかい？」

周りを見ても、烏月さんは見つからない。

桂

「だけどね、サクヤさん」

サクヤ

「だけどってあんた、あんな目にあってまで、こんな所に残りたいって言うのかい？」

向けられた、赤い瞳の怖さを憶えている。

向けられた、鋼の刃の怖さを憶えている。

サクヤ

「危険を押しつけてまでこっちに残りたいって理由が、あたしにはわからないんだけどね」

桂

「それは——」

わたしが訊きたいぐらいだ。

ここに来た目的はお父さんの実家を見ることで、まだ行ってないっていう、こじつけみたいな理由もあるけど。

サクヤ

「答えられないわけだ。だったらもういいだろ。笑子さんの家だって、昨日のうちに見て——」

桂

「まだ見てないもん」

もう、こうなったらこじつけでもいい。

わたしは帰れというサクヤさんの言葉に、少しも納得できていない。

桂

「まだ見てないもん、お父さんの実家」

サクヤ

「……だったね。ご神木まで行っておきながら、あんたは何をやってるんだか」

桂

「だって……でも、行っておきながらって？」

サクヤ

「あんたの頭には羽様って地名は入っていないのかい？ あの山の入り口になってる鎮守の森の奥に、羽様の屋敷があるんだよ」

桂

「……はい？」

サクヤ

「山に登る前にでも後にでも、少し歩くだけで立ち寄れたはずなのにねえ」

桂

「ううっ……だって、昨日の朝は……」

鳥月さんと共通の話題が出来ると思って、浮かれて出発したんだもん。

鳥月さんのこと嫌ってるみたいだから、口に出しては言えないけど。

桂

「……………」

サクヤ

「……やれやれ。仕方のない子だよ、あんたは」

桂

「サクヤさん？」

サクヤ

「日が出ている間なら大丈夫だろうから、連れて行ってあげるよ。バスよりあたしの車のほうが、何かと都合がいいだろうしね」

ハンドルが左に切られると、ふっと視界が薄暗くなり、長閑な田園風景が一転する。

見えない力で運転席側に引き寄せられるような感覚がなくなると、目の前にあるのは森に通されたトンネルのような道。

天井知らずに突き抜けていた青空は、濃淡もまだらな緑に取って代わられて、お日様の光が直接射し込んでいるようなところは少ない。

わたしの収まるシートを揺るがす、路面からの突き上げが増した。

桂

「ねえ、サクヤさん。この車ってでこぼこ道に強いんじゃないっけ？」

サクヤ

「強いよ。そうでもなけりゃ、もっと安くて燃費のいい、環境にも懐にも優しい車に乗り換えてるよ」

桂

「でも、がたがた揺れてるよ？」

サクヤ

「走破性と居住性は別項目だからねえ。戦車なんかは乗り心地最悪だって話だよ」

サクヤ

「それより桂、前に見える脇道」

サクヤさんにうながされて、フロントガラスに目を移す。

知らなかったら素通りしてしまうかもしれない狭い道は、あっという間に後ろへ流れていってしまった。

サクヤ

「昨日はあそこから入ったんだろう？」

桂

「うん。旅館の女将さんに教えてもらって」

サクヤ

「それで、もう少し進むとだね——ほら」

トンネルの終わりが近づいてきた。

柔らかに遮られた陽射しに慣れた目には、射し込んでくる白い光がまぶしくて、その先にある家はまだ見えていない。

目を細めて光量を調節する。

トンネルの終わりがさらに近づいてきた。

サクヤ

「桂？ どうしたんだい？」

桂

「……え？」

声を掛けられて我に返る。

意識が飛んでいたのは一瞬——ではなかったのか、車は森の出口ぎりぎりの日陰に止まっていて、エンジンもすでに切られていた。

桂

「あ、別に何でもない」

サクヤ

「ならいいけど、もう着いてるよ。あたしもここに来るのはずいぶんと久しぶりだねえ」

サクヤさんがドアを開けると、エアコンの効いていた車内にむわっとした熱気が流れ込んできた。

桂

「わ、ちょっと待って……」

さっさと降りてしまったサクヤさんを追って、助手席側のドアを開く。そうだ、シートベルトも外さないよね。

自由になった上半身を心持ち乗り出して、降りる足場を確かめる。背の高い車なので、乗り降りにはちょっと大変だったりするのだ。

サクヤ

「ほら」

桂

「ありがとう。サクヤさん優しい」

サクヤ

「おだてたって、何にも出ないよ」

こちら側に回り込んできたサクヤさんに手を貸してもらって、舗装されていない土を踏む。

サクヤ

「ほら、到着だ。あれが笑子さんの家で、あんたが生まれた屋敷だよ」

視線を追うと、野原と化した庭の向こうに、でんと鎮座するお屋敷の佇まいが見えた。

まず、家は平屋で相当に古い。

古い上に敷地は広く、離れには蔵のような建物さえ見える。

門や垣根はないものの、この森自体がそういった役割を果たしているのか、家の周りだけがドーナツの真ん中のように、ぽっかりと開けている。

黒瓦はすっかり苔生していて、家までが周りの自然の一部となってしまうような

風格さえある。

桂

「わ、お金持ちのお屋敷みたい……」

サクヤ

「一応、経観塚の昔話にでてくる長者の末っ子になってるからね」

桂

「そうなの？」

サクヤ

「佐藤や武藤の例と同じで、羽藤の藤も藤原氏の縁故だからなんだとさ」

桂

「むー、藤原氏かあ……」

藤原氏と言えば、いつも満月の藤原道長さんが一番偉かったんだろうけど、このあたりだと藤原四代の人の方が人気あるのかな？

そんな感じで藤原姓の人って教科書にはいっぱい出てくるし、単に藤の字がつく苗字の人なら、佐藤さんは日本一の多数派だし。

桂

「んー、何かぴんと来ないなあ」

サクヤ

「だろうねえ。それに本当のところ、あんたの羽藤は藤原ゆかりの姓じゃないし」

桂

「なーんだ」

サクヤ

「ご先祖が長者だっっていうのは、間違いないんだけどね。来る途中、森に入るまでの間、見渡す限り田畑が広がっていただろう？」

桂

「うん」

サクヤ

「あれ、戦後の農地改革まではほとんど羽藤の持ち物だったんだよ。笑子さんがあんたぐらいの時はそうだったから、まだ最近だ」

桂

「ええ！？ 本当！？」

藤原氏がどうのこうのと言うよりも、わかりやすい説明だった。

桂

「すごいなあ。時代が違ったら、わたしもお嬢様だったりお姫様だったりしたわけだ」

サクヤ

「ああ、お姫様だったねえ……」

桂

「でもまあ、昔は昔、今は今だよ。わたしは手狭なアパート暮らしが身に馴染んだ庶民だし」

サクヤ

「生まれたのはこの屋敷でだけだね。それじゃ、中を見にいこうか」

先に立って歩くサクヤさんに続いて、普段のわたしなら近寄るのも躊躇してしまうような、草ぼうぼうの庭を進む。

昨日の山登りに比べたらこの程度。

飛び石伝いにピョコピョコ行けば、あんまり草を踏んづけて歩かなくても大丈夫だしね。

桂

「よっ、けーん、けーん——」

サクヤ

「シッ！」

急に立ち止まったサクヤさんの背中に、鼻をぶつけた。しかも勢いを弱められないジャンプで。

桂

「ううっ、はないひゃい……」

サクヤ

「静かに。何かいる」

桂

「ふえっ!？」

思わず声を上げてしまってから、鼻を押さえていた手を口元まで引き下げる。

何だろう。ずっと空き家だったなら、誰かが住み着いていてもおかしくないけど——

サクヤ

「すんっ——すんっ、すんっ」

臭いを嗅ぐ音が意外と大きく耳に届いて、これは大きさからして熊でも出たんじゃないかと思ったら、何と発生源はサクヤさん。

鼻をひくつかせながら、ゆっくりと首を巡らせて、臭いの出所を探そうとしている。

そういえば鼻が利くって言っていたけど、耳を澄ました方がいいんじゃないかと思う。

もちろんわたしの鼻では、草いきれの他の臭いなんて察知できない。ってゆーか、ぶつけた痛みがまだ残っている。

サクヤ

「——すんっ」

成果を得たのか諦めたのか、サクヤさんの動きが止まった。

サクヤ

「そこだ——っ！」

静から動への切り替わりは、陸上競技百メートル走のロケットスタートよりも速い、野生動物そのものの急加速。

長い足を大きくスライドさせて、ざんざんと草を蹴立てて、目線の先に向かって直進する。

——

「うわあっ、こっち来た!？」

女の子の声がした。

まだまだ小さな子供といった感じの、女の子の声がして、向こうの茂みががさがさ揺れた。

枇

揺れた茂みから飛び出してきたのは、真っ白い毛並みの生き物だった。

その生き物は、薄（すすき）の穂を束ねたようなふさふさの尻尾をくねらせて、森の方へと走っていく。

時折立ち止まっては振り返り、こちらの様子をうかがい見ているので、素早い動きにもかかわらず、いまだ視界の中にいる。

桂

「わ、狐だよ狐！ ちっちゃくて可愛くて真っ白でシャッターチャンス！」

犬や猫じゃない動物を間近で見る機会は滅多にないので、ちょっと興奮していた——と、そこではたと気が付く。

桂

「……あれ？ 女の子……じゃない？」

視界の先には白い狐。狐がする悪戯の定番と言えば。

桂

「……サクヤさん、わたし化かされたりした？」

そんな落語のような話も、今のわたしには受け入れられるだけの素地がある。血を吸う

鬼がいるのなら、狐狸の類だって人を化かすだろう。

サクヤ

「桂、それで納得したら化かされたことになるよ。そっちは囷だよ！」

狐を無視して直進しつづけていたサクヤさんは、止まって茂みに手を突っ込んだ。

女の子の声

「うわわわわっ」

先ほど聞こえた女の子の声。

サクヤ

「音や姿は他に託せても、臭いまでは分散させられないからねえ」

ずぼっと引き抜いた手の先には、襟首をつかまれた小学生ぐらいの女の子。

女の子

「たはは、捕まってしまいましたー。そんなに臭いますかねー」

前腕を鼻に近づけて、くんかと臭いを嗅いでみせるあたり、悪びれた感じが無い。

サクヤ

「あたしの鼻は特別でね」

女の子

「はあ、それは運がなかったですけど、引き時をわきまえなかったのが一番の敗因ですよねー」

女の子

「このところ、このあたりも騒がしくなってきたんですけど、なかなか居心地いいもので、ついついぐずぐずしてしまいましたからねえ……」

女の子

「今朝も山に登っていく人を見かけましたから、そこで逃げとくべきだったんですよねー」

桂

「山に登っていく人……？」

女の子

「はいです。こっちの家には目もくれず、真っ直ぐ脇道に入って行きましたが、それって、もしかして……」

桂

「その人って、髪の毛の長い綺麗な人じゃなかった？ 黒い制服着てて、こう、剣道の竹刀を入

れるような袋を持ってる」

女の子

「はいはいそんな感じでしたね。北斗学院付属の制服でした。確か剣道部が全国大会常連の古豪ですけど、よもや山籠りじゃありませんよねー」

桂

「わ、くわしい……」

だけど、もしかしたらとっていたけど、やっぱり鳥月さんはこの山に来ていた。

そしてこの山に来ている以上、あの場所に行ったに決まっている。

わたしが昨日、ケイクンと出会ったオハシラサマのご神木がそびえるあの場所に。

今にして思えば、ケイクンのことを話したときの鳥月さんの表情は怖いほどに鋭くて、それは鬼切り役としての顔だった。

桂

「……………」

会いたい。

会って話をしたい。

わたしが帰らずに経観塚に残ったのも、本当はこのお屋敷を見るためじゃなくて、あんな別れ方をした鳥月さんと話をしたかったからだ。

そんなことを言ったら、サクヤさんは反対するだろうけど――

サクヤ

「あんた、ここは管理者不在だったとはいえ私有地だよ。直接あんたが罰せられるようなことはないだろうけど、立派な不法侵入だ」

女の子

「たはは、おっしゃる通りです。確か百三十条でしたよねー」

サクヤ

「はん、なかなか肝の据わったお子様じゃないか。あたしの質問にちゃんと答えてくれるか、なんだか今から不安だねえ」

女の子

「ちょっとおねーさん、笑顔が怖いですよ？」

サクヤ

「そう見えるとしたら、あんたに罪の意識があるからさ」

女の子

「それは違いますよう！ 客観的に見て怖いですよ！」

サクヤ

「ふふふふふふ……」

——サクヤさんは捕まえた子とのやり取りに集中していた。

一歩その場で後ろに下がって、あの場所へ向かう脇道に、ほんの少し近づいてみる。

女の子

「お待ちください、おねーさん。捕虜の虐待は禁止されてますよ？ 拷問で得た証言は証拠としての能力を持ちませんよ？」

サクヤ

「うるさいね。拷問じゃなくて詰問だよ」

二歩、三歩と足を運んでも、わたしの動きは見咎められない。

わたしの方を見ているのは、いつの間にか近づいてきていた、白い子狐だけだった。

桂

「しー」

一本だけ立てた人差し指を唇に寄せて、静かにしてねの合図を送ると、子狐はこくりと頷いた。

……わかっているのかな？

一声も鳴かずに大人しくしている様子からして、何だかわかっているっぽい。さっきの陽動作戦といい、かなり頭のいい子なのかも。

ごめんね、サクヤさん——

わたしは心の中で謝ると、そろりとその場を抜け出した。

女の子

「ですから、問い詰めないでも答えますよう。答えないだなんて言ってないですよ」

サクヤ

「じゃあ、あんたの名前は？ 年齢は？ 保護者はどこにいるんだい？ そのなりからして家出でもしてるのかい？ いつから居るんだい？」

ふたりの声が遠ざかる。

このまま森の道を引き返し、途中の脇道に折れ込んで、手ぶらだけれど山を登ろう。

お屋敷の中を見てしまったら、用は済んだねと帰されてしまうかもしれない。

だとしたら、チャンスはもう今しかないんだから。

サクヤ

「なんだい、烏月のことが気になるのかい？」

桂

「ううん、別に……」

本当はすごく気になるんだけど——

けんもほろろな昨夜のことを思い出すと、わたしはどうしようもなくなってしまう。

会ったところで話もできないんじゃないじゃあ……

サクヤ

「なんだい、鳥月のことが気になるのかい？」

桂

「ううん、別に……」

サクヤ

「そうかい。君子危うきに近寄らずだから、それならそれでいいんだけどね」

女の子

「あの一、質問よろしいでしょーか？」

女の子

「今話題になってるその鳥月さんという方は、近寄ると危ない類の人なんでしょーか？」

サクヤ

「危ないって言えば危ないねえ。あんたはともかく、そっちの相棒なんかは一寸刻み五分刻みだね。あいつのご先祖様は狐殺しのうちひとりだし」

女の子

「それは恐ろしいですねー、怖いですねー、ふたつあわせて恐怖なんですなー」

わかっているのかいないのか、白い子狐がうんうんと頷いていた。

そりゃあ白狐はお稲荷様のお使いとかの、靈妙不可思議な存在だって、落語なんかでもお馴染みなんだけど。

いくらユメイさんを切ろうとした鳥月さんでも、そこまで徹底的に疑わしきを罰しようとはしないんじゃないかと思う。

サクヤ

「まあ、そういうことだから、さっさと逃げるに越したことはないよ」

女の子

「逃げるにやぶさかでないんですけど、果たしてわたしたちは逃がしていただけるんではしょーか？」

物怖じせずに普通に話しているけれど、さっきから襟首をつかまれっぱなしだった。

サクヤ

「桂、どうする？」

桂

「え？ わたしが決めるの？」

サクヤ

「この家の相続権持ってるのは桂だろ？」

桂

「んー、じゃあ、離してあげてもいいんじゃないかな」

サクヤ

「はい」

女の子

「うわー、何ともあっさり」

サクヤ

「じゃあ捕まえようかね」

女の子

「うわー、桂おねーさん助けてくださーい」

桂

「離してあげようよ」

サクヤ

「はいはい」

桂

「へー」

途中の脇道ということは山の方に行ったということ。

まあお祭りも近いわけだから、あのご神木を訪れる人もいるだろう。もしかしたらケイクンかもしれない。

鳥月さんに、ケイクンと会ったこと言わなかったけど……

最後の別れが昨夜のあれじゃあ、もう話してもらえないかもしれない。

桂

「はあ～～～」

女の子

「どーかしましたか？」

桂

「あ、何でもないない、何でもないよ」

ところで、さっきから普通に話しているけれど、女の子はさっきから襟首をつかまれっぱなしだった。

桂

「ねえ、サクヤさん」

そろそろ離してあげたらと視線で訊ねると。

サクヤ

「桂、どうする？」

桂

「え？ わたしが決めるの？」

サクヤ

「この家の相続権持ってるのは桂だろ？」

桂

「んー、じゃあ、離してあげてもいいんじゃないかな」

サクヤ

「はい」

女の子

「うわー、何ともあっさり」

サクヤ

「じゃあ捕まえようかね」

女の子

「うわー、桂おねーさん助けてくださーい」

桂

「離してあげようよ」

サクヤ

「はいはい」

さてさて。

女の子

「それで、そちらが桂おねーさんで、そちらがサクヤさんですね」

桂

「自己紹介したっけ？」

女の子

「おふたりの話を聞いているうちに、それぐらいの情報は。わたくし、若杉葛と申します」
葛ちゃんがぺこり。

葛

「そっちのは尾花です」

尾花ちゃんもぺこり。

むむ、葛ちゃんも年齢不相応に賢い子だけど、尾花ちゃんも賢いっぽい。きっとお手とかの基本芸は一通りマスターしてるに違いない。

サクヤ

「じゃあ、あたしはこの屋敷の中を一通り見たら町に引き返すんだけど、そのときに」

葛

「はいです。駅まで乗せていってくださるのであれば御の字です」

桂

「だけど葛ちゃん、尾花ちゃん連れて電車に乗れるの？」

葛

「問題ないです。荷物の中に隠しておけば、鳴いたり暴れたりしませんから」

桂

「でも、それって暑くて窮屈そう……」

葛

「暑いのは乗るまでの辛抱ですよ。人事ですけど」

桂

「わ、さりげにクールだ……」

サクヤ

「あたしの車なら時間に関係なく、今すぐにでも出れるんだけどねえ」

桂

「だから、明日の電車で帰るってば。今日は最後の晚餐と温泉を心ゆくまで味わうの」
その晚餐——晩ごはんが並んでいるだろう広間へ向かう途中も、サクヤさんが食い下がってくる。

曰く、羽様のお屋敷を見たんだから帰れ。

サクヤ

「昨夜のアレで懲りてないなんて、あんたも喉元過ぎれば忘れる口かい」

サクヤ

「別に夜中に発ってもいいんだよ。車内の広さは十分あるし、シェラフも積んであるから、眠いなら寝ててくれてかまわないし」

桂

「十分な睡眠が必要なのは運転手さんの方。夜中に無理して運転するのだって、同じぐらい危ないんだから」

桂

「大丈夫。向こうだって昨日で懲りたと思うから、しばらくは来ないんじゃないかな」

サクヤ

「それはどうかねえ……」

桂

「サクヤさんは見てないけど、烏月さんが刀を一振りしただけで、逃げ帰っちゃったんだよ。ノゾミちゃんたち」

サクヤ

「あんたと変わらない若さで役を継いでる烏月の実力は、まあ認めないこともないけどね。その烏月とは切れたままじゃないか」

桂

「それはそれ、これはこれだと思うよ。わたしを助けるためじゃなくて、お化け——じゃなくて、鬼を切るために、来てくれるとは思うんだよね」

サクヤ

「……それも奴が居ればの話だけどね」

サクヤ

「ほら、烏月はいないよ」

桂

「烏月さんだけじゃなくて、ほかのお客さんだってまだだよ」

桂

「あ、女将さん今日のごはんも楽しみにしています」

女将

「あら、羽藤さんに浅間さんが今日の一番乗りですね」

桂

「えとですねえ、明日チェックアウトすることになったんで、晩ごはんは今日が食べ納めなんですよ」

女将

「あらあら、そうなんですか」

桂

「そういうわけで、明日の朝ごはんまでお世話になります」
ぺこり。

女将

「そうなの。もう少しでお召し上がりになれますから、存分に味わってくださいね」

桂

「はい、それはもう」

会釈をして立ち去る女将さんから、無然とした顔のサクヤさんに視線を移してにっこり笑う。

桂

「もう今日まで泊まるって言っちゃった」

サクヤ

「まったく、何を言っても無駄なんだねえ。普段はふにゃふにゃ骨なしなのに、決めたらテコでも動かないのは真弓ゆずりだよ」

桂

「そりゃあね、ずっとお母さんに育てられてきたんだもん」

サクヤさん、深く嘆息。

そのサクヤさんの不機嫌が飛んで行くほど、今日の晩ごはんも美味しかった。

美味しかったのに、お膳が片付けられた後も、烏月さんは広間に姿を現さなかった。

額に浮いた汗が珠になり、流れ落ちようとする気配を感じて、そろそろ小休止する頃合いだと立ち止まる。

桂

「……喉、渴いたな……」

とはいえ今は手ぶらの身で、見回したところで喫茶店も自動販売機も何もない。

桂

「がまん、がまん……辛抱だよ」

普段ならお水かお茶のペットボトルぐらい抜かりなく用意してくるんだけど、さすがに

今回は余裕がなかった。

それを承知で選んだ強行軍なんだけど、下手に根性で無理をしたら日射病や熱射病が怖い。

手持ちの駒が少ないからこそ、ミッションは計画的に、焦らず冷静に進めないかね。少しでも身体を冷やそうと、上着の裾をぱたぱたさせて肌に直接風を送る。

桂

「ふい〜〜」

ちょっとはしたない行為だけど、誰もいないからまあオッケーということで。

冷却水の足りないポンコツエンジンがオーバーヒートしないように、こまめに休憩を入れながら、よくぞここまで来たものだ。

桂

「さて……そろそろ行きますか」

ハンカチはしまわずに手に持ったまま、立ち上がる。
ぎゅっと握って入れた気合いを、足に回して歩き出す。

それにしても妙だった。

妙に思えるほど静かだった。

いくら深い山の中でも、日中途絶えることなく蝉の声が続くということは、いくらなんでもありえない。間が空くのもいたって普通のこと。

だけど、この間は絶対におかしいと思った。

オハシラサマのご神木がある、あの開けた場所でも蝉の声は聞こえなかったけれど、あの心落ち着く静けさとはずいぶんと違う。

そろそろと歩く。

桂

「——！？」

何が何だかわからないうちに、わたしは地面に転がされていた。

土の地面は柔らかかったけど、思いっきり背中を打ち付けて、吐き出したまま息が止まる。

すっかり肺から出て行った空気の代わりを補充する間もなく、焦点がぼやけるまで見開いた目がまぶしく光る何かを捕らえた。

仰向けの体勢で見上げる、緑と青のまだらの空から、輝く星が降ってくる——

恐ろしさとまぶしさに目を閉じると、冷気を含んだ風が首を叩いた。

痛くはなかった。

恐る恐る目を開けると、顎の向こうの首元で、鏡のように磨かれた見覚えのある鋼鉄が、葉陰をすり抜けて届いた陽射しをはねて輝いている。

停止していた呼吸が復活――

一瞬で冷えきった身体に、同じだけの時間で温度が戻り、急激な変化に心臓が激しく動悸を打ちはじめた。

桂

「……ストップ。たんまして」

首を刎ね飛ばすすんでのところで静止しているのは、昨日も突きつけられた特徴のある刀身。

地金に木の年輪のような模様が浮かんでいる、鬼切りの霊刀・維斗の太刀。

桂

「あはは、鳥月さんに刀を向けられるのはこれで二回目……ううん、三回目かな。二度あることは三度あるんだねえ」

鳥月

「……あなたか」

落胆したような響きの混じった声とともに、引かれた刃が元の鞘に収められる。

鳥月

「見事にしてやられたな。こうしている間に、奴には逃げおおせられたか……」

どこぞの遠くへ視線を飛ばしなから、寝転がったままのわたしに手を差し伸べてくれる。

わたしはその手を両手で握り、十分な補助を得て立ち上がる。

桂

「奴ってケイクンのこと？」

鳥月

「……その質問に答える義務はない。あなたとの縁は昨夜切ったはずだ」

桂

「あっ……」

握ったままの手を払われた。

考えごとをしていたみたいだから、相手がわたしだって意識は全然なしに、手を差し伸べていたのかもしれない。

それならそれで、誰にでも手を差し伸べる基本的に優しい人ってことになるんだけど――

それは何だか、少し寂しい。

桂

「縁を切られてても、わたしの方には答えてもらう権利があるんじゃないかな。うん、あるよ、たぶんあるよ」

桂

「人のこと転ばせて刀を突きつけておいて『関係ない』はないんじゃないかな。それに人違いなら人違いで、なおさら事情を説明するべきだよ」

ちょっとだけへそを曲げたわたしは、ずいぶんと生意気な口を利く。

桂

「そのへんちゃんとしてくれないと、わたし鳥月さんのこと鬼って呼ぶよ」

しかも、けっこう意地悪だ。

桂

「それで、奴ってケイクンのこと？ もしかしてわたしのこと、ケイクんと間違えた？」

鳥月

「……ああ、あなたの言う通りだ」

桂

「相手をよく確かめないで乱暴するからだよ」

鳥月

「それに関してはすまないことをした」

鳥月

「だけど現身を持つ鬼の多くは、見かけを凌ぐ膂力を持っているものなんだ。童女や老婆の姿をしていても、やすやす人を引き裂いたりもする」

鳥月

「だから機先を制することで封じられるのなら、そうするに越したことはないんだよ。気配の質を見れば、奴か別人かわかるつもりだったしね」

桂

「つもりじゃ困るよ、鳥月さん。いくら同じ名前だからって、間違えるなんてひどい」

鳥月

「そんなことで気配まで似たりはしないものなんだけどね。いくら言霊が影響するとはいえ」

桂

「はあ……」

鳥月

「偶然なのか、奴があなたを利用したのかはわからない。だが、あなたの気配を奴のものと誤認したせいで、こうして逃げられてしまった」

鳥月

「……もう追いつけないだろうな」

大きなため息を吐かれた。

そんな風にされると、何だか謝らないといけないような気がしてくる。

ううっ、弱気になるなわたし。何も悪いことしてないんだから。

鳥月

「……それにしても、どうしてあなたがこんな所にいるんだい」

桂

「こんな所って、昨日もわたしここに来てるよ。ケイくんここで会ったって教えてあげたの、わたしだよ」

桂

「それにお祭りだってあるんだから、オハシラサマのご神木を見に、町の人も来たりするんじゃないかな？」

鳥月

「その可能性は低いと見ていた。参拝に来るような信心深い人は、この山が禁足地だということも知っているだろうし、結界の効果もある」

桂

「結界……？」

鳥月

「界を結び囲いを作ることで、内と外と、世界をふたつに切り離す。それが結界だ」

鳥月

「パスポートを所持していなければ、国の行き来に不自由があるように、資格を満たしていなければ、結界内外の行き来に不自由が科される」

鳥月

「障壁というほど強いものではないけれど、ここの結界には人払いの効果があるんだ」

鳥月

「それに抗う強い意志——踏み入るに足る目的がないならば、無意識が避けて通るように働きかける。例えば、急に別の用事を思い立ったりね」

鳥月

「先ほどのような事故が起こったのも、結界の効力を当て込んだ行動のせいなのだけれど、もしかすると《力》が弱まっているのか……」

桂

「わたし、ちゃんと目的があって来てるよ」

鳥月

「うん？」

桂

「昨日はご神木を見ようと思って来たし、今日は鳥月さんと会いたくて、話したくて」

桂

「ケイくんを見たって話をした時の鳥月さん、変だったから。昨日の夜で鳥月さんがケイくんを探してる理由、わかっちゃったから」

鳥月

「……………」

桂

「だから今日は、鬼切りの鳥月さんがこの山に来てるって思ってた。ちゃんと会えたしね」

鳥月

「……私と会って、一体何を」

桂

「切られた縁をね、結び直したいんだよ」

鳥月

「そんなことをして何になる。昨夜説明したはずだ。私は警告したはずだ」

桂

「鬼を引き寄せやすいわたしが、鬼切りの鳥月さんと関わると辛い思いをするって？」

鳥月

「その通りだよ。ただの人とさえ関わらないようにしているんだ。ましてやあなたは贅の血の持ち主。それなら——」

桂

「それでもっ!!」

遮る声が木霊した。

響きが吸い込まれるまでの間で、ゆっくり大きく息を吸う。

吸った息をゆっくりと、言葉とともに静かに吐き出す。

桂

「わたしはね、鳥月さんみたいに強くないから、『今あれをしないと』とか思っても、何もできないまま時間切れになっちゃうタイプなんだ」

桂

「それで後になって『ああしてれば』『こうしてれば』って後悔するの」

桂

「最近だと、もっとお母さんのお手伝いとかしとけば良かったって……そうしたらお母さん、過労で死んじゃったりしなかったかもって……」

桂

「だからね、わたしはずっとそういうふう生きてるんだから、後悔するかもしれない予約が今更ひとつぐらい入ったって、全然構わないよ」

桂

「それに鳥月さんの話って、やっぱり『もしも』の話だもん。そんな脅しに負けて逃げたら、わたし絶対に後悔する」

鳥月

「どうして——」

桂

「わたしが鳥月さんと仲良くしたいから」
正面から顔をしっかりと見つめて言う。

桂

「やっぱり、鳥月さんはひとりがいいの？ わたしと友達になるのは嫌？」

鳥月

「桂さん、あなたという人は——」

桂

「……………」

鳥月

「……………」

見つめ合う。
目をそらしたら負けだ。
わたしはじっと鳥月さんの強い瞳を見つめる。
風吹いて木の葉がさやと涼しげな音を立てた。
届いてくる木漏れ日がちらちらと揺れた。
額に浮かんだ汗が玉になって流れた。

鳥月

「ふう……」
沈黙を破ったのは鳥月さんのため息。
先に目をそらしたのは鳥月さん。

そして、先に言葉を発したのも。

鳥月

「私も桂さんと過ごした、何でもない時間は心地良かった」

桂

「鳥月さん……」

鳥月

「その心地良さを手放したくないと思ってしまったことを、きっと私は後悔するだろう」

桂

「そうかな？」

鳥月

「そう遠くない未来に」

桂

「うーん……」

鳥月

「だけど、すぐ傍にある後悔を、ひとつ避けることができたのかもしれないね」

桂

「だといいな。少なくともわたしは避けれたよ」

鳥月

「はは、桂さんも奇特な人だ」

桂

「あはは」

それからしばらく、わたしたちは顔を見合わせては笑いあった。

いつの間にか蝉が鳴いていた。

夏を遠ざける張り詰めた空気は、どこか遠くに去っていた。

桂

「……そういえば鳥月さん、それ冬服だね」

鳥月

「ああ、やっぱりこの格好は余計な人目を引くかな」

桂

「その、人目を引くっていうか……」

鳥月さん程の美人だと、着ているものが何であれ注目されるのは間違いないし、服装以前に刀剣所持を何とかしないといけないと思う。

だから、見た目はともかくとして。

桂

「……暑くないの？」

鳥月

「暑いね」

桂

「いや、そんな涼しげな顔で言われても……」

鳥月

「心頭滅却すれば、だよ。命には代えられないからね。この服の裏地には呪を縫いこんであるんだ」

桂

「わ……」

襟元に指を引っ掛けて、めくって裏地を見せてくれた。

鳥月

「ラフカディオ・ハーンの『耳無し芳一の話』みたいだろう？」

桂

「うん」

小泉八雲さんの小説より先に、大時代な不良マンガに出てくる改造学生服を想像してしまったのは、この際内緒にしておこう。

桂

「だけど、学校でもずっと冬服なの？」

鳥月

「役目があるから、申し訳程度にしか出席できていないけれどね」

桂

「それって、いじめられたりしない？」

鳥月

「問題は何も。実力行使で私をどうにかできる学生がいるなら、人材不足の千羽党に引き入れたいぐらいだよ」

桂

「だけど、みんなが無視したりとか……」

烏月

「私自らが人との関わりを抑えるようにして生きてきたんだ。それこそ何も問題ない」

桂

「……………」

烏月

「それに鬼切り役なんてやっているとね、普通の学生には付きようのない傷が付いたりするんだよ」

烏月

「その傷を見た大抵の人は、私のこの格好を受け入れてくれる」

桂

「……そんなに傷だらけになっても鬼と戦うんだ、烏月さんは」

烏月

「私が鬼を切らなければ、誰かが鬼に喰られるからね」

桂

「喰られ——」

桂

「——あ」

烏月

「……ああ、桂さんも人以外の何かを食べないといけないようだね」

桂

「ううっ……」

烏月

「今はもう、ここでこうしていても仕方ない。桂さんに他の用事がないのなら、山を降りようか」

サクヤ

「桂！ ちょっとあんた、一体どこに——」

サクヤ

「——って、なんであんたがいるんだい？」

桂

「仲直りしてもらったんだよ。あれ？ こっちは増えたけどそっちは減ってるね」

きよろきよろあたりを探っても、あの女の子と白い子狐の姿は見当たらない。

桂

「サクヤさん、あの子たちは？」

サクヤ

「家出娘と狐なら放してやったよ。いいだろう？下手なことしても後が怖いからね」

桂

「いいけど、後が怖いって……あんな小さい子が家出するなんてとんでもないことだよ、サクヤさん。ちゃんと保護してあげなくちゃ」

サクヤ

「心配ないよ、平気平気。金はたんまりあるみたいだし、世間を生き抜く知恵も知識も力も持ってるよ、あのお子様は。逞しいことだねえ」

桂

「でも……」

サクヤ

「家出するには家出するだけの理由があるんだよ。放っておいてやりな」

サクヤ

「で、なんで鳥月がいるんだい」

桂

「この山に来てると思って、会いに行ったんだよ。わたしの読みも捨てたものじゃないみたいだね」

サクヤ

「……鳥月。なんで桂に限って、いつものガンくれで追い返せないんだい」

鳥月

「刃物までおまけしましたよ、今日も。昨日は鬼の実物付きでしたしね」

桂

「あはは、今日だって鬼と間違えられて転ばされたりしたけれど、我慢比べはわたしの勝ち」

サクヤ

「あんたは、何をのほほんと」

鳥月

「この調子では、何を言い含めたところで無駄でしょう」

サクヤ

「……まったく。羽藤代々の太平楽さ加減と、真弓の強情さが合わさると、こうも非常時に扱いつらい性格になるわけだ」

サクヤ

「そりゃあ、頑固一遍の烏月の方が折れるしかなくなるわけだよ」

桂

「わ、さりげなく悪口言ってる？ それって全然誉めてない？」

サクヤ

「当然全然誉めてないよ。あんたはとっとと向こうに帰るべきだって、その意見は変わらないんだからね」

サクヤ

「それを『まだ見てないもん、お父さんの実家』なんて言うから連れて来てやれば、いつの間にか抜け出して、自分から鬼に関わりに行くし」

桂

「烏月さんは鬼じゃないよ？」

サクヤ

「似たようなものさ。夷を以て夷を制すっていうのが、大昔からのこの国のやり方だよ」

サクヤ

「大昔の鬼切部の元締め、陰陽寮の頭を張ってた安倍晴明なんか、化け狐との愛の子だしねえ」

桂

「うー」

サクヤ

「……で、烏月。あんたはどうするつもりだい？ どんな方針固めて桂と関わっていくつもりだい？」

桂

「そんな、わたしが勝手に……」

サクヤ

「駄目、駄目。将来の展望が何ひとつとしてないようじゃ、桂との付き合いを認めるわけにはいかないね」

桂

「わ、そんなのお母さんにだって言われたことないのに……」
保護者代理、出しゃばりすぎ。

桂

「サクヤさん、あんな小さい子の家出はほったらかしなのに、わたしの友達付き合いにはうるさいこと言うんだ？」

桂

「それってあの子はたまたま会っただけの他人だから？ それとも烏月さんとは仲悪いかから意地悪するの？」

サクヤ

「それもあるけど、非常時だからね」

サクヤ

「それで烏月」

烏月

「私が傍にいる限り、桂さんを鬼から守ることは出来ます。あの双子の鬼を切れば、当面の脅威は祓えるでしょう」

サクヤ

「まあ、そのぐらいはやってもらわないとね」

烏月

「ですが、問題は贄の血が次の鬼、そのまた次の鬼を桂さんの元へ引き寄せるだろうということですよ」

烏月

「この地に張られた結界が、外にその存在を悟られないよう隠す役割を果たしているようですが、桂さんは私と同じ時期に外からやってきた」

烏月

「だけど桂さん、あなたはつい最近まで鬼の影すら知ることなく、ここではないどこかで育った。そうだね？」

桂

「うん。この十年は全然遠くで」

烏月

「サクヤさん。桂さんはどうやって贄の血を隠していたんです？」

サクヤ

「ああ、それは多分アレのせいだね。桂、携帯貸しな」

桂

「……桂と携をかけた洒落？」

サクヤ

「馬鹿言ってるんじゃないよ。お守り、ストラップにしてるだろう」

桂

「あ、お祖母ちゃんが持ってたっていう？」

なるほど、わたしにもピンときた。

鬼に狙われやすいのが遺伝なら、ご先祖様も同じような問題を抱えていたわけで。

経観塚に居れば大丈夫で、昔の人は本当の意味で定住していた人が多かったとはいえ、さすがにお伊勢参りにも行けないのはちょっと不便。

そこで登場するのが羽藤の家に伝わるお守り。効能は普通の人並みに鬼に狙われにくくなります。これで野次喜多ファンのご先祖様も一安心。

桂

「はい」

サクヤ

「ほれ」

わたしの渡した携帯電話を、右から左で烏月さんに渡すサクヤさん。

烏月さんは携帯電話の付いた青い珠を、左眼を眇めてじっと見つめる。

光の加減か珠の青さが映り込んでいるのか、深い夜色の瞳が、青い光を放っているようにも見える。

烏月

「……なるほど、そういうことか」

桂

「なに？ どうしたの？」

烏月

「この珠には、私の知っているやり方で《力》が織り込まれている。その《力》が今まで桂さんを護っていたんだ」

桂

「あ、やっぱり。この珠を持っていたら、羽藤の家のことを知らない鬼は、わざわざわたしを狙わないってことだよな？」

鳥月

「その通りなんだけど、この珠の《力》は枯渇しかかっているんだ。新たに《力》を織り込まないと、もう何ヶ月とは保たないね」

桂

「……ええっ!？」

お守りの効力って、くっついている携帯電話のバッテリーみたいに、充電しないといけないものなんだ——じゃなくて。

桂

「どうしよう? どうしよう? やっぱりわたし、帰っても駄目だよサクヤさん」

サクヤ

「……ああ、気に食わないけど鳥月が役に立つみたいだね」

桂

「でもでも、わたしは別にいいんだけど、家も学校も違うんだから、いつも一緒ってわけにはいかないし……」

そりゃあ鳥月さんがつきっきりで護ってくれるなら嬉しいけど、わたしの成績じゃ鳥月さんのいる学校に編入するなんて絶対無理だし。

わたしの学校だって、地元じゃあそんなに悪くない方なんだけど——

桂

「——あいたっ」

平手でペしんと叩かれて、無駄にぐるぐる高速回転していた頭にブレーキがかかる。

サクヤ

「あんたねえ、鳥月の話ちゃんと聞いてなかったのかい?」

桂

「……えーと?」

サクヤ

「鳥月の知ってる術とやらでって言っていたじゃないか。つまり鳥月は《力》を補充できるってことだろう?」

鳥月

「一朝一夕でというわけにはいきませんが」

サクヤ

「やれやれ。これで補充が済むまで、結界のあるこの土地から離れるわけには行かなくな

ったねえ」

サクヤ

「鳥月がそいつの有効期限が切れる前に、デリバリってくれるんなら話は別なんだけどさ」

鳥月

「私はそれでも構いませんが」

桂

「駄目だよ、鳥月さん。そんなに迷惑かけられないよ。大丈夫、わたし待ってるから」

サクヤ

「とか言って、その方が迷惑だったりしてね」

桂

「ううっ……わたし足手纏い……」

サクヤ

「そういうことだよ。桂を護りながらだと、あんたの大事なお役目に影響出るんじゃないかい？」

鳥月

「問題ありません」

桂

「そ、それにわたしが狙われてるんなら、罔ぐらいにはなれるよ？」

サクヤ

「その必要ないよ。少なくともあの子は、桂には手を出さないはずだからね」

桂

「そうなの？」

サクヤ

「問題はノゾミとミカゲの方だ」

鳥月

「そちらが動くのは日没後でしょうし、呪符を使えば侵入を防ぐことができますから、桂さんの安全を確保しつつ、役目を果たすことは可能です」

鳥月

「そういうわけだよ。桂さん、これを」

制服の内ポケットから短冊状の紙の束を取り出して、わたしに渡す。

複雑な漢字っぽい文字とか模様が、墨痕（ぼっこん）鮮やかに書き付けられている。

桂

「お札？」

烏月

「魔除けの呪符だ。肉体を持つ相手には効果が薄い反面、霊体に対してなら保証できる」

烏月

「これを部屋の四隅に貼って結界を作っておけば、昨夜の二の舞いは防げるはずだ」

桂

「でも、ノゾミちゃんとミカゲちゃんは、わたしの血が欲しいって、確固たる目的をもってくるんじゃないかな？」

烏月

「大丈夫だよ。この呪符による結界は、人払いのような強制力の薄い婉曲的なものではなく、霊体の進入を阻む障壁そのものだからね」

烏月

「通ろうとするものには、相応の代価を払ってもらうことになる。例えるならば、高圧電流を流した鉄条網で部屋を囲むようなものだよ」

桂

「わっ」

ばちっと静電気に打たれたような気がして、お札を持っていた手を離す。

木の葉落としに舞うお札を、地面に着く前に指で挟み取った烏月さんが、苦笑気味に唇の端を上げた。

烏月

「肉体を持っている私たちには無害だから、そう怖がらなくてもいいよ。霊気の流れも滞るから、時折換気をする必要があるけどね」

桂

「はぁ……」

烏月

「そういうわけだよ。桂さん、一昨日の夜にあげた呪符なんだが——」

桂

「あ、あれ？ おかげで昨夜は助かったよ。どうもありがとうございました」
ぺこりと頭を下げるわたしと、不思議そうに生返事をする烏月さん。

鳥月

「うん？」

桂

「お札のおかげで間一髪」

かくかくしかじかと、使用の経緯と効果のほどを説明する。

鳥月

「……………」

何やら難しい顔をされた。

桂

「鳥月さん、どうしたの？」

鳥月

「……いや、きちんと役に立ったのは良かったんだがね。最初に説明したように、部屋の四方の壁に貼っておいてくれればと……」

桂

「張っておいたら？」

鳥月

「あの姉妹のようなかりそめの現身しか持たない霊体は、そもそも入って来れなかったはずなんだ」

桂

「……え！？」

鳥月

「呪符と呪符とをつなぐ囲いは、結界として作用するんだ。つまり霊的な力で壁をつくるようなもので、壁は内と外とを隔ててくれる」

桂

「……………」

桂

「……わたし、何やってたんだろう」

鳥月さんの返事はなし。代わりに鳴くのはおなかの虫。

棚上げしておいた山登りの疲労が、十一も真っ青の利息をつけて崩れ落ちてきた。

とりあえず、新しいお札をゲット。

サクヤさんの車で、商店街に戻ったわたしたちは、遅いお昼ごはんを食べた。

遅いっていうか、もうおやつ時間も過ぎてるんだけど。

桂

「うーん、満足満足」

小さな幸せが、ぽんぽんに膨れたお腹を中心に広がっていた。

そして幸せの発生源はすぐ隣にもあって。

鳥月さんとふたりだけで、何でもない普通の友達同士みたいに、ぶらぶら商店街を歩いている。きっと傍から見ても、そう見えているはず。

サクヤさんはごはんまでは一緒だったけれど、何やら用事が出来たと言って、ひとりでどこかに行ってしまった。

あんなに危ない危ないって口うるさかったのに、もう野放し状態。仲悪いけど、悪いからこそ鳥月さんを信用しているのかもしれないけど。

桂

「はむっ」

歩きながら、買い求めたクレープをかじると、口溶けのいいホイップクリームの甘さがじんわりと広がってくる。

悲しいことや辛いことや難しいことを全部包んで、頬をふやふや緩ませてくれるこのふわふわとした甘さは、人類の英知の結晶だと思う。

桂

「ううっ、幸せー」

鳥月

「そうだね、見るからに幸せそうだ」

桂

「わたし、けっこう甘党なんだ」

クレープとか生クリームが特別好きなわけじゃなくて、どちらかと言えば餡子好きの漉(こ)し餡派なんだけれど、それはそれ。

桂

「それにこのクレープ屋さん、何気に侮れない仕事してるよ。わたしの地元の人気あるお店よりも美味しいかも。侮り難し、経観塚銀座通り」

鳥月

「む……」

正直、味についてはあまり期待していなかっただけに悔しいぐらい。あとで陽子ちゃんに報告を兼ねて自慢しよう。

それにしても、お世話になっているさかき旅館のごはんといい、経観塚って味にうるさい土地柄なのかもしれない。

生まれは経観塚じゃないけど、この土地にお嫁に来たお母さんも、お料理上手だったしね。

桂

「……はあ」

烏月

「うん？」

桂

「あはは、何でもない。幸せのため息」

烏月

「そうかい」

いけない、いけない。せっかく烏月さんと一緒なのに、湿っぽくなってどうする。

桂

「はむっ、あむっ」

幸せの元にかじりつき、二口分を頬張った。

烏月

「……………」

桂

「どうしたの？」

烏月

「いや、相当空腹だったんだな——とね」

桂

「わ、そんなこと……」

烏月さんの手にしたクレープは、歯型つかずの新品状態。
視線を転じてわたしの手の中には、すでに大きく欠けたクレープ。

桂

「えっと……デザートは入る所が別ですから」

烏月

「それを抜いても、ね」

桂

「ううっ、だけどね、わたし山登りしたんだよ？」

カロリー消費量は十分だから、このようにごはん・おやつと連戦しても、後の憂いはないと思う。なしと思えばきつとなし。

桂

「鳥月さんだって、まだこれぐらいはぺろっと入らない？ 鳥月さんは、わたしより早い時間から出かけてるんだから——」

桂

「あ、そういえば朝ごはんのときにいなかったけど、ちゃんと食べた？」

鳥月

「いや……」

桂

「わ、朝ごはん抜き？ お腹空かないの？」
一緒に食べたお昼ごはんは、普通にわたしと同じぐらいの量。

しつこいようだけど、クレープにはまだ口をつけていない。

桂

「もしかして鳥月さん、甘いのが嫌いとか駄目だったりした？」
理由はよくわからないけど、鳥月さんは納豆に葱を入れられない人なのだ。
食べ物の嗜好はそれぞれだから、付き合いの浅い人と食事をするときは要注意。
なにせ世の中、目玉焼きに塩・胡椒・お醤油・ケチャップ・マヨネーズの何をつけるかだけで、延々論争できる人が存在したりするわけだし。
浮かれて心配り足りてないよ、わたし。

桂

「……えっと、まずかったかな？」

鳥月

「食べる機会はそれほどないけれど、甘いものは嫌いじゃないよ。むしろ好きな方だね」

鳥月

「子供の頃は小遣いなんてもらっていなかったし、好きなものを好きなように食べられる環境ではなかったからね」

鳥月

「彼岸会の牡丹餅や萩の餅、上巳の白酒などが楽しみだったよ」

桂

「あ、美味しいよね、牡丹餅にお萩。でも上巳って……白酒だから、雛祭り？」

鳥月

「残念ながら、千羽では雛壇を飾ったりはしないんだけどね。兄さんには、だから私が女らしくならないんだと言われたりもしたよ」

桂

「えっと、その、しゃべり方とか、ちょっと女の子っぽくないかなって気がするけど……」

桂

「……鳥月さん以外の千羽の人もそうなの？」

鳥月

「そんなことはないよ。私の口調は兄の影響だろうね。同じ年頃の子たちとは遊ばずに、歳の離れた兄の後ろを付いて回ってばかりいたから」

桂

「大人の人に注意されたりしない？」

鳥月

「千羽では相手が実の両親でも、目上の人に対しては敬語が基本だからね。兄さんだけだったよ。私が普段、敬語を使わず接していた目上の者は」

桂

「いいなあ。わたしもお兄ちゃんかお姉ちゃんが欲しかったなあ」

ううん、お母さんがいてくれただけで、わたしは十分幸せだったんだけど。

桂

「だけど、仲良し兄妹なんだ。鳥月さんのところ」

鳥月

「そうだね。兄さんは私の親代わりであり、剣の師であり、目標とする人でもあった」

桂

「あ……」

鳥月

「どうしたんだい？」

桂

「……えっとね、その……」

さっきからずっと過去形なのは――

鳥月さんが女だてらの若い身空で、鬼切り役なんて危険なお役目を継いでいるのは――

きっとそういうことなんだ。

桂

「甘いものが好きだったら、どうして食べないのかなって」

鳥月

「ああ……」

手にもったものに、目を落として言う。

鳥月

「先ほども言ったように、こういったものを食べる機会がないものだから、とりあえず桂さんに倣おうかと様子を見ていたんだけどね」

桂

「うん」

鳥月

「桂さんがあまりにも幸せそうだから」

桂

「うあ……」

表面温度の急上昇にともない、赤熱する顔を慌てて伏せて隠す。

陽子ちゃんやサクヤさんがいるから、からかわれるのは慣れているけど、鳥月さんの言葉や視線は真摯なだけに凶悪だ。

桂

「……あの……ね？」

ちらりと上目でうかがうと、鳥月さんは前を向いて一口目をかじっていた。

鳥月

「——！？」

鳥月さんの動きが止まった。

桂

「どうしたの？」

鳥月

「食べかけですまないが、後は任せた」

クレープを押し付けられた。

桂

「え？ やっぱり口に合わなかった？ 大判焼きとか鯛焼きの方が良かったかな？」

鳥月

「いや——」

和らいでいた表情は、もののふの甲冑にすっかり硬く覆われていて、わたしが声をかける間もなく走り出す。

置いていかれた言葉だけが、今になってようやく聞こえる。

烏月

「——奴を見つけた」

わたしがようやく視認できるほどの向こうで、ケイくんが身をひるがえす。

桂

「わ、待ってよ烏月さん！」

追いかける。
ふたりとも速い。

ふたりの距離は縮まらない。
わたしとの距離はぐんぐん開いていく。
ケイくんが路地に入った。

それを追う烏月さんが曲がった。
わたしは追いかける。
一生懸命に走る。

ようやく路地の前に差し掛かる。
もう心臓はばくばくだった。
勢いにたたらを踏みながら曲がる。
前を見る。

ふたりの姿はもう見当たらなかった。

桂

「ぜえ、はあ、ぜえ、はあ……」

取り残されたわたしは、立ち止まって荒い息を吐きだす。

せっかくもらったクレープは、全力疾走のせいでぐちゃぐちゃになってしまった。もちろん、わたしの食べかけクレープも。

桂

「ううっ、クリーム手についちゃったよ……」

どうしようかとしばらく見つめて、舌を伸ばしてぺろりと舐める。

桂

「うへえ……」

心臓と肺が悲鳴を上げる胸が、余計に気持ち悪くなるような甘さだった。
ほんの少し塩気が混じっていた。

桂

「喉、乾いたな……」
まだ高い陽射しが熱かった。

桂

「あ……」
ふたりとも速い。

クレープを手に立ち止まったままのわたしとの距離はみるみる離れていく。
居合わせた町の人たちの視線を一瞬で振り切って、ふたりは路地を曲がって姿を消した。

桂

「……あーあ、おいてけぼり」
それも仕方がない。
鳥月さんは遊びに来てるわけじゃなくて、お役目でケイくんを追いかけて来ている。だからそっちが優先されるのは当然と言えば当然。
ケイくんが悪い鬼とは思えないとか、そういう納得いかなさを差し置いてでも、鳥月さんと付き合っていこうと決めたのはわたしなんだし。

桂

「何もなければいいんだけどな……」
鳥月さんの身にも、できればケイくんの身にも、それからわたしの身にも。
とりあえず、このままここで待っていても鳥月さんは戻ってこないと思う。
わたしは旅館に戻ることにした。

「桂」

遠くから、名前を呼ばれた。

「桂、あんた寝るなら寝るで布団ぐらい敷きな」

桂

「……あれ？」

旅館に戻ってすぐのこと。エアコンの効いた畳に寝そべっていると、ここ数日の気疲れその他が重しになってまぶたを押し下げた。

そこから先は憶えていなくて、今見える窓の外はすっかり暗くて、ざっと三、四時間は時間が飛んでいたことになる。

最近夜中にバタバタしてるし、このまま昼夜逆転しちゃったら、ちょっと良くないかも。

桂

「ふぁ……サクヤさんお帰りいー」

サクヤ

「お帰りじゃないよ。施錠もしてないなんて無用心じゃないか」

桂

「そうなんだけど、鍵をかけてると助けに来てくれた人も入れないんだよね」
単に寝るつもりじゃなかったのに、寝てしまったというだけだけど、昨日の夜はそうだった。

サクヤ

「で、鳥月は部屋にいないみたいだけど、あんたのところじゃなかったんだ」

桂

「あ、えーと……わたし、寝てたから」

サクヤ

「何やってるんだい。昼間ならともかく、もうすぐ夕食だよ」

桂

「わ、もうそんな時間なんだ。お昼ごはん食べて、おやつ食べたばかりなのに」
町で置いていかれたって言ったら、サクヤさん怒るだろうなー。

桂

「それで、鳥月さんに何か用事？」

サクヤ

「んー、ちょっと話したいことがあったんだけど、いないんじゃないかねえ」

桂

「うん……」
鳥月さん、まだ戻ってないんだ。
大丈夫かな、ケガしたりしてないかな……

桂

「ふぁ〜〜〜」
敷いてあるお布団の上を転がると、大きなあくびが漏れた。わたししか居ないからいいけれど、ちょっと人には見せられないほど。
わたしはお風呂に入ってさっぱりすると、睡眠時間が十分足りていても、眠くなるタイプだったりする。

……何時ぐらいだったっけ？

横臥した状態のまま這ってちゃぶ台に近づいて、携帯電話に手を伸ばす。液晶画面に浮かんでいるのは「23:45」のデジタルな文字列。

桂

「よしっ」

なぜか小さくガッツポーズ。

毎日一回必ず訪れる、何てことない時間を表示しているだけなのに、ふと見たタイミン
グでこういった並びに出くわすと、妙に嬉しかったりする。

それにしても、あと十五分で日付が変わる。

今日は随分と長湯してしまったのか、髪の毛を乾かし終わったらこんな時間になってし
まった。

普段のわたしならあと一時間は起きてたりするけど、今日はもう寝ることにしよう。

……………

……はて。何かを忘れてるような気がするんだけど、何だったっけ？

歯磨きだってちゃんとしたり、寝る前に日記を付けるような習慣はないし、付けろだな
んて宿題も出てないし、忘れていないことはないと思う。

つまり今のわたしは寝る準備万端。お布団だってもう敷いてあるから、後は電気を消し
てお布団の中に潜り込むだけ。

月は昇っているけれど、蛍光灯の明るさに慣れた目には、明かり障子越しの月光程度で
はほとんど頼りにならなかった。

普段の生活で一番頼りにしている目からの情報が途絶えると、何とかして状況を把握し
ようと、他の感覚が一生懸命に働き出す。

例えば空気の流れを感じる肌。

例えば微かな音を拾う耳。目に次いでたくさんの情報を集めているところだから、当然
のように気持ちはここに集中する。

——ちりん。

その耳が、鈴の音を拾った。

産毛が逆立つような寒気を感じたけれど、どこかで涼気をかもしている風鈴の音ではな
い。

——ちりん。

鈴の音はすぐ後ろから。

体温の低い小さな手が、夜の暗さに慣れてきた両目を再び闇に閉ざした。

そうだ。今日は朝からごたごたしてたから、陽子ちゃんに電話してないんだった。

もう一度時計を確認。日付変更までもう時間があまりない。

ううっ、どうしよう、どうしよう——

陽子ちゃん寝るの早いからもうギリギリだし、だからって連絡しないのも『はとちゃん
の薄情者一』とか言われちゃいそうだし。

だけど陽子ちゃん「非常の用なら家の方にもかけてくるでしょ」って、家では電源切っ
て寝る人だから、安眠妨害はしないですむんだっけ。

なんだ、そうとわかれば気兼ねなく。

ぶちぷちとボタンを押して、陽子ちゃんの携帯電話を呼び出す。

陽子

『はい、もうすぐ深夜零時を回ります。良い子のみんなは寝る時間だぞー』

桂

「陽子ちゃんは良い子なの？」

陽子

『あちゃー、厳しいとこ突っ込んでくるのね。もしかしてそっちの山で武者修行でもした？』

桂

「んー、いろいろ死線を切り抜けて、それなりに経験値もらえたと思うよ」

陽子

『あはは、パーティーの中に加えるだけ加えとけば、何もしなくても均等分配ってヤツ？』

桂

「ううっ、けっこうそんな感じかも……」

わたし自身はやらないけれど、テレビゲームも嗜む陽子ちゃんが遊んでいるのを、おしゃべりしながら見物したりはけっこうする。

勧めてもらったりもするけれど、そーゆーゲームは見ているだけでもけっこう楽しめるし、反射神経を使うゲームは正直、苦手だったりする。

陽子

『それで、そっちはどう？』

桂

「いろいろ問題あったけど——」

夏だというのにぞくりと震えた。

——ちりん。

どこか遠くで風鈴の音。

陽子

『はとちゃん？』

桂

「あ、ちょっとクーラー効き過ぎたかも」

陽子

『電気代かからないからって、使いすぎたら怒られちゃうよん。夏の設定温度は二十八度——だとちょっと暑いか』

桂

「陽子ちゃんの部屋は？」

陽子

『二十四度』

桂

「わ、ぜんぜん節約してないよ」

陽子

『大丈夫、大丈夫。パパもママもいなくてあたしの部屋しかエアコンつけてないから、一世帯あたりの消費電力は普段よりずっと抑え目だしー』

桂

「それならわたしの家なんて無人だよ」

——

「そうね。そしてもう誰も帰らない」

桂

「——！？」

ふっと落ちる電気。

ふいに冷たい手につかまれて、携帯電話を取り落とす。

陽子

『ちょっと、はとちゃん？ はとちゃーん？』

——

「ふふふふふ」

耳朶をくすぐる含み笑い。目の端で赤い光がぼんやりとちらついた。

陽子

『はと——』

電波が途絶えてしまったのか、ぶつりと切れて押し黙る電話。

だけど、こうして切れるのは初めてのことではないので、きっと陽子ちゃんは不審に思ったりはしないだろう。

——

「うふふっ、だーれだ？」

——

「……だーれだ？」

桂

「……ノゾミちゃんとミカゲちゃん？」

ノゾミ・ミカゲ

「あたり」

桂

「じゃあ、正解したご褒美として離してくれないかな？」

ノゾミ

「駄目。ずっと離してあげない。ううん、あなたは私たちの一部になるのよ」

桂

「そ、それは遠慮したいんだけど……」

ノゾミ

「駄目。あなたに拒否権はないの」

ミカゲ

「どうせあなたに拒めはしない」

ノゾミ

「あなたは弱い存在だから、主さまから頂いたこの——」

ノゾミ

「邪眼の《力》は防げない」

ミカゲ

「蛇の眼からは逃げられない」

光を透かした血色の視線が、真っ赤に焼けた鉄の熱さでわたしの頭を焼け付かせ、わたしの身体を自由を封じる。

そういえば陽子ちゃんのやっていたゲームにも、睨まれただけで石になってしまう、モンスターが出てきたっけ。

髪の毛の一本一本が蛇で出来ている女の人で、確か鏡で視線を跳ね返して退治するんだった。

鏡よ鏡——

本当に効くかどうかはわからないけど、何でそんな簡単な対策を思いつかなかったんだろう。

正気を疑われるほど荒唐無稽な話だとしても、陽子ちゃんに相談していれば、そういった対策のひとつも授けてもらえただろうか。

石のように固まったわたしの身体が、乱暴に横たえられる。

桂

「かはっ——」

受け身もとれずに背中をぶつけて、息が詰まって苦しさに喘いだ。

ノゾミ

「あら……泣くのはまだ早いんじゃないくて？」

ミカゲ

「まだまだこれからだもの」

ノゾミ

「桂……」

猫がじゃれ付いてくるような、柔らかな重みがのしかかってくる。

重いというほど重いわけではないのだけれど、わたしはそれを払いのけられない。

ノゾミ

「うふふ、すべすべ。昨夜の餌とは大違い。やっぱりあなたのご馳走よ」

乱れた浴衣から飛び出した太股を、ノゾミちゃんの爪がかりかりと引っかく。

ノゾミ

「この下に美味しい濃い血が流れているのね」

桂

「いたっ」

少しずつ力をこめられた爪が、肌に強く深く食い込んでいく。

ノゾミ

「あら……痛みを消すのを忘れていたのね」

ミカゲ

「姉さま。痛みや恐怖で——血は変わります」

ノゾミ

「そうね。追い詰められている時の方が、《力》は強くなるんだっかしら」

ミカゲ

「出来るかぎり生け贄は、最後まで意識を保たせるもの」

ノゾミ

「そう。それなら桂もできるわよね？ あなたは脈々と継がれてきた、最高の贄の末ですもの」

ミカゲ

「贅の血の持ち主だもの」

桂

「いたっ……痛い……」

ノゾミ

「でも、まだ血は出ていないわよ？」

淫

肌に食い込む爪が離れ、代わりに柔らかい指のお腹が肌をなぞり、熱く粘る液体の感触がないか確かめながら言う。

桂

「ううっ……もうやめてよ……」

ノゾミ

「やめろと言われてやめるわけ——」

ノゾミ

「あなたは膳の上の魚が命乞いしたら、食べるのをやめるのかしら？」

桂

「やめるよ、たぶん。可哀相だもん」

ノゾミ

「ふふっ……あはははは！」

桂

「な、何で笑うの？」

ノゾミ

「笑うのに理由が必要かしら。強いて言うなら、おかしいから笑うのだけれど」

ノゾミ

「ふん、よりにもよって可哀相？ 誰が？ あなたが？ 殺戒を破るあなたが？」

桂

「食べられる魚じゃなくて、わたしが……？」

ノゾミ

「あなたは人が殺したものは食べることができても、自分で殺して食べたりはしないのね」

桂

「それは……そんなこと……」

ノゾミ

「私は殺して食べるわよ。生きるために人を捨て、鬼と成ったぐらいなもの」

ミカゲ

「人であった姉さまは、今では人を糧とする」

ノゾミ

「そう——」

やはりこちらでなくては駄目だと、小さな口がゆっくり開く。

ノゾミ

「だから、命乞いなんて聞いてあげない」

白くとがった糸切り歯が、舌に舐められ妖しく光った。
近づいてくる。近づいてくる。血を吸う口が近づいてくる。

ふつり——

わたしの意識は断ち切られた。

烏月

「桂さん——」

遠くから烏月さんの声。
ああ、烏月さんが帰ってきてくれた。わたしを助けにきてくれた——

それで緊張の糸が途切れてしまったのか、その姿を目にする前にわたしの意識は闇に飲まれた。

桂

「——！？」

がばっと身体をはね起こして、荷物をまとめてある部屋の隅へとばたばた向かう。

途中で浴衣の裾を踏んで転びそうになったけど、気にしない。その勢いで一気に壁際まで移動、両手を壁に突いて惨事を回避。

桂

「ふい～、危ない、危ない。危なかったよ」

こんな大事なことを忘れていたなんて、備えあれば憂いなしを座右の銘に据えている桂さんらしくない大失敗だった。

畳んだ私服を再び広げて、ポケットの中から烏月さんにもらったお札を取り出す。

烏月さんまだ帰ってきてないみたいだし、自分の身は自分で(?)護らないと。

これを四枚、部屋の壁に貼っておけば、お札同士を結んだ空間——結界の中には、現身を持たない霊的な存在は入ってこれなくなるという。

面を作ればいいのなら、三枚でもいいのかもと思ったけれど、間違っていたら怖いので、言われた通りちゃんと四枚貼ることにする。

一応、テープの代わりに四枚の絆創膏を用意しておいたのだけれど、お札は壁に当てただけで、そのままピタリとくっついた。

静電気……じゃあないよね。

不思議な力を持っているお札だけに、このぐらいのおまけ能力も付いているかもしれない。

桂

「なんまいだー、あと一枚だー」

変な歌を口ずさみながら部屋を一周して、最後の一枚をドアの上に貼り付ける。

桂

「よし、これで今日は安眠できるよー」

お布団の上に立って、自分の仕事にご満悦——

桂

「わ、しまった」

——できなかった。

わたしは部屋の四隅ではなく、四方の壁の真ん中あたりに貼っていた。

つまりは口の中に◇が入ってる感じで、四つ角四箇所は無駄な隙間が空いてしまっている。

桂

「でも、大丈夫……だよ。多分」

お布団の敷いてある真ん中は余裕でセーフだし、自慢できる程じゃないけど、寝相は悪くない方だ。

それに、もしかしたらユメイさんが来てくれたりするかもしれないから、座れるスペースぐらい確保しておいた方がいいかも。

だいたい、一度剥がして貼りなおすにしても、それで破いたりなんかしたら目も当てられない。むしろかなりの確率で失敗しそうだから怖い。

お買い物をした後に、値札シールを剥がそうとして、最後まで綺麗に剥がせる方が稀。手先はそれほど器用な方じゃなかったりする。

ぺりっと一気に上手に剥がせなくても、消しゴムでこすれば綺麗になるからいいんだけど——

閑話休題。

立って半畳、寝て一畳に比べれば、随分と広い安全領域を確保できているわけだし、これで満足することにした。

消灯——

お布団に横になってしばらく。

大あくびを漏らすほど眠かったはずなのに、どうにもこうにも寝付けなかった。

とはいえ完全に目が冴えているわけでもなくて、半分ほどはまどろみのなか、寝ぼけたような意識の上を、取り留めのない考えが流れていく。

あれから随分経つけれど、烏月さんはまだケイくんを追っているのだろうか。

もう実力行使の争いになったりしたのだろうか。

もしかして、帰ってこれないような大ケガをしたりしたんじゃないだろうか。

だんだん悪い考えばかり浮かんできて、なんだかとても心配だった。

お札がなかったら、自分の心配で手一杯だったかもしれないけれど、今はその分の心配まで烏月さんの方へいってしまっている感じだ。

風がそうとう強いのか、家鳴りの音が聞こえてくる。

そうか、天候不順なら余計に心配だ。昼間はあんなに天気良かったのに——と、昨日は夕立がすごかったっけ。

烏月さん、本当に大丈夫だろうか。

「……さん」

心配のあまり、声まで聞こえてきたような。

烏月

「桂……さん……」

幻聴ではなく、声が聞こえた。

部屋の扉が弱々しく叩かれて、その音に被さるように、絶え絶えの声が続いた。

烏月

「……桂さん……ここを……この扉を開けてくれないか……」

お布団を跳ね上げかけて『赤頭巾』——声色に騙されるのは『狼と七匹の子山羊』だったっけ？——を思い出す。

たぶん烏月さんは、どんな重傷を負っていたとしても、わたしの部屋に逃げ込んでくるような真似はしないと思う。

烏月

「呪符を切らせてしまってね……不覚を取った。安全な場所で休ませてほしい……」

あ……

烏月

「桂さん……」

ううん、これは幻聴、騙されちゃ駄目。

ケイクンのことは心配してないから、扉の鍵はかけていない。生身の烏月さんなら、開けて入ってこれるはず。

烏月

「桂さ——」

頭からお布団を被って、聞こえてくる声を締め出す。
大丈夫、烏月さんは大丈夫。

みしみしと家鳴りがする。

廊下の方でも物音がする。
きっとそれらは風の音。

風の強い夜だった。
嵐の先触れのような風の吹く夜だった。
そんな音を聞きながら、わたしは眠りに落ちていく。
それすらも夢だったのかもしれない。

桂

「烏月さん！」

我慢できなかった。

今度こそ本当にお布団を跳ね上げて、扉を開く。

その勢いで、扉についていたお札が剥がれて、あの木の白い花びらのように舞った。
ああ、貼りなおさなくっちゃ——でもそれは後回し。まずは烏月さんを助けないと。

桂

「烏月さん、だいじょ——」

赤い光が目に焼きついて、わたしは言葉を凍らせた。

ノゾミ

「うふふ、おばかさんね」

唇の端を意地悪に吊り上げて、ノゾミちゃんがつぶやく。

特に意識してのことじゃないけれど、わたしは部屋の真ん中まで後退り、距離をとった。

ノゾミ

「ご機嫌よう。中に入れていただけるのね」

わたしが退いて素通し状態になった入り口から、ノゾミちゃんが部屋に踏み込んでくる。

ノゾミ

「歓迎してくださるなんて、嬉しいわ」

青白い光が身体にまとわりついて、ぱちんとはじけるような音がした。

ノゾミ

「っ……大した歓迎ね……」

眉をしかめてたノゾミちゃんが、振り向きもせず後ろに控えたミカゲちゃんの名前を呼ぶ。

ノゾミ

「ミカゲ」

ミカゲ

「はい、姉さま」

ノゾミちゃんの隣に並んだミカゲちゃんが、剥がれて落ちたお札に目を向ける。
すぐに変化が訪れた。

理科の授業で虫眼鏡を使い、黒い紙に穴を開けたことがあるけれど、お札がちりちりと焼け焦げていく様子は、まさにそんな風だった。

燃え上がるような派手さはないけれど、確実に一点ごとに蝕まれていく。

ノゾミちゃんがさらに一步、わたしの方に近づいてきた。

青白い光はもうはじけなかった。結界の効力はもう消えてしまっている。

ノゾミ

「これでもう安心ね。ご苦労さま」

ミカゲ

「まだ安心するには早いのでは。昨夜のように邪魔が入るかもしれません」

ノゾミ

「何も心配いらないわ。あの怖い鬼切り役は、結界を張ったことで安心しきっているでしょうから、今頃はまだ鬼ごっこに夢中なんじゃないかしら」

ノゾミ

「それにあの女の《力》では、私たちの邪魔なんて出来やしないわ」

ノゾミ

「ねえ——あなた、昨夜のように形を成すこともできないんでしょう？」

桂

「えっ!？」

ノゾミちゃんはわたしの肩ごしに後ろを見ている。
気配を感じて振り向くと、そこには青い人の影。ぼんやりと光る、幽霊のように透き通った――

桂

「ユメイさん！？ 駄目だよ、ユメイさん危ないよ！？」

ノゾミ

「ふふふっ、何をしに来たのかしら。今日こそとどめをさされに来たの？」
ノゾミちゃんは嬉しそうに、楽しそうに、歌うように、さえずり笑う。

ノゾミ

「私は歓迎するわ。消滅して果てるまで、逃げずにいてくださるかしら？」

ノゾミ

「封じを支える柱が消えれば、主さまに窮屈な思いをさせずにすむ」

ノゾミ

「主さまを封じ、私から主さまを――くっ！？」

痛みか苦痛が生じたのか、顔をしかめて頭を押さえた。結界の残滓（ざんし）に触れてしまったときよりも、見た限りでは辛そうだった。

ここ数日、わたしが赤い痛みに襲われているときも、傍から見ればああなんだろうか。だけど、何だかよくわからないけど、チャンスと言えばチャンスだ。
わたしは周りを見渡して、この状況をどうにかできないか頭を巡らせる。
わたしが扉を開けてしまったから、結界のお札を剥がしてしまったから……
……お札？

右と左と後ろの壁には、お札が貼りつけられている。

ノゾミ

「……私たちから主さまを奪った責任を、今ここで、とって頂こうかしら」
わたしが後ろ向きに足を運ぶのと同時に、ノゾミちゃんの全身から赤く透ける霧が立ち昇る。

対するユメイさんは、彼女の《力》そのものである光の蝶を、一頭たりとも連れていない。

にもかかわらず、ユメイさんは。

ユメイ

「桂ちゃん、できれば隙を見て逃げて」
下がるわたしと入れ替わるように、青白く透ける頬を引き締めて前に進み出る。
すれ違いざまにわたしに触れた手の感触は、そよ風のように緩やかで、優しく、力なくて。

どうしてそこまでして、わたし何かを助けようとしてくれるのかはわからないけれど。

ノゾミ

「ふうん……逃げ出す気はないみたいね。潔さに免じて、苦しまないように消してあげるわ」

ユメイ

「……………」

赤い霧がノゾミちゃんの手に集まる。

どうしよう——なんて迷っている場合じゃない。

上手くいくかどうかはわからないけれど、わたしが今すぐやるしかない。

桂

「……………」

お母さん。わたしがどじを踏まないように、できることなら見守っていて。

鳥月さん。怖い鬼に立ち向かっていく勇気を、ほんの少しでいいからわけて。

ノゾミ

「さあ——」

桂

「ユメイさん、横に避けて！」

後ろ手にお札を引き剥がして、身体ごと前へ。

ノゾミちゃんに向かって、わたしはお札を握った手を突き出す。

ユメイ

「桂ちゃん！」

ノゾミ

「何を——」

赤と青の光がぶつかりあって、はぜた。

ノゾミ

「ああ——っ！！」

突き刺さる光に目をつぶっていても、《力》を使い果たしたお札が手の中で崩れていくのは感じ取れた。

どれぐらいの効果があったのかを確かめるのは後回しにして、わたしは右に向かって跳ぶ。

壁にぶつかり目を開ける。

桂

「あった！」

二枚目のお札を手に、部屋の真ん中に向き直る。あんなに痛そうな悲鳴だったんだから、ちゃんと効いてはいるはずだ。

桂

「帰って！ 帰ってくれないと、もう一回同じことするよ！」

ノゾミ

「ふふ——」

桂

「……？」

ノゾミ

「あははははははっ、まさか、そんな使い古しの呪符で歯向かってくるなんて」

桂

「……い、痛くないの？」

ノゾミ

「痛かったわ。とても、とても」
痛々しく焼けたてのひらに、ぺろりと赤い舌を這わせる。

ノゾミ

「……だから同じようにあなたを傷つけて、そこから流れる贅の血に癒してもらおうかしら」

桂

「近づかないで！」
お札を構えて突きつけても、そちらに目を向けたのはほんの一瞬。

赤く滾る瞳にわたしを捕らえて、足首の鈴をりんと鳴らしながら、小さな歩幅で近づいてくる。

ノゾミ

「ふふふっ、第一印象ほど弱くないのは認めるけれど、足が震えていてよ？」

ノゾミ

「可哀相。その震え、私が止めてあげるわ」
かっとうの奥の熱量が増す。

わたしは反射的に視線をそらして、お札を持った手で顔を庇っていた。

鳥月さんが邪視と称していた視線——あの瞳の輝きには、わたしを蛇に睨まれた蛙にしてしまう《力》がこもっている。

桂

「もう引っ掛からないよ。それに余計なお世話様。わたしのは武者震いだもん」

外したままの視線の端にノゾミちゃんを捕らえながら、強気な声で自分自身にも言い聞かせる。

ノゾミ

「……あら？ そうなの？」

表情は見えないけれど、すこし意外そうな声。

わたしは目を合わせないように、それでも動きを見逃さないように、ノゾミちゃんの足に注意していた。その足が止まり、立ち止まっていた。

だけど、それも一瞬のこと。

ノゾミ

「そう、それなら遠慮することないわよね？」

真っ白な素足が真っ直ぐに伸びた。

重さを感じさせない、スローモーションのような緩やかさで、それでも、わたしが反応しきれないだけの確かな速さで跳んできた。

鈴の音に身体が反応したときには、もう目の前にノゾミちゃんの顔があった。

ノゾミ

「触られるほど近くに來たわよ。息がかかるほど側にいるわよ。あなたに流れる血の熱も、胸の動悸も感じられるわ」

視線が視線に絡みとられる。

視界を占領する白い肌と赤い瞳のハレーションに眩暈を憶える。

ノゾミ

「それで、どうしてくれるのかしら？」

桂

「こっ……」

だけど、身体はまだ動く。

桂

「こうするの！」

わたしはお札を持った手で、ノゾミちゃんを突き飛ばそうとした。

それを待ち構える、小さな白いてのひら。

ぶつかり合ったてのひらが、油を熱したフライパンに水を一滴垂らしたときのように、はじける。

赤と青が混ざり合い、紫電にも似た光が溢れる。

ノゾミ

「……ああ、痛かった」

受け止められたわたしの手は、ノゾミちゃんにしっかり握り締められていた。

ノゾミ

「それで、この次はどうするの？」

合わさる手と手の隙間から、灰と崩れたお札が零れ落ちていく。

ノゾミ

「まだ後があるのかしら？」

お札はあと一枚ある。

あるけれど、それは反対側の壁に貼ってあって、この状態からでは頼みにならない。

背の低いノゾミちゃんの肩越しに見える向こうでは――

ミカゲ

「駄目。姉さまの邪魔はさせない」

ミカゲちゃんに立ちほだかれて、ユメイさんは身動きのとれない状態になっている。

ノゾミ

「ふふっ、向こうの呪符が欲しい？ 私は別に構わないけど、あれを使ったその後は一体どうするつもりなの？」

後――

あれを使ったその後のこと。

四枚のお札を使った結界は、直列に繋いだ電池が豆電球を切ってしまうように、強い力で鬼を阻めるのだろうけど、一枚ずつでは――

なけなしの勇気を振り絞っての抵抗も、所詮は蟻螂の斧だったということか。

ノゾミ

「もう抵抗はおしまいかしら？」

背中を後ろの壁にあずけて、何とか立っちはいるけれど、すでに膝を屈する寸前だった。

ノゾミ

「それじゃあ、そろそろ、いただきましょうか」

紡いだ言葉の形のまま開かれた桜色の唇から、白い肌よりいっそう白い歯が零れていた。

あの歯がわたしを破って、食い込んで、血を流させるんだ。

両肩をつかまれて壁に押し付けられると、蜘蛛の巣に掛かった蝶の絶望が押し寄せてくる。

赤い瞳から伸びる視線の糸が、合わせた目から入り込んできて、内側からわたしを絡めとった。

ノゾミちゃんが笑う。

獲物を捕らえた捕食生物の笑みだった。

がんじがらめのわたしの意識が、深く遠くへ突き落とされる。

桂

「ユメイさん、ごめんね。わたしはもういいから、やられないうちに逃げて」

ユメイ

「桂ちゃん——」

遠ざかるユメイさんの声。

せつかく来てくれたのに、本当にごめんなさい。それから、もうひとり。

桂

「鳥月さん、ごめんね。わたしがどじだったから、お札を役立てられなかったよ」

桂

「ノゾミちゃんたちが強くなったら、後で鳥月さんが退治するときに困るよね。本当にごめんね」

鳥月

「桂さん——」

遠くから鳥月さんの声。

またノゾミちゃんが声真似をしているのか、今度こそ幻聴なのか。

鳥月

「桂さん！」

風を切る叫びが、わたしを縛る糸を断った。

力が入っていなかった身体は、糸を切られた操り人形のように崩れ落ち、お尻を打った痛みのおかげで、意識がしゃんと覚醒する。

桂

「……鳥月さん？」

鳥月

「遅くなった。暗くなる前には帰ってくるつもりだったんだがね……それにしても、昨日の今日で懲りない連中だ」

部屋の中央に進み出てもう一振り。

ノゾミちゃんが刀を逃れて飛び退くと、その先にいるユメイさんが、烏月さんをじっと見つめた。

桂

「あ……」

烏月

「……昨夜はすみませんでした。それから、もう桂さんは大丈夫です」

ユメイ

「ですけど、あなたは——」

烏月

「私なら何も問題ありません」

有無を言わせぬ強い言葉で、ユメイさんの言葉を飲み込んだ。

烏月

「それ以上《力》を消耗すると、あなたの存在自体が危うくなる」

桂

「ユメイさん、お願いだから無理はしないで」

ユメイ

「……そうね」

ユメイ

「桂ちゃんのこと、お願いします」

烏月

「任されました」

烏月さんの返事に頷くと、溶けるようにして掻き消えた。

烏月

「さて……」

部屋の真ん中を通り、わたしの前へやって来て、横に飛び退ったノゾミちゃんに剣を向ける。

烏月

「ひとつ訪ねる。あれから人を襲って飲んだな」

ノゾミ

「その子のものに比べれば、大したことない薄い血でも、飲まないよりはましですもの」

ノゾミ

「だけど、あなたのせいなのよ？ あなたが付けた傷を埋める《力》が必要だったから、つい吸いすぎてしまったんですもの」

ミカゲ

「犠牲が出たのはあなたたちのせい」

ノゾミ

「あなたがわたしの邪魔をするから」

ミカゲ

「桂が私たちのものにならないから」

桂

「え……わたしが……わたしのせい？」

鳥月

「桂さん、耳を傾けるな。もっともな恨みを抱いて鬼と成ったものが、自分を鬼と成さしめた相手にのみ牙を向けるのであればまだしも——」

鳥月

「当事者以外の犠牲が出た場合、原因は鬼の存在そのものにあると言っていい。何も思い悩むことはない」

ノゾミ

「ふうん、まだ若そうなのに揺れないのね」

鳥月

「その程度のことで動揺するようでは、鬼切り役は勤まらない。必要ならば人すら切る」

ノゾミ

「そう……でも、その割には随分と慌てていたんじゃないかと？」

鳥月

「……………」

ノゾミ

「そんなに心配だったのかしら？」

ノゾミ

「贅の血が私たちのものになるのが怖かった？」

鳥月

「……お前たちには関係のないことだ」

ノゾミ

「あら、冷たいのね」

鳥月

「もう夜も更けた。長話がしたいのなら、昼にでも出直してくるんだな。もっとも——」

鳥月

「それができればの話だが」
維斗の太刀で話を絶った。

ノゾミ

「これはとんだ藪蛇だったみたいね」

ミカゲ

「どうしましょう、姉さま」

ノゾミ

「さて、どうしましょうか。大事の邪魔にならないように、そろそろ舞台から降りて頂く
頃合いかしら」

ミカゲ

「ですけど姉さま、私たちの《力》はまだ」

ノゾミ

「そうね。鬼切り役が来る前に、あの子から血をもらえれば良かったのだけれど——」
こちらに首を回したノゾミちゃんと目が合った。またあの瞳でどうにかされては大変だと、慌てて視線をそらすと。

ノゾミ

「ふふふっ——」
含み笑いに揺さぶられた。

ノゾミ

「ねえ、ミカゲ。わたし、いいことを思いついたわ」

ミカゲ

「それはどのような？」

ノゾミ

「今日のところは諦めるの。その代わりに、他のところで他の血を頂くのよ」

ノゾミ

「ねえ、桂。あなたもその方がいいでしょう？」

桂

「え……」

ノゾミ

「あなたの代わりに、他の人の血で我慢するの。あなたは痛くも痒くもないから、そちらの方がいいでしょう？」

桂

「そんな……」

ノゾミ

「あはっ、うろたえちゃっておかしいったら」

ノゾミ

「烏月だったかしら、鬼切部の鬼切り役。あなたと違って、桂は面白い顔をしてくれるわよね」

ノゾミ

「明日の朝日が山から登って——」

ミカゲ

「ひのふの、みのよの、いつむう、もっと？」

ノゾミ

「身体から血の失せた骸が見つかったと聞かされた時の顔は、さぞや見物でしょうね」

桂

「そんなことっ……」

烏月

「させはしないっ！」

気合いとともに踏み込んで、維斗の太刀を突き込む烏月さん。
鋼の切っ先が、ノゾミちゃんの身体を突き抜けた。
飛び散る血飛沫を想像して、わたしはまぶたを閉ざしたけれど、時代劇で聞くような、
ずびしゃと濡れた音は聞こえてこない。

ノゾミ

「くすっ……ふふふ——」

烏月

「ちいっ」

笑い声と舌打ちに目を開くと、ノゾミちゃんの身体が赤い光に霞み溶けかけていた。

首の下十センチ程の所、元々は胸のあたりを、刃金が突き抜け素通りしている。

いや、刀身に触れる端から、赤い霧は跳ね、爆ぜ、弾けて、線香花火のような火花を散らしているのだけれど。

ノゾミ

「その破妖の太刀も、あなたが持てばそんなものなの？ これなら逃げる必要ないかしら？」

ミカゲ

「決め手に欠けるのはこちらも同じです」

ノゾミ

「そう、千日手ではつまらないわね」

ミカゲ

「残念ながら姉さま、朝までかかるほど少しずつですけど、《力》を削られていますから、分は向こうにあります」

ノゾミ

「……そうね。大した痛手ではないのだけれど、相性が悪い相手であるのは確かね」

ノゾミ

「とりあえず、ひとり追加かしら」

桂

「だっ、駄目だよ！ そんなことしないで！」

ノゾミ

「あなたが私たちのものになるなら、有象無象の塵芥なんて、どうでもよくなるはずなんだけれど」

桂

「それは……烏月さん、何とかならない？」

烏月

「……………」

桂

「……鳥月さん？」

ノゾミ

「あはは、弁の立つ鬼切り役も、答えに詰まってだんまりなの？ ちゃんと聞こえるように言って欲しいのだけれど？」

鳥月

「……………」

ノゾミ

「あらあら、本当にどうしたのかしら。本当にどうしましょうか」

ノゾミ

「ねえ、ミカゲ。何とかして桂を連れていけないかしら」

ミカゲ

「違います、姉さま。早くここから去りましょう」

ノゾミ

「何を弱気な——」

鳥月

「……そうだな、聞こえるように言うのでしょうか。私が先ほどからつぶやいていた文言はだね」

鳥月

「オン・マカ・シリエイ・ジリベイ・ソワカッ！」

裂帛の気合いとともに閃光が迸る。

ノゾミ

「くあああ——っ！！」

ノゾミ

「このっ、何をっ……！」

鳥月

「千羽妙見流、『魂削り』——」

鳥月

「私の属する千羽党は、現身の鬼を切ることに重きを置く剣術主体の鬼切部だが、中にはこういう技もある」

鳥月

「私とて役を受けた身。奥儀と維斗をもってして、小鬼一匹滅しきれない未熟者だが、そう侮られては代々の伝承者に申し訳が立たない」

ノゾミ

「っっ……ああ……」

鳥月

「では、覚悟してもらおうか。逃がすと多くの犠牲者が出るだろうからね」

ミカゲ

「……………」

次で留めとばかりに維斗の太刀を構える鳥月さんの前に、ミカゲちゃんが進みでた。

鳥月

「どちらが先であれ、結果は同じだよ」

ミカゲちゃんはその宣言には何も言い返さず、ただずっとうつむきがちだった顔を持ち上げて、血の色の炯眼で鳥月さんを睨みつける。

息苦しさをともなって、ぴんと張り詰める空気。狭い所に閉じ込められたときに感じる圧迫感に、胸を圧されて苦しくなる。

わたしは昨日も先ほども、ノゾミちゃんに睨みつけられて、金縛りにあってしまったのだけれど。

鳥月

「言ったはずだ。私にその程度の邪視など——」

鳥月

「——効きはしない！」

鳥月さんは閉ざした左のまぶたで視線を受け止め、大きく見開いた右の瞳ではじき返し、構えていた維斗の太刀を振り下ろす。

世界がこなごなに砕け、きらきらと月光に輝き、ばらばらと崩れ落ちた。
その窓ガラスが割れるような光景は、先ほどとは、あまりに反応が違っていた。

鳥月

「幻術……いや、私に暗示はかからない」

鳥月

「だとすると……」

ミカゲ

「それは私たちの姿の投影」

砕けたガラスの向こう側で、ノゾミちゃんを支えたミカゲちゃんがつぶやいた。

ミカゲ

「《力》でこさえた障壁に私たちの姿を写した、まやかしではあっても幻ではない確かな現象」

わたしたちが見ていたのは、彼女たちの姿を写した、鏡のようなものだったのだろう。

ミカゲちゃんの瞳が輝いた後の数コマを飛ばしたように、ふたりは烏月さんの間合いから距離を置いていた。

ミカゲ

「姉さま、こうなさってはいかがです」

ミカゲちゃんが顔を寄せて、ノゾミちゃんに耳打ちすると、痛みと怒りに歪んでいた口元が、薄い笑みを浮かべてさらに歪んだ。

ノゾミ

「……さすがミカゲ……いいわ、それなら私の腹も癒えるかもしれないわね」

そして私たちの方に燃える瞳を向けて、

ノゾミ

「あなたに言われた通りに出直すことにするわ。長話は明日にしましょう」

ふたりの姿が闇に溶け込む。

烏月

「待て！」

消えてしまったら追いかけるようがないものだろうと思うのだけれど、烏月さんは外へ向かおうと廊下に出ていき――

――誰かの倒れる音が聞こえた。

桂

「もっ、もしかして……」

帰るフリをして待ち伏せていたノゾミちゃんたちに何かされたりしたとか。

本当にそうなのだとしたら、のこのこ出て行くのはものすごく危険なわけなんだけど、考える前に廊下に飛び出していた。

桂

「――！？」

烏月さんが倒れていた。

外傷はない。

うつぶせに倒れ込んでいるので良くわからないのだけれど、少なくとも血溜まりに沈んでいたりとかの、見てわかる大きなケガはなさそうだった。

桂

「烏月さん……？」

烏月

「——、——」

近づくと、緩やかに上下する背中が確認でき、少しだけ安心することができた。

速くも遅くも苦しげでもない、安らかな眠りと似たような呼吸をしている。

もしかして……本当に寝てる？

桂

「烏月さん。烏月さんどうしたの？」

声をかけながら、肩に手をかけて軽く揺さぶってみる。

烏月

「……………」

反応はない。

桂

「ねえ、烏月さん。烏月さんってば。こんなところで寝てると風邪ひいちゃうよ？」

さらに揺さぶると、顔にかかっていた髪がさらさらと流れて、整った顔が月明かりにさらされる。

うわっ、まつげ長い……じゃなくて。

とりあえず、ふたり揃って隙だらけにもかかわらず、襲われそうな様子はなし。ノゾミちゃんとミカゲちゃんは本当に帰ったらしい。

だから当面の問題は烏月さんをどうするかなんだけど、ちょっと起きてくれそうにないし、こんなところに寝かせておくのは言語道断。

とはいえ、わたしより背の高い烏月さんを、部屋まで運んでいくというのは骨だ。

そりゃあ、わたしひとりの苦勞で済む問題ならいいけど、ずるずる引きずって、いらぬ擦り傷や打ち身を付けるわけにもいかないし。

サクヤ

「……で、コレを部屋まで運べって？」

桂

「うん、お願い」

困った時のサクヤさん頼み。

普段から重いカメラケースを持ち歩いているサクヤさんは、下手な男の人よりもよっぽど力持ちだったりする。

思い返せばお母さんも、大掛かりな部屋の模様替えは、サクヤさんが遊びに来たときに限って思い立っていたものだ。

サクヤ

「まあいいけど、これじゃ酔っ払い介抱するのとあまり変わらないねえ」

桂

「それはひどいよ。烏月さんはわたしを助けてくれたから……」

サクヤ

「にしても廊下に飛び出した途端に電池切れして倒れるなんて、自分の限度を弁えずに潰れる酔っ払いと大差ないじゃないのさ」

サクヤ

「まだ廊下だから良かったけどね。もう少し電池がもったとして、道の往来で倒れられてごらんよ」

桂

「わ、それは大変」

サクヤ

「だろう？ 猟奇殺人のニュースが流れた翌日に、女学生が転がったりしたら、見つけてたまげる新聞配達のお兄さんが可哀相ってもんだよ」

桂

「……………」

サクヤ

「なんだい、その目は」

桂

「心配するポイントがずれてるよ」

サクヤ

「そんなことはないさ。そんな失態さらして困るのはこいつの方だしね——っと」

傍らに片膝を付いて、烏月さんの膝の下と背中の下に手を差し込んで、いわゆるお姫様だっこで抱え上げるサクヤさん。

両者美人同士、絵になる光景になりえる要素は多分にあるはずなんだけれど、お姫様も王子様も微妙に役から外れていた。

サクヤ

「なんだい、じろじろ見て」

桂

「えとね、お姫様抱っこなんて、実際に見るのは初めてだなんて」

サクヤ

「……あたしは別に、手なり足なり襟首なりをひつつかんで、引きずっていてもいいんだよ？」

桂

「ごめんなさい、もう言いません」

王子様・お姫様役をセットで充てるのは、本人の（少なくとも片方は）望むところでもなかったらしい。このふたり仲悪いし。

サクヤ

「ふう、それじゃあ足持って引きずるのは、女の情けで勘弁してやろうか。スカートだから、大層見苦しいことになっちゃうからね」

桂

「そのままお願いします」

サクヤ

「はいはい、承知しましたお姫様。お手数ですが、そっちの抜き身はお任せしますよ」

桂

「……わたしが維斗を？」

サクヤ

「あたしの両手は塞がってるからね。とはいえそんな危ない代物を、いつまでも転がしとくわけにはいかないだろ？」

桂

「それはそうなんだけど……」

サクヤ

「鞘に収めて持ってきて」

桂

「あ、うん、えっと……どうやるのかな？」

おっかなびっくり廊下に落ちていた維斗の太刀を拾い上げると、手にずっしりと重たくて、薄ら寒さが背中にこみ上げてきた。

この鋭さとこの重さなら、手を滑らせて落としただけで、足の先を持っていってしまうかも——なんて考えてしまったから、もういけない。

そんな状態でどうこうできるはずもなく、結局床に置き直してから、安全第一をモット

一に鞆に収めることにした。

剣先の背をつまんで指紋を付けたりしてしまったので、後で怒られるかもしれないけれど、緊急事態なのでそれも致し方ない。

何とかことを成し終えて、先に進んでいたサクヤさんの斜め後ろまで駆け寄ると、サクヤさんがぶちぶち愚痴をこぼしているのが聞こえた。

サクヤ

「あー、人のことは言えないけどねえ、見かけよりも随分重いよ」

桂

「そうなの？」

サクヤ

「筋肉は脂肪より、一割二割が重いからね」

桂

「そんなに！？」

わたしの体重が二割増しになったりすると……

……人には言えない結果になった。

とはいえ烏月さんが筋肉質だというのは、ずっしり重いこの維斗を体の一部のように使いこなしているわけだから、当然といえば当然かも。

だけど見るからに筋肉ムキムキな烏月さんは、何だかちょっと嫌かもなあ……

だけど、わたしの部屋ならすぐそこだし、なんとかなる……かな？

桂

「……ふう、大変だったよー」

何とか烏月さんをお布団まで運び込み、ようやく人心地つくことができたわたし。

烏月さんが取り落とした維斗も回収してあるし、制服の内ポケットに入っていたお札を貼って安全も確保したし、これで一安心というわけだ。

桂

「それにしても、本当に寝てるだけなのかなあ。全然起きないけど大丈夫なのかなあ……」

一応、全力を尽くしたのだけれど、気概だけで天地がひっくり返るほど不安定な世の中ではないわけで、為せば為るのは能力的に可能な範囲。

運ぶだけで精一杯のわたしに、静かに優しくを要求するのは高望みもいいところ。普通なら絶対に起きる刺激を、何度も何度も与えてしまった。

それなのに烏月さんは死んだように眠ったまま、一向に目を覚ます気配がない。

昏々と眠るその様は、紡錘で指先を刺して百年の眠りに落ちた、茨の森の眠り姫を彷彿させたりもして――

――だとしたら、王子様のキスで目が覚めたりもするのかな？

自然、視線が、薄く開かれた唇に向かってしまう。

桂

「うわーっ」

一気に耳まで瞬時に赤面。

何だか急に恥ずかしくなって、誰が見ているわけでもないのに、自分の唇を手で押さえ隠してあたりを見回す挙動不審なわたし。

ばか、一体何をやっているんだか。

どう考えても守られてばかりのわたしは、王子様なんて柄じゃないし。

いやね、お姫様なんて柄でもないのは重々承知なんだけど、百年早く生まれてたらって、教えてもらったばかりでもあるし。

桂

「はあ……ばかなこと考えてないで、わたしも寝よう」

そう自分に言い聞かせて、宣言通りに動こうとした矢先に、はたと凍りつく。

桂

「あ……わたし、どこに寝よう」

部屋にあるお布団は一組だけで、そのお布団にはすでに烏月さんがいる。

まあ夏だから、そこらへんで寝ていても最悪風邪を引くぐらいですむだろうけど、やっぱりお布団が恋しいことは恋しいわけで。

桂

「どうしよう、どうしよう……」

問えども答える人はなし。

あたりを見回して、結局目が留まるのは烏月さんの眠るお布団。

桂

「ううっ、いいのかな……」

女の子にしては背の高い烏月さんだけど、うらやましいぐらいスマートで。

十センチ以上身長の違いと、一センチほどしか変わらないウエストという、この不公平さ加減といたらどうだろう。

不公平って言えば、容姿から身体能力から頭の中身まで、何から何まで不公平尽くしのような気がするけど、そんなのは今更だし。

今重要なのは、烏月さんはスマートで、もうひとりぐらい隣に入ってもそんなに窮屈じゃなさそうということ。

桂

「……………」

女の子同士だし、わたしは寝相いい方だし、お母さんともよく一緒に寝てたし、別に何の問題もないと思うけど、どうしよう、どうしよう――

何気に選択権はなかったような気がするけど、気にしたら負けだと思う。

桂

「……失礼します、烏月さん」

結局、わたしは烏月さんの隣に潜り込んだ。

わたしの胸のドキドキは、くっついた二の腕から伝わってくる、緩やかな鼓動の二倍強の速さ。

ううっ、ちょっと背中を向けてみようかな。でも寝るときはいつも仰向けだから、横向きになったところで寝れないだろうし……

すぐ隣に感じる、温かな鼓動。

こんな風に誰かと一緒に寝るのは、本当に久しぶりだった。最後にお母さんと一緒に寝たのは、一体いつのことだったか。

お母さんのことを思い出すと、いつもなら胸がきゅっと縮こまるのだけれど、すぐ隣にある温かな鼓動のおかげで今はそうならない。

ドキドキドキドキ、わたしの胸は破裂してしまいそうなぐらいに膨らんでいる。

桂

「お母さん、わたし大丈夫だよ……」

ずっと溜め込んでいた、色々なことを思い出しているうちに、それがいつの間にか夢に溶け込んでいた。

わたしはその夜、幸せな夢を見た。

サクヤ

「——というわけで、もういいだろう。荷物をまとめてさっさと帰りな」

やる気なさげに、もそもそと朝ごはんをかじりながら、サクヤさんがおっしゃった。

例によって例の如くの栄養調整食品と乾パンと缶詰が並ぶさまは、和気藹々の食卓というよりも、被災者の腹ごしらえといった様相。

葛

「桂おねーさん、何がというわけなんですか？」

桂

「サクヤさん、何が？」

サクヤ

「何がってあんた、十年より前のことはいざ知らず、昨夜のことももう忘れたのかい？」

葛

「おねーさんのおかーさんとの馴れ初めが何か？」

サクヤ

「違う、その後のことだよ」

葛

「その後って、何かあったんですか？」

桂

「あ、葛ちゃんが寝てる間にだけどね——」

赤い蛇と双子の女の子のお化けに襲われて、サクヤさんとオハシラサマに助けてもらったことの顛末を、かいつまんで説明する。

葛

「なるほどー」

桂

「なるほどって、葛ちゃん。『そんなの嘘』とか思ったりしないの？」

葛

「あ、わたしそーゆー方面とは馴染みのある家の生まれですんで、特には。それに嘘を嘘だと見抜く目には自信ありますし」

桂

「そうなの？」

そういえば昨日のトランプでも、はったりぜんぜん通じなかったっけ。

いや、わたしが下手なだけかもだけど。

葛

「とにかく、桂おねーさんは嘘を言っていません。嘘だとしたら、嘘を嘘だと知らずにいる、善意の第三者的な立場にある場合でしょう」

桂

「はあ」

サクヤ

「それだけ状況がつかめてるなら説明不要だろう。駅まで車で送って行くから、食べ終わったら荷物まとめるんだよ」

桂

「どうして」

サクヤ

「どうしてって、あんたね。連中が狙っているのは一体何だい？」

桂

「……たぶん、わたし」

わたしの血。

当たり前だけど、血がなくなったら死んでしまう。この場にいたら危険で、だから帰れと言われるのもわかる。でも——

桂

「どうしてわたしが狙われるの？ オハシラサマの身内だから？」

サクヤ

「あんたの身体に流れている血が、特別貴重な血だからさ。因縁話は関係なくて、体質ゆえに狙われるんだよ」

桂

「体質ってそんな——」

葛

「いえいえ。そーゆーのってありがちですから。桂おねーさんは『西遊記』知ってます？」

桂

「三蔵法師に孫悟空の？」

ありがたいお経を取りに、三蔵法師が天竺へ向かう旅をする話で、お供は孫悟空以下、豚の猪八戒に河童の沙悟浄。

葛

「その『西遊記』です。三蔵法師は経蔵・律蔵・論蔵の三つの蔵に精通した僧侶に付ける敬称で、『西遊記』の三蔵法師は玄奘と言うんですけど」

わたしは三蔵が名前前で、法師が敬称だと思っていたんだけど、違ったのか。

葛

「その玄奘三蔵が、どうして誰の手にも負えない乱暴者で、ついには釈迦如来に封じ込められてしまった孫悟空をお供にしたのか知ってます？」

桂

「すごい長旅だし、ひとりだと大変だから？」

葛

「そういう理由なら、呪文ひとつでギュウギュウに締まる輪をはめて強制してまで、孫悟空を連れ出すことないじゃないですか」

頭に輝く金の輪は「きつくしめるタガ」と書いて「キンコ」と読むらしい。

緊箍——なんて書けないし読めないけど、緊箍の外れた孫悟空は、まさにタガの外れた乱暴者。

同じ猿のお供でも、お婆さんお手製の吉備団子ひとつで仲間になってくれる猿とはわけが違う。

桂

「……何で？」

葛

『西遊記』の世界には、徳の高い僧侶の肉を食べると不老長生できるという設定がありまして。それで玄奘三蔵は妖怪に狙われているんですよ」

桂

「あ……」

何だか、身につまされる。

桂

「なるほど、ありがちなんだね。でも、わたしの血ってそんなにいいものなの？」

いくらなんでも、不老長生なんて。

桂

「専門店のメニューにあるスッポンの血みたいに、滋養強壯の効果があるってぐらいなら、あっさり諦めてくれたりも……」

サクヤ

「月とスッポン」

桂

「どっちが月なの？」

サクヤ

「もちろんあんたの血が月さ。月には滋養強壯どころじゃない、若返りの水があるって言われていてね」

葛

「変若水ですね。『竹取物語』のかぐや姫の置き土産も不死の薬ですし、月はそのへんの話の宝庫ですよー」

サクヤさんの後を次いで、説明補足してくれる葛ちゃん。

こういった方面に馴染みのある家の生まれだと言っていたけど、この子は本当に何者だ。

葛

「ちなみにその薬は山の上で燃やされちゃったんですけど、不死の薬を燃やして不尽の煙が立つようになったのでふじの山——なんていうオチが」

桂

「駄洒落？」

サクヤ

「……の上に、脱線しすぎだよ」

葛

「たはは、これは失敬。続けてください」

サクヤ

「とにかくだよ、桂」
ひとつごほんと咳払いして。

サクヤ

「あんたに流れる羽藤の血は、不死の薬にも等しい代物なんだよ。人間以外のモノにとってはね」

サクヤ

「そして今のあんたには、頼れるお供の孫悟空はいない」
脅しじゃないぞと、真剣な瞳が語る。
そりゃあ、あれだけ怖い目にあったんだから、脅しじゃないことぐらいはわかる。
だから——
だから、わたしは。

桂

「わかった。帰るね……」

言われた通りにするしかなかった。

サクヤ

「そうかい、それなら一安心だよ」

桂

「だけど帰ったら帰ったで、他のひとたちに狙われたりしないかな？」

サクヤ

「それは……」

サクヤ

「それはまあ、当分のところ大丈夫だと思うよ。今までだって襲われたことはないだろう？」
こくり。
頷くわたしに頷き返して、直径十五ミリほどの輪を、人差し指と親指で作った。

桂

「……OKマーク？」

サクヤ

「いや、そうじゃなくて」

サクヤ

「あんた、珠を持たされているはずだよ。たぶん、これぐらいの青い珠」

桂

「あ、もしかして……これかな？」

ごそごそやって取り出した携帯電話には、言われた通りの珠飾りのついたストラップ。

珠の表面には白い蝶が浅く掘り込まれていて。

桂

「もしかして、オハシラサマの？」

青い着物の袖に白い蝶を染め抜いた、彼女の姿を思い起こさせるものだった。

携帯電話を持つ前はキーホルダーとして使っていたから、一番古い記憶の中のわたしもこの珠を持ち歩いていた。

桂

「そういえばこれ、お母さんがお守りみたいなものだって」

サクヤ

「それが桂の血を隠してくれているんだよ」

桂

「でも、それだと昨夜は……」

サクヤ

「連中はね、桂が羽藤の血の持ち主だって知っていたから狙えただけだよ」

答えを最初から知っていれば、問題が解けなくても正解は出せる。

桂

「じゃあ、わたしは……安全？」

サクヤ

「そういう事件に首を突っこんで、そういう体質だって悟られなければね。好奇心は猫を殺すよ」

桂

「うにゃあ……」

それでも――

それでも、わたしは。

桂

「それでも、昨日は大丈夫だったよ！？ 追い返してもらえたよ！？」

帰れと言われて帰るのは、理屈ではなく嫌だった。

あの騒ぎの前に見た夢で、幼かった頃の自分の姿を見てしまったから。
わたしの中に欠けている、なくした日々の欠片をこのお屋敷で発見できそうだったから。
お母さんが一緒だった十年間は、自分の何かが欠けていても、それでも寂しくなかった
のに。

なのに、ひとりきりになってしまったら、ひとりぶんにも届いていなかったということ
を、まざまざと思い知らされてしまって。

このままでは耐えられない。

すがれる何かを見つけ出さない限り、わたしはやっぱり駄目だから。

だから——だから、わたしは。

桂

「まだ帰らないよ。まだここにいる」

サクヤ

「あんた全然わかってない。昨夜は運が良かっただけさ。そんな調子じゃ今日こそ死ぬよ」

桂

「大丈夫だもん」

サクヤ

「大丈夫なわけあるかい。あんた、自分じゃ何もできないじゃないか」

桂

「それは……そうだけど……」

サクヤ

「だろう？ つべこべ言わずにさっさと出て行きな。まだ聞き分けないこと言うようなら、
トランクに押し込んででも帰ってもらおうよ」

桂

「なんでサクヤさんにそんなこと言われなきゃいけないの!? ここはわたしの家だよ!？」

桂

「まだそうじゃなくても、権利があるのはわたしだもん。出て行くのはサクヤさんの方だ
よ」

葛

「ちょっと、桂おねーさん」

桂

「葛ちゃん、なに!？」

葛

「サクヤさんのお言葉も、おねーさんのこと考えて下さってのことですから、出て行けど

いうのはですねー」

桂

「葛ちゃんもサクヤさんの味方するんだ」

葛

「あのですね、誰の味方とかそーゆー観点ではなくて……」

桂

「もういいよ！ わかったよ！ わたしが出て行けばいいんでしょう！」

桂

「そんなに邪魔なら、出て行けばいいんですよ！」

サクヤ

「桂っ！？」

桂

「はっ、はっ、はっ、はっ——」

胸のふいごが上げる悲鳴は、生き急ぐ蟬の必死の声すら飲み込んで。

桂

「はっ、はっ、はっ、はっ——」

聞こえてくるのは、骨伝いに直接響く地面を蹴立てる足音と、わたし自身の中で紡ぎだされる音。

桂

「はっ、はっ、はっ、はっ——」

切れ切れの呼吸が荒い。

堰を切る血に押し流されて、小さく分かれて散らばった心臓が、こめかみや後頭部や首や手や足、全身のあちらこちら、所構わずのたうっている。

桂

「はっ、はっ、はっ、はっ——」

風を切っても空気は暑くて、噴き出る汗もじっとり熱くて、わたしの体温は上がっていく一方。

眩暈がするほどの暑さ、熱さ。

もう限界だった。

足がもつれる。

踏みとどまろうとするより早く、歪んでいた視界が傾き。

傾いて。

傾ききって——衝撃。

幸い、倒れ込んだ先は、昨日の大雨にもぬかるんだりはしておらず、踏んだり蹴ったり
の泥まみれになることは避けられた。

心配する順番が逆のような気がするけど、ぬかるみ以外に尖った石や枝などはなく、打
ち身や擦り傷以外の目立ったケガもしてない様子。

本当なら、安堵の吐息のひとつでも吐くところだけど、そんな余裕はないようで、

桂

「はっ、はっ、はっ、はっ——」

わたしは荒い息を吐き続けている。

山道の登りであることを差し引いても、随分な距離をふらふら走っていたと思う。

まだだるい腕に力を込めて、突っ伏していた身体を仰向けにひっくり返す。

すると青々とした景色を運ぶ光が目飛び込んできた。

桂

「はあ——はあ——」

胸の圧迫感が薄れ、ほんの少し息をするのが楽になる。見上げる空は底抜けに高く、
空気はいくらでもそこにあったから。

桂

「はあ——」

だんだん呼吸が落ち着いてくると、吸い込んだ酸素を全身に運び届ける血の流れも、供
給量にあわせてペースを変えてくる。

桂

「はあ……」

肺の隅っこで焦げ付いていたものを吐き出すと、また少し息をするのが楽になった。

桂

「……わたし、何やってるんだろう」

考えなしに飛び出して、気が付けばこんな山の中で寝転がったりしていたりして。
しゃわしゃわと蝉が鳴いている。

ざあっと風が木々をすり抜け、豊かに茂る緑をさざめかせた。

向こうから来る風は、走りながら切る風よりも新鮮で涼しくて、だから少しでも多く風
に触れたくなり、両手を付いて上半身を起こした。

桂

「……んっ」

顔を撫でる空気の流れに目を細める。

ただ、汗でべったりはりついた髪のせいで、首の周りには風が入らず熱がこもっていた。

桂

「髪、切っちゃおうかな……」

十年間ずっと大事に伸ばしていたものが、何だか急に鬱陶しく思えた。

桂

「……くちゅんっ」

そんなに冷やしたつもりはないのに（というか、まだぜんぜん暑い）くしゃみが飛び出した。

みっともない子だと、サクヤさんや葛ちゃんに噂されているのかもしれない。

もしくは、お風呂上りによく梳かしてくれていたお母さんが、勿体ないと言ってくれているのか。

桂

「ううっ……にしても、これからどうしよう」

足の疲れは抜けていないけれど、少し休憩したからといって、どうにかなる程度のものでもなさそうだった。

それどころか、明日の朝は筋肉痛で苦しむことになるかもしれない。

とりあえず、歩ける程度には回復しているので、立ち上がってあたりを見回す。

桂

「わ、もしかしたら遭難したかも……」

そうなんかい？

と、思わずベタな受け答えをしたくなるぐらい、奥の奥までやって来ていた。

いわゆる普通の登山道なんてとっくに外れていて、もしかしたら獣道の方がマシかもしれない、道なき道を通って来ている。

そんなに大きな山ではないし、下っていけばいずれ開けたところへ行き当たるはずだから、遭難には及んでいないはずだけれど。

それに、何だろう。

まったく見覚えのない場所というわけでもなさそうだった。

山の中なんてよほど見慣れている所か、特徴のある所でない限り、どこも似たような景色に見えるんだろうけど——どこかで。

——ああ、夢の中で見た、あの。

小さなわたしの目線に比べて、写る景色は随分と高くなっていたりするけれど、たぶん、きっと、間違いなく。

この先には、ひととき大きな木の生えている、開けた場所があるはず。

振り返る。

お屋敷を飛び出してから、けっこう時間も経っているはずだし、心配しているかもしれない——

サクヤ

「——というわけで、もういいだろう。荷物をまとめてさっさと帰りな」

……やっぱり、行ってみよう。

この先のあの場所へ行けば、忘れていた何かを思い出せるかもしれない。

歩き出す。

下生えを踏みしだいて進む。

木々の間を縫うように進む。

見覚えのある景色が続く。

次にどう進めばいいのかが、感覚的に迷うことなくわかるような気がする。

夢の中のわたしは、誰かに手を引かれてこの道を進み、今はその記憶に引かれて進んでいる。

下生えを踏みしだいて進む。

木々の間を縫うように進む。

見覚えのある景色が続く。

だんだんと急く足を、いさめながら進む。

先ほど息切れして動けなくなるまで走ったというのに、わたしの足は本当に落ち着きがない。

ざっ、ざっ、ざっ、ざっ。

本当に、なんて落ち着きのない。

ざっ、ざっ、ざっ、ざっ。

だけど今では足より心が急（せ）いでいて。

もうすぐだ。

もうすぐ視界が開けて、あの大きな木が——

ほのかな甘い香りと、ほころび落ちた花びらが、通り行く風に運ばれてくる。

白い花を一杯に咲かせた、この距離からでは天を衝くほどの高さに見える巨木が姿を現す。

紋白蝶（もんしろちょう）にも似た花が、風に吹かれてゆさゆさと羽ばたいている。

ああ、やっぱり——

わたしは起きているつもりで、夢を見ているのかもしれない。

走り疲れてバテて倒れて、肌を撫で行く風の心地よさに目を閉じ、うつらと眠ってしまった上での夢。

昨夜のお葬式の夢に続いて、今度は幼き日の記憶を。

木の下に誰かがいる。

桂

「オハシラサマ——？」

思わず口に出してしまったけど、遠目に見ても明らかに違う。

その人は青い着物ではなく、ジーンズにシャツというラフで今風の格好をしている。

わたしは風下において、漏らした声もごくごく小さなものだったのだけれど、その人はわ

たしに気づいて木の幹に向けていた顔を上げた。

桂

「あ……」

少年

「こんな所に人がくるなんて、珍しいね」

柔らかくて少し高めの声だけど、間違いなく男の子の声。

鳶色の瞳と茶色がかった髪の毛は、見飽きるほど鏡で見ているものとほぼ同じ色合いで、特筆するほど変わっているものではない。

彼自身が言ったように、こんな所にいる以外、まったく普通の男の子だけれど——

だけど、だけど、これは一体何だろう。

何だか落ち着かない感じがする。

少年

「もしかして道にでも迷った？」

桂

「えっと、その……」

言葉に詰まる。

サクヤさんや陽子ちゃんのような親しい間柄の人にならともかく、見ず知らずの人に「夢で見た通りに来た」なんて、とんでもない話はいけない。

桂

「……何となく、足の向くままなんですけど」

少年

「なるほどね。それじゃあ——」

と、彼の声を遮るように、わたしの後ろで茂みが揺れた。

風ではない。風よりも強く、確かな重みのあるものが通る音。

獣だったらどうしよう。

兎や狸や狐のような小動物ならいいけれど、猪や山犬や熊のような動物だったらどうしよう。

ぎいっと腰や首を軋ませて振り返る。

——

「おねーさん、気をつけてください！ その人、普通の人じゃないですよ！」

桂

「え！？」

聞こえて来たのは、葛ちゃんの声。

葛ちゃんと尾花ちゃんがこっちに向かってきている。

葛

「尾花がその人警戒してます！ 何だかよくわかりませんが、たぶんその人要注意です！」

桂

「え！？」

再びギギッと錆びついた関節を巡らせ、足の先の正面に身体の向きを戻す。

桂

「あ、あの……」

少年

「……参ったな。確かに僕は死者なんだけどね」

否定してほしかったのに、あっさりと認められてしまった。

少年

「ここにいるのは成すべきことを成そうと成った鬼でしかなく、僕という人間はとうの昔に死んでいることには変わらないんだけど——」

一歩、わたしへ近づいてくる。

自分のことを鬼と言いつつ、うっすら笑うその顔が、光りの加減のせいなのか、わたしにはとても怖い顔に見えた。

桂

「……………」

もしかしてこの人も、わたしの血を狙っていたりするのだろうか。

昨夜の子たちも「思い出させてあげる」と言っていて、その直前に見た夢はわたしの忘れていた過去につながる夢だった。

もし鬼に夢を操る《力》があるのだとしたら、ここへわたしを導いたあの夢も、もしかして——

誘蛾灯にふらふらと向かう蛾のように、過去の光をちらつかされて、誘い出されてしまったのか。

だとすると、わたしは。

桂

「や、やだっ！」

道も方向も関係なく、ただ闇雲に逃げ出す。

一応、葛ちゃんの方に鬼を連れて行くわけにはいかないというぐらいの分別は残っていたので、違う方向に走る。

葛

「桂おねーさん！　なんでそっちに行くのですか！？逃げるんなら、こっちへ来てくださいようり」

少年

「——桂だって？」

わたしの背中を追いかける声を見殺して、わたしは走った。
丈の高い草の縁が、太股を引っかけて傷だらけにしてくれた。
枝に引っ掛かった髪の毛が、ぶちんとちぎれて泣けてきた。
涙で前が見えなくなるけど、その前から枝に刺さるのが怖くて、だいたいのところ閉じっぱなしだったので今更だ。
足が踏んづける地面の感覚だけを頼りに走る。
よく転ばないものだ、ほんの一部だけ残っている冷静なわたしが感心する。

その地面の感覚が。

桂

「——えっ！？」

急にすかっとなくなった。

桂

「ええっ！？」

わたしの足が踏んづけるはずの、地面がそっくり消えていて。

視界はいつの間にか開けていて、青空が大きく広がっている。
わたしに触れる葉や枝はなく、足元には地面すらなく、わたしに触れているのは空気だけだった。
お尻から背中にかけて、何とも言い難い感覚が襲ってくるのと同時に、世界が縦に流れ出す。
強い風がわたしの髪やスカートをばさばさと痛いぐらいにはためかせる。

滑り落ちる絶叫マシーンのあの感覚によく似ているけれど、身体を押さえつける安全ハーネスはない。落下感の中の奇妙な浮遊感。
そうか、たぶん崖から落ちたんだ……
危険から逃れようとして、さらに明確な危険の中に飛び込んでいくなんで、我ながらなんて間抜けな。
とはいえ、どんなにあがいても柳に風。
落下はきっと、ほんの一瞬。
その一瞬がずいぶん長く感じられるのは、すでに走馬灯が回り始めているからなんだろう。
目の前がぐるぐると歪む——

——

「桂——っ!!」

葛ちゃんや鬼の男の子の声じゃなくて、サクヤさんの声まで聞こえてきたのは、過去の追想だからだろうか。

桂

「ううっ、ごめんなさい、サクヤさん。こんな情けない死に方するぐらいなら、言うこと聞いて帰れば良かったかも……」

サクヤ

「ホントだよっ、このっ!!」

怒鳴り声とほぼ同時に、腕が引っこ抜けるほどの衝撃がわたしを襲った。

桂

「〜〜っ!!」

サクヤ

「脱臼しても死ぬよりマシだろ！ 我慢おし！」

衝撃は右肩と肘を中心に、腰や首などの関節部に集中した。それ以外の箇所にはぎゅーっと無理矢理引き伸ばされるような感じ。

限界以上に伸ばされたけれど、古いゴムのようにぷつりと切れずにすんだようで、伸び縮みを繰り返しながら振幅を減衰させる。

ぎゅーっと目をつぶっていた顔に、ぱらぱらと小石のようなものが降ってくる。

いまだに脚は踏み場なく、宙ぶらりんにおら下がっている。

支点となっているのは、万力に握られているんじゃないかというほどに、きつく握りしめられた右手首。

サクヤ

「何とか……ギリギリ間に合ったねえ……」

桂

「……サクヤ……さん？」

サクヤ

「また間に合わないかと思ったよ。まったく、心臓に悪いことさせるんじゃないよ」

降ってくる声に、恐る恐る目を開けると——

吹く風对身体を持っていかれて、青い空の中に体が大きく傾いた。

風がやんだ途端、大きく揺り戻す。振り子のように、ぶらぶらと揺れる。

桂

「ひゃっ」

サクヤ

「下手に動くんじゃないよ」

びしりと厳しい叱責に身をすくめて、そのまま揺れが収まるのを待つ。

サクヤ

「さて、これからどうしたもんかねえ。もうちょい上の方で引っ掛かってたら、何とかな
ってたかもしれないけど……」

わたしたちは崖に根を張る一本の朽ち木に命を預けている状態だった。藁に比べればま
しだけど、すぎりきるにはずいぶんと心許ない。

それだけで十分に危機的状況なんだけど、加えてサクヤさんは右手一本でその木にぶら
下がっている。

ふたりの体重を合わせたら、鯖を読んでも百キロを超えているはずで、それを片手で支
えるのは無理があると思う。

火事場のばか力なんていうのあるだろうけど、それが長続きするとは思えないし。

桂

「サクヤさん、大丈夫？」

サクヤ

「とりあえずは何とかね。とはいえ、ずっとこのままってのはさすがに無理だよ」

桂

「うん……」

見上げると、校舎の二階窓に相当するあたりの高さに、踏み外した崖のへりが見える。

桂

「だいたい一階分の高さを落ちたんだ……」

サクヤ

「それよりさらに落ちていたら、キャッチできてもあんたの腕がもたなかったかもしれな
いねえ」

桂

「んっ……」

抜けそうな痛みに眉をしかめる。今でも腕一本に体重全部がかかっているわけで――
とはいえ、サクヤさんはこんなものじゃないはず。

奘

何とかならないものかと今度は下に目をやると、こちらは屋上から地上までよりも高度
差がある。ちなみにわたしの通う学校は、四階建てだ。

桂

「ひゃっ……」

下にあるのが川や枝ぶりのいい木などならまだしも、角のある岩が転がっているような場所では、落ちたらまず助かりそうにない。

そして崖の途中にも、足がかりになりそうな岩棚などは見当たらなかった。

上にも下にも道はなし。

サクヤ

「さーて、どうするかねえ」

桂

「どうするかねって……サクヤさんどうしてそんなに落ち着いてるの!？」

サクヤ

「なっちまったもんは、なっちまったもんだし、焦ったって、どうにかなるもんじゃないだろう」

桂

「なっちまったって、サクヤさん——なんでこんな危ないことしたの!？」

スカイダイビングの空中曲芸じゃないんだから、落ちているわたしを追いかけて自分から飛び込んでくるなんて無茶苦茶だ。

サクヤ

「あんたが危ないところに近づくからだよ。あたしの言うこと聞いて家に帰ってたら、こんな目には遭ってなかったんだ」

桂

「わたしが危ない目にあうのは自業自得だもん。でも、なんでサクヤさんまで危ない目にあわなくちゃいけないの!？」

桂

「この崖、ここ以外に木とか生えてないよ!？場所がちょっとズレてたら、サクヤさんも一緒に下まで落ちてたんだよ!？」

桂

「なのになんで飛び出したりしたの!？ 確認する暇なんかなかったはずだから、余裕っぽく見せてるけど大博打だったんでしょ!？」

サクヤ

「博打ではあったねえ。まあ、いいじゃないか。ちゃんと当たりを引いたんだから」

桂

「良くないよ」

サクヤ

「良くないってあんた、じゃあ、あたしにどうしろってんだい?」

桂

「手、離して」

サクヤ

「……ああ!？」

桂

「サクヤさんひとりなら上まで登れるでしょ？」

ふたり分の体重を片手で保持する握力の持ち主なんだから、両手両足が自由になれば、一階分の高さなら、手がかりさえあれば登れそう。

いや、高山植物を撮りに行ったときに、崖登りで苦勞したって話を聞いたことあるから、フリークライミングの心得があるのかもしれない。

桂

「だから、離して」

サクヤ

「ばか言ってるんじゃないよ！」

右の手首に痛みが走った。

サクヤ

「折角こうして間に合ったのに、何でそんなことしなくちゃならないのさ」

桂

「なんでって、サクヤさんが助かるために決まってるじゃない」

桂

「わたしの自業自得なんだから、サクヤさんまで巻き込みたくないよ。そんなことしたら、お母さんに合わせる顔がなくなっちゃうよ」

サクヤ

「あたしだって、ここでこの手を離したりしたら、真弓や笑子さんに合わせる顔がなくなるんだよ！」

サクヤ

「よりもよって、あたしの目の前で羽藤の血を絶えさせたりなんかしたら、ちゃんと天寿を全うしても、あの人の前にいけないじゃないかっ！」

桂

「あの人……？」

サクヤ

「ちっ……何でもないよ」

逆光のせいで、どんな表情を浮かべているのかは見えない。

サクヤ

「とにかくね、手段を選ばず助かることを優先するんなら、方法がないわけじゃないよ」

桂

「そうなの？」

サクヤ

「あんたにはちょっと、怖くて痛い思いをしてもらうことになるだろうけどね」

強い風が吹いて、わたしたちの身体を揺らした。

身体が揺れるたびに、朽ち木はぎしぎし音を立ててたわんだ。

朽ち木がたわむたびに、根元の方からぱらぱらと細かく砕けた岩が落ちていく。地面に当たる音は風に消されて聞こえてこない。

サクヤさんの限界が先か、朽ち木が折れるのが先か、その根の植わった岩が崩れるのが先か。

わたしの腕をつかむサクヤさんの手に一層の力がこめられて、ぎりぎりと食い込んでくる。

今以上に怖くて痛くて、それでも助かる方法なんてあるのだろうか？

桂

「……………」

サクヤ

「桂。こういう状況になってる、そもそもの元凶が何だかわかるかい？」

桂

「わたしの血……だよな？」

贅の血とかいう、特別な血。

桂

「わたしの血を飲むと、不老長生できるって……………」

サクヤ

『西遊記』の話はあくまで喩え話だよ。完全に違うわけでもないんだけどね」

桂

「じゃあ——」

サクヤ

「人に在らざる化外の民の多くは、もともと長命揃いだし、老化だって人ほど深刻じゃない。むしろ長生きしてる奴の方が強いぐらいだ」

桂

「えっと……」

サクヤ

「別にわからなくてもいいよ。ただ、そんな連中が欲しがるのは《力》だってわかればね」

桂

「《力》……？」

サクヤ

「精気とか妖力とか生命力とか神通力とか——」

サクヤ

「いろんな形をとるから、単純に《力》としか言いようがないんだけど、あまねく物事を動かしている霊妙不可思議な何かのことさ」

サクヤ

「あたしたち生物がこうして生きているのも、そういった《力》が働いているからだよ」

桂

「わたしたちが生きているのも……？」

サクヤ

「そうさ。生き物に流れている血は、《力》の結晶みたいなものだからね。だから生け贄として捧げたり、呪いの触媒として使ったりもする」

桂

「それって人間の——じゃなくてもいいの？」

サクヤ

「動物を生け贄に捧げる風習は世界中にあるからね。だけど、血にも色々あるんだよ」

サクヤ

「ジャンクフードみたいにスカスカの血もあれば、栄養調整食品みたいにギュッと《力》の詰まった血もある。同じ人間でも十人十色さ」

サクヤ

「そして桂。あんたの身体の中には、数千人にも匹敵する《力》が流れている」

桂

「それが贄の血？」

サクヤ

「贅の血を生むあなたの身体は、無尽蔵に《力》を生み出す打出の小槌みたいなものなんだよ。狙われるのも当然さ——っと」

朽ち木の根元にある岩肌が、ぱらぱら崩れて落ちてくる。

サクヤ

「……ふん、木より岩が先に参りそうなのは何かの皮肉かねえ」

桂

「え？」

サクヤ

「いや、こんな状態なのに前置きが長くなったね。さっさと本題に入ろうか」

サクヤ

「血が《力》そのもので、中でもあなたの血は特別だってことはわかったね」

桂

「……でも、わたしの血だけあっても役にたたないよ？」

サクヤ

「大丈夫だよ。ちゃんと全部揃ってる」

桂

「え？」

揃ってるって、ここにいるのはわたしと——

サクヤ

「あなたの血を飲んで《力》を振るうことができる、人間以外の生き物がここにいるんだ」

桂

「……サクヤさん？」

サクヤ

「あたしは山の神の娘の眷属。観月の民の血に生まれた、あんたら人間とは違う種類の生き物だよ」

桂

「そんな冗談、言ってる場合じゃ……」

サクヤ

「あんたこそ、あたしの言い分を冗談扱いしてる場合じゃないよ」

ぱらぱらと降ってくる細かに崩れた岩の欠片が、わたしの上に降りかかる。

サクヤ

「あたしにあんたの血を飲ませるか、他のやり方を試すか——とにかく、手を離すってのはなしだ。こうなったら一蓮托生だよ」

半年前のわたしの家で、茶飲み話に聞いていたなら、笑い飛ばすしかない与太話だけれど——

わたしは昨日の経験で、わたしの血を狙う鬼がいることを実感していた。
わたしはサクヤさんが、命がけで助けてくれていることを実感している。
だけど——

サクヤ

「あたしのこと、怖くなったかい？」

桂

「別に怖くなんか……」

お母さんを亡くして天涯孤独となったわたしにとって、一番信頼できる人であるサクヤさん。

そのサクヤさんが、人間ではなかったのだという。あの双子の鬼と同じように、わたしの血を吸うと言っている。

桂

「ううん、やっぱり怖くないって言ったら嘘——だと思う。たぶん」

サクヤ

「そうかい」

桂

「でも、怖いより好きの方が大きいよ」

サクヤ

「……そうかい」

桂

「ねえ、サクヤさん」

サクヤ

「なんだい？」

桂

「サクヤさんはわたしのこと、鈍臭くて邪魔な子だと思ってる？」

サクヤ

「そうだねえ、死ぬ気もないのに崖に向かって全力疾走するような子だしねえ」

桂

「ううっ……」

サクヤ

「でもね、あたしは邪魔なものはスパッと捨てられる片付け上手だよ」

サクヤ

「邪魔ならこうしてつかんでないよ」

桂

「うん……」

足すら地面についていない、心許ないわたしが感じている確かなもの。

桂

「……わかった。サクヤさんに全部任せる。痛いのも怖いのも我慢する」
それに、わたしだけならともかく、サクヤさんの命だっかかりかかっているんだ。

桂

「わたしの血で助かるなら、いくらでも飲んで」

サクヤ

「よし、桂の覚悟は受け取った。とはいえ——」

サクヤ

「まずこの体勢を何とかしないと、血を飲むどころじゃないね」

桂

「うん」

サクヤ

「とりあえず、桂の身体を持ち上げるよ」

桂

「でも、この体勢でどうやって……」

サクヤ

「言っただろう。あたしは人間じゃないんだって」
わたしの手首を握るてのひらに、一層の力がこもる。
みしみしと骨の軋む音が、身体の中を伝わってきた。

桂

「つあっ……」

とんでもない握力に搾り出されそうになる泣き言を必死で飲み込む。痛いのも怖いのも我慢すると言った舌の根はまだ乾いていない。

サクヤ

「くっ……このっ……」

サクヤさんの唸る声が近づいてくる。

身体がゆっくり持ち上げられている。

サクヤ

「桂……あたしの首に、捕まえられてる逆の手、回しな……」

絶え絶えの声にしたがって、手を伸ばす。

サクヤ

「よし、回したね」

桂

「うん」

サクヤ

「いいかい、今から手を離すから、こっちの手も首に回すんだ。あたしは腰に回すから」

サクヤ

「一瞬の勝負だよ。持ち替えがすむまでは、あんたの片手だけが命綱だ。もし途中で離したりなんかしたら……」

サクヤ

「……今度こそ真っ逆様だよ」

たちっばなしの背中の産毛が、さらにぞぞっと逆立った。背中の肌が毛に引っ張られるみたいで、痛いぐらい。

サクヤ

「それじゃ、せーので一気にやるよ」

桂

「ちょっ、ちょっと待って……」

サクヤ

「待ったなし。このままじゃ、あたしが持たない」

サクヤ

「せーのっ」

相変わらず、サクヤさんの片手は朽ち木を握ったままだけど、それ以外は恋人同士がキ

スをする体勢にも似ている。

サクヤ

「それじゃあ、いいかい」

間近に迫った顔を見合わせて、最終確認をとってくるサクヤさんに頷き返す。

サクヤ

「じゃあ、首上げて」

桂

「うん……でも首筋を噛むなんて、ドラキュラ伯爵の映画みたい」

サクヤ

「そりゃあ、今からすること考えたら、正真正銘まんまだからねえ」

桂

「あ、そっか」

サクヤ

「驚いて、首に回した手を離すんじゃないよ」

桂

「うん。むしろしがみつく」

サクヤ

「よーし」

にっと笑って唇がめくれると、真っ白い歯がこぼれた。犬歯長いかも……

わたしは頭を後ろに反らせながら、目をつぶった。

首筋に熱い息が掛かった。

サクヤ

「これで三度目……今度こそあたしは……」

桂

「サクヤさんが人間じゃないだなんて……」

サクヤ

「……信じられないかい？」

桂

「信じないし……本当でも、信じたくない」

サクヤ

「そっか」

桂

「だって、サクヤさんは……!!」

サクヤ

「……冗談だよ」

桂

「え？」

サクヤ

「そういうご都合主義な体質だったらって、つい白昼夢を見ちまってね」

桂

「あはは……」

サクヤ

「とはいえ、それが駄目なら何があったかねえ。実は何とかだった以外に、絶体絶命危機一髪を、切り抜けられる定石は」

桂

「王道なら、絶妙のタイミングで飛んでくる助けだと思う」

葛

「お待たせしましたーっ！」

サクヤ

「……って、こんな感じにかい？」

桂

「うん」

見上げると、崖の上から葛ちゃんが覗き込んでいる。

葛

「んー、凡そ五、六メートルってところですね。一番近い木からの距離と、結び部分を足して……」

葛

「何とかかなりそーですので、もーちょっとだけ耐えててくださいーい」

サクヤ

「……だとさ。あんた、まだもちそうかい？」

桂

「わたしはその……それこそ、サクヤさんは？」

サクヤ

「現状維持ならまだ何とかって感じかね。後は葛の『も一ちょっと』がどれぐらいかによるけど」

桂

「うん……」

風が吹いて身体が揺れるたびに、サクヤさんは苦しそうに息を漏らす。

わたしは邪魔にならないように、ただひたすらじっとしているだけだった。

じっとり汗の吹き出た肌に、ばらばらと落ちてきた砂礫（されき）が張り付いた。

葛

「いまからロープの代わりに、丈夫そーな木の蔓を投げ下ろしますからー。間違っただたっても、驚いて手を離したりはしないでくださいーい」

声と同時に、ばらりと落ちてくる葛蔓。

サクヤ

「藁やら蜘蛛の糸よりは丈夫そうだけど……大を付けられるほど丈夫なのかね？」

桂

「葛ちゃんしっかりしてるから、その辺は大丈夫だと思うけど……」

サクヤ

「じゃあ、あんた。ぶら下がって体重ささえるぐらいはできるかい？」

桂

「両手でなら大丈夫……うん、大丈夫」

ずっと握られっぱなしの片手は、指先の感覚がないから痺れているんだろうけど、そんな甘えたことは言ってもらえない。

サクヤ

「それじゃあ桂、自分で蔓にぶら下がりな」

桂

「ぶらさがってどうするの？」

サクヤ

「そうだねえ……あたしが先に登って蔓ごと上に引っ張り上げるか、まともな体勢で負ぶいなおして上まで行くか……」

サクヤ

「体力の限界！」

帰り着くなりサクヤさんは、大の字になって畳の上に寝転んだ。疲れきった両手両足を伸ばせるのは、何よりも気持ちがいいはず。

サクヤ

「寝る。あたしはしばらく寝るから、起きるまで起こさず放っておいておくれ」

桂

「ううっ、このたびは大変ご迷惑おかけしました」

サクヤ

「とりあえず、朝の続きはあたしが元気になってからにするよ」

桂

「うん……」

葛

「とはいえこのご様子だと、もう一泊は確実っぽいですねー。電車もバスも最終が早いですから」

サクヤ

「あたしの車なら時間は関係ないけどね」

葛

「そーですけど、見ればずいぶんとお疲れのご様子。それで運転はつらいのでは」

サクヤ

「……すべてはあたしの回復次第ってことか」

葛

「さてさて。それで体力気力の源といえば、三度三度の食事ですけど、お昼ごはんがまだでしたね」

サクヤ

「朝も中断だったねえ……」

葛

「というわけでお昼にしましょう。わたしもお腹、すいてしまいました」

サクヤ

「とはいえ三食連続でアレは勘弁願いたいね」

サクヤさんはポケットから取り出した車の鍵をわたしに握らせる。何かお腹がくちくな

るものを買って来いということなんだろう。

わたしが迷惑かけたんだし、お使いに行くのは別に構わないんだけど。

桂

「わたし免許持ってないから、お使いならバスを使うしかないんだけど……遅くなるよ？」

往復だけで一時間。バスの待ち時間や買い物の時間を含めたら、おやつ時間も過ぎてしまうこと請け合い。

サクヤ

「買い出しに行くなら夕食用の食材にしておくれ。とりあえず昼は、あたしの車に積んであるレトルトで済ませることにしよう」

桂

「あ、うん」

どうやらそれを取って来い、ということらしい。ラジャー。

サクヤ

「だけど晩はちゃんとしたものが食べたいね。あたしが寝てる間に買い出しに行ってくれるかい？」

桂

「いいけど、何を買ってこようか」

サクヤ

「適当でいいよ。あんたらが食べたい食材を買い込んできてくれれば、適当に作るから」

桂

「えっ!？」

サクヤ

「なんだい一体、その反応は」

桂

「だって、サクヤさんお料理できるの？ わたし今まで見たことないよ？」

サクヤ

「見せる機会がなかっただけだよ。あんたのところ遊びに行っても、真弓が全部やっちゃもうから出番なしさ」

桂

「だって、お母さんお料理上手だったもん」

サクヤ

「フッ、その真弓に料理を叩き込んだのは、笑子さんとこのあたしだよ」

桂

「ええっ!？」

お祖母ちゃんはともかく、サクヤさんが――

サクヤ

「桂〜」

がっかり疲れた情けない声が、あっけにとられていたわたしを引き戻す。

桂

「だって、サクヤさん外でお仕事する人だから、家事とかやってる暇なさそうだなって……」

葛

「そんなイメージありますねー」

普段は家にいないことも多いけど、困ったときには頼りになる一家の大黒柱。休みの日にはゴロゴロしていて、家事は全部お母さん任せ。

そんなお父さんのイメージを、わたしは勝手に投影していたのかもしれない。

桂

「ううっ、ごめんなさい……」

サクヤ

「いいよ別に。いわゆる家庭的なタイプに見られないのには慣れてるからね」

サクヤ

「……昔バレンタインにね、得意先の編集部で手作りチョコを配ったことがあるんだよ。もちろん、義理って箱書きのあるヤツをね」

桂

「うん」

サクヤ

「ありがたがられるどころか、むしろ不気味がられたよ」

桂

「……………」

葛

「たはは、それは悲惨ですねえ……」

サクヤ

「さて、もういいよ」

桂

「わ、地面だ……」

垂直に切り立った崖を、逆落としに駆け下りたサクヤさんが、抱き上げていたわたしを地面の上を下ろした。

くわしく時間を計っていたりはしないんだけど、久しぶりに地に脚が着いた気分だ。

桂

「なんか、ほっとするね」

サクヤ

「人間飛ぶようにはできてないからね。それに地面にも血管みたいな《力》の流れがあって、知らずにその影響を受けてるものなんだ」

サクヤ

「とくに桂みたいなのは、普通の奴より強く影響受けてるんじゃないかい」

桂

「そうなの？」

サクヤ

「あたしが思うに、血ってというのは《力》を蓄えるバッテリーみたいなもので、あんたはその容量が底抜けに大きいだけなんじゃないかってね」

桂

「《力》そのものが、わたしの中で作られてるわけじゃないんだ？」

サクヤ

「《力》の使い方を知っている連中があんたの血を飲めば、それこそ奇跡を起こせるんだよ」

桂

「わ、それならわたしじゃなさそうだ」

じっと手を見る。

見たところで、見慣れたいつものひらで、すごい《力》を蓄えているようには思えない。

桂

「それにしても、サクヤさん」

サクヤ

「なんだい？」

桂

「それがサクヤさんの本当の姿なの？」

サクヤ

「どっちがどっちって区別は特にないけど、本気で《力》を使おうと思ったらこっちだね」

桂

「ふーん……」

サクヤ

「なんだい、じろじろ見て」

桂

「いや、あんまり代わり映えしないなって……」

いつもより少し筋肉質で大柄。爪や犬歯も伸びているけど、かなり普通に人の形。
鬼や天狗や河童あたりの異形を想像してただけに、逆の意味で意表を突かれた。

サクヤ

「何を期待していたのかは知らないけど、あたしは観月としては半端者だからね」

桂

「そうなの？」

サクヤ

「でもまあ、怖がられないで良かったよ」

桂

「あ、いや、だって……ねえ？」

怖がるとしたら、見た目より態度次第だと思う。

見た目の変化は「撮影で山に籠もってた」と言われたら「なんか変わったね」で済ませ
てしまったかもしれない。

良く見たら目とか耳とか、普通の人とは違うんだけど。

サクヤ

「さて……」

あたりを見回していたサクヤさんが、垂れた髪をうるさそうにかきあげながら振り向い
た。ヘアピンは途中で落としてしまったらしい。

サクヤ

「……そろそろ戻ろうと思うけど、もう歩けるかい？」

桂

「え？ わたしは大丈夫だよ。ぶら下がってただけだし」

貧血になるほど血を吸われたわけでもない。

痛みがあるのは伸びきった肩や肘の筋、痣になるほどきつくつかまれていた手首と、ほ
ぼ上半身に集中していて、歩くことには支障がなかった。

桂

「だけど、サクヤさんこそ休まなくて大丈夫？」

サクヤ

「大丈夫もなにも、体力なら有り余ってるぐらいだよ」

桂

「あ、わたしの血——」

わたしの血を飲んだ人ではないモノは、不老長生にも匹敵するような《力》を得ることができる。

サクヤ

「そういうことだよ。葛も心配してるだろうし、一旦屋敷に帰るよ」

桂

「うん」

葛

「桂おねーさん、ご無事でしたか！」

桂

「ごめんね、心配かけちゃって」

葛

「いえいえ、大事なければけっこうです。こちらこそ途中で見失ってしまい、申し訳ないです」

桂

「あ、だけど葛ちゃんこそ大丈夫だった？ あの、人間じゃないっていったの葛ちゃんだし……」

葛

「見ての通り、ぴんぴんしてます。逃げ足には自身がありまして」

葛

「えーと、その、サクヤさんには捕まってしまいましたけどねー」

桂

「仕方ないよ、サクヤさんは……」

葛

「サクヤさんは？」

桂

「あ、何でもないない、何でもないよ」

葛

「そーですか」

ううっ、危うく秘密を漏らすところだった。

口止めはされていないけど、十年の付き合いがある（たぶん本当は生まれたときから）わたしが、ついさっきまで知らなかったことだ。

だから、きっとトップシークレット。

もちろん葛ちゃんを騙そうとか、そういう考えがあるわけじゃなくて――

サクヤさんが人間じゃないのは昨日今日からのことじゃなくて、結局、今ここにいるのは昔からよく知ってる、サクヤさんでしかないわけで。

葛

「桂おねーさん？」

桂

「あ……あはは、ごめん、ちょっと考えごと」

葛

「そんな感じでしたねー」

桂

「ううっ……」

陽子ちゃんにもよく言われるけど、わたしは考えごとを始めると、人の話が耳に入らなくなるし、ついだに考えごとが顔に出るタイプらしい。

ええと、こういうときは……

……強引に話を変えるのが吉かもしれません。一応、わたしの経験上。

桂

「ところでサクヤさん。わたし、ちょっと考えたんだけど」

サクヤ

「なんだい？」

桂

「わたし、向こうに帰ったからって、普通に暮らしたりできるのかな？」

サクヤ

「普通につて、今まで通りにつてことかい？」

桂

「うん。だってわたしの血を狙って、お化け——」

言いかけのまま途中で止めて、顔をうかがう。
その人ではない存在が目の前にいたりするから、不適切なら訂正すべきだろう。

桂

「で、いいのかな？」

サクヤ

「別に何でもかまわないよ。一応、そういう方面の関係者は鬼って呼んでるみたいだけどね」

桂

「じゃあ、鬼」

さっそくそう呼んでみた。

鬼——

自然に使える馴染み深い言葉で、親しみの響きを込められないこともない。

それに「サクヤさんは鬼だよ」なら、事情を知らない人に聞かれたとしても、ごく一般的な意味合いで解釈してくれそう。

うん、実に無難。

その無難な呼び方が判明したところで、わたしは最初の問いへの補足をつけることにした。

桂

「それでね、向こうで別の鬼に狙われたりはしないかな」

サクヤ

「それなら心配いらないよ。お守りが効いてるはずだから……どれ、ちょっと見せてごらんよ」

桂

「見せるのはいいけど、お守りって？」

訊ねるわたしに頷き返して、直径十五ミリほどの輪を、人差し指と親指で作ってみせる。

桂

「……OKマーク？」

サクヤ

「いや、そうじゃなくて」

サクヤ

「あんた、珠を持たされているはずだよ。たぶん、これぐらいの青い珠」

桂

「あ、もしかして……これかな？」

ごそごそやって取り出した携帯電話には、言われた通りの珠飾りのついたストラップ。

珠の表面には白い蝶が浅く掘り込まれていて。

桂

「もしかして、オハシラサマの？」

青い着物の袖に白い蝶を染め抜いた、彼女の姿を思い起こさせるものだった。

携帯電話を持つ前はキーホルダーとして使っていたから、一番古い記憶の中のわたしもこの珠を持ち歩いていた。

桂

「そういえばこれ、お母さんがお守りみたいなものだって」

サクヤ

「それが桂の血を隠してくれているんだよ」

桂

「でも、それだと昨夜は……」

サクヤ

「連中はね、桂が羽藤の血の持ち主だって知っていたから狙えただけだよ」

答えを最初から知っていれば、問題が解けなくても正解は出せる。

桂

「じゃあ、わたしは……安全？」

サクヤ

「いや。今まではともかく、これからはどうだろうね」

桂

「でも、お守りあるし……」

サクヤ

「こいつは近々電池切れになるらしい。あと何ヶ月ともたないだろうねえ」

そう言ってお守りを振る。もちろんカラカラなんて、空っぽライクな音はしないんだけど。

桂

「電池切れ？ お守りって一生ものじゃないの？」

葛

「えとですねー、一月十五日には神社の境内で、去年のお守りやお札、それから松飾りや書き初めなどなどを燃やしたりしますね」

桂

「わ、賞味期限たったの一年……」

葛

「ちなみにこの行事を左義長、もっと一般的には『爆竹』と書いて『どんど』と呼びますね」

桂

「あ、お団子焼いて食べるどんど焼き。わたし、お団子は好きだけど、焼きみかんはちょっとどうかなって思うよ」

葛

「焼きみかんですかー。わたしは食べたことないです」

サクヤ

「とまあ、それとは話が違うんだけど――」

拍手じゃなくて、一本締め。

サクヤ

「この珠に織り込まれた《力》が枯れかかっているんだよ。新たに《力》を織り込まないと、効果の程は期待できないね」

桂

「だ、だとするとわたし、一生隠れ鬼しながら生きていかなきゃいけないの？」

サクヤ

「んーー」

桂

「その充電みたいなの、サクヤさんできない？」

サクヤ

「見ての通り、あたしらは体力仕事担当だから。長ならできたかもしれないけど、六十年ほど前に他界してるし、基本的には餅は餅屋だし」

葛

「……………」

桂

「……？」

サクヤ

「さーて、どうしたもんかねえ。心当たりがないわけじゃないけど……」

難しい顔をして考え込む。

サクヤ

「連中に借りを作るのはご免だし……」

思案しているというよりは、何やら葛藤しているらしい。

サクヤ

「よし。とりあえず今日明日で、蔵でもひっくり返してみようかね」

桂

「……蔵？」

縁側に目を向けるサクヤさんに倣って視線を移すと、漆喰の白壁が見えた。

鉄の扉が南京錠で閉ざされている、かなり時代がかった土蔵。

あの建物があるおかげで、このお屋敷のお屋敷らしさが際立っているのは間違いない。

サクヤ

「羽藤は千年以上続いてる、由緒正しい贅の血筋だからね。そのお守りの《力》も、何度も織り込み直されているんだよ」

サクヤ

「だから何か書き置いてくれているら、何とかできるかもしれない」

桂

「何とかならなかったら？」

サクヤ

「仕方ないから、心当たりまで頭下げに行ってやるよ。本当に嫌なんだけど、不承不承」

桂

「ううっ、お手数かけます」

サクヤ

「別にいいんだよ。あんたとあたしの命の重さに比べれば、それぐらいは軽いもんさ」

桂

「サクヤさん……」

桂

「サクヤさんはその重い命をかけて、さっきは助けてくれたんだよね……」

サクヤ

「同じぐらいの重さをかけなきゃ、重いほうに引きずられるだろう？」

桂

「ありがとう……なのに、サクヤさんは本当にわたしのこと考えてくれてるのに、朝なんかすごく生意気な口きいて……ごめんなさい……」

サクヤ

「だから別にいいんだって。ああいった勝算も、それなりにあつてのことなんだから」

サクヤ

「桂、過ぎたことで萎れてるんじゃないよ」

桂

「うん……」

温かいてのひらが、うつむきがちのわたしの頭をくしゃっと撫でた。

サクヤ

「……さて。それじゃあ作業にあたる前に、腹が減っては何とやらだね」

桂

「……あ、もうお昼回ってるんだ」

葛

「それはもう、とっくですよ」

サクヤ

「あたしはともかく桂はもう腹ぺこだろう。そんなんじゃ出る元気も出ないものだよ」

葛

「それでは用意をしますです。しからば御免」

サクヤ

「ちょっとお待ち」

サクヤ

「用意って、また缶詰と栄養調整食品かい？」

葛

「腹ごしらえはできますよ？」

サクヤ

「できるだろうけど、二食立て続けだった時点でとっくに飽き飽きしてるんだよ。あんただって、もっといいもの食べなきゃ駄目だ」

葛

「駄目ですか」

サクヤ

「少なくとも、あたしほど大きくはなれないね」

葛

「たはは……」

桂

「……………」

わたしお母さん似だし、食べたからってあんなになるとは限らないんだよね。

ううん、むしろ別のところにお肉ついて、すごいことになっちゃうかも……

サクヤ

「……桂？」

桂

「なになっ、何も考えてませんよ!？」

サクヤ・葛

「じいっ……」

桂

「だからね、サクヤさんがうらやましいな一とか、そんなことはぜんぜん……」

視線の白さが痛かった。

さっきまで落ち込んでいた人が、泣いた鳥がもう笑ったと、そんなことを考えていたりしたら、そりゃあ呆れるよね。

桂

「えっと……」

サクヤ

「ははっ、とりあえずそういうこと考えられるんなら心配いらぬね」

桂

「ううっ……」

サクヤ

「それはともかく、桂だってちゃんとしたものが食べたいだろう？」

桂

「わたしは別に……その、やっぱりそろそろ白いご飯が恋しいけど、でも……」

サクヤ

「言っとくけど、満腹感を味わいたいなら栄養調整食品に手を出すのは危険だよ。八十グラムぽっちに、四百キロカロリーも詰まってるからね」

桂

「……ねえ、葛ちゃん。四百キロカロリーってどれぐらい？」

葛

「ご飯とお味噌汁でだいたい三百キロですね。納豆追加でプラス五十キロ。残り五十で、焼き魚なら半身つけられそうな感じです」

もはや知っていること前提に訊ねるわたしと、しっかり答えてくれる葛ちゃん。

桂

「それだけ食べられるなら、普通に食べた方が嬉しいかも……」

サクヤ

「じゃあ、決まりだね。とにかくあたしが車出すから——と、そうそう」

サクヤ

「食事の前に風呂に寄るから、各自着替えの用意をして五分後に玄関に集合。いいね？」

葛

「各自って、わたしもですか？ わたしは留守番してますから、どーぞおふたりでごゆっくり楽しんでくださいませ」

桂

「あれ？ 葛ちゃんは行かないの？」

葛

「えーと、その、尾花はお店に入れませんので」

サクヤ

「動物出入り禁止なら、車に乗せときゃいいんだから、つべこべ言わずに来るんだよ」

と、サクヤさんは尾花ちゃんの首根っこをつかんで持ち上げた。

サクヤ

「そーゆーわけで、こいつの身柄は預かった」

葛

「うわー、お代官様ご勘弁をー。義朝公も湯殿で殺されちゃったんですよー」

連れて行かれる尾花ちゃんを追って、葛ちゃんも部屋から出て行く。

……もしかして葛ちゃんって、お風呂嫌いだったりするのかな？

桂

「あー、さっぱりした。でもお腹空いちちゃったよ」

商店街にある、とある定食屋さんの席に着き、うきうきとお品書きをめくるわたし。

どろどろだった身体が、ぴかぴかのさっぱりになると、俄然食欲もわいてくる。

桂

「さーて、何を食べようかな」

夏だけに冷たいものが食べたいかと問われれば、一概にそうとは答えられない。

やっぱりいい香りのする温かいごはんは嬉しいし、「店内冷房中につき開放厳禁」だったりするから、夏を気にするのは食材の旬だけで十分。

桂

「えーと、今美味しそうなのは……」

サクヤ

「桂はレバーをお食べ」

桂

「わたしレバーは苦手」

味もだけれど、あのどろっとした食感があまり好きじゃなかったりする。

そりゃあね、レバーには造血作用があるってよく聞くけど、苦手なものを無理して食べなきゃいけないほど血が足りてないわけじゃないし。

サクヤ

「苦手でも何でもいいけど、とにかく注文しとくから、残さずきちんと食べるんだよ」

桂

「わ、横暴。お勘定持ってくれるって理由でそういうことするなら、わたし自分で払って好きなもの食べるよ」

サクヤ

「おやおや、さっきのしおらしさはどこに行っちゃったんだい」

桂

「それとこれとは話は別だよ。ひとり暮らしの特権として、わたしは偏食してるもん」

サクヤ

「へー、偏食してもいいんだ」

桂

「個人の責任と権限において」

サクヤ

「ほほう、言ったね？」

桂

「いいましたとも」

サクヤ

「それじゃあ、あたしは——そうだね」

わたしの頭を抱えるように引き寄せて、自分の口元に耳を寄せさせて。

サクヤ

「この先、桂の血だけで生きていこうかしらねえ」
ささやき声が、耳たぶをくすぐった。

桂

「本当に『だけ』ならいいよ。別に」

サクヤ

「……桂？」

桂

「それって毎日ごはん食べに来てくれるってことだよね」

サクヤ

「うっ……」

桂

「三度三度食べに来てくれるんなら、サクヤさんの食事はわたしが提供しましょう。ひとりの食事は寂しいし」

葛

「そんなものですか？」

桂

「普通そうじゃないかな。誰かと一緒に食べるご飯の方が美味しいよ」

葛

「ですけど、嫌いな人と一緒にの食事は、味もへったくれもありませんよ？」

桂

「む、そう来たか。でもサクヤさんのこと好きだからその条件には当てはまらないよ」

サクヤ

「ちょっ、桂！」

サクヤさんが真っ赤になって慌てていた。

桂

「……………」

サクヤ

「……………」

桂

「……あ」

かあっと顔が熱くなる。

桂

「あのね、わたしがいったのはその、わたしがお母さんのこと好きっていうのと同じ感覚の好きであって、別に深い意味はそのう……」

サクヤ

「あ、ああ、わかってるよ」

しどろもどろするわたしとサクヤさんを眺めていた葛ちゃんが、おひやを一口くいと飲んで、まともに入った。

葛

「何だかよくわかりませんが、好きな人たちと食べる食事は美味しいかもしれませんね」

葛

「少なくとも、嫌いじゃない人と嫌いじゃないものを食べるのは、ひとりよりいいかもしれません」

桂

「や、やっぱり葛ちゃんもそう思う？」

葛

「サクヤさんはお気に召さないようですが、昨日の夕食は美味しかったですから」

向かいの座席に座っている、葛ちゃんに聞かれないように配慮したんだろうけど、

桂

「わ、偏食はんたーい！」

サクヤ

「じゃあ、あんたも偏食するんじゃないよ」
「すごい返事。」
「そして注文されるレバー。」

桂

「ううっ、もう逃げられない……」

葛

「嫌なら食べなければいいだけなのでは？」

サクヤ

「それは無理。こいつ母親っ子だから」

葛

「サクヤさん、話がつながってませんよ？」

桂

「あ、ごめんね。葛ちゃんにはちゃんと説明しないとわからないよね」

葛

「おねーさんのおかーさんが、偏食に関する事で何か一家言あったと」

桂

「うん。お母さんがね、好き嫌いせずに出されたものは残さず食べなさいって」

桂

「ちなみに残したら、次のごはんは抜きだよ。しかもそういうときに限って、わたしの好きなものばかり作るんだよ」

葛

「ははあ、そーゆーことですか。それが染み付いちゃっているわけですね」

サクヤ

「嫉の力は偉大だねえ。基本的に貧乏性だし、出しちまえば文句言いながらも食べるよ」

桂

「貧乏性じゃないよ。ちゃんと食べないと、手間隙かけて作ってくれた人に申し訳ないだけだよ」

サクヤ

「まあ、そういうことにしておこうかね」

葛

「にしてもいいですねー。テーブルマナーうんぬんよりは、そーゆー膳をされたいものです」

桂

「……………」

葛

「あ、ですけどわたしも似たようなことは言われました。たとえ生ゴミのような料理を前にしても、決して笑顔を崩すなどか」

桂

「うわ……………」

痛々しいというか、何というか。

葛

「どーかしましたか？」

桂

「ううん、何でもない」

桂

「ところでサクヤさん。今日の晩ごはんはどうしようか」

サクヤ

「あんたねえ、これから昼を食べるってときに、何でいきなり夕食の話になるのさ」

桂

「何か買って帰るなら、お惣菜屋さんとか探さないといけないんじゃないかなって……………」

桂

「晩ごはんのこと忘れて帰っちゃうと、また昨日と同じメニューになっちゃうよ？」

サクヤ

「そうだねえ……………」

サクヤ

「よし、今晚はあたしが腕を振るうことにするよ」

桂

「えっ!？」

わたしが身体を後ろに引くと、座った椅子が弾みで鳴った。

サクヤ

「なんだ一体、その反応は」

桂

「だって、サクヤさんお料理できるの？ わたし今まで見たことないよ？」

サクヤ

「見せる機会がなかっただけだよ。あんたのところに遊びに行っても、真弓が全部やっちまうから出番なしさ」

桂

「だって、お母さんお料理上手だったもん」

サクヤ

「フッ、その真弓に料理を叩き込んだのは、笑子さんとこのあたしだよ」

桂

「ええっ!？」

お祖母ちゃんはともかく、サクヤさんが――

サクヤ

「もしかしてあんた、あたしのあの姿を見たときよりも驚いてないかい？」

桂

「うん、すごく驚いてる」

サクヤ

「桂～」

がっくり疲れた情けない声が、あっけにとられていたわたしを引き戻す。

桂

「だって、サクヤさん外でお仕事する人だから、家事とかやってる暇なさそうだなって……」

葛

「そんなイメージありますねー」

普段は家にいないことも多いけど、困ったときには頼りになる一家の大黒柱。休みの日にはゴロゴロしていて、家事は全部お母さん任せ。

そんなお父さんのイメージを、わたしは勝手に投影していたのかもしれない。

桂

「ううっ、ごめんなさい……」

サクヤ

「いいよ別に。いわゆる家庭的なタイプに見られないのには慣れてるからね」

サクヤ

「……昔バレンタインにね、得意先の編集部で手作りチョコを配ったことがあるんだよ。もちろん、義理って箱書きのあるヤツをね」

桂

「うん」

サクヤ

「ありがたがられるどころか、むしろ不気味がられたよ」

桂

「……………」

葛

「たはは、それは悲惨ですねえ……」

葛

「ところでサクヤさん。あの家、電気と水道は通りましたが、ガスは駄目なんですよ。それでも料理ってできるものなんですか？」

桂

「あ、それならたぶん大丈夫。サクヤさんの車に携帯コンロが積んであるよ。ね？」

サクヤ

「使わないよ、勿体ない」

桂

「でも、それじゃあどうするの？」

お母さんのお師匠様なら、お豆腐を切って冷や奴——なんていうことはしないと思うけど。

サクヤ

「とりあえず、帰ったら山で薪集めだねえ」

桂

「薪？」

サクヤ

「屋敷には釜戸があるだろう。昔はみんなあれで料理をしてたんだよ」

というわけで食後しばらく。わたしとサクヤさんは連れ立って商店街を歩いていた。
ちなみに葛ちゃんは、車の中でぐったりしていた尾花ちゃんを連れて一足先にバスで帰宅。

エンジンのかかっている車はエアコンだって止まっている。そんな中にずっといたら、それはぐったりもするだろう。

定食屋さんの駐車場が抜群の日当たりだったせいで、開けたドアから流れてきた空気はもわっと熱かったし。

桂

「……尾花ちゃん、お大事に」

サクヤ

「ん？ 何か言ったかい？」

桂

「ううん、何でもなし。それより晩ごはんは何を作るの？」

サクヤ

「さて、何を作ろうかねえ」

この商店街にはスーパーマーケットがないので、魚介類は鮮魚店、野菜果物は青果店と、複数の店舗をはしごして食材を買い求めることになる。

そのような前提から、献立を決めて購入リストを作らないことには、効率良く買い物することができない。

サクヤ

「桂、あんたリクエストとかあるかい？」

桂

「んー、やっぱりこういうときはカレーかな」

サクヤ

「あらまあ、何とも無難なところ。あたしの腕を信じてないね」

桂

「そんなことはないけど……」

疑っているわけじゃなくて、キャンプや合宿の定番だから言ってみただけだし。

カレーライスが定番化している理由は、一度にたくさん量が作れて、なおかつ誰が作ってもそこそこ美味しく作れるからなんだよね。

サクヤ

「まあ、それでもいいけど——あたしは和食の方が得意だよ。あんた和食派だろ」

桂

「じゃあ、お味噌汁」

サクヤ

「はいはい、米と味噌」

桂

「おかずは何がいいかなあ。そういえば煮物とかは最近食べてないなあ」

サクヤ

「はいはい、煮物——」

桂

「ふわっ!？」

びたりとサクヤさんの脚が止まって、わたしは止まれず突っ込んだ。

頬に当たった背中が固い。筋肉の束がぎゅっと引き絞られている。

桂

「サクヤさん……？」

この緊張は、わたしがぶつかったからだけではない——

顔を上げて表情をうかがうと、先ほどまでの気楽さはなりをひそめている。

サクヤ

「タイミング良いんだか悪いんだか。まさかこんな所であいつに出くわすとはねえ……」

桂

「あいつ……？」

ぼちぼち行き交う人の流れにまぎれ込んだ異分子を探して、わたしの瞳がせわしく動く。

サクヤさんの正体に気付かないこと十年。山にいた男の子にしても、異分子だと判別できる特徴なんてなかったわけだけど——

暗闇の中でも目を凝らしてしまうのと同じで、何もしないでいることはできず、無駄だと思いつつもサクヤさんの見つけた誰かを探す。

桂

「あ……」

わたしの瞳の動きが止まった。

歩いているだけで人目を惹く、あからさまに違う空気を従えた異分子が目にと留まった。

黒い服に身を包み、黒い髪を長く垂らした、すらりと姿の良い女性。

陽射しにあふれた外気にさらされているのは、顔と両手首より先の三箇所のみ。腕は長袖のブレザーに、脚は黒いストッキングに包まれている。

そんな暑苦しい格好をしているにもかかわらず、暑さなど微塵も感じていないような、涼やかな足取りでこちらに向かって歩いてくる。

距離が詰まるとはっきり見えた。

あの人だ……

わたしがこの経観塚の地を踏んでから、最初に出会った人。
わたしやサクヤさんと同様に、境界の外側からやってきた来訪者。

そして彼女は数歩分の距離を置いたところで歩みを止め、わたしを一瞥した後に、サクヤさんへと視線を据えた。

硬質なその瞳は、きらめく黒曜石というよりは磁鉄鉱。何か見えない力を放出しているような、うかがい知れない強さがあった。

サクヤ

「桂、孫悟空が見つかったよ。ご丁寧に、如意棒までご持参だ」

桂

「え？」

この人が孫悟空——
三蔵法師を妖怪から守るボディガード？

確かに如意棒相当の長い錦の刀袋を手をしているけれど、わたしの抱いている孫悟空のイメージからはかけ離れている。

孫悟空はこんなクールそうな感じじゃなくて、お調子者で乱暴者だけど、義には厚い——

桂

「孫悟空役って、サクヤさんじゃないの？」

制服の少女

「……何の話ですか」

サクヤ

「鬼退治の専門家が来たって話をしただけだよ」

制服の少女

「そうですか。挨拶を交わす前に猿公扱いされるとは思いませんでした。あなたとは犬猿の仲ではありますけど」

サクヤ

「齋天大聖役は不服かい？」

制服の少女

「いいえ、むしろ望むところです。あながち縁がないわけでもありませんしね」

サクヤ

「そうかい」

サクヤさんはわたしの背中を軽く叩いて、一步前へ押し出した。

サクヤ

「烏月、こいつが羽藤桂」

制服の少女

「……なるほど。あなたがここにいる事情は飲み込みました」

サクヤ

「話が早くて助かるよ」

まだ名前しか言ってないのに——

本当に早すぎだった。

鬼関係の業界では、密かに有名だったりするんだろうか。

わたしを名指しで狙ってくる鬼には、お守りも気休め程度のものでしかないそうなので、だったりしたら困るんだけど。

サクヤ

「桂、こいつは千羽烏月。鬼切部千羽党を代表する、当代の鬼切り役だ」

桂

「……鬼切部って？」

サクヤ

「名前の通りの専門職だよ。餅は餅屋、鬼退治なら鬼切部。あんたのお守り問題の、心当たりの先もこいつらさ」

桂

「じゃあ、頭下げたくない相手って……」

サクヤ

「あたしは鬼で、こいつらは鬼切り。天敵同士、仲が良いわけないだろう」

サクヤ

「それで烏月。何であんたがこんな所にいるんだい。最後の観月を切り捨てろって、鬼切り頭から命でも下ったのかい？」

千羽

「違います。あなたとは別の鬼を追ってきました。この地に祭られるオハシラサマでもありません」

千羽

「ですが、その鬼を追わねばならない背景には、すくなからずあなたも関わっているというのを忘れないでください」

サクヤ

「……あたしがかい？」

千羽

「鬼であるあなたが先々代をそそのかし、鬼切り役から退かせたことを、忘れたとは言わせない」

千羽

「そして先々代を敬愛していた先代は、倣って自ら鬼と関わり、それ故に命を落とした」

千羽

「あなたのせいでもつれにもつれた因縁を、この太刀・維斗で断ち切ってみせる」

サクヤ

「はんっ、あたしが先々代とやりあうきっかけを作ったのは、六十年前のあんたらだろくに」

真っ向からぶつかり合う視線と視線。

きな臭さの漂う空気に耐えられなくなったわたしは、ふたりの間に割って入った。

桂

「ちょっ、ちょっと待ってくださいっ！」

千羽

「……なんですか？」

桂

「あのですね、わたし今、双子の鬼に狙われてるみたいなんです」

桂

「それで昨夜も襲われたんですけど、サクヤさんとオハシラサマが守ってくれたんです！サクヤさんは鬼でも、悪い鬼じゃないんです！」

もしサクヤさんが悪い鬼なら、お母さんは絶対に友達になんてなってない。だから。

桂

「その鬼切り役の先々代という方は、きっと人を見る目があつたんだと思うんです」

千羽

「……………」

千羽

「では……………」

千羽

「……では、先代は見る目がなかったと？」

桂

「え？」

千羽

「先代が関わった鬼は無辜の人を殺め、その血をすすり、肉を喰らっています。私が今追っているのはその鬼です」

桂

「……………」

だからといってサクヤさんに突っかかるのは、やっぱり筋が違うんじゃないかと思う。でも、わたしと同じぐらいの歳なんだし、先代の方は亡くなったっていうから、冷静になれないのも理解できる。

先代が先々代を敬愛していたように、彼女が先代のことを好きなのだとしたら、なおさら。

桂

「あの……………」

千羽

「…………すみません。私もまだ未熟です」

何か声をかけようと思って、だけど言葉が見つからなくて、まごまごしていたわたしに、千羽さんの方から頭を下げた。

千羽

「私の役目は人に仇なす鬼を切ることでですから、こちらの用事が片付いた後でよければ、あなたを狙う双子の鬼も引き受けましょう」

桂

「あ…………ありがとうございます」

千羽

「後回しで申し訳ありませんが、彼女たちが一緒なら、しばらくは大事ないでしょうし」

桂

「あ、はい…………」

千羽

「それでは、急ぎますので失礼します」

わたしの横を通り抜けていった。

桂

「サクヤさん、何か協力してくれるって」

サクヤ

「みたいだねえ」

桂

「何かいい人みたいだし、もしかしたらお守りのことも教えてもらえるかも」

サクヤ

「だといいねえ」

桂

「ただいまー」

葛

「おかえりなさいですー」

がらがらと引き戸を開けると、葛ちゃんと尾花ちゃんが奥から姿を現した。

桂

「あ、尾花ちゃん元気になった？」

葛

「ごらんの通り、健康そのものです」

葛ちゃんの言葉を裏付けるように、ぱたぱたと尻尾を振る。

桂

「それは良かったよー」

しゃがんで尾花ちゃんの頭を撫でる。

桂

「車の中がああなるって、気付かなくてごめんね。お土産に油揚げ買ってきたから許してね」

尻尾の振りが大きくなった。

桂

「これって、喜んでもらえてるのかな？」

葛

「もらえてますね。それにしても尾花、食べ物に吊られるなんてみっともない」

桂

「あはは、西瓜も買ってきたから、あとで食べようね」

買ってきた西瓜をぽんと叩く。

サクヤさんが軒に並んだものを叩きまくって選んだ、一番美味しい西瓜だ。たぶん。
ちなみにまだ身の硬い青い西瓜は、音も硬くて響かないのだそう。

葛

「それじゃあ、川に浸けて冷やしておきましょう。けっこう冷たいんですよー」

桂

「川なんてあったっけ？」

葛

「すこーし奥まで行かなきゃですけど、わたしはちよくちよく水浴びに使います」

桂

「水浴び？ そこ、綺麗なの？」

きちんとしたプールでも、泳いだ後にはシャワーを浴びるわけで、ましてやあまり綺麗じゃない川しか知らない身としては気になる。

葛

「人の来ない場所ですし、水源も近いですからね。蛍が飛ぶぐらい綺麗ですよ」

桂

「へー、蛍かぁ。わたし、本物の蛍って見たことないよ」

葛

「わたしもここで初めて見ました。そのうち蛍狩りでもご一緒しましょーか」

サクヤ

「まあ、それは当座の問題が片付いてからの話だけどね」

葛

「あ、サクヤさんもお帰りなさいです。にしてもけっこう買い込んできましたねー」

サクヤ

「今日の昼はともかく、昨日が昨日で今朝が今朝だからね。今夜はご馳走だよ」

葛

「ああ、そーですサクヤさん。釜戸を使うとおっしゃってたので、山で枯れ木を拾ってきたんですけどー」

サクヤ

「でかした、葛」

葛

「なんの。お世話になってる身ですから。一応、薪に使えるかどうか、見てもらえます？」

サクヤ

「外に？」

葛

「勝手口の方に回しておきましたー」

サクヤ

「さて……それじゃあ少し早いけど、ぼちぼちと支度にかかるとするかね」

台所に向かうサクヤさんの後ろに続く。

サクヤ

「……米を炊くところから始めるんだから、そんなにすぐにはできないよ。つまみ食いしたいなら、もうちょいしてから出直してきな」

桂

「違う、違う。わたしも手伝うよ」

——で。

サクヤ

「……あんた、包丁握ったことあるのかい？」

桂

「あるよ。家庭科の調理実習で習ったもん」

サクヤ

「日本の教育も地に堕ちたもんだね。最近はそんな持ち方教えてるのかい」

桂

「気が散るから黙ってて！」

研いだばかりの鉄包丁の厚刃がギラリと光った。

家にあるステンレス製のものとちがって手にずっしりと重く、いかにも刃物といった迫力がある。

……ごくり。

サクヤ

「手、震えてないかい？」

桂

「いいからサクヤさんは自分の方をやってて！」

サクヤ

「……一応、手は動かしてるんだけどね」

目を離すと怖いので、視界の端に手元を写したまま様子をうかがうと、サクヤさんは余所見上等で大根を桂剥きをしていた。

あ、桂剥きってなんか嫌な字面。

サクヤ

「もう手伝いは十分だから、居間に戻って葛や尾花と遊んできたらどうだい」

桂

「まだほとんど何もやってないよ？」

サクヤ

「皿とか鍋とか洗って、米研いじゃないか」

桂

「ううっ……」

はっきり邪魔だと言われなかったのが、余計に惨めで何だか悔しい。

わたしの包丁捌きでは、一の仕事が終わる前に、サクヤさんは十の仕事を片付けてしまおうだろう。

お母さんだって、鼻歌交じりにぱぱっと片付けていたことだから、もっと簡単だと思ったのに。

……………

いやいや、こういうことは思い切りよくぱぱっとやっちゃった方が、上手く行くんだきつと。

怖がってちびちびやってるから、仕事も遅いし削ったみたいな綺麗じゃない剥き方になってるんだよね。

桂

「よしっ」

包丁を持つ手に、ぐっと力を入れてみる。

すっと刃先が皮に潜り込んだ。

あ、何かいい感触。

サクヤ

「桂！ 包丁を動かすんじゃなくて、材料の方を動かすんだよ！」

桂

「ちゃんと剥けてるもん」

サクヤ

「桂〜〜〜」

桂

「わたしは大丈夫だから放っておいて！」

そう、大丈夫。

わたしはきっとやれば出来る子。

お料理上手のお母さんの娘だもん。このぐらいはお茶の子さいさいのはず。

桂

「〜〜〜♪」

鼻歌だって歌えちゃうよ。

するすると刃先が皮一枚の下を滑っていく。

桂

「ほら、一丁上がり」

グッドジョブ、わたし。なかなか才能あるじゃない。

桂

「ふふふ、これからサクヤさんを追い上げるよ！」

サクヤ

「……刃物を人に向けるのはおよし」

桂

「おっと、いけないいけない」

こんなことをしていたら追いつけない。

じゃーっと軽く水に流して、包丁についたぬめりをとって、準備完了。

コツは凡そつかんだはずだから、もうちょっとスピードアップしてみる。

桂

「わ、やっぱりわたし才能あるかも」

今のところの約十数センチ、厚さにむらがあるけれど、途中で切れたりせずに剥けている。

調子に乗ってきたわたしは、もっと薄く綺麗に剥こうと、包丁の角度を慎重に変える。

つるっと、大根の方が滑った。

桂

「——！？」

ビクッとすくみ上がる肩。

サクヤ

「ちょっと桂、大丈夫だったかい！？」

声を掛けられて、びっくり硬直状態から解凍されるわたし。

桂

「あ……」

熱いお風呂に浸したように指先がぽっと熱い。

ほんのわずかな痺れの気配と、本当に浸したわけじゃないのに、指を濡らす液体の感触。

いや、本当に濡れていた。まな板の上に赤い花が広がった。

てのひらや甲を糸のように伝った赤い血が、手首のあたりで身体から離れて滴り落ちる。

桂

「……痛い」

それほど鋭くはない先の丸まった痛みが、傷口からずくんと伝わってくる。

蛍光灯の光を映しこんで輝く不透明な赤は、不思議と視線を釘付けにする。

サクヤ

「ちょっと桂！ 何をぼーっと見てるんだい」

桂

「……あ、うん、そうだった」

とにかく傷口を綺麗にしようと、蛇口に伸ばしたわたしの手を、サクヤさんが止めた。

桂

「サクヤさん？」

サクヤ

「ほら、そっちの手をお出し」

返り血がつくのも構わずに、両手で握って目を近づける。

サクヤ

「……浅くもないけど、それほど深いってわけでもなさそうだね」

桂

「大丈夫そう？」

最初は痛いなんて感じなかったのに、だんだんとずきずきしてくる。

そんなわたしの問いに、サクヤさんはちょっと考え込んで。

サクヤ

「そうだね、食事の支度の途中でつまみ食いするのは、普通によくあることだよねえ」
押し頂くように、わたしの手を口元に寄せた。

熱くて柔らかいものが傷口をなぞった。

桂

「あ……ちょっとサクヤさん！？」

サクヤさんが傷口から溢れる血を舐めとっている。
背中を走るぞぞとした感覚は、崖から落ちたときのあの一瞬を思い起こさせる。

桂

「あの、その……何を？」

サクヤ

「何をもって、このままじゃあ絆創膏も貼れないだろう？」

桂

「確かにそうなんだけど、だからって別に舐めなくっても……水道だってあるんだし……」

サクヤ

「そんなの勿体ないじゃないか」

桂

「え？」

サクヤ

「つまみ食いって言っただろう？ あたしらみたいな化外の民には、桂に流れる贅の血は、
何にも変え難いご馳走なんだよ」

サクヤ

「……ふう、ご馳走さん」
とても満足そうなサクヤさん。

桂

「ううっ、なんか指先ふやけてしわしわ……」

サクヤ

「それだけ桂が魅力的だったってことだよ」

桂

「わたしがって言うより、わたしの血がでしょ。だいたい、血なんて本当に美味しいの？」

サクヤ

「ほら、あたし塩っ辛いのが好きだし」

桂

「ううっ……」

葛

「あれ？ 泣くほど痛かったんですか？」

ぱたぱたと足音がして、サクヤさんに大声で呼ばれた葛ちゃんがやってきた。

葛

「はい、おねーさん。絆創膏です」

桂

「ありがとう、葛ちゃん」

葛

「どーいたしまして。ところでおねーさん、どうしたんですか？」

桂

「ううん、何でもない……」

サクヤ

「それにしてもさあ、桂」

桂

「何？」

サクヤ

「あたし的には切ってるのが大根のときで良かったよ」

桂

「なんで？」

サクヤ

「生魚扱ってるときだったら、さすがにあたしも引いただろうねえ」

葛

「何だか知りませんが、魚は臭いが移りますからねえ……」

桂

「うん、楽しみにしてるよ。誰かの手料理食べるのって久しぶり」

台所に向かうサクヤさんの背中に声を掛けると、その場で止まって一回転。くるん。

サクヤ

「そういえば桂。今は否応なしにあんたがやるしかないわけだけど、前から家の手伝いやってた方だけ？」

桂

「部活に入っていないから、時間もあつたしね」

お母さんは「部活に入って充実した青春を送りなさい」で言ってくれたんだけど、狙っていた所は定員割れで何年も前に潰れていたというオチ。

桂

「おかげでお掃除とお洗濯は、プロの主婦級の腕だよ。たぶん」

サクヤ

「料理は？」

桂

「お掃除とお洗濯は、わたしが一手に引き受けてたよ」

サクヤ

「料理は？」

桂

「だって、お母さんの作るごはん美味しいし」

サクヤ

「答えになってないんだけど」

桂

「……お料理だけはからっきし、です。だから最近、食生活が貧しくって」

サクヤ

「インスタントとか？」

桂

「あはは、さすがにそれはたまに食べるぐらいで。出来合いのお惣菜とか、電子レンジでチンして食べられるのとか」

サクヤ

「たいして変わらないじゃないか」

桂

「あ、でも最近のはちゃんと美味しいし良く出来てるんだよ。ひとり分作って材料余らせちゃうよりは経済的だって、お凜さんも言ってたし——」

肩をつかまれた。

桂

「な、何かな？」

サクヤ

「……桂、今すぐ台所まで顔貸しな。料理のいろはを叩き込んであげるから」

夏なのに、背筋がぞぞっと冷たくなった。

桂

「あ、そうそう、サクヤさんがお料理してる間に、お掃除しようと思ってたんだ。働かざるもの食うべからずだよねっ」

——と、何とか居間から逃げ延びたわたしだったんだけど。

葛ちゃんの部屋をお掃除しているときに、荷物を移動させようとして、リュックの中身をこぼしてしまった。

開きっぱなしのリュックの口から、ごろり転がり出てきたものは。

桂

「……子供銀行券？」

何と一センチほどの厚みのある札束。ちなみに一番上のお札には「日本銀行券壹万円」と書いてあった。

どのぐらいの額面になるのかはわからないけど、本当にお金だとしたら相当すごいことになる。

……………

元通りに戻しておこうとリュックの口を広げると、ぼたぼたんぼたっと、今度は二、三束ほどまとめて落ちた。

桂

「……わたし、見ちゃいけないものを見てしまったような気がするんですけど」

そうだ、陽子ちゃんに電話しよう。

携帯電話を取り出して、縁側まで移動する。

桂

「あ、もしもし？ 陽子ちゃん今暇？」

陽子

『はとちゃんは暇なわけ？』

桂

「うん。今は晩ごはん待ち」

陽子

『待ちってあんた、はとちゃんの実家って人里離れた山奥の一軒屋よね。そんなところまで出前してくれるわけ？』

桂

「出前じゃないよ」

陽子

『それじゃあサクヤさんだっけ。そっちに行ったママさんの知り合いって。その人にごはんの買い出しに行ってもらってるとか？』

桂

「違うよ。今、作ってもらってるとこ」

陽子

『あんたねー。あんたの家なのに、お客様につくらせてどうするの』

桂

「うーん、一宿一飯のお礼代わりとか？」

陽子

『あんた、そのぶん普段世話になってるんでしょ。いいからとっとと手伝いに行きなさいって』

まさかこういうことで陽子ちゃんに怒られるとは思ってもみなかった。

陽子

『はいはい、ディスイズ奈良陽子。どしたのはとちゃん。まだ十分も経ってないんだけど？』

桂

「お手伝いに行ったら追い返されたの……」

陽子

『あ〜〜〜』

桂

「……どうしたの？」

陽子

『いやね、調理実習の二の舞いだなーって』

桂

「ううっ……」

わたしってそんなにお料理できそうに見えないんだろうか。

そりゃあ自分でもからっきしだとは思うけど、別に砂糖と塩を間違えたりするわけじゃないし、お手伝いぐらいさせてくれたって。

陽子

『ところで、そっちのはとちゃんちって、ずっと放ったらかしになってたんでしょ？』

桂

「あ、うん。そうだけど」

陽子

『思ったんだけどさ、そんな所でまともな自炊なんかできるもんなの？』

桂

「うふふー、ガスは通ってないんだけど、釜戸が残ってる古い家だったのが幸いだったよ。何と晩ごはんは炊飯ジャーじゃなくて釜炊き！」

桂

「始めちよろちよろ中ばっぱで、ちょっとだけお焦があったりすると、釜炊きっぽくて嬉しいよね」

陽子

『うわー、めっちゃめっちゃ嬉しそう』

桂

「美味しいお米が食べられるのは嬉しいよ。日本人はやっぱりお米に限るよ」

陽子

『だけどそんなに上手くいくもんなの？ それこそ前の調理実習の二の舞いになるんじゃない？』

桂

「大丈夫。サクヤさんは釜戸マスターだから」

陽子

『マスターって……そっか、アウトドア系の人なんだっけ』

桂

「そうそう。しかも買ってきたお米は無農薬の地元ブランドで——」

結局、お手伝いリベンジに出撃することもなく、そのままサクヤさんに呼ばれるまで、長話をしてしまった。

……夏休みだからだとか、いろいろ理由はあるんだけど、今月は通話料の請求が怖いかも。

風がさやさやと吹いていた。

開け放した縁側から見上げる月は、満月まではあとほんの一押し。ひやひやと涼しげな、優しい光を落としている。

葛

「一ヶ月ばかり早いんですけど、これでお団子があればまんまお月見ですよー」

桂

「だよー。月は綺麗だし、本物の薄は時期じゃないけど尾花ちゃんの尻尾があるし」

サクヤ

「ちゃんと一本ついてるしねえ」

言いつつ、ぐいっとコップ酒。お酒飲みの人を「辛党」と言ったりするけれど、サクヤさんにはぴったりの言葉だと思う。

昨夜は「ひとりで飲んでもつまらないじゃないか」なんて言っていたのに、今は手酌でぐいぐいと一升瓶を空けていたりする。

桂

「一本って、普通はお銚子で一本だと思う」

葛

「ですよー」

うちに遊びに来たときは、お母さん（酒豪）とよく飲んでいたので、わたしも二十歳になったら飲まされることになるかもしれない。

ううっ、大丈夫かなあ……

桂

「……とりあえず、座って飲んだら？」

サクヤ

「別にいいじゃないか」

桂

「なんならお酌もしてあげるよ？」

サクヤ

「それには心引かれるけどね、酒瓶を取り上げられそうな気がするから遠慮しとくよ」

サクヤ

「それに、立った方が月が近くに見えるんだ」

桂

「たいして変わらないよ……」

葛

「まあまあ、桂おねーさん。月は年間約五センチずつ地球から遠ざかっているそーですから、きっとサクヤさんは昔の月を見ているんですよ」

桂

「じゃあ、昔はもっと近かったんだ？」

葛

「そーですねー。ざっと七十六億年前には、地球とくっついてた計算になりますね」

桂

「わ、すごく嘘っぽいかも」

葛

「当然ですよ。地球誕生は四十六億年前だそーですから、そんなことはありえません」

桂

「ふーん、スケール大きい話だなあ」

葛

「それでサクヤさん。実際のところはどーなんですか？」

サクヤ

「——ああ。まあそれでもいいんだけどね。実際、昔を懐かしんでたわけだし」

サクヤ

「にしても、こうして見上げると綺麗なんだけど、実際はかなりの痘痕面なんだよねえ、あの女神様は」

桂

「痘痕？」

葛

「ははあ、なるほど。痘痕面とはまた絶妙な」

桂

「葛ちゃんはわかったの？」

葛

「コペルニクス、ティコ、ニュートン。プトレマイオス、アリストテレス——」
葛ちゃんは月を指差しながら、歌うようにどこかで聞いた名前を読み上げる。

桂

「……学者さん？」

葛

「間違いではありませんけど、適切な回答でもありません。次のヒントはぺったんぺったん」

桂

「月の兎はお餅つき。ちなにみ今宵は小望月」

葛

「です」
ん～。

桂

「……もしかしてクレーター？」

葛

「ご名答です、おねーさん。ちなみにクレーターには天文学者の名前が付けられているんですねー」

葛

「平らで綺麗な所には、静かの海や夢の湖、虹の入り江に腐敗の沼——なーんて詩的な名前が付いてたりするんですけど」

桂

「腐敗の沼はあんまり詩的とは言えないと思うけど……」

葛

「とはいえ、やっぱり痘痕も笑窪ってわけにはいかないみたいですよねー」
学者さんの名前が悪いってわけじゃないけど、何だか事務的というか、色気がないと思う。

サクヤ

「まあ、そうだろうねえ。天下りした神様だって、痘痕の月より花咲く地球がいいって——」

桂

「月はフラれちゃったんだ？」

サクヤ
「そーゆーことさ」

葛
「あれ？ それってもしかして、木花之佐久夜毘売と石長比売のことですか？」

桂
「はい？ サクヤさんがお姫様？」

サクヤ
「……違う、違う。神話の登場人物だよ。題して人間の寿命が短くなったわけ」

桂
「えっと、神話ってまた……」

葛
『古事記』ですよ。基本ですから
ううっ、一体何の基本なんだろう。
にしても、昨夜は人が死ぬようになった由来で、今度は寿命が短くなった由来とはまた、
偏った所ばかり聞いているのか、元々が偏っているのか。

桂
「それ、どんなお話？」

葛
「えとですねー。大山津見神という山の神様にはたくさん子供がいるんですけど、その中
に佐久夜毘売と石長比売という姉妹がいるわけです」

サクヤ
「ちなみに姉の方が石長比売——」

葛
「です。佐久夜毘売はとても美人さんでしたので、地上を治めにやってきた天照大御神の
お孫さんが一目惚れして求婚するんですね」

葛
「求婚された佐久夜毘売、自分では答えられないのでおと一さんに訊いてくれと返すんで
すけど、これまたおと一さんが大乗り気で」

桂
「玉の輿だもんねえ」

天照大御神と言えば日本の神様のリーダー格。天を照らすという名前の通りお天道様の
ことで、お伊勢参りの詣で先にいるのも天照様だ。

葛

「それでおと一さん、佐久夜毘売だけじゃなくて、そのおね一さんの石長比売まで一緒に送り出したりするわけです。贈り物もどっさりつけて」

葛

「ところが、石長比売はとんぼ返りで送り返されてしまうんですねー」

桂

「……返されちゃったの？」

葛

「返されました」

桂

「それって、佐久夜毘売だけを大切にしたかったからとか？」

葛

「いえいえ、そんな殊勝な純愛話ではないのです。単に石長比売が容貌的にチャレンジされている人だったからなんですね」

桂

「はい？ チャレンジ？」

葛

「あ、今のは政治的に正しい表現を試みただけでして、実際のところは『甚凶醜き』と表記されてます」

何だかひどくやるせない話だった。

桂

「そこでフォローがあったりしないかな？」

葛

「一応『健康のために好き嫌いしてはいけません。嫌いなレバーも食べましょう』的な、あまりフォローになってないフォローならありますよ？」

そこでちょっと座を正して、一呼吸おいて語りモードに入る葛ちゃん。

葛

「おと一さんの山の神様が言いました」

葛

「石長比売を側に置けば、雨が降っても風が吹いても、巖のように長く変わらない命を得られるでしょう」

葛

「佐久夜毘売を側に置けば、桜の花が美しく咲くように繁栄するでしょう」

葛

「だからふたりを揃えてお送りしたというのに、石長比売を返してしまった。あなたとあなたの子孫は、繁栄すれども散り急ぐことになるでしょう」

葛

「——とまあそーゆーわけで。面食いが祟って短い寿命を定められたと、つまりはそーゆー話です」

桂

「へー」

へーってわたし、ちゃんとわかった？

葛

「それにしてもサクヤさん。どーして月から石長比売の話に飛ぶんですか？」

サクヤ

「姉妹が対であるように、月と花とが対だからさ。だから我らが石長比売は、月に相当するんだよ」

コップをかざして月に乾杯すると、それを一気にあおってみせるサクヤさん。

桂

「対って……月見で一杯と花見で一杯？」

そんな花札の役を引き合いに出されて、相当するとか言われても。

ものいいたげなわたしを尻目に、サクヤさんは一升瓶を傾けて、コップにお酒をなみなみ満たす。

サクヤ

「例えばこいつは百薬の長にして、迷える衆徒に真理を授けてくださる、ありがたーい薬湯なんだけどね」

桂

「過ぎたるは及ばざるが如しだよ。薬と毒は紙一重なんだから」

サクヤ

「毒なら毒で喰らわば皿までさ。そんなことより、今朝した変若水の話は覚えているかい？」

桂

「不死の薬を燃やしたからふじの山——って話？かぐや姫だっけ」

葛

「さすがおねーさん、駄洒落の部分はしっかり覚えてますね」

桂

「部分はって、葛ちゃん……」

他も覚えていますとも、失礼な。

それにしても変若水と般若湯は、ちょっとだけ字面が似ていると思う——

閑話休題。

葛

「なるほど、なるほど。古今東西さまざまな話で、月と不死とは切り離せない関係ですね。それで石長比売と月と結びつくわけですか」

葛

「ああ、結びつくと言えば石長比売は縁結びの神様として祭られてますけど、おねーさん。縁結びと言えば何を思い出しますか？」

桂

「えっと……」

答えを求めてさまよわせた目が、コップを持ったサクヤさんの手を捕らえた。軽く小指が立っている。あ。

桂

「……運命の赤い糸？」

葛

「予想通りの鉄板連想で助かりますです」

葛

「元々は中国の方のお話で、赤縄という足首同士をつなぐ縄だったそーなんですけど」

桂

「わ、何だか強くて切れなさそう……」

葛

「本当にそーなんですよ。たとえ敵同士の家に生まれても、離れることはできないそうです。それがモンタギュー家とキャピュレット家であっても」

それはこっちに置いて——と、尾花ちゃんを右から左へ移し変える葛ちゃん。

葛

「その縄を持っている縁結びの神様を月下老人とか月下翁といいます。普通に媒酌人を月下氷人といいますけど、その上半分の由来ですねー」

葛

「——と、円くつながったところでもうひとつ。不死の薬を燃やしたふじの山の祭神は、散り行く栄華を司る木花之佐久夜毘売なんですねー」

桂

「へー、ごちゃごちゃとつながってるんだねえ」

サクヤ

「本当にごちゃごちゃだねえ。そんなに難しく考えなくてもさ——」

次々とコップを重ねていたサクヤさんが、お酒臭い息と一緒に吐きだした言葉は。

サクヤ

「だいたい、月は岩の塊だろう？」

みもふたもない一言だった。

サクヤ

「ただの岩の塊がひとりで浮いてるのは、やっぱり寂しいもんだねえ——」

群れ咲く枝の下に人を集める桜と違って、月はひとりぼっちだった。

手を伸ばしても触れられないほど遠くに、今もなお少しずつ離れていきながら、ずっと昔からひとりで空に浮いている月。

そんな月の光に照らされたサクヤさんの横顔が、その青白さのせいなのか——

何だか寂しく遠く見えた。

わたしたち三人と一匹は、月見の宴会から雑魚寝になだれ込んでいた。

葛

「ZZZZZZZ……」

隣からは葛ちゃんの寝息が聞こえてくる。

けどわたしは目を閉じてても、なかなか眠りにつけないでいる。

身体は疲れているはずなのに、心が妙に昂ぶっている。つい余計なことを考えてしまう。

百を超えるまでは順調に、一匹、二匹と柵を飛び越えていた羊が、どこからともなくやってきた狼に食べられてしまって——

そういえば、吸血鬼に並んで有名な狼男は、満月を見ると変身するのではなかったか。

そして銀の弾丸でしか傷付かない無敵の身体をもっているとか、どんな傷もすぐに治ってしまう不死身の身体をもっているとか——

——ああ、ここでも月と不死。

こんな感じで次々と余計な考えが、泡のように浮かんで消えていく。

澱みに浮かぶ泡沫はかつ消えかつむすびて久しく留まりたるためし無し——

こんなふうに落ち着かないわたしは、確かに盛者必衰の理を表す、佐久夜毘売の民なんだろう。

眠れない。

諦めてまぶたを上げると、蒼く薄まった夜の向こうに、木目が渦巻く天井が見えた。

桂

「……ねえ、サクヤさん」

サクヤ

「……………」

桂

「まだ起きてる？」

サクヤ

「……起きてるけど、こんな時間にどうしたんだい？」

桂

「何だか眠れなくってさ」

サクヤ

「あいつらが来ないか心配かい？」

赤い蛇——ノゾミちゃんとミカゲちゃん——わたしに流れる血を狙う鬼。

それから、たぶん、あの男の子も。

サクヤ

「安心おしよ。こうして一緒に寝ていれば、間に合わないってことはないから大丈夫だよ」

桂

「あ……そっか。わたし危ないんだっけ」

サクヤ

「あんたねえ、そんなに危機感ないんじゃないかな」

桂

「ごめんなさい。でも、さっきから聞きたいことがいろいろ頭の中にあって」

サクヤ

「葛が起きてるときに聞いた方が良かったんじゃないかい？」

年齢不相応の知識量を誇る、解説担当の葛ちゃん。確かにわからないことを教えてくれるから、その方がいいのかもしれないけれど。

桂

「んー。でも、葛ちゃんに聞かせてもいいのか、微妙なこともあるし。サクヤさんが鬼だとか」

サクヤ

「さて……葛相手じゃ今更って感じだけどね」

桂

「わ、何かバレるようなこと言っちゃったかな」

サクヤ

「まあ、別にいいけどね」

桂

「あんまり秘密のことじゃないんだ？」

サクヤ

「バレるときはバレるって」

ごそりとお布団のずれる音が聞こえて、サクヤさんが身体を起こした。

桂

「じゃあ、質問。サクヤさんのサクヤって、やっぱり佐久夜毘売からもらった名前なの？」

サクヤ

「なんだい、藪から棒に」

桂

「だって、サクヤさんは山育ちで写真だって山の写真が多いし、佐久夜毘売は山の神様の娘さんだから——あ」

サクヤ

「『あ』って、なんだい？」

桂

「もしかして、ご本人——いたっ」

裏拳でおでこをノックされた。

ううっ、ちゃんと中に入ってるってば。

サクヤ

「あんた、本気で言ってるのかい？」

桂

「いやね、さすがにそれはないなって思ったけど、例えば何代目かを襲名してるとか……」

サクヤ

「今度は少しは考えたね。まんざら縁がないわけじゃないんだけど、あたしが美人薄命って柄かい」

桂

「ううっ……」

確実に美人なんだけど、薄命って感じはぜんぜんしないっていうか……むしろワイルド？

サクヤ

「あたしは頑丈さが取り得の、観月の民だからね。あたしらの祖神にあたるのは、佐久夜毘売じゃなくて——」

あ——

そうだ、サクヤさんは観月の民だと——

桂

「——観月——月——石長比売——」

人界を統べる神の妻となった妹神ではなく、人界を統べる神と結ばれなかった姉神の眷属。

サクヤ

「観月に生まれる子供はね、決まって満月前後の晩に生まれることになってるんだよ」

サクヤ

「ところがあたしが生まれたのは、月の出てない晩だった。そのせいか一族のものにあるべき《力》も発揮できない」

サクヤ

「あたしは不吉な生まれの、忌み子なのさ」

あたる光と影の具合か、一瞬、サクヤさんからごっそりと生気が抜け落ちているように見えた。

月の光は死んだ光だ——それは、誰の言葉だったろうか。

ちかりと瞬く星よりずっとに明るいのに借り物の光でしかなく、水面に映る景色と同じで向こう側にいる太陽を映しているだけで。

熱を持たない冴え冴えと青白いそれは、死んだ光の——影。

ぶるりと身体を振るわせると、サクヤさんはもう、いつものサクヤさんに戻っていた。

サクヤ

「だからあたしのサクヤは佐久夜毘売じゃなくて、新月の——朔の夜なんじゃないかと思うんだよ」

桂

「……思うんだよ？」

サクヤ

「実はあたしも正確なところは知らないからさ」

サクヤ

「あたしら観月に生まれた子供は、占いで名前を決められるんだよ。名前は一番の言霊だから、名前によって生き方が縛られるってね」

桂

「わ、大時代的なんだ。それ、姓名判断の先生に名付け親になってもらうようなもの？」
浅間サクヤ——総画数は何画だろう。いや、わたしは姓名判断なんてできないんだけど——

桂

「あれ？　そういえばサクヤさん」

サクヤ

「なんだい？」

桂

「サクヤさんってどんな漢字だったっけ？」
佐久夜でも朔夜でも咲耶でも昨夜でも、漢字がわかれば名前の由来もはっきりするじゃないか。
表意文字万歳。

サクヤ

「どんな漢字って、名刺の通りだよ」
『ルポライター／フォトグラファー・浅間サクヤ』

桂

「……………」

サクヤ

「……………」

桂

「……この名前のカタカナ表記、ペンネームじゃなかったんだ？」

サクヤ

「なかったんだよ。古い時代の生まれだからねえ」

桂

「古いって……」
そういえば戦前生まれのお婆ちゃんには、ウメさんとかタエさんとか、カタカナ名前の人が多いようなイメージがある。

桂

「でも、それだとお母さんと同年代どころか、お祖母ちゃんよりも古いんだけど」
ちなみにわたしのお祖母ちゃんは漢字で笑子。わたしは覚えていないけど、笑顔が素敵な人だったのだそう。

桂

「……サクヤさんって実際のところ何歳？」

サクヤ

「さーて、幾つだったかねえ。とりあえず、酒もタバコも競馬もオッケー。大人ビデオもレンタルできるし、車の免許も持ってるよ」
ひらひら振った片手を返し、ひとつふたつと指折って。

サクヤ

「……数えるの止めたのって、いつの頃からだったかねえ？」
眉間にしわを寄せ、考える人のポーズ。

桂

「わ、年齢不詳ー」

サクヤ

「一応、出版社に売り込むときは『美人独身二十歳』ってことでー」

桂

「わ、すごい鯖。わたしが覚えてる十年前からお酒飲んでるし、つまりは最低でもさんじゅー」

桂

「——あれ？」

昨夜の夢。サクヤさんの夢。

サクヤさんはこの十年間、ぜんぜん歳をとっているように見えない。

桂

「サクヤさんって、歳……」

サクヤ

「ああ、あたしは石長比売の眷属だからね」

桂

「そっか。鬼……なんだもんね」
血を吸うということよりも。
姿が少々変わるということよりも。

桂

「……なんか、やっと実感できたかも。サクヤさんって、本当に人とは違うんだ」

サクヤ

「桂がしわしわになっても、あたしはたぶんこのままだろうしねえ」

桂

「不老不死なの？」

サクヤ

「年をとらないわけじゃないよ。大神の長——ああ、大神は観月の本家筋なんだけど——は、見た目も老人だったしねえ」

サクヤ

「それに不死だけは絶対じゃない。べらぼうに寿命は長いけど、それでも死ぬときはあっけなく死ぬんだよ」

桂

「サクヤさん……？」

サクヤ

「いや、何でもないよ。ただ、あたしも不死身のヒーローってわけじゃないからね」

桂

「うん……」

サクヤ

「さーて、そろそろ寝ようかね。月の光がまぶしくて、目は冴えちまうのはわかるけどさ」

いつの間に眠ったのか、あたしは夢を見ていた。

夢だとわかる、夢を見ていた。

あたしは走っている。

森——

深い——林か森か。幹の太い古木が立ち並び、たけのある草が生い茂る狭い道を、あたしは走っている。

すでにいくつもの山を越えている。

額といわず背中といわず、汗でびっしょり濡れていた。

それでも滲んでぼやけた目をぬぐいつつ、はあはあと舌を出しながら、走った。

速く、早く、はやく、はやく——

いなくなってしまう。

たいせつな人がいなくなってしまう。

あたしとよく似た名前をしている、綺麗な人がいなくなってしまう。
いやだ、いやだ、そんなのはあたしはいやだ。あたしに優しくしてくれるのは、肉親のほかにあの人だけなんだ——

竹林が見えてきた。
笹を揺らす風になって急ぐ。
たとえどんなに急いでも、幼い子供の二本の脚では限界が知れている。あたしが四本脚になれるのなら——

竹林の先には屋敷があった。
あの屋敷の中にあの人はいるのだ。

あたし
「はあっ——はあっ——はあっ——はあっ——」
こんなに息を荒げていたら、あっという間に見つかってつまみ出されてしまう。
だからあたしは、今すぐ屋敷に飛び込みたいのを我慢して、足を止めて息が整うのを待つ。

あたし
「はあ——はあ——」
あたしは山に住むものだから、あまり里に住む人と接触してはいけないと言われている。
里人の方でも、あたしたちを嫌っているのだという。確かにあたしを見る目は、お世辞にも好意的とはいえなかった——あの人を除いて。

あたし
「はあ——」
ようやく息が整ってきた。
嫌なにおいを感じて目をやると、屋敷の屋根に矢が一本、突き立つままにされていた。
矢じりと矢軸と矢はずは丹を塗ったように朱く、そのなかで矢羽根だけが白かった。
あれはあの人があいつに選ばれたしるし——
限界の限界だった。矢も盾も堪らず、あたしは塀を乗り越えて屋敷の中へと忍び込む。

たんっ——
もともと低い背をさらに低くして、鼻をひくつかせながら庭を横切る。
木犀にも似た甘い香りが微かに漂ってくる。これはきっとあの人のおい。鼻を頼りにあたしは裏庭の方へと向かっていく。

見つけた。

あたし
「姫さま！」

え——？
わたしがしがみついた人物。わたしが「姫さま」と呼んだ人物は、見覚えのある顔立ち

をしていた。

もちろん面影があるというだけで、そっくりというわけじゃないけれど、その人はオハシラサマに似ているような――

そして、その人は、わたしにも似ていた。
毎日鏡で見ている顔に、かなり似ていたりはしないだろうか――
あれ？ わたし？ あたし？

いや、わたしはわたし。わたしの名前は羽藤桂。だけどそれじゃあ、このあたしは？
そういえば、山の中では気にならなかったけど、このお屋敷はずいぶんと古めかしいの
ではないだろうか。あの人やあたしの着ているものも――

あたし
「姫さま、やだよ！ 行っちゃいやだよ！」

感情が大きく波立った。

あたしとわたしに分離しかけていた意識がかき乱されて、わたしはあたしに飲み込まれる。

姫さま
「あら、挨拶もせずはどうしたの？」

あたし
「だって、だって、姫さまが……」
家人に見つかる危険はわかっているはずなのに、大きくなる声を抑えることができない。

あたし
「姫さまが、あいつに連れて行かれるって！」

姫さま
「それはお山の、あのお方のことかしら」

あたし
「あいつはあいつで十分なもの！」
我慢していた涙がぽろぽろと零れた。あたしは止まらない涙を、姫さまの胸に吸い込ま
せた。

姫さま
「……矢を立てられてしまったんだもの。仕方がないわ。わたしのこの身を捧げれば、し
ばらくこの里は大丈夫なはずよ」
あたしの頭を撫でていた手を止めて、屋根の上を仰ぎ見る。そこにはしるしの白羽があ
る。

姫さま

「それにしても、もうあなたたちにまで伝わっているのね」

あたし

「大人が話してた……都から来た鬼切りが、あいつに返り討ちにされたって……」

姫さま

「そう……ごめんなさいね、騒がせてしまって」

あたし

「なんで姫さまが謝るの！ 鬼切りがだらしないからいけないんだ！ いつも威張って
るくせに役立たずなんだから！」

姫さま

「駄目よ、そんなひどいことを言っては」

あたし

「姫さま……」

姫さま

「駄目。あの方たちはわたしを助けようとして、命を落としてしまったんだから」

あたし

「……………」

姫さま

「今更だけど、わたしがあの方の所へ行くことを拒まなければ良かったのよね」

あたし

「駄目！ ぜったい駄目！ あたしがお祖父ちゃんに頼むから！ お祖父ちゃんに頼んで、
姫さま助けてもらえるようにするからっ！」

姫さまは、困ったように静かに微笑む。

姫さま

「もういいのよ。わたしひとりのために、何人もの方を危険な目にあわせることはないわ」

あたし

「危険なんてないもの！ 大丈夫なもの！ お祖父ちゃんたちの方が強いんだからっ！」
弱気な姫さまの態度が気に入らなくて、それでも姫さまのことが大好きで――

あたしは突き飛ばすようにして姫さまを押しのとけると、山に向かって駆け出した。

姫さま

「ちょっと、サクヤちゃん！」

——え！？

これはサクヤさんの——夢？

そしてまた、あたしとわたしは分離する。

パチパチと薪のはぜる音。

空気の濃い山にある集落の小屋の中に、たくさんの人が集まっている。にぎやかな笑い声。

そのなかであたし——幼いサクヤさんは、人見知りでもしているように、大きな背中の陰に隠れている。

背中の人

「どうした、サクヤ」

その背中の人振り返った。いかにもサクヤさんの血縁といった風な、豪放磊落そうな顔つきをしている人だった。

サクヤ

「お祖父ちゃん、姫さまのこと大丈夫かな……」

サクヤの祖父

「さて、どうなるものやら。こうして各一族の長が集まってくれている以上、中身のない話し合いにはならんはずだが」

サクヤ

「本当に話し合いになるの？ みんなお酒飲んでるし……」

サクヤの祖父

「それはまあ、しかたあるまい。儂らは普段は交わらん。顔を合わせるのも数十年振りか」

サクヤ

「……………」

不満顔のサクヤさんの頭の上に、お祖父ちゃんは手を乗せてくしゃっと撫でる。

サクヤの祖父

「ふむう、まだお前には、こういった場はつまらんだろうなあ。せめて生まれの近いものがおれば、楽しめるものなんだが……」

サクヤの祖父

「儂らの姫さまは石のお方ゆえ、そうそう新しい子を授けてくれはせんからなあ」

サクヤ

「……いてもあたしは仲間はずれなもの」

浅間の長

「……………」

きっとサクヤさんは月のない夜に生まれたことを言っているんだろう。

わたしもサクヤさんのお祖父ちゃんと同様に、大きなため息を吐きたい気分だった。

十年前のわたしも、周りに対して後ろ向きな考え方をしていたことがある。

周り自分との違いを意識して、その違いがもとでつまはじきにされることを恐れていた。

覚えていることが何もなかったり、お父さんがいなかったりと要素は複数で、幼心には片付けきれないほど複雑で、そのぶん深刻だった。

だけど、本人が気にしているほどには、周りは気にしていないものなのだ。

何から何まで違う立場だから、ひとくくりに纏めてしまうことはできないけれど——

そんなことで悩まなくても大丈夫だよ、とサクヤさんに言ってあげたかった。

お祖父ちゃんの態度を見るかぎりには、忌み子と疎まれているようには見えない。

サクヤの祖父

「おお、そうだ。播磨から来た文石のが、自分のところの巫女に織らせた布を土産に持ってきたんじゃ。それで着物を——」

大人の常套手段を使い、サクヤさんの曲がったへそを戻そうと、お祖父ちゃんが笑顔を作ったそのとき。

静かな低い声

「皆のもの、遅くなった」

雪を頂いたような、真っ白い髪を伸ばした人が入ってくるのと同時にざわめきが途絶えた。

背筋はぴんと伸びているし、目にも声にも力があるけど、この人が一番歳をとった長老なのだ——群の頭なのだ——目でわかった。

立ち上がったサクヤさんのお祖父ちゃんが、その老人を上座へと導く。

サクヤの祖父

「酒も肴もありますから、待つのはそれほど苦になりません。それよりも遠いところをご足労願ひまして」

白頭の老人

「なに、じきに満月だ。人には遠い道行きでも、足を増やせばそう労というほどではない」

サクヤの祖父

「ははは、それはごもつとも。しかしそう苦にならないのであれば、持ち回りなどで頻繁に集まりを持つべきかもしれませんな」

白頭の老人

「うむ……まあ、それについてはおいおい話すとして——浅間の」

サクヤの祖父

「はい」

老人に促されたサクヤさんのお祖父ちゃん——浅間の長は頷き返し。

浅間の長

「では皆の衆。見てのとおり大神の長がついたところで、合議に入りたいと思う」

大きな声でこの集まりの開始を宣言する。その場にいた大人たち全員が、一斉に姿勢を正して頭を低くした。

わたし——わたしの意識が依り憑いている幼いサクヤさんも、浅間の長であるお祖父ちゃんの背中に隠れるように、慌てて頭を下げる。

大神の長

「どうやら儂が最後だったようだな。皆のもの、面をあげてくれ」

ざっと顔を上げる一同。

わたしの学校で一番厳しい先生でも感心してしまうほど、規律のとれた行動だった。さっきまで宴会をしていたというのに、私語は一切ない。

大神の長

「大方の話は、浅間からの使いによって知らされているだろう」

大柄な男

「都の——確か都近くの山より流れ出でて、いつの間にかこの地に到った、彼の鬼神の末裔の処断についてでしたな」

浅間の長

「わざわざことを構えることもあるまいと、目をつぶっていたのが仇となりました」

大神の長

「討たねばならぬか？」

浅間の長

「ならぬでしょうな。奴がその身を要求している竹林の長者の姫は、濃く贅の血を引いております」

大柄な男

「……ほほう、贅の、な……」

ひととき大きな身体の持ち主が、ずずいとその身を乗り出した。舌なめずりせんばかりの様子が、ちょっと怖い。

大柄な男

「なるほどなあ、かどわかしたくなる気がわからんでもない。まつろわぬ鬼として追われたとはいえ、まがりなりにも神は神」

浅間の長

「文石の」

サクヤさんのお祖父ちゃんがたしなめる。この大きな人が文石の長らしい。

文石の長

「そう硬いことを言うな、浅間の。儂らとて奴と同じく、神と崇められもする身ではないか」

浅間の長

「おい！」

文石の長

「捧げられるはずの贅に手を出して何が悪いのかと——と、まあ本気ではないのだから、口で言うぐらい問題ないだろう」

大神の長

「言之端は意之霊に形を与えるものだ。滅多なことを口にするでない」

浅間の長

「……文石の。おぬしがそのようなことだから、おぬしの一族からオマロのようなものが出るのだ。確か、雄略のころだったか——」

大神の長にやりこめられてしまった文石の長に、ここぞとばかりに浅間の長がお説教をはじめめる。

文石の長

「わかった、わかった、もうよしてくれ。なあサクヤ、お祖父ちゃんに儂をいじめんように言ってくれんか」

サクヤ

「……っ」

人見知りするたちらしいサクヤさんは、びくりと肩をすくめると、浅間の長の背中に隠れる。

文石の長

「むう、儂はそんなに恐ろしげな顔をしておるのかのう？」

浅間の長

「サクヤは竹林の姫さまを好いているのでな。先のようなうかつな口を叩くおぬしに、懐くはずがあるまい」

文石の長

「おうおう、やはり災禍は口より来るか。儂はしばらく黙っておったほうが良さそうじゃ」

浅間の長

「口を閉じるのはかまわんが、目まで閉じて眠らんようにな」

浅間の長

「それで、大神の長の考えは？」

大神の長

「おぬしの言う通り討つしかあるまい。犬飼部として大王の臣籍にある、隼人の長からも使いが届いておる」

大神の長

「藤原の大臣の命で動いた鬼部の鬼切りが、幾人がかりかで挑み——」
大きなため息。

浅間の長

「なすすべもなく返り討ちにあいましたな」

文石の長

「鬼部の鬼切りが！？ おいおい、それは何かの冗談だろう。連中はそれこそ鬼切る武を持つ鬼武ではないか」

大神の長

「それを言うな。奴が強すぎるのよ。我ら観月とは地を二分する山の神の眷属であり、彼の鬼神の血を引く、最古の神の末裔だけにな」

大神の長

「それに我らのような、人に在らざる鬼が姿を隠すようになった昨今、鬼切り役の質が落ちるのも否めまい」

浅間の長

「おぬしのところのオマロを討った春日小野臣大樹は、なかなか大した男であった。あのころに比べると鬼部も人材不足なのだろう」

大神の長

「ふむ、雄略は臣に恵まれておったな。なにせ奴と同祖の神である、あの三輪山の神を取り押さえることができる兵を仕えさせておった」

文石の長

「ははあ、栖軽か。奴は強い。強すぎる。人とは思えんほど強い。儂も奴と組みあうのは勘弁願いたい——ところだが」

文石の長

「妹神様の民だけに、とうに天寿を迎えておったか。奴さえおれば、鬼部の鬼切りも後れをとったりはせなんだろうなあ……」

文石の長

「……うむ、我々でもきついかのう？」

浅間の長

「一筋縄ではいかん相手だろう」

大神の長

「そこでだ皆の衆。儂はこの件、観月の民だけで片付けるのではなく、あるお方の助力を請うて為すべきだと考えた」

文石の長

「……あるお方？」

大神の長

「儂が遅れたのはな、ここに向かう前に伊豆まで脚を伸ばしたからなのだ」

浅間の長

「伊豆というと流刑地ですな。そんなところに、我々が助力を請うようなお方が？」

大神の長

「ふふっ、おぬしらが買っておる、小子部栖軽にも劣らぬ心強いお方だよ」

大神の長

「かの雄略に三輪の神を見せいと言われて捕まえてきたのが栖軽なら、雄略をひれ伏せさせた葛城の神を封じたのは彼のお方」

浅間の長

「葛城の神を——伊豆に——まさか!？」

文石の長

「知っているのか、浅間の」

浅間の長

「うむ、おぬしも名を聞けばわかるはずだ。大神の長が言っておるのはあの、賀茂役君小角」

文石の長

「小角というと、人から転じた変成の鬼か。当代きっての験力者と評判の」

大神の長

「そう、その小角殿よ。讒訴を受けて伊豆に流されておる身なれど、夜な夜な空を翔け、霊山という霊山を巡り、修行を続けておられる」

大神の長

「儂ら大神が縄張りとしている山にもいらっしやっただのな。山に住まう鬼同士、杯を交わす機会を頂いたことがあるのだよ」

大神の長

「贅の血を持つ娘が原因であることを話したら、小角殿も大層興味を持たれたのでな」

文石の長

「まさか、報酬としてその血をよこせなんてことは——」

浅間の長

「たわけ、おぬしと一緒にするな、文石の」

文石の長

「だが、浅間の。おぬしとて不安に思っていたりはせんか？」

浅間の長

「それは……」

サクヤ

「……お祖父ちゃん、その人……小角さまも姫さまをさらっていくの？」

浅間の長

「……………」

大神の長

「ふははっ、その心配は無用だ、サクヤよ」

サクヤ

「……どうして？」

大神の長

「何しろ小角殿自身が贅の血の持ち主だからな」

浅間の長

「小角様が贅の！？」

大神の長

「さよう。小角殿の持つ、神を封じるほどの験力の源は、その身に流れる血の中にある。見事、贅の血の《力》を使いこなしておるのだよ」

文石の長

「ほほお……」

大神の長

「奴の始末をつけたあと、この地の長者の血筋のものが、普段の暮らしに困らぬように、うまく取り計らってもくださるそう。安心せい」

サクヤ

「あ……ありがとうございます」

浅間の長

「して、小角様は？」

大神の長

「色々と用意があるのだそう。奴ほどの鬼とことを構えるには、葛城の神の助けがいるかもしれない——」

ふと、入り口のあたりが、ざわめいた。

そこには、尾花ちゃんによく似た白い子狐を連れた修験者がひとり佇んでいた。

大神の長に勝るとも劣らない威風を持ったその人は、一見して普通の人と違っていた。

鬼——

その人はまさに鬼だった。両のこめかみから一本ずつ、その名の通りの小さな角が生えている。

大神の長

「小角殿、よくいらした」

小角

「うむ」

頷くその人の眼が、ひたとわたし——幼いサクヤさんの上で止まった。

浅間の長

「……小角様？　うちのサクヤがどうかさいましたか？」

小角

「いや——」

小角

「この娘——本当におぬしら観月の民の子か？」

心臓が氷つくような言葉だった。

小角様を筆頭に、長と長に並ぶ実力者ばかりで構成された連合軍が、ひとりの男の人と対峙している。

来てはいけないと言われているのに、サクヤさんはそれを隠れて見ている。

遠く、離れた茂みの中。

身動きさえしなければ大丈夫だろうと、サクヤさんはたかをくくっていた。

確かにいくらあの人強い神様でも、ここまで離れた茂みの中にまで気を配る余裕があるはずない。こちらだって精鋭揃いなのだ。

だから、わたしも安全だと思っていた。

大神の長

「おぬしは危険なのだよ。人にとっても、おぬし以外の鬼にとっても」

耳をそばだてると、意外とはっきり声が聞こえた。人間ではないだけあって、サクヤさんはずいぶんと耳がいい。ここまで地獄耳だったとは。

これはうかうか変なことを口に出せないな——なんて暢気なことを考えているわたしに活を入れ、目の前の戦場に集中する。

大事なことに気付いても、それを伝えるすべを持たないわたしは、単なる傍観者にすぎない。

それでも、気を抜くべきではないと思う。

わたしたちの意識は、混ざり合ったり分かれたりを繰り返しているから、肝心なときにわたしの油断が感染ったりしては大変だ。

小角

「陽の神の孫が地に降りてより、世にある闇は日月の移ろいととも薄まる一方だ」

小角

「わかるか。我ら人に在らざるものは、隠として——人に悟られぬように生きていかねばならん。それが世の流れというものだ」

小角

「おぬしとて、あの争乱で武葉槌命に服されて以来、大人しくしていたのではないか。まつろわぬ鬼、年経た赤き蛇、輝ける星神よ」

主

「……ほう、そこまで知っているか」

小角

「藤原の大臣が、そのあたりの凡そをまとめさせておるのだよ」

小角

「彼を知り己を知れば百戦して殆うからず——と、唐渡りの書にも記されておれば、こちらは十分に用意をさせてもらったぞ」

大神の長

「観月の女神は天に在す機織り女。おぬしを服した武葉槌も文を織る神であったな」

文石の長

「加えて今宵は満月。我らは最大の加護を得ることができる」

浅間の長

「地の利はもとよりこちらにある。それに天の利、人の利が加わった今、おぬしに勝ちの目はあるまい」

小角

「おぬし、今まで通りどこぞの山の主の座につき、大人しくしていることはできぬか」

主

「それができるぐらいなら、わざわざここまで来ておらぬ。破られるというのなら、それもまた一興——」

主

「破られるとは、ゆめゆめ思わんがな」

小角

「何ゆえ、今までしていたことができんのだ？」

主

「飽いたのよ。大人しくしているのに飽いたのよ。まどろみの間はそれでも良かったのだが、一度目覚めてしまえばな」

主

「小角。おぬしとて流されている身でありながら、夜な夜な好きに出歩いておるではないか」

小角

「ほう、よく知っておったな」

主

「最近、口さがない小鳥が一羽、私の巣穴に舞い込んできたのでな。あやつが飛び回ってくるおかげで、私の耳にも風聞が届くようになった」

主

「贅の血を引くと評判の、竹林の長者の姫君のこともな」

小角

「その小鳥とやらが此度の元凶か。しておぬし、贅の血を得て何を為す」

主

「私の欲することを為す」

主

「私は隠れたいときに隠れ、現れたいときに現れる。照日の神らの台頭で、闇の領土が狭まったというのなら——」

主

「その神を弑すればよいではないか。奴らが我が祖を屠り、我らの治める地を平らげ、こ

の世の覇権を手にしたように」

主

「確かに私は一度敗れた。だが、一敗地に塗れたからといって、それがどうしたというのだ。それですべてが失われたわけではあるまい」

主

「贅の血によって削がれた《力》を取り戻し、再び大和の地を席卷し、住みやすき闇の領土を広げよう。私にはそれができる」

小角

「それなりに治まっているこの地を、今更乱してどうなるというのだ」

主

「どうとでもなればよい。このままでは私が住み難いというだけのこと」

小角

「話し合いは通じぬか」

主

「もとより意を曲げる気は、お互いにあるまい。尾を振る犬の考えは私にはわからぬ」

小角

「おぬし、言ったな」

そして――

戦いが始まった。

戦いはわたしの知っている結果通りに、主が封じられるところで終わっただけだ。

大神の長

「小角殿、後の始末はどうするべきか」

小角

「封じるだけでは駄目だろう。どんな封印を施したとしても、そのうちそれは綻びる」

浅間の長

「しかし、このまま放置しておくわけにはいかぬでしょう」

小角

「当然」

小角

「一片の雪はすぐに溶けても、一面を覆う雪はなかなか溶けぬもの。下手にどうこうしようと足搔くと、踏み固め、より溶けにくくしてしまう」

小角

「同様に、これほどの魂はなかなか還らずこの世に留まる。長く留まるとどうなるか——」

小角

「祟り神となる」

小角

「……だから少しずつでも魂を還してやるのよ。動けぬように封じつつ、刻をかけて少しずつな」

浅間の長

「その苗木が封じの呪物なのですか」

小角

「さよう。奴も山神の眷属なれば、多少なりとも土の性を持っておるもの。ゆえに木剋土。木は土より《力》を吸い上げる」

小角

「これは魔を祓う木であり、魂を虚空に還す吊いの木」

小角

「しかし、燎原の火をわずかな水で消すことは適わず、水剋火が成り立たぬように——」

浅間の長

「その木では足りませぬか」

小角

「いや——例えが悪かった。足らぬのは《力》ではなく時よ」

小角

「持てる《力》を枯らし、朽ちるまでに百年——いや、十年持つかどうかもわからん」

浅間の長

「妹神様が人に与える栄華と同様に、定命ゆえの《力》なのですか」

大神の長

「では小角殿、我らの女神にあやかって、悠久の時に耐える石を封じとなさっては」

小角

「だが、それでは——」

小角

「それでは主が、あまりにも哀れだ」

小角

「おぬしらも観月であるからには、想像できぬことではなかろう。無限の時を、ただ封じられるに留まる苦しみは」

文石の長

「むう……」

小角

「封じられたものには、滅びを選ぶことさえ許されぬのだ」

浅間の長

「では——」

オハシラサマ

「それでは、わたしが人柱になりましょう」

サクヤ

「姫さま！」

オハシラサマ

「橋をかけるときに、城をたてるときに、そのものの長久のために、人を埋めることがあります」

小角

「む……」

オハシラサマ

「わたしの身体を取り込ませることで、贄の血を木の霊とし、枯れぬ封じと成すことはできませんでしょうか？」

小角

「それは可能だが……それでは……」

オハシラサマ

「もとよりわたしひとりが狙われていたのです。どうぞわたしを、その木の柱としてください」

オハシラサマ

「遠き地より皆様方が集まってくださったのは、あの方がわたしの血を得ることで、より大きな被害が出るのを憂えてのことでしょうか？」

サクヤ

「違う！ 違う！ 違う！」

サクヤ

「あたしがお祖父ちゃんに頼んだから！ だから助けてくれたんだもの！」

サクヤ

「……あたしは嫌！ 姫さまがいなくなっちゃうだなんて嫌！」

浅間の長

「これ、サクヤ」

サクヤ

「嫌！ 嫌って言ったら嫌！」

必死で駄々をこねるサクヤさんに、長たちも掛ける言葉がない。

オハシラサマ

「別にいなくなってしまうわけではないのよ、サクヤちゃん」

オハシラサマ

「かつては人であった小角様が、立派な角をお生やしになっているように、わたしの形が変わるだけなの」

オハシラサマ

「そう、あなたと少しだけ近い存在になるの」

サクヤ

「……あたしに……近く？」

オハシラサマ

「人の身は百年も経たずに朽ちてしまうけれど、封じの柱になれば、千年の時も耐えることができるのよ」

小角

「だが姫よ。人の形を成して現れるなど、そうそうできることではないぞ。封じの柱にできるのは、ただ見守ることのみと思ってよい」

オハシラサマ

「承知しています」

小角

「……そうか」

小角

「では皆のもの！ 贄の血を引くこの姫を封じの柱と成し、あやつの魂が還りきるまで、鬼の木を守って頂くことにする！」

サクヤ

「そんなの嫌！」

大神の長

「……浅間の、サクヤを連れていってくれ」

浅間の長

「はい」

サクヤ

「姫さま！」

サクヤさんが連れていかれる。

サクヤ

「姫さまーっ！」

どんなに暴れても、捕らえる手を振りほどくことができない。

サクヤさんにできるのは叫ぶことだけ。

サクヤ

「姫さまあーっ！」

それは長い夢だった。

わたしが覚えている夢を、割愛しないで映画に撮り下ろしたら、見終えるまでに何日も座りっぱなしになってしまう超大作になってしまう。

一夜漬けで試験範囲を網羅——なんて睡眠学習の可能性を見たような気がするほど、夢の密度は濃いと思う。

それほど濃いにもかかわらず、大抵は目覚めた途端に忘れられてしまうのだから、それが儚いという文字に組み込まれるのもわかる気がする。

わたしたちの一生も、誰かの見ている槐安の夢に過ぎないのだろうか。

それにしても——

お話を聞いたり読んだりするのは好きな方だけれど、なかなかすごい夢を見たものだ。

浅間はともかく、文石に大神、それから小角。そんな固有名詞まであるわけだから、わたしの創造にしては、ずいぶんとディテールが細かい。

果たして記憶の引き出しの中に、そういった名前のストックはあっただろうか——

それとも、オハシラサマの影響を受けていたりするのだろうか。

まあいいや——

もうすぐ朝がやって来る。

すぐではなくても、そのうちに来る。

桂・サクヤ・葛

「いただきます」

声を揃えててのひらを合わせる。

三人で囲むちゃぶ台の上には、栄養調整食品と乾パンと缶詰、それからミネラルウォーターのボトルが並んでいる。

サクヤ

「何ともまあ、侘びしい食卓だねえ。朝食は今日という日を生きる活力源なんだよ。栄養価はともかく心が貧しくなりそうじゃないか」

桂

「それならお饅頭もつけようか。甘いものは心を豊かにしてくれるよ」

サクヤ

「朝っぱらからそんなもの食ってられるかい。あたしは塩っ辛いのが好きなんだ」

葛

「塩分の過剰摂取はまずいですよ。ヤバイですよ。ただでさえ気性の激しい人は、高血圧になりやすいそうですからね」

桂

「サクヤさんは大丈夫？」

サクヤ

「あんたら人を何だと思ってるんだい。それに桂は、あたしのことより自分の心配をおし」

サクヤ

「糖分の過剰摂取の恐ろしさは、現役乙女のアンのの方が危機感たっぷりなんじゃないかい？」

桂

「ううっ……体重計が……」

葛

「体重計もですけど、砂糖の脱カルシウム作用が一番怖いですよ」

葛

「カルシウム不足は老化への第一歩ですよ。精神が揺れやすくなりますよ。集中力や記憶力の低下につながりますよ」

サクヤ

「そうそう、確か物忘れが激しくなるんだっけ。だとしたら桂はもう手遅れか」

桂

「えー、そんなことないよ。わたし昨日何を食べたかちゃんと憶えてるし、昨夜の夢だって、その後の変なことだってちゃんと憶えてるよ」

葛

「変なことですか？」

桂

「うん、サクヤさんは、わたしが寝ぼけて見た夢だっていうんだけどね——」

赤い蛇に襲われて、夢の中のあの人と尾花ちゃんに助けてもらったことの顛末を、かいつまんで説明する。

葛

「ははあ、ニヌリヤっぽい話ですねー」

桂

「ニヌリヤって何？」

葛

「『古事記』に載ってる話です」

桂

「葛ちゃんって『古事記』なんて読むの？」

葛

「まあ、基本ですから」

基本って、本当に葛ちゃんは何者だ。

わたしが葛ちゃんぐらいの時は『日本書紀』とセットで名前を習った程度だったはず。

サクヤ

「ちなみに丹頂鶴の丹の訓読みが『に』で、朱いとかいう意味合いでね。丹で色を塗ることや塗ったもののことを丹塗って言うんだよ」

桂

「朱いって、神社の鳥居とか、サクヤさんの車とか？」

サクヤ

「そう。それで『や』の字は、真弓の弓と対になる矢だよ」

丹塗矢——赤く塗られた矢。

葛

「さて、それで丹塗矢の話はこうです。勢夜陀多良比売という見目麗しいお姫様が、いきなり突かれてしまいます。その丹塗矢に」

桂

「……なんか、とんでもない話だね」

葛

「くわしく話せばもっととんでもないんですけど、それは省略しますね。爽やかな朝ですから」

桂

「……爽やかな朝だから？」

葛

「だからです。それで、お姫様がその矢を持って帰って床に置くと、床に置いた矢は見目麗しい男の人に成りました」

葛

「やがてふたりの間には子供が生まれるのでした。めでたし、めでたし」

桂

「……めでたしなの？」

葛

「一番最初に、お姫様を見初めた神様が丹塗矢に化けたって書いてありますからね」

桂

「神様だったの？」

だとすると最初にお姫様を突いた矢は、刺した相手を恋に落とすキューピッドの矢のようなものなのかもしれない。

だからって神様、自分のために使っちゃ駄目でしょう。

桂

「うーん、御伽噺の王子様に比べると、何だか微妙な感じだなあ……」

ときめかないというか、ロマン不足というか。

桂

「だけど、今の話のどこが、昨夜のことと関係があるの？」

葛

「その丹塗矢の神様、三輪山の大神主という神様なんですけど、これが蛇神様なんです」

桂

「蛇——？」

葛

「似てませんか？」

桂

「似てる……かもしれない」

赤い矢に化けた蛇の神様に突かれるお姫様。

赤い蛇に襲われるわたし。

葛

「おねーさんが寝ぼけていたんじゃないんなら、ここの地元の蛇神様に見初められたのかもしれないですね」

サクヤ

「……………」

葛

「……どうかしましたか？」

サクヤ

「ああ、まだ桂は嫁にはやらないよってね」

桂

「そうだよ。それに助けに来てくれた尾花ちゃんの方が王子様っぽかったよ」

白いタイトじゃないけれど、王子様の基本色はやっぱり白でしょう。これが本当の『王子の狐』——とか何とか。

桂

「あはは、尾花ちゃんがかっこいい男の子に化けてくれるなら、考えてあげてもいいかな」

尾花ちゃんを撫でようとする、ふいっとお尻を向けられてしまった。

その反動なのか、ふさふさの尻尾が埃を払うかのような動きでわたしの前を過ぎる。

桂

「あ……………」

ううっ、軽い冗談のつもりだったのに……………」

山へ撮影に出かけたサクヤさんが戻ったのは、お昼を少し回ってのことだった。

桂・葛

「おかえりなさい」

サクヤ

「あんたら、昼食はもう食べたのかい？」

桂

「ううん、まだだよ。サクヤさんお弁当とか持っていかなかったから、戻ってくると思って」

サクヤ

「それは遅くなって悪かったね」

桂

「別にいいよ。それより、いい写真撮れた？」

サクヤ

「いや、さっぱり。やっぱり朝にちゃんとしたものを食べないと駄目だね」

葛

「そーゆーものですか？ わたしはもう何日もあんな感じですけど」

サクヤ

「あんたはこれからが勝負だろう。そんな食生活でどうするんだい」

葛

「駄目ですか」

サクヤ

「少なくとも、あたしほど大きくはなれないね」

葛

「たはは……」

桂

「……………」

わたしお母さん似だし、食べたからってあんなになるとは限らないんだよね。

ううん、むしろ別のところにお肉ついて、すごいことになっちゃうかも……

サクヤ

「……桂？」

桂

「なになっ、何も考えてませんよ!？」

サクヤ・葛

「じいっ……」

桂

「だから別に、何もね」

葛

「桂おねーさん諦めましょう。世の中に平等なんて言葉は存在しないんですよ」

ふっとニヒルに肩をすくめて、かぶりを振る葛ちゃん。

葛

「サクヤさんが規格外なんですから、比べて世を儂んだりはしないでください。おねーさんだって、大平原じゃあないんですから」

桂

「だ、大平原って……」

葛

「わたしはおねーさんの普通っぽいところ好きですよ。なんか安心できますし」

サクヤ

「そうそう、下手に出てても大変なだけだよ。出る杭は打たれやすいものだからね」

葛

「人並み以上ということは、人とは違うということですから、何かと苦勞が絶えないんですよね」

サクヤ

「何事も普通が一番さ。出来ることなら、あたしも十人並みになりたいよ」

葛

「ですねー。わたしも同意しますよ」

ふたりの意見に賛同できないわたしは、やっぱり持たざるものらしい。

この中では仲間はずれだった。

……ああ、なるほど。仲間はずれなんだ。

何かと周りと合わないひとは、こういった疎外感を抱くことが、まもあるわけだ。

サクヤ

「さて、桂のせいで話がそれたけど」

葛

「それましたねー」

桂

「えー!？」

わたしのせいなの!？」

サクヤ

「そういうわけで、今からちゃんとした昼食を食べに行くよ。おっと、その前に風呂だね、風呂」

桂

「いいね、お風呂。わたしも賛成」

昨日は入れなかったから、入れるチャンスは逃したくない。

葛

「えーと……もしかして、町に行くんですか？」

サクヤ

「もしかしても何も、町まで行かなきゃ店もないじゃないか」

葛

「涼しいですねー」

桂

「ふいー、天国気分だねー」

わたしたちはエアコンの効いた旅館のロビーで、くつろいでいた。

どうしてわたしたちが旅館にいるのかというと、ここには立派な露天温泉があって、昼の間は宿泊客以外でも利用できるからだ。

訪れる旅行者の少なさゆえに、地元の人を収入源として取り込むために始めたサービスではないかとは、ルポライター・浅間サクヤ女史の分析。

女将

「いかがでしたか。さかき旅館自慢の温泉は」

桂

「あ、女将さん。とってもいいお湯でした。連れなんかまだ入ってるんですよ」

わたしたちはサクヤさん待ち状態だったりする。

桂

「ところで、ここに来る途中で思ったんですけど、今日は昨日より人通りが多いですね。何かあるんですか？」

女将

「あら、ご存知ありませんでしたか。明後日にお祭りがあるんですよ。それも今年は特別で」

桂

「特別なんですか？」

女将

「お祭りを取り仕切っていたお家があったんだけど、ずいぶんと前にその人たちがいなくなってしまったのね」

女将

「それで、ここのところ形ばかりのお祭りが続いていたの」

女将

「迷信だと思うんだけど、それからすっかりここも寂れてしまって……」

桂

「はあ、ちゃんとしたお祭りができなかつたせいですか？」

女将

「迷信よ迷信。でも商売していると験はかついでおきたいものでしょ？」

女将さんも苦労してるんだなと思った。

桂

「それで、お祭りってどんなお祭りなんですか？」

女将

「それなんだけどね、オハシラサマっていう神様を祭ってること以外、詳しいことはよくわかってないのよ」

桂

「オハシラサマ？」

——

「大層綺麗な娘さんだったらしいよ。ちょうどお嬢さんみたいな感じだったんじゃないかな」

桂

「あ……駅員さん」

駅員

「こんにちは。経観塚の暮らしはいかがかな」

女将

「あら、まだ勤務時間じゃないですか」

駅員

「越境通勤者が来る朝と夜以外は暇なんだよ」

駅員

「留守番を置いてきたから大丈夫さ。私は国際化社会を担う一員として、少々スペインの生活習慣を体験してみようかと思ってね」

桂

「スペインですか？」

駅員

「うん。あとで少し部屋を貸してもらおうよ」

女将

「構いませんけど、今日は変なことはしないでくださいよ」

駅員

「大丈夫、安心しなさい——と」

駅員

「さて、オハシラサマのことだったね」

駅員

「昔むかしの経観塚には蛇の神様が住んでいてね。その神様から求婚された娘さんが、オハシラサマだって話だったと思うよ」

葛

「桂おねーさん、蛇神の求婚ですよ」

葛ちゃんが、わたしの腕をくいと引いた。

蛇神の求婚といえば今朝、葛ちゃんから丹塗矢の話をしてもらったばかりだった。

葛

「気になりませんか？」

桂

「気になる。かなり」

サクヤさんは寝ぼけて夢でも見たんじゃないかと言うけれど、わたしは本当にあったことだと信じている。

昨夜は運良く、夢の中のあの人と尾花ちゃんが助けてくれたけど、もし次があった場合どうなるかはわからない。

敵を知り己を知れば百戦危うからず。訊くだけならただだし、もしかしたら弱点なんかも伝わっているかもしれない。

桂

「その話、もうちょっと詳しくわかりませんか？その蛇の神様についてとか」

駅員

「さて——どうだったかな」

しばし考え込んでいた駅員さんが、ぽんと手を打った。

桂

「何かわかりましたか？」

駅員

「私は知らないんだけどね。詳しくわかりそうなところならあったなあと」

女将

「もしかして、郷土資料館ですか？」

駅員

「うん。確かここにも観光者用にチラシを置いていただろう」

駅員

「そのチラシに地図も載っているから、興味があるなら行ってみるといいよ」

女将

「でも、あそこは……」

心配顔を浮かべて言いよどむ女将さん。そんな態度を取られると、小心者のわたしは、何だか心配になってくる。

桂

「……何かあるんですか？」

ごくりとつばを飲み込んで、おそるおそる訊ねる。

女将

「その郷土資料館にね、泥棒が入ったそうなのよ」

桂

「泥棒……ですか」

駅員

「一昨日の夜から昨日の朝方にかけて——だったかな。展示物が一点盗まれただけだし、何も心配することはないよ」

桂

「そうですね。犯人だって、とっくに逃げちゃってますから、別に危ないことはありませんよね」

女将

「でもねえ、最近は本当に物騒だし……」

駅員

「……ふむ」

駅員

「お嬢さん方、このあたりは都会に比べると明かりが少ないから、夜道は気をつけて歩きなさい」

桂

「ありがとうございます」

葛

「あ、桂おねーさん、サクヤさんが上がってきましたよ」

サクヤ

「いやー、いい湯だったよ」

女将

「ありがとうございます。これからもご贔屓に」

サクヤ

「ええ、また使わせてもらいます」

サクヤ

「さて、そろそろあたしの腹は限界だよ。早いところ昼を食べにいこうか」

桂

「もうっ、サクヤさんが長湯したんだよ」

サクヤ

「はいはい、そうだったね」

桂

「それじゃあ女将さんに駅員さん、色々ありがとうございました」

駅員さんお奨めの定食屋さんで、サクヤさんはご満悦。

椅子の背もたれに踏ん反り返って、たっぷりとごはんを詰め込んだ剥き出しのお腹を叩く。

サクヤ

「やっぱり飯はこうでなくっちゃねえ。胃の腑の奥から力がみなぎってくるよ」
確かに久しぶりの(?) 温かいごはんは、お腹に入ったときの満足感がちがった。

サクヤ

「葛も満足したかい？」

葛

「ちゃんとしっかり食べました」

サクヤ

「さて、せっかく町まで出てきたんだし、この後寄りたいところはあるかい？」

葛

「そーですねー。おねーさん、どうしましょう」

桂

「どうって、何が」

葛

「郷土資料館、行ってみます？」

桂

「そうだね。やっぱり気になるし、せっかくだから行ってみようか」

サクヤ

「郷土資料館だって？」

桂

「うん、ここ」

旅館の女将さんに渡された、三ッ折りのリーフレットを取り出して見せる。

サクヤ

「入館料は大人二百円、子供百円、三十名以上の団体客は半額——なんだい、ぼったくりだねえ」

桂

「そんなに高くはないと思うけど……」

サクヤ

「高い安いの問題じゃないんだよ」

葛

「わざわざお金を払って見に行く所ではないと、そーおっしやりたいわけですね」

桂

「じゃあ、サクヤさんは一緒に来る気ないの？」

サクヤ

「そうだねえ、あたしは遠慮しとくよ」

サクヤ

「で、行きは建物の前まで乗せるけど、あんたら帰りはどうするんだい？」

桂

「んー、バスかな。ほら、ここ見て」

リーフレットの表紙にあたる部分に開館時間が書いてある。夕方の五時には閉まってしまっているので、最終バスには十分間に合う。

サクヤ

「携帯に連絡してくれれば、迎えに来てもいいけどさ？」

桂

「んー、お見送りして一時間待ちのときは考えるかもしれないけど、別にいいよ」

桂

「それより、早くいかないと閉まっちゃう」

わたしたちはお昼ごはんを食べ終えたばかりだけれど、世間様での標準時間では三時のおやつ時間だった。

サクヤ

「あと二時間もあるじゃないか」

いや、わたしだって一巡あたり二時間かかるような充実施設を期待してるわけじゃないけどね。

確かに、もしかしたら関係ある話なのかもしれないけれど。

桂

「あんまり気にしないことにしようよ」

葛

「そうですか？」

桂

「うん。だって昨夜のも本当に神様なら、どうしようもなかったと思うんだ」

葛

「……確かに、尾花程度でどうにかされてしまうようでは、そんなに怖い神様ではないで

すねえ」

と、そのとき。サクヤさんがようやく上がってきた。

桂

「うーん……」

と、綺麗に空になったお膳を目にして、ふと思いつくことがあった。

桂

「別にそこまでしなくても……」

葛

「そうですか？」

桂

「うん。そこまで興味があるわけじゃないしね」

桂

「ところでサクヤさん。今日の晩ごはんはどうしようか」

サクヤ

「あんたねえ、今たらふく詰め込んだばかりで、もう夕食の心配かい？」

サクヤ

「今の世の中、四六時中獲物を探さなくても、食いっぱぐれやしないんだから、そんなに慌てることはないよ」

桂

「わたし別に慌ててないよ。それにたぶん、わたしも葛ちゃんも栄養調整食品で我慢できると思うから、別にこのまま帰ってもいいんだけど……」

サクヤ

「む……」

サクヤさんはお腹に手を当てて、その中に入って、すでに消化されかかっているものを愛しげに撫でながら言う。

サクヤ

「そうさねえ、これだけのものを食べた後だけに、貧相な食事には我慢ならないねえ……」

サクヤ

「よし、今晚はあたしが腕を振るうことにするよ」

桂

「えっ!？」

わたしが身体を後ろに引くと、座った椅子が弾みで鳴った。

サクヤ

「なんだ一体、その反応は」

桂

「だって、サクヤさんお料理できるの？ わたし今まで見たことないよ？」

サクヤ

「見せる機会がなかっただけだよ。あんたのところに遊びに行っても、真弓が全部やっちまうから出番なしさ」

桂

「だって、お母さんお料理上手だったもん」

サクヤ

「フッ、その真弓に料理を叩き込んだのは、笑子さんとこのあたしだよ」

桂

「ええっ!？」

お祖母ちゃんはともかく、サクヤさんが――

サクヤ

「桂～」

がっくり疲れた情けない声が、あっけにとられていたわたしを引き戻す。

桂

「だって、サクヤさん外でお仕事する人だから、家事とかやってる暇なさそうだなって……」

葛

「そんなイメージありますねー」

普段は家にいないことも多いけど、困ったときには頼りになる一家の大黒柱。休みの日にはゴロゴロしていて、家事は全部お母さん任せ。

そんなお父さんのイメージを、わたしは勝手に投影していたのかもしれない。

桂

「ううっ、ごめんなさい……」

サクヤ

「いいよ別に。いわゆる家庭的なタイプに見られないのには慣れてるからね」

サクヤ

「……昔バレンタインにね、得意先の編集部で手作りチョコを配ったことがあるんだよ。もちろん、義理って箱書きのあるヤツをね」

桂

「うん」

サクヤ

「ありがたがられるどころか、むしろ不気味がられたよ」

桂

「……………」

葛

「たはは、それは悲惨ですねえ……」

葛

「ところでサクヤさん。あの家、電気と水道は通りましたが、ガスは駄目なんです。それでも料理ってできるものなんですか？」

桂

「あ、それならたぶん大丈夫。サクヤさんの車に携帯コンロが積んであるよ。ね？」

サクヤ

「使わないよ、勿体ない」

桂

「でも、それじゃあどうするの？」

お母さんのお師匠様なら、お豆腐を切って冷や奴——なんていうことはしないと思うけど。

サクヤ

「とりあえず、帰ったら山で薪集めだねえ」

桂

「薪？」

サクヤ

「屋敷には釜戸があるだろう。昔はみんなあれで料理をしてたんだよ」

桂

「……わ、薪と釜戸なんてずいぶんとレトロ」

葛

「まあ、レトロなお宅ですからねえ」

桂

「でも、ちょっと出来ない体験だよ。何だか楽しそう」

竹の筒でぷーぷー一息を吹き込んだりするのかと思うと、重労働なんだろうとわかっているけど、無性にわくわくしてきたりする。

それにサクヤさんはアウトドア慣れしてる人だけに、いそいそとお料理する姿よりはそういう姿の方が想像しやすく安心できる。

葛

「そーゆーことでしたらサクヤさん。わたしは尾花とバスで先に帰宅して、薪を集めておきますですよ」

サクヤ

「いいのかい？」

葛

「早め早めに探しておかないと、その辺の生木を燃やすことになってしまいますし、尾花は食料品を扱ってるお店には連れて入れませんから」

桂

「なるほどね。それに尾花ちゃんのこと、放ったらかし気味だったもんね」

葛

「たはは……それもあります」

葛

「それに、先に薪を集めておけば、サクヤさんの帰宅と同時にでも調理が始められるという、完璧な段取りと相成るわけなのですよ、はい」

サクヤ

「よし。それじゃあ薪の方は任せたよ」

葛

「了解であります。そのかわり美味しいごはんを期待いたしますですよ」

サクヤ

「ああ、せいぜい期待しときな」

期待以上のものを作る自身があるのか、はては今まででの自信はすべて根拠のないはったりなのか――

わざとだらうけど、不安を煽ってくれるセリフを言い放って、サクヤさんはニンマリと笑う。

サクヤ

「で、桂はどうするんだい？」

桂

「……葛ちゃんは塩辛いのが平気な方？」

葛

「はい？ 塩辛いのですか？」

桂

「とりあえずお酒のおつまみぐらいの濃さを基準に考えてみて。あと、お茶漬けにして丁度ぐらいのカチカチの鮭の塩漬けとか」

葛

「……好き嫌いはありませんし、おかずのうち一品ならぜんぜん問題ありませんけど……」

桂

「全部」

葛

「それは駄目です、さすがに。第一、健康に良くありませんよー」

桂

「そうなんだけど、サクヤさんって塩辛いの好きだから。じゃあ、わたしも食材調達の方に加わることにするね」

葛

「くれぐれもよろしくお願いします」

サクヤ

「……あんたらねえ、そんな目であたしのこと見てるわけかい？」

桂

「薪拾いの方が大変そうだから、葛ちゃんと一緒に行くよ。車なんだし、サクヤさんひとりで荷物持てるよね」

サクヤ

「ああ、問題は何もないね。桂がいてもいなくても、こっちはあんまり変わらないよ」

サクヤ

「それじゃあ、こっちも速攻で買い物すませて車飛ばすとするかね。もしかしたらあんたらの乗ったバス、追い抜かしちまうかもしれないね」

葛

「そーゆー可能性があることも否定しませんが、そーなったところで何か問題が生じるわけではありませんし」

桂

「そうだよ、そんなに慌てなくてもいいから、買い忘れとかないようにしてね」

サクヤ

「買い忘れね。そんなもん、メニューが決まらないことには何買うかは決まらないんだけど、あんたら何が食べたいんだい？」

わたしと葛ちゃんは顔を見合わせた。

桂・葛

「美味しいものー」

サクヤ

「……あんたらね」

トラップを踏んでバスから降りると、それほど大した距離は移動していないのに、微妙に空気が違っていた。

葛

「やっぱり家が一番ですー」

遠ざかっていくバスを見送りながら、うんと背伸びをする葛ちゃん。

バスの中では剥製のようじとしていた尾花ちゃんも、四本脚を突っ張って体を伸ばしている。

葛

「にしても、バスに駆け込めて良かったです」

桂

「ほんとだね。このバスに乗れなかったら、絶対にサクヤさんの方が先に着いてたところだよ」

葛

「ふふふ、そのときはタクシーを使うことも考えましたですよ、わたしは」

桂

「うわー。でも、それはお金が勿体ないよ。電話してサクヤさんと合流するべきだと思うな」

葛

「でも、それはそれで負けた気がしません？」

桂

「負けでも何でもいいじゃない。誰も不幸せじゃなかったらそれで良しとしなくちゃ」

桂

「でも、せっかく待ち時間なしで帰ってこれたんだから、ぱっと準備して薪拾いに出かけようか」

贅沢に土地を使った二階止まりの平べったい建物は、まだ比較的新しい綺麗な建物だった。

屋上からの垂れ幕には「経観塚の歴史と文化」と書かれている。

サクヤ

「へー、なかなか立派な建物じゃないか」

桂

「そうだね。二百円分はありそうだよ。やっぱりサクヤさんも一緒に見学しない？」

葛

「駐車場は無料ですよ？」

サクヤ

「タダっていても、土地余りのこの辺じゃありがたみが感じられないねえ」

葛

「ですねー。道路の真ん中とか商店の入り口前にでも止めない限り、そーそー文句の出そーうにない土地柄ですからねー」

桂

「それじゃあサクヤさん、行ってくるね」

葛

「尾花をよろしくお願ひします。今日は詰め込み用のリュックを持ってきてませんし、さすがに真夏に襟巻きのフリはないですから」

サクヤ

「わかったよ。帰りは気をつけるんだよ」

桂

「わ、中も見事な閑古鳥」

葛

「本当に施設の無駄遣いしてますねー」

入り口から展示ブースに到るまでに出会った人はわずか一名。百円玉を二枚手渡した、受け付けの人だけだった。

葛

「桂おねーさん。半額の入館料でここに入った人は、果たして存在するんでしょーか？」

桂

「うーん、一般のお客さんはいなさそうだけど、学校の社会科見学とかなら……」

葛

「ですけど過疎地域の学校は、全学年併せても三十名に満たなかったりしますよ？」

桂

「さすがにそこまで過疎化してないと思うよ。コンビニもハッキンビーフもあるんだし……」

フランチャイズのコンビニはともかく、数をこなしてこそそのファーストフードのチェーン店が採算の取れない地域に支店を立てるとは思えない。

桂

「……さて」

入り口でもらった案内パンフレットを開いて、目的の展示品を探し出す。

桂

「ふひゃっ！」

横から覗き込んでいた葛ちゃんに寄りかかられた。

葛

「ごめんなさいです、桂おねーさん。ちょっとバランスを崩しまして」

桂

「あ、ごめんね。背伸びしないと見えないか」

葛

「たはは、自分のパンフレットを見ればいいだけの話でしたね」
慌てて、そそくさと離れる。

葛

「あ、おねーさん、蛇神様の話についてはこっちみたいですよ」

桂

「葛ちゃん、ちょっと待ってよー」

その昔、経観塚の長者の家に娘がいた。

よい年頃の、美しく気立てのよい娘であった。
娘の噂は近隣に知れわたり、多くの若者が求婚した。
ところが娘は誰にも良い応えを返すことはなかった。
都の貴人の求婚にも良い応えを返すことはなかった。

そして最後には山の神が降りてきて言った。
「娘よ、お前は天つ神に騙し討たれ、奪われた我が祖の花嫁の血を引くものだ。私の所へ来るがよい」
山の神は人間をさらっては喰らう恐ろしい神であった。

長者は都に使いをやり、鬼退治の武者を呼び寄せた。
武者は必死で戦ったものの、山の神にはかなわなかった。

そしていよいよ山の神が村へやってくるにいたり、娘は幾人かの行者を連れてきた。
行者らは山の神と同じく人ではなかった。一行を率いる行者の額には小さな角が生えていた。
そして他の行者らは、空に浮かぶ満月を見上げるとその姿を獣のものへと変え、山の神に挑みかかった。

折りしも満月の夜だった。ゆえにその行者らは観月という。
山の神は鏡のように目を光らせ、八色の雷を操り天を震わせて戦ったのだが、ついには力尽きて地に塗れた。
こうして山の神は退治されたが、山の神の呼んだ雷は鳴り続けた。
行者らは塚を作り、山の神を篤く祭った。
すると雷はびたりとやんだ。
そのときから娘の姿が見えなくなったが、観月の行者らが連れて行ったのだと言われている。
この塚に由来し、この地は経観塚と呼ばれるようになった。
やがて塚には槐の木が育ち、やがて月まで届くほどになった。
この木は御柱様と呼ばれ、塚に代わって祭られるようになった。

桂
「へー」
男の子が喜びそうな、血湧き肉躍るような昔話だった。

桂
「……でも、蛇の神様だなんて一言も書いてないよ？　もしかして駅員さんの記憶違い？」

葛
「いえいえ、この話では蛇神と書かれていないだけでしょう。山の神様で雷まで使っていますから蛇神様ですよ。たぶん」

桂

「そうなの？」

葛

「そういうものなんですよ。丹塗矢の大物主だって三輪山の神様ですからね」

葛

「昔から綺麗な三角錐の山は神奈備山と呼ばれて信仰の対象となっていたんですけどね、これはとぐろを巻いた蛇の形に似ているからなんですよ」

桂

「そういえば『山の主とか言うてウワバミが住んでいる。蛇の大きいやっちなあ』って、『蛇含草』でも言ってるね」

『蛇含草』はお餅を食べすぎて苦しくなった人が、蛇が人間を丸含みにしたときに舐めるという草を食べてしまってあら大変、という落語の一題。

良く効く消化薬だと思って食べた草は、人間を溶かす草だったので、男の人の形をした餅だけが残った——というオチ。

ちなみに『そば清』というおそば版もある、割とポピュラーな咄だったりする。

葛

「ところでおねーさん。わたしたちの身近には、三角錐の山よりも似ている信仰の対象があるんですけど、何だかご存知ですか？」

桂

「えー」

頭の中で木魚の音を鳴らしつつ考えても、それらしいものはちっとも浮かんでこない。

桂

「……ヒント」

葛

「食べられるものです」

桂

「食べられるもので、蛇に似ているもの？」

余計にわからなくなったような気がする。

桂

「ヒントそのに一」

葛

「蛇の古語を『カカ』とか『カガ』と言いまして——おねーさんはアカカガチとか聞いたことありません？」

桂

「蛇……だよな？」

葛

「はい」

桂

「『カガ』がつく食べ物……？」

葛

「それでは最後のヒントです。さっきおね一さんがひきあいに出してきた『蛇含草』」

桂

「え？ 『蛇含草』に出てくるの？」

葛

「これ以上言ったら、ヒントではなくなってしまうですよ」

桂

「むむっ……」

『蛇含草』に出てくる食べ物といえばお餅だ。それをヒントそのものの『カガ』と合わせると。

頭の中に浮かんだのは、大きさの違う平べったいお餅を二段重ねて、その上にみかんを載せたもの。

桂

「……鏡餅？」

葛

「そーです。ちゃんと段々になっていて、とぐろを巻いた形に似ていませんか？」

桂

「言われてみれば、そんな気も……」

一応お正月の縁起ものだから、信仰の対象と言えはそうなのかもしれないけど。

桂

「だけど、鏡餅の鏡は、ミラーの鏡なんじゃ——」

そりゃあ、鏡餅のどこが鏡なんだって聞かれたら困るけど——そんなばかな。

詰まってしまった言葉の先を察したのか「それは違うよ、ワトソンくん」と、ぴっと立てた人差し指を左右に振る葛ちゃん。

葛

「その鏡こそが曲者なんです。いわゆる金属製の鏡はもともと舶来品ですからね」
だから鏡という物を指し示すのに、大和言葉の『かがみ』が当てはめられるには、鏡に類似した何かがなくはないのだと言う。

葛

「それはですね、『カガメ』——つまりは蛇の目だという説があるんですよ」

桂

「蛇の目？」

葛

「です。目は見ているものの姿を映しますよね」
背伸びしてずいっと顔を近づけてくる葛ちゃん。その大きな瞳にわたしの顔が映っている。

葛

「鏡登場以前の日本では、ものを映すものなんてそうそうないですよ」
例えばピカピカに磨いた石。
例えば湖などの水。
例えば瞳。

葛

「それらはすべて霊妙不可思議なものとされています。いわば聖地であったり祭器であったりするんですね」
ものの形を映し出すものは不思議なもの。つい百数十年ほど前だって「写真に写ると魂を抜かれる」なんて噂が世間を席卷したぐらい。

桂

「あ、世間を席卷……」

葛

「おねーさん、何か面白いことでも？」

桂

「え！？ 何でもないから続けて、続けて」
しまった。変なことは考えないで、講義に集中することにしよう。

葛

「三種の神器の筆頭は鏡です。なにせ太陽神・天照大御神の現身そのものなんですから」

キラキラ光る太陽と、ピカピカ光る鏡。

葛

「ちなみにその弟である月読命は名前の通り月の神様なんですけど、月には天鏡や金鏡など、鏡をなぞらえた別名がたくさんつけられています」

月は太陽の光を反射する鏡。

葛

「そして、鏡と関連付けされるその二柱の神様はですね、どちらも国生みの父神である伊邪那岐命の目から生まれているんですよ」

桂

「目から生まれる鏡……」

葛

「はい。天照は左の目から。月読は右の目から」
そこまで言うなら、とりあえずそれは良しとしよう。鏡の「み」の字は「め」から転じたもの。

桂

「でも……なんで蛇なの？」
人間の目では駄目だったのだろうか。

葛

「何でと言われても、あくまで一説ですからこうだとは断言できないんですけど。蛇はもともと崇め恐れられていた古い神様ですし——」

葛ちゃんの瞳が、じっとわたしを映している。

葛

「何より蛇は、まばたきをしませんからね」

桂

「ああ——」
なるほど、と思った。
そういえば干支の蛇も『み』なんだっけ。

そして気付くと、わたしたちは話の内容に導かれるように、古い鏡の展示スペースにまで来ていた。

桂

「あれ？ あそこのショーケースの中、からっぽだね」

おそらくは展示の目玉となるはずの、真ん中にあるケースの中には何も入っていない。
もしかしたら、米粒大の小さなものが大げさに飾られているのかも——と近づいてみると、張り紙がしてあった。

『盗難にあいました。まことに申し訳ありませんが展示することができません』

葛

「なるほど、これがそーなんですかー」

桂

「へー、当時の技術では最高級にあたる鏡で、良月って名前まで付いてるんだって」

葛

「良月……ですか？」

桂

「どうしたの、変な顔して。鏡と月は関係あるんだって教えてくれたのは葛ちゃんだよ？」

葛

「いえいえ、別に何でもないので……」

何でもないと言いつつも、うーんと考え込んでいる。

何でも知ってる葛ちゃんだけに、聞き覚えのある名前なのかもしれなかった。知っているはずのことを思い出せないのは、気持ちが悪い。

その良月は、六三二年に帰ってきた最初の遣唐使によって日本に持ち込まれたものなのだそう。

先ほど受けた葛ちゃんの講義通り、鏡は祭器でもあるので、この良月は当時神職にあった中臣氏に譲渡されたものなのだそう。

葛

「六三二年というと舒明四年、旻が帰って来た年ですね。後につながりありますし、鏡を渡したのは旻本人かもしれません」

桂

「旻って誰？」

葛

「この辺は普通に日本史の試験に出てませんか？旻は後におこる大化の改新の主要人物のひとりですよ」

桂

「ああ、中臣氏って中臣鎌足さんのこと？ だったら旻法師は高向玄理と国博士になる人……でいいんだっけ？」

葛

「よくできました。ちなみに平安時代の貴族生活に半端じゃない影響を及ぼした、陰陽五行を直接日本に伝えた人物でもあります」

葛

「それに鎌足は六韜にも通じていたそうですから、それも鏡と一緒に渡したのかもしれないねー」

六韜とは六篇からなる中国の兵法書で、有名な軍師や武将のほとんどが学んでいるという大ベストセラー。

その六篇うち一篇の虎韜が、俗にいう虎の巻の語源なのだとのこと。

桂

「だけど鎌足さんって神社の人だったの？」

葛

「武神・武御雷神を祭る鹿島神宮ゆかりの一族ですね」

あまりぴんとこないけれど、武神ということは豪族なんかにも崇められていたんだろう——と、ここで役立つわたしの時代劇好き。

桂

「あ、そういえば剣豪・塚原ト伝は鹿島新当流の使い手だっけ。もしかして関係ある？」

葛

「あるも何も、鹿島神宮の神職の家の生まれですから。ちなみに武御雷神は——」

葛

「と、ちょっと失礼しますです、はい」

桂

「あれ？ 葛ちゃん？」

葛

「すぐに戻ってきますから……」

声をひそめて、小走りに部屋から飛び出していく。

あんなに慌てて……

ああ、なるほどそうか。わたしはまだ大丈夫だけど、人間生理現象だけはどうにもならない。

向こうに他のお客さんも見えるし、急に小声になるのも領ける。

ちょっと失礼かもしれないけど、わたしたち以外にお客さんがいたことは、少し意外だった。

ちなみにそのお客さんは、ここの職員さんらしき人に何かを訊ねている。あんなに熱心な郷土史ファンがいるなら、ここも安泰かも——

——って、あれ？

確かあの人は、わたしが経観塚に来た夜に、同じ電車に乗っていた人だ。

葛ちゃんはまだ帰ってこない。

わたし自身、あまりこういった所に馴染みのある方じゃないし、肝心の展示品がない場所に突っ立っていても仕方がない。

つまりわたしは暇をしていた。

桂

「ん〜……」

別に盗み聞きをしようと思ったわけじゃないけど、展示物を見て歩くと向こうに近づくことになるんだからしかたがない。

……ごめんなさい、嘘を吐きました。単なる興味本位で、話が聞こえればいいと思って近づいています。

だって、暇なんだもん。

壁沿いに続く陳列ケースの中に目を向けながらも、神経は背中と耳に集中している。

そろそろ近づいていくと、ふたりの声が段々と聞き取れるようになってきた。

制服の少女

「……鹿之川さんは、こちらによく顔を出していたのですね」

学芸員

「ええ。教鞭を執る傍ら、民話や伝承の比較研究をなさっていた方で、その関係でこちらにもよくお見えになっていたんです」

学芸員

「ですから、割れたガラスから指紋が発見されたからと言って、一概には……」

制服の少女

「ですが職員ではない彼の指紋が、ケースの内側についているという状況は、そうであるとは考えられないでしょう」

学芸員

「……残念ですがそうですね。それに、このところの執心ぶりは異常でした。毎日通いつめていました」

どうやらふたりは、あの良月という鏡の盗難事件についての話をしているらしい。

とはいえ、学生服を着ているあの女性はどうしてそんなことまで知っているんだろう。

もしかして学生刑事だったり、探偵だったりするのだろうか？

まるでマンガの設定だけど、すでに赤い蛇に襲われたところを幽霊と狐に助けられていたりするのだから、この程度は今更だった。

思わず止まっていた脚を速めて、さらに近づくわたし。

制服の少女

「鹿之川さんは以前から問題の鏡に関心——というか異様な執着を持っていたんですか？」

学芸員

「おそらくはここ一週間ほどですね。最初はごく常識的に、世話話のついでの冗談程度の

口ぶりで、譲って欲しいと言ってきたんですがね……」

大きなため息混じりに言葉を区切ると、そこで声をひそめて訊ねる。

学芸員

「……彼は、鹿之川さんは、呪いの鏡に魅入られてしまったんでしょうか？」

呪いの……鏡？

学芸員

「噂は本当——かもしれませ——何せ長者の——」

……あれ？

何だか急に気分が……

学芸員

「おそらくは——ただの赤錆——」

何だろう、この妙なわだかまりは。

学芸員

「——不気味な話——今朝見つけた——血の一滴も——」

全身を駆け巡る血が、頭の中の何かにひっかかるたびに、ザザザッ、ザザザザッとノイズが走る。やすり掛けされたような、赤い痛みが走る。

途切れ途切れに聞こえる言葉の流れが、冷たい渦となって、ノイズだらけの頭の中をかき乱す。

そのたびに細かな何かが、わたしの弱く柔らかい部分に刺さる。

学芸員

「館長は——働いた——良心の呵責に——重度のノイローゼだかが——で——したんじや——ます——どね——」

段々言葉はバラバラに分解されていき、細かに砕かれ、最後にはノイズと変わらなくなり——

学芸員

「——」

赤く光る蛇の目。

鏡のように光る蛇の目。

眼底を灼く赤に眩暈を感じる。

目の前にあるのはただ一面の赤。

ぐるぐると渦を巻いて世界が廻りだす。

桂

「あ……」

葛

「桂おねーさん！」

ふっと血の気が失せて倒れ込みそうになるわたしを、戻ってきた葛ちゃんが支えてくれた。

桂

「あ……葛ちゃん？」

学芸員

「お客様、大丈夫ですか？」

桂

「あ、はい、少し気分が悪くなっただけなので」

葛

「そういうことなら、お暇しましょうか。わたしたちの用事は済みましたしね」

桂

「う、うん……」

葛

「それではお騒がせしました」

葛ちゃんが、わたしに小さな肩を貸しながら、すたすたと歩き始めた。

学芸員

「あ、ちょっとお客様？ よろしかったらロビーの方で休んでいかれては——」

こんなところで会ったのも他生の縁——

かもしれないけど、わたしは郷土史ファンというわけではないので、会話に割り込んだところでちんぷんかんぷんだと思う。

葛ちゃんがいれば、何でも解説してくれそうだけど、その葛ちゃんも今は席を外している。

結局、出した結論は「知り合いでもないし、挨拶しなくてもいいや」といった、非常にひよったものだった。

桂

「……………」

それにしても、葛ちゃん遅いなあ……

ちらりと見ると、黒服黒髪の女の子と職員さんは真剣な顔をして話し込んでいる。ますます邪魔なんで出来ない雰囲気だった。

手近な展示物でも眺めていれば、時間は潰れてくれるんだろうけど、どうもそわそわして素通り状態だ。

こんなにそわそわして落ち着かないのはどうしてだろう？

……………

桂

「……わたしも行こうと」

そういうことだと結論付けて、わたしも葛ちゃんがいるはずの場所へ向かった。

葛

「おねーさん、体調もよろしくないよーですし、サクヤさんに迎えに来てもらいましょーか？」

桂

「ううん、もう大丈夫」

新鮮な外の空気で肺を満たすと、胸の奥でもやもやととぐろを巻いていた何かが出て行ったような気がする。もう、眩暈は感じられない。

桂

「体調っていうより、気分的な問題だと思うから。あの人たち、ちょっと気持ちの悪い話をしてて、それを小耳にはさんじゃったから」

いや、本当は自分から聞きにいったんだけど。

好奇心猫を殺すとはこれいかに。

葛

「それ、どんな話でした？」

桂

「え？」

葛

「あ、思い出したらぶり返すとか、そういうことならけっこうですけど」

桂

「ううん、話すよ。そういうことはなさそうだから」

問われた時点で、反射的に思い浮かべているわけで、気持ち悪くなるようならその時点で何かしらの不快感があってしかるべき。

それがないから、きっと大丈夫。

桂

「えっとね、あの盗まれた鏡……良月だっけ？ あれが呪いの鏡だっていう話してた」

桂

「あの鏡を伝えていた、このあたりの長者の子が親族殺しをしたせいで、世に出てくることになったいわくつきの——」

——あ、やっぱり気持ち悪さの渦の予感が。

葛

「おねーさん、ストップです。そのあたりの事情は、お一よそ予想が立ちますから十分です」

桂

「……うん」

大きなため息を吐き出すと、カメレオンの舌のおもちゃみたいに、ぐるぐるだったものが真っ直ぐに伸びていく。

まったく、最近のわたしはどうしてしまったんだろう。この程度の話なら、単に怖いと思うだけで済ませていられたはずなのに——

桂

「はあ……」

さらに大きなため息を吐くわたしの背中を、そっと叩く葛ちゃん。

葛

「まあ、千年以上昔の鏡ですから、何かしらのいわくぐらい付くものです。器物は百年経つと魂を持つと言われていたぐらいですし」

葛

「ましてや、かの中臣氏——すぐに藤原姓に変わりますけど——の持ち物ですからね」

葛

「権力の中心近くに据え置かれたりしたら、呪いのひとつやふたつも吐き出すようになりますよ。例えばそれが物でも人間でも」

桂

「……葛ちゃん？」

葛

「たはは、そんなわけですので、鏡の来歴云々についてはひとまず置いておくとしましよう」

葛

「それより呪いだなんて思われるよーな、何かが実際に起こったんでしょーか？」

桂

「うん、それがね、鏡を盗んだ容疑者だった人が遺体で発見されたんだって」

葛

「それはそれは。ですけどそれだけでしたら犯人は別人、もしくは共犯者に裏切られた、なんて仮説が登場して、呪いの出番はなくなりますよ？」

桂

「そうなんだけど、その人、身体の中の血がぜんぜん残ってない状態で発見されたんだって——」

まるで吸血鬼に吸い尽くされたみたいに。

葛

「なるほど、それで来ているわけですか……」

桂

「え？」

葛

「いえですね、ここに来る途中にパトカーを見かけるはずですねー、と」

桂

「……葛ちゃん。泥棒があったって聞いているんだから、それは今更だと思うよ」

葛

「しかしですよ、おねーさん。盗みと殺しでは五十歩百歩以上の違いがあると思うのですよ。それが猟奇犯罪ならさらに」

桂

「うん、それはそうだよ」

桂

「それで葛ちゃん」

葛

「なんでしょーか？」

桂

「この事件は呪いなの？ それとも誰かが不思議な事件に見せかけているの？」

葛

「それはですね、おねーさん」

桂

「うん……」

唾を飲み込み、葛ちゃんの託宣を待った。
そして葛ちゃんは厳かに言葉を紡いだ。

葛

「——わかりません」
あらら。

葛

「……にしても、気付かれてなければいいんですけど、心配ですねー」

というわけで、一足先に帰っていく葛ちゃんと尾花ちゃんを見送ったわたしとサクヤさんは連れ立って商店街を歩いていた。

桂

「それで、今晚は何を作るつもりなの？」

サクヤ

「さて、何を作ろうかねえ」

この商店街にはスーパーマーケットがないので、魚介類は鮮魚店、野菜果物は青果店と、複数の店舗をはしごして食材を買い求めることになる。

そのような前提から、献立を決めて購入リストを作らないことには、効率良く買い物することができない。

サクヤ

「桂、あんたリクエストとかあるかい？」

桂

「んー、やっぱりこういうときはカレーかな」

サクヤ

「あらまあ、何とも無難なところを。あたしの腕を信じてないね」

桂

「そんなことないけど……」

疑っているわけじゃなくて、キャンプや合宿の定番だから言ってみただけだし。

カレーライスが定番化している理由は、一度にたくさん量が作れて、なおかつ誰が作ってもそこそこ美味しく作れるからなんだよね。

サクヤ

「まあ、それでもいいけど——あたしは和食の方が得意だよ。あんた和食派だろ」

桂

「じゃあ、お味噌汁」

サクヤ

「はいはい、米と味噌」

桂

「おかずは何がいいかなあ。そういえば煮物とかは最近食べてないなあ」

サクヤ

「はいはい、煮物——」

桂

「ふわっ!？」

びたりとサクヤさんの脚が止まって、わたしは止まれず突っ込んだ。

頬に当たった背中が固い。筋肉の束がぎゅっと引き絞られている。

桂

「サクヤさん……?」

この緊張は、わたしがぶつかったからだけではない——

顔を上げて表情をうかがうと、先ほどまでの気楽さはなりをひそめている。

サクヤ

「タイミング良いんだか悪いんだか。まさかこんな所であいつに出くわすとはねえ……」

桂

「あいつ……?」

サクヤさんの足を止めた、その「あいつ」を探してわたしの目は流れ——

歩いているだけで人目を惹く、経観塚銀座通りの長閑な空気からはあからさまに浮いた人物に、わたしの目も留まった。

黒い服に身を包み、黒い髪を長く垂らした、すらりと姿の良い女性。

陽射しにあふれた外気にさらされているのは、顔と両手首より先の三箇所のみ。腕は長袖のブレザーに、脚は黒いストッキングに包まれている。

そんな暑苦しい格好をしているにもかかわらず、暑さなど微塵も感じていないような、涼やかな足取りでこちらに向かって歩いてくる。

距離が詰まるとはっきり見えた。

ああ、あの人だ……

わたしがこの経観塚の地を踏んでから、最初に出会った人。

わたしやサクヤさん——それから葛ちゃんと同様に、境界の外側からやってきた来訪者。

そして彼女は数歩分の距離を置いたところで歩みを止め、わたしを一瞥した後に、サクヤさんへと視線を据えた。

硬質なその瞳は、きらめく黒曜石というよりは磁鉄鉱。何か見えない力を放出しているような、うかがい知れない強さがあった。

桂

「サクヤさんの知り合い？」

サクヤ

「まあ、腐れ縁だね。手に長物持ってるだろう」

手には剣道部の子が持っているような（ただしそれよりは立派な）刀袋を持っている。

サクヤ

「見ての通りのおっかない女だよ」

桂

「おっかないっていうより、綺麗な人だと思うけど……」

確かに雰囲気がある人だけに、常人にはない迫力のようなものはあるけれど。

そうこうしているうちに、彼女はわたしたちの前までやってきて、立ち止まった。

制服の少女

「どうしてあなたがこんな所にいるんですか」

サクヤ

「こんなところって、ここはあたしの第二の故郷みたいなものだしねえ。本当の里には帰ったところで何も無いからね」

制服の少女

「……………」

制服の少女

「……私の邪魔をしに来たんですか」

サクヤ

「そんな暇なご身分じゃないよ」

桂

「あの一……………」

サクヤ

「ああ、紹介しとくよ。こいつが羽藤桂だ」

桂

「どうも、羽藤桂です」

ぺこりと頭を下げる。

制服の少女

「私は千羽鳥月。サクヤさんとは——」

千羽

「まあ腐れ縁ですね」

桂

「ぶっ……」

示し合わせたように同じことをいうものだから、失礼ながら笑ってしまった。

桂

「千羽さんは何をしに経観塚に？」

千羽

「家の所用といったところです」

桂

「そうなんですか。サクヤさんは写真のお仕事で来てるんですけど、本当にふたりとも縁があるんですね」

千羽

「……………」

サクヤ

「……………」

桂

「サクヤさんはうちに泊まってるんだけど、ええと……」

千羽

「羽様の屋敷ですか？」

桂

「わ、知ってるんですか？」

千羽

「有名ですからね」

桂

「それなら説明が省けて助かります。本当に何も無いところですけど、お暇が出来たら遊びに来てください」

手にもった買い物袋を少し持ち上げて見せる。

桂

「今日から自炊もするんですよ。ごはんぐらいはご馳走できますから」

サクヤ

「ちょっと、桂……」

桂

「いいでしょ、別に。サクヤさんの知り合いなんだし」

サクヤ

「まあ、あたしが言うのも何だけど、有事の際には番犬役ぐらい勤まる奴だけどね……」

桂

「よし、こんなもんかな」

両手いっぱい抱えていた薪を、お勝手から運び入れて下ろす。

サクヤ

「おっ、ご苦労さん。こっちもそろそろ火を使い始める頃合いだよ」

桂

「わ、サクヤさんよそ見、よそ見」

サクヤ

「このぐらい慣れればケガせず出来るようになるよ。あんたとはキャリアが違うんだから、心配しなさんなって」

包丁を持った手は淀みなく動きつづけている。自分で言うだけあって、手際はかなりいい。

サクヤ

「……あ、そうそう。買い物の途中で、腐れ縁の知り合いに出くわしたんだよ」

桂

「地元の人？」

サクヤ

「いいや。他所の人間だよ」

桂

「わ、それはすごく奇遇だね。もっと人の集まりそうなところでなら、バツタリ会う可能性もあるだろうけど」

サクヤ

「会いそうにない所で会ったから、嫌な予感がしないでもないんだけどね。押しかけてくるかもしれないから、それだけ言っとくよ」

桂

「こんな所でよければ部屋もたくさん余ってるし、わたしは別に構わないよ」

桂

「その人、どんな人？」

サクヤ

「千羽烏月っていう、頑固で融通のきかない奴だよ。あたしが言うのも何だけど、有事の際には番犬役ぐらいは勤まる奴さ」

桂

「……番犬？」

どんな人なんだろうと、思わず首をひねるわたしだった。

葛

「……サクヤさん、見直しました」

桂

「わたしも、わたしも」

サクヤ

「そりゃどーも」

サクヤさんお手製の晩ごはんを食べ終わる頃には、すでに結構な時間になっていた。

開け放した窓から入ってくる風は、日が落ちたせいか心なしか涼しい。

晩ごはんの食材のついでで買われてきた風鈴が、さっそく役に立ってくれているのかも。

桂

「平和だねー」

葛

「平和ですねー」

桂

「暇だねー」

葛

「暇ですねー」

ごろごろ畳の上を転がるのをやめて、上半身を持ち上げる。

桂

「それじゃあ、またゲームでもやる？」

サクヤ

「だけど、それは昨夜さんざんやったしねえ」

葛

「ですねえ。サクヤさんとは勝負つきませんし」

サクヤ

「何か賭けるんなら、あたしはいつでも勝負するけど、どうする？」

桂

「ぶるぶるぶる」

とんでもない——わたしは慌てて首を振った。

昨夜の勝負はわたしのひとり負けだったのだ。勝ち目のない（しかもする必要のない）勝負を挑むほど、わたしは無謀ではないつもりだ。

それから賭博行為は違法です。しつこいようですが念のため。

サクヤ

「うーん、とはいえ何かあるかねえ」

葛

「そうです。わたし、いいもの買ってきましたよ」

わたしと同様に転がっていた葛ちゃんが、ぱっと立ち上がって居間から出ていく。

桂

「尾花ちゃん、何だかわかる？」

いや、尾花ちゃんが知っていたとしても、それを理解する手段がわたしにはないんだけどね。

しばらくして、廊下を走る小気味良い足音とともに、葛ちゃんが帰ってくる。

葛

「じゃじゃーん、こんなこともあろうかと」

後ろ手に隠し持っていたものは、ビニール製の手提げかばんで、中には棒状・筒状のものがぎっしりと詰め込まれている。

桂

「……花火？」

葛

「しかもお徳用です」

値段がわからないので、本当にお得なのかどうかはわからないけど、確かにボリュームはたっぷりだった。

手に持つ花火がほとんどだけど、落下傘入りの打ち上げ花火や、木や棒に吊す変わり種の花火も少しずつ入っている。

葛

「やっぱり夏といえば花火だと思ったんですよ。さっそく川原へれっつごーです」

サクヤ

「今から行くのかい？」

桂

「今からって、普通花火は夜にするものだと思う」

葛

「それにこちらの庭はこの有り様ですから」

庭というよりは一面の野原。しかも燃えやすそうな木造家屋に隙間なく隣接している。

サクヤ

「確かに、庭でするのはやめとくべきだね」

サクヤ

「とはいえ夜に山道歩くのだって、慣れてない桂には危ないんじゃないかい？」

桂

「じゃあ、保護者同伴なら」

サクヤ

「……保護者？」

じーっとサクヤさんを見る。

サクヤ

「……あたしかい？」

桂

「だって、サクヤさんは山道慣れてるよね？ 夜の森での撮影もしてるし」

サクヤ

「そりゃあ、夜行性の連中撮るには夜じゃないといけないしね。むしろ夜の撮影の方が多
いぐらいさ」

桂

「じゃあ、サクヤさんと一緒なら大丈夫だ」

サクヤ

「……やれやれ、仕方がないねえ」

どっころしょと立ち上がるサクヤさん。

サクヤ

「それじゃあ行くか」

葛

「わたし、こうやって花火をするのって、実は初めてなんです」

桂

「そうなの？」

葛

「夜空に広がる大きいヤツなら、何度も遠目に見たことあるんですけどね」

葛

「あれはあれで見事な職人芸ですけど、見ているだけの高嶺の花って感じです」

桂

「高そうだよねえ」

葛

「一尺玉でも五、六万円しますよ、確か。二尺になるとその十倍です」

桂

「わ、宝くじ当たっても、一晩で使い切っちゃいそうだね。ちょっと勿体ないかも」

葛

「まあ、戦争用の花火に比べれば安いもんですし、粹なお金の使い方って感じじゃないですか」

葛

「ですけどやっぱり、自分で火をつける手持ち花火の方が、そこはかたく風情がありますね」

葛

「慎ましやかで、そのくせ一瞬というほど短くはなくて、いい感じです」

桂

「あはは、庶民の暮らしって感じだよね」

葛

「そこがいいんですよ。空の花火は自分が咲くことに一生懸命で、他人のことはお構いな

しって感じじゃないですか」

桂

「そうかなあ？」

葛

「ですよ。打ち上げた後の空って煙でいっぱいですから」

桂

「それじゃあ、次の花火は綺麗に咲けないかもね」

葛

「うがった見方ですけど、自分が一番綺麗に咲くために、他の足を引っ張ってるような気がするんですよ」

葛

「それに比べて——あ、おねーさん。火、貸してください」

桂

「うん、いいよ」

先端から勢いよく吹き出るカラフルな火花を、葛ちゃんが手にした花火に移す。

葛

「こういうのって、なんかあったかい感じがして憧れだったんですよ」

葛

「ひとりじゃこーゆーことできませんから」

桂

「そうだね。でもこうやって火を移すのって、聖火リレーみたいかも……あ」

わたしの持っていた花火の音が、しゅうっと景気の悪い音に変わったかと思うと、尻すぼみに消えてしまった。

葛

「桂おねーさん、早く早く！ はやくしないとわたしのも消えちゃいますよーっ！」

桂

「あ、うん、ちょっと待って……」

次はどの花火にしようか迷う。あのひとつしかない鉄砲の形をしたのにもそそられるけど、あれは葛ちゃんも狙ってそうだし——

葛

「おねーさん、何でもいから早くー!!」

それからわたしたちはお互いの火を絶やさないように——
手持ちの花火が尽きるまでのしばらく、千変万化の火の色に見入っていた。

桂

「大丈夫だよ。懐中電灯も持っていくし」

葛

「薪集めで通った道ですからね。ちょっとは踏んで道になってますし、危ないところはなかったと思いますよ」

桂

「だよ。尾花ちゃんが道案内してくれるって」

サクヤ

「……なら大丈夫か」

葛

「尾花は信用されてますね」

ぱたぱたと尻尾を振った。

葛

「わたし、こうやって花火をするのって、実は初めてなんです」

桂

「そうなの？」

葛

「夜空に広がる大きいヤツなら、何度も遠目に見たことあるんですけどね」

葛

「あれはあれで見事な職人芸ですけど、見ているだけの高嶺の花って感じです」

桂

「高そうだよねえ」

葛

「一尺玉でも五、六万円しますよ、確か。二尺になるとその十倍です」

桂

「わ、宝くじ当たっても、一晩で使い切っちゃいそうだね。ちょっと勿体ないかも」

葛

「まあ、戦争用の花火に比べれば安いもんですし、粹なお金の使い方って感じじゃないで

すか」

葛

「ですけどやっぱり、自分で火をつける手持ち花火の方が、そこはかとなく風情がありますね」

葛

「慎ましやかで、そのくせ一瞬というほど短くはなくて、いい感じですよ」

桂

「あはは、庶民の暮らしって感じだよな」

葛

「そこがいいんですよ。空の花火は自分が咲くことに一生懸命で、他人のことはお構いなしって感じじゃないですか」

桂

「そうかなあ？」

葛

「ですよ。打ち上げた後の空って煙でいっぱいですから」

桂

「それじゃあ、次の花火は綺麗に咲けないかもね」

葛

「うがった見方ですけど、自分が一番綺麗に咲くために、他の足を引っ張ってるような気がするんですよ」

葛

「それに比べて——あ、おねーさん。火、貸してください」

桂

「うん、いいよ」

先端から勢いよく吹き出るカラフルな火花を、葛ちゃんが手にした花火に移す。

葛

「こういうのって、なんかあったかい感じがして憧れだったんですよ」

葛

「ひとりじゃこーゆーことできませんから」

桂

「そうだね。でもこうやって火を移すのって、聖火リレーみたいかも……あ」

わたしの持っていた花火の音が、しゅうっと景気の悪い音に変わったかと思うと、尻すばみに消えてしまった。

葛

「桂おねーさん、早く早く！ はやくしないとわたしのも消えちゃいますよーっ！」

桂

「あ、うん、ちょっと待って……」

次はどの花火にしようか迷う。あのひとつしかない鉄砲の形をしたのにもそそられるけど、あれは葛ちゃんも狙ってそうだし——

葛

「おねーさん、何でもいいから早くー!!」

それからわたしたちはお互いの火を絶やさないように——

手持ちの花火が尽きるまでのしばらく、千変万化の火の色に見入っていた。

桂

「……あ」

これは少し困ったかも。

葛

「どーしましたか、おねーさん」

桂

「あはは、ちょっとだけ失礼。すぐに戻ってくるから心配しなくていいよ」

何が困ったのかは言わぬが花。

本当はお屋敷まで戻りたいところだけど、さすがにひとりで戻るのは怖いし、距離もある。

ちょっと離れるだけなら大丈夫だろうと、虫除けスプレーの力を信じて、丈のある草を掻き分けながら奥まで進む。

このへんで……いいかな……？

もぞもぞと足踏みをしながら、しゃがみ込んでも平気そうな、下生えの落ち着いたところ立ち止まり、落ち着きなく周囲を見渡した。

桂

「……………」

しんと静かな夜の空気を、がさがさとした草の音がかき乱す。その振動が伝わったのが、わたしの身体もぶるりと震えた。

何だろう——風がゆすり、草同士がこすれ合うような軽い音じゃなかった。

肌は風を感じていない。

音は近づいてくる。

こちらに向かって近づいてくる。

わたしは下ろしかけていた腰を上げて、音の聞こえてくる方向を探してきよろきよろとあたりを見回す。

こんな時に限って風が吹き始める。

風に揺らいだ葉擦れの音に、近づく何かの気配がかき消される。真夏の夜だというのに、風が肌から熱を奪っていく。粟立つ肌。

雲が動かされて月が隠れる。

月の光が遮られる。

視界が悪くなる。

暗い草の海に取り残されたわたしは、前後左右のどちらに向かえばいいのかもわからなくなつて、ただ立ち往生するばかり。

揺らいだ草の先端が、ちくちく足を撫でる度にストレスが蓄積されていく。

どうしよう、どうしよう——

いつの間にか風が止んでいた。

雲は月の上に根を下ろしていた。

桂

「……………」

息を飲む音が思いがけず響く。心臓の音がやけに耳につく。

桂

「ひゃ——っ」

桂

「……なんだ、尾花ちゃん」

心臓がとびだすほどわたしを驚かせてくれたのは、白い子狐・尾花ちゃんだった。

大きなため息で胸の中にわだかまっていた不安を吐き出すと、小さな灯火のような安堵感が残った。

こんなに小さな狐でも、何かといろいろ頼りになる、白馬の騎士ならぬお白狐さまなのだ。

桂

「もしかして、心配して付いてきてくれた？」

ふさふさの尻尾を左右に揺らす。

たぶんこれとこくこく頷くのがイエスで、ふいっとそっぽを向くのがノー。

桂

「そうだよ。最初から尾花ちゃんについてきてもらっていたら、良かったよ」

あまりにびっくりしてしまったので、わたしはひとりここへ来た用事を忘れてしまった。

桂

「尾花ちゃん、戻ろうか」

ぱさっと一回尻尾を振った尾花ちゃんが、くるりと元来た方向へ身体を反転させて。

桂

「——えっ!？」

さきほどよりもさらに大きく、草が踏みしだかれる音がした。

尾花ちゃんは四本の足を突っ張り、全身の毛を大きく逆立て膨らませている。

何かがいる。近づいてきている。

ようやくぬるい風が流れ始め、止まっていた雲が動きだし、揺れる草の切っ先が射し込む月光に映えてきらめいた。

草の踏みしだかれる音が大きく響いた。

そして、あらわれたのは——

黒い髪と黒い服が印象的なあの人だった。

黒は蒼く薄まった闇よりもなお暗く、その黒に囲われているせいで、白い顔と白いシャツの襟元がくっきり浮かび上がって見える。

そしてその白よりも目映く照り輝くのは、手にした金覆輪の鞘の太刀。

桂

「……千羽……烏月さん？」

千羽

「あなたは羽様の——羽藤桂さん」

桂

「もう、びっくりさせないで下さいよ」

千羽

「それは申し訳ありませんでした。こちら側に鬼——人ならざるものの気配を感じたもので」

桂

「鬼……」

サクヤ

「まあ、あたしが言うのも何だけど、有事の際には番犬役ぐらい勤まる奴だけどね……」

もしかして千羽さんって、手にした太刀で鬼退治をしたりする人なんだろうか。
発言、持ち物、サクヤさんの証言の三点を根拠に、そんな推測をしてしまうのは、あまりに短絡すぎるだろうか。

桂

「千羽さんって、鬼退治をする人ですか？」
おもわずぼろり、そのまんま訊ねてしまった。少なくともこれは短絡すぎだった。

千羽

「私は鬼切部の鬼切り役。あなたの言う通り、鬼を切ることを生業としていますが……」

千羽

「すでにサクヤさんから聞きましたか？」

桂

「いえ、あてずっぽうで」

千羽

「普通は鬼なんて言葉を出すと、胡散臭がられるものなんですけどね」

桂

「あはは……」
素で鬼退治の人なんて思ってしまったわたしは、どう反応したらよいものやら。

千羽

「それで羽藤さん。あなたは何故こんな夜更けにこんな場所にいるんですか」

桂

「あ、わたしは向こうの川原で花火を――」

金の鞘が払われて、月下に刃が濡れ輝く。

制服の少女

「――何者ですか」

桂

「何者だとか、問われても……」
いつでもわたしをまっぴたつにできそうな彼女を前にして、手ぶらのてのひらをアピールしながら、肩より高く両手を上げる。

桂

「ただの一般人のつもりですけど……」

制服の少女

「ただの一般人が、こんな時間にこんな場所にいるとでも？」

桂

「わたし、向こうの川原で花火をしていただけで、別に怪しいものなんかじゃ……家も近くですし」

制服の少女

「……………」

桂

「えっと……あなたこそ何者なんですか？ そんなものを持ってると、普通の人じゃありませんよね？」

制服の少女

「私は人に仇なす人ならぬものを切ることを生業とする、鬼切部の鬼切り役」
月の光を映してか、夜の闇の中で見開いた右目が、蒼々とすごみのある光を放っている。
瞳の光に射貫かれて、わたしの身体は空気の壁に磔（はりつけ）にされてしまった。

制服の少女

「微かな鬼の気配を追ってきたところ、そこにあなたがいたというわけです」

そして、わたしと尾花ちゃんを見比べて小さく息を吐く。

制服の少女

「あなたは鬼ではないようですが……もしや、羽様の家の方ですか？」

桂

「え？」

桂

「あ、うん。わたしは桂。羽藤桂」

制服の少女

「なるほど——剣を向けたりなどして申し訳ありませんでした」

流れるような見事な動きで、太刀が鞘に戻される。

制服の少女

「私は千羽烏月と申します。ところで羽藤さん。最近、あなたの周りで怪しい現象が——」

葛

「桂おねーさん、どこ行きましたかー!？」

桂

「あ……」

遠くから、わたしを探す葛ちゃんの声が聞こえてきた。

あれからしばらく経っているので、心配かけてしまったのかもしれない。

桂

「こっち、こっちー! こっちにいるよー!」

返事をしてからしゃがみ込み、尾花ちゃんの背中の中を撫でながら話し掛ける。

桂

「変な方向にいっちゃわないように、迎えに行ってくれるかな？」

尾花ちゃんはわたしと千羽さんを見比べてから、大きく尻尾を一振りした。これは多分おっけーの合図。

たつと茂みの中に潜り込むと、夜目にも目立つ白い毛並みがあつという間に闇に溶ける。

葛

「桂おねーさん、こっちですかー？」

桂

「今、尾花ちゃんが迎えにいったからー!」

聞こえてくる声に大声で返しつつ立ち上がると、何やら難しい顔をしている千羽さんと目が合った。

桂

「あ、変な顔してますね。でも、尾花ちゃんって訓練なしで盲導犬ならぬ盲導コンとかになれるぐらい賢い子なんですよ」

あ、狐の音読みに「ン」は余計で、コンだと鳴き声になっちゃうか。

いや、尾花ちゃんがコンとかケンとか鳴いてるのって、実は一回も聞いたことないんだけどね。

千羽

「……今の声は……」

桂

「あ、葛ちゃんって言って、うちに泊まっている子です。一緒に花火をしてたんです」

千羽

「……葛？」

桂

「はい。『大きい葛と小さい葛どっちがいい?』の——」

葛

「あ……」

茂みの中から顔を覗かせた葛ちゃんの動きが止まった。

月明かりに青白く染まった葛ちゃんの顔は、驚きの表情を浮かべたまま固まっている。

桂

「葛ちゃん、どうしたの？」

一体何が葛ちゃんをそうさせているのかと、覗き込んだ瞳に映る影の正体を知ろうと振り向くと——

葛ちゃんの視線の先には、おかしなものは何もない。

みっしりと葉を茂らせた枝に蒼い光を遮られて、闇を薄めず濃いままにしている木立の間にも、怪しい影は見当たらない。

葛

「なんで……こんな……」

つぶやく葛ちゃんの瞳に映っているのは、そんな夜の山の景色と——

金色の太刀を携えた、鬼切り人の千羽さん。

ふたりの間に立ったわたしは、わけがわからず首を往復させるばかり。

右から左、左から右。

千羽さんから葛ちゃん、葛ちゃんから千羽さん。

確かに葛ちゃんは千羽さんを凝視していて、千羽さんも葛ちゃんのことを見つめている。

葛ちゃんは、千羽さんのことを恐がっているのだろうか？

確かにこんなに暗い山の中で、刀を持った人に会ったら怖いのは当たり前だけど——

だけど、そういった種類の怯えとは少し違っていることは、触れた震える小さな肩から、漠然と伝わってくる。

——ああ。

わたしの中でひとつの仮定が浮かび上がった。

もしかしたら葛ちゃんは、鬼切りの千羽さんを天敵とする存在——なのかもしれない。

思えば葛ちゃんは、随分と常人離れしてはいなかっただろうか。

桂

「つ、葛ちゃん……？」

指先から伝染してきたのか、わたしの声も震え、上ずっていた。

別に葛ちゃんが怖いわけではないと思う。

葛ちゃんの正体が何であれ、例えば羽様のお屋敷に住む座敷童子とか、尾花ちゃんによ

うな姿が本性の化け狐とかでも構わない。

構わないけれど、それが別れに到る糸口となってしまうのが嫌だった。

わたしが知っている、人と人でないものとの物語——『雪女』や『鶴の恩返し』などでも、正体が明らかになることが別れの発端となっている。

そんなわたしの震えとも、葛ちゃんの震えともまったく縁遠いところに立つ千羽さんが、おもむろに口を開く。

千羽

「葛様。こんな所にいらっしゃったんですね」

桂

「葛様って……」

慇懃な態度はあきらかに貴人に対するもの。少なくとも鬼とかに対するものではなさそう。

だけど、それなら葛ちゃんは何を怯えているんだろう？

わけがわからずうかがい見るも、葛ちゃんは固まったまま動かない。

答え欲しさに焦れてゆすると、千羽さんがわたしに顔を向けた。

千羽

「葛様より聞かされてはいませんか？ 葛様は若杉家のお方です」

桂

「うん、苗字は若杉だって言ってたけど、だけど様がつくような若杉って——」

——あ。

千羽

「おそらく、あなたの考えている通りでしょう」

十人が十人、同じ答えを出すのだろう。思い当たったところを言葉にする前に、千羽さんが肯定した。

そうか、やっぱりあの若杉なのか……

それはつまり、葛ちゃんは日本国内のみならず、世界でも有数の資本を持つ企業グループの関係者だということになるわけで。

桂

「……葛ちゃんって、すごいお嬢様？」

葛

「やめてくださいっ！」

ようやく硬直が解けたと思ったら、力を溜めに溜めていたバネがはじけるように——

肩にかけていた手を跳ね除けられた。

葛

「わたしはただの葛です！ 家を出た時点で、若杉とは何の関係もなくなっただけです！」

千羽

「法的にあなたは若杉ですし、社会的にも依然として若杉のままです。いくら否定したところで、あなたに流れているのは若杉の血——」

千羽

「私に千羽の血が流れているように、人が生きていくかぎり、それは絶えず身体を巡っているものなのです。葛様」

葛

「知りませんよ、そんなこと……」

千羽

「会長が亡くなられた今、若杉を継ぐ資格があるのは、葛様おひとりです」

葛

「そんなの、若杉の自業自得じゃないですか。ひとりになるよう仕向けたんですから、ひとりしかいないのは当たり前じゃないですか」

葛

「だいたいグループの経営は、滞りなくきちんと回っているでしょう。わたしみたいな小娘は、どうせ傀儡にしかならないわけで」

葛

「世襲制なんてナンセンスですよ。わたしは何もかも放棄するって言ってるんですから、それでいいじゃないですか」

千羽

「単なる企業体としての若杉ならば、それで一向に構わないでしょう」

千羽さんは一度わたしの方を気にしてから、磁鉄鉱のような硬い瞳で葛ちゃんの視線を真っ直ぐに吸い付ける。

千羽

「葛様を必要としているのは、我々鬼切部を束ね、政財界との折衝を行う、鬼切り頭を継がなければならない若杉です」

千羽

「安倍、土御門から鬼切り頭の役目を継いだ、表と裏、過去と現在、現界と幽界——ふたつの世界をつなぐ橋としての若杉です」

安倍から役目を——

流行ったこともあるし、時代物の小説にも出てきたりするから、安倍という名前と鬼とを結びつけるのはそう難しいことではない。

安倍晴明——陰陽師の代名詞的存在。

まだ闇が闇として怪異を包み込んでいた平安の世に、鬼を使い、鬼を封じ、鬼切りの武者に助言を与えていた人物。

話がいきなりでよくわからないけど、葛ちゃんは——その——だけど——

葛

「そんなのわたしは知りません！ 全然やる気のないわたしより、義務感のある誰かがやればいいんですよ！」

桂・烏月

「葛ちゃん！？」

葛ちゃんが走っていく。

山の中へと走っていく。

事情もよくわかっていないし、この先どうするべきなのかもわからないけれど、今どうするべきなのかには、考えるまでもなく身体は反応した。

桂

「ちょっと待ってよ、葛ちゃんっ！？」

わたしは何も考える間もなく、葛ちゃんを追いかけて走りだした。

すばしっこい葛ちゃんを見失わずに追いかけられたのは、わたしにして見れば奇跡のようなものだった。

もしかしたら、追いかけて欲しかったのかも、なんて都合よく思ったりもしないこともない。

だけど、とっくに限界以上を搾り出している。ほどなく力を使い切って、走るどころか立っていることもできなくなる。

だから今、まともに動けるうちに、葛ちゃんを捕まえないと……

桂

「葛ちゃん、待って……」

伸ばした手が、葛ちゃんのフードに触れた。

桂

「待ってよ」

もう少し。

桂

「待ってってば」

もう少しだけ追いつけば。

髪やスカートの乱れなど気にする余裕もなく、きざきざの葉や枝が肌を引っかくのにも構わず、必死になってわたしは走った。

ああ、傍から見たらすごい格好なんだろうな。今日のごはんを追いかけて走る、恐ろしい山姥みたいに見えるかもしれない。

わたしが怖くて葛ちゃんが逃げてるんだとしたら、何だかすごく嫌だなあ。
けどもう少し。
ほんとうにあともう少し。
ほら、あと半歩ばかり差が縮まれば。

桂

「捕まえ——」

はっしとフードを握った瞬間——

桂

「たっ!？」

わたしは下向きの力に引っ張られていた。
急にわたしが握ったから、バランスを崩して転びでもしたんだろうか。
ぐいぐいと引っ張られていく。
わたしも倒れ込む。
このまま上に倒れこんだら、わたしの下敷きになる葛ちゃんは相当苦しいんだろうな。
そろそろ衝撃が伝わってくるはず——
おかしい。
この上に向かって引っ張られるような、微妙な浮遊感は。
——これは落ちている感覚だ。

降下中のエレベーターの中で感じる違和感を、何百倍にもしたような感覚。

桂

「きゃあ————っ」

誰かの悲鳴が、上の方から降ってきた。ちょっとわたしの声に似ているかもしれない。
どのぐらいの高さを落ちているのか、あとどれぐらいの距離があるのか、わたしにはさっぱりわからない。
地球の裏側まで続いているような深い縦穴に落ちているのかもしれないし、一日千秋の心持ちのせいなのかもしれない。
いや、底に行き当たるのを待ちわびているわけじゃあないんだけど——

桂

「——っ!!」

ついに行き当たった。
わたしと葛ちゃんにとって幸いだったのは、下に尖った石や硬い岩がなかったこと。それから落ち葉が厚く積もっていたこと。
ばんっ、ばんっ、ばんっ——
出来そこないのトランポリンの上で弾むようにして、わたしたちの勢いは殺されていく。

殺されて、殺されて、ついには静止。

横たわったまま見上げた空には、四、五メートルほど先の向こうで、円い群青色が輝い

ていた。

輝くというほど明るいわけではないのだけれど、この筒状の穴の中に比べればよっぽど明るい。

そこに何かがあるのではなく、そこだけが抜けていて、本来の空が見えているのだった。つまりあの空の境から、高さにして四、五メートルを落ちたことになる。

桂

「ううっ……体中痛い……」

痛いけれど、どれも普通に痛い範囲に収まってきている。骨折のような致命的なケガはしていない模様。

桂

「あたた、運が良いんだか悪いんだか……葛ちゃん、生きてる？」

葛

「何とか……生きてますよ」

落ちている間に体勢が入れ替わっていたのか、葛ちゃんはわたしの上にいる。

葛

「はあ、これは自力で脱出するのは難しそうです。ふたりの身長を合わせても、ぜんぜん高さが足りてませんから」

わたしの肩の上に葛ちゃんが立っても、この縦穴の縁までは手が届きそうにない。

葛

「……はあ、困りました」

桂

「でも、これで葛ちゃんに逃げられなくてすむよ。わたしもう疲れちゃった」

身体からぐて一と力を抜いて、ひと休みモードに。

葛

「たはは……桂おねーさんは暢気ですね」

桂

「そう？」

葛

「このまま助けが来なかったら、わたしたち飢え死にですよ。共食いで始めますか？」

桂

「しないよ、しない。そんなことしないよ」

葛

「まあ、殺しあうほど飢えるより先に、脱水症状か何かでおしまいでしょーね」

桂

「……もうっ、どうして葛ちゃんはそんなこと言うかなあ」

桂

「心配しなくても大丈夫だよ。そんなに待たなくても助けが来てくれると思うし」

桂

「狐って狩りが上手い動物なんだよね。きっと尾花ちゃんが臭いとか足跡を追って来てくれるよ」

葛

「この状況で尾花が来たとして、何かの足しになるとは思いますか？」

桂

「直接は役にたつのは無理っぽいけど、でも尾花ちゃん賢いから」

桂

「千羽さんかサクヤさんを、連れてきてくれるんじゃないかな」

小さいとはいえ尾花ちゃんも狐。夜の山というロケーションも手伝って、本気で走ればわたしや葛ちゃんよりずっと速いはず。

その尾花ちゃんが追いついてこなかった背景には、そういった事情があるのかもしれない。

桂

「あ、ほら。噂をすれば影だよ」

鈴の音が聞こえた。

鈴の音は近づいてくる。

桂

「……あれ？ 尾花ちゃん、鈴なんてつけてたっけ？」

葛

「いいえ、もともと野良ですし。縛るつもりはないですから、首輪のたぐいはつけてませんよ」

桂

「だけどわたし、この音、どこかで……」

そうだ、そうだ、この鈴の音は——

桂

「鈴の音と一緒に、女の子のくすくす笑いが聞こえてきて……」

「ふふふふ、そう——こんな笑い声かしら」

桂

「そうそう、葛ちゃん。こんな感じ」

葛

「桂おねーさん！ わたしじゃありません！」

また雲が月を隠したのか、ふっと空が暗く陰り、やみわだが速やかに縦穴を浸蝕する。びたりと寄り添う葛ちゃんの顔さえ見えない、密度の高い闇。

その闇の中にぼうっと浮かび上がる、熾火（おきび）のような赤い光点。

そうだ、そうだ、この光は昨夜の赤いあの蛇の瞳と良く——

また、鈴が鳴った。

この穴の底には少しも吹き込んでこないけれど、はるか高く遠くでは、風が雲を運び続けているのだろう。

「ご機嫌よう。贅の血をひく羽藤の末裔」

今度は本物の鈴ではなく、鈴を転がすような澄んだ声が、狭い縦穴の中に響いた。

夜に溶け輪郭を失ったおぼろな月光が、再びここをぼんやりと照らした。

「ふふふふふっ——」

そこにいたのは、可愛らしい声にふさわしい、月に映える白い肌をした女の子。

闇に溶けるような鳩羽鼠の着物に身を包んでいて——

するりと一歩踏み出すと、左右二色に染め分けられた着物のうち、鮮やかな半身があらわになる。

蒼い昏さに慣れていた目には、痛いほど鮮やかな色彩。

だけど、その半身よりもまぶしく目を惹きつけるのは、自転車の反射板のような赤い輝き。

血色に濡れた、不吉な瞳。

鈴の音がちりと鳴り、その子はさらに近づいてくる。わかる。わかってしまう。

ああ、この子は怖いモノなんだ——
あの瞳は、昨夜の蛇と同じ赤い——

着物の少女

「へびのめ、かがめ、かがみのめ——かがみはかげをうつしとらへる——」
鈴の音の拍子に乗せて、嬉しそうに謡う声が、空気と一緒にわたしの心を震わせる。

葛

「おねーさん、あの子の目を見ちゃ……」
葛ちゃんの警告が遠い。
わかっている。
わかっているんだけど、わたしは赤いかがやきから視線をそらすことができず——
それどころか、指先一本動かすこともできず、震えるのは心だけで、呼吸さえも止まっていた。

着物の少女

「影を縛られた捕らわれ人は動けない」
どこにも逃げ場はない。どこにも逃げられない。

着物の少女

「さあ、贄におなりなさいな」
三度、雲が円くくりぬかれた空を覆う。
もう見ることがないだろう月が隠れる。

暗闇の中見えるのは熱を孕（はら）んで光る赤。

その赤に眩暈を覚えて——

わたしは意識を手放した。

でも、このまま追いつけなかったら、二度と葛ちゃんには会えないような気がした。
小さな擦り傷をたくさん作りながら茂みを抜けると、そこはほんの少し開けた場所だった。

見覚えのある場所だった——

月の光と夜の色とに青紫に染められたリボンが、ひらひらと温い風に踊っている。
ああ、元はピンクのあのリボンは——
いけない。このままの勢いであそこに向かって進んでは危ない。

桂

「お願い、葛ちゃん止まって！」
あれはわたしがつけた危険信号。危ないから停まれのサイン。
わたしは止まれと相手に言いつつ、自分は一層加速する。草薙が開けたのを幸いに、脚のスライドをいっそう大きくして加速する。

フードの端がてのひらまで届いた。
もう目の前にリボンが迫っていた。
わたしは力いっぱい握り締めて、脚にブレーキをかける。
これなら何とか間に合うはず――

桂

「捕まえた！」

――と、その気の緩みが命取り。

ひとりでも全力疾走の状態からピタッと止まるなんて無理なのに、止まる気のない葛ちゃんごととなると、それはもう絶対に。

葛ちゃんの足の裏が、地面のない場所を蹴ろうとして空振りした。

重力に対する地面からの反作用がなくなって、進行方向が俯角四十五度ほどに修正される。斜め下へと向かっていく。

カーブとはいえないほど急なカーブラインを描きながら、葛ちゃんの身体が枯れ井戸の中へと落ちていく。

それに引きずられるようにして、わたしも一緒に落ちていく。

桂

「やっぱり~~~~~」

桂

「あいたー。いたたた……」

わたしと葛ちゃんにとって幸いだったのは、下に尖った石や硬い岩がなかったこと。それから落ち葉が厚く積もっていたこと。

とはいえ、思いっきり打ち付けたお尻の痛みがなくなるわけでもなし。

桂

「……っと、葛ちゃんは大丈夫だった？ ちゃんと生きてる？」

葛

「それは……わたしは大丈夫でしたけど……」

落ちている間に体勢が入れ替わっていたのか、葛ちゃんはわたしの上にいる。

葛

「……おねーさん、何やってるんですか」

桂

「何って、葛ちゃん追いかけてたんだよ。過程は散々だったけど、終わり良ければすべて良し」

葛

「全然良くないじゃないですか」

わたしのお腹の上から退いて、頭上を仰ぎ見る葛ちゃんが、月の光のまぶしさゆえか、厳しい顔で眉根を寄せる。

葛

「上まで目算五メートルってところでしょうか。おねーさんの肩にわたしが立っても、全然高さが足りないですよ」

悔しそうに壁を蹴る。

葛

「人間、閉じ込められたらおしまいですよ。閉じ込められたら、そのまま朽ちていくしかなくなるんですよ。だからわたしは——」

桂

「じゃあ、出ようか」

葛

「出ようかって、そんな簡単に——」

桂

「うふふ、これなーんだ？」

わたしは壁沿いに垂れ下がっていた蔦葛を手にとり、それが井戸の縁の向こうへと結びついているのをアピールして見せた。

まだ瑞々しさを失っていないそれは、月光を浴びて蜘蛛の糸のように白く、きらきらと輝いて見える。

ううっ、蜘蛛の糸だなんて縁起でもない——わけでもないか。

『陀多たちみたいに我先にと、いっぺんにぶら下がったりしなければ、きっと切れないものなのだ。』

少なくとも葛ちゃんの体重なら絶対安全だろうから、先に上がってもらえばどうとでもなる。

桂

「これなら上まで登れるでしょ？ こんなこともあるかと思って、前に仕掛けておいたんだ」

それにしても、これだけの明るさがあるのに、この救いの綱に気付かなかったなんて、葛ちゃんらしくない。

もっとも、千羽さんと会ってからずっと、らしくないといえらしくないんだけど。

とにかく、葛ちゃんを狭いところに押し込めていては危ういと——

わたしはそう思っていた。

桂

「さーて、葛ちゃん」

両手を腰に当ててひと睨み。桂おねーさんは少し怒っている。

桂

「説明してもらいましょうか」

葛

「説明って、何をです」

桂

「何をって色々。葛ちゃんって、あの若杉グループの跡取りって本当？」

葛

「……いわゆる嫡出でない子ですけどね」

葛

「跡取り候補は嫡出子も含めて数十名いたんですけど、わたしひとりになりましたので」

葛

「おじーさん……なんて呼ばせてもらえませんでしたけど、会長には期待されていました。それが嫌で家出したわけなんですけど」

桂

「それでこんなところに？」

葛

「人目のある所だと、すぐに居場所をつかまれますから。今回見つかったのは、運が悪かったとしかいいようがないです」

桂

「そうだね。葛ちゃんのこと、探してた様子じゃないみたいだもんね」

葛

「まあ、探されていないとしても、おねーさんの家みたいな、人里離れたところに居着いていたと思いますよ」

桂

「どうして？」

葛

「わたし、人間嫌いですから」

食べ物の好き嫌いと同じぐらいにあっさりと、しれっとした顔で言う。

桂

「だって葛ちゃん、そんな感じは……」

葛

「表に出したりしませんよ。そのぐらいできないようなら、食べ物にされる一方ですからね」

桂

「……………」

吹き抜ける風が、何か言おうとしたわたしから言葉を連れ去っていく。木の葉のように言葉が遠くにさらわれていく。

風に流された雲が月を隠したのか、ふっと空が暗く陰り、しんとした闇が一带を支配する。

葛

「おねーさんはコドクを知ってますか？」

沈黙の闇から言葉を引き上げたのは、雲の切れ間から顔をのぞかせた月の引力だったのかもしれない。

わたしに訊ねているにもかかわらず、わたしの方を見るでもなく、ひとりごちるように、月の光に蒼褪めた唇でつぶやく。

桂

「……ひとりで取り残されること？」

葛

「たぶん違いますけど、あながち間違いではないですね」

葛

「虫を三つお皿の上を書いて蠱、それに毒液の毒で蠱毒——有名な呪術のやり方です」

葛

「毒のある虫をですね、ひとつの容器に閉じ込めるんですよ。餌なんて与えませんから、食い合いを始めるんです。まさに弱肉強食ですね」

葛

「そうして最後まで生き残るのは、一番強くて、一番生きてがりの一匹です。その虫の命を使うことで、強い呪いをかけることができます」

葛

「それに近いことを、若杉では後継者選びの方法として採用しているんです」

桂

「えっと、受験みたいなもの？」

葛

「そんな生ぬるいものじゃないです。鬼切り頭を勤める若杉は陰陽師の血筋ですから、比喩というよりそのものをします」

桂

「でも、そんなことしたら警察が」
 蠱毒そのものの、後継者選び——
 それが比喩でないのだとしたら、争いに敗れた虫の運命は。

葛

「そーですよ。骨肉相食む跡目争いだなんて、大時代的もいいところです。近代の法治国家で起こることではないですよ」

葛

「でもですね、若杉は並の国家以上の力を持っています。大使館の敷地内が治外法権であるように、大抵のことはもみ消せるんです。ですから——」

葛

「それはもう、ひどいことになりますよ？」
 うっすらとゆがめた唇は、別人のよう。

桂

「だけど、やる気がないなら途中で権利を放棄したりとか」

葛

「引っ込みの着かないところにいたんです。わたし、昔から大抵のことを上手くこなしていましたから」

葛

「おかーさんは鳶が鷹を生んだって喜んでくれてたんですけどね。その鷹は爪を隠すことを知らないひよっこでした」

葛

「気付いたときには最有力候補ですよ。こんな子供をつまえてばかけた話ですけど、わたしを何とかしない限り、後継者には認められないって」

葛

「おじーさままでそれを暗に認めちゃいましたから、わたしの人生しっちゃかめっちゃかです」

桂

「葛ちゃん……」

葛

「それから色々ありまして、わたしはひとりになりました」

葛

「そーゆ環境で育ちましたから、ひとりの方が楽なんです。ひとりじゃないと辛いんですよ」

だから自分のことは放っておいてくれと、言外にわたしに告げる。

でも——だけれど——

わたしは胸に手を押し当てて、本当に言いたい言葉をぐっと飲み込む。

飲み込んだ言葉をため息と一緒に深くゆっくり吐き出して、新たに空気を胸に入れて言う。

青白く薄まった夜の闇のように、重いものが少しでも軽くなるように。

桂

「そっか、葛ちゃんはひとりがいいんだ」

葛

「そーですね。ひとりだと出し抜く相手も怯える相手も疑う相手も陥れる相手もいませんし」

桂

「そんなことしないと駄目？」

葛

「先に申した通りです。しないと生き残れませんから」

桂

「そっか」

葛

「はい」

特別変わったことではない、ごくごく当たり前のことのように、葛ちゃんは答える。

違う、それは「ように」なんかじゃなくて——

ひとりになって誰も干渉してこなくなるまで、本当に当たり前のことだったのだ。

最後の若杉になるまでは、同じ境遇の人たちと生き残りをかけて争うことを強いられて。

誰かに傷つけられるぐらいなら、誰かを傷つけなければ生きていけないのなら——

それぐらいなら、ひとりでいた方がいい。

自分で経験したわけじゃないから、理解できるなんて大口は叩けないけれど、それがどんなことなのかを思い描くだけの想像力はある。

それは、とても——

だけど――

桂

「じゃあ、今はどうなの？」

若杉から逃げで、本当にひとりになった後に、まったく事情を知らない同士の一個人として数日一緒にわたしと過ごして――

その間もずっと、葛ちゃんは「ひとりがいい」と思い続けていたのだろうか。

葛

「……………」

葛ちゃんは答えない。

答えを欲して重ねて訊ねる。

桂

「ねえ、今でもやっぱりひとりがいいの？」

葛

「わたしは……………」

葛ちゃんは答えを出さない。

出さないけれど、ためらっているのはわかる。

だから、きっと、それが葛ちゃんの答え。

桂

「ねえ、葛ちゃん」

桂

「わたし、葛ちゃんには強くなって欲しい」

桂

「ひとりじゃないと、自分を守るのが難しいっていうんなら、そんな関係ないぐらい強くなれば解決だよ」

桂

「ひとりじゃないと、周りを巻き込むっていうんなら、何があっても守れるぐらい強くなれば解決だよ」

桂

「わたし、葛ちゃんには強くなって欲しいよ」

そんな神様みたいな強さじゃなくても、せめてためらいを断ち切って、自分の望む答えを出せるぐらいには――

目をそらしたらきっと通じない。

だからわたしはじっと葛ちゃんの瞳を見つめる。

駄目だ。

ちゃんと見なきゃいけないのに、視界がゆらと揺れてくるのはどうしてだろう。
見なきゃいけないのに——
自分の涙腺の緩さが情けなくなって、そう思うと視界の揺れはさらに大きくなる。
もう限界だ。
表面張力いっぱいまで溜まった涙が零れ落ちると、どちらが早かったか。

ほうう——と息を吐きながら、葛ちゃんが目を伏せた。

葛

「……わかりました」

顔を上げた葛ちゃん表情は、意外なぐらいにさっぱりとしていて——

桂

「え？」

わたしは目を疑った。

葛

「とりあえずわたしは、ひとりのところに戻ります。わたしひとりしかいない若杉を継いで、強くなります」

ここまではっきりとした宣言を聞いてなお、自分の目が信じられずに、手の甲で目の端をごしっとぬぐい上げる。

葛

「それはもう、メチャクチャ強くなりますよ？」

涙をぬぐった瞳に映った葛ちゃんは、いつもと同じ顔で笑っていて——
笑っていたのに——

桂

「本当にひとりがいいなら、どうして尾花ちゃんと一緒だったの？」

葛

「尾花は、人間じゃありませんから」

桂

「じゃあ、どうしてすぐに出て行ったりしなかったの？」

葛

「おね一さんがすぐに帰ると思ったからですよ。何もないところですから、都会から来た人はすぐに飽きる思ったんです」

桂

「その何もないところに電気や水道を引っ張ったのって葛ちゃんだよ。わたしがあのお屋敷にいやすいようにしたのって葛ちゃんだよ」

だから、葛ちゃんはわたしのことを歓迎してくれているものとばかり思っていたのに。
放っておいて欲しいと思っていたなんて、わたしに早く帰って欲しいと思っていたなんて、そんなのって——

素直にうんと頷けるはずがない。

桂

「ねえ、わたしのこと怖い？ わたしが同じ部屋にいたら寝られないぐらい、わたしのこと怖い？」

葛

「別に——桂おねーさんは怖くないですよ。たとえおねーさんがわたしの命を狙っても、どうにでもできそうでしたし」

桂

「ううっ……」

葛

「むしろ、鬼切り頭としての若杉を恨んでるサクヤさんが怖くてたまりませんでしたよ。いつ噛み殺されるか、ヒヤヒヤしてました」

桂

「サクヤさんが……？」

葛

「蠱毒で生き残るには、周りを潰さなければいけませんから。表沙汰にはなりませんけど、それに巻き込まれてる人って、実は結構いるんです」

葛

「サクヤさんがジャーナリストになったのは、それをペンで叩くためですよ」

桂

「……………」

葛

「桂おねーさんも、わたしに近づくと大変なことになりますよ」
思い返せばふたりはお互い、名前を知っている風だったけれど——
それを隠していたのは、きっとわたしに気遣ったこと。
でも、それならなおさらに——

桂

「でも、もう葛ちゃんは勝ったんでしょ？」

葛

「それはですけど、わたしはすでに毒虫ですから。触っただけで手が腐るような猛毒持ちですから」

桂

「……そんなことないよ」

わたしは葛ちゃんの小さな身体を抱きしめた。

葛

「あ……」

桂

「やっぱりね、ひとりは駄目だよ、葛ちゃん」

桂

「ひとりだと悪い考えがぐるぐる回っちゃって、全部がそういう風に見えるから」

桂

「世の中にはひどい人もいっぱいいるけど、いい人だっていっぱいいるんだよ？」

自分以外は信用できない。だからひとりの方がいいなんて言っているにもかかわらず、その信用できない他人であるわたしを気遣っている。

冷たい環境で育った葛ちゃんがそうなんだから、温かな環境で育った人たちの中には、もっと多くの割合でいい人がいるんじゃないかと――

葛ちゃんほど賢い子が、そんなことにも気付かないだなんて。

自分自身のことはなかなか見えないものだけど、葛ちゃんは自分のこともひどい人の範疇に入れてしまっているのだろうか。

小さな背中にまわした腕に力を入れて、確かな温かさを確かめる。

硬くこわばった身体を、わたしの温度で溶かしたい。

葛

「……あっ」

桂

「葛ちゃんはちょっと運が悪かったね。でももう、一生分のハズレをひいちゃったから大丈夫だよ」

そんなことはないのかも知れないけれど、否定する材料だって何もない。

桂

「葛ちゃんが家に帰りたくないなら、難しいかもしれないけど家を出る方法を考えよう」

その先のあてがないのなら、わたしの家にくればいい。

お母さんとふたりで住んでいたアパートは、手狭な場所のはずなのに、なぜかガラんとしているから、葛ちゃんなら大歓迎だ。

本当は動物は駄目なんだけど、尾花ちゃんは賢いし、鳴かない子だからこっそり飼えるんじゃないかと思うし。

法律とかに関してはよくわからないんだけど、サクヤさんなら上手い方法を知っているかもしれないし。

桂

「だから……ね？」

腕の中で肩を震わせながら、小さく頷く葛ちゃんの頭を撫でる。

真夏だというのに、剥き出しの肌を刺す風が冷たい。

風が雲を運んでいく。

行く手を遮る暗雲を吹き払ってくれる風ならば大歓迎なんだけど。

風が吹いて、また雲に月が隠れた。

——

「ご機嫌よう。贅の血をひく羽藤の末裔」

闇の中から女の子の声。

それは可愛らしい女の子の声だったのだけれど、こんな夜の山の中には不似合いすぎて——

——

「ふふふふ——」

鈴を転がしたような笑い声を継いで響く、本物の鈴の音。

ああ、この鈴は、この声は——

夢の中に、赤い痛みをともないやってくる——

青みを帯びた闇の中に、赤い光がふたつ輝く。

血溜まりを透かして輝く炎のような、不吉に濡れた赤い輝き。

ああ、これは——

これは赤い痛みの残滓（ざんし）などではなく——

着物の少女

「ふふふふふっ——」

含み笑いと、鈴の音。

音とともに現れたのは女の子。

年の頃はわたしと葛ちゃんの間ぐらい。

真っ白い脚を惜しげもなくさらした、丈の短い振り袖の着物は、黒赤二色に染め分けられている。

浴衣でも普通の和服でもないその着物は、普通に見るものとはあまりに違って——

その合わせは、死者を表す左前。

葛

「……誰ですか？」

葛ちゃんが警戒心あらわに身構える。

こんな場所にこんな時間、小さな女の子が現れるのはどう考えてもおかしいのだけれど。

禍々しい熾火（おきび）を宿した瞳が、こんな時間のこんな場所だからこそ、現れてもおかしくないということを告げていた。

眼底から突き抜ける、赤い痛みと赤い眩暈を押し殺して訊ねる。

桂

「あなたは——誰？」

訊くまでもなくわかっている。

千羽さんがどうしてこんな場所にいる、葛ちゃんとばったり出会うことになったのか。

桂

「あなたは——何者？」

答えの代わりに響く鈴。

彼女はゆっくりとわたしたちに近づいてくる。

桂

「あなたは——」

——いや、もうわかっている。

あの笑い声は、この鈴の音は、昨夜わたしを夢から覚ましたもの。

あの赤い蛇が現れる予兆となったもの。

だから、訊くまでもなくわかっている。

唇の両端が吊りあがる。

それが返事。

肯定の印。

最後の一步を響かせて、数歩ぶんの距離を置いたところで立ち止まる。

着物の少女

「私はあなたを迎えにきたのよ」

桂

「わたしを……迎えに……？」

着物の少女

「そう。あなたは、あの女の——贅の血を引く家の子だから」

着物の少女

「羽藤だったかしら？ あなたの血筋は特別なのよ。まぎれもなく特別な血を伝えているの」

桂

「そんなこと——」

あるはずない、と続けようとしたわたしの言葉を遮って、後ろの闇に問い掛ける彼女。

着物の少女

「そうでしょう、ミカゲ？」

——

「はい……姉さま」

闇の中から応えがあった。

闇の中から聞こえる鈴の音。

目に見えない鈴の音が実像を結んだかのように、彼女の背後にもうひとり、そっくりの影が闇の中から滲み出た。

鈴の音を響かせて、「姉さま」と呼んだ彼女の向かって右隣に並ぶ。

桂

「——」

単なる姉妹という言葉で括るには、ふたりはあまりに似すぎていて。

赤い瞳と、色素の薄い、毛先が少し外向きにはねたようなかぶろ髪——

一足運ぶごとに鳴る、猫の首輪のような鈴を左の素足に巻きつけて——

赤と黒の二色の振り袖——

ただ違うのは、その装いが鏡写しの対称だということのみで。

ただ表情だけが似ておらず、驕慢な彼女に対し気弱に眉を下げていて。

ああ、双子の鬼だ——

——何でだろう。ひどく頭が痛む。

着物の少女

「私はノゾミ——」

鏡写しの少女

「——私はミカゲ」

ちかちか瞬く視界の中で、赤いまなざしをこちらに向けて、ふたりはわたしに名を名乗る。

この赤は、この痛みは、彼女たちの瞳に宿る赤い光のせいなのか。

桂

「あ……」

眩暈と息苦しさに、喘ぐ。

ふらりと脚をもつれさせ、かしいだわたしの身体が支えられる。

葛

「桂おねーさん大丈夫ですか？」

桂

「大丈夫……平気……」

これから厄介な荷物を背負っていくと言った葛ちゃんに、余計な負担をかけるわけにはいかない。

事情はよく飲み込めていないんだけど、羽藤と——彼女は確かにそう言った。

そうだ、狙われてるのはわたしなんだから、葛ちゃんを逃がしてあげないと。

せつかく強く生きるって言ってくれたんだから、ちゃんと逃げてもらわないと。

幸い、葛ちゃんの存在は彼女たちの眼中にない様子。

桂

「あ——」

葛ちゃん逃げて——という言葉を遮るように、葛ちゃんは下がらず、逆に一步前に出て自らの存在を彼女たちに見せつける。

ノゾミ

「——あら？」

本当に眼中になかったのか、初めて気付いたとでもいうように目を見開く。

ノゾミ

「あなたは？」

葛ちゃんは応じない。

ノゾミ

「あなた、名前は？」

葛ちゃんは答えない。

二度の空振りに焦れたのか、癩の強そうな面差しの中、不機嫌の色合いが濃さを増していく。

ノゾミ

「聞こえなかったの？ わたしはあなたに名前を聞いているの」

三度目の正直——

仏の顔も三度までと言うぐらいだから、ましてや鬼に四度はないだろう。

苛立ちをぶつけたのか——地面を蹴立てた右足首に巻かれた鈴が、りと返事を催促する。

それでも葛ちゃんは怖れたりも慌てたりもせず、堂々とした声音でもって、おもむろに——

虚空に向かい宣言した。

葛

「若杉の当主として、鬼切部を束ねる鬼切り頭として、千羽党の鬼切り役、千羽烏月に命じます」

——

「はい」

静かな応えがあったかと思うと、背後の暗闇の中に白い顔が浮かび上がった。

この夜闇のとばりに包まれた山の中を、最初に出会った駅のホームと変わらぬ綺麗な足取りで、こちらへと向かってくる千羽さん。

ただ漂わせる雰囲気、あのときとはまったく違う。

蒼く底光りする右の眸で暗闇を射貫くさまは、目の前にいる双子の鬼以上の怖さを感じるほど。

本当に冗談なんかではなく、この人は手に携えた黄金の太刀で鬼を切る人なんだと——

そして突然の襲来にも動じず、その鬼切り人に命を下す葛ちゃんも、やはり鬼の住む世界で育った若杉の後継ぎなのだ——

天涯孤独の身の上になったというだけで、それ以外は平凡きわまりないわたしとは縁のない世界があるのだと——

思い知らされたような気分になった。

千羽さんは澱みない歩みのままこちらへ近づき、わたしと葛ちゃんの間を通り抜けていく。

葛

「あの二匹の鬼を切りなさい」

すれ違いざまに、葛ちゃんが命じた。

千羽

「——承知しました」

手にした太刀の長さぶんだけ、わたしたちより前に進み出た千羽さんは、鞘から刃を抜き放って構えを取る。

葛

「後は任せました。わたしは若杉の家に帰って、跡目を継ぐ支度に取り掛かります」

千羽

「はい」

葛

「ああ、それから羽藤さん。贄の血を引くあなたの周りには影ながら護衛をつけますので、安心して下さい——」

葛

「千羽鳥月は千羽党の人間を使って、羽藤桂の身柄を守るように」

それだけ言うと葛ちゃんは、踵を返して無防備な背中を鬼たちに向けた。

ノゾミ

「あら——」

ミカゲ

「どうしましょう、姉さま」

ノゾミ

「そうね——」

少し考え込むように、細い指先を唇に近づけて、赤く濡れ光る瞳を瞬かせ——

明滅する赤光の数が、四つから五つに増えた。

二対の瞳に加えてひとつ、鬼灯の実ほどの炎がてのひらの上に揺らめいている。

千羽

「させはしない！」

彼女が長い袖をひるがえらせて腕を振るうのと、千羽さんが動き出すのはほぼ同時。

鬼火が葛ちゃんの背中に向かい飛び、それを射抜いた蒼い視線を追って、構えていた太刀が振り下ろされる。

一瞬だけ咲く花火のように、光の粉と散る鬼火。

光が闇に溶けるいとまも与えず、返す刀を横薙ぎに振るいながら、千羽さんが跳ぶ。

ノゾミ

「——！？」

切っ先が跳ねる月光が、流星のような尾を引いて弧を描く。その目指す先は鬼の首——しかもその星は、ふたつの首を立て続けに匆ねる軌道に乗って空を翔ける。

双子の鬼は体重を感じさせない軽やかさで後ろに跳び退り、着地を伝えるのはただ鈴の音。

千羽さんの踏み込みのぶんだけ、わたしと鬼との距離も広がった。
残響が柔らかな闇に押し包まれて吸収されて、一瞬の凧と一瞬の静寂。
そのしじまを破るのは、千羽さんの唇が紡ぐ鋼の芯を持った声。

千羽

「鬼切部千羽党が鬼切り役、千羽鳥月が千羽妙見流にてお相手いたす」

ノゾミ

「ふうん、あなたが——」

千羽さんはその堂々とした名乗りにふさわしい実力を持った人なのだろう。

双子の鬼は彼女の一挙手一投足に注目していて、わたしの肌をちくちくと刺す、赤い針のような視線は感じられなくなっていた。

当然、彼女のあるじにあたるという、葛ちゃんからも注意は逸れていて——

桂

「あ……」

千羽さんと鬼たちとの攻防などは、すでに関心から外れてしまったのか、背中を向けた葛ちゃんはすでに歩き始めていた。

先ほどの宣言通り、若杉の家に帰還して、正式に跡目を継ぐ支度を始めるのだろう。

わたしの目には映らない、痛いほどに重い荷を負った背中が遠ざかっていく。

その重さに耐えて歩けば、痛みはやがて強さに変わるのだろうか。

だからわたしは声をかけることもできず、小さな背中がより小さくなっていくのを見届けることしかできなかった。

この何日かの共同生活で縮まったと思っていた距離が、一步一步開いていくのを見届けることしかできなかった。

わたしにはその荷物を軽くしてあげることができないから——

これは私の望みゆえのことなのだから——

背中の方から音が聞こえる。

大気を震わす鈴の音と——

大気を断ち切る太刀風の音と——

ああ、何だろう。

何だかずっと昔にも、こんな音を聞いたことがあるような気がする。

振り向いた。

鏡のように円く輝く、赤い瞳が見えた。

——わたしはどこかでこの景色を——

月の光を跳ねて輝く、蒼い刃が見えた。

——見たことがあるような気がする——

この音を聞いていると頭が痛くなってくる。

この光景を見ていると頭が痛くなってくる。

心臓が暴れだして、むかむかする。

——気持ちが悪い。

赤い記憶の欠片が血管の中を流れる。

赤い痛みの刺が頭の中身を刺激する。

赤い眩量の渦に意識が飲み込まれる。

赤。

赤——

赤い——

赤く透き通る光——

気付くと朝焼けが世界を染め上げていた。

知らぬ間に夜は終わっていて、わたしの身柄は千羽さんからサクヤさんに引き渡された。

強くなるために鬼切り頭になると言った葛ちゃんは、夜の闇の中に姿を消した。

人馴れないという尾花ちゃんは、山奥に帰っていったのだろうか。それとも葛ちゃんを追いかけたのだろうか。

その姿を再び見ることもないままに、わたしは自分の家に帰されることになり、わたしもそれに同意した。

わたしが経観塚のお屋敷にいる必要は、葛ちゃんの姿と一緒に遠くへ消えてしまったのだ。

不思議な幕引きをした短い付き合い。

ほんの数日の間、夢を見たと思えばいい。

最後の夜の花火のように、短く儂く幻想的な。

日が常にあると書く、真昼の光が差し込む領域では決して咲くことのない、花火の見せた夢でしかないのだと——

桂

「はあ～～～」

日常の中で、深く大きなため息を吐く。

陽子

「……どしたの、はとちゃん。元気ないねえ」

桂

「うん……」

わたしが再び眠り込んでしまわないのは、陽子ちゃんが数日と間をおかず遊びに誘って
くれているからだろう。

もちろん遊んでばかりじゃなくて、迫り来る夏の終わりに備えて、宿題なんかも一緒に
やったりしたけれど——

それでも夢の余韻は覚めやらず——

桂

「はあ～～～」

わたしは再び、気の抜けたため息を吐く。

そんな態度に気付かぬふりして、陽子ちゃんはいろんな話題を投げ掛けてくれる。

わたしをひっぱりまわしてくれるのは、暇だからという理由だけじゃないんだと思う。

陽子

「そうそう、はとちゃん。極秘ニュース。夏休み明けたら編入生が来るらしいよ」

桂

「へー。別れのあとには出会いがあるものなんだね」

陽子

「……はとちゃん」

桂

「あ、別にお母さんのこと言ったんじゃないよ？」

わたしの気持ちがだらだら停滞していても、時間は止まることなく過ぎていく。

汗ばむ暑さはしばらく続きそうだけれど、それでも木の葉はやがて色付き、そして散っ
ていくのだろう。

鮮やかだった道行く人の服装も、セピアめいた落ち着いた色合いに変わっていくのだろ
う。

そして記憶の中の夏もまた——

カレンダーをめくると、九の文字が現れる。

九は急。

急いて急ぐ駆け足の月。

年の暮れは師が走る程忙しい月だというけれど、昔は収穫期である秋の方が忙しかった
のではないかと思う。

そして収穫と言えば、夏の間片付けられたはずの宿題が刈り取られる季節でもあった
りする。

ああ、そうだ——もう学校が始まるんだ。

学校が始まれば、日常が雪崩をうって押し寄せてくる。

冬休みまでの四ヶ月間には、体育祭や修学旅行、学園祭にクリスマス、中間期末の試験といった、悲喜交々の日常がぎゅう詰めだったりするのだ。

きっと心の中にもやもやと残った非日常は――

九月十九日。快晴。

あれから一ヶ月以上の時間が過ぎて、ようやくあの夏の非日常が、日常の騒がしさの中に埋もれてきたあたりのこと。

三人寄ればかしましいという女の子ばかりが、八米四方程度の空間に、両手両足指折り数えられる数の倍ほども居合わせているのだから――

その結果どうなるかは言わずもがな。

しかも噂の編入生がやってくる当日というのだから、騒がしくもなろうものだ。

うちの学校はあまり編入枠を持っていないので、どんな子が来るのか、みんな興味津々といったところ。

もちろん、教室を抜け出して職員室まで偵察に行くようなお行儀の悪い子はいないんだけど――

桂

「あのねー、陽子ちゃん」

陽子

「何？」

桂

「えっと、その……」

桂

「それより、先生たち来たみたい」

ぴったりのタイミングで、がらりと音を立ててスライドする扉。

先生が来たら静かになるは当たり前だけれど、今日ほどぴたりとおしゃべりが止むのは珍しい。

固唾を飲んでクラス一同が見守る中、担任の先生の陰に隠れるように、編入生がやってきた。

陽子

「……ずいぶんとちっちゃい子ね」

わたしと先生と本人を除く感想は、こんな場合は私語上等と、口火を切った陽子ちゃんの一言に集約されるところだろう。

確かにその子はかなりの小柄。

その昔バレーボールで鳴らしたという先生との対比が、余計にそう見せているんだけど、その比較対象の背の高さは――

ピカピカの新入生並なんてもんじゃないで——

小学生並の背を一生懸命に伸ばして、その子はチョーク片手に自分の名前を板書する。

葛

「今日から皆さんと一緒に過ごすことになりました、若杉葛と申します」

桂

「あ……葛ちゃん……」

葛

「特に桂おねーさんは、よろしくしてやってくださいね！」
葛ちゃんが、わたしの学校にやってきた。

桂

「だけど葛ちゃん」

葛

「なんでしょーか？」

桂

「年齢は？」

葛

「飛び級制度ありで」

桂

「あったっけ？」

葛

「作らせました」

作らせたって、いともあっさり。

そりゃあうちは私立だから、公立校よりは少しは融通が利くんじゃないかとは思うけど、
そういうのって色々きまりがあるのでは。

だけど世界の若杉グループなら、それぐらいの横車なら楽々引き回せそうな力を持って
いるわけで——

桂

「もしかして？」

葛ちゃん、にっこりと頷いて。

葛

「なんかこう、権力有り余ってるんで、お節介したくてしょうがないんですよ」

どこかで風鈴の音。青藍の空よりも暗い叢雲が、天上の月に差し掛かった。
——風鈴？ お屋敷には吊ったけれど、だけどなんでこんな場所？

——

「ご機嫌よう。贅の血をひく羽藤の末裔」
月の隠れた夜闇を伝って、女の子の音が耳朶を打つ。
光も波の一種なのだから、月光の隠れた風の中の方が、音はより生々しく響くのかもし
れない。
それはとても可愛らしい声だったのだけれど、急に耳元でささやかれたときのように、
腕や背中産毛が逆立つ。

——

「ふふふふ——」

鈴を転がしたような笑い声を継いで響くのは、金属の舌がかねのたまの中で転がる音。
本物の鈴の音——
そういえば、鈴は鏡と並んで重要な祭器なんだと歴史の授業で習ったっけ。
なんでも、邪馬台国の卑弥呼とかの巫女さんが神懸かりになるのを助ける道具だったの
だそうなの。

いわゆる銅鐸はこんな高く澄んだ音じゃなくて、どちらかといえばお寺の梵鐘のような
音なんだろうけど——
——ああ、でも、だからなのか。

わたしが赤い痛みを襲われたりするの。
昨夜の赤い蛇も神様なのだから、本当に卑弥呼や誰かのように、神懸かった状態
で《視》た啓示のようなものなのかもしれない。
そんな実感、今までまったくなかったけれど、実はわたしは霊媒体質で——

この音の影響で、催眠状態に陥ったのだと考えれば納得できないこともない。

ああ、だけど、だけど——

それならこの鈴の音は一体どこから？
音の出所を目指して飛んだ視線は、地面近くの低い闇。

その闇の只中に、何かがあると直感が訴えた。

燐光を纏った深海魚のような、青白くもなまめかしいものが、闇を弾いて現れる。

——

「ふふふふ——」

滑らかな曲線を描くそれは、太股の付け根近くまで剥き出しにした、人の脚だった。
ほっそりしているのにもかかわらず、柔らかそうな肉付きは、笑い声にたがわぬ女の子

のもの。

風が雲を運んで行く。

たなびいた雲の尾を透かした月光を、右足首に巻かれた金の小物が跳ねて輝く。

そして、赤い鼻緒の草履が地を離れて――

再び下に降りたとき、足首にある小物が鳴った。

ああ、鈴の音はこの子が近づく音なのか。

雲が月の前から流れきり、蒼い夜の空の下に、その子の姿があらわになる。

着物の少女

「ふふふふふっ――」

年の頃はわたしと葛ちゃんの間ぐらい。

真っ白い脚を惜しげもなくさらした、丈の短い振り袖の着物は、黒赤二色に染め分けられている。

浴衣でも普通の和服でもないその着物は、普通に見るものとはあまりに違って――

その合わせは、死者を表す左前。

葛

「……誰ですか？」

葛ちゃんが警戒心あらわに身構える。

どうやらわたしの目だけに《視》える、幻覚の類ではないらしい。

着物の少女

「ノゾミ」

驕慢な笑みを浮かべて、彼女は高らかに鈴の声を響かせる。

ただ一声で名乗った彼女は、足首の鈴を響かせてこちらへ跳んだ。

ノゾミ

「私はあなたを迎えにきたのよ」

桂

「わたしを……迎えに……？」

ノゾミ

「そう。あなたは、あの女の――贅の血を引く家の子だから」

ノゾミ

「そうでしょう、ミカゲ？」

――

「はい……姉さま」

鈴が鳴った。

彼女は少しも動いていないのに鈴の音がした。

彼女の背後から、すうっと影がすべり出て並んだ。

赤と黒との二色の振り袖。

左足首には金の鈴。

赤い瞳と、色素の薄い、毛先が少し外向きにはねたようなかぶろ髪——

並んだふたりは鏡写しのようにそっくりで。

ただ表情だけが似ておらず、驕慢な彼女に対し気弱に眉を下げている。

ああ、双子の鬼だ——

——何でだろう。ひどく頭が痛む。

ノゾミ

「さあ、私たちと行きましょう」

桂

「……待ってよ、わたし全然わからないよ。あなたたちは誰？ 贄の血って何？ 行くって一体どこに？」

ノゾミ

「あら——」

意外そうに目を丸くして。

ノゾミ

「あなた、本当に忘れてしまったのね？」

忘れたということは、忘れる前は知っていたということなのだろうか。

このふたりの女の子が誰なのかを——

このノゾミと名乗った女の子が、先ほどからわたしに向かって言っている、贄の血とは何なのかを——

——

「にえのち？」

桂

「いたっ」

ふらりと脚をもつれさせ、かしいだわたしの身体が支えられる。

葛

「桂おねーさん！」

桂

「大丈夫……平気……」

さっきからもう、一体何なんだ。

何か引っ掛かる。この引っ掛かりさえなければ少しはすっきりするというのに——

ノゾミ・ミカゲ

「あははははははっ」

目の前の双子の存在が、居着いてしまった痛み一拍車をかける。

ああ、この眩暈がするような赤い痛みは、この子たちの瞳の赤のせいかもしれない。

ノゾミ

「ふふっ、知らないのね」

ミカゲ

「本当に何にも知らないのね」

ノゾミ

「あなたは特別な血をひいているのよ」

ミカゲ

「それが贅の血」

桂

「贅の血……」

ノゾミ

「あらゆる呪術で使われているように、血そのものに特別な力があるのは知っていて？」

ミカゲ

「力の『ち』であり命の『ち』——」

ノゾミ

「形ある肉の一部でありながら、形のない魂の一部でもあるの」

ミカゲ

「すなわち両義を生む太極」

ノゾミ

「万物の根源」

ミカゲ

「トコタチ、サツチ、カグツチ、オロチ——チは神霊そのものを表す言霊」

ノゾミ

「だから人は血を捧げるのよ」

ミカゲ

「贅の血を」

桂

「贅の血……」

ノゾミ

「血には貴賤があるのよ。あなたの血はね、とても純粋で尊い」

ミカゲ

「やしおりの酒が、主さまの遠祖を酔い潰してしまったように」

ノゾミ

「とても濃くて強いのよ」

ミカゲ

「八十、八百、八千の人の血を、飲み干してもなお吊り合わないほど」

ノゾミ

「神でも鬼でも、何でもいいわ。あらゆる人でないモノは、あなたの血を飲むことで、より大きな存在になることができるの」

桂

「より大きな……？」

ノゾミ

「そう。強い《力》を手に入れられるの」

ミカゲ

「だからとても特別なの」

ノゾミ

「だからみんなが欲しがるとよ」

ミカゲ

「そして奪い合いになる」

ノゾミ

「この土地には強い封印があるから、ここにいる限り、外のあやかしに嗅ぎつけられることはないけれど」

ミカゲ

「だから、血が絶えず今まで残っているけれど」

ノゾミ

「今も昔も贅の血の持ち主は珍しいのよ。誰もがあなたのように、血の匂いを隠せるわけではないから」

桂

「もし、隠せなかったら……」

ノゾミ

「ふふっ、わかるでしょう？」

ノゾミ

「隠れないと」

ミカゲ

「逃げないと」

ノゾミ

「鬼に捕まったら、食べられてしまうのよ？」

ノゾミ・ミカゲ

「うふふふふふふ——」

可愛らしい唇の端が、酷薄そうに吊り上がる。

闇に瞬く赤光を宿した瞳は、人ではないものの証しに違いない。

そもそも葛ちゃんが千羽さんと鉢合わせすることになったのは、このあたりに鬼の気配なんてものが漂っていたりしたせいなんだから——

だから、この子たちが鬼なんだろう。

ああ、そうだ。そうなんだ。

だとしたら、名指しで狙われているわたしは、彼女たちの言葉通りに隠れないと、逃げないと。

じゃないとその、贅の血とやらを飲まれてしまうことになる。

だから、逃げないといけないんだけど——

桂

「——」

駄目だ。

赤い矢のような眼光に射貫かれてすくんだ足は、石のようにガチガチに固まってしまい、

後退りすることもできない。

どうしよう、どうしよう——

どうしようも何も、わたしにはどうすることもできない。
だけど、葛ちゃんは？

桂

「ああ、そうだ——」
忘れちゃいけない。葛ちゃんだけは逃がしてあげないと。
狙われているのがわたしなら、葛ちゃんが逃げられる可能性は十分にあるはず。

わたしが血を吸われている間に、鬼を切るのが仕事だという千羽さんの所に駆け込めれば、もう安心だ。

桂

「葛ちゃん、逃げて！」

葛

「嫌です！ ひとりになるのは駄目だって言ったのは桂おねーさんですよ！」

桂

「でも、この場合は！」
共倒れになるぐらいなら、それなら。
千羽さんがこの場に来てくれれば、わたしも助かって万々歳なんだけど、滅茶苦茶に走ってきたわけだから、期待するのは甘い考え。

桂

「だから——」

逃げて——という言葉を遮るように、葛ちゃんは一步前に出て、自らの存在を彼女たちに見せつける。

桂

「……葛ちゃん？」
どうして——と問う表情に、きっぱりとした瞳で応じる。

葛

「だいたいですね、桂おねーさん。わたしは鬼切り頭を継ぐ身なんです。一般人のおねーさんを置いて、わたしが逃げてどうしますか？」

桂

「でも……」
たとえ鬼を切ることを生業としている人たちの元締めみたいなものだとしても、その本

人に鬼をどうにかしてのける力があるとは限らないわけで。

しかも葛ちゃんは、鬼切り頭である若杉の家が嫌いで嫌いで仕方がなくて、こうしてここに来ているというのに——

なのに、葛ちゃんは逃げなかった。

逃げずに、わたしを庇うように前に出た。

ノゾミ

「あら……あなたが鬼切り頭？」

葛

「まだ内定程度ですけどね」

ノゾミ

「それで……」

ノゾミと名乗った鬼の子は、目を細めて葛ちゃんの頭のとっぺんから足先までを、視線で測り身構える。

ノゾミ

「大したものね。その若さで役行者と同等の《力》を持っているというの？」

役行者って誰——なんて訊いてる場合じゃないけれど、彼女に警戒させるぐらいの《力》を持った存在だということぐらいはわかる。

だけど、まさか、葛ちゃんが。

爪を隠すことを覚えた鷹の子は、その《力》を秘匿していただけ。

こんな双子の鬼なんて、ちょちょいのちょいで追い返してくれたりして——

それならば、わたしを制して前に出たのも納得だし、この行く先を安心して見届けることができるから、むしろ大歓迎の展開なんだけど。

葛

「は？ わたし自身には何の《力》もありませんけど……」

葛ちゃんの返した応えは、膨らみかけた希望をしぼませてくれるものだった。

そんなことをバラす利点はないはずだけれど、さらに隠して油断させようなんていう魂胆があるのかもしれない。

それとも、本当に見当外れな意見を聞かされ、思わずぽろりと本音が漏れてしまったとか。

どういう意図での発言かはともかく、それを聞きとがめたノゾミちゃんが、円くした目をいぶかしげに細めて、葛ちゃんの足元に視線を落とす。

ノゾミ

「だけどそいつを従えているということは……」

桂

「あ——」

低く落とされたままの視線を追うと、そこには月明かりの青に染まった、無垢の白毛。白狐は神様のお使いだというけれど、尾花ちゃんは本当にそうなのかもしれない。

葛

「尾花を恐れているみたいですね」

桂

「そうみたいだね。昨日も赤い蛇とかをやっつけてくれたけど……」

桂

「葛ちゃん、鬼切り頭の内定者として何かそういうこと知らない？」

葛

「一番恐れられている白狐といえば、白面金毛九尾の大妖狐——って顔だけですし」
いかにも、金毛ならば金狐だろう。

桂

「やっぱり普通にお稲荷さん？」

わたしがお米鬘の和食党だから、稲の神様であるお稲荷さんが助けてくれるとか何とか。

葛

「とりあえず何か知りませんが、尾花に任せましょう」

桂

「うん……」

強い犬は吠えないというけれど、尾花ちゃんも吠えずに静かだ。
だからわたしは、尾花ちゃんが来たことに気付かなかっただけ——
尾花ちゃんは背中の中を逆立てて、静かに双子の鬼と相対している。
夏の夜気より高い温度を、肌を感じたその後に、汗ばんだ葛ちゃんの背中がわたしの胸に触れた。

数秒の時間をかけて胸が潰され、そのまま背中に押されるように、わたしも少しずつ後ろに下がる。

矢面に立った尾花ちゃんが、ノゾミちゃんとミカゲちゃんのふたりを釘付けにしてくれていて、わたしたちからは注意が逸れている。

逃げるのなら今のうち——ということだろうか。
ただ一触即発の睨み合いだけに、今のこの状態はかなり危うい均衡の上に成り立っている。

よーいドンと手を打ち鳴らしたら、ノゾミちゃんたちも尾花ちゃんも、弾丸よりも速く

飛び出すかもしれない。

ちょっとの刺激がなりゆきを左右して、戦況を覆す。

わたしたちはすでに薄氷を踏んでいるのだから、下手に暴れるわけにはいかない。

睨み合いの構図通りに、両者の戦力が拮抗していたとしても、たった一匹の尾花ちゃんに対して向こうは双子。

片方が尾花ちゃんの相手をしている間に、もう片方がこちらに来るに違いない。

そしてわたしたちは、敵を討ち取る牙や爪どころか、身を守る毛皮さえ持っていない、弱い生き物なのだ。

だからわたしと葛ちゃんは、靴底を地面にこすりつけるようにして、少しずつ距離を取るのだ。

だるまさんが転んだ——

鬼がこちらの動きに気付かないように。

慎重に、慎重に——

気をつけていたにもかかわらず。

わたしのどじで、気付かれてしまった。

ノゾミ

「ミカゲ、足止めを——」

ミカゲ

「はい、姉さま」

逃げようとしていたことに気付いたノゾミちゃんが、ミカゲちゃんに尾花ちゃんの足止めを任せて、その形を幻のように霞ませる。

ぞわり——

背中 of 産毛が一斉に逆立った、そのとき。

尾花ちゃんが地面を蹴ってこちらへ跳んだ。

速すぎてわたしの目では追えないのだけれど、輝く瞳の光の軌跡が、夜闇に赤い線を描いた。

その線の最先端で、赤い光が火花と散った。

ノゾミ

「——！？」

肩に飛び乗った尾花ちゃんの尻尾に、剥き出しの襟首を撫でられて、ノゾミちゃんが悲鳴を飲み込み棒立ちになる。

ノゾミ

「このっ、何をっ……！」

払いのけようとする手を、素早い動きでかわしながら、かっとなら開いた口から覗く牙をつきたてようとする尾花ちゃん。

その尾花ちゃんに向けて、ノゾミちゃんがてのひらを突き出した。

ゆらりと、全身から立ち昇った赤い霧のような光が凝り、赤い蛇となって尾花ちゃんへと伸びていく。

尾花ちゃんはノゾミちゃんを蹴って跳んだ勢いのままに、赤い蛇に爪の一撃を加え——

その反動でさらに高く跳びあがり、わたしたちとノゾミちゃんたちの真ん中に着地する。

桂

「——」

思わず感嘆の息が漏れる、目にも止まらぬ流星のような身のこなし。

それはノゾミちゃんたちが警戒するのも納得がいく、ただの狐の域を大きく超えた凄まじいものだったのだけれど。

ミカゲ

「くすくすくす——」

その様子を見っと見ていたミカゲちゃんが、嬉しそうに笑みを漏らした。

弱っているようには見えても、まだ十分に形を成している蛇を、用済みだとばかりに腕の一振りで見えない《力》の霧に変えてしまう。

ミカゲ

「姉さま、どうやら封じは解かれています」

ノゾミ

「あら、そうなの。それなら何も心配ないわね。役行者の封じさえ解かれなければ」

ミカゲ

「呪の根源たる言霊を封じられていれば——」

ノゾミ

「主さまの向こうを張る、あの恐ろしい鬼神とはいえ、ただの狐も同然ではなくて？」

ミカゲ

「はい」

尾花ちゃんは普通の子狐ではない。それはわたしも納得している。

ただ彼女たちが警戒していた尾花ちゃんの能力は、野生をも凌駕する動きなどではなく。

言霊——

それは言葉に宿る摩訶不思議な霊力のことだと、聞いたか読んだかしたことぐらいある。その言霊を、尾花ちゃんは封じられているのだという。

そういえばわたしは、尾花ちゃんが鳴き声を発するのを、まだ一度たりとも聞いたことがない。

そして本来の姿が言霊使いの鬼なのだとしたら、わたしたちの言葉を解して当然。

言霊——

それが尾花ちゃんの本当の《力》。

そういえば言葉には「葉」という漢字が入っていて、それは言の端に由来したものだとは知ってはいるけれど——

狐が化けたり化かしたりするときには、小道具の木の葉が付き物じゃないか。

ノゾミ

「それならあれは、任せていいわね？」

ミカゲ

「はい」

紙に描いた絵が、九十度回転させると見えなくなってしまうように——

鈴の音がして、ノゾミちゃんの姿が影に消えた。

その鈴の音の残響が、頭の中で幾重にも重なりあい、波を重ねて高さを増して、頭痛さえ伴う警告音となった。

ここは危ない。ここに居てはいけない。躊躇している場合じゃない——

逃げよう。

ノゾミちゃんがどこに消えたのかはわからないけれど、逃げるならミカゲちゃんひとりしかいない今のうちだ。

とにかく全力で走って、鬼を切りに来たという千羽さんのところまで。

大丈夫だ。

ここに来たときみたいに道を気にせず走るなら、あっという間に姿は森に消えるはず。回れ右をしたところで、背中を見せるのは一瞬のこと。

それにミカゲちゃんだけなら、尾花ちゃんが足止めしてくれるはず。

よし——

わたしは葛ちゃんの手を取りながら、身体をひるがえした。

葛

「おねーさん!？」

背中にかかる声に返事をする間も惜しんで走る。

いそげ、いそげ、いそげ——

生命がかかっているだけあって、わたしには悪くないスタートダッシュ。

ぐんぐんと、森が迫ってくる。

もう少し、もう少し——

もう少しで森の中に飛び込めるといったところで——

わたしは何かにつかかった。

桂

「かはっ——」

全速力の勢いが、そのままわたしに反ってくる。揺り返しをうけて止まる。

葛

「桂おねーさん大丈夫ですか？」

桂

「何とか……」

しなる枝がネットのように密集して道を塞いでいたのか。硬い幹にぶつかったわけではないので、ダメージがあるわけじゃないんだけど——

びりりと痺れたような軽い痛みのおとに、脱力感に襲われた。

桂

「え……なに、これ……」

目の前の空間には、ぶつかるようなものは何もない。何もないところに、わたしはもたれるように身体を預けている。

目を凝らすと見えないものが《視》えたような気がした。

映画なんかでおなじみの、触れると仕掛けが動き出す、赤外線防犯装置のような——不可視の《力》が糸のように、木々の間に張り巡らされている。わたしたちの逃げ道は、赤い蛛糸（ちゅうし）で閉ざされている。

桂

「結界……？」

ノゾミ

「そう——」

耳元で鈴が鳴った。

ノゾミ

「くすっ……ふふふ——」

獲物を捕らえる蜘蛛が来た。

今まで姿をかくしていた、ノゾミちゃんが姿を現した。

わたしがこちらに逃げるなどお見通しだと、網を張って待ち構えていたのだ。

鈴の音を響かせながら、白い手が伸びてくる。

糸に絡みついたままのわたしの手足は、いまだ脱力したままで、意に従おうとはしない。

細くなよやかに伸びた指先が、首の肌に触れた。

桂

「ひっ——」

その冷たさに身体をすくませたそのとき。

尾花ちゃんが地面を蹴ってこちらへ跳んだ。

ミカゲ

「姉さま——」

ミカゲちゃんの声に、赤い瞳がわたしから逸れ、緋手が虚空に伸ばされて——

その手が尾花ちゃんを捕らえていた。

轟

結界を張った一面を背にしてしまえば、縦横無尽な尾花ちゃんの動きを制限することができる。

そしてただ速いだけの動きは、ノゾミちゃんにとってそれほど厄介なものではないのだろう。

尾花ちゃんがただの狐に在らざる妖狐ならば、ノゾミちゃんとして人に在らざる鬼なのだから。

桂

「葛ちゃん！ 尾花ちゃんが！」

白い手が、尾花ちゃんの首をがっちりつつかんでいる。それで苦しくないはずがない。

尾花ちゃんは四肢をばたばたと動かし、身体をひねり、その手に咬みつこうともがきにもがく。

首をつかまれているものだから、がちがち打ち鳴らす牙は絶対に届かない。

けれど、獣の武器は牙だけにあらず。

ノゾミ

「——！？」

尾花ちゃんの爪が、首をつかむノゾミちゃんの腕を引っかいて赤い線をこしらえた。

平行に走った数本の赤い線は、見る間に立体的に高さを増し、その限界まで達すると重力方向に広がって面となった。

彼女らの身体はかりそめの肉体らしいのだけれど、きちんと血が流れているらしい。

見るからに痛そうな——けれど、決して致命傷には成り得ないささやかな抵抗の爪痕——

轟

案の定、ノゾミちゃんは眉をひそめて不快を露わにただけで、手を離したりはしなかった。

むしろ万力のようにぎりぎり、その指を尾花ちゃんの喉元深くへと食い込ませていく。

かはっ——

声にならない、空気の音だけの悲鳴。

尾花ちゃんが吐き出した血が、間近にあったノゾミちゃんの口元に飛んだ。

ノゾミ

「……ふふっ」

ピンク色の舌が唇の間から伸びて、尾花ちゃんの血を舐め取る。

ノゾミ

「うろちょろしないで、目障りだから。私は獣の血を飲む趣味はなくてよ」

趣味はないと言いつつも、妖しく濡れた瞳を満足げに細めて。

優しげにも見えるその笑みとは正反対に、腕は、指は、さらに喉の深くへと食い込んでいく。

そして、じたばたと暴れていた尾花ちゃんの身体が。びくりと大きく震えて——

ノゾミ

「大人しくしていてももらえるかしら」

嫌な音がした。

桂

「え……」

ノゾミ

「ふふふっ」

笑いながらノゾミちゃんが、手にしていた物を投げ捨てた。

そう——それはすでに物だった。

もう二度と動くことのない魂の抜け殻。生きることをやめた生き物は、物になってしまう。

生命の尊厳の欠片のようなものを残していても、やはりそれは物でしかなく。

有機物というだけならば、わたしたちの身の回りにある木工器具とて変わりなく——

だからそれは、すでに物でしかない。

そして物だからこそ、壊れてしまったおもちゃのように、笑いながら放り投げられたりもする。

地面に叩きつけられた尾花ちゃんは動かない。

ノゾミ

「あははははははっ」

無邪気なだけに、残酷極まりない笑い声が木霊する中で——

桂

「あ……そんな……っ」

わたしは認識してしまった。
尾花ちゃんは、事切れたのだと。

桂

「尾花ちゃんっ——！？」

大切な人がいなくなってしまう。
それはとても悲しいことで、魂が凍りつくほど冷たい海に放り投げられるような心持ちで——

だけど、わたしはまだいい。
情はたっぷり移っているけれど、それでもまだたった数日の付き合いしかないのだから。
比べるのはどうかと思うけれど、わたしはつい最近、一番大切だった人を亡くしてしまったばかりだから、その時に開いた胸の穴と比べれば。

だけど——葛ちゃんにとっては？

家の事情で人間不信になった葛ちゃんにとって、尾花ちゃんだけが心を許せる旅の道連れであって、家出以来の苦楽を共にした間柄なのだから。

ノゾミ

「あら——」

意外そうな顔で興味を示したのは、わたしと同じように結界に囚われている葛ちゃんが、よもや動くとは思っていなかったからだろう。

葛

「尾花あ~~~~~っ!!」

蜘蛛の巣のような呪縛を破らせたのは、感情の爆発か、鬼切り頭として秘めた《力》の発露か。

赤い蛛糸がちぎれ飛んで霧散した。

戒めを失ったわたしは、その場にどさりと崩れ落ちて。

葛ちゃんは力の抜けた足取りで、横たわる尾花ちゃんに近づくと、その傍らに跪いた。

葛

「ひっ……うええ……おばなあ……」

小さな手がゆすっても尾花ちゃんは動かない。

落ちた雫が鼻先をぬらしても、尾花ちゃんは動かない。

まだ温もりの名残を残していただろう身体が、手の中で冷たくなっていく様は、葛ちゃんの中にどのような変化をもたらしたのだろうか。

葛

「……………」

すすり泣きの声が途絶え、くるくるとよく動く愛らしい顔が、能面のような冷たい表情のまま固まった。

ノゾミ

「ふふふっ——」

真後ろから耳をくすぐるような含み笑い。
へたり込んだままのわたしの肩に、ノゾミちゃんの手が乗せられた。

その手に重み加わったかと思うと、肩口からにゅっと顔が突き出されて、わたしの顔を覗き見る。

目が合った。

血溜まりのように赤く濡れ光る瞳に、わたしの顔と月の光が映り込んでいる。
そのわたしの目の中には彼女の瞳が映っていて、そしてその瞳にはまた——
合わせ鏡の只中に、わたしの意識は捕らわれた。

ノゾミ

「うふふっ、ずいぶんとお預けされたけど」

ほんのり冷たい細い手が、肩からわたしの首へと滑り、汗で張り付いた髪をかきあげる。

ノゾミ

「もういいわよね？」

固まって動かなくなってしまった葛ちゃんの姿は、もはやノゾミちゃんの眼中にはない。
その興味と行動は、わたしの血を吸うことに対してのみ向けられている。

それも当然といえば当然。もともとわたしの血が目当てで現れた鬼なのだから。

桂

「はっ……やっ、やめ……」

さらされた首筋に吐息がかかった。
背中を駆け上がる寒気に、縮こませようとした身体がぴくりとも動いてくれない。
抵抗しようという意志は、無限の迷宮から出ることができず、身体に届かないままにいる。

またもわたしはいつも容易く、赤い糸に縛られてしまった。

桂

「いっ！」

柔らかい唇と、冷たい歯が同時に当たる奇妙な感覚に続いて、鈍い痛み。

桂

「つあっ……はっ……」

噛まれた傷が熱い。

心臓がどくどくと動くたびに、身体の中の熱がそこに向かって移動して、身体の外に飛び出していく。

ノゾミ

「んっ……んくっ……」

その熱を、喉を鳴らしてノゾミちゃんが飲み干していく。

同じ周期で襲ってくる疼痛（とうつう）を、舐め取る舌がなだめてくれているように思えるのが救いだけれど、それでもわたしは怖かった。

わたしの中にある熱が、すべて奪われてしまうような——わたしが冷たくなっていくような、そんな気がして。

ノゾミ

「んんっ……」

わたしも尾花ちゃんのように、物言わぬ冷たい物にされてしまうのだろうか。

もしそうなったら——

今は何の反応も見せずにいる、抜け殻のような葛ちゃんは、わたしのためにも泣いてくれるのだろうか？

だとしたら、ちょっとだけ嬉しいかも。

落ちていく。

わたしの意識が、暗いところへ落ちていく。

ああ、だけど——

せめて最後に謝りたい。

葛ちゃん、ごめんなさい。

尾花ちゃんが死んでしまったのは、きっとわたしのせいだから。

わたしを助けようとして、《力》を封印されているにもかかわらず立ち向かったせいなのだから。

それにしても「ひとは駄目だよ」なんて偉そうに言っておきながら、こうして葛ちゃんをひとりにしてしまうだなんて。

ああ、本当にはわたしは駄目だなあ——

だから葛ちゃん、わたしのために泣いてくれなくてもいいからせめて——

わたしがこうして血を吸われている間に——

落ちていく。

わたしの意識が、暗いところへ落ちていく。
もう何も考えられそうにない。
思考さえもが闇に飲まれて消えていく。

わたしが飲まれて消えていく。

小さな手が尾花ちゃんの身体をゆする。いつものように起きて相手をして欲しいと、力なく垂れた尻尾を引っ張る。
けれど、もう、尾花ちゃんは。

両の頬をつたって顎でまじわり、その重さに耐えられずに滴り落ちた雫が、尾花ちゃんの口元に染み込む。
果たしてそれが生命の呼び水であったのか――

葛

「あ……」
尾花ちゃんの耳が、鼻先が、わずかに震えた。

ノゾミ

「……………」
その様子をまじまじ見ていたノゾミちゃんは、「しつこい」とばかりに眉根を寄せて身構える。
尾花ちゃんが目覚めて動き出したら、赤い蛇のような《力》でとどめを刺そうとしているのだろう。

きっとその一撃は、尾花ちゃんを抱き上げた葛ちゃんをも巻き込んでしまう。
それだけは止めないと――
だけど、わたしの足腰には力が入らず、立ち上がらなければという意志を、未だ遂行しようとしなない。
はやくしないと。急がないと。葛ちゃんまで尾花ちゃんと同じように――
でも、その心配は杞憂に終わった。
尾花ちゃんは言霊を封じられた口をぱくぱくと動かし、けれど最期まで無音のまままで閉ざし――
今度こそ動かなくなった。

ノゾミ

「ふふふふ――」
その様子を見てノゾミちゃんが笑う。

ノゾミ

「あはははははは――」
楽しそうに高笑いする。
彼女は無邪気で、それゆえに残酷な子だった。
だから彼女は躊躇などせず、当然のようにわたしのことも傷つける。

ノゾミ

「ふふふっ——」

上機嫌な笑い声が、わたしの後ろへと回り込む。
へたり込んだままのわたしの肩に、ノゾミちゃんの手が乗せられた。

その手に重みが加わったかと思うと、肩口からにゅっと顔が突き出されて、わたしの顔を覗き見る。

目が合った。

血溜まりのように赤く濡れ光る瞳に、わたしの顔と月の光が映り込んでいる。

ノゾミ

「うふふっ、ずいぶんとお預けされたけど」

ほんのり冷たい細い手が、肩からわたしの首へと滑り、汗で張り付いた髪をかきあげる。

ノゾミ

「もういいわよね？」

桂

「はっ……やっ、やめ……」

さらされた首筋に吐息がかかり——

桂

「いっ！」

尖った歯が、首筋に刺さった。
穿たれた穴から、わたしの生命が流れ出す。

桂

「いたっ」

わたしの肌に刺さった糸切り歯が、緊張の糸をも噛み切った。

桂

「ちょっと待って！ たんまだよ！」

ぎゅうぎゅうに潰されたバネが飛び跳ねる勢いで、わたしは葛ちゃんの身体を押しつける。

木の上まで飛び上がるほどのジャンプ力を持っている身体でも、体重までは変わってい

なかったらしい。

刺さっていた歯が、傷口を押し広げながら離れていく。

たたらを踏んで尻餅をつきかけた葛ちゃんは、機敏な動きでとんぼを切った。

数歩ぶんの間をあけたところでわたしを睨むその様子は、狩りをする獣が獲物を襲うタイミングを見計らっているといった体。

夜闇に光る獣の瞳が、わたしの出方を見守っている。

桂

「葛ちゃん……」

知らず、じりじり後退りしていたわたしの背が、その先を塞ぐ茂みに触れて音をたてた。どうやらこのあたりは、さきほどの雨風にさらされていた場所らしい。

桂

「ひゃ——っ」

降ってきた雫の冷たさが、わたしに決定的な隙を作った。

だっと地面を蹴立てて飛び掛かってきた葛ちゃんの勢いに負けて押し倒される。

茂みの枝葉がクッションの役目を果たしてくれたので、頭を打って昏倒するようなことはなかったけれど、きっと全身擦り傷だらけ。

桂

「——」

反射的につぶってしまっていた目をあけると、かっと開いた葛ちゃんの口。駄目だ。この体勢から押し返すのは無理——そう観念したその瞬間。

「そこまでにしてちょうだい」

凜とした声と青白い光が、わたしと葛ちゃんの間割り込み弾け——

葛ちゃんが跳ね飛ばされた。

青白い、月光そのものに形を与えたような蝶。

その蝶が群れて作った光の幕の向こうから、着物姿のあの女性が姿を現す。

桂

「あ……オハシラサマ……」

オハシラサマ——経観塚の神様。

なるほど、神様ならば神様を止められるという、まっとう至極な論法だ。

そういえばオハシラサマは、尾花ちゃんのことを知っていたみたいだった。

オハシラサマ

「大丈夫だった、桂ちゃん？」

オハシラサマは、わたしの首についた傷を見て柳眉をひそめた。

わたしはそれを手で隠し、平気な顔を取り繕う。

桂

「えっと……わたしは大丈夫だけど……」

だけど——

跳ね飛ばされた葛ちゃんを見る。

葛

「……………」

葛ちゃんはぺたりと尻餅をついて座り込み、ぼうっとした視線を宙に泳がしている。

尾花ちゃん譲りの、あの鬼灯のような瞳の色はすっかりと失せ——

爪も牙も見当たらない普通の小さな女の子は、すっかり元の葛ちゃんだった。

桂

「葛ちゃん！ 葛ちゃん！」

わたしは駆けより肩を揺さぶる。

桂

「葛ちゃん！？」

葛

「……あっ」

顔を覗き込んで目を合わせると、ゆるゆると瞳に光が戻っていく。

そして、さまよっていた視線が一点に止まる。

わたしには直接は見えないけれど、きっとそこには夜目にも鮮やかな赤が。

葛

「桂おねーさん、その傷……」

わたしの首筋にある、血を流す痕の深さを測るようにじっと見つめてつぶやく。

葛

「それ、わたしがやったんですね？ 薄幕をかけたみたいに霞んでますけど……わたしが

おねーさんを……」

自分の口元を手でこすり、その手についた血をみて震えだす。
それは少しのわたしの血と、多くを占める尾花ちゃんの血。

葛

「あ……あぁっ……」

桂

「……葛ちゃん？」

葛

「やっぱり……駄目です……」

葛

「やっぱりわたしは……駄目なんです……」
つかんだわたしの手を怖れるように、肩を小さくして身体をすりとすり抜けさせて。

葛

「わたしと一緒にいたから尾花は死んじゃって、桂おねーさんはそんなふうになって……」
ざっと一歩、後退りして。

葛

「駄目なんですよ！ わたしみたいに普通じゃないのは、誰かといったら駄目なんですっ！！」

離れた一歩分の隙間をわたしが埋めるより先に、身をひるがえして走り出した。

桂

「ちょっと、葛ちゃんっ！！」
葛ちゃんが走っていく。
一度は追いついたはずの背中が遠ざかり、夜の闇へと消えていく。
そして葛ちゃんは見つからなかった。
朝がきても、その次の朝が来ても——

この夏が終わっても。

『たいせつなひとが、いなくなってしまった』
それがわたしの夏だった。

桂

「——っ！！」
異物が入ってくる痛みに吐き出しそうにな悲鳴を、歯を食いしばって嘔み殺す。

ずずっと食い込んでいた杭が抜かれると、その穴から血が湧き溢れる。

いや——

だからせめて、わたしの血を全部吸い尽くして、誰にも負けない強さを身に付けて。

もう、大切な人を失わなくてすむように。

もう、悲しい想いをしなくてすむように。

桂

「ああ……」

月が揺れる。

空が揺れる。

涙で世界が滲んでぼやける。

ゆらゆらと、世界が揺れて。

ゆらゆらと、世界が遠ざかる。

深いところへ沈んでいく。

わたしの意識が沈んでいく。

葛

「……………」

微かな唇の震えに、返事が返されたような気がした。

幻聴——かもしれない。

いつものように笑って返事をして欲しいという、わたしの希望が生んだ幻。

だってわたしはもう——

夜明けはまだ遠いというのに、視界はうっすら白んで明るく。

天国のお母さんが迎えに来てくれたせいだと思えば、ずいぶんと綺麗なイメージなんだけれど、もっと身近で似ているものに思い当たる。

ずっと目の前が白くなるこの感覚は、お風呂でのぼせたときの立ちくらみに良く似ている。

桂

「はははは……」

暢気な自分がおかしくて、力のない笑いが漏れた。

この場合、立ちくらみよりはお迎えの方が近いはずなのに。

葛

「……あっ」

ほら、幻聴だけじゃなく、幻覚まで訪れた。

葛

「……おねーさん？」

葛ちゃんが見慣れたいつもの姿に見えるのは、きっと霞んで不明瞭なところを、記憶が補完しているからだ。

葛

「桂おねーさん？」

少し強めに揺さぶられて、白い霧（もや）が一瞬晴れる。

桂

「——あれ？」

それでも、葛ちゃんはいつものままで。

わたしは気力を振り絞り、目をしばしばと瞬かせた。

そして、噛まれた傷に意識を向けると——

桂

「いたっ」

痛みが霧を切り裂いて、視界も意識も鮮明に晴れ渡る。

葛

「桂おねーさん大丈夫ですか？」

桂

「……葛ちゃん？」

手を伸ばして、狐の耳が消えた葛ちゃんの頭を撫でまわすと、血の気の失せたわたしの手がすっかり冷え切っていたせいもあるだろうけど——

それはとても温かで。

幻覚などではありえなかった。

本当に葛ちゃんは、すっかり人間の葛ちゃんに戻っていた。

それで。何だか安心したわたしは——

桂

「ね、ちょっと寝かせて」

ついうとうとと、うとうとと——

葛

「また襲っちゃうかもですよ!？」

桂

「別にいいよー」

眠りの淵へ引きずり込まれていく。

葛

「桂おねーさん！」

大丈夫。

白い闇に飲み込まれ、零に還るような感覚ではなく、馴染んだ眠りの気配だったから。

目が覚めたらわたしは元気になっている。

そのまどろみの中で考えた。

ふわふわとした髪質の葛ちゃんの頭は、少しだけ尾花ちゃんにさわり心地が似ているかもしれない——

そんなことを考えた。

ノゾミ

「んっ……んくっ……」

流れた生命はノゾミちゃんに飲み干され、彼女の内に吸収される。そんな《力》の移ろい流れる様子が——

葛

「……………」

葛ちゃん虚のような瞳に映されていた。

月光にさらされ青白く染まった葛ちゃんの顔は、顔色だけでなく表情までもなくしてしまっている。

尾花ちゃんのものと一緒に、自分の魂まで欠いてしまった——

そんな抜け殻のような葛ちゃんが、尾花ちゃんの亡骸を抱いて立ち上がった。

ノゾミ

「あら——」

そちらに興味に向いたのか、首筋から唇が離れ、ほんの少しだけ自由を取り戻すわたし。

葛ちゃんの瞳に昏い炎（ほむら）が渦を巻いた。わたしの血が火種になってしまったかのような、赤く濡れた昏い光だった。

桂

「つ……葛ちゃん!？」

悲鳴じみたわたしの声にも反応を示さず、奈落の底へ到る穴のような瞳を、尾花ちゃんへと移す様子はまるで——

その虚の中に尾花ちゃんを納めてしまいそうな気がして。

その奥にある炎で、尾花ちゃんの亡骸を焼いてしまうのではないかと、そんな気がして。

桂

「————」

わたしは追ってかける言葉を持たずに、ただその行く末を見守ることしかできなかった。

ノゾミちゃんたちふたりの鬼も、その鬼気迫る状況に見入っている。

青白い月と六つの瞳が注目する中、葛ちゃんは儀式のように厳かに、かつては鬼(かみ)であった存在の名残を捧げ持ち――

そのまだ温かく柔らかそうな、白いお腹に顔を埋(うず)めて――

ノゾミちゃんがわたしにそうしたように――

その歯を思い切り突き立てた。

見る間に白を染める赤。

月光の下で濡れ光る赤。

虚ろになってしまった自分の中を満たそうとするように、葛ちゃんはその赤いものを飲み下す。

桂

「ちょっと、葛ちゃん、何やってるの!？」

尾花ちゃんを亡くしてしまったショックに錯乱してしまったのだろうか――

いや、そうじゃないのはわかっている。

それを内へ取り込むにつれて、葛ちゃんの瞳の奥の炎がより赤々と、より明々と輝いていく様子がはっきりと見て取れる。

ミカゲ

「姉さま」

ノゾミ

「そうね」

双子の鬼が、表情を厳しくして身構える。

それも当然。

彼女たちの言う通り、尾花ちゃんが言霊使いの鬼神なのだとしたら――

彼女たちの言う通り、血に《力》が宿るのだと言うのなら――

ノゾミ

「ミカゲ」

ミカゲ

「はい——」

姉鬼に命じられた妹鬼が、身体から立ち昇らせた赤い光を解き放つのと同時に、葛ちゃんが顔を上げた。

血に塗れた口元に覗く、肌を穿つ伸びた牙——
月よりもなお猛く輝く、獣の相を帯びた瞳——
それらはすでに人のものではなく——

人に在らざる鬼の動きで、葛ちゃんはそこを飛び退いた。

数メートルにも及ぶ跳躍で頭上遙かに巡る木の枝まで達し、その枝のたわみが戻る弾みのぶんを増して、より一層の速さで地上へと戻ってくる。

そして、遅れて舞い落ちる木の葉の中を、まるで狐が憑いたかのように——
言霊を封じられてさえいなければ、尾花ちゃんならそう鳴いたであろう鋭さで、一言、高く言い放つ。

葛

「——ケン！」

びりびりと空気が震える。

その音声（おんじょう）は、空気のみならず、宙を舞うたくさんの木の葉を震わせて——

果たしてそんなことがありえるのか。鳴り響く音叉の歌が、対となる音叉をも歌わせるように、山中の木の葉という木の葉が震えだす。

山全体が葛ちゃんの一言に追従し、無限にも思えるほどの音が重なりあい、天をも揺るがす波となり、いずこからともなく強い風を吹かせた。

その風は雨粒混じりの風だった。

月は皓々と照り輝き、それを隠す雲はない。

にもかかわらず横殴りの雨が降っている。狐雨が降っている。

ノゾミ

「——！？」

彼女たちは、まやかしを使うあやかしだ。

痛みが幻覚を払うように、強い光が幻灯の映す絵を霞ませ消してしまうように、確かに存在する事象はまやかしの《力》を弱める。

風は音を、雨は光をかき乱し、彼女たちの術の効力を——もしかすると彼女たちの存在自体を否定する。

ノゾミ
「くっ——」

人の形を成す己の像をぼかしたノゾミちゃんが、歯嚙みしながら跳び退る。

本当に不思議なことに、雨風は数メートル程度の局地的なもので、彼女は天候異変を避けて跳んだ。

そのノゾミちゃんに向かって、葛ちゃんはさらに一言を言い放つ。

葛
「——コン！」

今度は大地が震えた。

重力に反して巻き上がる砂礫（されき）が、鬼は外の豆のように、逃げる鬼へと追い討ちをかける。

ノゾミ
「——このっ!!」

追われた鬼は幾重にも張った光の幕を盾にして、やっとのことでその弾幕から身を守る。

素人目にもその《力》の差はあまりに一方的に見えて。

桂
「すごい……本当に神様なんだ……」
わたしはそんな、ため息ともつかない言葉を漏らした。
ケンとコン——

それはよく知られた擬態語としての狐の鳴き声。

その一方で乾坤一擲という、運命を賭してのるかそるかの大勝負に挑むことを示す言葉がある。

その乾坤とはサイコロの奇偶の目のことで、つまり一発勝負の半丁博打となるわけだけど——

本来は易の算木に現れる、世界を表す事象——八卦のうちのふたつなのだと、物知りクラスメートのお凜さんが教えてくれた。

乾と坤は、天と地を表す言葉なのだと。

そして葛ちゃんは——

葛
「——乾！」

その言霊で天候を変えて。

葛

「——坤！」

その言霊で大地を揺り動かす。

ただ一言を言い放つだけで、天地をも操る言霊使いの鬼神——

その鬼神の封じられていた《力》を、血を介して受け継いだ葛ちゃんが振るう。

神様の《力》のうちのどれほどを人の身が継げるのか定かではないけど、葛ちゃんとしてただの人に収まるような《器》ではない。

葛ちゃんは、鬼切部なんていう鬼と戦う人たちの頭目になる家系で生き残るために、天分の才を磨きつづけてきた神童なのだ。

もっともただの人ならば、こんな状況に陥ってはいなかったのだけれど——

結果として、ノゾミちゃんは邪魔者を片付けるつもりで災厄の箱を開けてしまったのだ。

ノゾミ

「ねえ、ミカゲ。これは逃げるべきかしら」

ミカゲ

「はい——」

さすがに姉妹だけあってそれ以上の相談は必要なく、実体を持たないまやかしだけあって逃げ足は速かった。

ミカゲ

「では姉さま——」

ノゾミ

「そうしましょう」

現れたときと同様に、鈴の音を響かせながら夜の闇の中に溶け込んでいく。

助かった——

もとより腰が抜けていて、ずっと座り込んだままのわたしだったけれど、今度こそ身体から力が抜けていく。

そのわたしの前に。

葛

「……………」

瞳を人に在らざる色に染めたままの、葛ちゃんが立っている。

桂

「……葛ちゃん？」

葛ちゃんは無言のまま、わたしに向かって手を伸ばしてくる。

うっかりと言霊を使わないように、黙っているのだろうか――

いや。

今の葛ちゃんの瞳には、葛ちゃんらしい光――それは見た目の問題ではなくて、その底にある機知の輝きのようなもの――が感じられない。

かといって、そっけないようでそれなりに優しい、尾花ちゃんの円らかな瞳とも異なっている。

相変わらず焦点の定まっていない、自失状態のそれにちらついているのは、本能の域にまで遡る原始の炎。

先ほどの力任せな言霊の行使は、きっと防衛本能のようなものが外敵を排除するためだけに行わせたもの。

そして大量の《力》を使った直後なだけに、その炎の中に読み取れる欲求は――

――ぞくり。

真夏の夜にもかかわらず、わたしは身震いした。

葛ちゃんは飢えている。

今の葛ちゃんもまた鬼なのだから、あの子たちと同じように、わたしの血を欲しがっているのだろう。

爪の伸びた手がわたしに伸ばされる。

その指先がわたしに触れた。

それが肌を滑っていく。

どこから血を飲むべきかと、わたしの身体をなぞって探る。

服の上はパスされて――

髪の毛は当然。ちよっぴり肉付きいいかもしれない頬の上もするすると通り過ぎていき――

その指は皮が薄くて柔らかい、だけどその下には勢い良く血を流す頸動脈がある、首筋に触れて動きを止めた。

守るように引かれた顎をくっ持ち上げられて、剥き出しになった首に葛ちゃんの顔が近づけられる。

過剰なほどに敏感になった肌が、産毛を揺らす空気の動きを、近づいてくる熱の存在を感じ取る。

桂

「うっ……」

心臓がこれ以上ないほど忙しく脈打ち、そのせいで自己主張を増した血管を目指して、唇が近づいてくる、

葛

「は……」

熱く湿った吐息がかかる。

牙は大きな血管を傷つけたらしく、湧き溢れるなんて表現よりは、嘔き出すと言ってしまった方がよりの的を射ているだろう。

その勢いに負けないように、葛ちゃんは細い喉をごくごく鳴らして飲み干していく。

桂

「……仕方ないよね」

うん、これは仕方のないことだ。

抵抗する気は元よりない。

この血が全部欲しいなら、全部飲ませてあげようと思っていた。

だって、葛ちゃんのものになるなら、あの子たちのものになるよりずっとましだし。そもそも、葛ちゃんがこんな風になってしまったのは、わたしに因があるのだから。

だから、葛ちゃんが望むのならば、わたしは食べられてしまってもかまわない。

だけど、それでだだひとつ悔いが残るとしたら、葛ちゃんをひとりにしてしまうこと。

偉そうに知ったふりして「ひとりは駄目だよ」なんて言っておきながら、葛ちゃんの側にいてあげられないだなんて。

ごめんね、葛ちゃん……

ノゾミ

「桂……」

猫がじゃれ付いてくるような、柔らかな重みがのしかかってくる。

重いというほど重いわけではないのだけれど、わたしはそれを払いのけられない。

ノゾミ

「うふふ、すべすべ。昨夜の餌とは大違い。やっぱりあなたはご馳走よ」

桂

「あ……」

だんだんと目の前が暗くなる。

暗いところへ沈み込んでいくわたしの意識。

それとは反対に、暗いところから浮かび上がってくる泡のようなものがある。

これはたぶん記憶というものだろう。

これが意識に触れることで、過去の出来事がまざまざと再生されるのだ。

わたしは覚えていないことがたくさんあるから、そのうちのどれかだろうか。

沈んでいくわたしの意識が、浮かんでくる泡沫に触れた。

私は暗い部屋の中に座っていた。

陽にあたっていない肌は病的にまで白い。

人の足音が聞こえた。お腹は空いていないけれど、もう食事の時間なのだろうか。
この部屋の中で時間を知る方法があるとすれば、それは食事の時間のときだけだった。
もっとも、定時に持ってきていないのであれば、それも不確か極まりないのだけれど。

世話役

「望様——」

私の名前が呼ばれて、格子戸が開けられる。

私には開けることができない、外側からかんぬきの掛けられた戸が開かれる。

望

「もう食事の時間なの？ 私、お腹は空いていないのだけれど」

世話役

「いいえ、望様の欲しがっておられたものを差し入れても良いとの許可が出ましたので——」

望

「私、何かを欲しがりました？」

この場所から出して欲しいという願いはある。

だけどそれは適わない望み。

私は物心ついてからこの部屋を出たことがない。

私は外の世界を知らない。

望

「何か面白い書でも入りましたか？」

私が外の世界を知る、唯一の手段が書だった。

世話役

「いえ——鏡を——」

鏡なんて頼んだらどうか。

思い出した。ふと悪戯心で頼んだ覚えがある。

望

「そうでした。確かにお願いしましたね」

世話役

「望様と同じ銘をもつ鏡だそうです——」

望

「望と？」

世話役

「いえ——良月と申します——」

望も良月も、満月を表す言葉だ。

月の顔を見ることは忌むべきこと——そう言われることがままあると、知らぬわけではあるまいし。

これは私の名前と、私の行為の両方に対するあてつけなのだろうか。

良月は祖父の代に、唐より持ち込まれたものを譲渡されたものだ。貴重なものらしいけれど、そんなことは私には関係ない。

私は鏡を覗き込む。

そこには青白い肌をした、癩（かん）の強そうな少女の顔が映っている。

紙燭の揺らぎのせいなのか、その顔が私をあざ笑っているように見えた。気に食わない。

望

「これが——あいつの顔なのね」

憎い、憎い、あの娘の顔。

世話役

「望様のお顔でございます——」

望

「同じなのでしょう」

吐き気がする。

私は望。

藤原望。

大王（おおきみ）の覚えもめでたく、都に権勢を振るう家に生まれた姫。

いや——

家がいかに立派であろうと、私には関係のないことなのだ。

私は屋敷の奥に隠されている、存在しないはずの人間なのだから。

存在しているのは、私と同じ顔をした妹。

私という存在などつゆも知らず、花よ蝶よ、藤原の姫よと愛でられている妹。

私と彼女は同じ日に、同じ胎から生まれた、同じ顔を持った姉妹だった。

双子は縁起が悪いと忌まれた私は——

望

「こほっ、こほっ」

血の絡んだ咳が出た。うっとうしい。

私の方が隠されることになったのは、これのせいに違いない。

間引かれていないだけ、食事や薬が与えられ、良いと思うべきなんだろうか——

口をぬぐって鏡を見る。
そこには憎い顔が映っている。
ふと、誰かに見られているような気がしたのだけれど——
おそらく鏡に映った己の視線だろう。
気にしないことにした。
重宝はしているけれど、鏡は嫌いだ。

世話役

「望様——」

私の名前が呼ばれて、格子戸が開けられる。

私には開けることができない、かんぬきの掛けられた戸が開けられる

望

「もう食事の時間なの？ 私、お腹は空いていないのだけれど」

世話役

「いえ——ここから移っていただきます」

望

「外に出していただけるの？」

もしかしたら妹が死んだのかもしれない。

それで死んだ妹の代わりに、私が陽の当たる場所へ出してもらえることになったのかもしれない。

世話役

「いえ——移動の間だけでございます——」

望

「そう……」

世話役

「それから——移動の間も車にこもっていただきます——風が障りますから——」

私の望んだ筋書き通りには、物事は動かないものらしい。

望

「だけれど、ここから移されるだなんて初めてよ。一体何があったのかしら？」

世話役

「館に——火を掛けられました——」

望

「火を？」

世話役

「はい——別の館に移っていただきます——」

望

「身の回りのものは？」

世話役

「何も持たずに——」

望

「良月は持っていてもいいかしら？」

世話役

「はい——」

私は世話役に連れられて、奥の部屋の外に出た。

初めて知る外の世界は、ゆらゆらと揺れる赤に彩られていた。熱い。

これは自由になる好機だった。

今、私がいなくなったところで焼け死んだものだと誰もが思うだろう。

いや——

そもそも私は、表立っては存在しない隠され子なのだから、存在自体を知らないものばかりなのだ。

焼け死んだものと思うのは、ごく少数の事情を知るもののみ。

その数少ないひとりである——

私は私の前に行く、世話役の頭部をじっと見る。

重いかねの鏡で叩けば、非力な私でも頭を割ることぐらいはできるだろうか。

ほんの三呼吸ぶんの躊躇の末に、私は良月を振り上げた。

その間は罪悪感によるものではなく——

ただ、あの部屋から一歩たりとも外に出たことのなかった私が、すべてを捨てて生きていけるのかどうかという、未知への恐れ——

ただそれだけの理由だった。

構うものか。

自由も何もない生など、死んでいるのと大して変わるものではない。

構うものか。

死など今更だ。どこで死のうと屋敷の奥のあの暗い部屋で朽ちるよりはましではないか。

そうだ、構うものか——

結局、わたし程度の力では、一撃で済ませることはできなかった。

世話役はくるぶしに届くほどに伸びた、私の髪を握り締め、執念深く離さなかった。

仕方がないので髪を切ることにした。幸いこの世話役が、もしもの折の用心にと懐剣を所持していることを知っている。

最も、彼女はそれを役立てることができなかったのだけれど——

——ふつり。

代わりに私の役に立ったのだから、何も問題はない。

十年以上の年月をかけて、私の中に降り積もっていた澱が一気に取り払われたような感覚とともに、色の抜けた髪の手が落ちていった。

ついに私はくびきから解き放たれた。頭が軽く、身体が軽い。

寒い——

白いものがちらついている。

髪を切ったときには、自由になった喜びを感じたけれど、こう首元が寒いと少しだけ後悔の念が湧いてくる。

望

「ごほっ、ごほっ——」

雪の積もった山の中に、赤い花びらが散った。

苦しいのは嫌いだけれど、ほんの少しだけ綺麗だと思った。

生まれてからずっと、狭い奥の部屋の中しか歩いたことがない私の脚は、長旅に耐えられるだけの強さを持ち合わせていなかった。

脚だけでなく、身体ももう動かない。

望

「あそこから出ても、自由にはなれないのね……」

いや、最初の数日は自由だった。

けれど、それだけでは足りない。

屋敷の奥に閉じ込められていた十年を越す月日とは、見合うはずがない。

望

「自由になれないまま死ぬのね……」

——

「そうか、死ぬか」

望

「どなた？」

私は凍えた大地に身を横たえたまま、首だけを巡らせて声のぬしを探す。

誰にも知られず逝くよりは、誰かに見届けてもらえるのは、随分とましなのではないだろうか。

少なくとも私という存在の証しのようなものを、人の世に残せるかもしれない。

だけれど——

身体は雪に溶け込むように冷え、その中で白く霞んでいく私の目に映った声のぬしは——

主

「この山に住まう、人ではないものだ」
人の形をしているけれど、人の世のものではないものだとわかってしまった。
雪に滲む赤い気配は——

望

「山神さまね。あなたは蛇の神さまかしら。それとも狼の神さまかしら」

主

「さて——どちらだろうな」

望

「私は別に、どちらでも気にしないわ」
そのどちらでもなくても、別に構わない。
これまで生きた十年少しの歳月で、私は神仏への祈りも、人への呪いも、すべてが無為であると思い知らされた。
だけれど、その神自身が目の前にいるのなら、願いを口に出してみるのもいいだろう。
あの暗い場所からのものとは違い、その言葉は確かに届くものなのだから。

望

「神さまならば、私の願いをかなえてくださらない」

主

「願いとはなんだ」

望

「自由になる前に死ぬのは嫌です」
もちろん届くだけで、適うものだなんて思っていない。
神にとって人ひとりの命など、実は大したものではないのだから。
だから、これは鏡に向かってつぶやく繰り言のようなものだ——
私以外に誰もいない、あの部屋でしていた戯れのようなものだと思っていたのだけれど——

主

「自由ではないのか」
山の神は私の言葉を耳に入れ、のみならず問答する気があるらしい。

望

「自由にならぬ身体に捕らわれた魂の、どこに自由があるのでしょうか」

主

「現身はいらぬというのか」

倒れたまま、動くことすらままならない今の状態は、あの部屋にいるのと何ら変わりがない。

だから、少なくとも衣食に困ることのないあの部屋を捨てて、自由であることを選んだ私としては、何よりも自由を選ぶ。

だけれど、こんな身体でも、いらぬと言うのは死ぬことと変わらないのではないか——死ぬのは嫌。

こんな身体はどうなってもいいのだけれど、私という現象がなくなってしまうのは嫌。

だから私は問いに答える言葉を持たず、良月に映った姿をじっと見つめるに止まった。

山神さまが鏡越しに私に瞳を合わせる。

不思議な魅了の《力》を秘めた、満月のような金色の視線が私の瞳を射抜いている。

主

「その鏡におぬしの魂を依らせてやることはできる」

望

「この身体から離れられるの？」

主

「鏡には捕られるが、抜け出すことは自由だ」

望

「生きたまま霊になれるというの？」

主

「依る呪物が壊れぬかぎり滅びぬ」

良月——この唐渡りのかねの鏡は、十年、百年のみならず、千年以上の時を経ても朽ちずにいるかもしれない。

少なくとも、今この瞬間にも生命の灯を消してしまいそうな、この弱い身体に比べれば。

望

「……………」

もう話すことすら辛い身体で答えを告げる。

そして私は人ではないものに成った。

わたしを鬼に変えたのは、主さま——私は山神さまのことをそう呼ぶことにした——の、ほんの気まぐれだったのかもしれない。

気まぐれだろうと何だろうと構わない。

主さまは、私に自由を与えてくれたのだから。

主さまと——私のあるじと認めても、主さまは私を縛らない。

私は自由になったのだ。

そして世界は、あの部屋の中にも、読んだ無数の蔵書にもない、新しいもので満ち溢れていた。

楽しい。

ノゾミ

「ねえ、主さま、知っていて——」

ノゾミ

「ねえ、主さま、今日は都で——」

ノゾミ

「ねえ、主さま、私は——」

ノゾミ

「ねえ、主さま——」

ほとんどの場合、主さまは応えて下さらない。

だけれど機嫌がいいときには、私の相手をしてくださる。

だから私は、返事があるとなかろうと、色々なことを話すようになった。

いくら話をしても咳が出ないのもいい。本当にわたしは生まれ変わったのだ。

ノゾミ

「ねえ、主さま——」

それが私の春だった。

そして、やがて、夏がきた。

槐の白い花が咲く、嫌いな季節がやってきた。

『たいせつなひとが、いなくなってしまった』

贅の血を手にしようとなさった主さまが、役行者と観月の民に封じられてしまった。

私が都で聞いた、贅の血を持つ竹林の長者の姫の話をしたばかりに、役行者と観月の民に封じられてしまった。

そして私は——

ひとりになってしまった。

ノゾミ

「主さま——」

ねぐらに帰っても、そこには誰もいない。

ノゾミ

「主さま——」

しばらく私は信じられずに、今まで通りの暮らしを続けることにした。

応えが返ってこないのはいつものことだから。

それからしばらく、私はあの場所へ行ってみることにした。

強い《力》に阻まれて、封じの柱に近づくことすらできなかった。
悔しい。
私は悔しさのたけを、ねぐらの中で語り続けた。
もちろん応えはない。
それは主さまがいた頃と同じ。
だけれどずいぶん長く続いたので、私は少し寂しくなって、自分で応えを返してみた。

ノゾミ

「——そう」
単なる相づちをたまに打つ。
少し寂しさが薄れたような気がした。

いつからだったろう——
ふと、誰かに見られているような気がした。

視線は良月からのもの。

覗き込むと中にいる少女と目が合った。
私とそっくりな——だけれど私は、こんなに辛気臭い顔をしていただろうか。
まだ人間であったころの私は、こんな顔をしていたかもしれないけれど——
ならばこれは——
これはきっと、私の妹の顔だ。
きっといまだ人の身のままの、私の妹の顔に違いない。
昔は憎くて憎くてたまらない顔だったけれど、今ではこんな顔でもあるだけかもしれません。
う。
ましとはいえ、可愛がる気にはならず、私はつんけんとした態度をとることになる。

ノゾミ

「あなたなんて嫌いよ」

さまざま呪いの言葉をはきかけると、その顔は萎れたものになる。

ノゾミ

「どうしてあなたがここにいるの？」
そういえば昔、鏡は遠く離れた地を映す呪具として使われることがあると、書物で読んだ覚えがある。

ノゾミ

「お父様に可愛がられていたのではなくて？」
だけれど、花よ蝶よと愛でられて笑っているはずの妹が、こんな顔をしているのだろう。
ああ、そうか——

ノゾミ

「あなたも捨てられてしまったのね？」

いつかの私と同じように。

ノゾミ

「少しは言い返ささいな、情けない子。私は弱い子は嫌いよ」
いつかの自分を見ているようで。

ノゾミ

「ねえ、何とか言ったらどうなのかしら？」

——

「ですが、姉さま——」

ノゾミ

「ですがじゃないわよ——あら？」

——

「姉さま、どうかなさいました？」

ノゾミ

「……あなたは何という名前だったかしら？」

——

「ミカゲ——」

そうか。妹も父さまに捨てられてしまい、私と同じ道を辿ったのか。
それで良月に依っていたのだとしたら——
それならば、誰かに見られているような気がするのだから。

ノゾミ

「どうしたのかしら？」

ミカゲ

「いえ——」

それにしても、ミカゲはいつも私の方を見ているような気がする。

ミカゲ

「姉さま——」

ノゾミ

「なに、ミカゲ」

ミカゲ

「主さまのことですけど、お助けしないのですか」

ノゾミ

「どうやってお助けすればいいのか、分からないのなもの」

あれからどれぐらい経ったのか。

あれは夢幻などではなく、主さまは本当に封じられてしまい、助けなければもう戻ってこないのだということを、私は受け入れていた。

ノゾミ

「——あら？」

ミカゲ

「姉さま、どうかしましたか？」

ノゾミ

「私、あなたに主さまのことを話したかしら？」

ミカゲ

「来る日も、来る日も」

そうだったのだろうか。

きっと、そうだったのだろう。

ミカゲ

「それで姉さま——」

私はミカゲに視線をやって、話を聞いていることを示す。

ミカゲ

「聞いたことがあります。贄の血に陰陽揃うとき、役行者の封じを崩すことができると」

ノゾミ

「陰陽？」

ミカゲ

「男女の双子です」

ノゾミ

「双子——」

嫌なことを思い出した。

ノゾミ

「どうせ片方は鬼にされてしまうんだわ」

今となっては両方そろって鬼なのだけれど。

ミカゲ
「姉さま」

ノゾミ
「何でもないわ。それで何？ 柱の血筋の羽藤の家に双子を生ませるだなんて、私にできることなのかしら？」
そんなこと、主さまにだってできるかどうか。

ノゾミ
「そんな果報、寝て待つしかないんじゃないんで？」

ミカゲ
「はい」

ミカゲ
「ですが姉さま、主さまの魂は、封じの鬼の木が花を散らすたびに少しずつ削られています」
それが役行者の封印。
いつか遠い未来、主さまはなくなってしまう。

ノゾミ
「その邪魔ならできるというのかしら」

ミカゲ
「はい——」
そうだ。それぐらいのことならきっと。
それにしても、ミカゲの方からこんなことを言い出すだなんて。

ノゾミ
「あなたも主さまのことが好きなのね」
私に新しい生命の形を与えてくださった主さま。
きっとミカゲもそうなのだから、ならば答えは決まっている。

ミカゲ
「はい——」
私は笑って頷いた。
そうだ、私たちが主さまをお助けしなければ。

そして私たちは封じの鬼の木を弱めるために、《力》を使い始めた。

だけれど、私たちではあの木に近寄ることが出来ない。
さて——

ミカゲ

「それなら人を使いましょう」

ひとりではすぐに行き詰まってしまうことも、ふたりで知恵を絞れば、意外に良い考えが湧いて出るものなのだ。

ノゾミ

「ああ、そうね。私の《力》は人に暗示を与えることですもの。それぐらいなら簡単よね」

ミカゲ

「はい、姉さま——」

目に付いた村人を使って、封じの木を弱らせるように糸繰りをした。

やがて暗示をかけて傀儡とした人間に良月を持たせると、色々と便利なことを発見した。

例えば、遠出ができるようになった。

例えば、普段は安全なところに鏡を隠しておくことができるようになった、

例えば、良月自体は結界を潜りぬけることができる——

暗示で捕らえた村人のうちの何割かには、食事になってもらい、私たちは《力》を蓄えていった。

それで少しばかり、いい気になりすぎたのかもしれない。

しばらくすると「神隠しが起こる村」だなんて変に名前が知れてしまったものだから、鬼切部の鬼切り役がこの地へ遣わされた。

そして、良月が依代であることを知られて——

主さまの封じを綻ばせにきた私たちが封じられてしまうだなんて、木乃伊取りが木乃伊もいいところだ。

私たちが封じたのは、若杉某とかいう鬼切部の陰陽師だった。頭ではないものの、かなりの地位に就いているらしい。

ただ封じられるのはしゃくだったので、ひとつだけ暗示を試してみることにした。

あまり強い暗示をかけると、すぐに気取られ解かれてしまうので、弱い暗示をかけてやる。

夢のようなさほど影響力のない形で、慢性的に繰り返される暗示を——

幻影をよくする私にはめずらしい、言霊による暗示を——

それは遅効性の毒。

ノゾミ

「あなたたちは鬼切部。鬼を切るのがその役目。だから観月の民も切らなくては」
主さまを封じた役行者と観月の民——
役行者は人と大差ない刻を生きて死んでしまったけれど、あいつらはまだ生きている。
鬼切部に尻尾を振って、未だに生き長らえている。
だから切られてしまえばいい。たとえ鬼切部が返り討ちにあったとしても、それはそれで私の仇を討ったことになる。
共倒れになってくれるのが一番なのだけれど、そこまでは望まない。ただ、この暗示がかかりさえすれば——

この若杉某が行動に移さずとも、上手くかかってくれさえすれば、言霊による呪は子から孫へと語り継がれていくだろう。
言葉は親から子へ、子から孫へと継がれていくものなのだから。
あまり期待してはいないけれど、この毒が上手く回ってくれるといい。
長く待つのは苦手だから、できれば封印されている間に。

ああ、向こうの封じが完成する——

そして私たちは、暗い闇の中に閉じ込められた。

子供の声
「本当に入るの？」

子供の声
「入るよ。おくらの中には、きっと宝物がいっぱいあるんだよ」
小さな子供の声が聞こえた。
封じの札の向こうから声が聞こえた。

封じられていても、外の音はおぼろげに伝わってくるのだ。
それゆえに何も出来ないこの身が歯がゆくもあり、それゆえに正気を保っていられたともいえる。
主さまは——ご無事だろうか。

子供の声
「こんなのはがしちゃおう」

子供の声
「いいのかな……」

子供の声
「大丈夫。いいから剥がしちゃおう」

封じの札が剥がされていく。
その剥がれた隙間から、心地よい薄闇が流れ込んでくる。
私のように人であることを止めたものにとって、真昼の光は毒なのだけれど、漆黒の闇

というのもいただけない。

鏡というものは、跳ね返す光がなくては意味のないものだから。

同じ顔をした子供がふたり、良月を覗き込んでいる。

私は鬼の嗅覚で、この子供たちが贄の血の持ち主であることを知った。これは柱の血筋の子。

まさか、良月の封印が解かれるのと、贄の血に陰陽揃うのが同時に訪れるだなんて。

私はあまりの嬉しさのあまり。

ノゾミ

「ふふふふふふ——」

知らず、笑い声を漏らしていた。

双子の片方

「だ、だあれ？」

ノゾミ

「私はノゾミ——」

その名の通り、私の望みは叶えられる。主さまを助け出して、私と話をしてもらうのだ。

私の重要性もわからずに剥がしてしまうような子供に暗示をかけるなど、とても容易いことに思えた。

さて——

私たちと主さまを解放してくれる、この間抜けな生け贄の名前を聞いておくのでしょうか。

ノゾミ

「あなた、名前は？」

双子の片方

「けい……はとうけい」

それは——

それは、わたしの名前だ。

わたしは私ではなく、わたしはノゾミではなく——

わたしは羽藤桂。

深いところへ沈んでいた意識は、上に向かって浮上していく。

桂

「……ぷはっ」

水面に顔を出して、息継ぎをする。

ざぶんと陸に上がると、身体は全然濡れていない。

桂

「ううっ、ここはどこだー」

夢の中なのは間違いないだろう。

足元はすでに固い地面で、さっきまで潜っていたはずの水辺はどこかに消えてしまった。

こんなにいいかげんな地理は夢だからこそ。

きっと「光あれ」なんて言ったら光が出てくるのに違いない。

鬼灯提灯のような明かりが点った。ゆらと上下に揺れながら、赤い光が近づいてくる。

祭囃子の代わりに鳴るのは涼やかな鈴の音——

ノゾミ

「何であなたがここにいるの？」

桂

「あ、やっぱり」

ノゾミ

「あなた、ついさっきまであんなに泣き叫んでいたのに、随分と余裕があるのね」

桂

「うん、何だかノゾミちゃんのこと理解した」

ノゾミ

「勝手にしないでくださらない？」

桂

「んー、でももう、そんなに恐くないよ」

ノゾミ

「……………」

思いっきり呆れられてしまった。

そりゃあ、わたしだって少しは態度が極端なんじゃないかなって思うけど——

いろいろ事情を把握して、話せば通じることも結構ありそうだとわかった今、前ほど怖いとは思わない。

人が暗闇を怖れるのは、そこで何が起きているのかを見通せない、未知に対するものなのだという。

人が死を怖れるのは、その先がどうなっているのか明らかではない、未知に対するものなのだという。

わたしがお化けを怖いと思うのは、言葉も理念も通用しない、まったくの異物としていたからなのだろう。きっと。

だからノゾミちゃんのごときは、前ほど怖いとは思わない。

桂

「それで、ここは一体どこ？」

ノゾミ

「ここは——」

がらんとした暗い部屋。
廊下とは太い木の格子で隔てられている。

ノゾミ

「ここはわたしの最初のすみか」

焼け落ちるまでの十年と少しの歳月を、ノゾミちゃんが過ごした捕らわれの場所。
これはわたしが捕らわれているのか——
それともノゾミちゃんが捕らわれているのか。

ノゾミ

「それで、何であながここにいるの？ ミカゲさえ立ち入らせたことのない場所なのよ」

桂

「それはたぶん、ノゾミちゃんが二回もわたしの血を飲んだから——」
贅の血は《力》となって、身体の隅々にまで浸透するから——

桂

「わたしの心まで、ノゾミちゃんの中に入ったんだよ、きっと」

ノゾミ

「そんな、いいかげんな」

桂

「でも、血は神霊そのものを表すって……」
血に霊が宿っているなら、心も一緒に宿っているはず。じゃないと魂だけの幽霊には、心が宿っていないことになってしまう。

桂

「それにね、そんなこと言ってたら、ノゾミちゃん存在自体が、いいかげんだと思うんだ」

桂

「どうやったら人間が鏡に取り憑いたりできるわけ？」

ノゾミ

「うっ……」

神様だとか何だとかを認め始めたら、基本的になんでもありになってしまうんだから、いいかげんもありだと思う。

そもそも丁度好い按配という意味なんだから、適当も大変結構なことじゃないか——
ういえばこの適当という言葉だって——

閑話休題。

脱線しそうになる思考を減速して、心積もりの方向へと軌道修正。

桂

「それにね、ミカゲちゃんって何なの？」

ノゾミ

「何って、あの子は私の妹よ。お父様に捨てられてしまった不憫な子——」

桂

「それって、なんか、おかしくないかな」

ノゾミ

「何がおかしいのよ」

桂

「何でノゾミちゃんの妹さんが、お父さんに捨てられなきゃいけないの？」

桂

「ノゾミちゃんだって閉じ込められてはいたけれど、出ていったのはノゾミちゃんの意志であって、お父さんは関係ないよね？」

精神的には——どうかはよくわからないけれど、今はひとまず横にどけて。

桂

「それに、ミカゲちゃんっていつ鬼にしてもらったの？」

桂

「ミカゲちゃんがノゾミちゃんの前に現れたのって、主が封じられた後だよ？」

ノゾミ

「それの、何がおかしいの」

桂

「ノゾミちゃんが人から鬼に成ったのは、主にしてもらったからだよね？」

ノゾミ

「ええ、そうよ——」

桂

「それじゃあミカゲちゃんは？」

ノゾミ

「——え？」

桂

「ミカゲちゃんは、誰に鬼にしてもらったの？」

ノゾミ

「それは——」

桂

「それは？」

ノゾミ

「——」

桂

「だいたい、後からきたミカゲちゃんの方がいろいろ物知りなのって変だよ。封じの解き方とか、ノゾミちゃんも知らなさそうなこと色々」

それが一番おかしいと思う。

お姫様育ちのノゾミちゃんの妹に、そういった呪術的な知識があるとは思えない。

そんな知識を持っているのは——

桂

「ねえ、何だかノゾミちゃんって、ミカゲちゃんに操られてるみたいだよ？」

ノゾミ

「そんなことないわ！」

桂

「それじゃあ、お姉ちゃんのノゾミちゃんの方が立場が上なの？」

ノゾミ

「上だもの！ ミカゲは私の言うことなら、なんでもきくわ！」

わたしをばかにしたりせず、こんな風に怒っているのは、きっと凶星を突かれたから。

だとすると、ノゾミちゃんにもそういう自覚があるということになる。

それなら——

桂

「……そう。まあ、いいんだけどね。夢だし」

顔を真っ赤にして否定するノゾミちゃんを見ていたら、見かけ通りの小さい子をいじめてるみたいで、いたたまれなくなってきた。

それに、身体が泥の中に沈んでいくような、そんなだるさをともなった眠気が襲ってくる。

桂

「それじゃあね、ノゾミちゃん。わたし眠いからもう寝るよ」

ノゾミ

「寝てしまったら、二度と起きれないのよ？」

桂

「……そうなの？」

ノゾミ

「あなたの身体の中の血は、もうほとんど空っぽだから」

桂

「ああ、そうか、そうなんだ」

この眠気は、献血をしてるときに感じる眠気に似ているんだ——

桂

「でも、いいや……」

そしてわたしは——睡魔に勝てなかった。

沈んでいく。

沈んでいく。

わたしは夢より深い、夢のまた夢へと沈んでいく。

日の射す真昼の世界から遠ざかっていく——

桂

「じゃあ、賭けようか」

ノゾミ

「……賭け？」

桂

「試して、ミカゲちゃんが言うこと聞いたらノゾミちゃんの勝ち。聞かなかつたらわたしの勝ち」

ノゾミ

「ふうん……」

桂

「あ、鳥月さんはわたしが説得するから、心配しなくてもいいよ」

勝つ見積もりがあつて持ちかけた勝負だけれど、後で物言いをつけられても困るし、条件はフェアじゃないと。

ノゾミ

「……………」

逃げればわたしの言い分を認めることになるよ、考え込んでいるのだから。

桂

「自信ないんだ？」

ノゾミ

「い、いいわよ、受けて立ってあげるわよ！」

陽子ちゃんやサクヤさんに鍛えられた外交手腕で背中を押すと、ノゾミちゃんはわたしとの勝負を承知した。

桂

「それじゃあ、一時休戦ね」

にっこり笑って差し出した手を、いかにもしぶしぶといった体で握り返す。

結局、わたしの血を狙っている鬼ということには何の変わりもないんだけど、何だか人馴れない猫の子みたいで可愛いかもしれない。

この夢から覚めた時には、すでに勝負が始まっているということなんだけれど——
あ、何を賭けるかとか決めてないや。

青白い光が、薄いまぶたを透かして瞳を射る。

桂

「ううっ……」

閉ざしたままのまぶたの下で、眼球が逃げ場を求めて動き始め、わたしは顔をしかめてまぶしさを和らげようとする。

勝手に手が目を庇い動く前に、空に雲でも湧いて出たのか、ふっと光が暗く陰った。

まぶたを持ち上げると、赤い瞳と目があつた。

ノゾミ

「気が付いたかしら？」

桂

「あ、ノゾミちゃん——と、ミカゲちゃん」

覆い被さるようにして、わたしを覗き込んでいたノゾミちゃんが身体を引くと、障子の隙間から射し込む、生（き）のままの月明かりが直撃した。

その光から顔を庇った手で、目をこすりつつ身体を起こす。

ミカゲ

「姉さま、もういいでしょうか？」

ノゾミ

「まだよ」

そうだ、もう勝負は始まっているんだ。

もの欲しそうな熱っぽい目でこちらを見つめるミカゲちゃんを制して、ノゾミちゃんがずずいと前に踏み出した。

ノゾミ

「ほら、ちゃんと言うこと聞いてるでしょう？」

「おあずけ」ができた飼い犬を自慢するような感じで、ノゾミちゃんが高笑いをする。

桂

「……………」

ミカゲちゃんと目が合うと、彼女はもじもじと手をもんで何かを我慢している様子。

ミカゲ

「……姉さま」

ノゾミ

「もう少し」

桂

「んー、やっぱり」

ノゾミ

「ま、まだ疑ってるの!？」

まなじりを吊り上げて、食って掛かってくるノゾミちゃんの耳元でささやく。ミカゲちゃんには聞こえないようにしないと。

桂

「それじゃあノゾミちゃん、『今日は帰るわよ』って言うてみてる？」

ノゾミ

「え……？」

桂

「なんかわたしが寝てる間に、『すぐに飲ませるから少しだけ我慢しろ』って言うてみたいなんだよね」

わたしの第一印象は、言うことを聞かせているというよりも、聞いてもらっているといった風。

桂

「だから、『おあずけ』じゃなくて『今日はなし』でも言うこと聞くようなら、信じてあげる」

食べ物の恨みつらみは海よりも深く、その辺をぐっと耐えられるようなら、大抵の言う

ことは聞いてくれるんじゃないかと思う。

ノゾミ

「それは——」

ぐっと詰まるノゾミちゃん。

あまり人と接することなく生きてきた彼女は、扱いやすい性格をしていると思う。

こんな非常時に緊張感なくてなんだけど、陽子ちゃんがわたしをからかっておもちゃにする気持ちがわかったような気がしないでもない。

桂

「言うこと、聞かせられないんだ」

ノゾミ

「できるわよ、それぐらい！」

ノゾミ

「ミカゲ、今日はもう帰るわよ！」

鈴を鳴らして振り向いたノゾミちゃんに、ミカゲちゃんがいぶかしげに問い訊ねる。

ミカゲ

「姉さま？」

ノゾミ

「こんなわけのわからない人の相手をして、疲れてしまったって言うてるの！」

ミカゲ

「姉さま、それならばなおさら——」

ノゾミ

「お黙りなさい！ ミカゲ、私が帰るといったら帰るのよ！」

ヒステリックに足踏みをして、足首の鈴を打ち鳴らす。

その残響がすっかり夜闇に吸い取られると、気まずい沈黙だけが残った。

ミカゲ

「……………」

鏡のように静かな瞳に、ノゾミちゃんの姿を映すミカゲちゃん。

負けじとその瞳を迎え撃つノゾミちゃんだったのだけれど。

ノゾミ

「……………」

ミカゲ

「……………」

ノゾミ

「……な、何よその不満そうな顔は」

プレッシャーに耐えられなくなったのか、口を開いて沈黙を破った。

ミカゲ

「姉さまは、主さまを、お助けしたくはないのでしょうか？」

ノゾミ

「そんなことはないわ」

ミカゲ

「でしたら、何ゆえに贅の血の持ち主を見逃そうというのでしょうか？」

ノゾミ

「それは……」

ミカゲ

「邪魔なハシラや鬼切り役がないのに何故？」

ノゾミ

「……………」

ミカゲ

「絆されましたか？」

ミカゲ

「姉さまは、もう少し主さまの役に立って下さると思ったのですが——」

ミカゲ

「どうやら、買い被っていたようです」

打って変わっておどおどとした態度を引っ込め、傲岸不遜に言い放つ。

高慢ちきなノゾミちゃんにある可愛げが、ミカゲちゃんには欠片もない。

ノゾミ

「ちょっと、ミカゲ？」

ミカゲ

「もう姉さまの手は借りません」

真夜中の落日——

ミカゲちゃんの瞳が明々と光り、視界を赤く血の色に濡らした。

赤い光が夜に溶けても、いくつもの光点が薄い夜闇に残っている。
赤く輝く光点が——
一對、二対、三対、四対、五対——

桂

「ひっ——」
十指に余る、それらすべてが瞳。

桂

「ミカゲちゃんが——」

遊園地のミラーハウスか万華鏡の中のように、何人ものミカゲちゃんがそこにいた。
ふたりは鏡の怪であり、現身はまやかしにすぎないのだから、分身の術ぐらいは使える
のかもしれない。

だけれど——

ノゾミ

「くうっ……」
そのミカゲちゃんと同じ《力》を持っているはずのノゾミちゃんは、ぎゅっと握った拳
で胸元を押さえて、眉間に苦悶のしわを刻んでいる。

桂

「あれ？ ノゾミちゃん何で？」

ミカゲ

「分け身を作るのに使ったぶんは、姉さまへ行くはずの《力》ですから——」

ミカゲ

「良月から《力》を受け取れなければ、じきに消滅します」
存在を維持するのに必要な《力》の補給を止められてしまった。
それはさしずめ人間なら、首をしめられて息ができない状態といったところだろうか。

桂

「そんな……」
おろおろふたりを見比べるわたしと、畳に手を付いたノゾミちゃんに、ガラス玉のよう
な硬い瞳を落としてミカゲちゃんが宣言する。

ミカゲ

「姉さまはもういません。主さまの分霊としての判断です」

ノゾミ

「——！？」
主の分霊——

意味は漠然としかわからないけれど、それがとんでもなく不吉な意味を孕んでいるのは、見開かれたミカゲちゃんの目を見ればわかる。

主の分霊——

そのミカゲちゃんが、ノゾミちゃんのことをいらぬと言ひ、依代である鏡からの《力》供給を止めてしまった。

その言葉は、冗談なんかじゃなくて。

ノゾミ

「ミカ——」

ぎりっと歯を食いしばって、苦痛の中、ノゾミちゃんが立ち上がる。

ノゾミ

「このっ……ミカゲェー——ッ!!」

キッと怒りを双眸（そうぼう）にたぎらせて、睨みつける。

身体に残っている《力》のうちどれほどを使ったんだろう。部屋一杯を真紅の眼光が満たす。

何が起こるのかと、反射的に身を硬くしていたわたしの腕が引っ張られる。

そのまま部屋から廊下へ飛び出した。

わたしの腕を引いているのは——

桂

「わ、ちょっと、ノゾミちゃん!？」

驚くわたしの腕を、小さな身体に見合わない力で引っ張って、板張りの廊下を駆け抜ける。

部屋を出ても失速はしない。季節はずれのジングルベルのように、鈴の音も高く外へ向かってひた走る。

桂

「ちょっ、ちょっと待って……」

ノゾミ

「いいから——それともあなた、あんなにたくさんのミカゲから血を吸われたい!？」

桂

「〜〜っ!？」

ぶるぶると首を振る。

昨日だって、歯止めなくわたしの血を貪っていたのは、ミカゲちゃんの方だった。

ひとりでもあんなだから、あんなにたくさんのミカゲちゃんに襲われたら、一瞬で干物になってしまいそうだった。

ノゾミ

「ほら、早くなさいな！」

桂

「あ、でも靴とかはいてないし——」

ノゾミ

「そんなことより、はやく良月を——」

不思議なことにちらりと横目で見た町の人々は、わたしとノゾミちゃんという奇妙なふたりづれが目に入っていないようだった。

もちろん、こっちもそれどころじゃないんだけど——

アスファルトの範囲を抜けて、舗装されていない地面を踏んだあたりで限界が訪れた。

もう駄目だ。

引っ張られる上体に下肢を追いつかず、前のめりに倒れそうになる。

そこでようやく速度が緩み、わたしはへなへたとへたり込む。

桂

「……はあ、はあ、もうだめ、息できない、足いたい……」

ノゾミ

「あなたね、自分の命の瀬戸際に、どうしてそんなに余裕なの？」

これでも必死になってはいるんだけど——

汗みどろで酸素を求めて喘ぐ、泣いてるんだかどうかもわからないような状態のわたしが、そんなに余裕そうに見えるのだろうか。

のろのろと顔を上げると、光背のように大きな月を頂き、半眼でわたしを見下ろしているノゾミちゃんの姿が。

只人離れした（人じゃないんだけど）雰囲気も相まって、ほんのちょぴり菩薩様のように見えなくもないんだけど、その割には意地が悪い。

桂

「ううっ……でもノゾミちゃんも休まないで、すごく顔色悪いっていうか——」

わたしの腕をつかむ小さな手のひらの感触が、空気を固めてこしらえたような、頼りないものになっていて——

全身を濡らす汗が冷たくなる。

そうだ、ノゾミちゃんはわたしなんかよりも、ずっと、ずっと——

依代からの《力》を絶たれた今の状態は、全力疾走に喘ぐわたしの胸なんかとは比べ物

にならないほど苦しいはずなのに。

慕っていた主に「いらぬ」なんて宣言された心は、小石を踏んで傷付いたわたしの素足なんかとは比べ物にならないほど痛いはずなのに。

ああ、足手纏いになっている自分が情けない。

がくがくと震える足に気合いを送って、立ち上がる。

桂

「ねえ、ノゾミちゃん。良かったらわたしの血、飲む？」

ノゾミ

「それこそ命の無駄遣い。敵に塩を送ってどうするの。私が飲んだ血の《力》は、一度良月へ行ってしまうから」

桂

「あ……」

そうか。そしてその《力》は当面の敵——ミカゲちゃんが独り占めしている状態だ。

ノゾミ

「ミカゲが……主さまがご自身の魂を分けた存在だったなんて……ね」

それが分霊——

きっと主は、万が一の場合に備えて、保険をかけていたのだろう。

だけど今は、主のことよりも。

桂

「でも、それじゃ、ノゾミちゃんは……」

小さく頷くと鈴が鳴り、それが応え。

ノゾミ

「私はもういいわ。私を拾ってくださった、主さまに見放されてしまったんですもの」

ゆっくりと歩き始める。

離れていく背中を追いかけて、わたしものろのろ足を引きずる。

ノゾミ

「座敷の外にある世界も十分に見たし、普通の鬼では一滴たりとも口にできない、贅の血だって飲んだし——」

桂

「それならどうしてわたしを連れて逃げたりしたの？」

ノゾミ

「わたしの取り分を持っていこうかと思ってね」

ノゾミ

「もうすぐ——」

遠くに誰かが立っている。

人の形をした何かが、田んぼ沿いの田舎道に佇んでいる。

遠目夜目だけに誰だかわからないけれど、シルエット的にたぶん大人の男の人。

怖くなったわたしは足を止めようとするけれど、ノゾミちゃんは構わずに進んでいく。

人影の、胸のあたりで何かが光った。

ノゾミちゃんやミカゲちゃんの、瞳の赤とは異なる光。それは天高くから降る月光と同じもの。

人影が手にした何かが反射した、月明かりそのものだった。

それでも歩みを止めなかったので、角度などの条件が変わったのだろう。わたしたちを照らす、地上の月がかき消える。

夜目ではあっても遠目ではなくなった。

人影はスーツ姿の男性だ。

こんな時間でこんな場所だけれど、わたしたちのような女の子がうろろうしているよりは、おかしくはないと思う。酔い覚ましの散歩だとか。

だけれど、良くある風景として流せないだけの奇妙な感じを漂わせているのは——

きっとそれは、わたしたちに反応する様子もなく、案山子のように佇んでいるからだろう。

まな板の上の魚のような虚ろな目が、何の光も映していないせいでもある。

人らしい生気を感じることができずに、わたしは唇を震わせた。

そして夜の景色に馴染まない決定打としてあげられるのが、胸に抱いた金属製の鏡だった。

夢の中の夢に《視》た、良月の銘を持つふたりの依代。

昨日の（すでに一昨日の朝と言うべきだろうか）ニュースで映像を見た、郷土資料館から盗まれた鏡。

そういえば今朝のニュースでは、血を吸われた死体も発見されている。

桂

「ノゾミちゃん、あの人ってもしかして……」

ノゾミ

「私たちに死人を動かす《力》なんてないわ。暗示で操っているだけ——単なる傀儡よ」
言いながら、傀儡の人が持つ良月を指差す。

ノゾミ

「桂、あの鏡を割ればミカゲも消えるわ」

桂

「でも、それじゃあノゾミちゃんも」

ノゾミ

「《力》を止められてしまったから、どのみち私は消えるほかないのよ」

あの部屋から逃げ出してから、どれほど時間が経ったのか感覚がないのだけれど、ノゾミちゃんにはもうほとんど《力》が残っていないのだろう。

月明かりに青白く浮いたかりそめの現身は、輪郭をなくしたかのように儂げで、どこか希薄な感じがする。

そして、豆電球ほどの弱々しい光を目に灯して、ノゾミちゃんは傀儡に命じる。

ノゾミ

「その鏡を、思いっきり地面に叩きつけなさい」

金属といっても、千年を経た古いものだけに、その通りにすれば脆く崩れてしまうだろう。

その言霊の繰り糸に従って、傀儡が手にした鏡を頭上に掲げたそのとき。

ミカゲ

「叩きつけてはいけない」

月光をはねて輝く鏡の表面が、びりびり震えて、人の声を発した。

その音声の威厳に打たれたのか、動きを止めた傀儡は一向に動き出しそうにない。そして――

涼しげな鈴の音とともに――

主の分霊――主の御影――影見のあやかし――

ミカゲちゃんが現れた。

ミカゲ

「わざわざ贅の血を引く娘を、良月の前まで連れてきてくださってありがとうございます」

ノゾミ

「くっ――」

もともとふたりは現身を持たないあやかしだ。

わたしのように走らずとも、かりそめの現身を一度解き、再構成すればいいだけなのだ

ろう。

ミカゲ

「うふふふふふっ」

酷薄な笑みと共にこちらへ向けられる瞳の輝きは、弱ったノゾミちゃんのものよりも、月よりも強い。

かざした白いてのひらの上に、鬼火のような赤が揺れた。

ミカゲ

「それでは——」

ノゾミ

「させない！」

わたしの前に立ちはだかったノゾミちゃんが、わたしへ向かって飛んだ鬼火を受け止めた。

ノゾミ

「っっ……ああ……」

握り潰すと、火の粉となって風に散る。

小さな拳を振るわせて、こめた《力》に震わせた肩から、陽炎のように頼りない赤光が立ち昇った。

ノゾミ

「——このっ!!」

細く伸びた赤い《力》が、より合わさって糸となり、ノゾミちゃんへと向かっていく。

赤い糸は袂から覗く細い手首に巻き付き、剥き出しの素足に絡み、白い首を締め上げた。

得意の暗示はミカゲちゃんには効かないのか、それともそれすら暗示の形なのか——

ノゾミちゃんは両手の十指に結ばれた赤い糸を強く手繰って、ミカゲちゃんの動きを封じようとする。

ミカゲ

「姉さま——」

蜘蛛の巣に捕らわれた、赤と黒の可憐な蝶のようにも見えるミカゲちゃんは、困ったように少しだけ眉をひそめた。

夜気にしみる澄んだ音。

その鈴の音のせいなのか、ぴんと張っていた糸が小刻みに震え――

ノゾミ

「――！？」

その糸のうち一本が、朽ち果てて崩れた。

桂

「そんな……」

ミカゲ

「残り少ない《力》なのに、なぜ無為なことに使うのですか」

ノゾミ

「何をしようと消えてしまうのに――何に使えば有意義なのかしら」

一瞬で顔から驚愕をこそいだノゾミちゃんが、新たな糸をミカゲちゃんに向けて伸ばして言う。

もうノゾミちゃんには、余力なんてないはずなのに――

新たな糸が、縛める。

鈴の音が、糸を崩す。

新たな糸が、縛める。

鈴の音が――

次々と崩れていく縛めに対して、ノゾミちゃんは新たな縛めを投げ掛けることで、ミカゲちゃんの動きを封じつつけようとする。

それは砂漠の乾きを止めようと水を撒くような、せんのない行為。

しかも水は有限で、生命に等しいものだった。

この一瞬ごとにノゾミちゃんに残った《力》は、その嵩（かさ）を目減りさせていく。それでもノゾミちゃんは引かない。

ノゾミ

「くっ――」

荒い息に肩を上下させながらも、残る《力》を吐き出しつつけ――

その細い肩越しに、勝ち気な瞳をわたしに向けた。

ノゾミ

「桂……」

邪視の顕現である赤い輝きは薄れ、すでに普通の人とそれほど変わりのない瞳。けれどその奥底に凝ったものの目映さは、邪視にも決して後れをとらない。それは強い意志の持つ光。

ノゾミ

「桂、あなたが鏡を割るのよ。私が押さえていられる間に」

桂

「でも——」

鏡を割ってしまったら、ノゾミちゃんは。

さすがになぶるだけの余裕はないと感じたのか、ミカゲちゃんの瞳がより濃い色の光を放ち——

より強い光の前では、幻灯の描く絵は儂く消えてしまうという言葉通りに、縛め赤い糸は同色の光の中に霞んでいく。

ノゾミ

「桂！ 早く！ 早くして！」

焦れた声がわたしを急かす。

桂

「でも——っ！」

ノゾミ

「桂！ 私は自由になりたいのよっ！」

ミカゲちゃんの縛めが解けるよりも先に、その言霊がわたしの膠着を破った。

桂

「——っ」

弾けるようにわたしは駆け出した。

赤く染まった世界の中を走り、そして——

金属質の耳障りな振動が、世界を砕いた。

鏡に映ったかりそめの世界が、音を立てて無数の破片と砕けると、かりそめではない世界から、赤い光が退いていく。

いかにもな夜らしい、月光に染められた世界の色が戻り、その現実味でもってありえぬ怪異を締め出しにかかった。

ミカゲ

「……………」

その中で、ミカゲちゃんの身体は依代である鏡と同様に、ひび割れ、砕け、崩れ落ちていく。

その存在を消されていく。

桂

「ノゾミちゃんっ!!」

妹だと信じていたミカゲちゃん同様に、同じ鏡を依代とする彼女の身体も、ひび割れ、砕け、崩れ落ちていく。

その存在を——

桂

「ノゾミちゃん、ノゾミちゃん！」

大きな破片から別れた欠片から順番に、からからからと崩れ落ちていく。

それは地に塗れ汚れる前に消えてしまう、綿雪のような——夏は嫌いだという純白の肌の彼女らしい、儂げな散り様だった。

ノゾミ

「桂、あなた何を泣いているの？」

桂

「だって……………」

ノゾミ

「あなたはよくやったわ。ふふ、誉めてあげる」

桂

「だって、だって……………」

詰まって言葉にならない息吹。

ノゾミ

「どうして私みたいな鬼のために泣いたりできるの？ 出会ったばかりで、あなたを傷つけた鬼でしかない私のために——」

胸から喉へ、喉から目と鼻の真ん中へと迫り上がってくる圧力が、とめどもなく涙を押し出し、だからすべてが歪んで見えるのだろうか。

雪明かりのようなひかりの中で、ノゾミちゃんは初めて見るような顔を見せていた。

大切な人をなくしてしまったのに、自分が消えようとしているのに、鬼になってまで永らえさせようとした生命が尽きようとしているのに——

ノゾミ
「もう、十分よ」

とても穏やかに笑っていた。
何の縁（よすが）も残さずに綺麗になくなってしまふ、雪のような笑顔だった。

桂
「鏡がなくなったんなら、今度こそわたしの血を飲んで元気になったりしないかな」

ノゾミ
「そうね——だけど、霊体だけでは長くもたないことを知っていて？」
天から降り、地を流れ、海に届き、天へ還っていく水のように、《力》も世界を循環している。
そして器の中から零れた水が、形を保てず広がるように——
容器の封を解かれた水が、蒸発して消えてしまうように——
肉体や依代という《器》を失った魂——特別な形をした《力》は、その形を保つことができずに世界に溶けて消えるしかない。
いくら《力》を注いで継ぎ足しても、もとの形に戻ることはないのだから。

桂
「じゃあ——」

良月という《器》に移ることで、藤原望という《器》の破損から、彼女を彼女たらしめる《力》の形を守ったように——
適当な《器》さえあれば、ノゾミちゃんはノゾミちゃんのままでいられるのだ。

何か——何かなかっただろうか。

見回したところで何もない。見渡す限り田畑ばかりの、長閑な道が続いているばかり。

ノゾミ
「いいのよ、桂。何にだって依り憑けるわけではないのよ」

ノゾミ
「あの良月は幼いころからずっと呪いの文言を吐きつづけてきたものだし、あの鏡自体がもともと呪物であったものだし」

ノゾミ
「それに代わるような都合のいいものなんて、そうそう落ちていたりするものではないでしょう？」
霊体すら切るといふ烏月さんの刀なら、相応しいといえる呪物かもしれないけれど、そんなものが落ちているはずもなく——

桂

「でも——」

わたしは諦めることができずに。

ノゾミ

「それじゃあ桂——」

何かなかったらどうかと——消えていくノゾミちゃんよりも往生際悪く、足掻いていて——

そして——

場にそぐわないメロディが、別れの言葉をかき消した。

桂

「あ……」

部屋にいないわたしを案じて、烏月さんかサクヤさんが掛けてくれたのだろうけれど——

お父さんが生まれ育った羽様のお屋敷がある、経観塚への旅から少しの日々が過ぎ去り——

——夏はまだ続いていた。

蝉の声は聞こえないし、空の高さは負けている気がするけれど、まぶしい陽射しのもたらす暑気には大した違いはなさそうだった。

経観塚に比べれば大抵のところはそうだろうけど、わたしが住んでいる町も都会の部類に入る規模で——

つまり、おのぼりさんには物珍しいものがたくさんあって、慣れて飽きるころには季節が変わっているだろうということ。

飽きが来るから秋が来るとはこれいかに——とか何とか。

——

「だから——」

桂

「うん？」

考えごとにはまると周りの景色が見えなくなる相変わらずのわたしは、生返事をしながら意識を今現在に引き戻す。

——

「桂、桂ってば。あれは一体何なのよ」

桂

「ああ、あれは——って、電話、電話——」

思わず素のまま返しかけて、慌てて鳴ってもいない携帯電話を取り出すわたし。

桂

「もう、ノゾミちゃん。話し掛けるときは鈴を鳴らすか、電話って言ってよ」
携帯に向かってそう言いつつ、頭の後ろほどの空間を顧みる。そこには町並みを透かしたノゾミちゃんが、ふよふよふよふよ浮いている。
めっと睨むと、そっぽを向いて知らぬ顔。

ノゾミ

「だって、面倒なんですもの。別にその、『ケータイ』とかいう道具を使うフリなんてしなくてもいいじゃないの」

桂

「そんな、普通の人にはノゾミちゃんの姿は見えないんだから、わたしがひとりごと言いながら歩いてるみたいで恥ずかしいよ」

ノゾミ

「私は恥ずかしくないもの」

桂

「ううっ、わたしが恥かくと『どうしてあなたはいつもそうなの。私に恥をかかせないでちょうだい』とか言うくせに……」

ノゾミ

「それはそれ、これはこれ、だもの。だいたい、あなたが弁えていれぱすむ問題でしょう」

桂

「……………」
依代である良月を失い、消えていくはずだったノゾミちゃんは、こうして今も消えずにいる。

あの日のあの夜、携帯電話が鳴ったあのときに、わたしは気が付いたのだ。

それにぶら下がった携帯ストラップ——うちに伝わるお守りが、ノゾミちゃんの依代に相応しい呪物であることに。

白い蝶の彫りをあしらった青い珠は、中に蓄えた《力》でもって、鬼の目から贅の血を隠してくれるのだという。

もともとの性質として《力》を蓄えることができるのだから、依り憑くことに大きな問題が生じることもなく——

しかも一石二鳥とばかりに、珠の方が抱えていた問題まで解決してしまった。

お守りの《力》は刻々消費されるので、尽きるまえに補充しなければ、効果が失せてしまうのだけれど、わたしはその方法を知らなかった。

それが、とても簡単な方法で補充できるようになったのだ。

ノゾミちゃんが贅の血を飲んで得た《力》が、前は良月へと流れ込んでいったように、今は——

ノゾミ

「桂？」

またもやの悪癖によるだんまりを、ノゾミちゃんはわたしが拗ねてしまった結果だと思っただらしい。

今や背後霊というか、守護霊状態のノゾミちゃんは「まったくもう」といった顔をして――

携帯のストラップについている、鳴らないはずの、舌のない鈴が涼やかな音を響かせた。

ノゾミ

「話したいときは、それを鳴らせばいいんでしょう」

桂

「う……」

寝すぎたせいか泣きはらしたのか、目覚めのまぶたは重かった。

桂

「まぶし……」

反射的に光を遮ろうとした手が動かない。

桂

「あ……そうだ……」

動かなかったのは、ユメイさんの手につなぎとめられていたから。わたしがそうして欲しいと願ったから。

ユメイ

「おはよう桂ちゃん。まだ眠いかしら」

桂

「……おはよう……ございます」

ユメイ

「眠いのなら、まだ寝ていてもいいのよ」

桂

「もう起きる……ってゆーか、わたし寝すぎ」

ユメイ

「そう、よく眠れたみたいで良かったわ」

ふいに自由を取り戻す手。

桂

「あ……」

暑くなるのはまだこれからという午前の風が、てのひらをすり抜けていくのが何だか寂しい。

その感覚をごまかすように、重いまぶたをその手でこすった。

ユメイ

「駄目よ、桂ちゃん。そんな風にこすっては」

桂

「んー、わかった。顔洗うことにするー」

ぐっと伸びをする。

夢も見ずにぐっすりと眠ったせいか、はれぼったい目を除けば、身体はすっきり爽快だった。

ユメイ

「身体の調子はすっかりいいみたいね」

桂

「うん。ユメイさんは——」

ユメイさんの顔をじーっと見つめる。

桂

「もしかしてあんまり眠れなかった？」

ユメイ

「そう見えるかしら」

桂

「何だか疲れてるみたいな感じかも。ちょっと顔色よくないみたい……」

ユメイ

「そう？ きっと起き抜けだからそう見えるのかもしれないわね。顔を洗いに行きましようか」

仕切りのふすまへ向かうユメイさんは、立ち止まってわたしに振り返る。

ふたりの間には数歩ぶんの距離。

ユメイ

「——桂ちゃん？」

桂

「あ、うん、行く行く」

桂

「サクヤさん、おはよう」

ユメイ

「おはようございます」

サクヤ

「おはよう、昨夜はちゃんと眠れたかい？ 連中が外で地団駄ふみまくりだったからねえ」

桂

「鳥月さんのお札のおかげだね——あ」

ノゾミちゃんとミカゲちゃんだって、わたしの前に現れるときは人の形を成しているわけで、その彼女たちに効果のある結界ということは。

桂

「もしかしてユメイさんが調子悪そうなのって、あのお札のせい？」

ユメイ

「大丈夫よ。鳥月さんの結界は、霊が通り抜けられない壁をこしらえているようなものだから」

サクヤ

「壁っていうより、電流流した鉄条網か。越えようとしなけりゃ無害だよ」

サクヤ

「まあ、強いて問題があるとすれば、いわゆる換気の悪さだろうねえ」

桂

「換気、悪いんだ……」

開け放した縁側から風が入ってきているので、どうにもこうにもピンとこない。

サクヤ

「換気っていっても、霊的なものだよ？」

桂

「わ、わかってるよ」

そういえば、ユメイさんはオハシラサマのご神木から《力》をもらっているといっていたけど。

目だけで通じてしまったのか、ユメイさんはふわりと微笑んで、わたしの肩に手を乗せた。

ユメイ

「本当に大丈夫なのよ。《力》の流れがないおかげで、安定もしているから」

桂

「でも……」

血を飲んだほうが。

視界の端に包丁がひっかかった。あれで切ったりするのは怖いけど——

なかなか決心がつかずに口籠もっている間に、ユメイさんはずるりと話題を変えていた。

ユメイ

「ところで、烏月さんはどうしました？」

サクヤ

「あたしもあんたもついてるし、昼間の内なら安全だろうって出て行ったよ」

桂

「葛ちゃんと尾花ちゃんは？」

サクヤ

「そういえばまだ見てないねえ。悪いけど桂、起こしてきてくれるかい？」

桂

「いいけど、葛ちゃんってなかなか起きない子なんだね」

サクヤ

「今起きてきたばかりのあんたが言うかい」

桂

「あはは。でも昨夜もわたし、あんな大声だしたりしたのに起きてこなかつ——」

あ……

昨夜は必死だったから気にならなかったけど、一夜明けた状態でかえりみってみると、あまりの恥ずかしさに頬が熱くなってくる。

サクヤ

「なんだい。一世一代の大告白を、葛にも聞いてもらいたかったのかい？」

桂

「そんな、告白だなんて……」

助けを求めて視線をさまよわせると、ユメイさんと目があつた。

桂

「ううっ……」

わたしはますます顔を赤くして、茹でだこ状態の顔をうつむかせる。

桂

「……行ってきます」

居間を歩いて続きの間に向かう途中、誰かにぶつかった。

鳥月さんが外出中の今、消去法で導き出される答えはひとつだし、そうじゃなくてもわたしより背の低い子は葛ちゃんしかいないんだけど。

葛

「うわっ」

桂

「あっ、葛ちゃんごめ——」

腰を折って覗き込むわたしの顔と、勢いよく振り仰ごうとする葛ちゃんの頭が急接近する。

桂

「——あ」

車じゃなくても急には止まれない。こういうのも玉突き事故って言うんだらうか。

不意打ち気味のカウンター頭突きが、顔の真ん中を直撃した。

桂

「〜〜っ!？」

葛

「桂おねーさん大丈夫ですか？」

したたかに打った鼻を押さえると、むずむずと熱いものが溢れてくる感覚があった。

ぽたりと熱い雫が一滴、てのひらに赤い水玉模様をつくり、生命線に沿って滲んで伸びる。

葛

「わ、鼻血ですよ、鼻血！ おねーさん鼻血出てますよ」

ユメイさんの唇が、ゆっくりと近づいてくる。

背筋が針金の束になってしまったように、背中がぴんと張り詰めたまま固まっている。

降りてくる吐息がこそばゆくて、閉じたまぶたがぴくりと震えた。

淫

わたしの唇から一寸も離れていないところに、柔らかな唇は触れた。

ユメイ

「ふっ……」

桂

「んんっ……」

葛

「たはは、ちょっとばかり目の毒ですよねぇ」

サクヤ

「そうかい？ 子供の口の周りについてご飯粒を、母親が取り除いたついでに、自分の口に入れちまうような感じだろう」

葛

「わたしはそんなことされた経験ないですから、よくわかりませんが、やっぱり少々違う趣なのではないでしょーか？」

……外野、ちょっとうるさいよ。

少しは遠慮してほしかったのです。

桂

「そうなんだ」

ユメイ

「心配してくれてありがとう。でも大丈夫だから」

桂

「うん。辛くなったらちゃんと言ってね」

ユメイ

「ところで、鳥月さんはどうしました？」

サクヤ

「あたしもあんたもついてるし、昼間の内なら安全だろうって出て行ったよ」

桂

「葛ちゃんと尾花ちゃんは？」

サクヤ

「そういえばまだ見てないねぇ。悪いけど桂、起こしてきてくれるかい？」

桂

「いいけど、葛ちゃんってなかなか起きない子なんだね」

サクヤ

「今起きてきたばかりのあんたが言うかい」

桂

「あはは。でも昨夜もわたし、あんな大声だしたりしたのに起きてこなかっ——」

あ……

昨夜は必死だったから気にならなかったけど、一夜明けた状態でかえりみってみると、あまりの恥ずかしさに頬が熱くなってくる。

サクヤ

「なんだい。一世一代の大告白を、葛にも聞いてもらいたかったのかい？」

桂

「そんな、告白だなんて……」

——

「へー、おねーさん告白しましたか」

桂

「わっ!？」

いつの間にか葛ちゃんがいた。

葛

「おはよーございます、皆さん」

サクヤ

「ああ、おはよう」

ユメイ

「おはよう、葛ちゃん。それから——」

ユメイさん、少し考え込んで。

名前を忘れていたりするのかもしれないので、さりげなく助け舟を出してみることにする。

桂

「尾花ちゃんもおはよう」

葛

「桂おねーさん、わたしには挨拶なしですか」

桂

「葛ちゃんもおはよう」

葛

「おはよーございます。ところで桂おねーさんに質問があるのですか、よろしいでしょーか」

桂

「な、何かな……」

葛

「おねーさんは、どなたにどのように告白したんですか？」

桂

「うっ……」

葛

「何だかわたしひとり見逃したみたいで寂しいですから、できれば現場再現してくださいよー」

桂

「ううっ……」
わたし、この子のこと苦手かも……

桂

「ちりがみ、ちりがみ……」

葛

「それより濡れタオルで冷やして毛細血管を収縮させると早く止まりますよ？」

桂

「ううっ、お台所、お台所……」
鼻を押さえて上を向いたまま、回れ右。ぱたぱた来たほうへと舞い戻るわたし。

ユメイ

「桂ちゃん、どうしたの？」

葛

「わたしがぶつかってしまったんですよ。タオル濡らしてもらえますか」

ユメイ

「待って。止血ならわたしの《力》でできるわ」

近づいてきたユメイさんが、わたしの両の頬に手をあてて、ぐっと顔を近づけてきた。

ユメイ

「桂ちゃん、ちょっと見せてくれる」

朝の光にまぎれてぼんやりと、見えないぐらいの薄さであの青の光が立ち昇っている。

ユメイ

「すぐに止まるから、少しだけ我慢して」

桂

「でも、こんなことで勿体な——あ」

その勿体ない《力》の結晶とでもいうべき贅の血が、さらに勿体ない形でぱたぱた零れ落ちていたりした。

桂

「あのね、ユメイさん。その、嫌じゃなかったら……」

ユメイ

「桂ちゃんの血を？」

桂

「だって、ついでだし、もう痛くはないし、ユメイさんには苦勞かけてるし……」

ユメイ

「いいの？」

桂

「うん」

桂

「こんなにのんびりするのには久しぶりだよ」

ユメイ

「そうなの？」

桂

「誰も何にもやってないしね」

サクヤ

「あたしが町まで買い出しに出たぐらいか」

庭を眺めながら、ユメイさんがいれたお茶をぼへーっと飲む。

ここでサクヤさん、面子がひとり欠けていることに気付く。

サクヤ

「鳥月はまだ帰ってないとして、葛はどこに行ったんだい？」

桂

「元氣そうな子だから、尾花ちゃんと遊びに行ってるんじゃないかな。水浴びとか」

ユメイ

「そうね、暑いものね」

けっこう前からこのお屋敷に住んでたわけだから。心配しなくても大丈夫だと思う。

桂

「サクヤさんは心配？ ちゃんといろんなこと話して、あまり出歩かないようにしてもらった方が良かったかな？」

桂

「鳥月さんが帰ってきたときに驚かないように、ひとり増えたことだけは言っておいたんだけど」

サクヤ

「それでか……」

桂

「？」

サクヤ

「いや、何でもないよ。それより、今日の夕食はまともなものを食わせてやるからね」

桂

「食材、たっぷり買ってきたもんね」

なにせ総勢五人と一匹。わたしの感覚からすると、これで十分大所帯だった。

桂

「にしても、サクヤさんって料理できたんだ」

サクヤ

「なんだい、その不安そうな顔は。なあユメイ、保証してやっておくれ」

ユメイ

「うふふっ、それは出来てのお楽しみということにしておきましょうか」

ユメイ

「わたしがサクヤさんの手料理をご馳走になってから、もうずいぶんと経ったもの」

サクヤ

「そうだねえ……」

サクヤ

「しかし、じっとしてても暑いものは暑いし、汗は出てくるもんだねえ」

桂

「夏は内風呂がないと大変だよね」

サクヤ

「……内風呂か」

桂

「今日も温泉に行くの？」

サクヤ

「さて、どうしたものか。夜に出歩くのは避けた方がいいようだし、何度も出向くのは時間と燃料の無駄だしねえ」

桂

「ガスが通ってたら、お風呂も沸かせたんだろうけどね」

サクヤ

「通ってても、ずっと放置してたガス釜に火を入れる蛮勇は持ち合わせてないよ。爆発なんかされたら、たまったものじゃない」

桂

「じゃあ、やっぱり温泉行くしかないね」

サクヤ

「ちょいとお待ち」

サクヤ

「なあユメイ。前に使ってた風呂って、新しいのに変えるときに捨てちまったんだっけ？」

ユメイ

「五右衛門風呂のことでしたら、蔵にしまったままだと思いますけど」

桂

「……そのお風呂って、あの大きい茹で釜？」

サクヤ

「そうさ。あれならガスが通ってなくても焚けるからね。ちょっと出来ない体験だろう？」

桂

「確かにね。友達には自慢できると思うよ」

贅の血うんぬんは土産話に向かないから、こういったいかにも田舎へ行ってきた的なエピソードは貴重かもしれない。

ちなみに五右衛門風呂の名前の由来は、かの天下の大泥棒・石川五右衛門が、釜茹での刑に処せられたことにちなんでの命名なのだそう。

足を火傷しないように、浮いている底板を踏み沈めて入るのだけど、それを知らずに下駄履きで入って、底を踏み抜いてしまったという話がある。

先人の失敗に学んでいるわたしは、同じどじをやらかさなくてすむ。これもひとつの備えあれば憂いなし。

サクヤ

「すでに入る気まんまんって顔だね。よし」

ぱん、とジーンズの腰を叩く。

サクヤ

「ここから町まで何往復もするのは面倒だし、夜に出歩くのは避けた方がいいみたいだし、ちょっと引っ張り出してこようかね」

桂

「あ、わたしも手伝うよ。入りたがったのわたしだし、大きい鉄釜なら重いでしょ？」

サクヤ

「まーね。だけどあんたで頼りになるのかい？」

桂

「むー。だけどわたししか手伝える人いないよ」

鳥月さんはお役目で朝から留守。

葛ちゃんも留守。それにいくらなんでも、力仕事ならわたしの方が役に立つ。はず。

そしてユメイさんは、結界を通り抜けることができないので、屋敷の外には出られない。

サクヤ

「ふむ……蔵があるのは庭だから、結界の外に出ることになるよ？」

桂

「わかってるよ。でも、出るっていつてもすぐそこだし、まだ夕方だから大丈夫だよ」

桂

「じゃあ、わたしはお掃除の続きをしようかな。もう綺麗な部屋は空いてないから、お客さんが増えたりしたとき困るし」

サクヤ

「まだ増やすつもりかい」

桂

「だって、わからないよ。昨夜の烏月さんだって、急だったんだし」

サクヤ

「そんな客、塩撒いて追い返せばいいんだよ」

桂

「もうっ」

本当にサクヤさんは烏月さんと仲が悪い。

桂

「ユメイさん、向こうはサクヤさんに任せて一緒にお掃除しよう」

ユメイ

「桂ちゃん、お掃除はわたしがやっておくから、サクヤさんを手伝ってあげて」

桂

「でも……」

ユメイ

「わたしは家から出られないから、わたしの代わりに、ね？」

桂

「あ……」

お屋敷には結界が張ってある。ユメイさんは温かい肉体を持っているけれど、本質的には霊体なのだそうで、結界を通り抜けることができない。

桂

「うん、わかった。ユメイさんの代わりにサクヤさんのこと手伝うよ」

今日のごはんは釜戸を使っての自炊なので、薪も買ってきていたようだけど、お風呂まで沸かすとなると、足りないんじゃないかと思う。

ちまちま小枝を拾って歩くより、お勝手の裏で薪割りでもした方がいいんだろうけど、斧を振り回すのには腕力不足。それにちょっと怖い。

葛ちゃんと合流できれば、たくさん集めるのも難しくないような気がするし「急がば」とか「塵も積もれば」とかのことわざもある。

桂

「よしっ」

サクヤ

「桂、どこ行くんだい」

桂

「ん、ちょっとね」

結界の外に出ることになるけど、まだ十分に明るいから大丈夫なはず。

落ちていた枯れ枝を拾い集めながら、とぼとぼと山道を歩く。

桂

「はぁ……」

白から黄、黄から赤へとうつろっていく陽射しの色に染められる木々と、かなかなとこだまする寂しげな蝉の声に、夏の過ぎ行く予感を覚えた。

感傷的な気分には拍車をかけられて、わたしはため息を吐くばかり。

サクヤさんが心配していることはわかっている。わたしがここに居られるのは夏休みの間だけ。

もちろん学校を辞めて羽様のお屋敷に移り住むという選択肢もあるけど、それで今後の暮らしの活計（たつき）を立てていけるのか。

桂

「難しいなぁ……」

オハシラサマのご神木ごとユメイさんに来てもらうというのはアリだろうか。

まてまて、ユメイさんは鬼の神様を封じているわけだから、鬼の神様を退治してしまわない限りそれはまずい。

だけど、烏月さんが鬼の神様を退治してくれたら別に――

桂

「はぁ……」

簡単に退治できるようなら、復活させようとしているケイクンを、あんなに必死に追いかけたりはしないよね。

第一、あんなに大きな木をどうやって移し変えればいいのか。

たとえ方法があっても植える土地がない。わたしは手狭なアパート暮らしの身だ。

桂

「……お屋敷に戻ろう」

夏休みが終わるのは二週間ほど先の話。

お母さんを亡くしてからのめまぐるしさを考えれば、それだけ期間があれば何が起こるか予想もつかない。この数日はその格好の事例。

だから早く帰って、今は少しでも長くユメイさんと一緒にいよう。

桂

「よしっ、ポジティブ・シンキーン！」

掛け声を出してしまうのは、陽子ちゃんの影響かもしれない。ほっぺたを叩いて気合を

入れれば完璧なんだけど、生憎と手は塞がっている。

そうそう、陽子ちゃんといえば、携帯電話を壊してから連絡をとっていない。早く帰ってサクヤさんに携帯電話を借りよう。

一抱えの枯れ枝を腕に、すっかり傾いた日を背中に、傾いた山道を降り始める。

桂

「あっ」

目の前にもうひとつ太陽があらわれた。

真っ赤に焼けた鉄のような赤光に目を灼かれて、もっていた薪を思わず取り落とす。
今のは一体何だったんだろう。

誰かの足音が近づいてくる。音の間隔が短いから、心配したサクヤさんが迎えに来たというわけではなさそう。

桂

「誰……？」

そろりと薄目を開けて、顔を覆った指の隙間から覗き見る。

赤い光が輝いているため、直視することはできないけれど、それはそれほど大きくはない、大皿ほどの大きさの円盤だった。

なるほど——あれは鏡なのかもしれない。

鏡ならわたしの後ろにある夕日を、そのまま映して跳ね返すことができる。子供はそういう悪戯が好きだ。

桂

「……もしかして、葛ちゃん？」

訊ねには答えず、無言のままこちらへ向かってくる。尾花ちゃんが一緒じゃないし、ぎこちないロボットのような動きは、葛ちゃんらしくない。

だけど、確かにその顔には見覚えが。

十分距離が縮まったところで声をかける。

桂

「やっぱり葛ちゃんだ」

角度の関係なのか、すでに鏡はまぶしくはない。

あ——あの鏡は——

昨日の朝のニュースで——違う。昨日の話題は吸血鬼事件だから一昨日だ——取り上げられていた、郷土資料館から盗まれた鏡なんだろう。

桂

「その鏡って、郷土資料館にあったやつ？」

葛

「……………」

桂

「葛ちゃんが犯人だったの？」

葛

「……ふふっ」

口を少しも動かさずに笑った。わたしを映す瞳にも動きがない。ぼうっと鏡を抱えて立っている。

葛

「見つけたわ、桂。贅の血を引く羽藤の末」

桂

「……葛ちゃん、一体何の冗談？」

葛

「冗談に見えるのかしら？」

鏡が光り、網膜をばかにする。

それは太陽を反射したものではなく、あの彼女たちの瞳の光。双子の鬼の瞳の赤。

目が眩む。赤に廻る。

光が森の陰に溶け込むと、そこには。

ちりん——鈴の音が聞こえた。

ノゾミ

「ごきげんよう、桂」

ノゾミ

「昨夜は入れてくれなかったから、今日は少し早い時間にお邪魔しようと思ったんだけど——」

ノゾミ

「こんな所で出くわすなんて、あなたとわたしの間には、縁の糸がつながっているのかしら？」

桂

「何で……まだ夜じゃないのに……」

ノゾミ

「そうね。さすがに少し辛いかもしれないわ」

ミカゲ

「月が昇るには早すぎる時間だから」

ノゾミ

「だからといって、こうして形に成れないわけではないのよ。ごらんなさい、日の神が死んでいくでしょう？」

ミカゲ

「世界が血の赤に染まっているでしょう？」

ノゾミ

「今の刻限を何と呼んだかご存知？」

桂

「逢魔ヶ刻——」

空には月の姿は見えない。

それは単に見えていないというだけで、どこかに存在してはいるのだろう。

そして存在する以上は、何かの拍子で姿を現すこともある。ユメイさんだって、わたしの危機に姿を現してくれた。

そして今は逢魔ヶ刻——

ミカゲ

「人と魔が逢う薄明の刻」

赤い瞳をひからせて、彼女たちが近づいてくる。

ノゾミ

「ふふっ、今日は大収穫。これなら主さまを起こしてさしあげられるわ」

ノゾミ

「鏡持ちの傀儡として使っているこの子も、贅の血には及ばないけど濃い血をしてるわ」

桂

「——っ!!」

わたしだけじゃなくて葛ちゃんまで。

どうしよう、どうしよう——

ノゾミ

「どうしようもないわ。あの女に助けを求めても無駄よ」

ミカゲ

「私たちが中に入れなかったように、あなたの声も伝わらないから」

赤い瞳をひからせて、二匹の鬼が近づいてくる。

同じだけ下がったわたしの背中、後ろの立ち木にぶつかった。

揺れてこすれて落ちた葉が、葛ちゃんの顔をかすったけれど、瞬きすらしない。

まだ血を吸われたような痕はないけど、大丈夫なんだろうか。そういえば尾花ちゃんはどうしたんだろう。

赤い瞳をひからせて、血を吸う鬼が近づいてくる。

赤く、赤く、染まる視界。

もうこの赤が落陽の色なのか、彼女らの瞳の色なのかの区別もつけられない。

眩暈がする。

歪む世界。廻る世界。立っているのがつらい。

ノゾミ

「もう、無理しなくていいのよ」

耳元でささやかれる声。

ミカゲ

「楽になってもいいの」

ささやかれる、声。

わたしの中で――

何かがぷつりと途切れた。

目の前に立ちふさがる蔵の扉は、わたしの腕力程度では開けられるかどうか定かではない程の、まったき鉄の塊だった。

サクヤ

「ふぬっ」

気合い一発、サクヤさんが肩や背中に力をこめると、鈍く軋みながらゆっくりと開いていく。

膨張気味に浮き上がった夏の空気と、ずっと押し込められて重く縮こまった空気が、ぐると渦を巻くように溶け合っていく。

本来ならば目には見えないはずの空気の流れが、宙に舞った埃のおかげで確認できる。

舞っているのは長い月日に層を成していた埃の内の、ほんの上っ面程度のものだろう。おそらくここ何ヶ月かの間に積もったもの。

それでも、明かり取りから射し込む光が格子状の線を作るのが見て取れるほどで、わたしは反射的に鼻と口とを手で覆っていた。

飛び出さないようフタがされるのを待ち構えていたかのように、心臓が大きく身震いし

た。

いけない、この感覚は——

昔、わたしがまだ小さかった頃、蔵に入っただけでいけないと言われていた。蔵にはお化けが住んでいると脅されていた。

忘れていたはずの出来事が、仕舞い込まれていた荷物と一緒に、薄明かりに照らされて浮かび上がってくる。

サクヤ

「おーおー、懐かしくも古臭い物ばかりだよ。あんたはアレの使い方なんて知らないだろう？」

特徴のあるシルエット。

確かに、写真や絵で見たことがある程度だから使い方なんてさっぱりだけれど、それが糸車や機織り機の類だということは理解できた。

サクヤ

「あれは笑子さんの趣味でねえ。あたしも作ってもらったことあるし、あんたの産着もお手製だったんだよ」

桂

「——」

ごちゃごちゃに絡まっていた糸がほどけていく。記憶の糸が織り合わさって、ひとつの模様を描いていく。

この蔵に入ったのは、テレビで『附子』を見た後だったっけ——

毒だから決して開けるなどと言いつけられていた桶の中身が水飴だったように、蔵の中にはお化けではない素敵な何かが在るのだと思ったのだ。

サクヤ

「さて、何かを見ては懐かしがってちゃ、ちっとも前へは進めないね。早いところ釜を見つけて——」

心臓の鼓動がどんどん速くなる。その音に邪魔されて、サクヤさんの声が遠のいていく。

サクヤ

「——桂？」

身体の中の潮の流れが、意識を此岸からさらっていく。目の前が暗くなっていく。

サクヤ

「——ちょっと、桂っ!!」

悲鳴じみた大声は、映画が始まる直前のブザーに少し似ているかもしれない。

わたしを呼ぶ声——

わたしを呼ぶ声が聞こえる。

わたしは今、わたしを呼ぶ声に導かれて、入っちゃいけないと言われていた蔵に来てい

る。

けい

「本当に入るの？」

けい

「入るよ。おくらの中には、きっと宝物がいっぱいあるんだよ」

こっそり鍵を持ち出して、顔を真っ赤にしながらいりを開けて、蔵の中に入った。

蔵の中には箱があった。

箱の中には何かが入っていた。

見えているのはほんの一部分だけだったけど、それが宝物だということは一目でわかった。

どうして一部分しか見えないのかというと、変な紙がぺたぺた貼られていたから。

変な紙には筆と墨とで書いたような文字がびっしり並んでいた。

ひらがなやカタカナだけじゃなくて、漢字もたくさん読めて偉いと、幼稚園の先生にほめられたことがあるわたしにも、全然読めない。

読めないのはきっと字が汚すぎるせい。蛇がぐにゃぐにゃ踊った跡のような、きちんとしてない読めない字なんだから。

お祖母ちゃんの部屋にも、同じように汚い字が飾ってあるけど、わたしがもらった賞状よりも立派な額縁に入っていたりするから気に入らない。

のびのびとした良い字だとお祖母ちゃんは言っていたけど、真似してあんな字を書いたら怒られるに決まっている。

けい

「こんなのはがしちゃおう」

けい

「いいのかな……」

けい

「大丈夫。いいから剥がしちゃおう」

あとでちゃんと戻しておけるように、綺麗に剥がそうとしたけど、途中でびりりと破れてしまった。

けい

「あーあ、知らないよ」

もういいや。気にせずにびりびりと破る。

けい

「あいたっ」

指の先に痛みを感じた。とげが刺さってしまったのか、紙の端で切ってしまったのか。

けい

「ばちがあたったんだよ」

わたしはかまわずに紙を剥がしていった。さっきよりも乱暴に、びりびりびりびり破いていく。

けい

「わ、きれい……」

出てきたのはピカピカ光る金属製の円盤だった。

わたしはそれが何だか知っていた。

けい

「これはずっと昔の鏡だよ」

鏡を覗き込むと、ぼんやりわたしの顔が映った。綺麗だけど、ちゃんと映らないので駄目な鏡だと思った。

けい

「あ、そうだ」

汚れているだけかもしれないので、服の裾でごしごしとこする。

けい

「はあ——」

冬に窓ガラスを曇らせて遊ぶように、息を吹きかけながらこすっていると。

——

「ふふふふふふ——」

知らない女の子の声をした。

きよろきよるとあたりを見回しても、女の子なんていない。

けい

「だ、だあれ？」

女の子の声

「私は望み——」

けい

「え？」

知らない女の子は鏡の中にいた。

けい

「……鏡の精？」

女の子

「似たようなものかしら。あなたがあの邪魔な紙をはがしてくれたのね」

端のきゅっと吊りあがった大きな目がちょっと意地悪そうだったけど、綺麗な子だった。わたしよりはずいぶんお姉ちゃん。

わたしの知っているお話は、鏡じゃなくて黄金のランプだったけれど、ランプの精もこすると出てきて、こすった人にこういうのだ。

言うがよい。望みを三つかなえよう——と。

けい

「すごいよ！ 本当に宝物があったよ！」

けい

「ちがうよ！ お化けだよ。帰ろうよ。帰ってお母さんにあやまろうよ」

けい

「やだ。望みをかなえてもらうんだもん。望みをかなえてくれるんだよね」

女の子

「そうね、あなたが私に自由をくれたら」

女の子

「あなた、名前は？」

けい

「けい……はとうけい」

女の子

「贅の血を引く羽藤の子なのね？」

けい

「にえのち？」

女の子

「あなたは特別な血をひいているのよ」

先ほど傷つけた指をじっと見つめる。

女の子

「ねえ、その指の血を鏡につけてみて」

けい

「そんなことしたら汚れちゃうよ。せつかく綺麗にしたのに」

女の子

「ふふふっ、いいから気にせずやってごらんなさい。じゃないとわたしはここから出られないの」

けい

「こするだけじゃだめなの……？」

ランプの精より弱いのかもしれない。向こうはおひげのおじさんで、こっちはお姉ちゃんだもの。

けい

「……わかった」

——駄目！ 駄目だよ、わたし！

誰かに止められたような気がしたけど、そんな言葉に抑えられるときどきじゃなかった。傷のまわりを強く押さえると、ぷっくりと赤い珠が盛り上がった。

——だからそんなことしちゃ駄目！

どこからか聞こえてくる声は知らんぷり。

血のついた指先が、鏡の表面に触れた。

鏡の表面がびりりと震えて、血の色を薄めたような光の洪水が、一瞬にして蔵の中に満ち溢れた。

目に染みる鮮やかな赤の爆発に、わたしは固く瞳を閉ざした。光を放つ鏡面をお腹に抱き込んで、必死で光を隠そうとする。

女の子

「ふふふっ、ふふふふふ——」

きゅっつつぶっていたまぶたを上げると、赤い光はすでに消えていた。

鈴を転がすようなクスクス笑いは鏡からではなく、ぺたりとしゃがんだわたしの頭の上から降ってきていた。

女の子

「あら、ずいぶんと小さいのね」

真っ白い脚が、鏡の中にではなく、わたしの目の前に伸びていた。

けい

「あ……すごい……本当に出た……」

女の子

「出してくれてありがとう。お礼を言うわ。だって、久方ぶりに手足を伸ばせるんだもの——」

鏡の中にいた彼女が、身体を持って目の前にいた。広げた両手の下で左右色違いの振り袖が、蝶の羽のようにひらひらと揺れている。

女の子

「私はノゾミ——」

ミカゲ

「——私はミカゲ」

ノゾミと名乗った子がぐるりと回ると、その後ろにはもうひとり、同じ顔をした子が控えていた。

驚いた。鏡合わせの双子のきょうだい。

けい

「わ、おんなじだ……」

ノゾミ

「そうね。ふたりとふたりで丁度いいでしょう。それにしても、変わった着物を着ているのね？」

けい

「普通だよ」

ノゾミ

「それが普通なのだとしたら、ずいぶんと長い間、箱の中に閉じ込められていたのね」

けい

「そうなの？ みんな着物だったの？ じゃあ、お姉ちゃんは時代劇の人なんだ」

ノゾミ

「……時代劇？」

けい

「知らないの？ みんな着物でちょんまげさんなんだよ」

そのとき、慌てたような足音が近づいてきた。

ノゾミ

「あら……」

大人の男性の声

「どうした！？ さっきの光はなんだ！？」

滅多に聞かないお父さんの怒鳴り声。わたしは身体を震わせて、蔵の入り口に怯えた目を向けた。

ノゾミ
「どうしたの？」

けい
「お父さんに怒られる……」

ミカゲ
「怖いのか？」

けい
「怖い。お父さん、普段はぜんぜん怖くないんだけど、悪いことするとお母さんより怖くなるの」

ノゾミ
「ケイは悪いことをしたの？」

けい
「だって、ここには入っちゃいけないって」

ノゾミ
「それじゃあ今度は私たちが助けてあげましょうか。望みをかなえてあげましょうか」

けい
「お父さん、怒らなくなる……？」

ノゾミ
「ふふっ、もう二度と怒らないようにしてあげる。ちゃんと言うことを聞いてくれるなら」
ノゾミお姉ちゃんがわたしに手を差し伸べた。

ノゾミ
「ほら、一緒に来て。見つからないように、他の所へいきましょう」

——駄目！
——言うことを聞きちゃ駄目なんだってば！
どこか遠くから声が聞こえる。
けどすぐ目の前にあるせっぱつまった事態が、ためらうわたしの背中を押してくる。

ノゾミ
「ほら、急がないと捕まってしまうわよ？」
喉を撫でた猫のように、にんまり瞳を細めながら、ノゾミちゃんが白い手をわたしに伸ばした。

白い手に引かれるままに、山の中を走っていた。見覚えのある景色の中を、見覚えのある道を辿って、見覚えのある場所へと向かっていた。

ああ——これは最初の夢だ。

ノゾミちゃんに連れられて、あの槐の木へと向かって行く。オハシラサマのご神木へと向かって、わたしたちは走って行く。

わたしは止めようと警告を繰り返したのに、小さなわたしは連れられていってしまった。

これが失われた記憶の再生なのだとしたら、そんなことは当たり前。現在以前の出来事に対しては、傍観者でしかありえない。

——振り返る。

大丈夫。お父さんは追いかけてきていない。せわしなく打つ胸を撫で下ろす小さなわたし。

涼しげな鈴の音に、小さなわたしは前へと向き直る。

ノゾミちゃんに手を引かれて足を速める。

道の勾配がだんだん急になる。

その角度に抗って、わたしたちは加速する。駆け上る。

速く、早く、はやく、はやく——

足元の草を踏みしめて急ぐ。

ざっ、ざっ、ざっ、ざっ。

ざあ——

急に視界が開けた。

見上げるほどの大きな槐の木が、たくさんの白い花を咲かせて、山にその根を下ろしていた。

ずっと昔から羽藤の家が祭っている、オハシラサマのご神木が生えている場所——その前で、わたしたちは立ち止まった。

けい

「ここ、子供が来たら駄目だって……勝手に入ったらばちが当たるって……」

ノゾミ

「そう。私たちには近寄れなかった場所」

ミカゲ

「これ以上は近づけない場所」

ノゾミ

「忌々しいハシラの封じがあるから——どれほど経ったのかは知らないけれど、まだ健在だったのね」

ミカゲ

「でも、あなたたちなら大丈夫」

けい

「大丈夫なの？」

ノゾミ

「だから、代わりに行ってもらうの。あの木の下に捕らわれている、主さまを解放してもらうの」

ノゾミちゃんがわたしの顔を覗き込んだ。

ノゾミ

「桂。わたしの目を見るのよ」

赤く明るく輝く瞳。

雷が鳴っていた。

けい

「——いやっ」

わたしは自分自身の悲鳴によって意識を引き戻される。

お父さんとお母さんが、傘もささないでこちらを見ている。二人とも怖い顔をしていた。

お母さんは烏月さんが持っているような、長い刀を持っている。

桂の父

「真弓、どうだ」

お父さんに促されたお母さんは、蒼く光らせた右目をご神木に走らせる。

桂の母

「駄目ね。もうこの木の中にオハシラサマはいないわ。彼女は還ってしまった」

桂の父

「そうか……」

桂の母

「ええ、奴が出てくるのは時間の問題よ。まだ綻びは小さいから、大きな魂は出てこれないけど、封じの要がない以上……」

傍観者でしかないわたしは、この先の結果だけは知っている。

結局ハシラの封じは解かれない。ユメイさんはわたしの危機に現れる。オハシラサマの魂が還ってしまったなんてことはない。

開放されたのはあのふたり——そういえば彼女たちはどこへ行ってしまったんだろう。

桂の母

「……ひとまずわたしが抑えてみるけど、きっと何時間ともたないんじゃないかしら。本当にどうしましょう」

桂の父

「真弓」

桂の母

「なんです、あなた？」

桂の父

「僕が——僕がオハシラサマを継ぐことはできないだろうか？」

桂の父

「僕にはオハシラサマと同じ血が流れている。僕がオハシラサマの穴を埋めれば、封じは元の状態に戻るはず……」

桂の父

「少なくとも、その綻びとやらが大きくならなければ、主は出てこれないはずだ」

桂の母

「ええ、そうね。だけどそれは、できないわ」

桂の父

「どうして」

桂の母

「あなたを愛しているから——」

桂の母

「なんて理由だけなら良かったんだけど、もっと現実的な問題なの。あなたじゃ《力》が足りないのよ」

桂の父

「しかし、僕の身体には——」

桂の母

「流れているけど薄い。特別。長い羽藤の歴史の中で、一番一般人に近いのはあなたよ」

桂の母

「濃さで言えば、お義母さんの三分の一ぐらいで、うちの子の十分の一ぐらいかしら」

桂の父

「——真弓、まさか！」

桂の母

「馬鹿ね、そんなことしないわ。心を鬼にしたところで無理なんだから」

桂の母

「これも現実問題がらみでね。ある程度《力》の使い方を知らないと、オハシラサマにはなれないの」

桂の母

「あなたには《視》えもしないでしょう？ それはあの子たちも同じ。そういったことは何も教えてないから」

桂の父

「母さんは知っていたみたいだけど——」
言いながら、お父さんは首を振る。

桂の母

「ええ、お義母さんが亡くなったのは去年だから」

女性の声

「では——」
——え！？

ユメイ

「では、わたしなら大丈夫ですね」

桂の母

「ユメイちゃん、あなた……」
何で——何でユメイさんが？

ユメイ

「わたしは笑子さんから《力》の使い方の手ほどきを受けていますから」

桂の母

「確かに、ユメイちゃんは才能あるけどね。でも、これはうちの子たちがやったことだから……」

ユメイ

「でも、他に方法がありませんよね？」

桂の母

「……………」

知ってる。わたしはユメイさんとわたしの関係を知っている。ここでも封が解けようとしてる。

そう、ユメイさんは、お父さんとお母さんたちのことを呼ぶときに――

ユメイ

「叔父さん、叔母さん、お願いします」

そしてユメイさんはわたしの方を向いて微笑み、その儚さに別れの気配を感じたわたしは、大声をあげて取りすぎる。

けい

「――ゆめいおねえちゃん！」

わたしを呼ぶ声――

わたしを呼ぶ声。

――

「桂、しっかりおし！」

近づいてくるサクヤさんの声と。

――

「桂ちゃん！」

柚明お姉ちゃんの声。

けい

「あ……お姉ちゃん」

柚明お姉ちゃんが、見慣れない青い着物を着てわたしを覗き込んでいる。

泣きそうな顔をしているのは、きっとわたしが悪い子だから。

けい

「ごめんなさい――わたしが、わたしが蔵になんか入ったりしたから――」

サクヤ

「いいんだよ。そんなことより具合はどうだい？」

けい

「……………」

けい

「……何でサクヤおばちゃんがいるの？」

柚明

「——！？」

サクヤ

「桂、今、まさか、あんた……」

けい

「え？」

サクヤ

「あたしのことおばちゃんって言ったかい？ 柚明のことお姉ちゃんって言ったかい？」

けい

「だって、お姉ちゃんはおね——」

赤。

けい

「あれ？ 何で柚明お姉ちゃんは——」

赤い痛み。

けい

「あれ？ わたし、どうしてこんな——」

顔を押しさえる指が、お姉ちゃんやお母さんの指みたいに細くて長い。押しさえた顔の感触も違う。そういえば髪の毛も、短かったはずなのに——

けい

「——あ——何で——どうして——」

ずくんずくんと突き刺さる赤。

サクヤ

「ちょっと柚明！ 桂がまずいよ！ あんたのことお姉ちゃんって、思い出してるよ！」

柚明

「ええ、そうですね……」

サクヤ

「そうですねって、柚明！ あんた、何とかできないのかい！？」

必死な様子のサクヤさんに向かって、お姉ちゃんが悲しそうに目を伏せて首を振っている。

柚明

「桂ちゃんは思い出したがついていましたから、この家に留まればいずれは——とっていました」

柚明

「そしてわたしも——」

柚明

「わたしも心のどこかでは、桂ちゃんがつらい思いをするとわかっていながら、思い出してほしいと——そう思っていました」

サクヤ

「柚明、あんた……」

お姉ちゃんの優しい手が、熱を測る時のようにわたしの額に当てられた。

ああ、そうだ。こんなに頭が痛いのは、きっと風邪を引いて熱があるからだ。あんなに雷が鳴っている雨の中を、傘もささずにいたから。

柚明

「眠ってもらいましょう。眠りの中で、今日の出来事を整理してもらいましょう」

少しひんやりとしている柚明お姉ちゃんの手が、熱と一緒に頭の痛みを吸い取ってくれているような気がして——

わたしはうっとり目を閉じた。

柚明お姉ちゃんからは、いい匂いがする。

白い花の甘い香りが、さまざまな思考と一緒に赤い痛みをはぎ落としていく。

柚明

「夢として再び封じるか、記憶として受け入れるか——すべては桂ちゃん次第だから」

長く眠っていたような気がする。

長い夢にたゆたっていたような気がした。

薄く目を開くと高い天井。

お母さんとふたりで十年間を過ごした、アパートの天井ではない。

ここは経観塚のお屋敷だ。

経観塚——わたしの生まれた父方の実家。

森に囲まれた大きなお屋敷。それこそ、庭には蔵が建っているような——

桂

「あ……そうだ、わたし、蔵の中で……」

ずきりと赤い痛みが走った。

だけど我慢できないほどでもないし、別のことにかまけていれば忘れてしまうかもしれない。

わたしが痛み慣れたせい、ここまでは思い出しても大丈夫だという範囲中だったからなのかわからないけれど。

桂

「わたしがノゾミちゃんとミカゲちゃんを蔵の中から出しちゃったんだ……」

あの鏡に貼ってあったのは、烏月さんが結界を張るときに使うお札とよく似たものだった。

おそらくあれは封じの札——霊体を通さないという性質は、結界にしろ封じにしろ変わらない。

その封じを、わたしが剥がしてしまったから。

桂

「わたしのせいで、お姉ちゃんが……」

ぼろぼろと涙が零れてくる。わたしのせいでお姉ちゃんは大変な目にあってばかりだ。

桂

「柚明お姉ちゃん……」

どうして忘れていたんだろう——

お姉ちゃんは、お父さんのお姉さんの娘さん。つまりわたしの従姉にあたる人。

伯父さんと伯母さんは、お姉ちゃんがまだ小さかったころに亡くなっている。

伯母さんは経観塚を離れてお嫁に行った人だから、贅の血を狙った鬼に襲われたという可能性も考えられなくはない。今にして思えば。

そして柚明お姉ちゃんは、お祖母ちゃんに引き取られてこのお屋敷で暮らすことになった。

それはまだ、お父さんとお母さんが結婚するよりも前のこと。

だからわたしにとってのお姉ちゃんは、いとこというより実の姉同然の人。

そして一回り近く歳が離れていたせいもあって、お母さんみたいな人でもあった。

お母さんと同じくらい大切な人。

わたしはそんなに大切な人のことを、存在していたということすら忘れてしまっていた。

わたしは――

――誰かの足音を耳にして、床から身体を起こした。

桂

「柚明お姉ちゃん……？」

返事はない。

返事のないまま、足音はこちらに近づいてくる。

体温の移った掛け布団の外は、夏だというのに肌寒くすらあった。

桂

「……誰？」

明かりを付けていない室内に比べれば、すっかり傾いたとはいえ太陽の出ている外の方が明るい。

部屋の前にやってきた人のかたちが、赤く染まるふすま障子に影絵となって浮かび上がった。

影は柚明お姉ちゃんよりも、頭半分ほど低い。

ノゾミちゃんかと思ったわたしは、冷たい肩を抱いて――

桂

「……葛ちゃん？」

その存在に思いあたって、少しだけ緊張を解いた。影はノゾミちゃんたちよりも小さい。だけど昨日一日の感じだと、快活な返事をくれそうな子だったけれど――

桂

「葛ちゃんじゃ……ないの？」

返事はない。

返事のないまま、ふすま障子が開かれる。

桂

「なんだ、やっぱり葛ちゃんだ……」

誰彼という言葉が元というだけあって、黄昏という薄明の時間帯は、人の顔の見分けがつきにくくて――

逆光ということもあって、障子が開いても表情なんかはわかりづらい。だけど葛ちゃん本人だということはわかる。

桂

「あ、もしかして柚明お姉ちゃんかサクヤさんに様子を見て来てって頼まれた？」

相変わらず返事なし。

その、ぼうっと突っ立っているようにも見える葛ちゃんの足元を、白い風がすり抜けた。

それはわたしたちふたりの真ん中で止まると、背中の毛を逆立てて牙を剥いた。

わたしの方にはなく、葛ちゃんの方に向かって。

何だろう。何かがおかしい。

尾花ちゃんが葛ちゃんを威嚇（いかく）している。

きっと葛ちゃんの様子がおかしいことに原因があるんだろうけど。

何がおかしいんだろうと改めて観察するわたしの視線が、ある物の上で止まった。

葛ちゃんは――

射し込む夕陽を拒むように跳ね返して光る、古びた鏡を抱きかかえていた。

桂

「あの鏡、まさか――」

葛ちゃんが一步こちらに踏み出してくる。

鈴の音が聞こえたような気がした。

風鈴の音だろうか。

いや――

わたしはこの鈴の音を知っている。

これはあの――

――

「やめるんだ！」

わたしが答えに行き着く前に、耳に残った音さえもかき消すような大声が、庭の方から響いてきた。

思考は中断。意識も視線もそちらの方へ――

桂

「駄目だよ、尾花ちゃん」

わたしはしゃがんで、尾花ちゃんを抱き上げる。

唸り声ひとつ立てずに葛ちゃんを睨む尾花ちゃんは、可愛らしい姿に見合わない威圧感
というか、殺気のようなものを放っている。

桂

「どうしたの、葛ちゃんに向かって？」

顎の下をこちょこちょとくすぐっても、目を細めて態度を和らげたりなどはしない。

むしろ腕の中から飛び出そうと、その小ささに見合わない力で身をよじらせる。

桂

「わっ」

ぬいぐるみを抱き潰すようにして、わたしは逃がすまいと抱え込む。

桂

「ねえ、葛ちゃん。尾花ちゃんに意地悪なことしなかった？」

葛

「ふふふふふふっ」

意地悪な子が何かを企んでいるような笑いで、わたしの質問に応じる。

あれ——

——何だろう。この違和感について考える。

——

「やめるんだ！」

わたしが答えに行き着く前に、耳に残った音さえもかき消すような大声が、庭の方から響いてきた。

思考は中断。意識も視線もそちらの方へ——

もしかして、ケンカの真っ最中だったりするのだろうか。

桂

「ふたりとも落ち着いて。ねえ葛ちゃん、いったいどうしちゃったの？」

その質問には答えずに、葛ちゃんはずかずか中に入ってこようとする。

桂

「ちょっと、葛ちゃんってば！」

まあ、話は中だと思っているのかもしれないし、それは別にかまわないんだけど、返事ぐらいはすぐにしてくれたって。

そして部屋の中に入ってこようとする葛ちゃんに——

とうとう尾花ちゃんが飛びかかった。

桂

「えっ！？ ちょっと、尾花ちゃん！？」

やめて——と止めようと思ったその時。

——

「やめるんだ！」

突然の大声に驚いた。

尾花ちゃんですえも、葛ちゃんからいったん離れて、声のぬしがいる庭の方へと頭を向ける。

もちろん、わたしもそちらの方へ——

どうやってわたしの考えを読んだんだろう——じゃなくて、一体誰が、何の目的で。

そして庭の方に見えたのは、鳥月さんの振るう太刀を、ケイクンが大きく飛び退きかわしているところだった。

振るわれる太刀の風切り音と、生え放題の庭草を踏み蹴立てる音が、ここまで届いてくる。

ケイ

「明日になれば、大人しく切られてやると言っているのに、邪魔をして！」

鳥月

「端から握り潰すつもりなら、どんな約束でもできるものだよ。そんな空約束が信じられるはずあるまい」

ケイ

「このわからずや！ 明良さんはそんなに疑り深くなかったぞ！」

鳥月

「そう、だからこそ今の今がある」

ケイ

「くっ」

武器を持っていないケイクンは、鳥月さんの攻撃をかわすしか手がない。

そんなケイクンに対して振るわれる鳥月さんの太刀には、一片の情けも迷いも混じっていない。

鳥月

「現身を持つ鬼よ、結界の代わりに私がここで立ちはだかる。贄の血目当てに出てきたことを、悔いながら滅びて行くがいい」

ケイ

「違う！ 僕は桂を狙ってここに来たんじゃなくて、桂を狙っているのは僕じゃなくて——」

ケイ

「——しまったっ!!」

そう叫んだケイクンの目は、自分や鳥月さんにではなくて、わたしの方へと向けられていて。

その真剣な表情は、鳥月さんの注意を逸らすための芝居になどは見えず。

桂

「え？」

わたしは慌てて、大立ち回りに奪われていた目を自分の身の回りへと向ける。

そうだ、この鈴の音はあのふたりの――

葛ちゃんは大皿ほどもある鏡を胸に抱いている。鈴の音は、細かく震えるその鏡の表面から響いている。

ノゾミ

「ふふふっ、入らせてもらったわよ」

その声もまた、鏡から――

葛ちゃんは既に部屋の中にいる。

ノゾミ

「現身を持たぬものを阻む結界ならば」

ミカゲ

「越えた後に形に成ればいいだけのこと」

ノゾミ

「どんなに固く結んだ結界でも」

ミカゲ

「内からならば容易く綻びるもの」

今度ははっきりと、鈴の音。

鈴の音を響かせながら、素足が畳を踏みつけた。
瞳を焼き付かせる赤が冷めると、そこには双子の鬼がいた。

あの蔵の出来事を再現するように、双子の鬼が形を成していた。

ノゾミ

「桂――あなたの血をもらいに来たわ」

ミカゲ

「今度こそ主さまを自由にしてもらおうわ」

十年前に柚明お姉ちゃんが食い止めたことを、再び為そうとする鬼たちがいた。

烏月・ケイ

「桂さん！」

庭のふたりが叫ぶのと同時に、尾花ちゃんの後ろ足が畳を強く蹴って――

わたしは姿を見失った。

ばんっ——

頭の上から大きな音。見上げるとたわんだ天井板が揺り返している。
尾花ちゃんの姿はもうそこにはない。

ただ、見上げる途中の視界の中を、白いものがよぎっていった。

野生の獣だからとは、一口には括れないすごい動きだったのだけれど。

ノゾミ

「うろちょろしないで、目障りだから。私は獣の血を飲む趣味はなくてよ」

袖をひるがえらせ腕を一振りすると——

その手が指し示す始点と終点を結んだ空中に、赤い光の線が走る。

姉に倣ったミカゲちゃんも同様に——

一本——

二本——

三本——

線と線とが交わり面となる。

ノゾミ

「大人しくしていてももらえるかしら」

蜘蛛の巣のようなそれに邪魔をされ、縦横無尽な素早い動きを制限される尾花ちゃん。
のみならず、それは投網のように覆い被さり、尾花ちゃんを拘束してしまう。

瞳を細めてその様子を一瞥すると、もう関心がないといった顔でわたしに向き直る。

瞳が赤く輝いて、唇の両端が吊りあがった。

桂

「ひっ——」

ノゾミちゃんの足が畳を蹴り、身を硬くするわたしの前へと舞い降りた。

着地と同時に鈴の音。

ノゾミちゃんに目を奪われていた間に回り込んだらどうか。いつの間にか後ろにきていたミカゲちゃんが、耳元でささやく。

ミカゲ

「それではいただきます」

剥き出しの首に触れるミカゲちゃんの冷たい手が、わたしの芯を凍らせた。

そして鈴の音と共に近づいたノゾミちゃんが、呪縛の視線でわたしの瞳を覗き込む。

ノゾミ

「うふふふふっ」

あ——

氷像のように硬く凍りついた身体は、喉を震わせ悲鳴を発することすら許してくれない。
それなのに——

ノゾミ

「ふふっ……あはははは！」

ノゾミ

「今ごろ来ても——ねえ、ミカゲ？」

ミカゲ

「すっかりご馳走になりました」

もう用済みだといわんばかりに、ふたりはわたしの身体を手放した。

支えを失い倒れ込む身体は、もう凍りついてはいない。さっき声が出たのは、きっと呪縛を解かれていたから。

だけど空っぽになった身体は、自由に動かすことができずに——

わたしはその場に倒れ込む。もう痛みさえ感じない。

桂

「あ……柚明おね……もう……わたし……」

柚明

「桂ちゃん！」

駆け寄ろうとするお姉ちゃんを制するためにか、一歩前に出てわたしを見下ろす。

目があうと、意地悪に唇を歪めた。

ノゾミ

「あら、桂はもうおしまいかも。ちょっと吸いすぎてしまったかしら」

ミカゲ

「でも、十分」

ノゾミ

「そうね、これだけあれば問題ないわ。あなたもずいぶん桂から血をもらったみたいだけ
ど——」

ミカゲ

「最後の最後に濃い血があるから」

ノゾミ

「私の《力》の方が、今ではきっと上」

ミカゲ

「私たちに、あなたは勝てない」

ノゾミ

「残念ね。あなたにあげた桂の血は、ぜんぶ無駄になってしまうのね」

ノゾミ

「そのぶんが身体に残っていたなら、桂もまだまだ元気だったかもしれないのに」

柚明

「桂ちゃん……」

ノゾミ

「ふふっ、可愛そうな桂」

そんな、柚明お姉ちゃんは悪くないのに——

ミカゲ

「では姉さま、封じを——」

ノゾミ

「ハシラを消して、解きましょうか」

ここがわたしの行き止まり。

ここから先のことを、わたしは知らない。

ノゾミ

「ふふ——」

笑い声のぬしへと視線が移るわずかな隔たりの間に、まなざしのかたちが一変する。

柚明

「桂ちゃんから離れなさい」

燃えるような光を背負い、それすらしのいで輝く蝶を、一頭、二頭と舞い飛ばせながら、
厳しい声で言い放つ。

ノゾミ

「ふふふふふっ——」

その強い柚明お姉ちゃんの言葉さえも、一笑に付してしまうノゾミちゃんは意地が悪い。

ノゾミ

「そうね——」

なんて肯定的な返事をして、従うつもりはきつとない。

わたしの身柄をミカゲちゃんひとりに任せて、ひとり悠然と前にでる。

きつとそれで離れたつもり。

むっとした顔のお姉ちゃんに向かって、楽しそうに微笑んだ。

ノゾミ

「ふふっ、下手な冗談」

本当に。

存分にわたしの——贅の血を吸ったことによる自信の表れか、人質になりそうなわたし
を確保していることによる強気か——

どちらにせよ、わたしのせい。

そして、きつとこのままではお姉ちゃんが大変なことになる。

だからわたしは、空っぽの中に残った欠片を集めて声をだす。

桂

「お姉ちゃん……」

思い出して知ったことを伝えるために、暗いところへ落ちていきそうな意識を奮い立た
せて声を出す。

桂

「お姉ちゃん、鏡を……」

柚明

「鏡？」

桂

「鏡を壊して！ わたしが蔵で見つけた鏡から、このふたりは出てきたの！」

柚明

「鏡——」

この部屋にある鏡は——

焦点の定かではない瞳で立ち尽くしている、葛ちゃんが手にした一面のみ。
それはわたしが封じを解いてしまった鏡。
射し込む夕陽を跳ねて、ノゾミちゃんたちの瞳そっくりに赤く輝いている。

顔をしかめてその光を睨みつつ、柚明お姉ちゃんは指を突きつけた。

柚明

「そう——その鏡に依ったあやかしなのね」

無数の蝶の羽ばたきが重なり、聞こえないはずの羽音が耳を打った。

青い風が翔ける。

ノゾミ

「ミカゲ！」

声に従い何かをしようとしたミカゲちゃんに、無我夢中でしがみつく。動かないと思っていた、身体が動いた。

ノゾミ

「——」

叫んでももう間に合わない。

蝶の群れは一塊の光となって、鏡を撃った。

迫ってくる——

夕陽に染められて、ただでさえ赤みがかった視界が、赤一色に満たされる。

そんな赤い世界の中にわたしがいる。妖しい血色に濡れ光るノゾミちゃんの瞳の中に、おののくわたしが映り込んでいる。

周りにはこんなにも暖色だらけだというのに、わたしは寒くて身体の芯まで凍りついていて——

きっと血を吸い尽くされて、本当に冷たいものになってしまうのだ。

嫌だ。

そんなことは——

——

「させないわ」

凜とした声が出て、寒色の風が吹き抜ける。

その風が、ほんの少しわたしを溶かした。

桂

「あ……柚明お姉ちゃん……」

ざりざりのシャーベットのような声が漏れる。

一応は無事といえるわたしに向かって温かなまなざしを向けた柚明お姉ちゃんは、その眼の色を一変させて――

柚明

「桂ちゃんから離れなさい」

燃えるような光を背負い、それすらしのいで輝く蝶を、一頭、二頭と舞い飛ばせながら、厳しい声で言い放つ。

ノゾミ

「ふふふふふっ――」

その強い柚明お姉ちゃんの言葉さえも、一笑に付してしまうノゾミちゃんは意地が悪い。

ノゾミ

「そうね――」

なんて肯定的な返事をして、従うつもりはきつとない。

わたしの身柄をミカゲちゃんひとりに任せて、ひとり悠然と前にでる。

きつとそれで離れたつもり。

むっとした顔のお姉ちゃんに向かって、楽しそうに微笑んだ。

ノゾミ

「ふふっ、下手な冗談」

本当に。

それはわたしを人質にとっている余裕なのかもしれない。

今のわたしは単なる足手纏い。きつとお姉ちゃんを危ない目にあわせてしまう。

どうしようと、考える。

わたしのせいでお姉ちゃんは手を出しあぐねている。

どうしよう、どうしよう――

このピンチを乗り切るには、どうすればいいんだろう――

視界の片隅で、赤い光がまたたいた。

ノゾミちゃんの瞳でもミカゲちゃんの瞳でもない、もっと大きな円いもの。

それは――

わたしが封じを解いてしまった鏡。
おそらくは邪視の暗示で操られているのだろう、葛ちゃんの手によってここへ持ち込まれた古い鏡。

桂
「お姉ちゃん、鏡を……」

柚明
「鏡？」

桂
「鏡を壊して！ わたしが蔵で見つけた鏡から、このふたりは出てきたの！」

柚明
「鏡——」

柚明
「そう——その鏡に依ったあやかしなのね」

柚明お姉ちゃんが着物の袖をはためかせて腕を振るい、その指先が鏡を指し示す。

とりまきの蝶が羽ばたいて、青い風が吹き荒ぶ。
ノゾミちゃんとミカゲちゃんのふたりが、慌ててわたしから手を離れたことで確信した。
やっぱりあの鏡が弱点——
だからわたしは、がむしゃらにしがみついて、ノゾミちゃんの邪魔をする。

ノゾミ
「——このっ!!」

睨まれたけれど、怖くない。

蝶の群れは一塊の光となって、鏡を撃った。

どうしてふたりの牙は、こんなにも容易くわたしの身体の中に入り込んでくるんだろう？

ノゾミ
「んっ……んくっ……」

ミカゲ
「んふっ……はっ……」

わたしの身体にまとわりついて、歯型の深く穿たれた肌に舌をはわせる。

ノゾミ

「んんっ……」

時折、真っ白い喉をそらして、わたしの生命を飲み下して、満足げに目を細くする。
そんな様子も、音を立てて血を舐めすするその仕草も、身じろぎするたびに響く鈴の音も、ふたりの身体の柔らかさも――

どことなく猫を連想させるところがたくさんあるにもかかわらず、あの高い体温だけは感じることはできない。

真夏の夕べにこんなにくっつきあっているのに、熱いどころか寒いだなんて、何だか変だ。

むしろ寒さは増していく。

身体から血が抜けていくにしたがって――

すうっと目の前が暗くなっていくのは、傾いた日が山際に隠れたからではないと思う。
この深いところに沈んでいくような感覚は、今日だけで幾度ともなく。

これも夢ならいいと思う。

目が覚めたら柚明お姉ちゃんが側にいて、優しい声で問い掛けてくれたりする――

柚明

「桂ちゃん、しっかり！」

桂

「あ……柚明お姉ちゃん……」

出ないはずの声が出た。

透き通る赤に包まれて立つ柚明お姉ちゃんが、悔恨のまなざしをわたしに向けている。

柚明

「桂ちゃん……」

耳障りな音を立てて鏡に亀裂が入った。

それはひとつの世界の終焉を告げる鐘の音。

鏡に映った彼女の世界が、その中心からいくつもの欠片となって崩れていく。

桂

「――っ」

わたしはただ息を吞んで、鏡の崩壊を見つめていた。

ノゾミちゃんとミカゲちゃんは、わたしが呼び寄せてしまった禍（わざわい）なのだから、見届けないといけないと思ったから。

ノゾミ

「よくもっ、よくもおーーーーっ!!」

本体である鏡と同様にその身体にも亀裂が入っていた。

柚明

「あなたたちも、たくさんの人の命を吸って来たのでしょうか。因果応報よ」

ノゾミ

「因果応報——ふふふっ、嫌いな言葉じゃないわ。そうね、確かにあなたの言う通り、私の番が来ただけかもしれないわね」

ノゾミ

「いいわ。これが私のしたことに対する報いなら、喜んで——とまでは言わないけれど、受け入れることにしましょう」

桂

「何で……」

ノゾミ

「だって私、鬼に成ったことにはひとかけの悔いもないんですもの」

ノゾミ

「人のまま死んでいたことを考えれば、この終わり方は十分にまし——」

ノゾミ

「だから主さまに鬼にしてもらったの」

ノゾミ

「だから、私を鬼にしてくれた主さまを助けて差し上げられなかったことが、悔しくて悔しくて仕方がないのよ」

ノゾミ

「ユメイ——だったかしら、ハシラの継ぎ手」

ノゾミちゃんが最期の言葉を紡ぐ。

ノゾミ

「だから私を滅ぼすあなたに、この悔しさを分けてあげるわ」

ささやかな悪戯を思いついた少女のあどけない口調に、たっぷりと呪詛をまぶして。

柚明

「桂ちゃん！」

桂

身体の中の潮流が、呪いの視線を運んでくる。

眩暈がする。気持ちが悪い。
ぐらり――

かしいだ身体が倒れる前に、優しい人に抱きとめられた。

柚明

「桂ちゃん、大丈夫？」

桂

「あ、うん……」

桂

「どこも痛くないし、何ともなっていないみたい」

柚明お姉ちゃんに抱きとめられたときに、眩暈も気持ち悪さも消えてしまった。

桂

「でも、ちょっと気分悪いかな」

柚明

「そう……鬼気に当てられたのね」

けどもう大丈夫だ。

わたしの血を狙っていた鬼は、柚明お姉ちゃんに退治されてしまったのだから。

ああ、そうだ。鬼といえば――

庭で烏月さんと戦っていたケイクンは、いったいどうなったんだろう。

居間には沈黙と気まずさがわだかまっていた。

居間の中にいるのは三人。

まず、わたし。

次に、烏月さん。

それから――

自らを鬼だと認めていたケイクン。

先ほどまで争っていた（詳しく言うなら烏月さんが一方的に切りかかっていた）ふたりが同席しているのだから、おかしな空気になるのも当然。

にもかかわらず表面上平穏なのは、今ここにいない人が、いない理由に関係があった。

開いたふすまにそろって目を向け、物腰静かに入ってきた柚明お姉ちゃんの顔色をうか

がう。

柚明

「サクヤさんの状態は落ち着いたわ」

桂

「ほっ……」

サクヤさんは身体を張ってふたりの争いを止め、その結果大きな傷を負ってしまった。

らしいと言えばらしいけど、無鉄砲すぎてこちらの方がたまらない。

命があるだけまだというか、お姉ちゃんがいなかったら取り返しのつかないことになっていたというか——

その柚明お姉ちゃんをじっと見ているケイくんを、ちらりと横目で見ると。

ケイ

「ただそのためだけに、明良さんを僕の運命に巻き込み、鬼に憑かれた度し難い命をつなぎとめてきたんだ」

ケイ

「桂！ 待つんだ！ そっちは危ない！」

ケイ

「違う！ 僕は桂を狙ってここに来たんじゃなくて、桂を狙っているのは僕じゃなくて——」

鬼らしくないけど鬼で、烏月さんにとっては目の敵で、だけどわたしを気遣ってくれている風で、サクヤさんが命がけで助けたりして——

この人は、一体何者なんだろう。

ケイ

「うん？」

ケイくんがわたしの方に顔を向けた。

いけない。横目でちらりと見ていたつもりで、いつのまにか不躰なまなざしを送っていたらしい。

見るという行為にどれだけの影響力があるか、嫌というほど思い知ったばかりなのに——

桂

「——っ」

柚明

「……桂ちゃん？」

桂

「ううん、何でもない」

ケイ

「……………」

その様子をケイくんがいぶかしんでいるけれど、それよりも。

桂

「その……葛ちゃんは？」

思った通り傀儡として操られていたのだという葛ちゃんは、ノゾミちゃんたちが消えたその後、糸を切られた操り人形のように倒れた。

烏月

「寝ているよ。身体の方は落ち着いている」

柚明

「ええ、ケガはしていないみたい」

桂

「それは良かったよー」

ちなみに緊張の糸がぷつりと切れたわたしも、一度寝込んでいたりする。

ケイ

「……………」

桂

「あの一、どうかしましたか？」

ケイ

「いや……何でもないんだ」

何でもないという割には難しい顔をしていた。

そこを視線で追求すると、ケイくんは視線を遠くに向けて——それでも答えてくれた。

ケイ

「ただ僕の経験からすると、自分が何をしたかは覚えているはずだ」

桂

「そう……」

自由意思によらない行動を覚えているのって、一体どんな気分なんだろう。

酔っ払って暴れた人が、次の日自己嫌悪の嵐に見舞われるなんて話はよく見聞きするけれど。

桂

「……………」

目を伏せるとちゃぶ台に乗っている、ふくさの上に集められた鉄の破片が目に入る。

まあ葛ちゃんはこれを運んできただけで、直接わたしを襲ったりしたわけじゃないから、別に気にするほどのことじゃないかもしれないけど。

ケイ

「だけど、これでひとつ僕の目的が果たせたよ。この鏡を破壊するために、僕はここへ来たんだから」

ケイ

「……彼女に邪魔をされて、僕は何もできなかったけどね」

烏月

「……………」

ケイ

「僕はこの鏡のせいで鬼に成ったようなものだからね。彼女たちには十年来の恨みがあるんだよ」

それを言うならわたしだってそうだ。

彼女たちが柱の封じを解こうとしたせいで、柚明お姉ちゃんはオハシラサマ——人ではない存在に成らざるを得なかったのだから。

だから——

わたしはふくさの上の砕けた鏡に目を落とす。

桂

「仕方ないよね」

柚明

「そうね——彼女も仕方ないと納得していたわ」

剣によって立つ者は剣によって滅ぶ。自分がされたら嫌なことは、人にしてはいけないのだ。

桂

「でも因果応報って、悪いことはできないものなんだね」

烏月

「桂さん、まだ何か《力》が残っているかもしれないから気をつけて」

桂

「えっ!？」

彼女たちの欠片に伸ばした手を、はじかれたように引っ込める。

烏月

「手を切ったりはしなかったかい」

桂

「うん、大丈夫。まだ触っただけ」

烏月

「大丈夫だとは思いますが、呪いがかかっていたりするとやっかいだから、それは私が片付けよう」

桂

「でも、ノゾミちゃんとミカゲちゃんだって……」

ケイクンや柚明お姉ちゃんと同じように、人から鬼に成ったものだと言っていた。
だからそこには、何かしらの理由があるように思えてならない。

桂

「そりゃあね、ノゾミちゃんたちは悪いことしてたわけだし、わたしだって血を吸われたりするのは嫌だけど……」

柚明

「そうね、可哀相な生き方をしていたわね」

桂

「うん」

鬼になったことを後悔していないと言っていたけれど、鬼と成った第二の生とて満ち足りていたといえるのだろうか。

わたしが封印を解いてしまうまで、何百年とも知れぬ時間、封じられていて――

自由を得たすぐ後に切り捨てられて、活動を再開するまでにかかった時間が十年――

気が遠くなるほどの長い時間のほとんどを、閉じ込められているようなものなのに。

それなのに後悔していないだなんて。

柚明

「せめて、弔ってあげましょう」

白い指でふくさの端をつまみあげて、鏡の破片を包みながら言う。

柚明

「オハシラサマのご神木にはね、凝って還れない魂を蝶にかえて飛ばす《力》があるの」

桂

「鬼車——」

柚明

「そう。鬼の車にのせてあげれば、彼女たちだって」

桂

「埋めても大丈夫なの？」

柚明

「ええ。その子たちのぶんぐらいなら大丈夫よ。ハシラの封じには影響がないわ」
お姉ちゃんは微笑んで、ふくさの包みを持って立ち上がった。

柚明

「行きましょうか。烏月さん、留守を頼めますか」

烏月

「そうですね。私はこの鬼を全面的に信頼したわけではありませんし、見張りをかねて残りましょう」

そんなに警戒することはないと思うけど、お屋敷には大ケガを負ったサクヤさんや、まだ意識を取り戻していない葛ちゃんがいる。

ふたりが意識を取り戻したときに、お屋敷に誰もいなかったら不安に思うだろうし、烏月さんがお留守番をしてくれるなら心強い。

桂

「じゃあ、よろしくお願いします」

ふと庭に目を向けると、すでに残照すらかき消えていて、太陽に成り代わった十五夜の月がその明るさを夜空の中で誇っていた。

時刻はすでに夜——

人は家の中に戻り、代わりに鬼たちが自由を手にする時間帯。

桂

「夜だけど……大丈夫だよな？ ケイクンがわたしを狙っているのって誤解だったし」

桂

「この子たちはもう出てこないものね」

柚明

「見送ってあげましょう。こんどこそ迷わずに向こうへいけるように。次に帰ってくるときは、不幸のない一生を送れるように」

ケイ

「さて……」

ケイ

「悪循環に陥ってしまった因果は、どこかで断ち切らなければいけないんだよ」

烏月

「……それで私に諦めると？」

ケイ

「いや……約束通り、僕が目的を果たしたらこの首をあげるよ」

ケイ

「僕の首が君のものになることを恨む人が出なければ、因果の環はそこでおしまいさ。違うかい？」

烏月

「いや……」

しまった——

寝込んでいる間に浴衣に着替えさせられていたことに気が付いたのは、随分と道が悪くなってからのことだった。

おかげで移動速度は大激減。

鏡の欠片をご神木の根元に埋めて、帰路の半ばに分け入ったのは、お屋敷を出てからだいぶ時間が経ったころだった。

柚明お姉ちゃんのことを思い出したからこそできる、積もる話のおかげで退屈だけはしなかったんだけど——

さすがに疲れは出てくるし、お昼以来何も食べていないお腹は、さりげなく夏の虫にまぎれて不平を訴えてくる。

わたしのお腹の音を聞きとがめたのか、柚明お姉ちゃんは道行く足を止めた。

桂

「柚明お姉ちゃん……？」

虫の音がぴたりと止んだことに不安を覚えて、わたしはお姉ちゃんの名前を呼んで——

お姉ちゃんの顔は優しく笑っていたのですぐに緊張を解いた。

柚明

「ねえ、桂ちゃん。いいものを見せてあげるから、懐中電灯を消してくれるかしら」

桂

「いいけど、何？」

柚明

「ふふ、見えるまで内緒」

桂

「うん……」

言われた通りにスイッチを切る。

桂

「見るも何も、これじゃあ何にも見えないよ」

空高くには見事な月が出ているのだけど、厚く茂る枝葉のせいで、明かりとしてはまったくと言っていいほど頼りにならない。

桂

「お、お姉ちゃんどこ！？ 何にも見えないよ、柚明お姉ちゃん!!」

柚明

「置いていったりしないから、心配しないで」

空腹も疲れも忘れて、わたわたと闇をまさぐる腕を、お姉ちゃんの手が捕らえる。

その温かさにほっと一安心——って、こんなに慌てるぐらいなら、懐中電灯のスイッチを入れればいだけなのに。

ううっ、やっぱりわたしは突発事項に弱すぎる。少しは平常心を鍛えないと。

桂

「それで、何を見せてくれるの？」

柚明

「だから内緒よ。行きましょうか」

桂

「行くって、ここで見せてくれるんじゃないの？ 電気消して歩くのは危なすぎるよ」

見えていても蹴つまずくような山道なのに、目を瞑ったような状態でどうしろと。

柚明

「大丈夫よ。ちゃんとわたしが手を引いてあげるから」

桂

「でも……」

柚明

「桂ちゃん忘れているでしょう。わたしは明かりがなくても大丈夫なのよ」

桂

「あ」

そうだった。今のお姉ちゃんはオハシラサマの《力》を持つ継ぎ手だったのだ。

ユメイさんから柚明お姉ちゃんに書き換えられたことで、そのあたりまで昔のお姉ちゃんのを基準にしてしまったのかもしれない。

今のお姉ちゃんは――

柚明

「川のせせらぎが聞こえるでしょう。あっちよ」

桂

「わ、すごい――」

それは、息を飲むしかない光景だった。

桂

「こんなに蛍がいっぱい飛んでる」

透明な光がいくつも、いくつも、ふうわり宙を舞っている。

桂

「あはは、いっぱい捕まえて飼ったら、電気代が節約できるかもね」

それで最後まで過ごしたら日本一『蛍の光』が似合う学生の座はもらったも同然。卒業式では泣いてしまうかもしれない。

桂

「よっ」

手を伸ばして捕まえようとする、するりとうまくかわされてしまう。

意地になってばたばたしても、わたしの反射神経では無理そうだった。

桂

「ううっ、手じゃ捕まえられそうにないよ」

柚明

「駄目よ、桂ちゃん。そっとしておいてあげて。蛍の寿命は十日から二十日――だいたいそれぐらいしかないんだから」

桂

「え？ そんなに短いの？」

柚明

「きっと蛍は水しか飲まないからね」

桂

「水だけなの？」

柚明

「そう。それも綺麗な水があるところでしか生きられないの」

桂

「だから、こんなに綺麗なのかな」

柚明

「そうね……」

熱のない透明な光は、あたかも水が燃えているかのよう。

この青白い光は、何かに似ていると思う。

夜空に輝く大きな月——そして——

桂

「何だか柚明お姉ちゃんみたい……」

柚明

「そうかしら？」

桂

「だって、柚明お姉ちゃんがちょうちょを連れてるときって、ちょうどこんなふうなんだよ」

多分、蝶より蛍の方が人魂——すなわち鬼には似ているのだと思う。

その見た目もだけれど、強い光を嫌うという習性が、真昼の光に耐えられない鬼の在り方を彷彿させて——

桂

「それに——何だか消えちゃいそうなところも」

似ている、と思う。

せっかく思い出したのに、夏の終わりを待たず蛍のように消えてしまうのだとしたら、それはあまりにも——

桂

「……………」

柚明

「桂ちゃん、そんな顔しないで」

桂

「でも……」

柚明

「わたしの前のオハシラサマは、千年以上もあの木に依りましていたのよ」

柚明

「それほど長く勤めるのはわたしには無理だろうけど、それでも百年二百年は持つと思うの」

柚明

「むしろ、わたしの方が桂ちゃんより長生きする立場なんだから、ね」

返事の代わりにお腹がなって、柚明お姉ちゃんの顔が明るくほころんだ。
わたしの顔はきつと真っ赤だけれど、闇の蒼さが隠してくれているに違いない。

柚明

「さあ、帰りましょうか。当面の危険はないとしても、余り遅くなると心配するわ」

そうだ。わたしたちは蛍と違って、水しか飲めない身体ではないのだ。
帰ってみんなでごはんを食べよう。

桂

「今日も《力》をいっぱい使ってたよね」

柚明

「そうね。でも、これで安心できるわね」

桂

「まだ安心じゃないよ」

柚明

「封じている主のことかしら」

桂

「違うよ」

本当に今日はたくさん《力》を使っていた。ノゾミちゃんたちと戦って、傷付いたサクヤさんの傷を治して——だから——

桂

「柚明お姉ちゃんが、蛍みたいに消えちゃわないかって心配だよ」

その身体に抱きついて、温かさと柔らかさを確かめて、それでも心配は消えなくて、震えて。

柚明

「……どうすれば安心させてあげられるかしら」

桂

「わからない？」

お姉ちゃんが消えずにすむ方法は、今のところたったひとつと言ってもいいのだから、わからないはずがない。

柚明

「そうね……でも、わたしがこんなことを言ってもいいのかしら」

頭を撫でてくれていた手が止まった。

そのことにためらいがあるのはわかるけれど、わたしとしてはそんなに気遣って欲しくない。

柚明お姉ちゃんが身をしていしてわたしを助けてくれるように、わたしにだって身を削る覚悟ぐらいとうにできているのだ。

だから、あえて、わたしは問うた。

桂

「こんなことって、どんなこと？」

柚明

「桂ちゃん、あなたの血を頂戴」

桂

「うん……いいよ、お姉ちゃん」

空には大きな真円の月。

蛍のように儂くはない、青白い光を放つもの。

蛍は水しか飲まないから、短い命しか持たないけれど——

わたしは柚明お姉ちゃんに月になって欲しい。

暗い夜道を照らしてくれる、わたしを導く光になってほしい。だから——

くっつと顔を横に向け、首筋を差し出した。

桂

「たぶん、わたしの血は甘いよ？」

柚明

「は——」

首筋にかかる静かな息。

柚明

「んっ」

桂

「んんっ」

身体がかつと熱くなり、動悸に押された肺から熱を帯びた息が漏れる。

桂

「あ……はあ……」

痛みは一瞬。

すぐに白い花の香りを含んだ吐息が傷の熱さを冷ましてくれて、それは柔らかな温かさへと変わっていく。

柚明

「んっ……」

わたしという器を満たしている中身を、喉を鳴らして嚥下する。

その中身が身体の中を流れる音の方が、川のせせらぎよりもうるさいぐらいだったのだけれど。

柚明

「んっ……んっ……」

それすらも忘れてしまうほど、柚明お姉ちゃんの息吹を、生きている証しを感じることができるのが嬉しい。

その幸せに力を抜いて身体を委ねる。

柚明

「桂ちゃん、大丈夫？」

桂

「大丈夫だから、ちゃんと飲んで安心させて」

柚明

「ええ——」

柚明

「桂ちゃん、これで安心したかしら」

桂

「うん。何だか安心」

血の気を失いすつと手足が冷えていくような感覚が、証しのように気持ちいい。

浴衣の乱れを直してくれたお姉ちゃんが、その手をとって包み込んでくれる。

柚明

「桂ちゃんの手、冷たくなってるわ」

桂

「あはは、そのぶん柚明お姉ちゃんの手はあったかくなってるよ」

柚明

「もう、駄目よ。桂ちゃんもわたしを安心させてくれないと」

うんとこっくり頷くと、にっこり笑って握ったままの手を引いてくれた。

柚明

「それじゃあ、家に帰りましょうか」

ここは一体どこだろう。

しみが広がっている。

しみが広がっていく。

赤く歪んだ世界の中で、雫の滴る音に誘われ、しみがどんどん広がっていく。

両の頬を伝った雫が、顎で交わり滴り落ちた。

なぜかわたしは泣いていた。

ゆがむゆがむ、せかいがゆがむ。

泣いているから歪むのか。

このたくさんの、しみはわたしの——

どうしてこんなに泣いているんだろう。

しみが広がる。

だけどだけど、涙だけで、こんなにしみは広がるだろうか。

まるで水溜まりのように、夜空に浮かぶ月を映して——

記憶の糸が——

赤い、赤い——

風景が見える——

十年前——失われた記憶——途切れた糸。

糸がつながる。記憶がつながる。これは前にも見た夢だ。けれど前より鮮明な夢。

お父さんのてのひらが、わたしの両肩を包んだ。

お父さんのお腹から噴き出す血飛沫が、びしゃびしゃとわたしにかかる。

お父さんのお腹には大きな穴が開いている。

お父さんの身体はもうもたない。

この傷が原因で死んでしまう。

桂

「あれ、おかしいな？」

わたしは疑問を声にする。

桂

「柚明お姉ちゃんがオハシラサマになってくれたから、お父さんもお母さんも元気なはずなのに」

なのに、わたしの家にはお母さんしかいなかった。お父さんはどこへ行ってしまったんだろう。

桂

「やっぱり火事で死んじゃったのかな。この後すぐに火事があったのかもしれないね」

だったら夢の——先ほど結ばれた記憶は何だ。

赤くて熱い血溜まりの夢。

赤くて熱い火災のイメージ。

それを表裏に張り合わせた絵が廻りだす。

籠と鳥の絵のようにひとつになり、最後には入れ替わって止まった。

思考が止まった。

呼吸が止まった。

火事は——きつとなかった。

お父さんが死んでしまったのは、お腹を貫通する大きな傷が原因なのだ。

血に染まった幼いてのひら——

ちょうどその手を突き通したような、大きな穴がお父さんのお腹に開いていて——

血の飛沫を浴びるわたしがいた。

——結ばれていく記憶の糸——

おそらく暗示をかけられて、意識のないままにノゾミちゃんたちを運んでた葛ちゃんがいて——

蔵で鏡の封印を解いてから、曖昧な記憶しかないわたしがいて——

死んでしまったお父さんがいた。

——織り込まれていく記憶の景色——

あ——記憶の糸が——つながった。

意識のない——わたしの手が——お父さんのお腹を——わたしが——

柚明

「そうよ、桂ちゃん。あなたがやったの。せっかくわたしが犠牲になって、あなたたち一家を助けてあげたのに」

桂の父

「そうだ、桂。お前がやったんだぞ。お前がお父さんのことを殺したんだ」

桂の母

「そうよ、桂がやったのよ。おかげでわたしは旦那様の仇を、十年間も育てなくちゃいけなくなったのよ。ひとりで」

柚明

「桂ちゃんがやったの」

桂の父

「桂のせいだぞ」

桂の母

「桂が悪いのよ」

柚明

「殺してしまったのね」

桂の父

「殺されてしまったんだ」

桂の母

「まさか親を殺すなんて」

呪詛

「桂ちゃん」

桂

「いやあ—————
—————っ!!」

わたしは耳を塞いで両目を閉じて、しゃがみこんだ。

桂

「……ふあ……んっ……」

ふいに、まぶたを透かす陽射しが陰る。

——

「おはよう、桂さん」

桂

「ふにゃ……おはようございまふ……」

——

「まだ疲れが残っているなら、もう少し寝ていた方がいいかもしれないね」

桂

「ん……どうしようか……」

とろとろとまぶたを持ち上げると、そこには。

桂

「——！？」

わたしはこの何日かの間だけで、生まれてから打った心拍数累計のうち何割かを、一気に稼いでしまったような気がする。

一気に目が覚めてしまったというか、何と言うか。こんなにドキドキしては二度寝だなんてとても無理。

桂

「う、う、う、鳥月さん……何で……」

いや、鳥月さんをお布団の中に引っ張り込んだのはわたしなんだから、この部屋にいるのは全然おかしくないんだけど。

桂

「何でわたしの寝顔なんて見てるの？」

鳥月

「あなたがずいぶんと気持ち良さそうに、安心しきった顔をして眠っているからね」

鳥月

「私はこの寝顔を守れたんだな——と、実感していたんだ」

桂

「う、うん……」

鳥月

「それからありがとう」

桂

「え？」

鳥月

「桂さんの隣で寝ていたせいか、《力》の方もずいぶんと回復しているような気がするよ」

桂

「だけど鳥月さん、お礼を言うのはわたしの方だよ。折角お札をもらっていたのに、勝手にピンチになっちゃって」

鳥月

「突き詰めれば、わたしが桂さんを置いて奴を追ったことに起因するんだ。サクヤさんに話しても、そう判断するだろう」

桂

「いや、それはサクヤさんだし……」

鳥月

「昨夜のようなことが起こらないように、今日からはできるだけ離れないようにしよう」

着替えてお布団を畳んで、これから食堂に出かけようというときになって、鳥月さんがそう言った。

桂

「え？」

鳥月

「四六時中付きまといわれるのが目障りだというのなら、その点も考慮して対応策を練ろうと思うのだが——どうだろう？」

桂

「あ、そういうことはないと思うよ。鳥月さん、いろんなこと知ってるから話してても面白いし、綺麗だから一緒にいるとむしろ眼福というか——」

ああ、わたしは何を口走っているんだろう。

桂

「……とにかく、平気です」

鳥月

「そうか、それなら良かった」

桂

「でも、そっちこそいいの？」

桂

「だって鳥月さん、ケイくんを追いかけてる途中なんだよね。だったら——」

鳥月

「桂さん、いいんだよ」

鳥月

「他人に関わると決めた以上、この程度の不利益は想定済みのことだからね」

桂

「鳥月さんって、ばかまじめな人っていうか——」

鳥月

「面白味のない人間だと良く言われるね」

桂

「違う、違う。ばかまじめな人っていうか、両極端で面白い人なんだなあって」

桂

「オール・オア・ナッシングって感じで極端。もう少し適当でもいいんじゃないかな」

鳥月

「……………」

桂

「あはは、わたしはもっと、かっちりしっかりしないと駄目なんだけどね」

鳥月

「……そうかい、なるほど」

ふっと一瞬、柔らかく脱力した鳥月さんが。

鳥月

「では、その両極端な私が約束しよう。私の持てる全身全霊の《力》に賭けて、あなたを守ると」

とても真摯な瞳を向けて、まっすぐな言葉で切り込んできた。

桂

「それって、すごく信用していいか、ぜんぜん信用しちゃ駄目ってこと？」

鳥月

「どちら側に寄るのかは、桂さんに任せることにするよ」

桂

「それは当然——」

鳥月さんは本当に、全身全霊を賭けてわたしを守ってくれると思う。

だけど、それに対してわたしは何も。

鳥月さんが血を吸う鬼なら、わたしが《力》をあげられるのに。

桂

「わたしは何も、報いてあげることができない」

鳥月

「もう十分に報いてもらっているんだけど、それならひとつ約束をしてもらおう」

桂

「え？」

鳥月

「指を出してくれないか」

桂

「え？」

一瞬戸惑ってしまったけれど、言われた通りに指を出す。

鳥月

「小指だけでいいんだよ」

桂

「あ、えっと、そうだっけ？」

そうだ、そうだ。約束ときて指を出せと言われれば、指切りに決まってる。わたしは何を緊張しているんだ。

恥ずかしいやら何やらで、顔が赤くなっていくのが自分でもわかる。

そんなわたしの親指から薬指までの余計な指を、少し冷たいのひらで、そっと包み込むように握らせた。

桂

「あっ……」

心臓が出張してきたみたいに震える残った小指を、絡みついた鳥月さんの小指が受け止めた。

赤い血を巡らせる小指と小指が、固く結びついている。

鳥月

「約束しよう。私は桂さんを必ず守る」

鳥月

「絶対に違えない」

鳥月

「だから約束して欲しい。何があっても私を信じると」

桂

「……鳥月さんを？」

桂

「約束なんてしなくても、わたし鳥月さんのこと信じてるよ？」

鳥月

「私が奴や、経観塚の主に勝つと言っても？」

桂

「それは……」

鳥月

「約束は誓約という、神話の時代からある呪のひとつだよ。その言之端の持つ意之霊が、私にとっての《力》となる」

言之端——言の葉——言葉——

人は意志を言葉に置き換えることで、漠然とした概念を明確な形として凝らせる。意志に《力》が宿るのならば、言葉にした意志は強固な《力》となって作用する。

鳥月

「そう——大切な人との約束は、何が何でも守りたくなるものだろう？」

こういうことを真顔で言ってしまう鳥月さんは、すごく格好いい人だと思う。

そしてわたしは、なんだか気恥ずかしくなって、うつむくようにこくりと。

桂

「……うん。わたしは何があっても、鳥月さんのこと信じるよ」

けどはっきりとした言葉にして応えた。

鳥月

「……よし」

鳥月さんが維斗の手入れをしているのを、わたしはぼんやり眺めていた。

時代劇なら月夜の濡れ縁で「む、何とかの刀に曇りが。これは不吉な……」とかやるところだ。今置かれている状況的に。

桂

「ねえ、鳥月さん。あれはやらないの？」

鳥月

「……あれとは？」

桂

「耳搔きの反対側みたいなやつで、刀をぼんぼんするやつ」

鳥月

「ああ、打粉を使った手入れのことだね」

鳥月

「あれは刀身についたアブラをぬぐい取るために使うものなんだよ。ただぬぐうだけではアブラは取れないからね」

桂

「脂？」

日本刀は三人も切ったら、人の脂がついてぜんぜん切れなくなるっていうけれど……

鳥月

「刀身の錆を防ぐために、普通は丁子脂を引くんだよ。刀の手入れは古い油をぬぐい取り、新しい油を引くことなんだ」

桂

「へー」

鳥月

「だから常に怠らず手入れをしていれば、丁子油を引かずにすむし、故に打粉を使う必要もなくなるんだ。打粉は一種の研磨剤だから——」

研ぎや刀身自体を磨耗させてしまうデメリットもあるのだという。

桂

「だからこまめに手入れをするんだ？」

鳥月

「折れず、錆びずという名目で伝わっているこの維斗には、必要のないことかもしれないけどね。こうしていると落ち着くんだよ」

桂

「ブラッシングとか枝毛さがしとか、何かの手入れって妙に落ち着いたりするよね」

だけど、落ち着くための作業をするってことは、もとは落ち着いてなかったってことで、どうして落ち着いていないのかって考えると——

やっぱり、ケイクんのことだろうか。

わたしはちゃんとお札を貼った部屋の中において、しかもまだ昼間。本当に万が一でもない限り、危険なことは何もない。

一方、今朝のニュースでは何も事件はなかったけれど、鬼は依然としてこの土地に存在している。

桂

「ねえ、鳥月さん」

鳥月

「なんだい、桂さん」

桂

「やっぱり行ってきた方がいいんじゃないかな。折角刀の手入れもしたんだし」

鳥月

「何に？」

桂

「試し切り——じゃなくて、鬼切り。鳥月さん、ケイクんのこと気になってるんでしょ？」

鳥月

「だからそれは——」

桂

「……………」

鳥月

「……………」

鳥月

「……わかった。行ってくることにしよう」

鳥月

「桂さん、私がない間、どうすればいいかわかるね？」

桂

「お札は絶対に剥がさない。なるべく部屋の外にでないようにする」

鳥月

「そうだ」

小さい子にお留守番をさせる姉のように、鳥月さんは満足げに微笑んで、わたしの髪をさらりと撫でた。

そんなことをされるから、何だかわたしまでそんな気分になって、上目遣いで訊ねてしまう。

桂

「……あのね、だけど晩ごはんは一緒に食べたいから、それまでにちゃんと」

鳥月

「昨日の轍は踏みはしない。今日は日の入り前までに帰ってくる」

桂

「うん」

烏月

「それはできない相談だ。昨日の二の舞いは御免だからね」

桂

「大丈夫だよ。今日はちゃんとお札貼ってあるし、烏月さんも日が暮れる前に帰ってきてくれるように、気をつけてくれればいいし」

烏月

「いや——」

烏月さんは維斗の太刀を金覆輪の鞘に収めて、きちんとわたしの方へと向き直ってから言う。

烏月

「仮に私が出かけ、奴を見つけたと仮定しよう。柔弱そうな見かけによらず、奴はかなりの手足れなんだ。並の鬼切りでは適わないだろう」

桂

「うん」

烏月

「そして私が奴と戦い、両者とも傷を負ったとしよう。それが同程度の傷ならば、条件的には互角のままだから、役目的には問題ない」

桂

「そうなんだ……」

ケガをしても問題ないというのには賛成できないけれど、言いたいことはわかるつもりだ。

烏月

「だが、鬼は奴だけじゃないんだ。桂さんの血を狙っているのは別の鬼だから、そちらの方が片付かないかぎり、万全でいる必要があるんだ」

桂

「……………」

烏月

「……まあ、そういうことだよ」

桂

「……うん」

烏月

「それとも、やっぱり私と同じ部屋にこもっていることが苦痛になったかな」

桂

「そんなことは——」

——

「あるかもねえ」

サクヤ

「話しはすべて聞かせてもらったよ」

演出過剰のセリフとポーズで入ってきたのは、外に出ていたサクヤさん。どうやらドアの外でタイミングを見計らっていたらしい。

桂

「……いいけど、ノックぐらいしてよ」

サクヤ

「それじゃあ、外連味も何もあったもんじゃない」

桂

「いや、外連味いらないし」

桂

「それで、お屋敷の方はどうだった」

サクヤ

「それがすっかりもぬけの殻。もしかしたら昨日は化かされていたのかもねえ」

烏月

「……化かされた？」

桂

「あ、大丈夫、大丈夫。鬼とか関係ないと思うから。昨日一緒に山から降りた後、ちょっとだけ話に出なかったっけ？」

烏月

「家出娘と狐——と言っていたような。ああ、それで化かされたと」

桂

「わ、やっぱり北斗学院付属なんて偏差値高いところに行ってる人は、記憶力も違うんだね」

鳥月

「家の都合で休んでばかりだけどね」

桂

「そうなんだ……」

桂

「あ、それでその子、小学生ぐらいの子だったから、どうしてるか心配になって、それでサクヤさんに様子を見てきてもらったんだけどね」

サクヤ

「以下は前に述べた通り、というわけさ」

桂

「だけど行って帰ってくるにしては遅かったね。もしかして、探して回ったりしたとか？」

サクヤ

「いいや。あたしは基本的に、去るもの追わずの主義だからね。どうせ人間なんて、百年足らずで逝っちゃうんだ」

桂

「わ、サクヤさんってば達観しすぎ——」

桂

「それじゃあどこかに寄り道してた？」

サクヤ

「寄り道っていうか、寄ったついでだから屋敷の中を漁ってきたよ」

サクヤ

「ほい、本日のお土産」

そこそこのかさがある風呂敷包みを、わたしに向かって放り投げた。

桂

「ふにゃっ」

受け止め損ねて顔面直撃だったけど、別にそれほど痛くはない。クッションなんかとは違って重みがあるけど、包みの中身は生地っぽい。

結び目を解いて包みを開くと、藍染めに青い花をあしらった着物が入っていた。

桂

「わ、浴衣だ……」

寝巻き代わりに着ている、旅館の薄い浴衣じゃなくて、厚手の生地のちゃんとしたものだった。

サクヤ

「祭りは明後日だったっけ。祭りと言えばやっぱり浴衣だろ」

桂

「そうだけど、わたしの分だけ？」

サクヤ

「あたしはパスだよ。下手に凹凸ついていると、和服は少々苦しくてねえ」

くねくねとお色気ポーズを取りながら、そんなことを言ってくれたりする。

桂

「……じゃあ、鳥月さんの分は？」

サクヤ

「はっ、誰が鳥月なんぞのために土産を持ってきたりするかい」

桂

「わ、大人気なさすぎ。わたしの家のものなら、サクヤさんの腹が痛むわけじゃないのに」

サクヤ

「なんだい、そんなに鳥月の浴衣姿が見たかったわけかい」

桂

「見たいよ。鳥月さん日本美人って感じだから、すごく似合いそうだし」

サクヤ

「あたしは？」

桂

「サクヤさんは日本人離れしてるから」

サクヤ

「おーおー、着付けも自分でできない小娘に、そんな風に言われるとは思わなかった」

桂

「自分で着れるかどうかと、似合うかどうかは別次元の話だもん」

自分で着れる服がみんな似合うのだとしたら、女の子は苦労しないと思うのです。

桂

「あーあ、サクヤさんはともかく、烏月さんの浴衣は見たかったなあ」

烏月

「桂さん。浴衣ではないけれど、和装と括れるものでよければ、自前で揃えてきているよ」

桂

「……………」

和装と括れるものなんて曖昧な表現をする以上、普通の着物ではないだろう。かといって、巫女さんの服じゃなさそうだし……

桂

「……剣道の胴着とか？」

烏月

「近いね。鬼切り役としての戦装束なんだけど——そうだ、折角だから着替えてこよう」

桂

「いいの？」

烏月

「さすがにあの格好で人前を歩くわけにはいかないから、この制服で戦うことが多いのだけれど、本来向こうが正規の様式だ」

烏月

「陣に籠もって迎え討つのなら、万全の支度を整えておくのも悪くない」

烏月さんは着替えるために、自分の部屋へと一時退出。
それにしても戦装束だなんて——

桂

「わ、わ、どんな格好だろう。サクヤさんは見たことある？」

サクヤ

「あるけど、別に大したものじゃないよ」

桂

「サクヤさんの烏月さん評は当てにならない」

サクヤ

「……なら訊くんじゃないよ」

烏月

「桂さん、入るよ」

そして入ってきた烏月さんの格好は。

桂

「うわぁーっ」

烏月さんのイメージ的に、黒一色でくると思い込んでいたせいで、目に飛び込んできた白衣には驚かされた。

白く清浄な狩衣と袴は、武人というよりも神職に就く人といった趣。

これが戦装束であるということを印象付ける手甲と鉢金は深い紅色。

烏の濡れ羽色の御髪は、白衣とのコントラストでますます黒々と輝いている。

桂

「すごい！ 格好いい！」

確かに人前を歩きまわる格好ではなかった。

街中でこの戦装束烏月さんを見かけたら、大抵の人は映画のロケだと考えて、監督やカメラの姿を探すこと請け合い。

烏月

「やっぱりこの格好だと、気が引き締まるね」

桂

「すごく格好いい。びしっと引き締まって見えるよ」

サクヤ

「……本人も『気が』って言うてるだろうに。それが目に見えるとしたらあんたの気のせいだよ」

桂

「うるさいなー、サクヤさんは。気が引き締めれば、それだけ立ち居振る舞いも引き締まって、格好よく見えるんだよ」

烏月

「では、桂さんも引き締まる格好に着替えてみるかい」

桂

「え？」

烏月

「ほら、せっかくサクヤさんが持ってきてくれた浴衣があるんだ。それに着替えてみてはどうか」

桂

「それはその……」

確かにいつものミニスカートや、リラックスしまくりの寝巻き浴衣に比べたら、帯をぎゅっと締める浴衣は、心もびしっと引き締まりそう。

とはいえ。

桂

「着てみたかったりはするんですけどね……」

時代劇は好きだけど、前言通り和服に袖を通す機会に恵まれていない身には、部屋に備え付けの浴衣程度がせいぜいなのです。

察してくださいと、アイコンタクトを敢行。

烏月

「……ああ、そうか」

アイコンタクト成功、とほっとしたのも束の間。

烏月

「それじゃあ桂さん、脱いでくれるかい」

サクヤ

「ヒュー♪」

桂

「あ、えーと、その……」

烏月

「着付けをしてあげるから」

桂

「その、烏月さんが？」

烏月

「和装には慣れているからね。そうだ、桂さんもこの機会に覚えてしまうといいよ」

烏月

「数回も練習すれば、ひとりで着付けられるようになるんじゃないかな」

桂

「あの、その、えっと、それじゃあ……」

桂

「お願いします」

カーテン代わりの明かり障子を閉めて、入り口の鍵を掛けて、とりあえず着替える環境はよし。

サクヤ

「いいぞー、桂。早く脱げ、脱げー」

桂

「……サクヤさん、出て行ってくれないかな」

環境的に問題があるとしたら、この人の存在かもしれない。

サクヤ

「保護者のあたしを追い出して、ふたりっきりで何するつもりだい？」

桂

「何もしないよ。浴衣を着せてもらっただけだよ」

サクヤ

「手取り足取り？」

桂

「それは、その……」

着せてもらうんだから、そんな感じにならない保証はないんだけど。

桂

「ううっ……」

烏月

「……桂さん。いちいち反応しては、相手を喜ばせるだけだよ」

桂

「うん。それはわかっているんだけどね」

烏月

「あなたは十分綺麗な身体をしているんだから、堂々と脱げばいい。何も恥ずかしがることはないだろう」

桂

「……………」

サクヤ

「そうそう。別に減るもんじゃないんだし、ケチらないで、すばっとお脱ぎ」

桂

「ううっ、ジロジロ見ないでよう……」

桂

「あ、着物を着るときに下着をつけないって本当？」

烏月

「特に決まりはないけれど、補強が入っていたりすると帯の上に胸が乗ってしまうから、外した方が無難だろうね」

桂

「乗ったら駄目なんだ？」

サクヤ

「さらしを巻いて潰したりしなきゃいけないから、苦労するんだよこれが」

桂

「うう、それは肩が凝るとかの自慢話の一種ですか？」

烏月

「サクヤさん、肌襦袢は持ってきていないんですか？」

サクヤ

「ああ、忘れた」

とまあ、腰にタオルをぐるっと巻いて補正をしたりして。

烏月

「ああ、桂さん。後ろを向いてくれるかな」

桂

「こ、こう？」

烏月

「ほら、少し襟が偏っている。襟を正すという言葉もあるように、綺麗に着こなす基本だからね」

そういいながら、烏月さんが手を差し入れて、襟を真っ直ぐに直してくれる。

烏月

「両手を横に広げたときに、左右の袖の長さが同じにようにすると、背中心がきちんと決まるから」

桂

「あ、はい」

烏月

「そうしたら。襟元から指を入れて――」

桂

「できたっ」

サクヤ

「おー、可愛い、可愛い」

烏月

「うん、似合うよ、桂さん」

桂

「えへへー、でもちょっと帯とかは難しいかな。たぶんひとりじゃまだ着れないや」

烏月

「そこは慣れだろうね」

サクヤ

「……で、早くも元の格好に戻ってるのかい？」

裾を乱さないように座ると、どうしても正座になってしまうので、畳の和室で浴衣生活を続けるのは少々辛かったりするのです。

桂

「お祭りとか、お出かけのときとかならともかく——って、明後日だ。うん、明後日はお祭りの間着つづけるよ」

サクヤ

「祭りの間て言っても、部屋にこもってる限りは関係ないんじゃないかい？」

確かにサクヤさんの言う通り、鬼の問題が未解決の間は不用意に出歩くわけにはいかないし、そういう事情があるんだから致し方ない。

桂

「……烏月さん、明後日お祭りに連れて行ってください」

小さい子みたいに袖を引いておねだりしてみた。

サクヤ

「へー」

桂

「へーじゃなくてね。サクヤさんはそんな開放的な服装だから、気持ちまでラテン系になっちゃってるんだよ」

サクヤ

「ラテン系大いに結構。ケセラセラで今日を楽しく生きようじゃないか」

桂

「うー」

サクヤ

「それに桂。これはこれでテキメンに身体が引き締まる服装なんだよ」

桂

「……そうなの？」

まったくもって緩そうなのに、引き締まったりするものなんだろうか。

サクヤ

「たぶたぶふによんなウエストでこの格好は、着る方も見る方も辛いだろう？」

桂

「なるほど……」

人の視線が女を磨くということらしい。

ノゾミ

「明日の朝日が山から登って——」

ミカゲ

「ひのふの、みのよの、いつむう、もっと？」

ノゾミ

「身体から血の失せた骸が見つかったと聞かされた時の顔は、さぞや見物でしょうね」

単にニュースになっていないというだけで、実際に被害が出ているのかもしれない。
にもかかわらず、現状は時間を有効に活用しているとは言い難い状態なわけで、烏月さんは刀の手入れで逸る心を抑えているのかもしれない。

単にニュースになっていないというだけで、実際に被害が出ているのかもしれない。

にもかかわらず、現状は時間を有効に活用しているとは言い難い状態なわけで、烏月さんは刀の手入れで逸る心を抑えているのかもしれない。

わたしは転がっていた。

四肢を力なく投げ出して、わたしはそこに横たわっていた。

夏だというのに——少し肌寒いぐらい。

クーラーの効いた部屋の中で、わたしはごろりと寝そべっていた。

桂

「暇だなー」

そうひとりごちたその後に、畳にぴったり着けた耳が近づいてくる足音を拾い上げた。

足音は部屋の前で止まり、わたしは慌てて身体を起こして服の乱れをチェックする。よしっ。

桂

「お帰りなさい——って、サクヤさんか」

サクヤ

「あたしで悪かったね」

桂

「別に悪くはないけど、烏月さんかと思った」

考えてみれば、断りなしにドアを開けるような真似は烏月さんがするわけなかった。

サクヤ

「そういえば烏月は？」

桂

「わたしから頼んで出かけてもらった」

言っておかないと、何でわたしを置いて出かけたんだとか、後で絡みそうだし。

サクヤ

「なるほどね。あの辛気臭い仏頂面を四六時中見せられてたら桂もたまらないか」

桂

「わ、サクヤさんらしい捻じ曲がった解釈」

サクヤ

「……どこが捻じ曲がってるんだい」

桂

「つむじとか、おへそとか」

とまあ、いつものノリの前哨戦を済ませたあとで、一応のメインイベント。

桂

「それで、葛ちゃんはどうだった？」

あんなに小さい子を放ったらかしにしておくのも何だったので、サクヤさんには羽様のお屋敷を見に行ってもらっていたのだ。

サクヤ

「すっかりもぬけの殻だったよ。怖いおね一さんが来てることを知ったんで、慌てて逃げ

たってとこだらうねえ」

桂

「怖いだなんて、失礼な」

サクヤ

「いや、あんたじゃなくて——と、そうそう。それで、ついでとばかりに屋敷を漁ってみただけどね」

桂

「うん」

サクヤ

「はい、本日のお土産」

そこそこのかさがある風呂敷包みを、わたしに向かって放り投げた。

桂

「ふにゃっ」

受け止め損ねて顔面直撃だったけど、別にそれほど痛くはない。クッションなんかとは違って重みがあるけど、包みの中身は生地っぽい。

結び目を解いて包みを開くと、藍染めに青い花をあしらった着物が入っていた。

桂

「わ、浴衣だ……」

寝巻き代わりに着ている、旅館の薄い浴衣じゃなくて、厚手の生地のちゃんとしたものだった。

サクヤ

「祭りは明後日だったっけ。祭りと言えやっぱり浴衣だろ」

桂

「そうだね。サクヤさんの分は？」

サクヤ

「あたしはパスだよ。下手に凹凸ついていると、和服は少々苦しくてねえ」

くねくねとお色気ポーズを取りながら、そんなことを言ってくれたりする。

桂

「わ、めちゃくちゃ当てこすられた」

そりゃあサクヤさんとはくらぶべくもないけれど、わたしだって人並みだと思うんです。

サクヤ

「にしても桂」

桂

「何？」

サクヤ

「あんた、上げ膳下げ善で暇持て余した挙げ句にごろ寝だなんて、大層素敵なお身分だねえ」

わ、ドアが開く前にバレてる。

こうなると帰ってきたのが烏月さんじゃなくてサクヤさんで良かったというか……

お布団に地図を描いていたような大昔を知っている相手なだけに、多少だらしがないところを見られたところで関係なし。

桂

「だって、部屋でひとりでできることってそんなにないし、持ってきた文庫本は読んじやったし、テレビはチャンネル少ないし」

なんて居直ってみたりして。

桂

「ごろ寝以外にすることってあるかな」

サクヤ

「学生の本分とか」

桂

「え？」

サクヤ

「最近の学生は、夏休みにどっちやり宿題が出たりはしないものなのかい？」

桂

「あ……」

サクヤ

「どうせあんたのことだから、『備えあれば憂いなし』とか『こんなこともあるかと思って』って、かばんの中から出てくるんだろ？」

ふるふる。

サクヤ

「何もなし？」

こくこく。

サクヤ

「……真弓、あんたが逝っちまったおかげで、桂の奴は駄目人間街道まっしぐらだよ」

桂

「ううっ、お母さんごめんなさい」
まったくもってだらけすぎだった。
ここは一念発起して真人間への第一歩を踏み出すことにしよう。

桂

「悪いけどサクヤさん、本屋さんに行って読書感想文の指定図書買ってきてくれないかな？」

サクヤ

「まあ、いいけど」

桂

「それから、ちょっと私的に買ってきて欲しい本が……」

サクヤ

「うわ、あたしは桂のパシリかい」

というわけで、サクヤさんは再び旅館から出かけていった。

真人間に戻ると誓ったばかりの今は、座布団の上に正座していたりする。

桂

「……………」

思わず座布団を四枚重ねとかにしてみたりして。

桂

「あー、こほん……」
ちょこんと上にのっかると、気分は高座の人といった体。

桂

「それにしても師匠、四枚っていうのはどうにも縁起がよくないねえ」

桂

「何でだい。それは死人の『し』だからかい」

桂

「そんなにうがった見方をしなくても、そのまま読めば『終い』でしょう。とどのつまり四枚で打ち止めみたいで嫌じゃないですか」

桂

「あはは、ぜんぜん面白くないね。四枚が嫌なら、あー、羽藤くん。全部とっちゃっていいよ」

いから」

桂

「そんな師匠、ご無体な！」

四枚四枚で獅子舞いですから縁起が良くて大変結構。十枚ずつだとキリキリ舞で大変だ——

ところで師匠、十枚にはしてくれないんですか。ああ、饅頭と熱いお茶が怖い——

なんて続けようとしたときだった。

入り口のドアが開く音に、恥ずかしいところを見られてしまったかなと、わたわた慌てて座布団から降りる。

桂

「わわっ、お帰りな——」

入ってきたのはスーツ姿の男の人。

それもひとりじゃなくて数人で、その中には食事の時に顔を合わせたことがあるような人もいて。

桂

「あの一、部屋間違えていませんか？」

スーツ姿の男性

「……………」

返事はなく、そのままずかずか入ってくる。

桂

「あのっ！ ちょっとっ！ ここはわたしの部屋なんですけど——」

突き飛ばされて、転がるわたし。

明らかに何かがおかしい。その人たちの動きが妙に硬い。ホラー映画のゾンビのようにぎくしゃくとしている。

鈴の音が聞こえた。

そんな気がしてそちらを見ると、他の人とは明らかに様子が違う人が。

その人は、手に鏡を持っている。

ガラス質の表面をもったいわゆる普通の鏡じゃなくて、金属製の古い鏡。

アナウンサー

『昨夜未明、経観塚郷土資料館に展示されていた鏡が盗難にあいました』

もしかして窃盗団とか、そういう類の人たちなんだろうか。

この鈴のような音は、あの鏡から聞こえているような気がする。

この鈴の音は、どこかで聞いたことがあるような気がする。

そして、わたしに詰め寄った人の目が、赤く不気味な光を放った。

桂

「ああ……だ、誰か……」

烏月さんはケイくんを探しに出かけている。

サクヤさんはお使いにいらっている。

ユメイさんは結界の中には入ってこれない。

そしてわたしは贅の血の持ち主だなんて、大層な肩書きがあるらしいけど——

桂

「いやあ—————っ!!」

ひとりではまるで無力な、ただの女の子だった。

烏月

「サクヤさんはどこへ？」

桂

「お風呂だって言ってたよ」

烏月

「さっき一緒に入っただろうに」

桂

「うーん、昼に帰ってきたとき、自分用のお土産ってお酒買ってきてたし、さっきは『見事な月だねえ』とか言ってたから……」

烏月

「……温泉で月見酒か。すでに奴らの時間帯だというのに暢気なものだね」

桂

「何だかんだ言って、鳥月さんのこと信用してるんだよ。わたしを任せても大丈夫だって」

鳥月

「そうか」

桂

「うん」

それからしばらくして、扉の外で物音。

ノックも呼び声も聞こえないまま、ドアノブが回り始める。

桂

「サクヤさん？」

腰を浮かせたわたしを片手で制して、もう片方の手が金覆輪の鞘に伸びる。

鳥月

「結界の影響があるから、気配で判断することは出来ないが、物音からして複数人」

桂

「え？」

鳥月さんが維斗の太刀を手に立ち上がったのと同時に——ドアが開いた。

スーツ姿の男性

「ふおおおおおおお……」

スーツ姿の男性が数人、獣のような唸り声をあげて部屋の中へ飛び込んでくる。

何の抵抗もなく結界の中に入ってきた以上は、霊的存在ではないにしても。

桂

「もしかして、これってみんな鬼！？」

鳥月

「いや——」

蒼く底光りする右目でひたと見据える。

そのうちのひとりが、ロボットじみた関節の硬い動きで、わたしの方へ向かってくる。

桂

「きゃあっ！」

鳥月さんはわたしの腕を引っ張って、つかみかかってきた人の反対側へと振りながら、その手を支点に自分は前へ。

加速する身体に置いて行かれて、後ろになびく狩衣の白い袖。

鳥月

「はっ！」

たんっ——

わたしと入れ替わる形で踏み込んだ鳥月さんの肩と背が、相手の胸にぶつかった。
肉と肉がぶつかる重い音。

狩衣の袖は重力に引かれて垂れ下がる。

鳥月さんの立ち位置は踏み込んだ先のままで。

ぶつかり合いに勝ったのは鳥月さんで。

相手は後ろによろけ——なんてものじゃない。四割五割増しほどの重さがありそうな男の
人を、鳥月さんは体当たりで跳ね飛ばした。

その人は入り口側の壁にぶつかり、床にずるずる崩れ落ちる。

桂

「わ……すごい……」

鳥月

「千羽妙見流に限らず、ほとんどの古流は体術も修めるからね。とはいえ、この手応えで
は打ち身とあばらにひび程度だろう」

十分すごいと思うんだけど、それでも鬼を相手にするには全然威力が足りないのだろう。

桂

「でも、やっぱり維斗を抜かなかったのは——」

きっと抜刀が間に合わなかったわけではなく。

鳥月

「彼らがただの人だからだよ」

鳥月さんの蒼く底光りする右目は、霊視や見鬼と呼ばれる、本来見えないものを《視》
る能力が発露している証しなのだという。

けれど、ただの人ならケガがなかったとしても息が詰まってすぐには動き出せないはず
なのに。

スーツ姿の男性

「ぐっ……ぐるるうるうじゃあ……」

何事もなかったかのように、その男の人は立ち上がる。

乱れた髪の影響が落ちる眼窩に、覚えのある赤い光を灯しながら。

桂

「やっぱりこの人たち、鬼なんじゃ……」

烏月

「いや——やがて変成することがあるにしても、今はただの人間だ。何者かに傀儡とされているらしい」

桂

「傀儡……操り人形？」

烏月

「その繰り糸さえ断ってしまえば、彼らは動きを止めるだろうが、その逆もまたしかり」

桂

「切れなければ……」

烏月

「痛みも苦しみも感じずに、物理的に動けなくなるまで襲い掛かってくるだろう」

わたしを後ろの壁に張り付かせて、烏月さんは黄金の鞘から鋼の白刃を解き放つ。

桂

「烏月さん……」

烏月

「心配しないでいい。維斗は鬼を切るために振るう太刀。私には繰り糸が《視》えている」

窓から射し込む月光に、冴え冴えと濡れたように輝く刃。

烏月

「不用意なことだな。傀儡師の常道は、その存在を気取られることなく、こちらの手の届かぬ遠くから糸を操ることだろうに——」

烏月さんの瞳が見据えているのは、ひとりだけ手ぶらではない人物だった。

烏月

「そのようにあからさまに正体を現しては、傀儡と己の糸を断ち、蜥蜴の尻尾切りというわけにはいかないだろう」

そのひとは胸に金属製の円盤を抱えている。

烏月

「百歳を経た古き器物は、鬼魂を得て付喪神に成るといふ——だが」

烏月

「お前は永き命を望んだ挙げ句、四苦とは無縁な器物を《器》と選んだ鬼だ」

それは百年どころではなく、それを十倍してもまだ足りないほどの遠い昔に作られたもの。

烏月

「ノゾミとミカゲだったか、鏡合わせの姿を持つ双子の鬼よ。喉元過ぎた熱さを忘れて、私を侮っているのか？」

磨き上げられた表面は、真っ直ぐに射られる蒼い眼光を拒むように映し、跳ね返している。

烏月さんの問いに応えたのか、鈴の音が聞こえたような気がした。

鏡の表面がびりびりと震えている。音はそこからしたのだろうか。

烏月

「侮ってくれるというのなら、それはそれでありがたい。現身同様の依代があるのならば、奥儀を使うまでもなく対処できる」

ノゾミ

「うふふっ、別にあなたを侮ってのことではないのよ」

何を反射したのか、鏡の表面が赤くまたたいた。

ノゾミ

「それならこんなに大勢の傀儡を連れてきたりはしないもの」

ミカゲ

「するだけの理由があつてのこと」

ノゾミ

「桂の血をもらうには結界が邪魔でしょう」

ミカゲ

「とはいえ傀儡だけでは心許ない」

ノゾミ

「だから、こうすることにしたのよ」

今度ははっきりと、鈴の音。

鈴の音を響かせながら、素足が畳を踏みつけた。

瞳を焼き付かせる赤が冷めると、そこには双子の鬼がいた。

ノゾミ

「現身を持たぬものを阻む結界ならば——」

ミカゲ

「越えた後に形に成ればいいだけのこと」

そして可愛らしげに小首を傾げる。

ノゾミ

「でも、あなたたちに外に出られたら、また良月の中に戻るか、呪符を剥がすかしないといけなくなるのね」

面倒だとばかりにため息。

ノゾミ

「ミカゲ、傀儡に呪符を剥がさせて」

ノゾミ

「そうよ。そうすれば良月を持ってこさせる必要なんてなかったのに」

ミカゲ

「ですが姉さま——」

ノゾミ

「そこまで考えが至らないなんて、やっぱりあなたは不出来な子ね」

ミカゲ

「姉さま、呪符はこのままで。この結界の中ならば、ハシラの継ぎ手も」

ノゾミ

「あら、そうね。私たちの出入りできない結界の中に、あの女が現れられるはずないものね」

桂

「あ……ユメイさん……」

ミカゲ

「外に逃げられないように、ここも傀儡で固めます」

ミカゲ

「では、姉さま——」

ノゾミ

「ええ、はじめましょう」

烏月

「桂さん、私の後ろに！」

わたしを後ろの壁に張り付かせて、烏月さんは維斗の太刀を構える。

まずは小手調べとばかりに、二体の傀儡が同時に襲い掛かってくる。その片方は最初に吹き飛ばされた人だった。

傀儡

「ぐあああああっ」

ほとんど条件反射で、烏月さんは構えた維斗を振りかぶり――

桂

「烏月さん！」

切っちゃ駄目というわたしの叫びに、振り下ろす刃をそのまま頭上で止め――

踏み込みの足を変化させて、相手の軸足を蹴りつける。

重心にあたるお腹のあたりを中心に、つんのめるように四分の一回転する傀儡の人。両足が畳から離れ、腹ばいになる形で一瞬宙に留まり――

そのがら空きになった背中に、振り上げていた太刀の柄頭を落とす。

それはほんの一瞬。

けれどその間も時間は進み続け、気付けばもう片方の傀儡がわたしの腕をつかもうとしていた。

烏月

「はあっ！」

気合い一閃、下がっていた維斗の刀身が斜め下から跳ね上げられる。

手首は返さず、下ろした腕をただ上げる――

そんな力の入れにくい動作にもかかわらず、風を切って走る維斗の峰が傀儡の腕をしたたかに打ち、その勢いのままに万歳のポーズを取らせる。

胴が空く。

烏月

「ひゅ――」

剣道ならここで胴が一本はいるところだけど、真剣の維斗でそれをやったら、相手は真っ二つになってしまう。

上段構えに腕を跳ね上げたままの姿勢で踏み込んで、踏み込みながら柄の下部を握っていた左手を離し、そのてのひらを打ち下ろす。

それは時代劇の殺陣というより、カンフー映画のような動き。

烏月

「せいっ！」

てのひら——カンフー映画なんかでは掌底と言うんだっか——が下腹部を打ち据える。

干したお布団を思いっきり叩いたときのような音がして、ものすごい勢いで傀儡は後ろに飛んでいった。

ノゾミ

「へえ……さすがね……」

本当に烏月さんは強い。

火事場のばか力のようなものを発揮しているとはいえ、基本的にはただの人である傀儡などとは比べ物にならないほど強い。

ノゾミ

「でも、これならどうかしら？」

さらに傀儡が追加される。

最初に倒した傀儡はもう立ち上がりかけている。

まさに多勢に無勢とはこのこと。

倒しても倒しても立ち上がる傀儡も、シーツやベルトなどで縛ってしまえば無力化できるんだろうけど、そんな暇はまったくない。

壁に張り付いたわたしを守りながら、右から左、左から右と、モグラ叩きよりも目まぐるしく傀儡を払う烏月さん。

今はまだ大丈夫。十分に凌いでいる。烏月さんの息は上がっていないし、かすり傷ひとつ負っていない。だけど——

このままでは埒が明かない。

ノゾミ

「どうしたの、鬼切り役？」

ミカゲ

「手足か首を切り飛ばせば、傀儡の動きは止まるのに」

ノゾミ

「あなたの手にある破妖の太刀は、鬼どころか人すら切れないなまくらなのかしら？」

烏月

「ちっ、あの鏡さえ破壊できれば——」

守勢から攻勢に転じれば、この状況を覆すことができる。

とはいえわたしを護りながらでは、刃を交える距離まで近づくことすらおぼつかない。

烏月

「せめて、サクヤさんがいれば——」

わたしを守る誰かがいれば、わたし自身が己を守る力を持っていれば、持ちこたえている間に片をつけられるのだ。

わたしが——足枷になっている。

桂

「……ねえ、烏月さん」

烏月

「なんだい？」

桂

「わたし、自分で頑張ってみるからその間にノゾミちゃんたちをやっつけて」

烏月

「……桂さん？」

桂

「この人たち武器とか持ってるわけじゃないから、叩かれたりはするだろうけど、ちょっとの間だけなら何とかかなと思うんだ」

烏月

「だが……」

桂

「一応、作戦だってあるんだよ。右か左の端っこまで行って、お札を剥がせばユメイさんが助けにきてくれるかも、とか」

烏月

「しかし……」

桂

「だって、このままじゃあ……」

踏ん切りをつけてもらおうと、わたしはお札を貼った壁に向かって飛び出そうとし

た——

——そのとき。

ノゾミ

「あら？」

廊下を駆ける軽やかな足音。

近づいてくる。

近づいてくる。

全然関係のない、物音に気付いて怒鳴り込みに来た人だと困る。

お風呂を上がったサクヤさんが、助けに来てくれたりはしないだろうか。

近づいてくる足音が——

部屋の前で止まった。

ノゾミ

「ミカゲ、この魂の気配はまさか——」

ミカゲ

「はい、姉さま。これは——主さまの依代です」

烏月

「主だと！？」

主——

ユメイさんの力によって封じられているという主。

ノゾミちゃんとミカゲちゃんが、解き放とうとしている主。

そして、そこにいたのは——

ケイ

「やあ、また会うことになったね」

わたしと同じ名前を持つ、烏月さんに追われている鬼だった。

烏月

「お前は……」

桂

「ケイクン……何で……」

部屋の様子を見回して、鏡持ちの傀儡に眼を止める。

ケイ

「僕はその鏡の行方を追ってここに来たんだ」

ノゾミ

「主さまが、わたしを追って……」

ケイ

「その鏡を——」

ケイ

「破壊するために」

ケイくんは、鏡持ちの傀儡に向かって無造作に脚を進める。

ケイ

「傀儡よ——」

ミカゲちゃんの糸繰りで傀儡のうち一体が割って入る。

ケイ

「邪魔——」

それが振り回した腕を体裁きだけでかわすと、その腕をつかんで身体をひねる。

ケイ

「だっ！」

どういう原理なのかわからないけれど、傀儡は一回転して畳に背中を打ち付けた。

柔道の試合なら、満場一致で「一本」の旗があがりそうな、見事な投げだった。

ケイ

「傀儡ぐらいはさっさと片付けておいてほしかったよ。おかげで出鼻がくじかれた」

桂

「出鼻がくじかれたって……」

鏡持ちの傀儡は、すでにケイくんから離れたところに移動していた。

それを確認したケイくんは、少し視線を厳しくして鳥月さんの方を見やる。

ケイ

「いくら守勢に立たされているからって、千羽の鬼切り役がこんな相手に苦戦しているよ
うじゃ、明良さんに顔向けできないよ」

鳥月

「くっ……」

ケイ

「さすがに手足を切り飛ばすわけには行かないけどね——」

ケイくんに投げられた傀儡は、立ち上がろうと畳に手をついて——

体重を支えられず、再び前へ倒れ込んだ。

ケイ

「肩の関節を外すぐらいなら、正当防衛なんだしいだろう？」

ケイくんが言ったのは、鳥月さんではなくわたしに向かったのようだった。

ノゾミ

「主さま、お戯れが過ぎるのではなくて？」

ケイ

「残念ながら僕は君たちの主じゃない。むしろこちらの鬼切り役の側に立っているものだ」

ノゾミ

「……鬼なのに？」

ケイ

「鬼でもさ」

ケイ

「それにしても、僕が鏡の所在をつかんだその晩に、郷土資料館から盗まれるなんてね」

ノゾミ

「主さまが迎えに来て下さらないからですわ。一部なりとも魂を解放してさしあげてから、長い時間が過ぎたのに——」

ノゾミ

「鬼切りの手に掛かったそのときから、長い時間が経っているのに——」

ミカゲ

「目覚めたときには玻璃の箱の中」

ノゾミ

「途方にくれていたところ、私たちを熱心に尋ねてくる殿方がおりましたの。あまりにも足しげく通ってくださるものだから——」

ミカゲ

「縁の糸を繰り糸にして」

ノゾミ

「連れ出してもらいましたのよ。それから次の傀儡を見つけたところで、ご馳走をしていただきました」

うっとりとした目をわたしに流し、ピンクの舌をちらつかせて。

ノゾミ

「贅の血ほどではありませんでしたけど——」

ミカゲ

「久方ぶりの血でしたから」

ノゾミ

「乾いたときの一滴は、何にも勝るとおわかりでしょう？」

ケイ

「……わかりたくはないね。僕は一日早くこの地に来て、何日か前にその鏡を叩き割っておくべきだった」

ノゾミ

「あら——主さまは怖いことをおっしゃるのね」

ケイ

「言っただろう、僕は君たちの主じゃない」

ノゾミ

「では、あなたは誰？ あなたの名前は？」

ミカゲ

「あなたの真名は？ 言霊は？」

ケイ

「僕は——」

ノゾミ

「あなたは？」

ケイ

「僕は、ケイだ」

一瞬詰まった言葉を、強い言葉と強いまなざしではっきりと口にする。

ケイ

「これは僕のために考えられた言霊。そして僕がケイである限り、お前たちの主は沈んだままだ」

ノゾミ

「……そうなの、面白くないの」

ミカゲ

「本当に」

ノゾミ

「そうよミカゲ。この《器》を壊してしまえば、別の《器》に移ってくださるかしら？」

ミカゲ

「姉さま、それは無理ではないかと」

ケイ

「そう。普通の人々の身体では、奴の分霊は受け入れられない。小さな風船に水を詰め込みつづけると、限界を超えたところで破裂してしまう」

ケイ

「そして水は《器》に従うものだ。ある種の憑き物のように、水が《器》の形を変えてしまうこともままあるけれど——」

ケイ

「どちらにせよ《器》——依代を持たない霊体は、己という形を保てずに虚空へと還っていく」

ケイ

「いくら主とはいえ、分霊では長くもたないだろうね」

ノゾミ

「じゃあやっぱり——」

ミカゲ

「分霊は諦めて——」

ノゾミ

「あの木の下の主さま自身を、助け出すしかないようね」

ケイ

「そんなことをさせるものか」

あ……

何だろう、この感覚は。

ケイ

「鳥月さん、あなたが僕を切りたがっているのはわかるけど——」

鳥月

「呉越同舟というわけか」

ケイ

「別に僕は、あなたのことを嫌っているわけでも、敵と見なしているわけでもないんだけどね」

鳥月

「……………」

鳥月さんは無言のまま、わたしを置いて前に行く。
太刀を持った自分が攻撃で、素手のケイくんが守備だと役割を振ったのだろう。

横顔すら見えないほど前に踏み出してから。

鳥月

「……桂さんを頼む」

置いていかれた声が聞こえた。

それからしばらくの乱戦の後に——

ケイくんに傀儡たちの相手を任せた鳥月さんが、維斗を手に切り込んでいった。

維斗を肩にかつぐように振りかぶり、裂帛の気合いとともに振り下ろす。

鳥月

「オン・マカ・シリエイ・ジリベイ・ソワカッ！」

そして、鳥月さんの刀の先にいるのは。

桂

「——！？」

鳥月さんはいつの間にか進行方向を反転させ、わたしたちの方へ向かってきていた。

その刃の行き着く先にいるのはケイくん。

そりゃあ鳥月さんは、ケイくんを切るために経観塚に来た人だけど、舌の根も乾かぬうちに前言をひるがえす人じゃない——

ミカゲ

「《力》でこさえた障壁に私たちの姿を写した、まやかしではあっても幻ではない確かな現象」

そうだ、きっとわたしたちの前に彼女たちの姿を映しているんだ。

最悪なことに、烏月さんは彼女たちが仕掛けた罠に気が付いていない。

そしてさらに最悪なことに、ケイクンの方では烏月さんが援護に来たというぐらいにしか、認識していなさそうなところだった。

ちらりと目端に烏月さんを捕らえたあとすぐ、相對している傀儡の方に意識を戻している。

どうしよう。

一応まだ、刃は振り下ろされていない。絶体絶命の状況を前に、脳内麻薬が分泌されているのか、時間が何倍にもなっているような気がする。

どうしよう、どうしよう——なんて考えている間もなく。

これも火事場のばか力というのだろうか。わたしはいつにない速さで身体を動かしている。

桂

「烏月さん、駄目——っ!!」

烏月

「——鏡っ!？」

まやかしの空間が壊れて、わたしの姿を視認した烏月さんの表情が凍りつく。

その瞳に映ったわたしの顔も、恐怖に凍りついている。維斗の刃は止まらない。

混ざり合う悲鳴

「桂——っ!？」

ケイクンを押しのけると、世界が赤く染まった。

桂

「あ……」

勢いよく噴き出す血が、世界を赤く染めていく。

ユメイ

「桂ちゃんっ!!」

ユメイさんの腕が伸ばされる。

けれど——

けれどわたしも、もう限界。

既に身体は壊れていて。
堤防の壊れた川が氾濫して一面を水浸しにしてしまうように、わたしの壊れた身体からは。

濡れた畳が電灯の明かりを映して、ぬらりと重く濡れ光っている。
赤く濡れ光ってる。
一面の赤——
一面の血の海——

その海の深くにわたしは沈んでいく。
深くへ、深くへ。
赤を幾重にも重ねたような、深い色の中へ。

白い世界。
真っ白に塗りつぶされた世界。
まぶしいような昏いような、光の中なのか何もない闇なのかもわからない、不思議な世界。
地に足をついているのか、横たわっているのか、はては浮いているのかさえもわからない。
感覚が——ない。
その何もないしじまのなかに、小石が投げ込まれる。

小石は同心円状に広がる波を作り出し、波は世界を震わせて音になる。
何もない場所に響く——音——

ノゾミ
「あなたがやったのよ」

ミカゲ
「あなたが切ったのよ」
誰かを責める——声——

ノゾミ
「ふふ、心ががら空き。隙だらけ。私の邪視は通じないんじゃないかなかったかしら」

ミカゲ
「何をそんなにおののいているの」

赤い光。じわりと広がっていく赤。

ノゾミ
「そう——前にも切ったのね」

ミカゲ

「あなたは人を切っている」

ノゾミ

「あなたは鬼切り役の座を、人を切って手に入れたのね」

ミカゲ

「鬼は一体誰なのかしら」

ノゾミ

「実のお兄さまを手には掛けるだなんて」

ミカゲ

「肉親の血で手を赤く濡らすだなんて」

ノゾミ

「それにしても勿体ない」

ミカゲ

「こんなに贅の血をこぼすだなんて」

広がっていく血――

たくさんの贅の血――

それはわたし自身の血――

そうだ、わたしは鳥月さんに――

鳥月

「あ……桂さん……？」

鳥月さんの手から抜け落ちた維斗が、畳の上に突き立った。刀身は血に濡れ、赤く染まっている。

鳥月

「私は……私は一体……」

ノゾミ

「切ったのよ」

ミカゲ

「あなたが桂を切ったの」

ノゾミ

「人すら切るのが鬼切りなもの」

気付くとわたしは、いつもより高い目線から、その景色を見つめていた。

烏月

「私はまた……大切な人を……私のせいで……」

違う——っ!!

あれは事故だから——っ!!

叫ぼうとして、声が出ない。

わたしの視線は勝手に泳いで、赤い泉の中心へと向かう。

ケイ

「——っ!!」

わたしは息を呑み、その光景に目を見張った。

そこには、ユメイさんに抱きかかえられている、瀕死のわたしの姿があった。

すごい出血——

維斗は真剣なんだから、切られれば血が出るのが当たり前なんだけど、これは皮一枚なんて可愛らしい傷じゃない。

もしかすると、内臓なんかも飛び出しちゃっているかもしれない。

わたしはそういった類が苦手なんだけど、視線を逸らすことも、まぶたを閉ざすこともできず、ただじっととそれを見ていた。

唯一の救いはあまりの出血の多さに、傷口の様子がさっぱりわからないことだけ。

もっとも、これだけの血を見たというだけで、すでに気分は悪いんだけど。

ユメイ

「桂ちゃん——頑張って——」

傷口を押さえるユメイさんの手の隙間から、青白い光が零れている。

そうだ、わたし頑張れ——

そこでようやく、当然の疑問に行き当たる。

わたしがあそこで倒れているのならば、こうしてそれを見ているわたしは一体何なんだろう。

すでにわたしは死んでいて、今のわたしは幽霊のような状態なんだろうか。

幽霊は浮くものだから、いつもよりも視点が高いのにはそれで説明がつく。

だけど、足の裏に畳の感触があるのはどうしてだろう。

烏月

「……それに触るな——っ!!」

烏月さん——!?

ひどく取り乱した烏月さんが、畳から引き抜いた維斗を横薙ぎに振るっていた。

鈴の音を響かせて、ノゾミちゃんが後ろに飛ぶ。それを追いかけた烏月さんが、血の海

に足を滑らせて転ぶ。

ノゾミ

「あは……あはは……うふふふふふ……」

指先についた血——先ほどは血溜まりに指をひたしていたらしい——をぺろりと舐めながら、高笑いをするノゾミちゃん。

ノゾミ

「ああ、おかしくてたまらないったら。あなた、一体どうしちゃったの？」

鳥月

「約束——したんだ。桂さんを守ると——」

ノゾミ

「それで今更、そんなことを」

鳥月

「私にできるのは鬼を切ることだけだから、鬼を切ることでしか守れないのだから——」

ノゾミ

「そう——それなら——」

ノゾミちゃんの瞳が怪しく輝く。

ノゾミ

「それなら、切るしかないでしょうね」

ミカゲ

「その破妖の太刀で切れればいい」

ノゾミ

「その赤い泉に映っているでしょう？ あなたの大切な人たちを切った鬼の姿が」

鳥月

「わたしは……わたしは……」

ノゾミ

「あなたが守ると約束した桂を切ったのよ」

ミカゲ

「あなたが桂を裏切ったのよ」

ノゾミ

「鬼ね——」

ミカゲ

「鬼よ——」

ノゾミ・ミカゲ

「そんな鬼は切られてしまえばいい」

烏月

「鬼は……切られて……ああ、そうだ……」

赤い維斗を手にした烏月さんの腕がのろのろと動き、その刃を己の首に向ける。

ノゾミ

「そう、そのまま切ってしまえばいいのよ」

ミカゲ

「その鬼は、あなたの大切なものを奪った鬼だから」

烏月

「そうだ……兄さんと桂さんの仇を……」

やめて————っ！！

わたしの悲鳴に反応したのか、今まで自由にならなかった身体が動いた。

わたしの身体は傷付くのも構わずに、てのひらを使った一撃で維斗の刃を首筋から外す。

ケイ

「やめるんだ！」

え——今の声と——この手は——

ケイ

「彼女たちの声に耳を傾けるな。鬼の声に惑わされるな。それにまだ桂は死んでいないんだ」

烏月

「……桂さんはまだ……？」

ケイ

「……烏月さん、維斗を借りるよ。千羽党の鬼切り役の証しである、この太刀を」

烏月

「あ……ああ……」

応える瞳に生気がない。

普段なら「鬼に渡すだなんてとんでもない」と、嘔みつくだろう提案のはずなのに、言

われるがままに頷いていた。

烏月さん——

わたしの感傷をよそに、身体は——なぜかわたしの意識が入り込んでいるケイくんは、烏月さんの手から維斗をもぎ取って、担ぐように構える。

この構えは——

烏月さんと同じ——？

ケイ

「僕は今、本当に腹を立てているんだよ」

何だろう、わたしの居場所がぎゅっと圧迫されているような気がして、苦しくなる。

ケイ

「僕が一日遅かったばかりにこんなことになるなんて、自分の不甲斐なさに我慢ができなくなる。だけど、それ以上に、君たちに対してだ」

ケイくんの中で何かが大きく膨れ上がっていく。わたしはさらに圧迫される。

ケイ

「僕がどれだけのものを君たちに——君たちと主に奪われてきたかわかるかい」

やだ……何これ……気持ち悪い……

ケイくんの怒気に圧倒されたのか、ノゾミちゃんが後退りながら身体を小さくした。

ノゾミ

「ねえ、ミカゲ。これは逃げるべきかしら」

ケイ

「逃がすものかっ！」

何かを押さえていたタガのようなものが、肩から腕を通じて維斗の刀身に流れ込んだ。

その刀身が空間を薙ぐと、ふつりと目に見えない何かを、切り——切り——切った。

それはまるで、操り人形の糸を薙ぎ払ったかのように——

傀儡とされていた人たちが、畳の上に崩れ落ちた。

ノゾミ

「あ——何てこと——」

そのうち一体の手から転がり落ちる、彼女たちの本体である鏡。
良月の銘を持つその鏡に視線を転じる。

ケイ

「君たちは逃がさない。過去のあやまちを繰り返さないためにも、封じるのではなく滅却する」

良月に映ったケイクんの顔は、とても怖い顔をしていた。

先ほどの一撃でタガが失せてしまったせいで、膨れ上がっていた何かは、さらに膨れてわたしを押し潰そうとする。

ノゾミ

「——っ、主さま——」

ケイ

「僕はケイだ。主がいるのは槐の木の下で、それもゆーねえが封じている。主は来ない」

ミカゲ

「いいえ、来る」

金色の光に心臓を射ぬかれて、わたしは——ケイクんは、崩れ落ちるように膝を付いた。

ケイ

「くっ……まさか……本当に来たのか……」

ミカゲ

「今のあなたは鬼だった。鬼では主さまは抑えきれない」

来たというのは、この、何だかわからない怖い塊のことだろうか。

ケイクんの中で渦を巻く何かが大きくなっていき、わたしは隅っこの方に押しやられる。
そしてケイクんの意識がそれを元の大きさにもどそうと、必死で押し返しているのが感覚的に伝わってきた。

ケイ

「ぐっ——はっ——」

締め付けられる胸を押さえて、息と一緒に内側にある何かを吐き出そうとする。乱れた呼吸を整えようとする。

ゆっくり——深く——

ミカゲ

「姉さま、今の内に——」

ノゾミ

「……ミカゲ、怖がらせてくれたお礼をするには、今がいい機会ではなくて？」

ノゾミ

「このまま《器》とハシラを消して、贅の血を集めて、主さまをお助けできないものかしら」

ミカゲ

「残念ながら、ハシラも血を浴びて《力》を強めていますし——」

廊下の方へと視線を移して。

ミカゲ

「それに最後の観月の民も」

ノゾミ

「来るのね、あの不出来な子が——」

ノゾミ

「来たところで、大したことができるわけじゃないんだから、気にすることはないじゃないの」

ミカゲ

「良月があるので」

ノゾミ

「そうね、それはまずいわね」

ミカゲ

「はい……それに《器》がじきに立ち直ります。主さまの分霊は抑えられてしまいました……」

ノゾミ

「もう、《器》さえここに来なければ、すべてが上手くいったのに……」

ミカゲ

「残念ですけど、仕方ありません」

ミカゲちゃんが手を動かすと、指先から赤い光が糸のように伸びる。

くっと指を曲げると、倒れていた人のうちひとりが、不自然な動きで立ち上がった。

ミカゲ

「では姉さま——」

ノゾミ

「そうしましょう」

その血の粘りに絡め取られたのか世界がさらに減速していく。一瞬が何倍にも引き伸ばされる。

わたしはゆっくりと倒れ込みながら、他人事を見るような目で周りの様子を受け止めていた。

まだ熱いはずの血の海の中で、赤く濡れた維斗を手にした烏月さんが凍りついている。

誰かが結界に引っ掛かったのだろう。火花が爆ぜるような音が聞こえる。

そういえばさっき、ユメイさんの声が聞こえなかっただろうか。

ユメイ

「桂ちゃん——」

ほら、やっぱりユメイさんだ。

結界が霊体を焼く音が鳴り止まない。

ユメイさん駄目だよ。ノゾミちゃんたちみたいなズルをしない限り、霊体はこの結果を出入りできないんだから。

ユメイ

「わたしの《力》で治してあげるから——」

ユメイさんは諦めない。

わたしのケガを治そうとして、自分がそんな目に遭うなんてぜんぜん収支が合わないのに。

ユメイ

「だから桂ちゃん——」

あれ？ 医者の不養生って言葉はこういう場合にも使ってもいいんだっけ？

だんだんと意識が白く——

ユメイ

「——死なないでっ!!」

そして——

結界が——

決壊した。

サクヤ

「なんだい、この血の臭いは——」

廊下の方で、サクヤさんの声がしたのは、鏡持ちの傀儡が部屋から消えた直後のことだった。

サクヤ

「おい、鳥月！ 一体何が——」

サクヤさんは言葉を凍らせ動きを止める。

それは絶句もするだろう。

一杯やりながらお風呂に入り、いい気分で帰って来た部屋に、知らない人がたくさん倒れていたりなんかしたら。

ましてやその部屋は血の海になっていて、その発生源は親友の娘であるこのわたしなんだから。

鳥月

「あ……」

サクヤ

「鳥月！ ここで何があったのか説明しな！」

鳥月

「私が……」

サクヤ

「あんたが？」

鳥月

「私が桂さんを切った……」

サクヤ

「あんたが桂を切ったって？ ばかも——」

鳥月

「そうだ、私が切ったんだ！ 私がこの手で桂さんを切らされたんだ！」

サクヤ

「——え？」

鳥月

「私は鬼を許さない。鬼のせいで私は大切な人を切ることになるんだ——鬼のせいで——」

鳥月さんは畳に転がっていた維斗とその鞘をつかむと、ユメイさんの治療を受けているわたしの身体に目を落として。

鳥月

「奴らめ！」

サクヤ

「おいっ！ 鳥月っ！」

髪を振り乱し、部屋を飛び出した。

追いかけていきかけたけど、ケイクンの身体はわたしの自由にはならない。

サクヤ

「……なあ」

まだよく状況を飲み込めていないサクヤさんが、困り顔でケイクんに聞いた。

サクヤ

「……まさか、本当に烏月が桂を？」

ケイ

「彼女たちの策でね。僕を切るよう仕向けられたところに、桂が割って入ったから」

サクヤ

「桂……あんたとろいくせに無茶して……」

ユメイさんの治療を受けるわたしに目をやって、つぶやく。怒っているような、そんな口調。

わたしは余計なことをして、状況を悪くしてしまったんだろうか。

だとしたら、あまりにもわたしは——

ユメイ

「ねえ——」

そのとき、ようやくユメイさんが顔を上げた。真っ直ぐにこちらを——ケイクンを見ている。

懐かしさを湛えた瞳は、わたしを見るときのものと同じで——

ユメイ

「烏月さんを追いかけてあげて。今の彼女は放っておいていい状態じゃないわ」

神霊であるオハシラサマだけに、わたしがケイクンの中に居ることがわかっているんだろうか。

ユメイ

「桂ちゃんを切った自分への——桂ちゃんを切らせた鬼への——彼女の中には怨嗟の念が渦巻いていて——もうその念に飲み込まれかけている」

ユメイ

「このままだと、彼女は鬼に成ってしまうわ」

烏月さんが鬼に——

ユメイ

「もしそうなったら、桂ちゃんきっと悲しむわ。だから烏月さんを止めてあげて」

止めてあげたい。
今すぐ追いかけて、烏月さんを止めたい。
なのにこの身体はわたしのものではないから、わたしは自由にすることができない。
そんなもどかしさに身悶えしていたわたしを助けてくれたのは——

ケイ
「わかった、僕が行ってくる」
身体の持ち主、ケイくんだった。

ケイ
「この中で、彼女の事情に一番関わっているのは僕だし、そういった因縁込みで関心を引くこともできる」

ケイ
「僕が一番適任だ」

ユメイ
「……………」

ケイ
「サクヤさん、また奴らが来るかもしれないから、ゆーねえと桂のことを頼むよ」

サクヤ
「ああ、わかってるよ」

ユメイ
「お願いね。あの人は、桂ちゃんにとって大切な人だから……」

ケイ
「わかってる。上手くやる。上手くやってみせるよ——」

ケイ
「そろそろ僕も、限界に近いみたいだからね」

ケイくんが烏月さんを発見したのは、それから数時間ほど経ってから——
オハシラサマのご神木がある、あの山に流れる川辺でのことだった。

ケイ
「目的の鬼は見つかったかい？ それとも少しは頭が冷えたかい？」

烏月
「お前は——」

ケイ

「鳥月さん、君は鬼を切りたいんだろう？」

鳥月さんを奮い立たせるつもりなのか、ケイくんはやけに挑発的な口をきく。
上手くやるって言ってたのに、大丈夫なんだろうか。

鳥月

「今日は——いつものように逃げないんだな」

ケイ

「先に逃げたのは君だからね。そんな弱腰の君から逃げる必要があると思うかい？」

風が吹いて雲が流れた。

覆われていた月が姿を覗かせる。

暗く沈んでいた鳥月さんの瞳に月の光が映り込み、わずかながら生气を取り戻したかのように見えた。

そして維斗を——鞘から抜いた。

鳥月

「今までは問答無用を押し通していたが、最後に切る前に訊いておこう」

鳥月

「なぜ兄さんは鬼であるお前を切らずに、切ったと嘘を吐いてまでお前を助けた？」

鳥月

「それだけでも役目に背いた大罪だというのに、何年にもわたってお前をかくまい育てた？」

鳥月

「重大な裏切り行為だとわかっていたはずなのに、鬼切りの技をお前に授けた？」

ケイ

「それは——」

ケイ

「それは僕がそう望んだからだ。明良さんが僕に道を示してくれたから」

ケイ

「確かに僕の中には鬼が住み着いている。その鬼のせいで僕は罪を犯した」

鳥月

「そうだ。お前は鬼として罪を犯した。だから鬼切部千羽党の鬼切り役——千羽明良に命が下った」

ケイ

「そして僕を切りにきた明良さんは、僕の中に別の魂があることを、それが鬼——主の分霊であることを見抜いてくれた」

ケイ

「そして明良さんは僕にこう言ったんだ」

ケイ

「君が死よりも辛い修行に取り組めば、誰も殺さずにすむかもしれない。ここで楽になるか、鬼を切るための修行に取り組むかを選べ——と」

烏月

「それでお前は修行を選んだわけだ」

ケイ

「そう——鬼を倒すためにね」

月が皓々と照っている。

その遠くにあるものをケイくんは見つめた。

三十八万キロの彼方にある月は、それでも大きく明るくて——

ケイ

「それから千羽の私有地の一角で、明良さんと修行に明け暮れる日が始まったんだ」

ケイ

「驚いたことに、明良さんは僕のことを知っていたんだってさ。僕の母さんが千羽の人で、僕と君たちとは遠縁にあたるんだって」

烏月

「では、お前は——だが——」

ケイ

「僕の歳が見かけ通りだとして、年齢の合う範囲で千羽の外に出た人はひとりしかいないと？」

烏月

「そうだ。わたしが知っている限り、該当する人はひとりしかいない」

烏月

「その人は『当代最強の鬼切り』と呼ばれていた千羽党の誉れであり、狩るべき鬼と意気投合して役目を返上した、千羽党の恥でもある」

ケイ

「明良さんの師匠であり、十台前半の若さで鬼切り役の座に座った天才」

烏月

「私から見れば鬼切部千羽党・先々代鬼切り役」

烏月さんの瞳が、今宵の月もかくやと円く開かれた。

烏月

「まさか——だとするとお前は——」

ケイ

「幼少から鍛錬を積み続けなければならない千羽妙見流を、十年足らずで修めることができたのは、その人の血のおかげだろうね」

維斗を手にした鬼切り役を前に、鬼であるケイくんは泰然自若に腰を折り、手ごろな長さの枝を拾い上げた。

長さは凡そ維斗と同じ。

その枯れ枝の使い心地を確かめるように、目の前の空間を一度薙いで——

ケイ

「さて、昔話はこれぐらいにしようか。やるんだろう？」

本当にそれでやりあうつもりなんだろうか？

ケイくんは肩幅よりも広く両足を開いて、空気椅子みたいな感じで腰を落とす。

背筋はぴんとまっすぐで、刀を右肩に担ぐようにしているのは、ほんの少し薩摩示現流の蜻蛉の構えに似ているかもしれない。

ケイくんの動きは感覚的に伝わってくるだけで、どんな格好をしているのか自分では見ることができないのだけれど。

烏月

「その構えは破軍——」

ケイ

「そう。向かい挑めば必ず敗れ、背にすれば必勝を約束されるという、破軍星を象った構え——」

昨夜、烏月さんが「魂削り」を使ったときに見せた、千羽妙見流の構えそのものだった。

ケイ

「烏月さん、君はいま破軍星に向かって挑んでいるんだ。君に勝ち目があると思うかい」

ケイ

「どうやって破軍を墮とすつもりだい？」

烏月

「私の答えは——」

一瞬のためらいを見せた後に。

烏月

「——こうだ」

烏月さんが構えた。

それはケイくんの構えと同じ構え。

烏月

「破軍の構えは千羽妙見流七つ構えのうち、最後のひとつ。皆伝者にのみ許された、奥儀のためにある構え。それをどうして鬼に譲ろう」

ケイ

「空にふたつの破軍は不要」

烏月

「どちらかが必ず墮ちる」

ケイ

「君に勝ち目はないよ。君はまだ完全に奥義を伝授されていないはずだ。つまり千羽妙見流を完全に継いでいるのはこの僕だ」

烏月

「『魂削り』なら私も会得している」

ケイ

「技には表と裏があるんだよ。一般に奥義と言われているそれは、秘伝のための形なんだよ。そこに意味が加わって、初めて真の奥儀となる」

烏月

「何だと——」

ケイ

「千羽妙見流が名を頂いているのは、人の寿命を司る北辰・七星の神。その振るう太刀は肉体ではなく魂そのものを断ち切る」

ケイ

「そして鬼とは死者の魂——すなわち『キ』を示す言葉でもある」

鬼を断ち切る北辰・七星の太刀——

ケイ

「信じないのなら見せてあげよう。千羽妙見流『鬼切り』を——」

それがどれほどのものかはわからないけれど、彼、彼女らの存在そのものの名を冠した技。

そんな奥儀とぶつかり合って、烏月さんは勝つことができるのだろうか。

ケイ

「行くぞっ!!」

ケイくんの足が地を蹴った。

そしてわたしは——

——駄目——っ!!

わたしが必死に邪魔をしようとする、一瞬だけ身体がぴくんと震えた。

ケイ

「ち——っ!？」

烏月

「獲った——」

ケイ

「その程度で——」

両者大きく踏み込んで、その体重移動から生じる力すべてを剣先に込めた一撃を打ち合った。

剣と剣はぶつかり合い、切っ先は互いに相手に届かない。だかしかし——

烏月

「……今のはまさしく私が使う『魂削り』そのものだろう」

ケイ

「今のは失敗しただけだよ」

霊体すら削り取るというその技は——

ケイ

「だけどそれでも僕の勝ちだろうね。君の気力をごっそりと削り取った手応えはあった」

烏月

「それはこちらにも言えることだ……」

その刃がまとった剣気に触れただけで、霊体は影響を受けることになり——

魂すら削る一刀は、意識を断ち切る刃でもあるということ。

ケイ

「……確かに……くうっ!」

烏月さんのお兄さんが信じて助けて、ユメイさんとサクヤさんが信じて託したケイくん

を、わたしも信じることにした。

そして何より、烏月さんを信じると約束した。

まさに神速とも言える踏み込み。

その踏み込みによる勢いも、足先から指先にいたる全身の力も、ケイクんのすべてが余すことなく乗せられた秘剣が閃く。

間合いは遠く、刃は届かず、それでは素振りに他ならず——
だけど。

剣先から伸びた不可視の《力》が烏月さんに達するのが、ケイクんの目を通して《視》えた。

その一撃に込められていたのは、肉体的な力のすべてではなく、気や魂といった精神的なものまでを含めたケイクんのすべてだった。

その証拠に、振り切るのと同時にものすごい脱力感——それは居候のわたしには開放感として感じられる——が襲ってきた。

それでもケイクんはふたつの脚を踏ん張らせて、維斗を振り下ろす直前で動きを止めた烏月さんに語りかける。

ケイ

「使い手の技量次第では魂に憑いた濁り——すなわち鬼のみを切ることもできる」

維斗を取り落とした烏月さんは、膝を突き前のめりに倒れ込む。

地に塗れたその状態で、それでも残った気力を振り絞ったのか——顔を上げてこちらを見る。

その目はすでに空虚な洞ではなく、憎しみの火を灯しているわけでもなく——
わたしが好きになった、真っ直ぐで強い光を宿した烏月さんの瞳だった。

烏月

「それが——」

その烏月さんに向かって、ケイクんは少しだけ微笑んで頷いた。

ケイ

「これが……『鬼切り』だよ……くうっ！」

ああ、まただ。

ケイクんの中の圧力を調節している弁のようなものが緩んだせいで——

すると今まで小さく圧縮されていたものが、みるみる大きくなっていき、ケイクんとい

う《器》の中を満たしていく。
わたしはそれに押されて居場所を奪われる。
あ——っ

——熱っ！
ケイクンの中から追い出される一瞬、焼いた鉄を押し当てられたような痛みを感じた。
そしてわたしは虚空を漂う。
依るべき肉体——目や耳や鼻や舌や皮膚を持たないわたしは、ケイクンが——そして鳥
月さんがどうなったのかを知る術を持たない。
持たないにもかかわらず——

ユメイ
「——桂ちゃん——」
ユメイさんが呼ぶ声が聞こえた。

ユメイ
「——桂ちゃん——戻ってきて——」

ユメイさんの声に導かれて、わたしの心は漂っていく。

桂
「サクヤさん、おはよう」

サクヤ
「あー……」

葛
「おはよーございます、桂おねーさん。サクヤさん」

桂
「おはよう、葛ちゃん。ここで雑魚寝しちゃったけど、ちゃんと寝れた？」

葛
「それがですね、わたし意外と神経質ですから、人前で寝るなんてことできるわけ——」

桂
「でも、昨夜わたしたちより先に寝てたよ」

葛
「——おかしいですね。久しぶりに手料理などを食べて、気が張ったりしてたんでしょうか」

サクヤ
「それは随分と失礼な話だね。あたしは気が張るほど変なもの作ると思われてたのかい？」

葛

「いえいえ、そんな、めっそーもない」

桂

「そうそう。そんなふうにしてたら、あんなにたくさん食べないよ」

葛

「別腹のはずのデザートが入らなかったぐらいですからねー。西瓜、川で冷やしっぱなしです」

サクヤ

「普段から鍛えてないからだよ」

ちゃんと三食まともなごはんを食べろというのが、ここのところ良く聞くサクヤさんの主張。

桂

「でも、サクヤさんだって二日酔いになってたりするんじゃないの？」

サクヤ

「は？ このあたしがあの程度で？」

桂

「でも、起き抜け元気がなかったし、今だって目が赤いよ？」

葛

「憂鬱または苦悶の表情、肌が乾いている、顔色が悪い、目の充血なんかは、二日酔いに見られる他覚症状ですね。ついでに言えばお酒臭いです」

サクヤ

「違う、違う。これは二日酔いとかじゃなくて、単に夢見が悪かったせいだよ」

サクヤ

「昔にあった嫌なことを思い出してね」

桂

「——え？」

サクヤ

「あたしがまだ葛よりも小さかったころの夢さ」

桂

「あ……」

葛

「どーかしましたか、桂おねーさん」

桂

「わたしが見た夢ってね、わたしが小さいサクヤさんになってる夢だった」

サクヤ

「……何だって？ あんたがあたし？」

桂

「うん。サクヤさんの見た夢って、主を封じるときのオハシラサマの夢だったりする？」

サクヤ

「あ、ああ……そうだけど……」

桂

「観月の民って、同じ姓の一族ごとに別れて暮らしてるよね。浅間の他に、文石とか大神とか、そうそう隼人とかっていたりする？」

サクヤ

「……桂、あんた……あんた、それをどこで知ったんだい！？」

桂

「えっと、その、夢の中……」

サクヤ

「夢……あたしと同じ夢……」

サクヤ

「そうか、あたしが桂の血を飲んだから——その血と桂はまだつながってるのか」

桂

「つながってるってことは、やっぱりあの夢って、サクヤさんが見た夢そのまんまなんだ」

サクヤさんの中で、わたしの血が生きている。

わたしたちはつながっている。

それが何だか嬉しくてつい、顔がにやにやと緩んでしまう。

桂

「だけどサクヤさんって、小さいときはすごく可愛かったんだ。泣き虫みたいだったし」

葛

「サクヤさんは泣き虫で、可愛らしい子供だったんですか」

サクヤ

「うっ……」

わたしに便乗した葛ちゃんの言葉に言い返す言葉を持たずに、短くうめいて前髪の影に顔を隠す。

それでも、ちらりと覗く耳なんかはお酒を飲んでいるんじゃないかってほど赤かったりして。

サクヤ

「……出かけてくる」

むっつりと立ち上がって居間を離れようとするサクヤさんは何だか可愛いと思う。

サクヤ

「いいかい！ あたしが帰ってくるまでは、尾花から離れるんじゃないよ！」

が一っと吠えてふすまを乱暴に閉めてしまうのだって、照れ隠しの一環だと思えば結構可愛い。

いや、ものすごい年上のサクヤさんに対して可愛いっていうのはないかもしれないけど。

桂

「……行っちゃったね」

葛

「……行ってしまいましたねえ。一緒に居なくていいんでしょうか？」

桂

「んー、まだ昼だしね。それに一応、尾花ちゃんがボディガードに指名されてたみたいだよ」

葛

「どうして尾花なんでしょー？」

まだ座布団の上で丸くなっていた尾花ちゃんの背中をぐりぐりと撫でながら、葛ちゃんが訊ねる。

そんなこと訊かれても困るんだけど――

桂

「あ、そういえば尾花ちゃんそっくりの子も出てきたよ」

小角様だったっけ。主を封じた偉い行者様が尾花ちゃんにそっくりな子狐を連れていた。ん〜。

じっと尾花ちゃんの円らな目を見つめる。

サクヤさんだってあの時代から生きてるんだから、もしや尾花ちゃんも……

葛

「どーかしましたか？」

桂

「あ、別に何でもない」

さすがにそれは考えすぎだろう。

もしそうなら、わたしも小角様と同じ贅の血の持ち主なんだから、もう少し懐いてくれてもいいと思うし。

そういえば小角様の《力》の秘密は贅の血なのだそうだけど、わたしも修行したらノゾミちゃんたちぐらいは追い返せるようになるのかな？

葛

「……ところでおねーさん、どーして急に掃除をしようと思立ったんです？」

桂

「どうしてって、お掃除は毎日するものだし」

馬手にほうき、弓手にはたき、バケツに雑巾、心にやる気——

お料理以外の家事全般は、そこらの若奥様には負けない自信があったりするのです。

というわけで、わたしと葛ちゃんは用意万端、部屋の掃除にあたっていた。

ちなみに尾花ちゃんは見てるだけ。

桂

「何日分とかまとめてするより、こまめに毎日した方が、簡単だし気持ちよく暮らせるよ」

葛

「はあ、それはそーなんですけど、現在のような特殊な環境下においては、自分たちの生活空間の確保と維持ができていれば十分なのでは？」

桂

「え？」

葛

「ですからですね、何日分なんてものではなくて、何年分もの埃の積もった、使う予定のない部屋まで掃除することはないのでは一、と」

各人の部屋や、昨夜の宴会場跡地でもある居間の掃除を終えた今、わたしたちは前人未到の一室に挑もうとしていた。

そこは一步脚を踏み入れただけで、積もる埃にくっきりと足跡が残る大魔境。葛ちゃんがしり込みする気持ちもわからなくもない。

だけど。

桂

「んー、今のところは足りてるんだけど、お客さんが来るかもしれないし」

もしやの来客に備えて万全の体制を敷いておくのも、一応は家主であるわたしの勤めではないかと思ったりするわけで。

桂

「昨日お昼ごはん食べたあと、葛ちゃんたちとは別行動でお買い物してるときに、ばったり会ったんだけどね」

黒衣を纏った黒髪の一――

葛

「ははあ、それで旧交を温めに参られるわけですか。それにしても、こんなところでお知り合いとは、また奇遇ですねえ」

桂

「わたしのじゃなくて、サクヤさんの知り合いなんだけど、本当に縁は異なるものだよ」
今のわたしにとっては礼を尽くしてでも迎え入れたい、掃除ぐらいは当たり前的那个人は。

桂

「その人、鬼退治の専門家なんだって」

葛

「鬼退治……ですか？」

桂

「うん。鬼切部の千羽烏月さん――だったかな」
鬼切りの太刀を手にした鬼の敵。サクヤさんの言葉を借りるなら護法の猿公・孫悟空。

桂

「もしかしたら蔵をひっくり返さなくても、お守りの充電の仕方とかわかるかもしれないんだ」

葛

「そーですか」

桂

「それに比べたら、まだこのお部屋のお掃除の方がらくちんだよね」

葛

「そーかもしれませんね」

桂

「あ、もしかしたらサクヤさんの用事って、千羽さんを探しに行ったのかも」

葛

「……………」

桂

「……葛ちゃん、どうかした？」
何だか難しそうな顔をして考え込んでいる。

葛

「えーと、その、あのですね……」
何とコメントすればいいのか困っている模様。
そりゃあ鬼退治の専門家だなんて、普通に考えたら信じられないんだろうけど、前提が色々あるんだし葛ちゃんも信じる方だって言ったのに。
そして、数秒の葛藤を経て葛ちゃんが取った行動は。

葛

「わたくし葛は少々用事を思い出しましたので、今から外に出かけてきますね」

桂

「え？」

葛

「帰りは明日とか明後日ぐらいまで遅くなったりするかも知れませんが、どーかその辺はお気になさらず、心安らかにお過ごしくださいませー」

桂

「え？ 明日とか明後日って、葛ちゃん？」

葛

「安心して下さい、人質として尾花は置いて行きますからー」

掃除道具をわたしにパスして、脱兎の勢いでその場を離れることだった。

桂

「ちょっと待ってよ、葛ちゃんっ!？」

桂

「待てーっ!」

パスされたばかりの掃除道具をうっちゃって、葛ちゃんを追いかけるわたし。

とはいえ、わたしの速度は自己ベストを叩き出したところでクラスの平均程度がせいぜい。

それに比べて、小さいながらもめっぼう脚の速い葛ちゃん。

あっという間に庭を抜けると、そのまま鎮守の森のトンネルへ。ここですでに十メートル以上の差を付けられていたりする。

それでもしぶとく追いかけると、葛ちゃんは急旋回して道を折れる。その道は山の中へと続く、トンネル唯一の脇道だった。

そしてわたしがそこに辿り着いたときには、もう葛ちゃんの姿は見えなくなっていた。追跡不能。

ううっ、脚が長い方がアドバンテージを取れるはずなのに……

いや、確かにそれも一要素なんだけれど決定打にはなりえないということはわかっている。

人間と動物を比べるのは変だけど、尾花ちゃんなんかは肩に乗るぐらい小さいのに速いわけだし。

現にぴったり後ろをつけて来ていた尾花ちゃんは、わたしと違って全然余裕。息ひとつ乱していない。

桂

「はあ、はあ、疲れたよ……」

身体が要求する酸素量に対して、空気中の含有量が低いような気がするの、暑さで空気が膨張しているせいなのか、単なる気の迷いか。

しかも立ち止まった途端に、空冷式から水冷式に宗旨替えする身体といたらどうだ。

どっと噴き出る汗に、身も心も重くなる。

桂

「ううっ、走るんじゃなかったよ……」

愚痴とため息にこもる熱も、いつもに比べて何割増しかとあったところ。

ようやく呼吸が落ち着いてきたところで、案外近くに隠れているのではと思ひ立ち、声を大にして呼んでみる。

桂

「おーい、葛ちゃーん？」

当然のことながら応えはなく。

呼んで出てくるぐらいなら、最初から逃げたりなんかしないって。

桂

「ね、尾花ちゃん。葛ちゃんどこに行ったかとか、臭いでわかったりしないかな？」

足元で大人しくしていた尾花ちゃんに尋ねると、尾花ちゃんは面倒くさそうに身体を反転させて、お屋敷の方に戻り始めた。

せめてあたりの臭いを嗅ぐフリだけでもしてくれとか、そういう思いやりを期待するのは間違っているのだろうか。

なんて考えているうちに、尾花ちゃんはすでに小さな点に見えるほど遠くへ行っている。

サクヤ

「いいかい！ あたしが帰ってくるまでは、尾花から離れるんじゃないよ！」

桂

「わ、ちょっと待ってよ、尾花ちゃん！」

尾花ちゃんは立ち止まり、追いかけるわたしの姿を一瞥すると、また同じペースで歩き始めた。

ううっ、走れば追いつける速さなんだけど、やっぱり尾花ちゃんって意地悪だよ……待てと言われて待つぐらいなら、最初から逃げたりはしない。

桂

「もう、しょうがないなあ。そんなにお掃除が嫌なのかなあ」

確かに大変そうだけど、居間や今使っている部屋を生活レベルまでお掃除したのは葛ちゃんなわけで。

桂

「うーん……」

もしかしたらそのときに、何かトラウマになるような事件が起きたのかもしれない。

めちゃくちゃ大きいゲジゲジが出たとか、日に干そうとめくった畳の裏にびっしり蛞蝓がくっついてたとか、畳が腐ってて踏み抜いた挙げ句——

桂

「〜〜っ」

結んだ髪が遠心力で持ち上がるほどの勢いで頭を振って、ぼよんと浮かんできた怖い考えを振り払う。

ううっ、何だかなあ。でもお掃除しとかなないと困ることになるかもだしなあ……

桂

「よしっ」

葛ちゃんの獲物を受け取って二刀流になったわたしは、宮本武蔵よろしく箒を構えて気合いを入れる。

鬼に比べたら変な虫の一匹や二匹怖いものか。この箒で外に追い出してやろうじゃないか。

桂

「さーて、お掃除、お掃除っ」

まずは戸を全部開け放して空気を入れ替えつつ、積もりに積もった塵や埃を全部外の庭に掃き出す。

こういうとき、ばっちり吹き抜けになってくれる古い日本家屋は便利だと思う。

ドア以外はがっちり壁に囲まれている洋室なんかだと、埃が中に充満して大変なことになる。

まあ、今だって口元をハンカチでしっかり覆ったりしないとひどい目にあうんだけど。

桂

「ふい～～」

ざざっと掃き掃除を済ませて、埃が静まるまで少しだけ休憩。
濡らして絞ったタオルで顔や腕をふいて、湿った肌を風がなぶるがままに任せる。

縁側に座ってぼーっとしていると、蟬時雨の音に吸い込まれそうな気がしてくる。

桂

「よっ」

立ち上がってお台所に向かい、急須を手取るわたし。食生活が劇的に改善された昨夜から、お茶を入れて飲むようになったのだ――

とはいえ、お茶を飲んでくつろぐのはもうひと頑張りしてからにするとして。

桂

「さて……そろそろ行きますか」

いい具合に生乾きになっている昨夜のお茶殻を回収して、掃除中の部屋に向かう。

何とお茶殻を畳に撒いてから掃くと、埃が綺麗に取れる上、一緒に何とかという有害物質も取り除いてくれるらしい。お茶すごい。

お茶殻を使った掃き掃除の後は、固く絞った雑巾によるふき掃除。

本当は乾拭きの方が畳に優しいんだけど、十年ぶりの掃除だけに仕方がない。

それにしても、暑くなりきる前に埃っぽい仕事を済ませておいたのは大正解。

汗だらだら状態で立ち込める埃の中に入るのは遠慮したいところだし、暑いときにバケツで雑巾をばしゃばしゃ濯ぐのは気分がいい。

掃き掃除の間は外に出ていた尾花ちゃんも、ふき終わって少しひんやりめの畳みの上に、ぺったりとお腹を付けて寝そべっている。

それにしても――

お屋敷には不思議な《力》が働いているのか、畳みは少しも腐っておらず、黴（かび）や茸も生えていない。

押し入れの中の長持や箆笥の中にあつた着物も無事だった。全然樟脳臭くないのに虫食いの跡もなし。

桂

「わ、浴衣だ……」

寝巻き代わりに着ている薄手のものとは違い、藍染めに青い花をあしらった、花火見物にでも着て出かけるようなちゃんとした浴衣だった。

羽織って見ると丈の長さはあつらえたよう。

少しばかり長すぎでも、着物にはおはしよりが付き物だからいいんだけど、ぴったりなのはなんだか嬉しい。

お母さんはわたしより背が高かったから、これはお祖母ちゃんのものだろうか。

桂

「うふふー」

滑らかな生地の手触りに悦に入り、ひらひらと裾や袖をふりふりと揺らして遊んでいると――

ふと、強い視線を感じた。

ぐるり八方十六方を見回してみても、視線の主は見受けられない。

桂

「……？」

ちょっと視線を落としてみると、いつの間にか姿勢を正した尾花ちゃんがわたしを見上げていた。原因はこれだ。

尾花ちゃんはじっとわたしを見ている。

桂

「えっと、その……」

尾花ちゃんが何もしゃべらないし、表情だってよくわからないけど、呆れているということだけはとても良く伝わってきた。

桂

「ううっ……」

羽織っていた浴衣を脱いで、きちんとたたんで長持の中に仕舞う。

そりゃあね、帯も締めないで（締め方わからないし）洋服の上に引っ掛けるのって変だろうし、掃除中だっていうのもわかるけどね。

わたしがお掃除に戻ったのを確認すると、尾花ちゃんはまたこてんと横になる。

手伝ってもくれないのに、きっちり見張っているだなんて、お昼にやってる再放送ドラマのお姑さんもびっくり。

いいもん。洋服歴より和服歴の方が断トツに長いサクヤさんなら、着付けぐらいできるだろうから、後で教えてもらうもん。

あ、そうだ。掃除が終わったらサクヤさんや葛ちゃんの分も探そ――

桂

「……あれ？」

……………

桂

「……えーと」

一瞬、変な感じがしたんだけど、きっと気のせい。気のせいだろう。

また尾花ちゃんが見ているのかもしれないけれど、あえて確認しないでおく。気にしないもん。

桂

「さーて、お掃除、お掃除っ」

ざわざわと、血がうごめいたような気がした。

この感覚は何だろう。身体の中で血が偏るといふか、一方に牽き付けられるといふのか――

例えば、月が大きく見える晩。

海面すら持ち上げる月の《力》が、体中の血を引っ張り上げてざわつかせるような――そんな気がしたりすることはないだろうか。

それがあくまで「気がする」程度ですむのは、人とそれとの絆が弱く細いものだから。人は桜花の民であり、夜空にいます巖の民ではないから。

そんな感覚に――

今のこれは似ていると思う。

似ているけど、決定的に違う。

わたしが今感じているのは、おそらく観月の民が満月に感じるそれと同じぐらいの――気のせいだと無視してしまうには、無視したところで落ち着かない、落ち着くことができないほどの影響力を持った現象だった。

身体に流れる血の中の鉄が、磁性をもって自分に近い血とひきつけあっているような――

とにかくこの感覚に頼って進めば、誰かに会えるような気がした。

そして、それは、きっと――

彼女が飲んだわたしの血が、わたしの中に残った血と惹き合い、見えない絆を紡いでいるのだ。

だから、それは、きっと、絶対。

何せ、同じ夢を見てしまうほどなのだから。

桂

「尾花ちゃん、サクヤさん探しにいこうか」

お掃除はこれでお終いと、道具を片付けながら尾花ちゃんに話し掛ける。

朝ごはんを食べていないので、そろそろサクヤさんに戻ってきてもらわないと困る。

いや、ひとりで支度が出来ないって言ってるんじゃないくて、折角だから一緒に食べたいし。

尾花ちゃんは賛成するでも反対するでもなく、静かにわたしを見上げている。

桂

「ん～～」

態度のはっきりしない尾花ちゃんに業を煮やして部屋を離れると、付かず離れずで付いてきてくれる。

わたしが尾花ちゃんを見失うことはあっても、その逆はありえないから、尾花ちゃんがその気になってくれるなら問題は何もなし。

わたしは安心してお屋敷から離れることにした。

と、ちょっとだけユーターン。虫除けスプレーを吹いておくのを忘れてた。

わたしが向かっているのは、オハシラサマのご神木に向かう道だろうか。

今進んでいるのは、夢の中でも通った道だ。

道らしい道のない道行きだというのに、迷っているという感じはしなかった。

わたしの中には確かな羅針盤がある。

これの示す方向に向かえば、いつかは辿り着けるのだから、迷わずに進めばいい。

がさがさと茂みを揺らす音ができる。

強い風は吹いておらず、蝉の声も聞こえない。

きっとあそこに誰かがいる。

きっとそれはサクヤさんだと思う。

さらに近づくと人影が見えてきた。

それもふたつ――

背の高さからして葛ちゃんではありえないから、サクヤさんと片方は千羽さんだろうか。

――あれ？

どちらもサクヤさんではなかった。

長い刀を手にした、長い髪の方は千羽烏月さん。出会ったときの黒い制服姿ではなく、目にまぶしいほど白い狩衣をひるがえしている。

その袖からは実用本位の手甲が伸びていて、なるほど、今日の彼女はいかにも鬼退治の専門家というような戦装束で身を固めていた。

そして、その鬼退治の専門家と切り結んでいるのは――

いかにもな鬼——などではなく——

中肉中背の優しげな顔立ちをした男の子だった。

服装だってジーンズにシャツを組み合わせた普通に見かけるものだし、武器の類も持ち合わせていないように見える。

もちろん、十年の付き合いでサクヤさんが鬼だなんて気付かなかったんだから、一見したところでわかるものでもないだろうけど——

そして確かあの男の子は、自ら死者と——鬼と称した人なのだけれど。

烏月

「せいっ！」

どちらかという大時代的な格好で、一方的に攻撃を仕掛けている千羽さんの方が、鬼というか悪役に見えないこともない。

二尺半ばかりの鋼の刃は、生い茂る枝を切り落としてなお勢いを失わず、男の子に迫る。

少年

「甘い！」

片手だけで白刃取りをするように、横合いから左のてのひらが太刀の腹を打った。

一歩の間違えで手首から先が飛び、数ミリの差でもてのひらの皮をべろりと削がれてしまいそうなことをしたのに、彼は怯まず動きを止めない。

左手が右半面へ伸びるのと連動して、彼の身体は左を前にした半身の構えになり——

てのひらに打たれた刃はほんの少しだけ軌道をずらし、先ほどまで彼の右肩があったはずの場所を流れ星の速さで落ちていく。

それは一瞬の出来事。

けれど一瞬はさらに引き伸ばされて、彼・彼女らの動きにはまだその先がある。

彼はそのまま一歩前に踏み出し、刀の間合いから素手の間合いへと一気に距離をつめる。

もう左のてのひらは刃をリードしていない。刃は刃で落ちるに任せて、己の身体に巻き込むように右奥へと進んでいく。

振り切られた刃が、最下点で静止した。

その刃を千羽さんが引くより先に、男の子が懐へと踏み込んだ。

左のてのひらとは骨皮つながりの肘は、いまや正面前方へと向けられている。

その肘が——

少年

「はっ！」

力強い足踏みの音と同時に、千羽さんの胸元に炸裂した。

千羽

「かはっ——」

おそらく一時的な呼吸停止。

男の子の空いていた右手が、引ききる前の状態で固まっていた千羽さんの太刀の柄に伸びる。

伸びて、掴んだ。

千羽さんが両手で柄を握っているのに対して、彼は右手一本。

けど上から下へ押さえつける力の方が、上に持ち上げようとする力より強く働くのは周知の事実。加えて千羽さんは呼吸を乱している。

腕力の差もあってか拮抗して動かない太刀。

動くのは男の子の自由な左腕。

少年

「しっ——」

肘打ちの形で折り畳まれていた左腕が開かれる。横殴り気味の裏拳が千羽さんの側頭部へ向かって加速する。

両手はどちらも塞がっており、太刀を取る手を放さなければ進退ともに極まったままだ。

千羽さんは——

烏月

「ちいっ」

首を傾け頭を振り、額の陣鉢で迎え撃った。

大事な脳を守る額の骨は、全身の骨の中で一番硬い骨なのだという。

大相撲の立ち会いを制する技・ぶちかましは額からぶつかって行く技だし、空手の瓦割りも拳や手刀よりも頭突きの方が簡単なのだと言う。

しかも千羽さんは陣鉢を締めている。

本当かどうかは知らないけれど、前に観た時代劇ではあれで日本刀の一撃を受け止めていた。

これではダメージを受けるのは男の子なんじゃないかと、わたしはそう思ったのだけれど——

わたしは忘れていた。

彼は普通の人間ではなく鬼なのだ。

鬼の《力》を発揮したサクヤさんは、わたしを軽々抱いたままあの断崖を駆け下りた。

夢の中で知った鬼たちは鉄を引き裂く牙を持ち、雷の矢で大地を灼くような、畏怖すべき《力》を持った存在だった。

そんな鬼の拳なら——

千羽

「くっ」

千羽さんの首が、間の数コマを飛ばして反った。
頭の動きを追っていた黒髪にぶつかり、行き先を閉ざされた髪は八方に乱れ広がる。
ふらり——
意識を手放したのか、力の抜けた身体がかしぐ。
それも一瞬。

横に広げた右足で地面を蹴りつけ身体を支える。千羽さんは倒れない。
けれどそのわずかな空隙を突いて、彼は千羽さんの手から太刀を奪い取っていた。

少年

「これで形勢逆転だね」

彼は八艘飛びも真っ青の人間離れした跳躍力で跳び退り、ふたりは間を開けて対峙する。

千羽さんはまわりついた何かを振り払うように頭を振ると、正面から男の子を睨みつける。

千羽

「……返せ」

肘と裏拳、二発もともに攻撃を受けていて、痛くも苦しくもないはずがない。

それでも千羽さんは真っ直ぐに立ち、奪われた刃を補うように、瞳を鋭く研ぎ澄まして言う。

少年

「もちろん返すよ。この太刀——維斗は——千羽党の鬼切り役に託される、千羽妙見流皆伝者の証でもあるからね」

千羽

「そうだ。ゆえにお前にそれを持つ資格はない」

少年

「いや、本家筋の生まれではないことを除けば、僕にもあるんだよ——」

そう言って彼は、千羽さんから奪った太刀を、右肩に担ぐようにして構える。

少年

「役目を絶やさぬために、千羽の本家に皆伝者がいない場合、維斗は分家の有資格者に託される。皆伝者が本家から現れるまでの間、ずっと」

肩幅よりも広く両足を開いて、背筋はぴんと伸ばしたまま、そのまま空気椅子でもしているかのように腰を低く落とす。

少年

「現に明良さんの前の——先々代の鬼切り役は、君たち兄妹とは遠縁程度の間柄でしかな

かったはずだ」

わたしならすぐに転んでしまうだろう、不安定そうな構えなのに、彼はぴくりとも動かず、不思議と山のような安定を見せている。

烏月

「その構えは破軍——」

少年

「そう。向かい挑めば必ず敗れ、背にすれば必勝を約束されるという、破軍星を象った構え——」

少年

「そして千羽妙見流七つ構えのうち最後のひとつ。皆伝者にのみ許された、奥儀のためにある構え」

桂

「……………」

今の話からわたしが察したのは、血筋の問題を除けば男の子の方にも鬼切り役となる資格があるということ。

それから、まだ若い千羽さんが鬼切り役に就いているということは、本家は他の資格者に恵まれていないのかもしれないということ。

だとすると、千羽さんがいなくなれば——

少年

「今から、僕が明良さんから伝承した技を見せてあげよう——」

彼は眼光を鋭く尖らせて、ひたと千羽さんを見据える。

少年

「先代から当代へ、維斗と併せて伝えられる秘伝、千羽妙見流『鬼切り』を——」

駄目だ、そんなことさせちゃ駄目だ。

何とかして止めないと。

少年

「烏月さん、少し乱暴なやり方だけど、僕はそれほど長くなさそうだから、今、ここで伝えないと——」

——えっ？

わたしは何かを早とちりした——

そう確信したのは、ふたりの間に飛び込んだその後だった。

——

「桂——っ！？」

遠くでサクヤさんの声が聞こえたような気がして——

世界が赤く染まった。

少年

「烏月さん、少し乱暴なやり方だけど、僕はそれほど長くなさそうだから——」
男の子が千羽さんへ向かって踏み出した。

少年

「今、ここで伝えないと、明良さんに顔向けできなくなるからねっ！」

ずだんっ——

ものすごい足踏みの音。

体重はそれほどあるように見えないのに、横綱の土俵入りもかくやの大音声を発して、足が大地を踏みつけた。

そういえば昔、おこたで一緒に大相撲観戦をしていたときに、四股は邪鬼を踏みつけて懲らしめる神事なのだと、お母さんが言っていた——

桂

「——ああっ！？ 千羽さんっ！？」
わたしは思わず、飛び出していた。

鋼の刃が風を切る。

わたしが飛び出したのとほぼ同時に、千羽さんの身体が崩れ落ちる。

桂

「……あ……」

本当に、ただの一振りだった。
あまりのあっけなさに、立ちすくむわたし。

そんなわたしなど眼中にない様子で、男の子は千羽さんの傍らに屈み込み、彼女の佩いた黄金の鞘に手の中の抜き身を納めた。

少年

「さて……」

立ち上がり、わたしの方を見る。

もう刀を持っているわけじゃないし、別に睨まれたわけでもないんだけど、わたしの身体はすくんでしまった。

少年

「君は烏月さんの知り合いなのかい？」

桂

「……あ……あの、その……」

強張った舌はうまく言葉を紡いでくれず、こくこくと頷くことで応じるわたしに――

少年

「彼女のことを頼んだよ。いつまでも、こんな所に寝かせておくわけにはいかないからね」
彼は目元を緩ませて、そう言った。
とても鬼とは思えないような、優しく穏やかな笑い方だった。そして――

少年

「それじゃあ」

背中を向けて走り出した。

たった一步で全力疾走の状態まで加速した姿は、木立の影に阻まれて、すぐに見えなくなった。

桂

「……………」

桂

「あっ、千羽さん！ 千羽さん大丈夫！？」

我に返って、前のめりに突っ伏した千羽さんの傍らにしゃがみこむ。

あれ……？

介抱しようと仰向けに返した彼女の身体には、一筋の刀傷も見当たらなかった。身に付けた狩衣も白いままで、赤く濡れていたりはない。

一体、どういうことだろう……

桂

「千羽さん？ 千羽さーん？」

ただ、ゆすっても彼女は少しも起きてくれる気配はなく。

こんな所に寝かせておくわけにはいかない――なんて言われても、わたしに一体どうしろと。

と、途方にくれていたそのとき。

桂

「ひゃっ」

茂みが揺れて、にゅっと見知った顔が現れた。

サクヤ

「あんた、こんな所で何やってんだい？」

桂

「サクヤさ～～ん」

グッドタイミングでやってきたサクヤさんに、わたしは窮状を訴えた。

サクヤ

「……なるほど、そういう状況なわけだ」

さすが、夢さえつながらる間柄。アイコンタクトだけで以心伝心したらしい。

サクヤ

「ふむ……」

こくこくと「そういう状況」を肯定するわたしを見て、顎に手を当てて黙想をするサクヤさん。

サクヤ

「……そうだね、よし」

サクヤ

「とりあえず自首する気がないなら、そこらに穴掘って埋めちまいな。あたしは見なかったことにしてやるから」

いや、わたしそんなことしてませんし。

かくかくしかじか。

どうしよう、どうしよう——

たとえわたしが出て行ったところで、何かの役に立てるのだろうか。

あの男の子が千羽さんの探している鬼なのだとしたら、贅の血を持つわたしが前に出て行くのは、とても危険なことだと思う。

ああ、どうしよう、どうしよう——

実際に暴れるわけにはいかないので、心の中でじたばた足踏みをしていると、心臓から送り出された血がさざめいた。

ああ、そうだ——

わたしはサクヤさんを探して、こんな山の中にまで入って来たんだった。

そして男の子と同じ鬼であるサクヤさんなら、千羽さんを助けることができるはず。

血の導きに従って探し、連れて戻ってくるまでに何分かかるのかはわからないけれど、このまま睨み合いが続いている可能性だってある。

それにあの男の子が太刀を奪って形勢逆転したように、千羽さんが再び逆転する可能性だって無きにしも非ずだ。

男の子と違って、ちゃんと手甲や陣鉢などで身を守っているわけだし——

よし。

こうしていてもらちが明かない。それなら一秒でも早くサクヤさんと呼んでこよう。

男の子

「烏月さん、少し乱暴なやり方だけど、僕はそれほど長くなさそうだから——今、ここで伝えないと——」

静かに離れるわたしの背中を、男の子の声が追いかけてきた。

そんな調子でしばらく話をしていてくれれば、わたし的には好都合なんだけど——

桂

「さ、ささっ、サクヤさん！ 大変、大変、大変だよ！」

サクヤ

「……なんだい、桂。そんなどこかの岡っ引みたいな慌てっぷりで。どこかで殺しでもあったわけかい？」

桂

「そうなんだけど、そうじゃなくって——えーと、もう、こっちに来て！」

サクヤ

「おい、ちょっと桂！」

桂

「千羽さんが刀を取られて大変なのーっ！」

サクヤ

「——！？」

戻ると、千羽さんが突っ伏していた。

あたりには、すでに男の子の姿はいない。

サクヤ

「おい、鳥月！」

千羽さんに駆け寄ったサクヤさんが、仰向けに抱き返して状態を改める。

サクヤ

「外傷は……ないみたいだね」

ちゃんと呼吸もしているし、問題なく心臓も動いている。乱れの見られない狩衣も、相変わらずの白さのまま、赤く染まっていたりはしない。

一時は奪われた刀も、きちんと鞘に納められた状態で脇においてある。

何も問題はないはずなのに、ゆすっても、軽く叩いても、起き出す気配はまるでない。

昏々と眠るその様は、紡錘で指先を刺して百年の眠りに落ちた、茨の森の眠り姫を彷彿させたりもして——

桂

「……どうしよう？」

サクヤ

「どうしたものかねえ……」

結局、力持ちのサクヤさんが千羽さんを担いでお屋敷まで連れていくことになった。

わたしは「邪魔だから」と任された刀を持っているのだけれど、これが結構な重さがある。

こんなものをぶんぶん振り回す千羽さんも、見かけに寄らず力持ちだ。

それにしても——

桂

「なんかさー」

サクヤ

「なんだい」

桂

「これって土俵入りみたいだよね」

サクヤ

「あんたが太刀持ちで、あたしと烏月のふたりで横綱クラスの重さだって？」

桂

「わ、悪意の解釈。誰もそんなこと言ってないよ」

当て付けなのかつぼにはまったのか、サクヤさんは地響きがするような力強い足取りで、のっしのっしと押し歩いていく。

サクヤ

「は一、どすこい、どすこい」

桂

「どすこい、どすこい」

ちなみに先行している露払いは尾花ちゃんだったりする。

だけど、やっぱり、やめておくことにする。

そんな思い込みを頼りに勝手に出歩いたりなんかしたら、折角の縁だって切られてしまいかねないし。

それに、落ち着かない気分なんていうものは、他に集中することがあれば、けっこう気にならなくなるものだし。

桂

「さーて、お掃除、お掃除っ」

揺れている。

赤い世界がゆらゆらと揺れている。

赤くて——熱い。

この赤は炎の赤。

半鐘が鳴っている。
とても眠ってはいられない。
真夜中だというのに外は明るい。
物忌みすべき月のない夜だというのに。
火を掛けられ燃え盛る家が、夜空を明々と――

そしてあたしは――

――鬼切りの刃にかかった。

浅間の長

「サクヤ――っ!!」

サクヤ

「祖父さん、あたしは大丈夫だよ……この程度の傷なら、あたしらは死なないし……」

浅間の長

「しかしサクヤ、今宵は――」

サクヤ

「――っ、ごふっ」

血の混じった息に咽ぶ。

なまかなことでは死なない観月の民の生命力が、最も低くなる朔日を狙って、鬼切りどもが浅間の里を襲撃した。

浅間の長

「どういふつもりだ、鬼切部！ どうして儂らの里を襲った!？」
祖父さんが――浅間の長が、手傷を負ったあたしを庇って立ちふさがる。

鬼切り役

「鬼を切れと命が下ったからだよ」

浅間の長

「儂らを鬼だと……」

浅間の長

「確かに儂ら観月は人ではない。だが、人に仇なす存在でもない。むしろ、そちらの意に添うようにしてきたはずだ」

浅間の長

「本来関わるべきではない人の争いにも、ぬしらの頭――若杉のところの嬢やたつての頼みで加わり、功績すら上げているはずだ」

鬼切り役

「その関わるべきではないことに関わったのが、観月の命運を分けたのだよ」

鬼切り役

「妹様が株をお上げになったので、嫡男であるあの方の立場が危うくなられたのだ」

浅間の長

「兄妹同士の権勢争いが、浅間のこの地まで飛び火してきたのか……」

浅間の長

「天狗の太刀を手にしているということは、おぬしは千羽党の鬼切り役だな」

浅間の長

「ただでさえ短いその命を、骨肉相食む醜き争いであたら散らすなど、空しくかいなきことと思わんのか」

鬼切り役

「何も——」

鬼切り役

「鬼切頭からの命があり、そこに鬼がいるならば、理由も是非もなく赴いて切る。それが鬼切り役というものだ。いずこの党でも同様に」

鬼切り役

「ただ、これは私の個人的な見解だが、短いからこそ栄華を求めるのだろうな。咲けぬ桜に何の意味があろう」

鬼切り役

「屍を根に抱えてこそ花は美しく咲くのだという。桜花の民が儂いのは——案外、佐久夜毘売の美しさのために、人は死ぬのかもしれないな」

浅間の長

「……………」

鬼切り役

「せんない話はここまでにしよう。私以外の手のものは、役目を果たしているころだ」

いつの間にか、半鐘の音は聞こえなくなっていた。

長と千羽の鬼切り役とが押し黙ると、木材のはぜるぱちぱちという音だけが響いた。

鬼切り役

「私は鬼切り役として、お前たちを切る」

浅間の長

「くっ——サクヤ、逃げろ！ 逃げ延びるのだ！」

あたしは走っていた。

あの場所を目指して走っていた。

傷は決して浅くない。

治癒力の落ちる今夜に限れば、命を落とすのに十分な深さの傷だった。

出来そこないのあたしでは、たとえ満月であったとしても変わらないかもしれないけれど、それならそれでいいと思った。

もう助からなくてもいいと思った。

だから最期にあそこに行こうと思った。

あの鬼切り役が言う通り、屍が花を咲かせるというのなら、あの人に抱かれて死ぬのがいい。

奴の魂を花びらの蝶にして虚空に還す役目を、もう千年以上も続けている姫さまのところで——

姫さまのお役目が、一秒でも早く終わるように、一輪でも多くの花を咲かせるように——

そして、あたしは倒れた。

そして、あたしは冷たくなっていく。

そして、あたしは白いしじまに沈んでいく——

ああ、また——

あたしの意識が沈み込んでいくことで、あたしとわたしが分離する。

あたしではなく、わたしが思う。

これは——サクヤさんの夢だろうか。

温かいものが身体の中に流れ込んだ。

乾燥しきった空気に渴いていた口の中に、甘いような塩辛いような、とろりとした液体が広がった。

サクヤ

「んっ……」

サクヤさんは無意識のうちにそれを吸い上げる。

女性の声

「あら……」

これは——あの姫さまの声だろうか。

重いまぶたをゆっくり持ち上げ、サクヤさんは目を開いた。

サクヤ

「あ……」

白い花びらが降りしきる中で、姫さまがサクヤさんを覗き込んでいる。

サクヤ

「……姫さま……あたしを還しに現れてくれたんですか？」

オハシラサマ

「？」

サクヤ

「あは……姫さまと違って、あたしは全然様子が違うから……わかりませんか」
姫さまは可愛らしく小首を傾げて考え込む。

サクヤ

「よく里を抜けて、姫さまに会いにいていた、浅間のサクヤです」

オハシラサマ

「浅間サクヤさん？」

オハシラサマ

「……ね、やっぱり人違いじゃないかしら」
おっとり微笑む様子は、どこことなくオハシラサマに通じる面影があるけど――

――あれ？

何だろう、この違和感は。

わたしが違和感の正体に気付くより先に、お姫さまそっくりの人が口を開いた。

オハシラサマ

「わたしは笑子よ、羽藤笑子」
ええっ――笑子さんって――！？
この人、若い頃のお祖母ちゃん！？
だとするとこの景色は百年単位の昔じゃなくて、つい最近(?)の出来事なんだ。

サクヤ

「姫さまじゃ……ない……」

桂の祖母

「それにしても良かったわ。あんな方法でサクヤさんが気が付いてくれて」
はあ――と白い息を吐き出して、それが冷たい空気のなかに溶けるのを見守ってから。

桂の祖母

「何の用意もなく出てしまったから、あと小一時間もこうしていたら、わたしが寝込んでしまうところだった」

サクヤ

「それなら、帰れば良かったのに……」

桂の祖母

「一度はそうしようかと思ってあなたを担ごうとしたんですけど、力及ばず一緒に転んでしまいました」

見ると着物のあちこちに、潰れて固まった雪がへばりついている。

意外とどじをする人なんだなあ、なんて思ったわけだけど、サクヤさんにはそんな余裕はない。

感情の針は、不安定に振れつつけている。

サクヤ

「何で放っておいてくれなかったんだ……放っておけば良かったのに……」

桂の祖母

「そんなことをしたら、死んでしまうじゃない」

サクヤ

「いいんだよ……それでいいんだ……あたしは死に場所を求めてここに来たのに……あたしは死ぬためにここに来たのに……」

サクヤ

「なのに、あんたはっ！」

サクヤさんは、強い力でお祖母ちゃんの着物の袖を乱暴につかんだ。

サクヤ

「どうして助けたりなんかしたんだっ！ どうしてこんなに冷たくなっているんだっ！」

雪の白さにまぎれていたもので、それほど気にはならなかったけど、お祖母ちゃんの顔色は白い。

桂の祖母

「わたしの血を、飲んだから——かしら」

桂の祖母

「寝付けないで機を織っていたのよ。そうしたら季節はずれの紋白蝶が飛んできてね」

白い蝶はオハシラサマのお使い。

ずっと昔から羽藤家に伝わっていることなので、お祖母ちゃんは何の疑問も感じずに、家を抜け出して蝶について来たのだそう。

蝶は積もり始めた雪にうずもれるように横たわるサクヤさんの胸に止まると、光の粉になって消えてしまい——

桂の祖母

「わたしは家の中でも特別《視》える性質だから、すぐにぴんときたの。あなたは普通の人とは違っているんだなって」

桂の祖母

「オハシラサマがあなたを助けるために、わたしを連れてきたんだなって——」

サクヤ

「……オハシラサマ……姫さまが……？」

桂の祖母

「ええ」

オハシラサマが依りましている、大きな鬼の木を見上げると、葉の落ちた骨組みのような枝と枝の隙間から、ひらひらと雪は落ちてくる。

桂の祖母

「だけど、お使いの蝶はすぐに消えてしまったでしょう？」

桂の祖母

「わたしひとりでは持ち上げることもできなかったのだから、どうしましょう、どうしましょうって途方にくれていたときに——」

桂の祖母

「ふと、羽藤の血筋に流れている、特別な血のことを思い出したのよ」

わたしにも流れている、贅の血のことを——

桂の祖母

「本当に利くかどうかはわからなかったのだけれど、口に含ませたらお腹を空かせた赤ちゃんのように、必死になって飲んでいたわ」

お茶碗一杯ぶんぐらいと、両手をあわせて器を形作る。

桂の祖母

「他の生き物の命を奪ってまで、ものを食べたりするのは、生きるための行為ですから——」

そう言ってお祖母ちゃんは、名前通り、とても素敵な笑顔を浮かべた。

桂の祖母

「サクヤさん、あなたはちゃんと、生きたいって思っているんですよ」

サクヤ

「そんなことあるわけ……」

桂の祖母

「そうなの？」

サクヤ

「だって、あたしはもうひとりなんだよ。なのにあたしに生きろだなんて……」

サクヤ

「みんなあたしを残して逝ってしまったのに、あたしにだけ残れだなんて……そんなの……」

桂の祖母

「それじゃあ——はい、サクヤさん」
お祖母ちゃんが、小指を立てた手を出した。

桂の祖母

「わたしが元気である間は、ひとりじゃないから心配しないで」

サクヤ

「だけど、あんたもあたしを置いていくんだろう。あたしはまたひとりになるんだ」

桂の祖母

「ふふふ、それはどうかしら。わたしは長生きするつもりだもの。だから——」

桂の祖母

「そのころにはきっと孫あたりが、わたしと同じことを言うんじゃないかしら」
視界がゆらと震えて——
鼻から喉に、喉から胸にかけて、きゅっと締め付けられるように苦しくなる。

桂の祖母

「サクヤさん？」
お祖母ちゃん本人に自覚はないんだろうけど、あのお姫様とそっくりの顔と声でそんなことを言うのは——

サクヤ

「ずるいじゃないか、そんなの……」

桂

「ふやー」

一仕事終えたわたしは、縁側に座ってお茶を飲んでいた。

本当ならたっぷりお茶葉を使って、濃いのを入れたところだけれど、そのためだけに釜戸に火を入れるのは、ちょっと苦勞が過ぎる。

夏だし、暑いし。

まあ、最近はペットボトルのお茶でもそこそこ美味しいから問題なし。

桂

「ふや～～～」

丸くなっている尾花ちゃんの背中を、うにやうにやと撫で回す。尻尾を触られるのは嫌

がるけど、背中は嫌じゃないらしい。

桂

「意外と幸せかも……」

これで贅の血とかの問題さえなければ、なかなか充実した夏休みなんだけど——
世の中、思い通りに卸してくれる問屋さんとはなかなか巡り合えないものらしい。

サクヤ

「桂」

桂

「あ、サクヤさんおかえりなさい——」

名前を呼ばれてそちらを向くと、何か白っぽいものを担いだサクヤさんの姿が。
白っぽいものは、白装束の人だった。
長い髪に隠れて顔は見えないけれど、その髪の毛の見事なつやには見覚えがある。

桂

「サクヤさん……その人……」

サクヤ

「ああ、烏月だよ。山の中に倒れてたんだ」

千羽烏月さん——鬼退治の専門家で、サクヤさんが孫悟空役だと言った人。
だから相当強い人のはずなんだけど、そんな人が意識不明の状態で倒れているなんて、
一体何が起こったんだろうか。

サクヤ

「とりあえず、布団をひいておくれよ」

桂

「う、うん！」

わたしは大慌てでお屋敷の中に駆け込んだ。
お客さんを迎えるためにした掃除が、こんな形で役立つだなんて、神様ってばあんまり
です。

千羽さんが意識を取り戻したのは、夜もとっぷり暮れた頃だった。
葛ちゃんはまだ帰ってきていない。
だけど今のこの状況が落ち着くまでは、帰ってこない方がいいのかもしれない。

なにせ事態は急変して、大変な状態になっているのだから。

千羽

「奴は——あなたと同じ名を持つ、ケイと名乗っているあの鬼は、オハシラサマのご神木

が封じている、かの鬼神を目覚めさせようとしている」
サクヤさんに向けてではなく、わたしに向けてそう言った。

鬼の木に抱かれ眠る、まつろわぬ鬼神——
サクヤさんが幼いころ、長たちが小角様の協力を得て封じた、主と呼ばれる古き鬼神。
あまりにも強大な《力》を持っていたがゆえに、封じて少しずつ《力》を削ぐしかなかった鬼神。
贅の血を欲しがる鬼から身を守らなくてはならないという、個人的な問題を飲み込んだばかりだというのに——

主
「贅の血によって削がれた《力》を取り戻し、再び大和の地を席卷し、住みやすき闇の領土を広げよう。私にはそれができる」

ずっと昔から続く因縁の糸が絡まりあい、とんでもないことになろうとしていた。

桂
「ねえ、千羽さん」

桂
「その男の子——ケイクンって、主を目覚めさせてどうするつもりなの？」
ノゾミちゃんたちは、主さまと呼び慕っているようだから、封じを解こうとするのもわかる。
だけど、彼が主を目覚めさせようとする動機はわからない。わからないからすっきりしない。

桂
「目覚めさせて、どうするの？」

千羽
「……それはわかりません」

千羽
「今から約十年前——奴は小さな子供の姿で現れ、人を殺し人を喰らいました。そして鬼切り頭から命を受けた鬼切り役が赴き、切り捨てました」

千羽
「——切り捨てた、はずでした」
千羽さんは未だにその鬼を追いかけている。

千羽
「実のところその鬼切り役は、切り捨てるべき鬼を匿い育てていたのです。こともあろう

に鬼切りの技を授けながら——」

千羽さんは長い長い、息を吐く。

千羽

「結局——鬼は化けの皮を剥がし人を襲いました。そしてその鬼切り役はすでにこの世の人ではなく、彼にどのような思惑があったのかは闇の中です」

千羽

「生き残った鬼がなぜ主の封じを解こうとしているのかは——」

サクヤ

「あの子にはね、主が憑いているんだよ」

桂

「主が……？」

サクヤ

「正確には、主の分霊が憑いているんだよ」

桂

「……分霊って？」

サクヤ

「御霊を分けるで分霊さ。孫悟空が抜いた毛に息を吹きかけて、分身を作ったりするだろう？」

本体から別れた霊の分身。それなら本体にかせられた封じを解こうとするのも当然だった。

サクヤ

「あの子が鬼切部の目に付くような行動をしている時は、主の方が表に出てきている時だろうね」

サクヤ

「普段はあの子のままなんだろう。現に烏月、あんたはあの子に殺されなかった」

千羽

「……………」

千羽

「……そういえば奴は、自分はそれほど長くなさそうだと行っていましたが……」

サクヤ

「文字通りなんだろう。主の分霊に憑かれてから十年、何度か暴走したとはいえ、ずっと

抑えてきたっていうのは並大抵のことじゃないよ」

サクヤ

「そろそろ限界だと悟ったんだろうね。だからあの子は、経観塚にやってきた」

桂

「主の分霊が、自分の本体を助けるために……とかじゃなくて？」

サクヤ

「推測だけどね、あの子が何のために鬼切りの技を覚えたのかを考えれば——」

千羽

「鬼を切るため」

サクヤ

「そうさ。あの子のご神木に封じられている、主そのものを切りに来たんだろうね」

千羽

「いくら何でもそれは——」

千羽

「千羽妙見流の秘伝を会得しているとはいえ、あの役行者と観月の民の長たちが手を結んでなお、封じるより他なかった鬼神を切れるはずが——」

サクヤ

「ないだろうね」

サクヤ

「あの当時に比べれば、千を越える夏の積み重ねが、奴の《力》を削いでいるはずだけど——」

サクヤ

「それでも、分霊なんかとは比べ物にならないぐらいの《力》を持っているんだよ。奴は」

千羽

「その分霊すら抑えられないようでは……」

サクヤ

「おそらく封じが解けた瞬間、あの子は——」

サクヤ

「あの子は、主に乗っ取られる」

桂

「……………」

サクヤ

「……………」

千羽

「……………」

重苦しい沈黙。

あの男の子——わたしと同じ名前で、ケイクンだったっか。

彼がどんなに抗っても、彼がしていることは主を解放することにつながってしまう——

封じられているとはいえ、相手は神なのだ。

サクヤ

「それで今日は、オハシラサマのところに行って話し合ってきたんだよ」

夷を以て夷を制し、神を以て神を制す。

だけどオハシラサマは——わたしはその正体が神様ではなく、封じの木を支える人柱なのだわかっているのだけれど——

わたしの中で何かが引っ掛かり、それが赤い痛みの源となる。

だけど今はそんなことを気にしていただけるほど余裕がある状況じゃないことはわかっている。

完全に隠せたとは思えないのに、サクヤさんはわたしの痛みに気付かなかった。

サクヤ

「たとえあの子の命を奪うことになっても、あたしらは封じを守らなくちゃいけない——
ってね」

大切な人が存在の形を変えてまで封じた主——

それが復活しようとしている今、そんな余裕あるはずがない。

サクヤ

「さて——おそらく、明日の朝日に月が消されるまでが勝負どころだね」

サクヤさんは立ち上がって、コキコキ首を鳴らしながら庭先へつながる障子を開く。

サクヤ

「ちょうど今夜が満月だ——」

真円を描く月が、皓々と照り輝いている。

その月は昨夜見上げた月よりも青く、冷たく、大きく思えた。

サクヤさんは観月の民だけれど、その加護を得られないそうなので、その月の大きさが

不吉なものに思えてしかたがない。

サクヤ

「それじゃあ、行ってくるかね」

桂

「行くって……どこに行くの？」

サクヤ

「オハシラサマのご神木だよ」

そのご神木に封印されているのは——

サクヤ

「鬼が出るか蛇が出るか、あの子にしても奴にしても、結局狙いはそこだからね」

サクヤさんは主の分霊と——場合によっては主そのものと戦うために、そこに行こうとしている。

桂

「待って、サクヤさん」

サクヤ

「……まさかあんた、連れてけなんて言うんじゃないだろうね？」

桂

「ううん、そんなことは言わないから」

ほんの少し隠し事。

だけど嘘は言っていない。

連れて行ってもらうのではなく、わたしが自分の脚で、自分の意志でそこに行くのだから——

桂

「だけどその子、強いんだよね？ 主の分霊が出てきちゃった場合はもっと……」

サクヤ

「……そうだね。もしかすると、あの小生意気な小鬼が合流してる可能性があるから——」

ノゾミ・ミカゲ

「うふふふふふふ——」

サクヤ

「あー、面倒なんてものじゃないね、それは」

自分で言いつつ嫌になったのか、げんなりした顔をして頭をかいた。

サクヤ

「まあ、こっちもオハシラサマの助けを借りるから、最悪でも三対二ってところか」

千羽

「いえ、頭数なら互角です」

黄金の鞘の太刀を手に、千羽さんも立ち上がる。

サクヤ

「烏月、あんたも来るのかい？」

千羽

「人に仇なす鬼を切るのが、我ら鬼切部の使命ですから」

サクヤ

「それで桂、あたしに何の用だって？」

桂

「うん……」

言いたいことを言うために、深呼吸してサクヤさんを見つめる。

桂

「わたしは千羽さんみたいに戦えないけど、サクヤさんの力になりたいから」

桂

「だから、わたしの血を飲んで」

そうすれば、わたしはサクヤさんの《力》になることができる。

わたしの身体の一部は、サクヤさんと一緒に戦うことができる。

わたしからそういう話を持ち出すのが意外だったのか、ぽかんと目を円くするサクヤさん。

けれど、それもわずかな間で、すぐに犬歯を剥き出しにして人の悪い笑顔を浮かべる。

サクヤ

「おいおい、この堅物で恐ろしい鬼切り役の前で、あんたの血を飲めってかい？」

桂

「でも、合意の上のことだから……」

そう言いつつも、わたしもついつい千羽さんの顔をうかがってしまう。

合計四つの瞳に映った千羽さんは、ひとつ大きなため息を吐いて背中を向けた。

千羽

「……サクヤさん、先に行きます」

千羽

「望月の夜の観月の脚なら、楽に追いつくはずですから」

サクヤ

「知らないのかい。あたしは半端者だから、四本脚にはなれないんだよ」

千羽

「では、せいぜい苦勞して追いついてください」

一礼の後、一度も振り返らずに出て行った。

真っ直ぐに庭を横切り、迷いのない足取りで鎮守の森へと入っていく。

月光の届かない森の闇へ消えていく白い背中が、たとえサクヤさんが現れなくても戦うという決意に満ちていた。

己に課せられた使命を果たすために、負けたばかりの相手に立ち向かって行くその背中が、手にした太刀に相応しい侍のものだった。

だけど、それがサクヤさんには気に入らないみたいで。

サクヤ

「ちっ、あんまり離されると追いつくのに苦勞するね」

心配しているとか、頼りにしてほしいとか、そう素直に言えないサクヤさんが何だかおかしくて、ついつい笑ってしまう。

桂

「だけどお腹が減っては戦争できないっていうし、ちゃんと飲まなきゃ《力》がでないよ」

サクヤ

「あのね、桂。どっかのシリアル食品のCMじゃないんだからさ」

桂

「あはは、だけどわたしの血って栄養ドリンクみたいなものだし」

サクヤ

「まったく、あんたもたいがいムードのない子だねえ……」

がっくりと力を抜いたサクヤさんが、わたしの肩を抱き寄せる。

サクヤ

「桂……」

桂

「サクヤさん……」

本当にいいのかと問う呼びかけに、同じように呼び返して頷くと、サクヤさんの顔がゆっくりと近づいた。

わたしはキスするみたいに目を閉じて、サクヤさんを受け入れる。

首筋に犬歯が突き立った。

薄い皮膚を裂いて、命の水を掘り当てる。

桂

「いたっ……」

しがみついていたサクヤさんの肩が、びくっと強張り彫像のように動かなくなる。

ああ、そういえばこうやって傷口のない状態から血を吸ってもらうのは、崖から落ちたときを除けば初めてのことだ。

あのときはお互い絶体絶命で無我夢中だったけれど——

桂

「サクヤさん……？」

普段は乱暴だったり強引だったりするのに、何だか今は遠慮がち。

肌の中に埋まっていた歯が、ゆっくりと離れていく。

桂

「サクヤさん？ どうしたの？」

サクヤ

「そりゃあ……」

気まずそうに目を泳がせるサクヤさんがなんだか可愛くて、わたしは頭を抱きかかえて、離れた唇を傷痕に引き寄せた。

桂

「だから、平気。大丈夫だって」

サクヤ

「ああ……」

だいたい痛い思いをした後なんだから、今更遠慮されたりすると何だか損した気分になる。

噛み痕から滲み出した血が、ぷっくりと膨らんでいくのが、何となく感覚でわかる。

それをおっかなびっくりと、サクヤさんの舌が舐めとった。

桂

「ひゃっ……」

サクヤ

「んっ……」

桂

「あ……」

桂

「もう……いいの？」

サクヤ

「戦闘前だし、腹八分目さ」

早くもわたしの血の効果が出てきたのか、すっかり戦闘準備完了といった体で、サクヤさんがお腹をさする。

サクヤ

「それに血が足りなくて歩けない——とかいう状態になられたら困るからね」

桂

「え？」

サクヤ

「それじゃあ桂、行くよ」

桂

「え？ わたしも連れて行ってくれるの？」

勝手に追いかけていくつもりだったけれど、こんなことを言われるとは思わなかった。

サクヤ

「ノゾミの奴がこっちに来るかもしれないだろう。安全なところがないんなら、やっぱり目の届くところが安心できる」

サクヤ

「自分のいないところで何かが起こって、それに間に合わないっていうのは、もう御免だからね」

それは大事なことだとわかっているけれど、わたしは——

大切な人がいなくなってしまうのは嫌だから、だからわたしは——

桂

「大変なことになるのはわかるよ？ でも、サクヤさんがすることないじゃない！」

そんなことを叫んでいた。

桂

「ねえ、千羽さん。鬼切部って千羽さんの他にもたくさんいるんでしょ？ その人たちに助けてもらったりはできないの？」

自分でも嫌になるぐらい自分勝手なことを言う。

サクヤさんの代わりに、他の人に面倒を押し付けようとする。

千羽

「現在、鬼切部は混乱しています。各党を束ね、それぞれに命を下す、鬼切り頭という役職を継承している家があるのですが——」

千羽

「その家の当主が約一ヶ月前に亡くなりました。唯一の後継ぎであった当主の孫は、目下のところ行方知れず」

つとめて事務的にわたしに継げて、千羽さんは小さくかぶりを振った。

千羽

「現在は鬼切り頭不在の状態ですから、各党の間で協力体制をとるのは難しいでしょう」

千羽

「また、千羽党からでしたら鬼切りを召集することもできますが、実力的には私よりも下のものばかりですし、今夜中というのは不可能です」

桂

「でもっ!!」

サクヤ

「桂、およしよ」

桂

「だって……」

サクヤ

「あんた、あたしの夢を見たんならわかってるはずだよ。奴のせいで、姫さまは封じの柱になんてならなくちゃいけなくなったんだ」

そんなことはわかっている。

サクヤ

「そしてあたしは観月の民だから、封じの柱を守る義理やら義務やら使命やらがあるんだよ」

それだってわかっている。

そして主の恐ろしさもわかっているから、サクヤさんを止めたいと思ったんだ。

でも、同時にサクヤさんの固い想いもわかってしまうから、それ以上何も言えなくなっ

てしまう。

桂

「……………」

黙りこくるわたしの肩に手を置いて、小さい子に言い聞かせるみたいに顔を覗き込んで言う。

サクヤ

「それにあんたは覚えてないだろうけど、あんたの家族だって、奴の犠牲になってるんだよ」

桂

「……えっ？」

馴染みになった赤い痛み。

その赤の中に《視》えてくる情景。

それすらも覆い尽くす赤に、心臓がばくばくとうるさく暴れる。
その音にまぎれて、知っているはずの男の人の声が――

「桂……」

絶え絶えにわたしを呼ぶのが《聴》こえた。

桂

「……まさか、お父さんが？」

サクヤ

「ああ……まあ、そういう血筋だからね」

オハシラサマもお父さんも、その身体には贅の血が流れていて――
そして、それはわたしにもいえることで。

サクヤ

「とにかく、これだけの理由を背負ってると、そうそう引けたものじゃないのさ」

桂

「……うん」

だから心の底から納得できていなくても、頷くしかなかった。
こくりと頷き伏せた頭に、女性にしては大きなサクヤさんのてのひらが乗った。

サクヤ

「それじゃあ桂、行くよ」

桂

「——え？」

何を言っているのか、一瞬理解できなかった。

桂

「え？ わたしも連れて行ってくれるの？」

サクヤ

「ノゾミの奴がこっちに来るかもしれないだろう。安全なところがないのなら、やっぱり目の届くところが安心できる」

くしゃくしゃ頭を撫でる仕草はいつもの気さくなサクヤさんで、けれども表情だけが違って——

サクヤ

「自分のいないところで何かが起こって、それに間に合わないっていうのは、もう御免だからね」

だからわたしも腹を据えることにした。

桂

「ん……」

覗き込む人の気配を感じて薄目を開ける。

葛

「あ、おねーさん、気が付きました？」

わたしが意識を取り戻し、何だかんだと状況を整理している間に、時刻は夜も夜中の丑三つ刻を回ってしまった。

草木も眠っているだろう時間にもかかわらず、羽様のお屋敷には明かりが点っている。

ちゃぶだいを囲み角を突き合わせているのは、わたしと葛ちゃんと千羽さんとサクヤさんの四人。

議題はわたしに流れているらしい特別な血と、それを狙う人に在らざる存在——鬼について。

葛ちゃんの今後の身の振り方に関しては——

ほんの数十分間で置かれた立場が激変したので、当面のところ棚上げしておくことになった。

そのせいか、わたしが鬼と無縁ではいられない体質だと発覚したせいか、葛ちゃんはどう千羽さんから逃げようとしていない。

葛

「双子……双子……ええと、双子ですか……」

双子という言葉が引っ掛かるのか、つぶやきながらノゾミちゃんとミカゲちゃんのことを考えている。彼女たちは尾花ちゃんの仇だ。

サクヤ

「双子かどうかは知らないけど、ノゾミは主のしもべだよ」

葛

「ああ——思い出しました」

葛

「確かわたしのご先祖様が、ここ経観塚で起きた神隠し事件を解決しているんですよ」

桂

「……神隠し？」

そういえばこのお屋敷のことを訊いたときに、そういう噂も耳にしたけど——
火のないところに煙は立たないというか、実際あったことなんだ。

葛

「その神隠しを起こした犯人は、血を吸う双子の鬼でして——ノゾミとミカゲという、ハシラに封じられた主のしもべなんです」

血を吸う双子の鬼——

葛

「彼女たちが、主を封じたハシラの封じを解こうとしたことが事件の発端なんだそうです」

あの子たちが村の人を操って、オハシラサマのご神木を切り倒そうとしたのがその真相
なのだそう。

葛

「——つながりましたね。桂おね一さんが最初に襲われた赤い蛇と、昨夜の双子の鬼と、
盗まれた鏡とが」

桂

「鏡って、郷土資料館から盗まれたやつ？」

葛

「頭の片隅に何かひっかかってたんですけど、何で今のを思い出さなかったんでしょー
か」

葛ちゃん、大いに長息。

桂

「それで、鏡がどうつながってくるの？ 鏡はカガメで蛇の目なんだよね？」

葛

「まあ、そーゆー基準で依代を選んだのかもしれませんがね。あの鏡が双子の鬼の本体で——」

葛

「わたしのご先祖さまはその鏡を封印して、村の長者に事後を託したそーなんです」

桂

「それが郷土資料館にあったってことは、寄付でもしたのかな」

そしてその鏡が盗まれた。

なるほど、それなら話がつながってくる。盗んだ人がその封印を間違えて解いてしまったりなんかしたら――

封印を解いてしまったりしたら――

――あれ？

何かが引っ掛かるような気がするんだけど、それが何だかわからない。何だろう。知恵熱の親戚だろうか、痛みの気配が近づいてくるのを感じる。

駄目だ考えない方がいい。

それでも赤い痛みの方へと向かっていくわたしの意識を――

サクヤ

「……ちっ、そういうことかい」

サクヤさんの声がこちら側に引き戻した。

桂

「そういうって？」

サクヤ

「何でもないよ。過ぎたことだし話を続けな」

葛

「続けると言っても、大体こんなところですけど。こーなってきましたと、烏月さんの追っている鬼も関係してきそーな勢いですね」

桂

「そういえば千羽さん、郷土資料館に来てたね」

千羽

「明らかに鬼の仕業であろう事件がありましたからね。その線を辿っているうちに、あそこへたどり着いたというわけです」

千羽

「わたしの追っているこの鬼も――」

千羽さんは制服の懐から一枚の写真を取り出し、ちゃぶ台の上に置いた。
映っているのは少し中性的な感じがする男の子で、角も牙もなければ尻尾も見当たらず、
一見したところ鬼に見える要素はどこにもなし。
着物姿のノゾミちゃんたちと違って、服装だってすごく普通だった。

千羽

「盗難事件の起きる前日、郷土資料館に入館しているそうです」

桂

「じゃあ、この男の子——」

桂

「えっと、鬼が、鏡を盗んだ犯人なんですか？」

千羽

「いえ、犯人はその翌日に変死体として発見された人物でした。とはいえ、何かしら関わりがあるとみていいでしょう」

葛

「とりあえずこれだけの出来事が重なっているということは、何らかの原因によって封じの《力》が弱まっているんでしょうね」

主を封じる《力》——オハシラサマの《力》が弱まっている——

尾花ちゃんが赤い蛇を退治した直後に消えてしまってから、オハシラサマはわたしの前に姿を現さない。

それはもう主を封じるのが精一杯で、わたしを助けにくる余裕がないということなのではないだろうか。

桂

「……………」

葛

「さて……どうしましょーか、おねーさん」

桂

「え？ わたし？」

葛

「贅の血がらみのことですから、選択権はおねーさんにあると思うのですよ」

あ、えーと、それなら……

桂

「その鏡——良月？ を探すのが先決じゃないかな。実際に被害が出てるんだし」

被害者には含む、わたし。

それにノゾミちゃんたちを何とかしない限り、オハシラサマの封じを強化したところで、底の抜けた甕（かめ）に水を注ぐようなものだ。

葛

「わかりました——といっても、どうやって探しましょうかね。ふむ……」

簡単に見つかるようなものなら、とっくに警察が見つけて郷土資料館に返却されているはず。

あれ？ 殺人事件の証拠物件としてしばらく保管されることになるのかな？

もしそうだとすると、下手に手を出せない安全な場所に保管されていることになる。

鬼が憑いている鏡だなんて言っても信じてくれないだろうし、呪いは別に法律違反じゃないらしいから——

桂

「——え？ 何？」

手をひっぱられて葛ちゃんの方に向き直る。

あ、そうか。葛ちゃんならすごい横車を押せるんだっけ。

葛

「桂おねーさん、ちょっとでいいんで血をもらえます？」

桂

「あ、うん、ちょっと待って——」

——って、あれ？

桂

「ええ！？ また！？」

別に血をあげることで体が嫌なわけじゃないんだけど、ちょっと一服みたいな感覚で飲まれたりしたら身が持たない。

葛

「あ、わたしが飲むんじゃないですよ。おねーさんの血を使って探すんです」

少し身を引いて首筋を押さえると、葛ちゃんはぱたぱたと手を振って否定した。

桂

「へ？」

葛

「あの鏡の鬼は、桂おねーさんの血を飲みましたからね。ですからおねーさんの血同士を引き合わせることで探すんですよ」

桂

「そんなことできるの？」

葛

「今のわたしは普通の人ではないですから」

当たり前のようにそう言うと、ぴょっこりと狐の耳と尻尾が顔を出す。

桂

「う、うん……」

引かれるままに指を出すと噛みつかれた。

水を張ったお盆の上に葉っぱを一枚浮かべて、その片側にほんの一滴、わたしの血の珠を落とした。

桂

「何だか方位磁石みたいだね」

葛

「原理は似たよーなものですよ」

葛

「では、参ります——」

葛ちゃんは早口の小声で、葉っぱに向かって何事かをささやいている。

桂

「あれ、何やってるの？」

千羽

「あの葉に、言霊を吹き込んでいるんです」

サクヤ

「おっ、動いたよ」

同心円上の波紋を幾重にも広げながら、水盆の真ん中でのくると回転し始める葉っぱ。

葛

「——出ました」

指で押さえたりしたわけではないのに、ぴたりと葉っぱは回転運動を止めていた。

サクヤ

「じゃあ、あとはこの葉っぱの指す通りに行けばいいんだね？」

葛

「あ、ひっくり返さないで下さいねー」

サクヤ

「わかってるよ、それぐらい」

サクヤさん、お盆を持って歩く。

葉っぱの指し示す方に向かって軌道修正。

サクヤさん、お盆を持って歩く。

葉っぱの指し示す方に向かって軌道修正——

桂

「サクヤさん、何でぐるぐる回ってるの？」

サクヤ

「いや、桂が邪魔で真っ直ぐ進めないから、迂回してるだけなんだけどね。そうしたら指示まで変わりやがるんだよ」

千羽

「サクヤさん、あなたという人は……」

サクヤ

「確かに桂の血をにひきつけられてその方向を向くものなら、一番の鉱脈はここだろうさ」
何て言いながら、わたしをばしばし叩く。
ううっ、痛いってば。

サクヤ

「だけど今回ののは目的が目的だから、本人は普通外すだろう」

葛

「たはは、ど忘れしていました。桂おねーさん本人と、わたしを除外しない限り、地の果てまでもわたしたちを追ってきますねー」
どっとはらい。

葛

「さて、今度は大丈夫です。少なくともわたしやおねーさんには反応してませんよ」

千羽

「では葛様、鬼を切りに参りましょうか」

桂

「やっぱり、封じを強化するのが先決だと思う」

オハシラサマの《力》が弱っているのが元凶ならば、他の事件を解決したところで、後から後から事件が起こることになる。

桂

「だけど、そんなに簡単に封じを強化することができるの？」

葛

「一応、簡単そうなのから、難しそうなものまで複数の案がありますけど」

桂

「簡単そうなのって？」

葛

「オハシラサマを呼び出して、桂おねーさんの血を飲んでもらいます」

桂

「ああ、なるほど……」

オハシラサマが強くなれば、封じの《力》も強くなる。

効果のほどは定かじゃないけど、元手はわたしの身体ひとつで、簡単と言えば簡単だ。

桂

「じゃあ、難しそうなのは？」

葛

「わたしが柱の封じを張りなおします」

桂

「そんなことできるの？」

葛

「何か尾花の《力》で、最初に封じを施した役行者小角と近いことができるらしーんですよ」

サクヤ

「まあ、できるんじゃないかねえ……」

桂

「わ、サクヤさん根拠あつての発言？」

サクヤ

「あー、いや、別に」

葛

「まあ、とりあえずオハシラサマのところに行ってみましょーか」

葛

「本人に『余計なことするな』とか怒られてしまう可能性も、無きにしも非ずですし」

桂

「そうだね」

サクヤ

「……烏月、見えるかい」

わたしたちは今、山の藪の中にいる。

少し離れてここより幾分か開けたところがあり、そこには月の光が射し込んでいる。
そのおかげで、そこに人影があることがわたしにも見て取れた。

人数ひとり。体型からして多分男の人。少なくとも、わたしの血を飲んだノゾミちゃんではなさそうだった。

桂

「——あ」

千羽

「鏡——おそらくは良月を持った傀儡が一体。あの鬼たちの姿はありませんね」

サクヤ

「水盆の葉っぱは、奴が持っている鏡を指してるんだろ？」

千羽

「つまりはあの中ということですね」

葛

「さーて、ここで作戦会議の時間です。ぶっちゃけどうすればいいでしょーか」

桂

「えっと……鏡を何とかする？」

葛

「その何とかを話し合うのが、今回の議題なわけなんです」

千羽

「とにかく、元のように封じるにしろ、二度と復活できないように破壊するにしろ、あの良月を確保する必要があるということです」

千羽

「そして向こうとしては抵抗してくるでしょうから、どの道戦うことになるでしょうね」
結局、実力行使しかないわけだ。

そりゃあ向こうだって問答無用で襲ってくるわけだし、警察に駆け込んだところで信じ
てくれないだろうから――

あ、鬼切り頭としての葛ちゃんなら警察を動かすこともできるんだっけ。

でも、それでもしないってことは今ここにいる人で片付けた方がいいと判断したわけだ。

桂

「……だけど、勝てそう？」

サクヤ

「向こうがオフェンスで奇襲ばかりやられたら面倒な相手だけど、今この状況なら楽勝だ
ね」

サクヤ

「あいつらは鏡の鬼だけに、最大の技は暗示だろう。それも目眩まし系統の」

千羽

「反面、直接的な戦闘力はほとんどありませんね。暗示で傀儡をこしらえることはできる
ようですが、傀儡の能力も優秀であるとはいえません」

千羽

「何せ本人の肉体的な能力のみを継承して、技術的なものはそっくり捨てていますから」

桂

「でも、やっぱり暗示だって怖いよ？」

縛った人の前で斧を研ぎながら「打ち首にする」と演出たっぷりの宣言をして、目隠し
をした後に水で濡らした布で叩いたら死んでしまった――

そんなイギリスであった実話のことを、テレビ番組で見た覚えがある。思い込みだけで
人は傷ついたり死んだりするのだ。

葛

「かかったら怖いでしょうね。ですが――」

サクヤ

「あたしはたぶん平気だよ」

千羽

「邪眼の類に対する抵抗はある方です」

葛

「たぶんわたしも効かないよーな気がします。なにせ神様憑きですからねー」

サクヤ

「じゃあ、突っ込んでいっても大丈夫だと思う奴、挙手して」
ばっ——三本。私以外の手が挙がった。

サクヤ

「とりあえず、操られているだけの一般人を傷つけるのは世間体がよくないから、あたしが素手でとっつかまえるよ。一般人同士ね」

千羽

「……………」

えっと、つつこみたくなる気持ちはわからないでもないんだけど。

鬼切りである千羽さん、その偉い人でなおかつ神様まで憑いちゃっている葛ちゃんは言うに及ばず、わたしだって特別な血を引いているわけで。

それに比べたらサクヤさんだって、一応は一般人の範疇なのかなって——千羽さんもそう思い当たったのか、仕方なさげにため息をひとつ。

千羽

「……では、私と葛様は、奴らが鏡から出てきた場合の対処にあたるということで」

葛

「それでは、突撃といきますかー」

最初に赤い蛇が出てきたときや、昨夜（というか感覚的にはまだ今夜？）の経験からして苦戦になるかと思ったのだけれど——

最初にサクヤさんが言った通り、楽勝ともいえる内容だった。

最初に鏡を奪い取ったサクヤさんは、それを円盤投げのようにして千羽さんにパス。
それを受け取った千羽さんが葛ちゃんにわたすと——

葛

「封！」

サクヤさんが取り押さえるまでもなく操られていた人はぼったりと倒れこんでしまった。

何でも葛ちゃんが鏡と外のつながりを封じたので、それによって傀儡の操り糸も切れてしまったとのこと。

奇襲を受けた双子の鬼は、姿を現す間もなく囚われの身となったのだ。

葛

「さて、この鏡の処遇ですけど……」

サクヤ

「そうだねえ、あたしは後腐れないように割っちゃった方がいいと思うけど」

桂

「うん……」

サクヤさんの言う通り、割ってしまうのが一番の解決方法なんだと思う。

桂

「やっぱり犠牲者が出てるんだし……」

葛

「そうですね。一度封印されていて、それでも懲りずに桂おね一さんを襲ったりしてるわけですから」

また封印したりしたとしても、その期間分の恨みつらみを募らせて、結局のところ人を襲ったりするのだろう。

そんなことにならないように、厳重に永久に封印されるのだとしたら——それは死よりも辛いかもしれない。

葛

「どなたか異存はありますか？」

誰もが声を発することなく、頷いた。

葛

「それでは烏月さん、お願いします」

千羽

「承知いたしました」

頭である葛ちゃんに頼まれた千羽さんは、恭しく頭を下げながら太刀の柄に手を掛けた。

烏月

「では」

古代の鏡よりもなお、眩しく月を映す刃が高々と振り上げられ——

ぶつかる二つの鉄の塊が、鈴に似た響きを立てたような気がした。

桂

「でも——」

いくら後腐れない簡単な方法だからって。

桂

「さすがに割っちゃうのは可哀相だと思うんだ」

千羽

「ですが桂さん。この鬼はすでに犠牲者を出している」

桂

「ううっ……」

そう言われてしまっは反論のしようがない。尾花ちゃんだってノゾミちゃんの手であんな風にされてしまったわけだし。

だけど、それでも――

桂

「それじゃあ、葛ちゃんのご先祖様がしたような、封印ですませるっていうのは駄目かな」

葛

「甘いです！ 甘すぎですよ、桂おねーさん」

桂

「そ、そうかな？」

葛

「例えば自分の家に不法侵入者がいたとして、その犯罪者を許した上で、ついには同居させてしまうほど甘いです」

桂

「でもその家は使ってない家だったからだし、それにちゃんと相手は見て選ぶよ」
それに今わたしが生きていられるのも、その不法侵入者を受け入れたからだ。
だから情けは人の為ならず――なんてありがちな一般論を振りかざそうとしたそのとき。

葛

「やれやれですねー」

葛ちゃんが肩をすくめてため息を吐いた。

葛

「まあ、その無用心さが桂おねーさんのいいところかもしれないんですけどね」

葛

「とりあえず、悪い虫がつかないかどうか心配です。一人暮らしの財産持ちになりますからねー」

桂

「ううっ……でも、それをいったら葛ちゃんなんかはすごいじゃない」

葛

「わたしは十分用心深いですから」

だから蠱毒の壺の最後のひとりになれたと受け流し、葛ちゃんは古い鏡をじっと見つめた。

尾花ちゃんの生命を奪った鬼への憎しみさえ浮かべた怖い目を落とし――

葛

「そーですね。鬼切部の方で管理することにすれば、このたびのようなことにはならないと思いますし」

次に持ち上げたときには、いつもの明るい瞳をしていた。

葛

「では、封印を施しましょーか」

ああ――

わたしはまた失敗してしまったんだろうか。葛ちゃんに自分を殺させてしまったんだろうか。

だけど――

だけどわたしは間違っていないと信じたい。

非情に徹してすべてを切り捨ててしまうことを選んでしまえば、家出する前の葛ちゃんに戻ってしまうかもしれないから。

わたしの知っている自然で明るい葛ちゃんも、一緒に切り捨てられてしまうだなんて思ったから。

葛ちゃんが鬼切り頭になるのなら、情けを掛ける余地も余裕もない状況に出会うこともあるだろうけれど――

葛

「どーかしましたか、桂おねーさん」

桂

「ううん、何でもない」

わたしは間違っていなかったと信じたい。

葛ちゃんの為にも、この鏡の中にいる双子の鬼の為にも――

こうして鏡は封印され、誤って封印が解かれることのないように鬼切部で管理されることになった。

葛

「……さて、何かあっさりでしたけど、事件は解決しましたね」

千羽

「いえ、葛様。私の追っている鬼の方が行方を眩ませたまます」

葛

「いえ、終わってますよね烏月さん。そーじゃありませんか？」

千羽

「……ええ。そうでした」

葛

「では、烏月さんは、今まで通りの役目に戻って頂いて結構です」

千羽

「了解しました」

桂

「……？」

そう言えば千羽さんの追っている写真の男の子も鬼で、その鬼がこの近辺にいるかもしれないわけで。

なのに終わっただなんて言うのは、わたしを今以上に鬼と関わらせないために、気を使ってくれてのことか。

葛

「さて、次にサクヤさんと桂おねーさんの処遇に関してなんですけど」

桂

「……え？」

葛

「一応、鬼切部というものは表向きには存在しないものなのです。わかりやすく言うと秘密組織ですね」

桂

「秘密……」

それも刀を振り回して、表向きは人のままの鬼に成った人（ややこしい）を切ったりする、法的にはものすごく非合法の部類だったりする手合い。

葛

「そして、組織の秘密を知ったからには」

桂

「……………」

大体こういうときは、死んでもらうか仲間にするかの二者択一がお約束。

葛

「ましてやわたしは、将来の鬼切り頭なんていう悪の総帥も真っ青のVIPですからねー」

だから仕方がないことなんですと首を振って、わたしの方へにじり寄ってくる葛ちゃん。

葛

「わたしはこんなですから、意外とそのあたりは大雑把なんですけど、うちには厳しい人がいますからね」

ここで見逃したとしても後で口封じに現れる人がいるだろうことを匂わせて、わたしの退路を断つ葛ちゃん。

「だけど、あんなに一生懸命にわたしを守ろうとしてくれたのに——」

葛

「とりあえず——」

葛

「記憶だけでも消させてもらいますね——」

葛ちゃんのでのひらが、わたしに向かって突き出された。

葛

「桂おねーさんは自分の町に帰ってください。経験者から言わせてもらえば、骨肉の争いほど嫌なものはありませんから」

桂

「えっ！？ それはどういう——」

獣相を帯びた瞳が赤く輝き、わたしの動きを途中で封じた。

赤——

夕焼けの赤——

その残照は紫がかった光を残して消えていき、それが事切れると夜闇だけがそこにある。

夜——

眠りの時間——

心象時刻の変化とともに、わたしの心は無防備に緩んだ状態になる。まるでお布団に包まれて夢にたゆたうひとときのように。

そして尾花ちゃんの——言霊の神の《力》を発現させた葛ちゃんの声が——

葛

「さようなら」

わたしの頭に染み透った。

その響きが中心にあるものを揺さぶり、あるものを剥がして落とし、またあるものを作り変えていく。

すべては夢に——目覚めると忘れてしまう、そんな儂い記憶に——

木。
たくさんの木。
高く伸びる木々それぞれが、好き放題に枝を伸ばし、空のほとんどを覆い隠してしまっている。

深い山の中——幹の太い古木が立ち並び、たけのある草が生い茂る狭い道を、わたしは手を引かれて歩いている。

わずかな既視感——

だけれどわたしは走るほどには急いでおらず、手を引いているのは葛ちゃん。
千羽さんが先に立って道を拓いてくれているので山道はそれほど困難ではなく、サクヤさんが後ろにいるので暗闇もそれほど恐ろしくない。

足元の草を踏みしめて、先へ先へ。

ざっ、ざっ、ざっ、ざっ。

ざあ——

急に視界が開けた。

おそらく山の中腹あたり。

そこには見上げるほどの大きな——

円く大きな月に向かって伸びている、樹齢千年を数えるご神木が根を下ろしていた。

他の木はこの木に遠慮しているのか、あたりは少し開けている。

ざあ——

通り過ぎる風に木に咲く花がゆらり揺れ、白い花びらがはらはらと——

月明かりにひらめくそれは、青白い光を放つ蝶の姿にも見て取れて——

その蝶をまわりつかせて、オハシラサマが木の根元に立っていて——

オハシラサマ

「桂ちゃん……」

わたしに向かって穏やかな微笑みを浮かべた。

何だろう——

胸が苦しくなるこの感覚は、この甘やかでどこか懐かしい花の香りが立ち込めているせいだろうか。

この木は——

あの人は——

わたしのことを良く知っている、この木に依ったあの神様は——

葛

「桂おねーさん？」
手を握る温もりとわたしの名前を呼ぶ声が、思考の渦に飲まれそうになっていたわたしを引き上げた。

桂

「あ——」
これは——いったい——

答えを求めてオハシラサマに近づくと、彼女は長いまつげで瞳を隠した。

オハシラサマ

「よくお越しくございました」

葛

「ところで、ぶっちゃけ質問なんですけれど——」
恭しく頭を下げたオハシラサマが顔を上げると、間髪いれずに葛ちゃんが切り込んだ。

葛

「あなたは最初に役行者小角に封じのハシラとしてここに祭られたお方ではありませんね」

桂

「へ？」
あなたが犯人だったのですね——なんて切り出す探偵のような口調で、いきなりなことを言う。

口にする機会を逸してしまった胸のもやもやさえ忘れて周りの反応をうかがうと、千羽さんはいつものクールなポーカーフェイス。

表情の読みやすいサクヤさんも少し反応してみせただけで、おろおろしているのはわたしひとり。

そんなわたしを放置して、葛ちゃんほうんうん頷きながらオハシラサマとの話を続ける。

葛

「収まるべきところに収まっていない印象があるんですよ」

オハシラサマ

「そうです——わたしは、ハシラの継ぎ手——」

葛

「ですよね」

葛

「オハシラサマが、あなたのように形を成して姿を現しているということ自体が、とても異例なことなんです」

少なくとも鬼切部に伝わる千年の記録の中には、オハシラサマが人の姿で顕現したことがないのだそう。

神隠しの事件があって、葛ちゃんのご先祖様がこの地を訪れた昔も、夢見に使いの蝶が現れただけなのだという。

つまり今の状態は——

葛

「封じを支える柱がフラフラしていたら、大変なのはわかりますよね？」

葛

「わたしがやろうとしている術は、言霊でもってその歪みを矯正する——いわば存在の変造術のようなものです」

桂

「変造……？」

葛

「例えばですね——」

葛ちゃんは舞い落ちてくる花びらを手に受け止めると、それに言霊を吹き込んだ。

葛

「『虫』——」

するとその花びらは蝶へと変わり、てのひらの上で羽を震わせはじめた。

桂

「それ……オハシラサマの？」

オハシラサマ

「いいえ、わたしの蝶は《力》の見え方を変えているだけなの」

桂

「……？」

そんなことを言われても、わたしにはよくわからないことだった。

するとオハシラサマはてのひらをもちあげて、舞い飛ぶ光の蝶のうち一頭をそこに止まらせた。

オハシラサマ

「はい、桂ちゃん」

桂

「え、あ、うん……」

手渡された光の蝶は、シャボン玉をてのひらで受けたときのような、微かで儂く頼りない感触を伝えてくるだけ。

葛

「桂おねーさん、ちょっとこの蝶に触ってもらえます？」

桂

「あ、うん」

それに比べて葛ちゃんが差し出した蝶は、羽に触った指先に鱗粉が付いてしまうぐらい、ごく当たり前の蝶だった。

桂

「すごく普通なんだけど……」

サクヤ

「その普通っていうのがすごいんだよ」

サクヤ

「あれがもともと花びらだったなんて、どこの誰が信じるんだい？」

桂

「あ……」

葛

「これが変造術です。そこらの石を金に変えたら、錬金術とか言われますね」
もしかしたら変造術って、とんでもない能力なのではないだろうか。

葛

「ですからわたしが、『封じの柱』という言霊を吹き込むことによって、継ぎ手は真のオハシラサマになるという寸法です」

サクヤ

「だけどね、あり方が変わるっていうのは、まったく別のものになるってことなんだ」

水が器に従うように、魂の在り方もまた形に縛られやすいもの。

だからこの人が真のオハシラサマになってしまったら——オハシラサマの在り方が葛ちゃんの話通りなら——

この人はもう二度と。

サクヤ

「なあ、今ならまだ引けるんだよ？」

サクヤ

「葛さえその気になってくれれば、普通の人間に戻ることでだってできるんだよ？」
それはきっと、忠告のフリをした消えないで欲しいという願い。
にもかかわらずその人は。

オハシラサマ

「いえ、それはできません」
髪に頬を打たせながらゆっくりと、はっきり首を横に振った。

オハシラサマ

「主の封じを解いてしまえば、大変なことになってしまいますから——」

そして透明な笑顔をわたしたちに向けた後に。

オハシラサマ

「ですから——」

きっぱりとした強い瞳に葛ちゃんを映して。

オハシラサマ

「葛さま、お願いします」
自ら望んで真のオハシラサマに成ると言った。

一体どんな気持ちでハシラを継いで、どんな想いで人ではないものに成ったのだろう。
そして、今の胸の内は——
見た目はわたしとそう変わらない歳なのに、この人はとても強いと思う。

だけど、そんな彼女の瞳をまっすぐに受け止めることができる葛ちゃんだってすごい。

葛

「わかりました」
即答されたその返事は、無理解からくる軽い気持ちのものなんかじゃなくて。
葛ちゃんは大切なものを守るために、多くのものを切り捨てて——時には自分の気持ちすら抑えないといけないことを知っているから。

葛

「サクヤさん。在り方が変わるときに、別のモノになるのは、慈悲でもあるんですよ」

オハシラサマ

「ふと天の羽衣うち着せたてまつりつれば、翁をいとをしく、かなしと思しつる事も失せぬ——」

葛

「そーゆーことです」

サクヤ

「……………」

それで納得いったのか、もう何を言ったところで覚悟が揺るがないことを知ったのか、サクヤさんは押し黙る。

桂

「でも葛ちゃん。こんなことをしなくても、主を別の安全なものに変えたりは——？」

葛

「桂おねーさんは粘土で人形を作れますか？」

桂

「上手いかどうかはともかく、できるよ」

葛

「では、石ではどーでしょう？」

桂

「最初から人の形に似てる石なら、顔を描いたりして……」

ああ、そうか。

葛

「ピンと来てくださったよーですね。変造術も似たようなものなのですよ」

葛

「変える対象なんかによって、必要になる《力》もかなり変わってくるわけです」

葛

「それですね、その……」

葛ちゃんをご神木に向かって視線を泳がせる。

葛

「今のわたしの《力》では——」

主を封じているほどのモノなんだから、きっとかなりの大物なんだろう。

桂

「うん、わかってるよ」

彼女の覚悟が変わらないのなら、わたしにできるのはそれが無駄にならないように手助けすることだけ。

だから——

わたしは地面に膝をついて、葛ちゃんが血を吸いやすいように身長差を埋めた。

葛

「では桂おねーさん、いただきます」

桂

「うん……どうぞ」

わたしの首に腕を回して、遠慮がちに顔を寄せてくる葛ちゃん。
わたしは顎をくっともたげて、肌の柔らかい場所を葛ちゃんに示した。

葛

「は……」

開いた口から漏れる息が肌を湿らせて、どのあたりに噛みつくのかを事前予告してくる。

葛

「あ……むっ」

桂

「たっ」

肌をちくりと刺す牙に、身を固くして痛みを訴えると、かなり大げさな動きで葛ちゃんが後ろに引き下がった。

葛

「うわわっ、ごめんなさいですっ!？」

ピンと上を向いているはずの狐耳が、しゅんと垂れ下がっているのが何だか可愛くて、痛みを忘れて笑ってしまう。

桂

「あはは、別にいいんだよ。ちょっとぐらい痛いのは、最初からわかってたことだもん」

離れた葛ちゃんに抱きついて、頭を抱え込んで唇を首筋に導きながら言う。

葛

「えーと……」

桂

「だけど葛ちゃん」

葛

「ななっ、何でしょーか!？」

桂

「葛ちゃんのその格好って、犬歯尖って牙になってて、血を吸うのに向いてるよね」

葛

「たはは、これは単に尾花譲りのデフォルトでして、別にそーゆー他意は——うひゃうっ」

今度はさっきのわたしのように、葛ちゃんの身体がびくっと跳ねて強張った。

桂

「あ……」

葛

「おおおっ、おねーさんっ！？ 何尻尾触ってるですかーっ！？」

桂

「いやね、ふさふさで手触り良さそうだなって」

桂

「……嫌だった？」

そういえば尾花ちゃんも、頭や背中では撫でさせてくれたりするけれど、尻尾は嫌がって触らせてくれなかったっけ。

桂

「ねえ、嫌かな？」

葛

「……別にその、嫌とかそーゆーのでは……」

さわりさわりと撫でまわすと、むずかるように身じろぎするのに、それでも嫌と言わないのが健気で可愛くて——

何だかちょっぴり調子に乗りたくなってしまう。

桂

「じゃあ吸ってる間、触らせてもらうね」

葛

「えっ！？」

桂

「ほらほら、我慢できるんなら、たくさん吸ってもいいんだよー」

うぞぞと尻尾の先からお尻に向かって逆撫ですると、ぶるりぶるりと身体を震わせ、うっすら涙の浮かんだ目で見上げてくる。

葛

「あのですね、オハシラサマをちゃんとするには、かなりの《力》が必要なんですけど……」

桂

「それじゃあ、葛ちゃんも頑張ろうね」

葛

「ううっ、ひどい目にあいました……」

サクヤ

「災難だったねえ」

葛

「災難でしたー」

人の血をあんなに吸っておきながら、災難っていうのはちょっとひどいんじゃないかな。
でもまあ、狐の尻尾を一生分さわりまくったと思えば安いものなのかもしれない。

葛

「では——始めましょうか」

オハシラサマ

「よろしくお願いします」

オハシラサマ

「ところで葛さま、お願いしたいことがあるのですが」

葛

「何でしょーか？」

オハシラサマ

「贅の血を封じる——あるいは変造して普通のものにする——そういうことは可能でしょうか」

葛

「多分できると思いますよ」

葛

「……桂おねーさんのことですね？」

オハシラサマ

「はい」

ああ、それは盲点だった。

わたしが鬼に狙われたのは、贅の血なんかを引いてるからで、それがなければ指名されるようなことは今後なくなるわけだ。

葛

「おねーさんのことは任されました」

葛

「ああ、そーです。心残りがあるとそれが思わぬ抵抗になってしまったりもしますから、他にもあるなら言うだけ言って下さい」

オハシラサマ

「では——主の分霊に憑かれて鬼になってしまった子がいるんですけど——」

千羽

「……………」

オハシラサマ

「その子のことも、お願いしてよろしいでしょうか？」

葛

「そーですね。分霊が外にいては、折角強化した封じを破られてしまったりするかもですから、請け負いましょー」

葛

「烏月さん、千羽党も鬼切り役なら、鬼だけ切ることぐらいできますよね？」

千羽

「……勤めます」

葛ちゃん、意外と人使い荒いみたいで千羽さんも大変だ。

葛

「だそーです。他には？」

オハシラサマ

「いいえ。十分です」

葛

「では——」

葛ちゃんが拍手を打った。

破裂するようなその音は、そこにあった様々な音を吹き飛ばし、暑さに緩んでいた空気をびんと張りなおした。

残響が消えると厳かな静寂だけがそこにある。

その静寂の中に——

葛

「封じの柱の儀を行います——」

葛ちゃんの言葉だけが響いた。

ざわ——

言葉は事象の発端と為り、言霊が木に宿る霊を震わした。

さわ——ざわ——

八十、八百、八千を超える無数の葉がさざめく。葛ちゃんの言霊に同調して共鳴して、山の木霊が言霊を増幅させる。

さわ——ざわ——さわ——ざわ——

細かく震える葉が、空から落ちてくる月光を複雑に反射してきらめく。

青白い光を浴びて、大きな木がきらきりと——

光はいつしか、葉から枝へ、枝から幹へと広がっていき、最後にはご神木自体が月の光を放っていた。

そして——

ご神木の放つ光に、オハシラサマの姿が消えていく。

最後に穏やかな笑顔を残して、光の中に溶けていく。

オハシラサマ

「桂ちゃん——さようなら——」

空には月——

月に向かって伸びるご神木——

夜を覆うほどの光を放つ前と後では、一見して何もかわっているようには見えない。

けれどその根元にオハシラサマの姿はなく。

はらはらと——花びらの蝶が舞い落ちた。

わたしのてのひらの上に舞い落ちた。

温かな感触を残して淡雪のように消えてしまい、わたしの中へと染み込んだ。

そのそのひとひらを最後に、目に見えるほどの霊的な現象はなりをひそめてしまった。

封じのハシラがぴったりと隙間を埋めたせいで、霊的な漏れがなくなったのか、そこに不安定な要素は何もなく——

不安な要素も何もない。

落ちてくる花びらはもうただの花びらで、それ以外の何者でもない。

オハシラサマのご神木は、悠々と月に向かって伸びていた。

桂

「葛ちゃん、ご苦労さま」

葛

「たはは、もうへろへろです」

くたりと崩れ落ちそうになる葛ちゃんの身体を抱きとめる。

葛

「桂おねーさんから《力》をもらっていなかったら、とてもじゃないけど無理でした」
非力なわたしが支えられるほどしかない、小さくて軽い身体。抱え込めるほど細い肩。
だからわたしは、そんな葛ちゃんを誉めてあげたくて——

桂

「それじゃあ、また飲む？」

とんでもなくばかなことを言ってしまった。

葛

「いえ……」

葛ちゃんはわたしから身体を放して、オハシラサマの方へと歩きながら首を振って言う。

葛

「ねえ、桂おねーさん」
人ではないモノの側に寄りながら、言う。

葛

「わたし、まるっきり人間離れしてしまったんだと、ようやく実感湧いてきました」

桂

「あ……」
吹っ切れたように笑いながら——
だけど、葛ちゃんは悲しいときに笑うのがきっと上手な子だから——
目先のことで精一杯で、大事なことを忘れてしまうわたしは大ばかだ。

桂

「そのね、葛ちゃん。気にさわる言い方しちゃったんなら——」
その《力》のせいで鬼のいる世界から逃げられないなら——
若杉の当主として、闇を統べる鬼切り頭でありつづけるしかないのなら——
それならわたしは、ずっと贅の血を引いたままそばにいるから。

桂

「だから——」

一歩、側に寄ろうとしたわたしの足を、突き出された手が押し留めた。

葛

「いえいえ、桂おねーさんの失言などではなくて、ですね。でも——」
ふたりの間にある、爪の伸びたてのひらに遮られて、葛ちゃんの顔が見えない。

葛

「やっぱりおねーさんとは一緒にいられません」

ゆっくりと手が角度をかえて、指の隙間から瞳がのぞいた。

葛

「いたくても、駄目なんです」

その瞳も爪と同じ、獣相を帯びた人に在らざるモノのしるし。

葛

「ですから桂おねーさん——」

葛

「この数日のおねーさんの記憶も、封じさせてもらいます」

そして瞳が、言葉に込められた《力》に感応して自ずから輝いた。

赤——

夕焼けの赤——

その残照は紫がかった光を残して消えていき、それが事切れると夜闇だけがそこにある。

夜——

眠りの時間——

心象時刻の変化とともに、わたしの心は無防備に緩んだ状態になる。まるでお布団に包まれて夢にたゆたうひとときのように。

そして尾花ちゃんの——言霊の神の《力》を発現させた葛ちゃんの声が——

葛

「さようなら」

わたしの頭に染み透った。

その響きが中心にあるものを揺さぶり、あるものを剥がして落とし、またあるものを作り変えていく。

すべては夢に——目覚めると忘れてしまう、そんな儂い記憶に——

桂

「駄目！」

忘れるなんて、そんなのは駄目だ。

わたしが忘れてしまったら——

わたしが好きな、一緒に過ごした葛ちゃんはいなくなってしまう——

鬼切り頭として若杉に帰った葛ちゃんは、今まで通りに自分を殺した葛ちゃんを演じ続けるだろうから。

桂

「とにかくそんなの駄目！」

わたしは意識を引き締めて、神の《力》に逆らおうとする。
この数日の思い出を抱きしめたまま、身体を丸めて眠りにつく。

陽子ちゃんと遊んだり、お凜さんの家にお呼ばれしたり、放ったらかしだった宿題を片付けたりしているうちに、夏休みは終わってしまった。

衣替えはまだだけれど、世間はだんだんと秋めいてきていて、一応都市部かもしれないわたしの住む町ですら空はからっと高く澄んでいる。

雲ひとつない秋晴れの——

それは不安やわだかまりのない、清々しい心を例える言葉でもあるのだけれど——

わたしはその何もなさ故に、どうしようもない落ち着かなさを感じてしまう。

心の中のどこかに、あんな風にからっぽの場所があることを自覚しているから——

ああ、そうだ。

わたしはなくしてしまったから。

大切な人がいなくなってしまった——

——誰を？

それはもちろんお母さんと——

——と？

お母さんと——

——

「それではとちゃん、聞いている？」

桂

「……え？」

陽子ちゃんの声でふと我に返る。

考えごとにはまると周りの景色が見えなくなる相変わらずのわたしは、慌てて愚にもつかない思考を振り払う。

桂

「あ、聞いている聞いている。ちゃんと聞いているってば」

陽子

「んもーっ！ は一とちゃんってば、夏休みに田舎行ってから変だよ？」

桂

「あ、うん……」

陽子ちゃんの言う通り、経観塚へ行ってからのわたしは何だか変だった。

桂

「大切なことがあったような気がするんだけどね」

陽子

「……思い出せないとか？」

桂

「うん……」

それでも全部を忘れてしまったわけじゃなくて、覚えていることは覚えている。

鎮守の森のお屋敷は暮らすのにも不自由するようなところで、お仕事で偶然来ていたサクヤさんのお陰でご飯には不自由なくて――

気が付くとサクヤさんの車の後部座席でまどろみながら、アパートへの帰路についていた。

陽子

「もしやアブダクションとか経験してみた？」

桂

「……らくらく痩せる電気ベルトのあれ？」

陽子

「うわー、アブしか合っていないんだけどー」

桂

「あはは、ごめん」

陽子

「天然成分のおボケまでパワーダウンとは、ずいぶんとまた重傷なのねえ……」

桂

「あはは、そうだね」

確かに重傷なんだと思う。

けど十年前のそれに比べれば、お母さんをなくしてしまったという痛手の割には、傷は比較的に浅いのではないだろうか。

とにかくわたしは、こうして毎日を平和に暮らしているんだから――

だったら、それでいいだろう。

空っぽなら詰め込めばいい。

本当に大切なことなら、数日ぶんの記憶の抜けなんて大したことにはならないはず。

たとえば二、三ヶ月前に陽子ちゃんとしたことを、今では思い出せないかもしれないけれど――

それでも陽子ちゃんとの思い出は、今この瞬間にも上書きされていくのだから。

記憶は漏れていくものだから、漏れるものは漏らしていこう。

吹く風は通り抜けるに任せていこう。

道をすれ違った誰かの顔を覚えていたところで、それがわたしの人生に大きな影響を及ぼすわけではないだろうし——

例えば、今さっきすれ違った兄妹らしい人たちのことを忘れたところで——

鬼切り頭

「あ……おねー……」

鬼切りの少年

「……葛」

鬼切り頭

「……お互い別れが辛いなら、やっぱり、忘れさせない方が良かったかも知れないです」

鬼切りの少年

「そうかもしれないけど、どんなに後悔しても、時間を巻き戻すことはできないんだ」

鬼切り頭

「ですね……」

鬼切りの少年

「戻りましょうか。わたしたちの世界に」

確かにわたしは重傷だった。

十年前にすべての記憶をなくしてしまったことに比べれば軽傷なんだろうけれど、それでも胸に空いた穴は大きくて——

だからわたしはそれを埋めようと、そこにあった記憶を盛った場所を探そうとする。

忘れてしまった誰かの面影を、行き交う人の流れに見出そうとする。

例えば、今さっきすれ違った兄妹らしい人たちは——

桂

「……あ」

わたしたちと同じぐらいの年頃の男の子にも、何とはなしの懐かしさを感じるけれどそれよりも。

その隣にいる、小学生ぐらいの女の子は——

思い出した——あの子は——

陽子

「『あ』ってなに？、『あ』って！」

桂

「ごめん、陽子ちゃん！ 用事思い出したから先に帰っててくれる！？」

陽子

「忘れものなら付き合うけど？」

桂

「そーだけど、そーじゃないの！ わたし、思い出したから！」

陽子

「……？」

桂

「ごめん、ちょっと急ぎかも！」

こうしている間にも、小さな背中がますます小さくなっていく。急いでその場で足踏みなんかを始めるわたし。

さっきまで腑抜け状態だったわたしが態度を豹変させたので、陽子ちゃんは少し面食らったようだけれど——

陽子

「わかった。何だか知らないけど行っといで！」

桂

「うんっ！」

先ほどまで空しさを感じていた秋晴れの空が、何だかとても気持ちがいい。

そんな澄んだ空気を吸い込んで——

わたしは走る。わたしは叫ぶ。

桂

「葛ちゃーん——ん！」

桂

「うりゃ！」

葛

「うひゃあ？」

桂

「葛ちゃん見つけた！」

葛

「ひっ、人違いじゃないですか？」

桂

「わたし、尻尾の出てる知り合いなんて、人違いするほど多くないんだけど」

葛

「えっ！？ 尻尾出てます！？」

桂

「出てないよ」

葛

「……え？」

桂

「尻尾を出したな、葛ちゃん」

葛

「たはは、これは一本とられました」

わたしは暗闇の中をたゆたっている。

ここには何も無い。

ここには何も無い。

ここには光も音もなく――

わたしを責める声もない。

だからわたしはここにいる。

羊水のような居心地のいい闇にすべてを任せて、わたしは闇に溺れている。

その闇の中に青い光が射し込んだ。

何も無い闇に慣れていたわたしは、そのまぶしさに耐え切れなくて顔を背ける。

「桂ちゃん――」

誰かの声がする。

わたしの名前を呼ぶ声は――

きっとわたしを責める声だ。

お父さんを殺してしまった、わたしのことを責める声。

「桂ちゃん、わたしの手をつかんで」

桂

「……いや」

わたしはむずがるように身もだえをして、伸ばされた手を払いのける。

桂

「……いや。わたしはいや。なにも見たくないしなにも聞きたくないし、なにもしたくないの」

「桂ちゃん——」

声が追いかけてくる。

駄目だ。

もっと深くへ潜らないと駄目。

誰の声も届かない、もっと深い闇の中へ。

「——」

声が遠ざかり、わたしは少し安心する。

ここならきっと大丈夫。

だからわたしはここにしよう——

ずっとずっと、ここにしよう——

わたしは暗闇の中をたゆたっている。

ここには何もない。

ここには何もない。

ここには光も音もなく——

わたしを責める声もない。

だからわたしはここにいます。

羊水のような居心地のいい闇にすべてを任せて、わたしは闇に溺れている。

その闇の中に青い光が射し込んだ。

月の光のようなそれは、ひらひらと瞬いている。

それは自ら輝く蝶だった。

蝶は何かを運んでいる。

誰も立ち入れるはずのないわたしの中まで、人の気配を運んでくる。

「桂——」

誰かの声にする。

わたしの名前を呼ぶ声は——

どこか懐かしい感じがするけれど、これは一体誰の声だったか。彼の声だったか。
誰彼——黄昏——赤い世界。

桂

「……いや」

誰でもいい。誰であっても関係ない。

もっと奥へ、もっと深くへ、太陽どころか月の光さえ届かない夜の淵まで行かなければ。
そこへ赤を沈めてしまわなくては。

そうでないと、わたしが——

「桂——！！」

桂

「……いや。わたしはいや。なにも見たくないしなにも聞きたくないし、なにもしたくないの」

わたしが、壊れてしまうから。

だけどその人は容赦をしない。

「桂——聞くんだっ！！」

どんなに耳を塞いでも、びりびりした振動が、直接わたしの中に入ってくる。

容赦がないのは他人事だから？

違う。そこに他人としての遠慮は一切ない。

まるで自分のことのように、だけれど痛みを決意で塗りつぶした声を張り上げて、言う。

「桂——君は父親を殺していない！！」

肩をつかむ力強い手が、殻を割った。

わたしの心を包み込んでいた闇が零れていく。

桂

「あ——ここは——」

ここはどこだろう？

いまだにわたしは目覚めておらず、夢の最中にいるのだろうけど、肩を掴んでいる人は——

桂

「どうしてケイクンがこんなところにいるの？ わたしに一体何の用？」

ケイ

「僕がここにいるのはゆーねえ——柚明さんのオハシラサマとしての《力》を借りて、君の夢に僕の意識を同調させてもらっているから」

ああ——あの青い蝶。

ケイクンをここへ導いたのは、夢見の中に現れる柚明お姉ちゃんの《力》によるものだ。だけど、どうしてお姉ちゃん本人じゃなくてケイクンを？

桂

「女の子の夢に勝手に入るなんて、失礼だよ」

ケイ

「君が自分で起きてくれれば、こんな苦労はいらなかったんだけどね」

桂

「うん……でも……」

ケイ

「そうだね。鬼の呪いのせいなんだから、仕方がないといえば仕方がない」

ケイクンはわたしの弱さを責めずに、強いまなざしでわたしを見据えた。

ケイ

「もう一度言おうか。君は父親を殺してなんかいないんだ。あれは君の中にある記憶のモザイク。真実とは程遠い偽りの風景だよ」

桂

「偽り……？」

ケイ

「そうだよ。君がすっかり思い出せば、すべては解決するはずだったんだ」

桂

「でも、わたしの記憶は事故のせいだ……」

ケイ

「違う。もうわかっているはずだ。君は蔵で鏡の封印を解いてしまったことを悔やんで、自ら記憶を閉ざしたんだ」

ケイ

「君があの鬼を解放したことが、十年前から続いているこの出来事の発端だからね」

そう、わたしは一度結論付けているはず。
火事なんてなかった。

ケイ

「桂、ちゃんと思出すんだ。あの日、蔵の中で何があったのか」
その面差しが、その瞳に映るわたしの顔が、誰かに確かに――

ふと、覗き込んだ目の片方が強い光を宿した。
鬼の瞳の赤ではなく、蒼みを帯びた光を放つ右の眼。そうだ、あの夢の中でこんな風に目を光らせていたのは確か――

強い光に射抜かれたわたしの左眼は視力を失い、白く焼きついたそこに何かが像を結び始めた。

ケイ

「あの鬼が見せているいびつな浄玻璃鏡ではなく、本当のことを思出すんだ」

その声に導かれるように、わたしは再び過去を《視》る。

――

「本当に入るの？」

それはわたしの声だったけど、わたしは口を開いていない。
ちいさなてのひらの中にある、大きな鍵を握り締めて、訊ねる声に答えを返した。

桂

「入るよ。おくらの中には、きっと宝物がいっぱいあるんだよ」
背伸びをして、体温が移って温くなった鍵を鍵穴に差し込んだ。

鈍い音を立てて鍵が開いた。
だけれど扉は開かない。
どんなに力をこめたところで、重い鉄扉はびくともしない。
なにせ十年の放置分のハンデがあるとはいえ、あのサクヤさんがてこずったほどだ。
考えてみれば、就学前の子供ひとりの力で開けられるようなものではなかった。
だからお父さんもお母さんも油断していたんだろうけど――
わたしは真っ赤になった顔で「手伝ってよ」と無言の抗議を送り、今度はふたりで扉に挑んだ。

そしてわたしは蔵へと入り、箱の中からあれを探し出して――

桂

「こんなのはがしちゃおう」
鏡の魔の封印を解いてしまった。

同じ顔をした子供がふたり、鏡に映っていた。

桂

「これはずっと昔の鏡だよ」
わたしがしゃべると、そこに映った片方だけが口をぱくぱくとさせる。

わたしと――もうひとり――同じ顔――同じ声――双子のようにそっくりな――

双子――

ノゾミ

「そうね。ふたりとふたりで丁度いいでしょう」
双子の鬼と、双子の子供。

木。

たくさんの木。
高く伸びる木々それぞれが、好き放題に枝を伸ばし、空のほとんどを覆い隠してしまっている。

ノゾミちゃんの真っ白な手に引かれて、鎮守の森をわたしは急いでいる。

――振り返る。

瓦の並ぶ屋根が見えた。

古びてはいても荒れてはいない、立派な羽藤のお屋敷があった。

離れに見えるのは蔵。

わたしたちが飛び出してきた蔵。

お父さんはまだ蔵から出てきていない。このまま走れば追いつかれないと、小さくまるい息を吐く。

追いつかれてさえいれば、怒られることを受け入れてさえいれば――

桂

「お父さん、怒らなくなる……？」

ノゾミ

「ふふっ、もう二度と怒らないようにしてあげる。ちゃんと言うことを聞いてくれるなら」
蔵の中で交わされたやり取り、お父さんは二度と怒ることがなくなった。
もちろん笑うことも。

前に向き直ると、ノゾミちゃんに強く引かれるのはほぼ同時。

ミカゲちゃんに連れて行かれる小さな背中が先に見える。

そうだ、このときもふたり一緒だった。

わたしとそっくりな、双子の——
その先は断片的にしか思い出せない。

ノゾミ

「桂。わたしの目を見るのよ」

赤い瞳に頭の中をかき回されて、葛ちゃんのように操られることになった。もちろんあの子も、ミカゲちゃんの邪視に捕らわれる。

そしてわたしたちは封印を綻ばせて——

ノゾミ

「くあああ——っ!!」

先ほどのケイクンのように、右目を蒼く光らせたお母さんが、ノゾミちゃんとミカゲちゃんを退治して——

桂の母

「駄目ね。もうこの木の中にオハシラサマはいないわ。彼女は還ってしまった」

綻びが大きくなれば、封じられた鬼神が中から出てきてしまう。それを防ぐには誰かが封じの要としてハシラの継ぎ手となるしかなく——

柚明

「叔父さん、叔母さん、お願いします」

柚明お姉ちゃんはその役に就いた。

『たいせつなひとが、いなくなってしまった』

ご神木に開いた穴を塞ぐために、わたしたちの大切な人がその穴の中に入ってしまった。封印の綻びは塞がれ、鬼神はもう出てこない。

けれども穴を埋める土を得るために地面を掘れば、そこに新たな穴が生じるように——

わたしたちの中に大きな穴が開いた。

光の届かない穴底に鬼が生じることになった。

それは自ずからのものなのか、暗示をかけられたのか、空虚な《器》に入り込まれたのか——

深い瞳の奥底に鬼火が灯った。
わたしと同じ顔の中で赤い光が爛々と輝く。

桂

「あ……」

鬼は血を欲する。

おあつらえ向きに恐怖にすくんだ獲物がいる。柔らかい肉と贅の血を持った、幼いわたしが。

衝撃。

痛みはない。

痛みのかわりに熱さがやって来る。

世界はこわい赤に染まってしまい——

わたしはそれに耐えられずに、すべてを塗り潰すことにした。

雨は嫌い。濡れた服は気持ち悪いし、柚明お姉ちゃんがいなくなってしまったし、お父さんまで死んでしまった——そんな記憶も含めてすべて。

わたしは真っ白に糊塗（こと）することにした。

そして十年の年月を経て、すっかり古びて乾いたそれは、わずかな衝撃でぱらぱらと崩れる。

わたしは思い出していた。

桂

「……もしかして……」

ケイ

「そう、僕たちの父さんを殺してしまったのは、桂じゃなくて僕なんだ」

お父さんを殺してしまったのは、わたしと同じ顔と声を持つ、同じ小さな背丈のきょうだい。

お屋敷の柱には、わたしでも柚明お姉ちゃんでもない不在だった人の名前が刻まれている。

わたしの頭を痛くする、赤い世界と共に封じ込んでいた人の名前——

桂

「白花ちゃん……なんだ？」

わたしの双子のお兄ちゃんの名前が。

ケイ

「今の僕はケイだよ」

否定はせずにケイくん——白花ちゃんが言った。

鬼と成り人から外れたそのときに、白花ちゃんもいなくなってしまったのだと言外にそう言った。

桂

「そんな、双子で同じ名前にするなんてややっこしいよ。いいじゃない、白花ちゃんて」

桂

「だいたい、何でわたしの名前を使うの？」

もう慣れてしまったけど、いくら男の子っぽい名前だからって、わざわざ双子の妹の名前を使うことはないんじゃないかと思う。

む一つと頬を膨らませて訊ねると、白花ちゃんは少し微笑んで。

ケイ

「元を正せば僕のために考えられた名前だから、僕に対しては強い言霊で働く名前だからだよ」

伊達や酔狂で妹の名を騙っているのではないと、真面目な瞳で答えてくれた。

ケイ

「母さんが届け出を間違えなければ、僕が桂で、君が白花だったんだよ。それぞれにつけようと考えられていた名前は逆だったんだ」

ケイ

「物心つく前のことだから僕も覚えていないけど、何かの書類で間違いに気付くまでは、君は白花と、僕は桂と呼ばれていたんだよ」

桂

「へー」

ケイ

「まあ、双子は名前を呼び間違えられることは、そんなに珍しいことじゃないけどね」

きっとそうだろう。最近見た映画にもそういうシーンがあったし、お母さんは出生届を間違えるぐらい筋金入りなんだから。

ケイ

「さあ、早く起きてゆーねえを安心させよう」

こくりと頷こうとしたわたしは、ちょっとした引っ掛かりを覚えて動きを止めた。

ひっかかりは内容に関してではなく、ごくごく一部の表現に関して。

桂

「……だけど白花ちゃん、まだ柚明お姉ちゃんのことそう言ってるんだ」

ケイ

「桂、君だって僕のことをそんな風に……」

桂

「あ……」

昔のように「白花ちゃん」と、ケイクンのことを呼んでいた。

この年頃の男の子は、あまりちゃん付けで呼ばれたくないんだろうし、ましてや命名した人的には女の子の名前なわけだし。

桂

「えっと……」

ケイ

「それに、今の僕はケイだと言っただ——」

ケイクンの言葉が闇に飲まれてかき消えた。

声だけではなくその姿も。

桂

「え？ あれ？ ケイクン？」

寝ぼけているときならともかく、こんな風に夢とわかって見ている夢から覚めるのには、瞬きひとつの時間でこと足りる。

だからきっと、先に行ってしまったのだろう。

桂

「……よし」

夢の底から頭上を見上げる。

そこには夜空に輝く星のように、小さな光がたくさん灯されている。

わたしは夢と現（うつつ）の境目へ向けて、意識を浮かび上がらせた。

ひらひらと——花びらの蝶が舞っていた。

その白に透ける月の光がまぶしくて、わたしは開いた目を細める。

その光の中で大切な人の微笑みが揺れた。

柚明

「桂ちゃん、おかえりなさい」

桂

「あ……柚明お姉ちゃん」

ここは封じのハシラのご神木がある、山の中のあの場所だった。

黒い殻を越えた夢の底まで声を届かせるには、この木の《力》が必要だったんだろう。

桂

「お姉ちゃん、ありがとう……」

柚明

「それよりも、全部わかったんでしょう？」

桂

「うん」

桂

「白花ちゃん——じゃなくて、ケイクンにお礼を言わないと」
真実を《視》せることで悪夢の中から助けてくれた、わたしの双子のお兄ちゃん。
きっと意識を閉ざしたわたしの身体を、ここまで運んでくれたのもケイクンに違いない。

桂

「わたしより先に、目を覚ましたと思うんだけど……」
意識を取り戻したのはわたしの方が先だった。
ケイクンはご神木の根を枕に横たわっている。
月光を積もらせた顔は、死人のように蒼褪めて見えて——ケイクンは身じろぎひとつしない。

桂

「……ケイクン？」
声をかけると、閉ざされていたまぶたが震えた。

ケイ

「……ふっ」
口の端を歪ませて嘲笑のような息を吐き出すと、ゆっくりと目を開く。
その眼光の色は——

桂

「ケイクンじゃ……ない？」
双子のテレパシーだとか、そういうのじゃないけれどわかる。

ケイ

「くくくっ……」
楽器の調律を確かめるように、てのひらを開閉させながら身を起こす彼からは、柚明お姉ちゃんやケイクンに感じた懐かしさのようなものがない。
むしろ彼は、ミカゲちゃんに感じたものに近い気配を漂わせていて——

それを察したお姉ちゃんがわたしの前に立ち。

彼が血色の光を湛えた瞳で睥睨する。

ケイ

「しばらくぶりにこの身体の主導権を握ることができたな」

柚明

「……誰ですか？」

ケイ

「聞かずとも、封じの柱として私の尾を踏んでいるおぬしにはわかるであろう」

ケイ

「私の《力》の色形で——わからぬか？」

柚明

「主の——分霊ですね。十年前に白花ちゃんに憑いて、叔父さんを殺めた」

主

「ああ、あの男のことか。あれは贅の血筋にしては薄かったな」

主

「おかげでそれほど《力》を得ることも適わず、気付けば奥底に押しやられていた。この十年で、私が表に出られたのも数えるほどしかない」

主

「主導権を裏返そうと、幾度も機会をうかがったのだが、なかなかものにできなくてな。さすがは私を封じ続けている血に連なるものよ」

主

「今回は長く出ていられそうだが——この機会を逃がす手はない。身体が自由になる間、つながれた私自身を解放することにしよう」

柚明

「大人しく眠っていてはいただけませんか」

主

「他人の都合で眠らせられたり起こされたりと、せわしないものだな。一体誰の言葉を聞けばよいのだ？」

柚明

「そのことに関しては申し訳なく思います。ですが——」

主

「狭きところに千年も封じられていては、さすがに飽きが出るだろう」
主は舞い散る槐の花びらを、てのひらで受け止めて——
握りつぶした。

一瞬、握った拳の隙間から赤い電光が漏れる。

主

「ましてや微々たる量とはいえ、年ごとに《力》を削がれている状態を、快いと受け入れるものがあると思うか？」

はらはらと——灰となった花が風に舞う。

柚明

「……………」

主

「重ねて、こうして自由に——とは言い難いが、動くことのできる身体があり、封じを外すまであと一歩のところまできている」

ご神木にてのひらを押し当てる。

一歩も何も、先ほど花びらにしたのと同じことをすれば、きっと、最後。

けれど主はすぐにそうしようとはせず、槐の大樹に身体を預けて、わたしたちに視線を移す。

それは奇しくも初めてケイクんに会ったときと同じ姿勢だったのだけれど、中身はまったくの正反対。

主

「大人しく眠れと言われて、眠るものがあると思うか？」

柚明

「……………」

沈黙の時間、静かに花びらが降り積もる。

主は面白くなさそうに、木の下で眠る本体から《力》を奪って離れていく花びらを眺めている。

柚明

「……それでは、神である自身を取り戻したとき、あなたは何を為すつもりですか」

主

「ふむ、そうだな……………」

主

「我ら古き神をまつろわぬ鬼神として追った、照日の神らに思い知らせてやるのも良いな。だが、その前に——」

主

「まずはあのとき手に入れ損ねた贅の血を飲み、削がれた力を取り戻そう」

桂

「——！？」

柚明

「それだけはさせません」

前に立つ柚明お姉ちゃんが、主の視線を遮るように袖を大きく広げて宣言する。

柚明

「桂ちゃんの血は、一滴たりとも流させません」

桂

「柚明お姉ちゃん……」

柚明

「もちろん、白花ちゃんの身体も返してもらいます」

主

「ほう……」

主

「ハシラにも劣る継ぎ手風情に、私をどうにかできるのか？」

柚明

「神そのものであるあなたには、わたしの《力》など蠃螂の斧でしょう」

柚明

「しかし今のあなたになれば——結界の裂け目から抜け出した程度の分霊には——」

柚明

「負けるわけにはいきません」

月の光がお姉ちゃんの瞳に輝いた。

柚明

「オハシラサマのご神木が、あなた《力》のを蝶の姿に変えて、大いなる流れに還しているように」

柚明

「白花ちゃんの身体に居付いた分霊を——あなたの意之霊を虚空に還します」

緋手を振るい、袖をひるがえらせたお姉ちゃんから青白い光が立ち昇る。

強い風が吹いた。

風は月光を溶かし込んで青い。
一匹の蝶が羽ばたきが、巡って竜巻になることがあるかもしれないという理論はあるのだという。

まさにその「かもしれない」が起こった。
風は槐を揺さぶって、まだ散るには到っていない花を空に舞わせた。

ひらひらと——花びらが蝶の群れになる。
もとより柚明お姉ちゃんの使う光の蝶は、ノゾミちゃんたちの《力》と打ち消しあう性質をもっていたけれど——

この花吹雪から成る蝶の群れは、儂い幻などではなく霊と肉の両方を併せ持つだけに、光だけの蝶よりも確実に強い。

そしてその数は——
ゆうに数百頭は超えているだろうか。

主

「何だと……？」
さすがの主もこれにはたじろいだ。

その身から立ち昇らせた赤い《力》すら、触れる端から蝶に吸い取られていくのだ。

そして——
樹齢千年を越える槐の巨木は、無尽蔵と思えるほどの白い花を、長く伸ばした枝一杯に咲かせている。

主

「くっ……このままでは……」
主は封じを灰にして己の本体を解放しようと、ご神木に押し当てていたてのひらに《力》を込める。

紅電が弾けた。

てのひらの形をした焼け焦げが、幹にくっきりと刻み込まれた。
しかしその程度では揺るがない。

むしろ飛んで火に夏の虫とばかりに、その枝の下にいる主に向かって花びらを降らせた。
わたしには無害な花びらの一枚一枚が、剃刀の刃のように主の《力》を削り取っていく。

主

「ぐっ……」

主は大きく横に跳び、槐の枝の落とす影から離れる。

その瞳がわたしに向けられていた。
わたしの血を飲み《力》を増せば、お姉ちゃんを圧倒することができ、お姉ちゃんさえいなくなれば封じを解く障害はない——
そういう目だった。

大地を蹴って、反転。

赤い《力》を逆らせながら、彼方より此方へと疾走してくる様は、大気の摩擦に焼けた星の欠片が落ちてくるようでもあり——

夜の闇に焼き付き長々と伸びる《力》の軌跡は、赤い大蛇さながらで——

それを——

上げた袖の端々までを青い《力》で包み込み、自ら蝶の化身と成った柚明お姉ちゃんが——

正面から迎え撃った。

巨大な《力》と《力》がぶつかり合い、その余波がわたしを叩く。
圧倒的な、空気さえ吹き飛ばしてしまうような《力》の奔流。
そこでは光がすべてを飲み込み——
そこには音すら存在せず——
わたしは息もできずに——
ただ、その終わりを待っていた。

肌を弄る緩い風が、音と空気を運んできて、真白い光をさらっていく。

桂

「は——」

息をすることができるようになった。

桂

「柚明お姉ちゃん——？」
声帯が震えて、ずっと言いたかった言葉が零れる。
柚明お姉ちゃんは無事だろうか。大丈夫なんだろうか。
先ほどまでお姉ちゃんがいた所には——

主

「ぐっ……」
主と——

柚明

「……………」

柚明お姉ちゃんが立っていた。

お姉ちゃんは青い光をまとったまま、主を抱き包んでいる。

主

「くはははっ……口だけではなかったようだな。ハシラの継ぎ手。ひとつ学ばせてもらったぞ」

主からは陽炎のように頼りない光が絶え絶えに立ち昇り、夜の中に消えていく。

主

「確かにおぬしの申した通り、分霊程度ならば継ぎ手でも還せるのだな」

もう立たせるだけの《力》が残っていないのだろう。主——ケイクンの身体がずり下がっていき、膝を屈し、最後には地に倒れ伏した。

柚明お姉ちゃんが勝ったのだ。

桂

「やった、柚明お姉ちゃんすご——」

主

「しかしだ」

桂

「え——？」

主

「それで己まで還してしまっちは、本末転倒というものではないか」

慌てて視線をもたげると——

柚明お姉ちゃんの身体は希薄になっていた。

柚明お姉ちゃんがケイクンの身体を支えなかったのは、物理的に大変だからという理由ではなくて——

つまりはそういうことだったのだ。

桂

「お姉ちゃん！ 柚明お姉ちゃん！

わたしは暗いところへ落ちていこうとしている柚明お姉ちゃんに駆け寄った。

駆け寄っているのに——

桂

「……あっ」

命の鼓動は、遠くなっていく。

柚明お姉ちゃんの波動が、遠のいていく。

桂

「……でも、まだつながってる」

桂

「ちゃんとつながってるのがわかるよ」

柚明お姉ちゃんの身体の中には、わたしの血が流れている。まだお姉ちゃんは生きてい
る。

だから——

だから、この絆で——

桂

「あなたの命を、手繰り寄せる」

とにかく今は血が必要だ。

とにかく、たくさん、血が出る場所——

致命傷でさえなければ、傷の深さは気にしなくてもいい。柚明お姉ちゃんが助かれば、
普通の傷は治してもらえる。

もしお姉ちゃんが助からなかったら——

桂

「絶対、絶対、助けてみせる」

柚明

「桂ちゃん！」

そして足を止めたわたしは、消えていく柚明お姉ちゃんを、ただ見ることしかできな
かった。

桂

「ゆめっ……柚明、お姉ちゃん……っ!!」

手を伸ばす。

桂

「わたしの血ならいくらでもあげるから消えないでっ!!」

ぎゅっと抱きしめた。

もうかりそめの現身を保つのも限界なのか、抱いた肩がとても薄く思えてならなかった。

柚明

「ごめんなさい、桂ちゃん。この先オハシラサマとして、桂ちゃんの子供の子供の代まで見守ろうと思っていたのに」

桂

「そんな先まで見なくていいから、わたしが生きている間だけでも一緒にいてよ！」

柚明

「そうね、そうできれば良かったわね……」
ふわりと、とても透明に微笑む。

桂

「だったらそうしてよ！ 今まで一緒にいられなかったぶん、わたしと一緒にいてよ！」

桂

「駄目だよお姉ちゃん、そんな笑い方しちゃ……」
きっとその透明さは、運命を受け入れた人だけに与えられるものだから。

桂

「諦めちゃ駄目なんだってば！ わたしの血ならいくら飲んでも構わないから！
そうだ、諦めなきゃいけないことなんて何もない。この皮膚の下を流れる血を飲めば、
柚明お姉ちゃんは元気になるんだから。
わたしのせいでオハシラサマになってしまったけれど、だからこそわたしの血で助ける
ことができる。

桂

「ちょっとだけ待って！ 本当にすぐだから！」

柚明

「駄目よ、桂ちゃん——」

わたしを止めようとしたお姉ちゃんの手が、触れることなく通り抜けた。

桂

「あ……」

柚明

「そう、もうここまで——」

ほんの少しだけ残念そうな顔をして、それでも笑顔を浮かべたままで、お姉ちゃんが言う。

素通りした皮膚が感じた、温もりの気配。

確かに柚明お姉ちゃんはそのにいるのに、どうしても触れることができない。

柚明

「桂ちゃん。もうわたしの存在が薄くなっているのがわかるでしょう？」

何とかあたりを探り当てようと手を動かすと、お姉ちゃんの形が崩れた。

必死に空気をかき乱すほどに、お姉ちゃんの姿は崩れていき、わたしはどうしようもなくなってしまう。泣くことしかできなくなってしまう。

柚明

「ね？ もう触れ合うことはできないの。じきに人の形も崩れてしまうわ」

桂

「お姉ちゃん、やだよ……わたし嫌だよ……」

ケイ

「桂……ゆーねえは……？」

ケイくんが意識を取り戻した。

ケイくんはこうして帰ってきてくれたのに、柚明お姉ちゃんは――

桂

「柚明お姉ちゃん……ここにいるけど……」

いなくなってしまうところだった。

柚明

「まだわたしの姿は見えるかしら？ わたしの声は聞こえるかしら？」

桂・ケイ

「うん」

柚明

「そう……それじゃあ、わたしからの最後のお願い……いいかしら……？」

柚明

「ふたりとも逃げて……わたしが完全に消えてしまったら、主は封じを破ってしまうから……」

柚明

「どこか遠くへ、逃げて、隠れて……」

ケイ

「……………」

遺言ともいえる柚明お姉ちゃんの言葉に、ケイくんが立ち上がった。

瞳は硬く強く、槐の大樹を見つめている。

桂

「……どこに行くの？ まだ柚明お姉ちゃん、ここにいるんだよ？」

ケイ

「だからだよ。いる間じゃないと駄目なんだ。いなくなってしまうてからでは遅いんだ」

桂

「……逃げるの？ 柚明お姉ちゃんを置いて逃げちゃうの？」

ケイ

「奴を倒して、ゆーねえを解放しようと思っていたんだけど、考えが甘すぎた。僕は分霊程度に、ずっと引き回されていたんだからね」

ケイ

「だから——」

柚明

「逃げて——」

ケイ

「逃げはしない」

きっぱりと首を振った。

柚明

「勝てないとわかっていて挑むのは……ばかよ。お願いだから、せつかくの命を無駄にしないで。わたしの代わりに、桂ちゃんを守ってあげて」

ケイ

「そうだね。だけど桂を守るためにも、そうするのが一番いいと思ったんだ」

ケイ

「大丈夫。勝算はないけれど、負けない自信ならあるから。奴を倒すことさえ諦めれば、やりようはあるんだ」

桂

「ケイくん——もしかして——」

ケイ

「僕がゆーねえの次の継ぎ手になる。オハシラサマに僕が成る」

しっかりと頷いた。

ケイ

「条件は十分に満たしているんだ。僕たちに流れている贅の血は特別に濃いみたいだし、

僕は奴を倒すために修行したから《力》も使える」

ケイ

「ゆーねえがオハシラサマになったときよりも、ずっと条件はいいんだよ」

柚明

「そう……」

ケイ

「それじゃあ、そういうことだから」

ケイ

「桂。行ってくるから、ゆーねえのことをよろしく頼むよ」

桂

「ケイくん……」

ケイ

「さようなら、ゆーねえ」

最後柚明お姉ちゃんに笑いかけると、ケイくんはオハシラサマのご神木に対峙する。

柚明

「さようなら」

柚明お姉ちゃんの返事にも、振り返らずに。

柚明

「ねえ、桂ちゃん」

桂

「何？」

柚明

「今日は満月なのね……」

桂

「今更だよ、ずっと出てたよ」

柚明

「ふふ、知っていたわ」

柚明

「でも——本当に吸い込まれそうなほど——」

大きくて円い月が、空の真ん中に輝いている。

月以外の星は、滲んでぼやけてしまってわからない。
空にはただ月だけが輝いている。

柚明

「さあ、わたしもそろそろかしら……」

まるで月から迎えがくるような、そんな物言いをして遠くを見つめる。

柚明

「桂ちゃん。あなたと過ごせた数日間、わたしは幸せだったわ」

桂

「お姉ちゃん……」

柚明

「本当に、幸せだった」

きっと綺麗な笑顔だったんだろうけど、わたしにはよくわからない。

鼻の奥がどうしようもなく熱く詰まって、目からは涙が零れ落ちる。
目の表面で留まらずに、ぼろぼろと、ぼろぼろと、零れ落ちて頬をつたい顎を濡らす。
だけどその雫も、もう柚明お姉ちゃんを濡らすことはない。
落涙はお姉ちゃんを通り抜けて、夜露のように草を飾った。

柚明

「さようなら、桂ちゃん。あなただけは元気でいてね。わたしや白花ちゃんの分まで生きてなんて、傲慢なことはいえないけれど、せめて——」

柚明

「せめてあなたの分だけは、精一杯にちゃんと生きてね」

ざっと風が吹いて花が散る。

腕のなかから光の蝶が羽ばたいていく。
最期に儂い微笑を残して、柚明お姉ちゃんは消えてしまった。

桂

「ああ……」

夜空には円い月。
その月へ向かってはばたく光の蝶の群れ。

ふたたび強い風が吹いた。

風は微かに残った移り香を乱暴にひきはがし、手の届かない遠くへ連れ去っていく。
もう、わたしだけしかここにはいない。

もう、柚明お姉ちゃんにはここにはいない。

桂

「柚明お姉ちゃん……」

名前を呼んでも、優しい声で返事をしてくれる人はいない。

桂

「柚明……おねっ……やん……」

地面の上で何かが光った。

涙が光を乱反射させただけかもしれないけれど、わたしは手の甲で目元をこすって、光った何かに目を移す。

月光を跳ねて青く輝く、作り物の蝶だった。

桂

「これ、ゆめっ、お姉ちゃんの……」

一頭だけ飛べない蝶が、置いてけぼりにされていた。

桂

「お姉ちゃんの髪飾り……」

本当は飛んでいける蝶を、寂しがるわたしのために残していつてくれたのかもしれない。

桂

「お姉ちゃん……柚明お姉ちゃん……」

形見の蝶を拾い上げ、胸に押しいただきながら月を見上げた。

円いはずの十五夜の月が、ひどく歪な形に見えた。

ぱっくり開いた切れ目から、勢い良く血が降りそそぎ、薄れていこうとするお姉ちゃんの身体を叩く。

柚明

「桂ちゃん、何てことを——」

桂

「へ、平気。大丈夫。痛くないよ」

痛くはなくて、ただ熱い。

どんどん冷たくなっていく身体に反比例するように、手首はどんどん熱くなっていく。

桂

「ねえ、せっかくだから、ちゃんと飲んで」

手首を唇に押し当てる。

心臓がどきんと動くたびに血があふれ出て、柚明お姉ちゃんの中に命を注ぎ込む。

最初は口の端から零れていた血だけれど——

柚明

「……んっ」

赤く染まった喉を動かして、わたしの命を飲み込んでいく。

柚明

「んっ……ぴちゃ……ぴちゃ……」

蒼い闇と青い光を透かしていた肌に、人らしい赤みが戻ってくる。

桂

「もう大丈夫そうかな……」

あのときわたしは、柚明お姉ちゃんが消えてしまうと思った。

まひるの日向に置き去りにされた氷のように、ほんのわずかな跡を残して、冷たく溶けてしまうのかと思った。

だけど、だけど——

今、わたしの腕の中には、確かな温かさがある。

わたしの身体が冷えているからだろうか。肌を通してじんわり染みってくる温もりが、とても心地良かった。

その温度を感じられない背中がかえって寂しい。

だからわたしはほんの少し、抱きしめる力を込めた。

きゅっ——

そんな音などしなかったけれど、かわりに柚明お姉ちゃんの腕が背中に回されて、寒い背中を包んでくれた。

柚明

「桂ちゃん」

桂

「あ……もう大丈夫？」

柚明

「もう大丈夫よ。だから桂ちゃん」

桂

「あはは、それは良かったよ」

傾けた首が、必要以上にこくと傾くと、ばさりと髪が頬にかかった。

その髪の毛を払おうとして持ち上げた手が——持ち上がらない。

桂

「あれ？ おかしいな……」

柚明

「髪の毛、あげて欲しいの？」

桂

「うん」

温かいてのひらが、頬を撫でながら邪魔な髪の毛をはらってくれる。

柚明

「桂ちゃんの頬、冷たいわ……」

桂

「そうみたい。だけとお姉ちゃんがあったかいからいいや」

いつの間にか、わたしが柚明お姉ちゃんもたれかかるような形で支えられていた。

桂

「あったかくて、柔らかくて、いい匂いがして。こうしていると……何だか気持ちよくなって……」

寒い朝、お布団から出たくないときの気分、少し似ているかもしれない。

柚明

「桂ちゃん、はやく傷を塞がないと！」

桂

「ああ——そうだね、そうだったっけ」

一瞬、傷のことを忘れていた。

桂

「ほんと、わたしってもの忘れ激しいなあ……」

柚明

「いいから、早く」

傷を塞ぐようにぴったり押し当てられたてのひらの温かさと、傷口の熱さが溶けあう。
熱めのお風呂のような、気持ちいい温度。

桂

「ん……わたし、何だか眠いかも……」

まぶたが重くて、あけておくのが億劫になってきた。けど寝るには少し寒い。

ぬくもりを欲しがるとわたしは、入らない力を腕に込めて、お姉ちゃんにくっつくようにする。

桂

「ねえ、柚明お姉ちゃん……」

柚明

「桂ちゃん——？」

桂

「なんだかね、幸せな夢を見られるような気がするんだ……」

柚明

「——桂ちゃん！」

ぎゅっと強い力で、お姉ちゃんがわたしを抱きしめてくれた。

桂

「ちょっと痛いかな。痛いから夢でも幻でもないよね……」

柚明

「そうよ。だから桂ちゃんも——」

遠のいていく柚明お姉ちゃんの綺麗な声は、子守唄みたいに耳に心地よく響いて。

わたしは軟泥のようなまどろみに沈んでいった。

ああ、あったかいなあ。

しあわせだなあ。

明日起きたら、何をしようか。

明日はお祭りがある日だから、おそろいの浴衣を探して一緒に夜店を見物しようか——

わたしは、明日を夢に見る。

柚明

「桂ちゃん」

桂

「柚明お姉ちゃん」

柚明

「桂ちゃん、もういいわ。桂ちゃんが——」

桂

「まだ駄目だよ。もうちょっと」

柚明

「桂ちゃん、やめて」

桂

「でも……」

ごねるわたしの肩に、誰かの手が乗った。
温かくて——大きな手。

「桂、君はもう止せ」

意識を取り戻したケイクンが、自分の手首を切り裂きながらそう言った。

ケイ

「僕が代わるから、桂はもう止すんだ」

差し出した手から零れる血が、わたしの血と交わって柚明お姉ちゃんの上に落ちる。

柚明

「白花ちゃん……」

ケイ

「ありがとう、ゆーねえ。奴の分霊は、僕の中からすっかり消えたみたいだ」

柚明

「そう、それは良かったわ」

ケイ

「だけどゆーねえは無茶したら駄目じゃないか。オハシラサマの封じが消えたら、分霊どころか奴そのものが出てきてしまうんだよ」

柚明

「あ……そうね」

桂

「そうだよ、柚明お姉ちゃんは本当に無茶する人なんだから」

ケイ

「桂、君に人のことを言う資格はないよ」
傷付いていない片方の手で、わたしの手を押しつける。

桂

「ううっ……でも……」

ケイ

「ゆーねえ、桂の傷を頼むよ」

柚明

「ええ、任せて」

高くそびえるオハシラサマのご神木を見上げて、ケイくんが言った。

ケイ

「ゆーねえ、オハシラサマを交換しよう」

桂

「——え？」

ケイ

「僕が継ぎ手になるから、ゆーねえはご神木から出て、普通の暮らしに戻るんだ」

ケイ

「桂と一緒にね」

柚明

「そんなことできないわ」

ケイ

「いや、桂にはゆーねえが必要なんだよ。サクヤさんや友達もいるけど、一緒に住む家族が必要なんだ」

柚明

「白花ちゃんは血を分けた兄妹よ。それも双子の」

ケイ

「だけど僕はゆーねえと違って、鬼としてたくさんの過ちを犯しているんだよ。それが、奴の分霊のせいとはいえ」

ケイ

「そんな僕が、今更一般人のフリをして桂と暮らすなんて、できるはずがない」

柚明

「でも……」

ケイ

「それにこのまま無事に帰ったら、首を持っていかれることになってるんだ」

桂

「あ、烏月さんと……」

ケイ

「鬼切部に二言は通じないだろうし、僕にだってプライドがある。一番丸く収まるのが、

僕がオハシラサマになることなんだよ」

柚明

「白花ちゃん……」

ケイ

「桂もそれでいいよね？」

桂

「だけど……いいの？」

ケイ

「僕がそう望んでいるんだよ」

ケイくんはオハシラサマのご神木に歩み寄ると、その幹に手を回した。

月の光がご神木を青白く染め上げ――

いや、槐の木自体が青白い光を放ちはじめ、天を衝く光の柱と化した。

桂

「オハシラサマ――」

光り輝く巨大な柱は、まさにそう呼ばれるのにふさわしい神々しさをもっていた。
そういえば、日本で神様を数えるときに使う数量単位は「柱」だったはず。

柚明

「白花ちゃん、本当にいいの？」

ケイ

「いいんだよ。何か誤解があるようだけど、本当に僕はオハシラサマに成りたくて成るんだからね」

柚明

「どうしてって……訊いていいかしら？」

ケイ

「僕が負けず嫌いの頑固者だからさ。オハシラサマになる一番の目的は、主の奴に仕返ししてやるためなんだしね」

桂

「え？」

ケイ

「普通にやりあったら勝てそうにもないことがわかったから、僕が張り切って今までの三倍ぐらいの勢いで力を削いでやるんだよ」

ケイ

「そうだね、あと千年もあればいい勝負ができるようになるんじゃないかな」

桂

「わ……」

ケイ

「ゆーねえの社会復帰の方が大変だろうけど、頑張って」

柚明

「その辺はサクヤさんに上手い方法を習うわ」

ケイ

「そうか、なら安心だね」

オハシラサマの輝きが強まっていく。

強い光にかき消されていく——

桂

「ケイクン……」

ケイ

「そんな顔をする必要はないよ、何も消えるわけじゃないんだから」

ケイ

「今までゆーねえがそうであったように、在り方の形が変わるだけなんだから」

ケイ

「それじゃあまた——」

ケイ

「——縁樹の導きがあるときまで」

十年もの間行方不明だった柚明お姉ちゃんは、わたしの家に移り住むまでの手続きが色々大変だった。

なにせ死亡認定されていたので、本人照合が必要だったりしたのだけれど、お姉ちゃんは本来取るべき十年分の年を取っていない。

それで一時期、現代の浦島太郎とか神隠しの不思議とか、小さな話題になったりもしたものだ。

そんなこんなでわたしたちの生活が落ち着いたのは、夏休みが終わって一ヶ月以上経ったころ。

季節はすっかり——

桂

「んー、天高く馬肥ゆる秋だよねー」

気持ちのいい秋晴れの下を、大好きな人と一緒にショッピングと洒落込む、休日の午後の幸せ。

柚明

「そうね、食べ物の美味しい季節だけど、桂ちゃんは大丈夫かしら？」

抱えた買い物袋の重さは、幸せのバロメーター。体重計の針が示すのもそうだと思いたいけれど。

桂

「ううっ、桂馬つながりで桂肥ゆる秋にならないように気をつけます……」

ちなみに晩ごはんの材料を買いに行くのだから、ショッピングといえば立派なショッピング。

桂

「だけど今夜は目黒のさんまだよー」

柚明

「はい、焼き魚ね。脂を抜いてお吸い物にした方が、太らなくてすむんじゃないかしら」

桂

「駄目駄目、そんなの勿体ない。お姉ちゃんなら、お吸い物にしても美味しく作れるかもしれないけど、食材だって適材適所じゃないと」

笑子お祖母ちゃん直伝の和食メニューの数々は、お母さんとは姉妹弟子の関係にあたるだけあって、わたしの好みにぴったりだった。

桂

「……あ、何だかいい匂いが」

柚明

「さっそく、どこかでさんまを焼いているのをかぎつけたのかしら？」

桂

「違う、違うよ。食べ物じゃなくて花の香り」

柚明

「そういえば……金木犀の花かしら。もうそんな季節になったのね」

桂

「もう十月だもんね」

柚明

「ええ、紅葉の季節ね。経観塚の山もすっかり色づいているころでしょうね」

桂

「そうなんだ」

柚明

「とても綺麗なところよ。少し遠いけれど、今度のお休みにでも足を伸ばしてみる？」

桂

「そうだね。わたしたちの誕生日ももうすぐだし、白花お兄ちゃんに挨拶しに行こうか」

柚明

「そうね——」

桂・柚明

「わたしたちは、ちゃんと幸せに暮らしていますって」

蝶の飛んでいる夢を見た。

月の光を粉にしたような、鱗粉を振りまいて飛んでいる蝶がいる。
わたしはその蝶を追いかけている。

どうして蝶を追いかけているんだろう。
羽ばたくたびにその羽音が、わたしの名前を呼んでいるように聞こえるからだろうか。

ユメイ

「——桂ちゃん」

その言霊は、花びらを震わせる程度の優しい風に乗って、白く甘い香りと一緒に、わたしのところへやってくる。

その声に導かれて、向こう岸が見えないような大きな川を背に、森へ向かって歩いている。

ユメイ

「桂ちゃん——桂ちゃん——」
わたしの名前を、何度も呼ぶ声が聞こえる。

白いトンネルの中へ、蝶は入っていく。

桂

「あ……」

ユメイ

「……桂ちゃん？」

桂

「……………」

ずっとわたしを呼んでいたのはユメイさんだった。握られた手が蒼い闇の中で蛍のように青白い光を放っている。

蛍と違うのは、その光が仄かな温かみをもっていて、活力のようなものが流れ込んでくることだ。

ユメイ

「桂ちゃん、わたしが誰だかわかる？」

桂

「あ、うん、ユメイさん……」

わたしが名前を呼ぶと、ユメイさんの顔がほころんだ。

ユメイ

「良かったわ、桂ちゃん。一時は本当に危なかったのよ」

桂

「危なかったって——」

ああ、そういえば。

わたしは烏月さんの維斗でずっぱり切られて、命を落としかけていたんだっけ。

それからしばらく、なぜだか知らないけれど、ケイクンの身体に居候していて、その間わたしの身体はお留守だったということになる。

普通の人なら外傷だけに目がいくんだろうけど、そこは霊体のユメイさんのこと。ずいぶん心配させてしまったかもしれない——

——あれ？

桂

「……じー」

ユメイ

「どうしたの、桂ちゃん？」

桂

「何だかユメイさんの様子が違うなって……」

柔らかい手をにぎにぎしてみる。

わ、つきたてのお餅みたいにすべすべ——じゃなくて。

桂

「ユメイさん、すごくしっかりした身体がある？」

燐光を引込めたユメイさんは、綺麗だけれどミステリアスな風ではなく、ごくごく普通の身体をしていて。

微妙に後ろが透けて見えそうな気がするような、密度の薄い感じがなくなっていた。

ユメイ

「……桂ちゃんの血が、たくさんあったから」

桂

「あ、そっか。わたしのケガを治すのにだって、たくさん《力》を使っただろうから、どこかで補充しなきゃいけないよね」

ユメイ

「勝手にごめんなさいね」

桂

「ううん、別にいいよ」

覆水盆に返らず。あれだけの血を無駄にするのは勿体なさすぎるし、有効にリサイクルしてもらえたのなら大いに結構。

そりゃあノゾミちゃんたちみたいな、悪用しそうな子にリサイクルされるのは困るけど。

桂

「ところでユメイさん、部屋替わってる？」

薄まった闇に慣れてきた目で見回すと、ここが天井の高い日本間であることがわかった。造りは前の部屋にも似てるけど、あそこよりはずいぶん古くておんぼろな感じがする。やっぱり血で汚したりなんかしたから、あまり良くない部屋に移されてしまったんだろうか。

桂

「それと、何で電気をつけないの？」

いくらわたしが寝ていたからって、看護してしてくれたんなら、電気ぐらいはつけてくれていいのに。

桂

「やっぱりユメイさんは、暗い方が楽だったりするの？」

ユメイ

「わたしは暗くても不自由するわけじゃないから、明るすぎるよりこの方が落ち着くかしら」

サクヤ

「けどまあ、この場合、つかないからつけてないというのが正解さ」

どすどすと寝た子を起こしそうな足音を立てながら、がらりと襖をあけたのはサクヤさん。

サクヤ

「桂、大変な目にあつたね。あたしは本当に面目ないことをした。真弓に顔向けできないねえ」

ロックアイスの浮かんだ洗面器を置いて、タオルをぎゅっと絞る。

桂

「うーん、でもまあ、仕方ないよ。だけど電気つかないって、停電でもしてるの？」

サクヤ

「停電っていうか、ここは元々通ってないのさ」

桂

「ふえ？」

タイミング良くタオルを顔に掛けられたので、何だか変な返事になった。

桂

「わ、ひやひや」

大量の血を失ったせいか、身体の方はお布団の暖かさを心地よいと感じるほど冷えている。

だけど額のタオルの冷たさは、とても気持ちが良いものだった。

ちょっとおじさんみたいだけど、それで顔全体をぬぐうとさっぱりした。

桂

「ぶは一、それじゃあここはどこ？ 少なくとも旅館じゃないよね？」

サクヤ

「あんたの家だよ。羽様の長者のお屋敷さ」

桂

「わたしの家……？」

ああ、そうだった。

わたしは元々このお屋敷を見に経観塚へやってきたというのに、すぐにそれと気付くほどには、ちゃんと見てはいなかったんだ。

サクヤ

「ま、そんなことはどうでもいいとして。いろいろ都合を考えて、こっちに移ることにしたんだよ」

桂

「そっか、旅館にはすごく迷惑かけちゃったもんね。他のお客さんを巻き込むと大変だし……」

戦いに巻き込まれるのはもちろん、下手すればノゾミちゃんたちの傀儡として、わたしたちの前に立ちはだかってくるかもしれないのだ。

桂

「幸いこのお屋敷には近所なんて存在しないから、何があっても迷惑はかからないよ」

桂

「あはは、何もない方がいいんだけどね……」

サクヤ

「それなら町から離れたおかげで、傀儡の心配なら今のところほぼなくなったよ」

桂

「何で？」

サクヤ

「傀儡になる前の賢さと機敏さを持ち合わせていないからね。だからみんなでバスに乗ったり、車を運転してきたりはしない」

ユメイ

「それに桂ちゃん。あの方たちがここまで歩いてくる気になっても、ずいぶんと時間がかかるわ」

サクヤ

「町からここまで二十キロ強離れてるから、傀儡の足じゃ夜明けより前にここに着くことはないね」

桂

「そっか——」

羽様のお屋敷に拠点に移っていたのは、わたしにとっても都合がいいことだった。

ここからならあそこまでは、それほど離れていないはず。

お布団から這い出そうとしてもぞもぞしてみると、何だか身体に上手く力が入らない。

桂

「あ……」

ユメイ

「桂ちゃん、無理をしないで。傷はもう塞がっているけど、すごい出血だったんだから」

桂

「でも、わたし行かなくちゃ」

サクヤ

「こんな時間に、こんな所から、どこに行こうっていうんだい」

桂

「烏月さんの所——」

桂

「オハシラサマのご神木に向かう途中の山道に、烏月さんが倒れてるから」

サクヤ

「ついさっきまで寝ていた桂に、何でそんなことがわかるんだい？」

桂

「えっとね、私が切られて倒れてからね——」

すっかりそのことを話した。

陽子ちゃんは信用してくれなさそうな内容も、そこはさすがに不思議の里・経観塚の関係者というだけはある。

サクヤ

「なるほどねえ……」

桂

「だけど、何でケイくんに取り付いてたりしたんだろう？」

サクヤ

「あんたの魂が安全な《器》に避難しようとした結果、自分のに近い波長の身体として選んだのが、あいつだったってことだろうね」

桂

「わたしとケイくんが……近いの？」

サクヤ

「そりゃあ——」

サクヤ

「ああ、そうそう。あんたら名前も一緒だしさ。いわゆるひとつの言霊ってヤツさね」

桂

「あ、なるほど——」

別になるほどじゃないけど、烏月さんを除けば、あそこにいた中で一番年恰好が近かったのって、ケイくんだったわけだし。

桂

「それで、できれば早く鳥月さん迎えに行っておきたいんだけど……」

サクヤ

「あんたの今のその身体で山道って、それこそ冗談じゃないよ。だいたいあんたじゃ、鳥月のこと運べないじゃないか」

桂

「ううっ……」

鳥月さん、非力なわたしでごめんなさい。

サクヤ

「見つけたところであいつが起きなかったら、あんた一体どうするつもりだったんだい？」

桂

「とりあえず、風邪引かないように添い寝とか？」

サクヤ

「このばかちん」

はたかれた。

サクヤ

「とりあえずその場所、あんたは口で説明おし。それでわかるようだったら、あたしが行って拾ってくるから」

桂

「……わからなかったら？」

サクヤ

「諦めるしかないね」

桂

「わ、わたしやっぱり這ってでも行くよ」

ユメイ

「桂ちゃん——サクヤさんも、桂ちゃんを焚き付けしないでください」

何だかんだ言って、サクヤさんはちゃんと鳥月さんを見つけてきてくれた。

その鳥月さんは、わたしの隣に敷いたお布団で眠っている。

昏々と——死んだように——

そんな表現が似合いそうな、静かで深い眠りだ。あまりに静かなものだから、何だか心配になってくる。

ここにあるのは、鳥月さんの身体だけなのではないのかと——

わたしの意識——おそらく魂——がケイくんの中にお邪魔していたときも、留守の身体はこんな感じだったんじゃないだろうか。

桂

「ねえ、烏月さんは大丈夫そう？」

サクヤ

「あんたの話だと、『鬼切り』だか何だかの技でやられたんだろ？」

桂

「うん」

サクヤ

「それなら、鬼じゃなければ大丈夫なんじゃないかね」

桂

「そんなものなの？」

桂

「人が転じて鬼に成るって、烏月さん言ってたし、死んだ人の魂のことも鬼って言うんでしょ？」

それなら当然人にも効くのではないかと、わたしは考え、不安になった。

桂

「~~~~~」

ぶるぶると首を振って、募る不安を払い飛ばそうとする。

わたしなんかより事情に詳しいサクヤさんが、大丈夫なんじゃないかって言ってるんだから、大丈夫なはず。

だけど、それでも——

魂だけ切られてしまった人は、ちょうどこんな風に眠りつづけるんじゃないだろうか。

心の震えに共鳴したのか、澄んだ金属音を抱いて空気が震えた。

その音は、呼び鈴代わりだったのかもしれない。

そして、その鈴が言霊を発したかのような声が、虫の声の絶えた、凧いだ空気を震わせ響いた。

「ご機嫌よう皆さま。今宵はとてもよい月ね」

「そんな暗いところに籠もっていないで、この月明かりの下に、出ていらしてはいかが？」

サクヤ
「誰だ！」

サクヤさんがすぱっと戸を滑らせ、開いた。

射し込む望の月の光に、闇の蒼さがさらに薄まる。

その光には見えない粒が混じっていて、それは赤錆の粉のようにザラザラと肌に突き刺さる。

それは真円を描く大きな月を背負った、三つの影から飛ばされてくる。

そのうち二つはノゾミちゃんとミカゲちゃん。そして彼女たちを左右に付き従えているのは――

桂

「ケイクン！？」

ケイクンが一体どうして。

ケイクンほどの人が、ノゾミちゃんの暗示で傀儡にされてしまったのだろうか。

いや――

あれは――

わたしがはじき出されてしまったように、あれにケイクンは――

ノゾミ

「桂はこちらにいるかしら」

ノゾミ

「一部とはいえ、私たちの主さまが帰ってきてくださったの。だからお祝いしたいと思って」

ミカゲ

「宴に美酒はつきものだから――」

ノゾミ

「やっぱりあなたの贅の血を、諦めるのは惜しすぎるもの」

ミカゲ

「それに、あなたと《器》で陰陽がそろろう。そうすればハシラの封じを解くことができる――」

ノゾミ

「そう、十年前のようにね」

サクヤ

「ちっ——やっぱり抑えきれなかったのか」

ユメイ

「ええ、あの子を傷つけるのは嫌ですけど——仕方ありません」

サクヤ

「ああ、やりあうしかないようだねっ！」

サクヤさんが縁側をまたぎ越えて外へ出て行く。それに続くユメイさんが振り返って。

ユメイ

「桂ちゃん。桂ちゃんは烏月さんのお札を貼って、何があっても外へ出ないようにしてね」

桂

「う、うん……」

お札で結界を張ってしまえば、ノゾミちゃんとミカゲちゃんのふたりは部屋の中へ入ってくるできない。

宿屋でしたような方法を使えば可能なんだろうけど、ケイクン——今となっては主なのか——の他に現身を持っている相手は見当たらない。

サクヤさんとユメイさんの後ろ姿を見送ったわたしは、隣のお布団で眠る烏月さんから掛け布団をひっぺがす。

桂

「烏月さん、非常時だから許してね」

どこから手を入れればいいのかわからない狩衣に悪戦苦闘しながら、烏月さんが持っているはずのお札を探す。

こんなことなら用意周到に、何回分かまとめてもらっておけば良かった。

ユメイ

「サクヤさん！ ノゾミが屋敷の方へ——」

ノゾミ

「あら、余所見をする暇なんてあるんだ——ミカゲ！」

ユメイ

「っっ……」

サクヤ

「ユメイ！」

主

「観月の民の娘よ、お前の相手は私だ」

サクヤ

「この——邪魔だよ！」

何が起きているんだろう。視界の端に青や赤の光がちらついて気になるけど、今はそんな場合じゃない。

急げ、急げ、急げ——

桂

「あった！」

紙の束を探り当てたわたしは、それを引っこ抜くようにして立ち上がる。

桂

「四隅の壁……四隅の壁……！」

一枚——

二枚——

三枚——

ユメイ

「桂ちゃんっ!!」

あと一枚というところでユメイさんの悲鳴じみた声を耳に入れて、縁側の方を見てしまう。

ノゾミ

「ふふふふふ——」

真紅の瞳で光の軌跡を描き、庭を横切るノゾミちゃんが、こちらへ、跳んだ。

鈴の音を響かせて、縁台の上に着地する。

わたしは最後のお札を手に四隅目に辿り着く。

ノゾミちゃんが部屋に入ろうとするのと、わたしがお札を貼るのは、ほぼ同時のこと。

そして、わずかに早かったのは——

わたしの方だった。

ノゾミちゃんは結界に阻まれている。

桂

「……………」

ほっと息をつきながら、ぺたりと座り込む。

だけど、何かが——

おかしい。

まだ結界が霊体を焼く音が消えていない。

桂

「ノゾミちゃん、もう諦めてよ……」

ノゾミ

「この程度で諦めるだなんて、笑わせないでくれないかしら？」

桂

「え——？」

笑いを含んだその声音には、確かな余裕が感じられた。

ノゾミちゃんのでのひらから零れる赤い光と、結界の青白い光がぶつかり合い、赤紫の火花を散らしている。

ノゾミ

「そろそろかしら？」

ノゾミちゃんがつぶやくのと同時に、四枚のお札はぼっと燃え尽き、灰が部屋の四隅に降った。

桂

「何で……何で結界が効かないの!？」

わたしが烏月さんに切られたときにも、ユメイさんが結界を破っているけれど——

桂

「……何でノゾミちゃんは平気なの？」

それでも、こんなに余裕のある態度はしていなかった。

ノゾミ

「教えて欲しい？」

りん——と、鈴の音が部屋の中へ入ってくる。

ノゾミ

「答えは簡単。美味しくて濃い血を飲んだから」

りん——と、鈴の音が部屋の中へ入ってきた。

桂

「まさか、旅館の人を……」

ノゾミちゃんは答えない。

答えずに、いまだ目を覚まさない鳥月さんの顔を覗き込む。

ノゾミ

「あら、鬼切り役はこんな所で寝ていたのね。罪の意識に押しつぶされて、とうに絶えたと思っていたのに」

夕陽にぎらつく血のように明々と赤々と濡れる瞳が、虫の脚をもぐ童の残酷さで細められた。

桂

「あ……」

知らず、声が漏れていた。

駄目だ。

ここにいては駄目だ。

もう身体の中には余計な血は流れていなくて、本当に必要なぶんしか流れていないはずで。

そんなわたしが捕まって、血を吸われたらもうお終いで——

桂

「いや……わたしは嫌……」

わたしは裸足のまま縁側を飛び出した。

その後のことは何も覚えていない。

桂

「駄目！」

わたしは鳥月さんの太刀に飛びついていた。

持ち上げるとずしりと重い。

鍛えていない細腕には持ち上げているだけでもきつくて、すぐにぶるぶると震え始める。

少しでも軽くしようと、鯉口を切って鞘から刀身を抜き放つ。

ノゾミ

「何が駄目なの？」

桂

「あんな手をつかって、鳥月さんを陥れて苦しめて……」

半ばまで刀身をさらした維斗に目を落とすと、硬く冷たく澄んだ刃に、弱々しい眼が映りこんでいる。

潤んで今にも泣き出しそうな、黒目がちの弱々しい、草食動物みたいな目。

桂

「とにかくそんなの駄目！」

わたしはぐっと目をぬぐい、まなじりを吊り上げて、眼の前を睨み据える。

一目でわたしを吸い付けた、今は閉ざされたまぶたの下に隠された、黒くて強い鳥月さんの視線を思い描いて――

残りの刀身を解放して一振り。黄金の鞘を転がすように畳に放り、構えた。

桂

「わたしノゾミちゃんのこと、許さない！」

鞘の重さがなくなったにもかかわらず、鋼の重さに手が音を上げるけれど。

ノゾミ

「許さなければどうするの？ そんなに似合わないものを振り回して、どうするつもりなの？」

桂

「わたしは鳥月さんを守る」

だからこの手は離さない。

小指から順に力をこめて、絞るようにしっかりと握り込む。

ノゾミ

「ふうん……本当に守れるのかしら？」

桂

「絶対に守る」

ノゾミ

「無力なあなたに守りきれなの？」

桂

「確かにわたしは無力だけ――」

桂

「わたし、烏月さんと約束したもん！」

時代劇は好きだけど刀の使い方なんてよくわからない。だからわたしは野球かゴルフのスイングのように維斗を振るう。

月光色の疾風が、弧を描きながら宙を滑る。

維斗の重さに手を引かれて、遠心力に流される上半身。

勢いのままに身体に巻きつこうとする腕。

その手の中にある刀が、自分自身を傷つけそうで怖い。

持っているのがただの棒切れであっても、当たればきっと痛いはずの大振りだった。

だけど、ノゾミちゃんはそれを避けなかった。避けようとしなかった。

刃が肉に潜り込む嫌な手応えの予感に、わたしは思わず両目をつぶった。

何だったっけ。戦いのときは絶対に目をつぶるなっていうのは——

そしてわたしは、維斗の太刀を振り切った。

桂

「あれ——？」

よろける身体でたたらを踏みつつ、閉ざしていた目をこわごわ開ける。

ノゾミ

「ふふっ、何がそんなに不思議なの？」

ノゾミちゃんはさっきと同じ場所——維斗の刃が通過した場所——に立っていた。

桂

「な、何で平気なの？」

ノゾミ

「目をつぶってはいわからないでしょうね。だけれど私、毛ひとつほども傷付いていないわけではないのよ」

ノゾミ

「ほら——」

ノゾミちゃんは維斗の刃を自ら握りこみ、その言葉を証明してみせた。

刃は握ったでのひらをすり抜け、血が吹き出るかわりに赤い光が生まれている。線香花火の火花のように爆ぜるそれは霧状に広がってぼやける。

ああ、そういえば——

前に烏月さんが切りつけたときも、大した効果をあげないままに、破妖の刃は素通りしてしまっただけではなかったか。

そして烏月さんは奥儀「魂削り」を使うことで、ノゾミちゃんたちを追い返したんだ。

それはつまり、まともに剣を振るうこともできない素人のわたしには、対処の仕様が

ないということなのではないだろうか。

どうしよう、どうしよう——

ノゾミ

「それじゃあ、今度は私から」

ぐにやり——

歪んで波うち、渦を巻いて廻る世界。

常套手段の暗示だとわかっているけど、わたしの意識は翻弄されて、まやかに引きずられた三半規管が不具合を起こし始める。

眩暈がする。

吐き気がする。

足がおぼつかなく震えて、とても立ってられない。

だけど倒れては駄目。倒れたらわずかだけれど効果がある維斗を振るうことすらできなくなる。

そうなったが最後、テレビで見た肉食動物の狩りのように、ノゾミちゃんはわたしを組み敷いて牙を喉元に突き立ててくるのだろう。

渦巻く世界に眩暈がする。

波立つ地面に吐き気がする。

このままではとても立ってられない。

だから、わたしは、震える脚を——

桂

「あぁっ！」

維斗の刃で傷つけた。

熱さと痛さが渾然となって、わたしの脚に強い確かな感覚を刻み込む。

現実が幻覚を凌駕する。まやかしはより強い光の前には消えてしまうものどもの。

揺れと渦とが遠のいていく実感は、血と一緒に毒が抜けていくといったイメージだった。

ノゾミ

「ああ、勿体ない」

本当に勿体ない。すでにわたしの身体の中には、あまり多くの血はないのだから。

だけど、他に方法が思いつかなかったんだから仕方がない。常套手段なだけに上等——

ふっと唇の端が緩む。

なんだ、わたしまだ余裕あるじゃないか。

ノゾミ

「ねえ、あなたどうしてそんなに頑張れるの？」

立っているのが辛いほどの脚の痛みが、遠のいていく意識をつなぎとめてくれている。

マイナス同士の要因が掛け合わせることで、何とか結果をプラスにしている。

だけどそれは危うい吊り合いの綱渡りに過ぎなくて、拮抗した状態が崩れればまっさかさまに落ちてしまう。

だけど、わたしはまだ頑張れる。

桂

「約束したから——烏月さんを信じているから」

ノゾミ

「信じている、ですって？」

桂

「烏月さんはわたしを守るって約束してくれたから、きっと守ってくれるから——」

ノゾミ

「そこで寝ているだけの人間が？ そんな有り様で本当にあなたを守れると思っているの？」

桂

「それでも信じるって約束したから！」

桂

「だからわたしは逃げないで、烏月さんが守ってくれるのを待ってるんだもんっ！」

気付くとわたしは、自分の部屋で寝ていた。

いわゆるひとつの夢落ち——というやつなのかもしれない。

どうしようもなく身体がだるい。

どうして夏だというのにわたしの身体は、体温を上げてくれないのだろう。

桂

「はあ～～～」

陽子

「……どしたの、はとちゃん。元気ないねえ」

桂

「うん……」

陽子

「実家の方で何かあったわけ？」

桂

「うん……ちょっとね」

あれからそれなりに時間が経って、身体の具合は復調したけれど、気持ちの方は憂鬱な

重さに占領されたままだった。

最近わたしは雑踏の中に、姿勢良く歩く人や、髪の毛の長い人の姿を探してしまう。

あ、あの人の髪は綺麗かも。

だけど、やっぱり、あの翠髪には――

桂

「はあ～～～」

陽子

「ほんと、どうしたの、はとちゃん」

桂

「わたしね、大切な人を見捨ててきちゃったかもしれない」

逃げ出したことを後悔している。

桂

「その人のこと、死なせちゃったかもしれない」

それを確かめるのが怖くて、向こうに戻ることもサクヤさんに連絡をとることもできずにいる。

陽子

「死なせたって、話が随分と物騒ねえ」

桂

「本当に物騒だったんだもん」

あれが夢なら良かったんだけど――

陽子

「知ってる、知ってる。あたしもネットでチェックしてたのよ、向こうのニュース。吸血鬼事件とかマニア受けしそうだよねえ」

夢ではない痕跡が、幾つも幾つも残っている。

郷土資料館から盗まれた鏡。

全身から血の失せた遺体。

そして――

けれど、今となっては鬼の話なんて遠い空の下での出来事。

無意識のうちに携帯電話のストラップを撫でていた。

このお守りから《力》がなくなるそのときまで、鬼とは縁なく暮らしていけるのだろう。

わたしの住んでいる所まで、《力》を補充しに来てもいいと言ってくれた烏月さんだけれど――

陽子

「……はとちゃん」

桂

「……え？」

桂

「あ、別に何でもない」

またいつものように自分の思考に埋没していたわたしは、あははと笑ってフィッシュアンドチップスをつまむ。

桂

「チェックって、わざわざ？」

陽子

「わざわざに決まってるじゃない。すべては愛の為せる技よん」

赤い糸で結ばれているのだと、小指を立てるのだけれど——わたしの小指は——

あのときの感触をまだ覚えている。

絡められた指の力強さが、枷となってわたしを縛っている。

桂

「はあ～～～」

きっと夏の終わりまで、わたしはため息を吐き続けるのだろう。

青珠のお守りから、夏空の色が消えるそのときまで——

薄闇の中に蒼い星がまたたいた。

それは烏月さんの右目に宿る見鬼——鬼を知り、正邪を測る《力》が放つ輝きだった。

ずっと閉ざされていたまぶたが開き、烏月さんの瞳がこちらの様子を映した。

烏月

「——桂さんっ！？」

起き抜けの鈍さはまったく見せず、バネ仕掛けのおもちゃのような勢いで横たわっていた身体を起こし、わたしを背中から抱きしめる。

——えっ！？

二人羽織の要領で、わたしが握り締めたままの維斗を振るった。
もちろん踏み込みも弱ければ、振りも遅い、タイミングだって噛み合っていない、素人以下の一振りだったのだけれど。

その維斗に流れ込む剣気の——《力》の強さだけは本物で。
そしてわたしの攻撃を当てるに任せていたノゾミちゃんの油断があったおかげで。

慌てて避けようとして間に合わなかったノゾミちゃんが、胸元を押さえて距離を取る。

ノゾミ

「この……よくも……」

わたしを弄るように細められていた瞳を、零れんばかりに見開いて、烏月さんをねめつける。

真っ向からその視線を受け止めて、跳ね返すと、烏月さんはわたしの手に自分の手を重ねた。

烏月

「桂さん、わたしを信じてくれたのか」

自力では引き剥がせないほど強く柄を握りしめ、真っ白にこわばった手を、その温かさで緩めてくれる。

桂

「わたしが信じないと思った？ 信じることを諦めて、逃げ出しちゃうって思ってた？」

血の気を失い冷たくなった、維斗を握る約束の小指を、烏月さんが温めてくれる。

烏月

「桂さんのことを信じられなかったのではなく、私は自分自身が信じられなくなった」

烏月

「だが……信じよう」

烏月さんが、わたしの手から維斗を受け取る。

烏月

「桂さんがそこまでして信じてくれた、自分を信じることにしよう」

桂

「うん」

ようやくバトンは渡された。

ゴールへ駆け込むことができたわたしは、ようやく座り込むことが許される。

実のところ足腰から力が抜けきってしまった状態だったのだ。

ノゾミ

「——！？」

大気を切り裂く太刀風に、それから逃げる鈴の音。

その鈴の音を一言も発することなく鳥月さんが追う。

ノゾミ

「くっ」

鳥月さんにもう言葉は必要ない。

強い意志を宿した胸はもう揺るがない。

精神統一の文言を唱えることもなく、霊体を切る《力》を込めた斬撃を立て続けに振るう。

青みを帯びた霊光の残滓（ざんし）が消えるより早く、次の一撃、そのまた次の一撃が軌跡を描く。

目にも止まらぬ袈裟懸け、逆胴、幹竹割り。

わたしならどれもがクリーンヒットして、六つにされているところだ。

だけど、ノゾミちゃんとして人ならぬ鬼。

使う技は暗示が主で、部活をするなら文化系といった大人しやかなイメージがあるんだけど、反射神経も常人の域を超えている。

ノゾミ

「くうっ——」

一の太刀、二の太刀を確実に避けて、三の太刀として手の甲を撫で掠めるに止まった。

皮一枚を切らせて飛び退いたノゾミちゃんは、着地と同時にその傷付いた手を大きく振るう。

ノゾミ

「——このっ！！」

傷口から赤い光が広がった。前に見た霧よりも濃いそれは、血のように物質化した《力》の塊そのもので——

それはいくつにも分かれて球形に凝った。

頭にひとつ、胸にひとつ、お腹にひとつ、股間にひとつ、左手にひとつ、右手にひとつ、左足にひとつ、右足にひとつ、あわせて八つ——

それは鈴の音を合図に一斉に動き出す。

球が変型する。変型して伸びる。伸びて線状になりのたくる。のたくりながら迫ってくる。

それは傀儡の繰り糸とはあからさまに異なり。

その太さは糸と言うよりは縄。

そしてその先端には毒牙を備えた口がある。

それは——血の色をした蛇（くちなわ）だった。

稲妻のようにジグザグとした軌跡を描きながら、放たれた矢の速さで地と平行に這い進む。

桂

「鳥月さん！」

鳥月

「せいっ！」

鳥月さんは避けようとせず、むしろ前進しながら維斗を振るった。

月光に輝く刃が闇を裂く。

円を描くような太刀筋は、目に焼きついた光が消えるまでの間の満月となる。

その満月は盾だった。

それは攻撃を受け止める盾ではなく、触れたものを容赦なく滅ぼす恐ろしい盾であった。

一匹、二匹、三匹——

盾の下半面を通ろうとした頭三つが首から離れ、空から降る青い光の前に霞んで消えた。

左右から時間差で襲ってきた両腕からの蛇を、両の裏拳で払うようにして弾く。

刃に込められる《力》なのだから、己の肉体に込められないはずがない。そして千羽妙見流は、体術も修める流派であり——

籠手に覆われた裏拳で打たれた四匹目、五匹目は爆ぜるように霧散した。

その隙に残りの三匹——頭と胸とお腹の前の雷球が変じた蛇が鳥月さんに咬みついた。

鳥月

「くっ」

苦痛のうめきを漏らしつつも、鳥月さんは止まらずに突き進む。多頭の蛇とて本体はひとつ。

一足一刀の間合いにノゾミちゃんが入った。

あと一步のところまで追い詰めた。

今までの傾向では、ここぞというときにミカゲちゃんの邪魔が入るのだけれど——

贄の血を飲んで現身を得たユメイさんの方が、《力》は数段上のように、使いの蝶を相手取るので精一杯といった様子だった。

もう今から動いても間に合うはずがなく——

烏月

「はあっ！」

正中心を切り裂く真っ向からの上段切り。

刃は噛みついたままの蛇を断ち切ると同時に、間違いなくノゾミちゃんの身体を捕らえた。

霊体のノゾミちゃんは肉の身体のように維斗を食むことなく素通りさせる。だからそれを承知の烏月さんは——

八匹の蛇のお返しとばかりに続いて七太刀、一呼吸の間に計八回も剣を閃かせる。

ノゾミ

「くあああ——っ!!」

一撃必殺を旨とする秘伝の太刀を八度もまともに受けたのだから、それで倒れないはずがない。

断末魔の悲鳴を上げながら、ノゾミちゃんの姿は赤い霧となり空気に溶けて消えた。

そして、ノゾミちゃんが消えるのと時と同じくして——

庭の方の一組も勝敗を決していた。

桂

「サクヤさん——っ!？」

サクヤさんの身体をケイクン——いや、今や完全に主に身体を乗っ取られている——の腕が薙ぎ払っていた。

決して軽くはないはずのサクヤさんの身体は、数メートルの距離を飛び、わたしの隣を掠め通って——

柱にぶつかり、部屋を震わせた。

遅れて血の雨。

起点と終点とを結ぶ赤い糸が、庭草の上に、縁台の上に、畳の上に降り、濡れた音を響かせた。

鉄錆びた風に浮いた髪が、さらに遅れて落ちる。

頭皮を引かれる感覚に、断線していたわたしの中のスイッチが入る。

桂

「サクヤさんっ!!」

駆け寄って確かめると、わたしにはどうすることも出来ないような深手を負っていた。

熱い赤がわたしを濡らす。

畳が見る間に染まっていく。

どうしよう、どうしよう——

烏月

「ちいっ」

それも鬼切りの技なのか、数歩の助走で全速力まで加速した烏月さんが、縁台を蹴って跳んだ。

放物線を描かない、直線状の軌道の跳躍。

なのに速く、そして遠くへ——

黒髪を流星の尾のように後ろに引いて、維斗を構えた烏月さんが月下を翔ける。

その先にいるのは、サクヤさんを吹き飛ばした主——

ではなく。

ミカゲ

「——っ!？」

ユメイさんと対峙していたミカゲちゃんだった。

ああ、そうだ。

ユメイさんが持つオハシラサマの《力》なら、この傷を塞いで生命を拾うことができる。

烏月さんがミカゲちゃんを退治すれば、ユメイさんはここへ来ることができる。

烏月さんはこんなにも、こんなときだからこそ。

嵐に飲まれた海原で、北辰を頼りに帆を上げる船乗りのように——

吹雪に遭った山奥で、北極星を探して歩き出す狩人のように——

暗黒の空に不動星を見出して、迷わず進める人なんだ。

揺るがない心で可能な最善を考えて、すぐさま実行に移せる人なんだ。

そうでなければ人の身で在りながら鬼を相手取り、勝ち残ることなどできないのだろうけど——

さすが、わたしの好きになった人。

気付いたミカゲちゃんは鳥月さんを避けようとするけれど——

ユメイ

「させないわ」

その逃げ道を封じる形で、ユメイさんが蝶に編隊を組ませて《力》の檻を作り出す。

もとよりユメイさんの方が有利にことを進めていたのだから、致命的ではないにしろ足封じ程度の威力は備えている。

ミカゲ

「——」

進退谷まったミカゲちゃんが主に伺いを立てるのはごく自然なことなのだろう。

視線を交えた後に、ミカゲちゃんは——

白い喉を、自ら断った。

暗い夜を、光る赤が浸蝕する。

それはノゾミちゃんが八匹の蛇に変えたものと同じ《力》の発露の仕方——

持てる《力》のすべてを吐き出した抜け殻は、愛らしい人の形を崩して赤い光に飲まれていく。

ノゾミちゃんは消滅した。

残ったものは還元された《力》の塊。

触れただけで禍（わざわい）となる、溶岩のような猛毒のような、赤い《力》だけが残された。

心臓の鼓動めいた膨張と緊縮を繰り返す光に触れた途端、蝶が消滅した。

ユメイ

「——っ」

ユメイさんは囲いを広げて直接の接触を避ける。

けれど——

鳥月さんはもう止まらない。

その正体を見極めるように右目を炯（けい）と光らせ、全身に《力》をみなぎらせた一振りの流星刀は、止まらずに突き進む。

そして——

鳥月さんはミカゲちゃんであったものを突き抜けた。

桂

「鳥月さん！」

眼を灼く閃光が爆（は）ぜ——

そして地響き。濛々と立ち昇る土煙。

その土煙が収まるにつれ、仁王立ちする鳥月さんの姿が見えてくる。

血のくれないに全身を染め、ぼろとなってまとわりつく狩衣からは赤紫の毒煙のようなものを立ち昇らせている、見るからに満身創痕の立ち姿。

桂

「鳥月さん……」

だけどつぶやきに頷き返してくれる瞳の強さも、顎を引いた姿勢の良さも変わりなく——

そうだ。姉であるノゾミちゃんを霧散させた鳥月さんが、ミカゲちゃんに負けるはずがない。

あの全身を染めているのは、きっと返り血だけなのだ。

血振りのように雑斗を薙ぎ、赤い残滓を振り落とし、次はお前だとばかりにその切っ先を主へと向ける。

鳥月

「鬼切部千羽党が鬼切り役、千羽鳥月が千羽妙見流にてお相手いたす」

主

「ほう？」

鳥月さんは間断なく、怯まず惑わず為すべきことを為している。

だからわたしも、優先するべきことから為していかないといけない。

桂

「ユメイさん!!」

一瞬前のわたしと同じように、主の動向に気をとられているユメイさんに声をかける。

ユメイさんは対峙するふたりを刺激しないように、こちらへ向かってやってきた。

ユメイ

「……………」

サクヤさんの傷を見たユメイさんは表情を厳しくして、両のてのひらを当てる。

手首をつけて開いたてのひらの形は、蝶が羽を開いたかのよう。そのてのひらが、蝶と同じ青白い光をまとめて淡く光る。

桂

「ユメイさん……大丈夫？」

訊ねる声に無言で頷き、傷の治療に集中する。

きゅっと寄せた眉の上の額に、汗の珠が浮かびはじめる。

そうだ、先ほどまで戦っていたユメイさんだって消耗しているはずなのだ。

わたしは自らつけた脚の傷から流れる血をてのひらに受けて、それをユメイさんに差し出した。

桂

「ねえ、わたしの血を飲んで」

ユメイ

「桂ちゃん……」

わたしにできるのはここまでだ。

だからわたしは——

金属同士をぶつけたような、硬い音を発した庭先へと視線を転じた。

烏月

「くっ……」

維斗の太刀が主の腕にはじかれ、振り下ろした刃を跳ね上げられる。

主の腕には傷はなく、鱗状に発現していた赤い《力》が、気化して大気に溶けていく。

主は逆の腕を無造作に振るう。

研ぎ澄まされた刃すら弾く硬さをもった腕が、ものすごい速さで突き出される。

烏月さんは後ろへ跳んでそれを凌ごうとする。

跳びながら維斗を振り上げる。

着地と同時に反撃——それが烏月さんの計画なんだろうけど——

烏月さんは空中で加速した。

それは人の技ではない。

おそらく烏月さんの見切りより主の腕が長かったせい——

つまり主の攻撃が烏月さんを捕らえたからだ。

予定よりも遠くに着地することになった烏月さんは、重心を前に傾け両足を踏ん張らせることで転倒を免れる。

根元から草を折りながら後ろへ滑り、半メートルほどの跡を付けてようやく止まる。

烏月

「かはっ——」

血の塊を吐き出した。

もし後ろに跳んでいなければ、サクヤさんの二の舞이었다かもしれない。

烏月さんは口元の血を拭いもせず、握りなおした維斗を構える。

主は——

主は元の位置から一歩たりとも動いていない。

ふたりの距離は再び開き、仕切り直しの形となる。

風が吹いた。

ふたりの間を風が吹き抜ける。

丈のある庭草を揺らして風が吹いていた。

主

「……ふっ」

主は維斗の一撃を受け止めた腕のてのひらを二度三度と開閉させて、満足げな笑みを口の端に浮かべた。

顔立ちはケイクンのままだというのに、三日月状に切れ込みが湾曲していくのは、蛇の笑いを見ているようでぞっとする。

主

「鬼切りの娘よ、一応礼を言っておくぞ。おぬしの一撃が契機となり、私は表返ることができた」

ああ——

わたしがケイクンの中からはじき飛ばされた、あのときの——

確かに烏月さんの繰り出した「魂削り」によって、主を抑えていた《力》まで弱まってしまったのだろうけど。

主

「礼と言っては何だが、おぬしがそのまま踵を返し、振り向かずにこの場より往ねば、私は何も危害を加えないと請け負おう」

烏月

「桂さんを連れていっても良いのなら、その条件を飲むことにやぶさかではないが——」

烏月

「どうせ交渉決裂だろう。もとより人に仇なす鬼と取引する気などない」

主

「フッ……人の身で私と戦おうとは片腹痛い。私を封じたのも鬼だった。おぬしら人の遣わした鬼切りなど、片手も使わず捻り潰したわ」

相手は人でもただの鬼でもなく——

先ほど打ち込んだ一撃は硬い鱗に阻まれて通じず、たとえ背中を見せたとしても、それは仕方のないことなのだけれど——

烏月さんの心は決まっていて揺るがない。

烏月

「私の仇は、奴ではなくお前だったんだな」

真っ直ぐに主を見据えて一步を踏み出す。

烏月

「奴とはある種の縁が結ばれてしまったので、切り合いはやりにくいとは思っていたんだよ。特に桂さんの前ではね」

烏月

「だが、奴から身体を奪っては人を喰らい、私が兄を切る要因を作ったのは——お前だ」

互いの間合いまであと数歩の場所で立ち止まり、蒼く光らせた右の瞳で主を睨みつけ——

烏月

「主よ、お前が相手なら、最後の迷いを捨てて切れる！」

担ぐように維斗を構え、腰を落とした。

向かい挑めば敗れ、背にすれば必勝を約束されるという、破軍の星の名を持つ構え。

その星を背負って烏月さんは鬼神に挑む。

烏月

「桂さん——」

烏月

「自分の業は、自分で背負うしかないから」

わたしには鬼切りの業はわからないけど。

烏月

「だけど、あなたが良いというのなら、ほんの少しの間でも私を支えていて欲しい」
信じる心が《力》になるなら、わたしはいくらでも支えよう。

烏月

「業の重さに崩れそうな私を、あなたのその手で支えて欲しい」
小さな光が希望になるなら、わたしはいくらでも支えよう。
本当に暗いときにこそ輝いて見える、日常の象徴にわたしはなりたい。

桂

「……うん」
だからわたしは言葉少なに頷いて、戦いに立つ烏月さんの背中を見守る。

烏月

「千羽妙見流——」

踏み込む足が、力強く、大地を震わせた。

その勢いは、膝と足首の反発力によって前進力となり、完全に同軌したタイミングで肩に担ぐ維斗の太刀が振り下ろされる。

烏月

「——『魂削り』!」

長く大きい踏み込みが、一瞬にして烏月さんとケイクんの距離を刀の間合いにまで縮める。

肩口から鎖骨を断ち切り、心臓近くにまで達した切っ先が、ぴんと張った弦を弾いたように震えている。

主

「何だと……？」

左の首から肩にかけての刃の進入経路は、先ほど同様に赤い《力》が鱗となって覆っている。

しかし「魂削り」は《力》そのものを削り取る千羽妙見流の奥儀。

主

「よくもっ!」

維斗の刃を身体の中に埋めたまま、主が腕を振り上げる。維斗を手放して跳べばそれを避けることは可能だろう。

そして腕が振り下ろされるよりも早く——

烏月

「はあっ！」

裂帛の気合いと共に剣気が迸り、瞳の輝きと同じ蒼の光芒が主の傷口から零れる。

ぐっと押し込まれた刃はとうとう心臓に達し、弾力に富んだその器官さえも切り裂いた。

主

「ぐっ……」

心臓は全身の血が流れ込み、また全身へと散っていく、血のターミナルとも言える重要器官だ。

血が霊であり《力》そのものならば、実体を持たない主の分霊の核といえるのはやはりここでしかなく――

さらに《力》を叩き込んで動きを封じてから、烏月さんは主の腹部に足をかけた。

蹴り飛ばす勢いを使って、身体に深く埋まった刃を引き抜き、離れる。

烏月

「――『鬼切り』！」

まだ刃の届く距離ではない。

だけど、その切っ先からは不可視の刃が伸びている。

その刃は肉体を傷つけずに鬼だけを――ケイクンの中に巣食った主の分霊だけを切り裂いた。

ぐらり――

主の身体がかしいで、仰向けに倒れる。

烏月

「……やったか」

先ほどまで蒼い闇を赤く見せるほど満ち満ちていた主の気配は、風船がしぼむように消えうせてしまった。

烏月

「……………」

烏月さんもその消えようを怪訝に思ったのか、見鬼の《力》で横たわる主――消滅していればケイクンの身体――を確かめる。

桂

「……………」

固唾を飲んで見守る中、頭のとっぺんから爪先までゆっくりと蒼い視線を動かしていく。

烏月

「ふう……」

烏月さんが大きく息を吐いて、肩から力を抜いた。主の分霊はケイクンの身体の中にはもういないのだ。

緊張が解けてへたり込みそうになるわたしに、もうひとつの吉報が届く。

ユメイ

「サクヤさんの状態は落ち着いたわ」

それが駄目押しだった。

桂

「はう～～～」

わたしは寝転がるように大の字に倒れて、空の遠くに輝いている月を見上げた。

十五夜の月——お盆の月——まあるい月——ひやひやとした月——鏡のような月。

桂

「あ……」

その月鏡に——が映る。

わたしの中にあるモノが映る。

わたしの中にある鬼が映し出されている。

桂

「あ……ああ……」

赤いものがとぐろを巻いている。

渦だ。

赤い渦が、わたしの周りをぐるりと取り囲み、そのまま締め付け飲み込もうとしている。

桂

「何で……」

わたしはケイクんとつながったときに——

ああ、そうだ。そうだった——

あのときに目を付けられて、あのとき既に憑かれていたのかもしれない。

烏月

「……桂さん、どうかしたのかい？」
不用意に近づいてくる鳥月さんに首を振る。

鳥月
「……桂さん？」
締め上げられた意に添うように身体を動かすのは正直苦痛を伴って——

ユメイ
「そんな……」
鳥月さんより先に、主とは深い縁を持つオハシラサマ——ユメイさんがそれに思い当たる。
頷いて、懸念の通りだと教える。

ぎりぎりと——わたしは呪縛されている。

桂
「ねえ、鳥月さん、わたしは駄目……」

桂
「わたしにはケイクンみたいに、長い間抑えておくことなんて出来そうにないよ……」

がけっぷちにひっかけた指が外れて、今にも渦に飲み込まれてしまいそうだった。
辛うじて小指が引っ掛かっている。

鳥月さんと約束をした小指。
そこに結ばれた絆にしがみつ়くことで、わたしは自分を保っている。
だけど、それでも——

桂
「このままだと、わたしも鬼になってしまうから——」

わたしは庭に素足を踏み出し、ゆっくりと鳥月さんのもとへと近づいていく。

桂
「鳥月さんのこと、傷つけてしまうかもしれないから——」
それだけは絶対に嫌だから。

桂
「ねえ、だからわたしのことを——わたしの中にいる鬼を——」
だから頼もう。

桂
「鳥月さんに、切って欲しいの」

雲ひとつない夜空を、風が素通りしていく。
風も届かない遠くには月。
まぶしい月。
まぶしすぎて、星の光がよく見えない。

桂

「あなたは人に仇なす鬼を切るもの——」

烏月

「私は鬼を断つ太刀を執るもの——」

烏月さんが維斗の太刀を構える音がした。
うん——これでいい。

桂

「だから、わたしを——」

烏月

「だから、あなたを——」

桂

「切って——」

烏月

「切ろう——」

桂

「あなたの振るう『鬼切り』で——」

烏月

「私の振るう『鬼切り』で——」

烏月

「だが、私は……桂さん、わたしは……」

桂

「烏月さんは、鬼切部千羽党の鬼切り役。人に仇なす鬼を切る人——」

烏月

「役目のためには人をも切る、鬼切りの鬼——」

桂

「……うん」

桂

「だからね、わたしを切って」

桂

「わたしが鬼に成る前に、わたしがわたしでいる間に、わたしが鳥月さんに嫌われないように……」

鳥月

「桂さん、だけどわたしには……」

桂

「あーあ、鳥月さんの言った通りになっちゃったかも。悔しいなあ……」

桂

「ごめん、鳥月さん。ちょっとだけ維斗の太刀を貸してくれるかな？」

桂

「……あはは、やっぱり怖いや。切腹できないお侍さんがいたっていうの、わかるよ……」

桂

「できれば楽で、なるべく痛くないのが良かったんだけど……ごめん……」

鳥月

「なぜ謝る……」

桂

「だって、わたし鳥月さんに甘えてた。鬼に成った後ならともかく、人なんて切りたくないよね。当たり前だよ」

桂

「鳥月さん優しいから、人を切ったら苦しむもの」

桂

「だからやっぱり、わたし自分でやるよ」

桂

「だから鳥月さん、血で赤く汚しちゃうけど……維斗を貸してくれないかな」

鳥月

「……私がやろう」

鳥月

「すまない、桂さん。私にはもう桂さんを助けるすべを思いつかない」

桂

「うん……」

烏月

「だからせめて、一思いに」

桂

「……ごめんね烏月さん」

痛くはなかった。

ただ、急にわたしの視線が低くなり、同時に視界が暗くなっていく。
ほとんど地べたすれすれの視界が最後に映したのは――

烏月

「……桂さん、あなたと結んだ絆は、この程度ではほどけやしないよ」
赤く染まった維斗の刃と――

烏月

「この維斗が――私たちをつないでくれる」

槐の木が花びらを散らして夏は終わりを告げ、わたしは日常の中に帰ってきていた。

夏が始まる前と同じように、学校と家とを行き来して、友達と一緒に寄り道なんかもし
て、波乱のない毎日を過ごしている。

夏の前後で大きく違っていることなどそれほど多くはなく――

家から「ただいま」と言うべき相手がいなくなり「おかえりなさい」と言うべき人がい
なくなった。ただそれだけ。

ふとどうしようもなく悲しくなって、涙を流すこともあるけど、それにすら日常の枠組
みの中に取り込まれてしまった。

この夏にはもうひとつ、別れを経験したけれど――

わたしの大切な人は、かつて鬼であったケイクンを連れて、遠くへ去ってしまったけれ
ど――

お母さんがいなくなってしまったことに比べれば、それは大した問題じゃない。

お互い生きているのだから、それでいい。

わたしは遠くで小さく輝く、日常の象徴になろうと思ったんだから、別れは仕方のない
ことだ。

わたしが日常を生きていることが、あの人の背中を支える希望になり、戦いを誇る自信
となるのだから――

だからわたしは日常を、自ら進んで受け入れた。

陽子

「どしたの、はとちゃん」

そんなことを考えてしまったせいかな、ふとあれの様子が気になって携帯電話を取り出したわたしを、目ざとく陽子ちゃんがチェックした。

桂

「あ、何でもないない、何でもないよ」

何でもなくはなかったんだけど——わたしは何でもないフリをして携帯電話をしまった。——やっぱり、薄くなってる。

鬼からわたしを隠してくれるお守りの《力》は、珠の色として顕れているのだという。あの人の右目を思い出させるこの蒼がなくなったときに、日常は終わりを告げるのだ。どうしよう、どうしよう——この土地で鬼に襲われたら、陽子ちゃんにまで迷惑をかけてしまうかもしれない。

桂

「……………」

陽子

「コラ」

桂

「ひゃっ!？」

つい下がり気味になってしまった頭を、平手で叩かれてびっくりした。なにせ不意打ちだったんだから。

桂

「な、何かな？」

慌てて平気な顔を取り繕ってみたけれど、全然上手くいっていない様子。詳しいことはバレてないと思うんだけど——

陽子

「どしたの、はとちゃん」

再びリピート。

驚いたことにさっきとまったく同じで、わたしが白状するまで（もしくはちゃんと騙せるまで）、繰り返すつもりらしい。

桂

「ううっ……」

どうしよう、どうしよう——

変なところで勘の鋭い陽子ちゃんは、携帯電話に目をつけている。素人目には何も出ないんだけど、痛くない腹まで探られるかもしれないし。

——と、その時。

その注目の的が着信メロディをかき鳴らした。

桂

「あ、ごめん、ちょっと電話」

陽子

「うそん、はとちゃん。あたし掛けてないんですけど？」

桂

「この携帯、別に陽子ちゃん専用ってわけじゃないよ」

陽子ちゃん以外からは滅多にかかってこないけど——いったい誰からだろう。

お屋敷に関して税理士さんから何か報告があるのか、サクヤさんあたりか、はては間違い電話か。

陽子

「けどはとちゃん、その曲ってあたしの着メロ指定曲じゃなかったっけ？」

桂

「あ、この前データ空っぽになっちゃったから。この曲気に入ってるから、また使ってるけど」

陽子

「なにおー！ 空っぽって何か！？ あたしとコツコツ積み重ねてきた、ラブを綴ったメールも何もかもそっくりパーになっちゃってるわけ？」

桂

「うん」

陽子

「うんってのはとちゃん、あんたは鬼だー！ 賽の河原でいたいけな子供をいじめるような鬼だよ、あんたは！」

桂

「……陽子ちゃん、ちょっとだけ静かにしてくれないかな」

すでに十分なんだけど、さすがにこれ以上は待たせられない。

桂

「もしもし？」

烏月

「——もしもし。わたくし千羽烏月と申しますが、羽藤桂さんでしょうか？」

桂

「う、う、う、う、烏月さん！？」

陽子

「うおっ、鳥月ってアレだな！　ひと夏のアバンチュールで出会ったとかいうあの女か！」

突然の電話にしどろもどろになるわたしと、不用意な個人情報漏洩に喰らいついてくる、地獄耳な陽子ちゃん。

陽子

「嬉しそうな顔しちゃってまた。それはラブね？恋する乙女の顔ね？　最近とはちゃんそっけないのは、つまりはそーゆーことなのかー！」

陽子

「あーあ、こうなったらあたしも浮気してやろうかしらん——って、すごい美人」

陽子

「この辺の人じゃないわね——って、もしかして」

桂

「ところで鳥月さん、どうして急に電話なんて？」

鳥月

「あなたに会いに——かな」

携帯電話ごしの少しノイズの乗った割れた声と同時に、反対側の耳が涼やかな声を捉えた。

四角四面な性格が滲み出る硬い足音が止まり、まだ夏の気配を引きずった陽射しがかけた。

背中に知った気配を感じて、わたしはあわてて振り向いた。
まさか——

鳥月

「やあ、桂さん」

携帯電話をしまいながら鳥月さんが微笑んだ。

桂

「どうして——」

鳥月

「ああ」

鳥月さんがわたしに手を伸ばして、耳にあてたままの携帯電話を取り上げる。
ああ、そういえば——

前にお守りに《力》を込める方法を知っていて、わたしの所に足を運んでくれてもいい
と言ってくれたんだっけ。

きちんと約束していなかったのに、わざわざ足を運んでくれる律儀な彼女にわたしがで
きることいったら――

桂

「烏月さんっ!!」

今の幸せを知らせるために、元気な顔で微笑み返すことだった。

烏月

「久しぶり、元気そうでなによりだ」

桂

「うん……烏月さんこそっ！」

そうだ、今から三人でお茶を飲みに行こう。

昼の時間の間だけでも、烏月さんにこの幸せを分かち合ってもらおう。

そしていつかは、夜にだって――

雨垂れの音。

頬に雫が落ちる。

雨なんて降っていただろうか。

さっきまでは――そう、雪が舞っていたはず。

真っ暗な空の下、風花が舞っていた。そのひとひらが花びらに見えて、お祖母ちゃんを
オハシラサマと見間違えたんだ。

だけど――

どうして雪がこんなに温かいんだろう。

いや――それはわたしの体温で溶けて雫になったわけではなく、最初から雫としてあっ
たのだ。

――
「桂……」

薄く開いた唇の隙間から沁みて、雫がわたしの中に入ってくる。

ほんの少しだけ海の――生命の味がした。

――
「桂……」

さざなみがわたしの中で広がっていく。

これはおのずから湧いたものではなく、伝わってきた波だった。

悲しみに揺れる心――

「桂……っ!!」

悲しみに震える声がわたしの名前を呼んでいる。
どうしてわたしが呼ばれているんだろう。

桂

「ん……」

桂

「あ……サクヤさん……？」
雪でも雨でもなく涙。
ぱたぱたと落ちる涙の粒が、わたしの顔に降りかかる。

サクヤ

「桂、無事なんだね!？」

桂

「サクヤさん、泣いてるの？」

サクヤ

「だって、あたしは……」

サクヤ

「あたしはまた、守りたい人を守れなかったんじゃないかって……」

サクヤ

「あたしはまた、大切な人に置いていかれるんじゃないかって……」
子供のように泣きじゃくるサクヤさんの頭にのひらを伸ばす。

桂

「そうだね、大切な人に置いていかれるのは辛いよね……」

桂

「わたしもお母さんが死んじゃって——」

桂

「ひとりになっちゃったって思ったけど、本当はそうじゃないんだよね」
あのときだって隣にはサクヤさんがついてくれていた。

桂

「周りに誰もいなくならない限り、ひとりになんかなれないんだよね。生きている限り」
自分から人を遠ざけない限り、そうそうひとりになんてならない。
そして——

大切なひとがいなくなることがあるのと同時に、大切なひとができることもあるのだから。

桂

「それじゃあ——はい、サクヤさん」

小指を差し出して、無理矢理にからませる。

桂

「サクヤさんは特別に、一番近くにいさせてあげるから、守りたいならべったりでいいよ」

サクヤ

「桂？」

桂

「わたしはね、サクヤさんのこと、好きだよ？」

そう言ってべったりくっつくように抱きつくと。

サクヤ

「えっ!？」

サクヤさんは一瞬きょとんとした後に、顔を赤く染めて身体を硬くした。

サクヤ

「……………」

桂

「……………」

あわててぱっと、身体を離す。

桂

「あっ、その、変な意味じゃなくて……ずっと一緒にいたいと思ってるんだよ」

こうしてわたしが意識を取り戻したのは、夜もとっぷり暮れた頃だった。

いつの間にか姿を消した尾花ちゃんは、葛ちゃんを追いかけていったのだろうか——

明日とか明後日ぐらいまで遅くなると言って出て行った葛ちゃんは、宣言通りにまだ帰ってきていない。

だけど危ないことさえしていなければ、今日は帰ってこなくて良かったのかもしれない。

なにせわたしが意識を失っている間に、一昨日の夜にあらわれた双子の鬼——

ノゾミちゃんとミカゲちゃんの襲撃があったそうなのだから。

けどこちらには鬼退治の専門家の千羽さんと、わたしの血を飲んで鬼の《力》を増し

た、一昨日とは一味も二味も違うサクヤさん——

それからわたしと同じ贄の血を引き、主を封印したご神木を守るオハシラサマがいるのだ。それで負けるはずがない。

桂

「あれ……？」

そういえばオハシラサマはどうしたんだろう。

千羽

「ああ……」

きよろきよろとあたりを見回すわたしに、千羽さんは気まづげな視線を向けた。彼女が見ているわたしの胸のあたりは——

刹那感じた熱さと赤さが、記憶の奥から引き出され、再生される。

ああ、そうだった。

わたしが意識を失ったのは、千羽さんと鬼だという男の子の戦いに割って入ったからで——

桂

「あ——」

今更ながらにどっと湧いて出た冷や汗が、背中をしとどに濡らす。

そうだ、わたしは彼に切られたのだ。

胸を撫でて傷の感触はないけれど、これはオハシラサマが治してくれたせいだろう。

だから、たくさん《力》を使ったオハシラサマはこの場にはいないのだ。

それから、わたしを切った男の子は一体あの後どうしたんだろう。一体何をしに経観塚へ来たんだろう。

千羽

「奴は——あなたと同じ名を持つ、ケイと名乗っているあの鬼は、オハシラサマのご神木が封じている、かの鬼神を目覚めさせようとしている」

わたしの疑問に、千羽さんはそう答えた。

桂

「待って、サクヤさん」

サクヤ

「……まさかあんた、連れてけなんて言うんじゃないだろうね？」

桂

「ううん、そんなことは言わないから」

ほんの少し隠し事。

だけど嘘は言っていない。

連れて行ってもらうのではなく、わたしが自分の脚で、自分の意志でそこに行くのだから——

桂

「だけどその子、強いんだよね？ 主の分霊が出てきちゃった場合はもっと……」

サクヤ

「まあねえ、そうだねえ……」

鳥月

「では——」

黄金の鞘の太刀を手に、千羽さんも立ち上がる。

サクヤ

「鳥月、あんたも来るのかい？」

千羽

「人に仇なす鬼を切るのが、我ら鬼切部の使命ですから」

サクヤ

「それで桂、あたしに何の用だって？」

桂

「うん……」

言いたいことを言うために、深呼吸してサクヤさんを見つめる。

桂

「わたしは千羽さんみたいに戦えないけど、サクヤさんの力になりたいから」

桂

「だから、わたしの血を飲んで」

そうすれば、わたしはサクヤさんの《力》になることができる。

わたしの身体の一部は、サクヤさんと一緒に戦うことができる。

わたしからそういう話を持ち出すのが意外だったのか、ぽかんと目を円くするサクヤさん。

けれど、それもわずかな間で、すぐに犬歯を剥き出しにして人の悪い笑顔を浮かべる。

サクヤ

「おいおい、この堅物で恐ろしい鬼切り役の前で、あんたの血を飲めってかい？」

桂

「でも、合意の上のことだから……」

そう言いつつも、わたしもついつい千羽さんの顔色をうかがってしまう。

合計四つの瞳に映った千羽さんは、ひとつ大きなため息を吐いて背中を向けた。

千羽

「……サクヤさん、先に行きます」

千羽

「望月の夜の観月の脚なら、楽に追いつくはずですから」

サクヤ

「知らないのかい。あたしは半端者だから、四本脚にはなれないんだよ」

千羽

「では、せいぜい苦勞して追いついてください」

一礼の後、一度も振り返らずに出て行った。

真っ直ぐに庭を横切り、迷いのない足取りで鎮守の森へと入っていく。

月光の届かない森の闇へ消えていく白い背中が、たとえサクヤさんが現れなくても戦うという決意に満ちていた。

己に課せられた使命を果たすために、負けたばかりの相手に立ち向かって行くその背中が、手にした太刀に相応しい侍のものだった。

だけど、それがサクヤさんには気に入らないみたいで。

サクヤ

「ちっ、あんまり離されると追いつくのに苦勞するね」

心配しているとか、頼りにしてほしいとか、そう素直に言えないサクヤさんが何だかおかしくて、ついつい笑ってしまう。

桂

「だけどお腹が減っては戦争できないっていうし、ちゃんと飲まなきゃ《力》がでないよ」

サクヤ

「あのね、桂。どっかのシリアル食品のCMじゃないんだからさ」

桂

「あはは、だけどわたしの血って栄養ドリンクみたいなものだし」

サクヤ

「まったく、あんたもたいがいムードのない子だねえ……」

がっくりと力を抜いたサクヤさんが、わたしの肩を抱き寄せる。

サクヤ

「桂……」

桂

「サクヤさん……」

本当にいいのかと問う呼びかけに、同じように呼び返して頷くと、サクヤさんの顔がゆっくりと近づいた。

わたしはキスするみたいに目を閉じて、サクヤさんを受け入れる。

空には満月が皓々と照っているのに、覆う厚い枝葉のせいで暗い夜の山道を急ぐ。

主を封じたオハシラサマのご神木がある、この先のあの場所へ向かって急ぐ。

あの男の子が主の封じを解く前に——

わたしは揺られている。

わたしの足に合わせたら、きっと間に合うものも間に合わないから、わたしはサクヤさんの背に揺られてそこに向かう。

わたしを背負っているというのに、サクヤさんの足は緩まない。髪や袖をひるがえらせて走る千羽さんに先行して、獣の速さで山道を駆ける。

もう少し——

気は急いているのに、どうしようもないのがもどかしい。

わたしの全速力より何倍も速いのに、気ばかり急いてどうしようもない。

木々の切れ間が見えてきた。

射し込む月の光が見えてきた。

その夜色を溶かした月明かりが——

カメラのストロボを何百倍にもしたような、暴力的な光によってかき消された。

桂

「きゃあっ！」

サクヤさんが急停止して、慣性に流されたわたしはしなやかな背中に顔を埋めた。

サクヤ

「桂っ!!」

まだ白さにちかちかする視界が回復する前に、わたしは地面に下ろされる。

光に続いた轟音に、いまだ空気は震えていて、わたしは反射的にサクヤさんの背中にし

がみつきそうになり――

どうにかすんでで思いとどまった。

そうだ、こんなときだからこそ足手纏いになっちゃ駄目だ。

緑の開けた向こうから風が吹いてくる。

熱を帯びた風が髪を弄り、頬を掠めていく。

その熱波には花びらが入り混じっている。

それは自ら落ちた花びらではなく、盛りを前に散らされた――

桂

「ああ――」

オハシラサマのご神木が――

あの立派だった槐の大木が幹を裂かれ、端々に焼け焦げをつくり、無残な姿をさらしている。

わたしたちとそこの間に、重たげな何かが投げ落とされた。

進むと、赤い月が輝いていた。

月に落ちた花びらが、同心円の波紋を広げる。

空に浮かぶ月が、重たげな赤い泉に映りこんでぬらぬらと輝いている。

その赤の源泉は、人の身体だった。

十五夜の月に青白く染まるその顔は、苦悶の表情を浮かべているけれど、優しげなつくりの男の子の顔で――

サクヤ

「これは……」

わたしを切った鬼。

千羽

「どういふことだ……」

わたしたちが止めようとした鬼が倒れている。

桂

「何で……」

わたしは今の状況を飲み込めないでいる。

再びの轟音と共に夜の帳が引き裂かれ、その隙間から溢れた光が世界に白く強く焼き付いた。

その中を長く伸びた影が、わたしたちのところまで地面を這い進んでくる。

「くくくく……ははははははっ！」

びりびりとした余震がそのまま人の声になったかのような哄笑が、背中の骨にまで響いてくる。

がくがくと足が震えて立っているのが辛くなる。

千羽

「あれは——サクヤさん、あれは何だ!？」

わたしはこの声を知っている。

サクヤ

「あれが奴だよ……」

わたしはこの姿を知っている。

サクヤ

「あれが主——あたしの祖父さんらが、小角様と一緒に封じ込めた悪しき鬼神だ」

千羽

「それでは、封じの柱は……」

サクヤ

「さっきの雷で、完全に破られちゃったんだろうね」

知っている、はずなのに——

どうして今更こんなに身体を震わせなきゃならないんだろう。

世界がぐらぐら揺れて見えるのは、わたしが震えているからなのか、本当に揺れているのか。

ひとがたの現身には納めきれない、圧倒的な赤い《力》が周囲の空間を歪ませている。舞い散る白い花びらは、その歪みに触れただけで燃え尽きたように姿を消してしまう。天を衝くようなご神木さえも、赤い陽炎の向こうで苦しみがいているように見える。鬼神——

それはまさに畏怖すべき鬼（もの）だった。崇られぬように齋祭るべき神だった。かちかちと歯を鳴らすわたしの隣で、ぎりぎりと歯を鳴らす音が聞こえた。

瞳にきんの光を灯して、サクヤさんはご神木を睨みつけている。

サクヤ

「……あたしはまた、間に合わなかったのか」

ご神木からすでに事切れているのだろう男の子に目を落として、握った拳を震わせた。

伏せた顔から落ちた何かが――

血溜まりに浮いた月を揺らした。

サクヤ

「あああああああああつ!!」

神鳴りすら飲み込むような咆哮。

赤い月に吼えたサクヤさんが地を蹴った。

鋭い爪の伸びた腕を振り上げながら、疾風の獣となり駆ける。

千羽

「―――」

一呼吸遅れたタイミングで、千羽さんがわたしの隣を駆け抜ける。

何か特殊な歩方でもあるのか、サクヤさんには及ばないものの、生身の人とは思えないほど速い。

太刀を抜き足かせとなる鞘を投げ捨てる。

巖流島の戦いなら「小次郎敗れたり!」の台詞が出てくるところだけれど、鞘なんてものは戦いに勝った後にゆっくり探して拾えばいいんだ。

サクヤ

「うらあーっ!!」

駆ける速さに腕を振り下ろす速さが綺麗に上積みされるのなら、目標に爪が撃ち込まれる速さはいかほどのものになるのだろう。

きっと弾丸よりも速く、その威力たるや鋼板にすら穴を穿つほどだろう。

そんなサクヤさんの一撃に対して、主は飛んで来る虫でも払うかのごとく無造作に腕を振るう。

主の腕には不思議な模様が彫られている。

赤い蛇の模様――

それは暗闇に明々と輝き――

火雷となってサクヤさんを襲った。

サクヤ

「くっ」

ジグザグと鋭利に曲がりながら迫る赤雷の矢を察知したサクヤさんは、強く地面を踏み切る。

高々と——主すらも飛び越えたサクヤさんは、着地ざまに身体を捻って横薙ぎの爪を振るう。

主も半身を捻ってサクヤさんを側面に捕らえると、腕を伸ばして攻撃を受け止め、組んだ。

鬼の怪力は見た目に比例するものじゃないとわかっているけど、主は鬼の《力》を表に出したサクヤさんよりさらに体格がいい。

サクヤ

「——っ!!」

まともに組むのを嫌ったのか、上半身を横倒しに捻り、腰を支点とした同期で組んだ腕と同じ側の脚を跳ね上げるサクヤさん。

刹那の拮抗を見せていた押し合う同士の腕を急に引かれて、主はわずかながら体勢を崩した。

捻りの入った蹴りが、横合いから主の二の腕の筋肉の束の隙間部分へと向かって飛ぶ。

靴を脱いで裸足になった爪先にも獣の武器が伸びていて、きっとその一撃は熊のそれにも等しい威力を秘めている。

そしてそれに加え——

千羽

「はっ！」

逆側からは千羽さんが太刀を振るっていた。

縦方向からの斬撃と、横方向からの蹴撃。そしていまだ片手はサクヤさんと組み合ったままで、どちらをも避けられるとは思わない。

そしてその見事な連携の結果生まれたのは——

金属同士をぶつけたような硬い音と。

千羽

「何だと——」

千羽さんの驚愕と。

サクヤ

「くっ……このっ……」

苦痛を含んだサクヤさんのうめき声だった。

主は組んだ腕とその逆の腕を交差させるように伸ばし、サクヤさんの蹴りを受け止め、万力のような力で脚を締め付けている。

そして無防備な首元へ、鎖骨と肩甲骨を断ち割るように振り下ろされた、薪割り斧のごとき打ち込みは——

金属質の光沢を放つ、赤い鱗によって阻まれていた。

ずっ——鱗が動いた。

身体に刻まれた蛇の模様が、身体の上を這い進み、鎌首をもたげ牙を剥いた。

表皮から離れた蛇体は、つい一瞬前まで平面であったことを忘れたように物理的な現身を得て、月光を遮る影すら主に落としている。

それは身体から直接蛇が生えているといった風であり、その蛇は直角以上に口を開いて、千羽さんへと襲い掛かる。

千羽さんは後ろへ跳びながら太刀を振り上げ、蒼く右目をひらめかせ——

千羽

「オン・マカ・シリエイ・ジリベイ・ソワカッ！」

着地と同時に振り下ろす。

眼光を映し青白く輝く刃が、赤い蛇を叩き伏せるように振り下ろされる。

今度こそ鱗に阻まれず、わたしの腕ほどの太さはある蛇の胴回りの半ばにまで刃が食い込んだ。

だが——

主の身体からはさらに一匹の蛇が生まれようとしているところだった。

そして半ばまでその身を断たれた最初の一匹は、それでも動くことを止めずに体を刃へ巻きつけて、ついには千羽さんの両腕に絡み縛める。

千羽

「ちいっ」

そして千羽さんが跳び退ったあたりまで時間を巻き戻したときの、蛇のあるじその人は——

サクヤさんの攻撃を受け止め、身体の前で交差している自分の両腕を、それぞれが掴んだものを保持したままで大きく横に広げた。

身体の上肢と下肢とを左右に引かれたサクヤさんの身体は半回転し、地面に対し水平に浮き――

主はサクヤさん目掛けて腕を振りかぶり――

二匹目の蛇は千羽さんに襲い掛かり――

桂

「――ああっ」

地面に叩き付けられたサクヤさんは、手鞠のように何度も跳ねる。

サクヤ

「――っ、ごふっ」

喉元に牙を立てられそうになった千羽さんは、肩を上げ首をすくめることで難を逃れ――

千羽

「くっ……」

代わりに白装束の肩口を朱に染めた。

苦痛の声を飲み込んで、代わりに《力》を引き出す文言を唱える。

千羽

「オン・マカ・シリエイ・ジリベイ・ソワカ……」

蛇を絡ませたまま両手を振るい、地面で押し切るようにして刀身に巻きつく蛇の残り半分を断ち、自由になった手でもって肩口の蛇を引き剥がす。

こうしてどうにか自由を得た千羽さんだが、そんな彼女に主は見向きもしない。

人に在らざる鬼神は、鬼にも在らざる人のことなど歯牙にもかけていなかった。

突っ伏して血を吐くサクヤさんを冷たい瞳で見下ろしたまま、封じから解放されたばかりの身体の馴染み具合を確かめている。

主

「まだ足らぬが……さすがは贅の血の持ち主よ」

胸の高さまで腕を上げ、虚空にある何かを握り潰すような動作をすると、指の隙間から赤い火花が零れて大気を焼いた。

サクヤ

「――っ!？」

主の振るう腕から赤雷が走り、サクヤさんはそれを転がって避ける。

途中膝を立て、その勢いを使って立ち上がる。

戦いはまだ始まったばかりだ。

実際、サクヤさんが主に挑みかかってから一分も経っていないだろう。きっとその半分の三十秒、ほどのことなのかもしれない。

にもかかわらず、ふたりはそろって手傷を負わされている。

それに比べて主は、手傷どころか最初の立ち位置からほとんど動いてすらいない。

主

「随分と弱くなったものだな、観月の民に鬼切りよ。私は随分と力を奪われているのだぞ」

サクヤ

「くっ……」

主

「私がこの国を平らげるのも、それほど難しいことではないということか。あまり面白みはないが、まあいい」

サクヤ

「ちっ——させるかっ!!」

千羽

「覚悟しろ!」

再びふたりが主に挑む。

主を封じた一族の生き残りとして、鬼を切る使命を持つものとして、日頃のいさかいを捨てた完璧な連携で、圧倒的な《力》を誇る鬼神に挑む。

時には同時、時には時間差、虚と実とを巧みに織り交ぜて繰り出される爪と刃を——

主は鱗で防ぎ、主は蛇体でいなし、主は己の腕で打ち落とす。

主は二対四の手の数の不利を、身体から二匹の蛇を生やすことで埋めていた。

千羽

「くっ……」

サクヤ

「ちっ……」

激しい動きに血と汗がしぶいた。

サクヤさんと千羽さんは、苦痛の声すら出す間を惜しんで攻撃の手に苛烈さを加えていく。

その激しい剣風の只中にある主は――

口の端を皮肉げに歪めていた。
ふたりの攻撃は、いまだ主を傷つけるに到っていない。

主

「観月の民の娘よ、この程度で私に挑もうなどとよく思い上がったものだな！」

サクヤ

「――っ!!」

蛇に睨まれた蛙という例えがあるように、蛇の視線には獲物を射すくめる《力》がある。

その蛇の神に睨まれたサクヤさんは、石像にでもされたように動きを凍りつかせる。
それは実際のところほんの一瞬――長くて数秒程度のことなのかもしれないけれど、戦いの場ではそれが致命的な隙になるわけで。

桂

「サクヤさん――っ!？」

まだ硬直の解けていないサクヤさんは、わたしの悲鳴に反応しない。

主は生やした蛇に千羽さんの相手を任せ、サクヤさんに向かい手を振り上げる。
そしてわたしは――

桂

「駄目――っ!!」

相変わらずの考えのなさで、サクヤさんの前に飛び出していた。
普段はトロいくせに、こういうときだけやたらと素早いのは自分でも納得いかないけれど――

――でも、それでサクヤさんが助かるなら、それも悪くはないかもしれない。
次の瞬間の衝撃を予想してぎゅっと目をつぶる。

ああ、やっぱり――

身体に大きな穴が開いてしまった。
その穴からわたしの中身が全部出しまえば、痛みすらも出て行ってしまうのだろうか。

それはこの瞬間、とても魅力的な考えに思えたのだけれど。

サクヤ

「桂い————っ!!」

身体を貫く痛みより、サクヤさんの悲鳴の方が痛くて、痛くて。

空っぽになってしまったら、胸の中でうわんうわんと響きつづけるんだろう。

ああ、それはよくない——

空には大きな月がある。

ひやひやとした月が空の高みから地上を見下ろしている。神の視点で見下ろしている。

あれ——

わたしは倒れた。それはいい。倒れた痛みを感じなかったのは、お腹の傷でいっぱいだから。

だけど——

やっぱりわたしはもう駄目なんだろう。

雲ひとつない夜空だっていうのに、空の暗さが増したように思えた。月の光がかげって見えた。

何だろう、虫食いのようなあの闇は。

サクヤ

「あんた……よくも桂をやったね……」

主

「私とてこの娘が飛び出してくるとは——よもやこんなことになるとはな」

主

「己の分を弁えず、見境無く飛び出してくるとは……愚かな」

サクヤ

「……ああ、桂はばかだよ。あたしを庇ってこんなケガするなんて」

サクヤ

「だけど、桂がこんなことをしなきゃいけない状況を作ったあたしはもっとばかだし、あたしはそんなばかな自分が許せないし、それより！」

サクヤ

「あんたが一番許せないっ!!」

サクヤ

「あんただけは！ あんただけは何があっても許せないっ！ 許さないっ！」

主

「許さなければどうすると？」

サクヤ

「こうするんだよっ！」

主

「ほう、この《力》はまさか……」

サクヤ

「まさか何だっ！」

主

「いや……おそらく私の気のせいだろう」

主

「だが、十年前のようなしくじりもある。今の私は少しでも危険があるなら避けたいところなのだよ」

主

「ここは引かせてもらおうとしようか」

サクヤ

「待て！」

主

「その娘を放っておいていいのか？ その傷で生き長らえるかどうかは知らぬが、そのままでは確実に死ぬぞ」

サクヤ

「——！？」

主

「ははははは、私はしばらく《力》を蓄えることにするが、そのうち相見えることもあるだろう」

サクヤ

「主い——っ！！」

サクヤ

「桂！」

サクヤさんがわたしを呼んでいる——

サクヤ

「桂っ！ しっかりおし！」

この重いまぶたを上げたら朝で、全部が夢ならいいんだけど——

桂

「あ……サクヤさん……」

わたしのお腹には大きな穴が空いたままで、サクヤさんは泣いている。

月は——

虫食いだけは夢か気のせいだったらしく、月は綺麗な満月だった。

少しだけ安心したので、少しだけ頬が緩んだ。

サクヤ

「なあ、お前の《力》で何とかできないのか!？」

オハシラサマ

「助けたいのはやまやまですけど、それも、今のわたしでは……」

オハシラサマ

「ご神木がああなってしまった以上、消えるのを待つ残り火のようなものでしかないから……」

無残な姿は今のわたしとおあいこだ。わたしがもう長くないように、オハシラサマもそうなんだろう。

サクヤ

「……………」

ぎっと歯を噛み、痛いぐらいに——もっとも、それぐらいしてもらわないと感ずることができないんだけど——わたしを抱きしめた。

サクヤ

「くそっ……観月の民ならこの傷でも、助かる見込みは十分あるのに……」

自分の身体とひとつにしたいと思っているのか、わたしを抱いた腕は込めた力を増していき——

そして——

ずっと力が緩まった。

サクヤ

「……ああ、そうだよ。そうしてしまえばいいんだよ」

オハシラサマ

「サクヤさん、まさか——桂ちゃんを——」

オハシラサマ

「桂ちゃんを、人ではないモノにするつもりですか？」

サクヤ

「そうだよ」

オハシラサマ

「あなたの血で、あなたと同じ、八千代の刻を生きる化外の民に？」

サクヤ

「そうだよ」

オハシラサマ

「あなたは月の寿命を生きる巖の民。桂ちゃんは散り急ぐ桜花の民……」

オハシラサマ

「そんな桂ちゃんに、あなたの業を押し付けるんですか？」

サクヤ

「ああ、そうだよ！ あたしをこうして生かしたのは笑子さん——あんたと桂の祖母さんじゃないかつ！」

責める様子は微塵もなく、ただただ悲しげな瞳で訊ねるオハシラサマに、サクヤさんは声を荒げて言い放つ。

サクヤ

「あたしの弱さに止めを刺したのは……桂たちのよこした温もりじゃないかつ！」

誰にもわたさないと、骨が砕けてしまいそうなほど強い力で、わたしを抱きしめ言い放つ。

サクヤ

「その桂が、あたしを置いて冷たくなっていくのはゆるせない……」

サクヤ

「あたしはもうひとは嫌なんだよっ！ 誰かにおいて逝かれるのは嫌なんだよっ！」

ああ——

サクヤさんは独立独歩の人のように見えるけど、その実、人恋しさの強い人なんだ。石長比売の眷属でありながら、木花之佐久夜毘売の眷属を慕うなんて性に生まれついたから——

サクヤ

「……………」

サクヤなんていう言霊をつけられたのだろう。

サクヤ

「……だから……だから桂に、責任をとってもらうんだ。あたしと一緒にいてもらうんだ」

オハシラサマ

「そう……」

サクヤ

「それに桂は、あたしを好きだって言ってくれたんだ。一緒にいたいって言ってくれたんだ……」

オハシラサマ

「……そう……」

サクヤ

「だったら……だったらいいだろう？」

桂

「いいよ……」

サクヤ

「桂!？」

桂

「わたし、いいよ。ずっと……サクヤさんと一緒にいてあげる」

だるい腕を持ち上げて、サクヤさんの頭をよしよしと撫でる。

サクヤ

「桂……あ……あり、ありがと……」

桂

「ふふっ、そんなふうには子供みたいに泣かないで」

桂

「それに……ちょっと苦しい……かな」

ぎゅっと抱きしめられるのは嬉しいけど、そんなに力を入れられたら中身が全部でていってしまいそう。

桂

「サクヤさんの血を飲めば、わたしも観月の民の人みたいになるんだね」

サクヤ

「そうさ」

桂

「ずっとずっと、一緒にいられるんだよね」

サクヤ

「そうさ。長くて……ひとりで生きるのには辛いほどの長い時を」

桂

「うん……」

わたしは顔き目を閉じて、抱き寄せられるままに——
かつてサクヤさんがそうしたように、その首筋に唇を寄せた。

こうしてわたしは死の淵から甦った——
いや、甦ったというよりは、生まれ変わったと言うべきだろう。
あの鬼神すら警戒して退いたサクヤさんの血は、わたしに流れる贄の血を劇的に変質させる触媒となった。

わたしはもう人ではない。
かといって観月の民ではなく——

その験（しるし）は、わたしとつながっているサクヤさんもまた顕れ——

そして時間は流れていった。

廻り巡る月に運命の糸を巻き取られて、人間であった羽藤桂の知り合いはみんな逝ってしまったのに、この身体は育たず、枯れず。

吹く風にさらされつづけた心だけが、過ごした年月相応に硬く乾いていった。

あの空に浮かぶ月と同じように——いや。

月と違ってわたしたちは独りじゃないから、まだ大丈夫だ。生きる目的だってある。

サクヤ

「桂、感じるかい？」

桂

「うん、サクヤさんみたいに臭いじゃわからないけど……わたしの血が反応してる」

ざわざわと血が騒いでいるのは、血が満月の引力に引かれているせいだけじゃない。

この熱いとも冷たいともつかない、刃が肌に食い込んだような感覚は——

サクヤ

「鬼だね？」

桂

「間違いないよ。それにこの感じ、主の干渉を受けてる鬼だ」

わたしは黄金の鞘から二尺四寸の刃を抜き放ち、逆手に構えて振り上げる。

渦巻き状の肌合いをもつその刀身の半ばには、横に走った傷がある。
わたしと同じように、あの日に壊れて甦った破妖の太刀を――

投げ槍のように扱い、飛ばした。

月光に青白く輝くそれは、流星のような尾を引きながら鬼の脚を掠めて通り――

鬼

「――！？」

深々と刃をコンクリートに突き立てて止まった。

桂

「もう逃げられないよ」

そう宣言して、投げた太刀を追いかける。

突然の負傷に驚いていた鬼は、わたしの姿を見つけるやいなや、わたしの太刀に手を伸ばした。

とっさに武器に手を伸ばす程度には知恵の回る鬼だけれど――
舐められたものだ。

太刀に込められたわたしの《力》が、柄に触れた手をしたたかに焼き、手痛い拒絶を受けた鬼は、慌てて後ろに飛び退った。

一目散に逃げ出したなら、もしかしたら逃げ切れたかもしれないのに――

わたしは余裕の態度で近づくと、コンクリートの頸木から愛刀を解き放った。

桂

「まったく、わたしを誰だと思ってるのかな」

鬼

「役行者の再来――善鬼を従えた鬼切りの鬼――」

わたしを追って跳んできたサクヤさんが、わたしの前に降り立った。

サクヤ

「そうさ。桂は小角様と同じように、贄の血の使い方を覚えたからね」

桂

「今度こそ主を選ずためにね」

サクヤ

「じゃあ、そういうことだから——」

桂

「教えてもらえるかな。主がどこで何をしているかを」

桂

「……ごめんね」

わたしはなけなしの力を振り絞って、ゆっくりと首を振る。

あはは、もう本当にゆっくりしか動かないや。

桂

「……サク、ヤ、さん……」

声まで弱々しく掠れてみっともない。心配してくれてるのは嬉しいけど、サクヤさんが泣きそうな顔してるじゃない。

桂

「サクヤさん、わたし約束やぶっちゃったけど、また約束しても……いいかな？」

答えのかわりに、ぽつりと熱い雫が降ってきた。

うんと頷いたはずみに、わたしの頬まで零れ落ちた。

わたしは頑張って元気な声を出そうとしたんだけど——

ごめんね、上手くいかなかったみたい。サクヤさんのこと、泣かせちゃった。

でも、丁度良かった。

これならわたしの無理やりな笑顔も、かすんで綺麗に見えるよね？

わたしは精一杯の力でサクヤさんの首に両手を回した。

桂

「あはは、泣いちゃ駄目だよ……子供じゃないんだから」

小さい子にするみたいに、頭の後ろをそっと撫でる。

泣いた顔を見られたくないのか、ぎゅっと抱き返してくれたから、わたしはサクヤさんの耳元に顔を寄せることができた。

これならわたしの小さい声でも、きっと聞こえるはず。

桂

「わたしが死んでも、サクヤさんはちゃんと生きるって……大丈夫だって約束して……」

サクヤ

「桂……」

桂

「ほら、約束してよ……」

目の前が暗くなっていく。
だけど、わたしの小指にサクヤさんの小指はなかなかからまない。

桂
「ねえ、サクヤさん……」

サクヤ
「桂……」

もう——駄目かもしれない。

わたしの意識は、闇の中に落ちていった。

わたしにぶつかってきた衝撃は、突き刺さるようなものではなく。

桂
「千羽さん！」

主の攻撃に弾き飛ばされた千羽さんが、玉突きのかたちでわたしにぶつかったものだった。

それを支えきれないわたしは、後ろのサクヤさんをも巻き込んで倒れる。

それがサクヤさんの硬直を解いた。

サクヤ
「烏月、あんた何で……」

千羽
「あなたの大切なものを奪った鬼切部としての、最低限の償いです」

千羽
「そして何より、無辜の人を鬼より守ることこそ、鬼切部に科せられた本来の役割——気にすることはありませ——」

そう言いかけて——

千羽
「——かはっ」
喉の奥からこみ上げた血が、狩衣の白い胸を汚した。

桂
「千羽さん、ケガを！？」
二匹の蛇の牽制を強引に振りほどいてわたしの前に割り込んだのだから、ケガは当然。
だけど血を吐いたのは蛇の牙によるもの咬傷などではなく。

千羽

「どうやら内臓とあばらをやられたようです。一応、防いだつもりだったんですけど——」

千羽

「——まさか、折れず、錆びずのこの維斗が、こうも容易く折れるとは思いませんでした」

維斗という名の二尺四寸の秋水は、主の攻撃を受け止めることができずに、その身を元の半分の長さにしていた。

刃の盾を打った主も、その手に傷を負っていたのだが、湧き出た血はあっという間に凝固して、今ではもう赤い鱗となり傷口を鎧っている。

武人の魂ともいえる太刀と引き換えにその程度——それが最初の傷らしい傷であったのだが——では、まったく割に合わない。

主

「笑止。我が祖を切った天羽羽斬とてその刃を欠いたのだ。その程度の太刀が折れずにもうか」

千羽

「……くっ……」

折れた維斗を握り締め、千羽さんは主を睨みつける。

邪視もかくやの殺気を込めているけれど、きっとそれが今できるすべてなんだろう。重傷を負った千羽さんは立ち上がることすら——

サクヤ

「烏月、恩に着るよ」

だから、サクヤさんが立ち上がる。

サクヤ

「千羽党の鬼切り役の証しを——あんたがその太刀を犠牲にして守ってくれたものは、あたしにはかけがえのないものなんだ」

わたしの肩に手をかけて立ち上がったサクヤさんは、わたしたちの前に出る。

サクヤ

「桂、烏月と一緒に……下がってな」

桂

「サクヤさん、でも！」

サクヤ

「今さら逃げられると思うかい？ 全力で逃げるにしても、ケガした烏月を放っていけるかい？」

桂

「そんなことは——」

サクヤ

「できないだろう。だったら戦うしかないのさ。あたしが退いたら、あんたは確実に奴の餌だ」

確かにそうだ。反論できることは何もない。目の前が暗くなっていく。

それは見通しの暗い現状による心因性のものだとばかり思っていたのだけれど——

圧倒的な《力》を見せ付けている、主までもが眉をひそめて首をもたげる。

主

「……雨雲？ いや……」

夜空に雲は出ていない。

雲に遮られることなく、無限の虚空（そら）が続いている。それなのに陰っていく。

サクヤ

「ああ、月が……月が……」

皆と同じように天を仰いだサクヤさんが、絶望のうめきを漏らした。

サクヤ

「こんなときにまで、あんたはあたしを見放すっていうのかい……」

昼の世界の光を映して、夜の世界を照らす天空の鏡——

その月が欠けていく。

真円を描いていた十五夜の月が、端から黒く蝕まれていく。

それはサクヤさんの心が塗り潰されていく様子にも見えて、わたしは——

桂

「でも、こんな月蝕なんて……」

千羽

「これは羅†……」

わたしにしか聞こえないほどの声で、千羽さんがつぶやいた。

桂

「羅†？」

千羽

「見ての通り……凶兆だ」

きっとそうなのだろう。

特に月のない夜に生まれたというだけで「半端者」だなんて劣等感を抱いてしまう、観月の民のサクヤさんにとっては――

主

「まあよい。我ら禍神の一族とて、月より長き生命を得ているものだが、おぬしら観月のものほど影響は受けておらん」

空からこちらへ視線を転じて、抜き手を作った腕をきりきりと振りかぶっていく。

主

「さて――」

月は黒いものに完全に覆われ、その向こうからわずかに光輪を覗かせているにすぎない。駄目だ。もうわたしにできることは何もない。

サクヤ

「がああああっ!!」

目の前に広がる、赤。

サクヤ

「桂……」

赤の中でサクヤさんが崩れ落ちる。

赤の中に金色の星が輝く。

その金色はサクヤさんの瞳と同じ色合いなのだけれど、温度のなさは対極ともいえるもので――

主

「竹林の長者の姫君は、ついに私のものにはならなかったが――」

主は、わたしの目の前に来ていた。

主

「贅の血を引く娘よ……その力を我に捧げよ」

桂

「そんなこと――許せない」

たとえ石長比売がサクヤさんを見捨てたのだとしても、わたしだけは絶対に。

だからわたしは折れた維斗を千羽さんの手から奪い取り、それをしっかりと構えてサクヤさんの前に立ちはだかった。

主

「……ほう？ 贄が神に抗うか？」

桂

「わたし、神様なんて信じないことにしたから。こんなときにサクヤさんをいじめるような神様なんていないから」

もとより神様なんて信じていなかった。

本気で祈ったことなんてなかった。

神頼みだなんて今更だ。

だいたいその神様が今は敵なんだから。

命乞いに応じてくれるような神様じゃないんだから。

桂

「だから、わたしは——」

わたしが今、信じている。

わたしが今、守りたいと思っている。

大切な人に向かって、祈りを込めて訴える。

桂

「——お願いだから——サクヤさん——」

震える脚をたしなめて、無理やり動かす強い気持ちを。

逃げ出したくなる弱いわたしを、ねじ伏せられる強い勇気を。

桂

「——わたしに戦う力をちょうだい！」

主

「はははははっ、負け犬風情に何をもらおうというのだ。見ろ、その情けない有り様を。置き去りにされたことを——」

それ以上は言わせてたまるかど、切りかかろうとしたわたしの肩を、力強い手が包んで止めた。

桂

「……サクヤさん？」

サクヤ

「ああ、今になってわかったよ……」

ずっと空を見上げたせいで凝ったとばかりに首を振りながらつぶやいた。

サクヤ

「あたしが生まれた夜も、こんな夜だったってことを……」

月のない満月の夜——

そんな夜に生まれたのだから、見捨てられただなんて思うのはお門違いだと——今度こそ怖れも迷いも振り切って、サクヤさんは主の前に立つ。

そうだ、むしろこれは誕生を祝った吉兆であり、主にとってこそ凶兆だ。

主も月の加護を受けているのだと、自ら語っていたはずだ。

ざっ——

サクヤさんは怖れも迷いも振り切って——

今までとは違う種類の《力》を迸らせて——

敢然と主へ挑みかかった。

サクヤ

「主い——っ!!」

主は、向かいくるサクヤさんの姿を炯々と輝く瞳に捉え——

ひとがたの現身に満ちた《力》を即座に束ね、サクヤさんへと向かわせる。

《力》の塊そのものの蛇が、月明かりをなくした夜闇を裂いて進んでいく。

その蛇は先ほどまで生やしていたものに比べて何回りも大きく、その体は赤く輝いており——

右に左に折れ曲がる軌跡を焼き付け進むそれは、蛇であるのと同時に神の武器たる雷霆でもあった。

今度こそ主も本気なのだろう。

その昔、役行者との戦いで使ったものに等しい《力》をサクヤさんに向けて放った。

それも、まとめて八匹も。

主に向かって駆けるサクヤさんは疾風。

サクヤさんを迎え撃つ八匹の蛇は迅雷。

その相対速度ゆえに、ぶつかり合うまでの猶予は刹那をさらに分割したほど。

そしてサクヤさんは——

サクヤ

「この——邪魔だよ！」

顎（あぎと）の形に指を折り、向かい来る八つの頭を薙ぎ払う。

主

「——っ!？」

顎に触れた火雷の蛇は食い散らかされた。

弾かれたのでも、方向を捻じ曲げられたのでも、同等の《力》とぶつかり合ったわけでもなく——

ブラックホールに飲み込まれてしまったように、文字通り触れた端から消滅した。驚愕に目を見開いた主へと続く、頭を潰された蛇の体を消し飛ばしながら突き進み——

ついにサクヤさんは主の下へ辿り着いた。

主

「……まさか、まさかおぬしは……」

普通ではない特殊な生まれ方をした子供のことを鬼子と言ったりするけれど——そして鬼が人を越える《力》を持つものならば、鬼にとっての鬼の《力》は——けれど。

サクヤ

「まあ、そんなことはどうでもいいね」
そう、どうでもいいことだ。

サクヤ

「あたしは観月の民としてじゃなくて、単なるひとりのあたしとして、大切な人を守りたかっただけなんだ」
人でも鬼でも鬼以外の何者かでも、サクヤさんはサクヤさんなんだから。

主

「月蝕の夜に生まれた娘……まさか、まさか貴様！貴様の《力》は、月神に因るものではなく——」

サクヤ

「今日が満月だろうか新月だろうが、そんなことは関係なかった……」

主

「その荒ぶる弟神、我が祖を討った羅^々の《力》かっ!？」

サクヤ

「あたしは最期の観月の民としてじゃなく、単なるひとりのあたしとして、桂を守りたいっただけなんだっ!」

サクヤ

「でもね、あたしは邪魔なものはスパッと捨てられる片付け上手だよ」

何てことを言っていたっけ。

だとするとこれは邪魔じゃない、サクヤさんにとっては厳選された宝物というわけで。

桂

「それにしても重いなあ、これ」

少なくとも衣類ではないずっしり感。

中身は一体何だろう——

想像しながらよたよた運んでいると、まだまだ余裕ありげなサクヤさんが追いついてきた。

サクヤ

「ああ、それはあたしが持つよ」

桂

「いいよ大丈夫。でもこれ中身何？ 本とか？」

そうだ、この重さは古文と英語が重なった日の、辞書まで完備のかばんのものに似ている。

これはみっしり紙類を詰めたときの重さに違いなく——

サクヤ

「アルバムだよ」

答えは惜しいニアピン賞。

サクヤ

「さすがにあたしぐらい長く生きると、すごい量になるからねえ」

サクヤさんってばフォトグラファーだし——

桂

「ってゆーか、サクヤさん写真できてない時代の方が長いでしょ」

と振り向こうとして、荷物の重さにバランスを崩したわたし。

桂

「わっ、わわわっ！」

サクヤ

「ちょっと、桂！」

サクヤ

「桂〜〜」

今日からふたりの新しい生活が始まる。

わたしは長くてもあと百年生きられないだろう桜花の民だけれど、その後もずっとサクヤさんのアルバムに残るような日々を送れるといい——

いつまでも、ついのおきまで、横に並んで。

りん——

お屋敷を出ると、鈴の音が聞こえてきた。

庭の向こうにある鎮守の森の奥から、四つの赤い灯火が近づいてきた。

ノゾミ

「行かせはしないわ、あの場所へは」

ミカゲ

「主さまのところへは行かせない」

ノゾミ

「封じの柱を解くための、大事な儀式の途中だもの」

ミカゲ

「儀式の邪魔は誰にもさせない」

月光に輝く現界とその光を拒んだ幽界の狭間に立った彼女たちは、そこに結界を張った。獲物を捕らえ絡め取る蜘蛛の巣のような結界を張って、オハシラサマのご神木へといたる道を閉ざした。

霊的な《力》によって張られた結界を破るには、正しい手順を踏んで解くか、同等の《力》をぶつけるか、術者を倒すか——

サクヤ

「ちっ……こんなときに！」

オハシラサマがいない今、こちらの戦力は物理的な方向に偏っている。

わたしたちが必死なら、彼女たちも必死なのだろう。サクヤさんの言葉を聞いても、彼女たちはいつものように笑わない。

ただただ瞳を光らせて、油断無くわたしたちの動向を見守っている。こちらが動かなければ彼女たちも動かない。彼女たちはそれでいいのだ。

だけど——

こちらは相手の出方を待つ余裕なんてない。

千羽

「ひゅ——」

だから千羽さんは黄金の鞘から抜き放った刃を担ぎ、そこに剣気を凝らせながら走る。

立ちふさがるものを切り倒して進まないことには——

サクヤ

「待て！」

一瞬出遅れてサクヤさんも彼女に続いて走る。折角二対二で戦える条件が揃っているのに、千羽さんひとりが突出したのでは意味がない。

ノゾミ

「ミカゲ」

ミカゲ

「はい、姉さま」

乱戦のかたちを嫌ったのか、ノゾミちゃんたちは左右に跳んで二手に分かれた。

サクヤさんは右へ跳んだミカゲちゃんを追って軌道を曲げて走るけど——

千羽さんは彼女たちには目もくれず、図らずも障害のなくなった中央の道を走りつづける。

向かう先は——糸の結界。

千羽

「はっ！」

青みを帯びた鬼切りの刃が、糸を切り裂き落とされる。

一本——二本——三本——四本——

幾重にも張り巡らせられた《力》の糸を断つごとにその太刀行きは速さを失い、ついに半ばにして止まってしまう。

千羽

「はあっ！」

裂帛の気合いを發してさらに切り下げる。

ざんっ——

ついに破妖の太刀は幹竹割りに糸を断ち切り、刃の先を大地に埋めた。

ノゾミ

「あ——何てこと——」

よもや自分を無視して結界を切りに行く——そして切られるとは思ってもみななかったんだらう。

立ち止まったノゾミちゃんを一瞥すると、土を弾いて太刀を跳ね上げ、中段に構えながら言う。

千羽

「サクヤさん、ここは私が引き受けます」

今度は自分が結界になる番だとばかりに、千羽さんは森の入り口に立ちはだかった。

サクヤ

「鳥月？」

千羽

「時間がありませんから、先を急いでください」

桂

「千羽さん、そんな！」

千羽

「いいですか、わたしはすでに奴には負けているんです。ですから一緒に行ったとしても、役に立つとは限りません」

千羽

「ですが、ここであの鬼たちの足止めぐらいなら果たせます」

それが采配のように維斗の太刀を振るう。

千羽

「さあ、行ってください」

桂

「駄目だよ、千羽さん」

千羽

「……桂さん？」

桂

「各個撃破は愚の骨頂って、何かの本にも書いてあったし、わたしの友達が敵をやっつけるゲームをしながらも、そんなことを言ってたよ」

サクヤ

「……だね」

サクヤさんも拳を鳴らして、ここで戦う意志があるとアピールしながら前に出る。

サクヤ

「鳥月、こんな連中はさっさと片付けて先にいくよ！」

ノゾミ

「あら、こんな連中ですって——」

怒りに瞳を赤く染めたノゾミちゃんが、脚を踏み鳴らして柳眉を逆立てる。

ノゾミ

「観月の民の出来そこないが、ずいぶんと失礼なことを言うのね」

ミカゲ

「私たちは現身をもたない、幻のようなもの」

ノゾミ

「その私たちを、あなたたちがどうにかできるというの？」

ミカゲ

「ろくに術も使えないあなたたちが？」

サクヤ

「くっ……」

ノゾミ

「ハシラは主さまのところでしょうから、ここにくることはなくってよ？」

有効そうなこちらの手札は、結界を破った破妖の太刀だけで——そう考えるとわたしたちが残ったのはまったく意味がないことなのかも。

どうしよう、どうしよう——

わたしが頭を抱えたそのときに。

千羽

「千羽妙見流——『鬼切り』！」

問答中にもかかわらず、そんなものは無用だと、横合いから切り付けた。

離れた間合いからのまさかの一振りは、誰もが予想しなかった完全なる不意打ち。

もちろん鋼の刃は届かずに、空を切るに止まったのだけれど。

二尺四寸の刃よりも長く伸びた不可視の刃が、ノゾミちゃんとミカゲちゃんを共々に断った。

切り口から吹き出す霧状の《力》が、血飛沫のようにも見えた。

桂

「あ——」

あまりのことに、口をだらしなくあけてしまうわたし。

ノゾミ

「その技は十年前と同じ——」

ミカゲ

「鬼切り役の——」

千羽

「効くだろう？ この技は鬼を——すなわち死者の魂を切るための技なのだという」

この一撃で仕留めたという自信があるのか、血振りのように一振りしてた太刀を鞘に収める。

千羽

「奴が主に屈する前に、私に授けてくれた技だ」

ノゾミ

「あの子、最期まで私たちの邪魔をするのね——」

《力》が抜けていくに従って、彼女達の姿は希薄になっていく。

ノゾミ

「それにしても今度は、何年眠らなければならないのかしら」

ミカゲ

「姉さま、心配いりません。きっとすぐに主さまが《力》を与えてくれますから」

ノゾミ

「あら、そうね。そろそろ主さまがご自身の身体を取り戻しているところかしら——」

主の封じられている、オハシラサマのご神木がある山の方に目を向けて——

いつもの意地悪そうな笑いを浮かべた。

ノゾミ

「うふふ、逃げるなら今のうちよ？」

千羽

「誰が逃げるか」

ノゾミ
「逃げないの？」

千羽
「逃げはしない」

ノゾミ
「それじゃあ、私たちが目覚めるころには——」

ミカゲ
「あなたたちはもういない」

ノゾミ
「それならきちんと別れの挨拶をしなければね」

ノゾミ・ミカゲ
「さようなら——」
そしてノゾミちゃんとミカゲちゃんは、空気に溶け込むようにして掻き消えた。
もう残っているのはただの闇。

千羽
「では、先を急ぎましょうか」

サクヤ
「ああ……それにしても鳥月……」

千羽
「何でしょう？」

サクヤ
「あんた、意外にこすい手を使うんだねえ」

桂
「確かに……すごい不意打ちだったよね」

千羽
「あなたたちが気を引いてくれたのと、彼女たちの増長のおかげです」

桂
「それにしたって……」

千羽
「鬼切りに手段の是非はありませんから。サクヤさんは身をもって知っているはずです」

サクヤ

「……ああ」

そういえば源頼光が酒吞童子を退治したときも、変装して本拠地に侵入した上に、お酒で酔い潰して寝込みを襲ったりしたんだっけ。

人が鬼と戦い勝つには、それぐらいしなきゃいけないのはわからなくもないけれど——鬼切りって、昔から勝てば官軍だったんだ。

桂

「行こう、サクヤさん」

サクヤ

「……わかった」

わたしたちは千羽さんの横を通り抜けて、鎮守の森へ足を踏み入れた。

サクヤ

「烏月、あんたのことは気に食わないけど、死ぬんじゃないよ！」

千羽

「それはこちらの言葉です」

千羽

「あなたの相手は主——彼女達のような、弱い小鬼ではないんですから」

サクヤ

「わかってるよ！」

ノゾミ

「ミカゲ、足止めを——」

千羽

「させはしない！」

千羽

「鬼切部千羽党が鬼切り役、千羽烏月が千羽妙見流にてお相手いたす」

空には満月が皓々と照っているのに、覆う厚い枝葉のせいで暗い夜の山道を急ぐ。

主を封じたオハシラサマのご神木がある、この先のあの場所へ向かって急ぐ。

あの男の子が主の封じを解く前に——

わたしは揺られている。

わたしの足に合わせたら、きっと間に合うものも間に合わないから、わたしはサクヤさんの背に揺られてそこに向かう。

わたしを背負っているというのに、サクヤさんの足は緩まない。髪や袖をひるがえらせて走る千羽さんに先行して、獣の速さで山道を駆ける。

もう少し——

気は急いているのに、どうしようもないのがもどかしい。
わたしの全速力より何倍も速いのに、気ばかり急いてどうしようもない。

木々の切れ間が見えてきた。

射し込む月の光が見えてきた。

高くそびえるご神木はいまだ健在で——

その前には、ふたりの人物の影があった。

オハシラサマ

「もうわたしがわからないの？」

ケイ

「この《器》のものに話し掛けているのか？ 封じの柱の継ぎ手よ」

ケイ

「ならばすでにそれは無駄——《器》の魂は粉みじんに砕け散った。ここにあるのは私の魂のみ」

そう言って彼は自分の胸を指し示し、両目を赤く光らせた。
その妖しい輝きはノゾミちゃんたちの瞳に灯る人に在らざる鬼の証しと同じで——
同じなのにより禍々しくて——
彼はもう主の分霊そのものでしかないのだと、わたしにまでわかるほどだった。

主

「くくくっ……」

主は唇の両端を大きく大きく吊り上げて笑い、一歩ご神木へと近づいた。

オハシラサマは月光色の蝶をぶつけてその歩みを阻もうとして——

主

「柱の継ぎ手よ、おぬし程度の《力》では私を止め置くことはできん。何より——」

赤い《力》で鎧った腕を一振りして、その軌道上にいる蝶を消し去り、さらに一步を踏み出す。

オハシラサマはきゅっと唇をかみしめて、次々と光の蝶を召喚する

けれどわたしの目には、その行為は無駄なだけのように映って——

主

「そうやって柱の《力》を使い果たした場合にも、封じは解けるのだ。私としては結果は

変わらぬ」

実際にそれは徒労に過ぎなかった。

封印の維持以外に回せるオハシラサマの《力》はそれほど大きくないのだから、仮に主の分霊をどうにかできたとしても、そのときは。

だからオハシラサマでは駄目なのだ。

だけど——

サクヤ

「そうかい、それならバトンタッチだ！」

オハシラサマ

「サクヤさん！」

いくら強大な《力》を誇る主の分霊とはいえ、その魂を納めているのは人の身体だ。物理的に干渉する《力》をほとんど持たないオハシラサマでは止められない相手を、サクヤさんは腕づくで止めることができる。

極端な話、捕まえて動けなくしてしまえば、悪さを働くことができなくなる。

ギリギリのところまで間に合ったのだ。

サクヤ

「封じが緩みかけてるだろう。あんたはそっちに集中するんだ——桂！」

桂

「はい！」

サクヤ

「悪いけど、オハシラサマに《力》を」

桂

「うん。わかった！」

それが足手纏いのわたしがここにいる、唯一の理由のようなものだから。

わたしが贅の血を飲ませるためにオハシラサマのところへ向かっている間に、サクヤさんと主は睨み合いつつ互いの間合いをうかがっていた。

サクヤさんの鉤爪状に指を曲げた構えは、カンフー映画で見たことがある、動物の動きを取り入れた拳法のものに少し似ていて——

対する主は構えらしい構えを取らず、両手をだらりと下げている。

ああ、今更だけど烏月さんと戦っていた彼とは中身が違うんだ。

サクヤ

「その中には、もうあの子の魂はないんだって？」

主

「この《器》は私のものだ」

サクヤ

「そうかい——それじゃあ遠慮なくやらせてもらうよ！」

サクヤさんが地を蹴り主へと向かい——

主はサクヤさんを迎え撃つ。

主の腕が振り上げた鞭のようにしなった。

それが打ち下ろされるよりも早く、サクヤさんは次の行動に移っている。

サクヤさんは——姿を消した。

目標を見失った腕は、その延長線上にある地面を激しく叩いた。

えぐられた土が爆ぜて、積もっていた白い花びらが再び舞った。そして——

こうして離れて見ているのに見失ってしまうほどの速さで横に跳ね、直線的に伸びてくる主の手を避けたサクヤさんが——

腕を伸ばしきって、隙だらけになった主を殴りつけた。

きっとその一撃は、大の大人が鉄の鍬(くわ)を思いっきり振り下ろしたよりも強く——

のけぞった主に、逆の腕がもう一発。

サクヤ

「どうした、どうした！」

嵐のように両手を振るい、主を滅多打ちに叩き続ける。

先手必勝。相撲なんかでも突っ張りの嵐に耐えてまわしを掴むには、相当な地力が必要になる。

主

「ぐっ……」

主は防戦一方で両腕を上げて身を守っている。

これは勝負がついたかもしれない——わたしがそう思ったとき。

主

「……舐めるな、小娘！」

主は打ち付けられたサクヤさんの腕ごと、力任せに腕を振り払った。
ただ純粋な腕力に、サクヤさんの両足が浮いた。

サクヤ

「——っ!!」

懸垂の要領で身体を持ち上げ、驚くほどの柔軟さで身体を折り、現状唯一足掛かりになりそうな主の腕に足を掛け——

振り切られる主の腕。

その勢いに吹き飛ばされると同時に、自ら跳んで距離を離す。

サクヤ

「ちっ……」

ほとんどダメージを受けず一方的に攻撃をしていたのに、着地寸前のサクヤさんは舌打ちをしていた。

その視線の先にいるのはもちろん主で——
滅多打ちにあった主の腕は赤く——

赤く《力》が凝り、鱗状の鎧となっていた。

サクヤさんが無傷なら、あれだけの攻撃を受けた主もまた無傷。

わたしの血を飲んで強くなったサクヤさんの《力》と主の分霊の《力》は拮抗している。

サクヤ

「うらあ——っ!!」

着地でたまった膝のばねを解放させて、サクヤさんは再び主へと向かい——

主

「はあ——っ!!」

今度は主もサクヤさんへ向かって走る。

拳と拳がぶつかり合い、火花を散らせる。

サクヤさんの攻撃を主が受け止め——

サクヤ

「このっ!!」

主の攻撃をサクヤさんがかわしいなす。

主

「よくもっ！」

速さと技はサクヤさんが上回り、攻撃力と防御力で主が上回り、その総合力は拮抗している。

桂

「あ……」

それに最初に気付いたのは、おそらくはわたしだった。

戦いに集中しているふたりは、そんなことにかまけている暇はないだろう。

桂

「月が……」

空を見上げていなければ、単に雲が懸かったのかと思ったはず。

だが、見上げる空には雲はない。

遮るものは何もないはずなのに、月が黒く欠けていく。

桂

「月蝕……だけどそんな話は……」

これほどの天体現象なら、テレビのニュースで話題にならないはずがないのに。

そしてついに、空から月の姿が隠れた。

いつの間にかふたりも間合いを大きく取って、月のない空を見上げていた。

主

「は……ははっ、残念だったな、観月の民の娘よ。ついにお前は見捨てられたようだな」

主

「我ら禍神の一族とて月の影響は受けてはいるが、おぬしら観月の民に比べれば些細なもの」

主

「お互い《力》の低下は否めないところだが、その減る量には歴然とした差が出る」

主

「ここまではほぼ互角の《力》であったが、この先は——」

サクヤ

「いや、残念だけどね。満月だろうが新月だろうが月蝕だろうが、実のところあたしにはあまり関係ないんだよ」

そうだ、サクヤさんは観月の民でありながら、それほど強い影響を受けているわけじゃない。

サクヤ

「あたしが生まれたのは、月のない晩だったっていうからね」

主

「何だと……？」

サクヤ

「そうかい、それはいいこと聞いたよ。あんたの《力》は目減りしてるんだってねえ」

サクヤ

「それじゃあ、あたしが勝ちをもらおうよ！」

そこから先は始終サクヤさんのペースだった。

赤い《力》を凝らせた鱗は今までのような強度を失い、サクヤさんの攻撃によるダメージを防ぎきることができない。

主

「ぐっ……」

そして速さと技に勝るサクヤさんは、今まで通りに次々と攻撃を当てていき――

主

「ぐっ――はっ――」

一撃一撃は致命傷には程遠いものの、毒のようにじんわりと主を追い詰めていき――

そして、ついに、主が膝をついた。

サクヤ

「さて、そろそろ終わりにしようか。月だっていつまでも食われっぱなしじゃないだろうしね」

主

「くっ……このままでは……」

そのとき――

桂

「――！？」

わたしと主の目が合った。

主

「くっ……くははっ……ははははははははっ！！」

主は笑いながら走り出した。

哄笑を発しながら、わたしの方へ向かってくる。

主

「この《器》の持つ贄の血は《力》に換えられんが、あの娘の血ならばどうだ!？」

サクヤ

「ちっ——させるかっ!!」

月からの《力》を失った主よりも、サクヤさんの方が断然速く機敏な動きをする。

主を追い越して、わたしの前に立ちふさがった。

主

「別に贄の血だけが目的ではないのだ——」

主は全力の《力》を腕に込めて振りかぶった。

主

「後ろにその娘を庇っていては、おぬしはこれを避けるわけにはいくまい？」

サクヤ

「ちいっ、こすっからい奴だね！ 悪知恵が回るのは禍神の性かい！」

主

「ふははははははっ!!」

そのときが迫っている。

そしてわたしは——

目の前に広がる、赤。

月下に照らし出される、赤。

主

「おぬしを観月の民の例に当てはめていいものかは分からぬが……」

サクヤ

「がああああっ!!」

主

「いくら強靱な生命力と再生能力を誇る、満月時の観月の民でも、はらわたを引きずりだ

し、心臓を握りつぶせば生きてはおれまい」

サクヤ

「ちっ……この、調子に乗るんじゃないよ！」

お返しとばかりに、サクヤさんの腕が主の身体に潜り込んだ。

サクヤ

「あんたが頭を潰さないと死なないって有名な、しぶとい禍神の一族でもさ」

サクヤ

「……これは《器》の身体なんだよねえ」

主

「ぐっ……」

サクヤ

「その分霊で遊ぶのはお終いだよ、主。この身体はもう助からない」

主

「はっ……ははっ……どうやらそのようだな」

主

「だかしかし、これは私の分霊。私自身が滅びるわけではない」

サクヤ

「ああ、わかってるよ……」

主

「はははっ、この十年の目覚めは私の負けで終わるようだが、私はまだまだ滅びぬぞ」
血を吐きながら主が笑った。

主

「ははははっはははっはははは——！」

耳障りな笑い声。

優しげだった男の子の顔を醜く歪めて、主は歪（ひず）んだ波動を放ちつづける。

サクヤさんはその顔から、ひどく辛そうに目を背けた。

サクヤ

「……頼む」

オハシラサマ

「はい」

オハシラサマ

「主の分霊を——還します」

それがオハシラサマ本来の役目だということはわかっているのだけれど。
還さなければ主の分霊が新たな《器》を得てしまう危惧があるのはわかっているのだけれど。

桂

「サクヤさん、駄目——————っ！」

サクヤ

「桂……あんた……」

桂

「うぐっ……別に痛くない……なんてことはないけど……」

サクヤさんを突き飛ばしたわたしのお腹に、主の腕が突き刺さっていた。

サクヤ

「桂……桂……何でこんな……」

桂

「だって、サクヤさんがリタイアしたら、誰が主と戦うの？」

主

「くくくっ……」

主が腕を引き抜くと、そこには大きな穴がぼっかりと開いていた。

その穴から、わたしの中身がいっぱい零れた。

主

「勿体ないな……贅の血をこんなことで……」

片手でわたしを支えた主が、引き抜いた腕をぺろりと舐める。

ああ、ほんとうに勿体ない——

これからゆっくり時間をかけて、サクヤさんにあげようと思っていた何年分ぐらいだろう——

何だかもう、考えるのも億劫だった。

サクヤ

「桂に触るな……」

主

「ほう？」

サクヤ

「あんたには桂の血、一滴たりとも渡すもんか」

主

「すでに少々飲ませてもらったがな」

サクヤ

「返してもらおう」

サクヤ

「あんたの腹に風穴あけて、今飲んだ分を吐き出させてやるって言ってるんだよ！」

サクヤ

「あああああああああつ！！」

桂

「ねえ、オハシラサマ！ サクヤさんを、早く！」

わたしはおぼろな現身しかもたないオハシラサマに取りすがって、早くサクヤさんを助けて欲しいと叫んだ。

桂

「お願いだから！」

わたしはサクヤさんの夢で、オハシラサマはご神木を支える人柱であって、何でもできる神様ではないと知っているのだけれど――

それでも他にすぎるものを持たないわたしは、オハシラサマに頼むしかなかった。

オハシラサマ

「……もう難しいわ」

桂

「そんな！ ねえ、サクヤさん！ 大丈夫なんでしょ！？」

サクヤ

「駄目だよ、桂。オハシラサマが《力》を消耗すると奴の封じが緩むんだ……」

サクヤ

「奴はいつでもその機会を、虎視眈々と狙っているんだよ……」

サクヤ

「分霊程度でこの有り様なんだから……本体なんかに出てこられたら……わかるだろう？」

桂

「わかんないよ！」

サクヤ

「それぐらい、わかっておくれよ」

桂

「わかんないもん！ わかりたくないもん！
わかるとってしまったら、握ったこの手は冷たくなってしまふのだ。

桂

「そうだサクヤさん、わたしの血を飲んでよ！ わたしの血を飲んで元気になってよ！」

サクヤ

「……ちょっと無理だねえ、これじゃ」

サクヤ

「ははは、腹に穴あいちまってるから、いくら飲んでも……これが本当のザルってやつさ」
こんなときまでサクヤさんはサクヤさんで、だからわたしは——

サクヤ

「なあ、こんどはちゃんと頼むよ」

オハシラサマ

「はい……」

サクヤ

「それじゃあ、そろそろ……」

サクヤ

「ちゃんと、みんなのところに、還れるように、頼むよ……」

オハシラサマ

「はい……」

オハシラサマの返事に微笑み、サクヤさんは眠るようにまぶたを閉じた。

桂

「嫌だよっ、サクヤさん嫌だよっ！」

サクヤさんは返事をしない。

オハシラサマ

「桂ちゃん、サクヤさんは……」

二度と目覚めることはない。

オハシラサマ

「ね、もう静かに眠らせてあげましょう？」

桂

「ううっ……サクヤさーん！」

たくさんの蝶が飛んでいく。

たくさんの蝶のような花びらが、月に向かって舞い上がる。

サクヤさんの魂は、月に向かって還っていく。

桂

「うわ
あ~~~~~
~~~~~っ!!」

オハシラサマ

「だけど、やっぱり桂ちゃんには無理」

わたしがうんと頷く前に、オハシラサマが首を振った。

サクヤ

「……どうしてだい？」

オハシラサマ

「桂ちゃんは人間だから、変わるまでに時間がかかるわ」

サクヤ

「間に合わないっていうのかいっ!？」

オハシラサマ

「間に合わないわ。ひどい傷だから」

サクヤ

「桂!! あたしを置いていくのかい!? またあたしをひとりぼっちにするのかい!？」

桂

「……ごめんね」

本当は一緒にいたかったんだけど、無理だったみたい。

謝るわたしを抱きしめて、サクヤさんはぼろぼろと涙を零した。

オハシラサマ

「……サクヤさん、桂ちゃんと一緒にいたい？」

サクヤ

「当たり前だよ！」

オハシラサマ

「……あなたが桂ちゃんに要求したように、観月の民でなくなっても一緒にいたい？」

サクヤ

「あたしはもともと半端ものだよ！ 何だっていいよ、この子と一緒にいられるなら！」

オハシラサマ

「そう……桂ちゃんもそれでいい？」

桂

「うん。別にわたしは、何でもいい……よ……」

オハシラサマ

「わかったわ」

何をするつもりなんだろう。

もう、だんだん目も見えなく——

オハシラサマ

「あなたたちを封じの柱の継ぎ手として、わたしのかわりに同化してもらいます」

オハシラサマ

「どうか、ふたり一緒に幸せな夢と眠りを——」

オハシラサマ

「いつまでも、さいごまで——」

遠くから声が——

サクヤ

「桂！」

サクヤさんがわたしを呼んでいる——

サクヤ

「桂っ！ しっかりおし！」

この重いまぶたを上げたら朝で、全部が夢ならいいんだけど——

桂

「あ……サクヤさん……」

わたしのお腹には大きな穴が空いたままで、サクヤさんは泣いている。

サクヤ

「なあ、お前の《力》で何とかできないのか!？」

オハシラサマ

「助けたいのはやまやまですけど、それも、今のわたしでは……」

サクヤ

「……………」

ぎっと歯を噛み、痛いぐらいに——もっとも、それぐらいしてもらわないと感ずること  
ができないんだけど——わたしを抱きしめた。

サクヤ

「くそっ……観月の民ならこの傷でも、助かる見込みは十分あるのに……」

自分の身体とひとつにしたいと思っているのか、わたしを抱いた腕は込めた力を増して  
いき——

そして——

すっと力が緩まった。

サクヤ

「……ああ、そうだよ。そうしてしまえばいいんだよ」

オハシラサマ

「サクヤさん、まさか——桂ちゃんを——」

オハシラサマ

「桂ちゃんを、人ではないモノにするつもりですか？」

サクヤ

「そうだよ」

オハシラサマ

「あなたの血で、あなたと同じ、八千代の刻を生きる化外の民に？」

サクヤ

「そうだよ」

オハシラサマ

「あなたは月の寿命を生きる巖の民。桂ちゃんは散り急ぐ桜花の民……」

オハシラサマ

「そんな桂ちゃんに、あなたの業を押し付けるんですか？」

サクヤ

「ああ、そうだよ！ あたしをこうして生かしたのは笑子さん——あんたと桂の祖母さんじゃないかつ！」

責める様子は微塵もなく、ただただ悲しげな瞳で訊ねるオハシラサマに、サクヤさんは声を荒げて言い放つ。

サクヤ

「あたしの弱さに止めを刺したのは……桂たちのよこした温もりじゃないかつ！」

誰にもわたさないと、骨が砕けてしまいそうなほど強い力で、わたしを抱きしめ言い放つ。

サクヤ

「その桂が、あたしを置いて冷たくなっていくのはゆるせない……」

サクヤ

「あたしはもうひとは嫌なんだよっ！ 誰かにおいて逝かれるのは嫌なんだよっ！」

ああ——

サクヤさんは独立独歩の人のように見えるけど、その実、人恋しさの強い人なんだ。

石長比売の眷属でありながら、木花之佐久夜毘売の眷属を慕うなんて性に生まれついたから——

サクヤ

「……………」

サクヤなんていう言霊をつけられたのだろう。

サクヤ

「……だから……だから桂に、責任をとってもらうんだ。あたしと一緒にいてもらうんだ」

オハシラサマ

「そう……」

サクヤ

「それに桂は、あたしを好きだって言ってくれたんだ。一緒にいたいって言ってくれたんだ……」

オハシラサマ

「……そう……」

サクヤ



「だったら……だったらいいだろう？」

蝉時雨の降りしきる山の中を、わたしはひとり道のない道を登っていく。  
この先には開けた場所があり、そこには樹齢千年を越える槐の木が生えている。  
槐の木は――

さやさやと――風が木の葉を揺らし、涼しげな音を立てた。  
額の汗は引かないけれど、少しだけ気分が楽になる。暑さ寒さも気の持ちようというわけらしい。  
そういえば、都会の狭いアパート暮らしをしているので、風鈴を吊していない。  
ここの屋敷を手放してしまったのは、少し早計だったのだろうか。

ざあ――

今度は少し強い風が吹いた。  
風には、馴染みのある甘い花の香りが混じっていて、目的地に近いことを教えてくれていた。  
飛んできた白い蝶を、てのひらでうける。

蝶ではなく花びらだった。

槐の木に咲く白い花――

開けた空からふりそそぐ陽射しに目を細める。

わたし  
「夏が……来たのね……」

わたし  
「あなたたちは初めて迎える夏だけれど、ちゃんと綺麗な花を咲かせているのね」

満開の槐の花。

わたし  
「すごいわ、こんなにたくさんの花――」

はらはらと、花びらの蝶が舞い始める。

わたし  
「もしかしたら、あなたたちふたりなら、わたしが生きている間に、お役目を果たしてしまうかもしれないわね」  
風にさざめく槐の葉ずれが――

――あはは――

ふと、ふたりの声に聞こえたような気がした。

わたし

「待ってるわ——桂ちゃん、サクヤさん」

---

◇槐夢・夏の終わり ——回想——

---

---

◇帰着・夏の終わり ——回想——

---

---

◇挫北・夏の終わり ——回想——

---

---

◇雫 ——回想——

---

---

◇残夢・夏の終わり ——回想——

---

---

◇座礁・難破 ——回想——

---

---

◇やりたい放題好き放題 ——回想——

---

---

◇蛇の神の使い ——回想——

---

---

---

◇言霊の継承（1） ——回想——

---

助かった——

もとより腰が抜けていて、ずっと座り込んだままのわたしだったけれど、今度こそ身体から力が抜けていく。

そのわたしの前に。

葛

「……………」

瞳を人に在らざる色に染めたままの、葛ちゃんが立っている。

桂

「……葛ちゃん？」

葛ちゃんは無言のまま、わたしに向かって手を伸ばしてくる。

うっかりと言霊を使わないように、黙っているのだろうか——

いや。

今の葛ちゃんの瞳には、葛ちゃんらしい光——それは見た目の問題ではなくて、その底にある機知の輝きのようなもの——が感じられない。

かといって、そっけないようでそれなりに優しい、尾花ちゃんの円らかな瞳とも異なっている。

相変わらず焦点の定まっていない、自失状態のそれにちらっているのは、本能の域にまで遡る原始の炎。

先ほどの力任せな言霊の行使は、きっと防衛本能のようなものが外敵を排除するためだけに行わせたもの。

そして大量の《力》を使った直後なだけに、その炎の中に読み取れる欲求は——

——ぞくり。

真夏の夜にもかかわらず、わたしは身震いした。

葛ちゃんは飢えている。

今の葛ちゃんもまた鬼なのだから、あの子たちと同じように、わたしの血を欲しがって

いるのだろう。

爪の伸びた手がわたしに伸ばされる。

その指先がわたしに触れた。

それが肌を滑っていく。

どこから血を飲むべきかと、わたしの身体をなぞって探る。

服の上はパスされて――

髪の毛は当然。ちよっぴり肉付きいいかもしれない頬の上もするすると通り過ぎていき――

その指は皮が薄くて柔らかい、だけどその下には勢い良く血を流す頸動脈がある、首筋に触れて動きを止めた。

守るように引かれた顎をくつと持ち上げられて、剥き出しになった首に葛ちゃんの顔が近づけられる。

過剰なほどに敏感になった肌が、産毛を揺らす空気の動きを、近づいてくる熱の存在を感じ取る。

桂

「うっ……」

心臓がこれ以上ないほど忙しく脈打ち、そのせいで自己主張を増した血管を目指して、唇が近づいてくる、

葛

「は……」

熱く湿った吐息がかかる。

---

◇言霊の継承（２） ——回想——

---

---

◇此岸と彼岸 ——回想——

---

---

◇彼岸の花をつかまえて ——回想——

---

◇赤い縛め ——回想——

---

---

◇二重箱の底で ——回想——

---

---

◇光は風に ——回想——

---

---

◇ラクヨウ ——回想——

---

---

◇回帰 ——回想——

---

---

◇くらやみのまゆ ——回想——

---

---

◇一片の残花 ——回想——

---

巨大な《力》と《力》がぶつかり合い、その余波がわたしを叩く。  
圧倒的な、空気さえ吹き飛ばしてしまうような《力》の奔流。  
そこでは光がすべてを飲み込み——  
そこには音すら存在せず——  
わたしは息もできずに——  
ただ、その終わりを待っていた。

肌を弄る緩い風が、音と空気を運んできて、真白い光をさらっていく。

桂

「は——」

息をすることができるようになった。

桂

「柚明お姉ちゃん——？」  
声帯が震えて、ずっと言いたかった言葉が零れる。  
柚明お姉ちゃんは無事だろうか。大丈夫なんだろうか。  
先ほどまでお姉ちゃんがいた所には——

主

「ぐっ……」  
主と——

柚明

「……………」  
柚明お姉ちゃんが立っていた。

お姉ちゃんは青い光をまとったまま、主を抱き包んでいる。

主

「くはははっ……口だけではなかったようだな。ハシラの継ぎ手。ひとつ学ばせてもらったぞ」

主からは陽炎のように頼りない光が絶え絶えに立ち昇り、夜の中に消えていく。

主

「確かにおぬしの申した通り、分霊程度ならば継ぎ手でも還せるのだな」

もう立たせるだけの《力》が残っていないのだろう。主——ケイクンの身体がずり下がっていき、膝を屈し、最後には地に倒れ伏した。

柚明お姉ちゃんが勝ったのだ。

桂

「やった、柚明お姉ちゃんすご——」

主

「しかしだ」

桂

「え——？」

主

「それで己まで還してしまっは、本末転倒というものではないか」

慌てて視線をもたげると——

柚明お姉ちゃんの身体は希薄になっていた。

柚明お姉ちゃんがケイクンの身体を支えなかったのは、物理的に大変だからという理由ではなくて——

つまりはそういうことだったのだ。

桂

「お姉ちゃん！ 柚明お姉ちゃん！」

わたしは暗いところへ落ちていこうとしている柚明お姉ちゃんに駆け寄った。

駆け寄っているのに——

桂

「……あっ」

命の鼓動は、遠くなっていく。

柚明お姉ちゃんの波動が、遠のいていく。

---

◇赤い絆 ——回想——

---

---

◇白花の咲く頃に ——回想——

---

---

◇月の蝕み ——回想——

---

---

◇鬼切りの鬼 ——回想——

---

---

◇凍てる孤月 ——回想——

---

---

◇ついのときまで ——回想——

---

---

◇月へ向かう蝶 ——回想——

---

---

◇満開の花 ——回想——

---

---

◇シマイ ——回想——

---

---

◇血海 ——回想——

---



---

◇途切れた糸・夏の終わりまで ——回想——

---

---

◇赤い維斗 ——回想——

---

烏月

「ふう……」

烏月さんが大きく息を吐いて、肩から力を抜いた。主の分霊はケイクンの身体の中にはもういないのだ。

緊張が解けてへたり込みそうになるわたしに、もうひとつの吉報が届く。

ユメイ

「サクヤさんの状態は落ち着いたわ」

それが駄目押しだった。

桂

「はう～～～」

わたしは寝転がるように大の字に倒れて、空の遠くに輝いている月を見上げた。

十五夜の月——お盆の月——まあるい月——ひやひやとした月——鏡のような月。

桂

「あ……」

その月鏡に——が映る。

わたしの中にあるモノが映る。

わたしの中にある鬼が映し出されている。

桂

「あ……あぁ……」

赤いものがとぐろを巻いている。

渦だ。

赤い渦が、わたしの周りをぐるりと取り囲み、そのまま締め付け飲み込もうとしている。

桂

「何で……」

わたしはケイクンとつながったときに――

ああ、そうだ。そうだった――

あのときに目を付けられて、あのとき既に憑かれていたのかもしれない。

烏月

「……桂さん、どうかしたのかい？」

不用意に近づいてくる烏月さんに首を振る。

烏月

「……桂さん？」

締め上げられた意に添うように身体を動かすのは正直苦痛を伴って――

ユメイ

「そんな……」

烏月さんより先に、主とは深い縁を持つオハシラサマ――ユメイさんがそれに思い当たる。

顔いて、懸念の通りだと教える。

ぎりぎりと――わたしは呪縛されている。

桂

「ねえ、烏月さん、わたしは駄目……」

桂

「わたしにはケイクンみたいに、長い間抑えておくことなんて出来そうにないよ……」

がけっぷちにひっかけて指が外れて、今にも渦に飲み込まれてしまいそうだった。

辛うじて小指が引っ掛かっている。

烏月さんと約束をした小指。

そこに結ばれた絆にしがみつくと、わたしは自分を保っている。

だけど、それでも――

桂

「このままだと、わたしも鬼になってしまうから――」

わたしは庭に素足を踏み出し、ゆっくりと烏月さんのもとへと近づいていく。

桂

「烏月さんのこと、傷つけてしまうかもしれないから――」

それだけは絶対に嫌だから。

桂

「ねえ、だからわたしのことを——わたしの中にいる鬼を——」  
だから頼もう。

桂

「烏月さんに、切って欲しいの」

雲ひとつない夜空を、風が素通りしていく。

風も届かない遠くには月。

まぶしい月。

まぶしすぎて、星の光がよく見えない。

---

◇爽やかな立ち風 ——回想——

---

五つある幸せな結末のすべてに辿り着きました。おめでとうございます。

「幻視行／二日目／昼」の封じが解かれ、新たな未来が開かれました。

「ジョーカー／二日目／夜」の封じが解かれ、新たな未来が開かれました。

「漂白夢／三日目／夜」の封じが解かれ、新たな未来が開かれました。

「浄玻璃F／四日目／夜」の封じが解かれ、新たな未来が開かれました。

「赤い導き／四日目／昼」の封じが解かれ、新たな未来が開かれました。

「赤い縛め／三日目／夜」の封じが解かれ、新たな未来が開かれました。

すべての封じが解かれました。